

やはり俺達の性行為にSMをやるのはまちがっている。

新太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

八幡が俺ガイルキャラを犯していく話してです。
良かったら読んでください。

第一弾は雪ノ下陽乃です (SM 主従 メス犬) 完

(AS 従順 才

り主) 完

(AS 寝取り 幸せ) 完

第二弾は由比ヶ浜ママ (睡姦 寝取られ 妊娠 出産) 完

(AS 逆レイプ 寝取り) 完

第三弾は雪ノ下母 (逆レイプ 不倫 母娘) 完

第四弾は川崎沙希 (社会人 コスプレ)

(AS 脅迫 教師)

第五弾は海老名姫菜 (修学旅行IF アナル)

第六弾は一色いろは (催眠 改変) 完

(AS 催眠 復讐 改変) 完

第七弾は城廻めぐり (義姉弟 母乳 近親相姦) 完

第八弾は相模南 (誘拐 処女 調教) 完

第九弾は雪ノ下雪乃 (セックスフレンド 原作) 完

(AS オリ主 レイプ 脅迫) 完

(AS 百合 ヤンデレ) 完

第十弾は由比ヶ浜結衣 (原作前 ビッチ 従順) 完

(叔父 レイプ ビッチ) 完

第十一弾は三浦優美子（卒業 失恋 旅行）

第十二弾は比企谷小町（近親相姦 レイプ 兄妹）

第十三弾は平塚静（逆レイプ 教師生徒 SM）

第十四弾は戸塚彩加（男装）

目次

雪ノ下陽乃編

やはり魔王がペットなのはまちがっている。	1
やはり魔王の初体験の相手が俺なのはまちがっている。	8
やはり魔王がメイド服を着るのはまちがっている。	15
やはり魔王と寝取られ寝取りごっこをするのはまちがっている。	23
やはり魔王とのプレイがエスカレートするのはまちがっている。	30
やはり魔王と恋人になっても今までと変わらないはまちがっている。	37
やはり魔王を公園で散歩させるのはまちがっている。	45
やはり魔王が主導権を持っているのはまちがっている。	53
やはり魔王を調教し直すのはまちがっている。	61
やはり魔王とラブホに長居するのはまちがっている。	68
やはり魔王が引越しするのはまちがっている。	75
やはり魔王を看病するのはまちがっている。	83
やはり魔王の城に大魔王が来るのはまちがっている。	90
やはり魔王の水着がエロいのはまちがっている。	97
やはり魔王と海でエロい事するのはまちがっている。	105
やはり魔王と貸切風呂でするのはまちがっている。	113
やはり魔王と夏祭りでエロい事するのはまちがっている。	120
やはり魔王が幼くなるのはまちがっている。	128
やはり魔王が増えるのはまちがっている。	136

やはり魔王とキャンプをするのはまちがっている。 | 144
やはり魔王がミニスカサンタになるのはまちがっている。 | 151
やはり魔王の夫になるのはまちがっている。 | 158
やはり私のご主人様が彼じやないのはまちがっている。 | 165
やはり私のご主人様が彼じやないのはまちがっている。 続 | 172
やはり私のご主人様が彼じやないのはまちがっている。 終 | 179
やはり私が彼を手に入れるのはまちがっている。 | 186
やはり私が彼を手に入れるのはまちがっている。 2 | 192
やはり私が彼を手に入れるのはまちがっている。 3 | 199
やはり私が彼を手に入れるのはまちがっている。 4 | 205
やはり私が彼を手に入れるのはまちがっている。 5 | 211

由比ヶ浜舞衣編

やはり人妻を睡姦するのはまちがっている。 | 217
やはり人妻をまた睡姦するのはまちがっている。 | 224
やはり人妻を脅迫するのはまちがっている。 | 232
やはり人妻がメスに堕ちるのはまちがっている。 | 239
やはり人妻が裸エプロンをするのはまちがっている。 | 246
やはり人妻とボテ腹SEXをするのはまちがっている。 | 253
やはり人妻と不倫旅行に行くのはまちがっている。 前編 | 260
やはり人妻と不倫旅行に行くのはまちがっている。 後編 | 268
やはり人妻が娘を壊すのはまちがっている。 前編 | 276
やはり人妻が娘を壊すのはまちがっている。 後編 | 283
やはり人妻家族と間違った関係が続いているのはまちがっている。 | 290
やはり人妻家族と間違った関係が続いているのはまちがっている。 | 290

続

やはり私が彼を襲うのはまちがっている。

やはり私が彼を襲うのはまちがっている。 続

やはり私が彼を襲うのはまちがっている。 終

雪ノ下姫乃編

やはり社長夫人に逆レイプされるのはまちがっている。

やはり社長夫人の火遊びに付き合うのはまちがっている。

やはり社長夫人に会いに行くのはまちがっている。

やはり社長夫人とSMクラブに行くのはまちがっている。

やはり社長夫人と下の娘を調教するのはまちがっている。

やはり社長夫人と下の娘に好きにされるのはまちがっている。

363

やはり社長夫人に二人で縛られるのはまちがっている。

やはり社長夫人が義母になるのはまちがっている。

川崎沙希編

やはりサキサキと社会人になって再開するのはまちがっている。

やはりサキサキとまた飲みに行くのはまちがっている。

やはりサキサキが俺の部屋に泊まるのはまちがっている。

やはりサキサキとコスプレを楽しむのはまちがっている。

やはりサキサキがコスプレに嵌るのはまちがっている。

やはりサキサキがアニマルになるのはまちがっている。

やはりアタシがバイトをするのはまちがっている。

やはりアタシがバイトをするのはまちがっている2

海老名姫菜

436 430 423 416 408 400 393 385 378 371 355 347 340 333 326 319 312 305 298

やはり腐女子に告白するのはまちがっている。

442

やはり腐女子と付き合うのまちがっている。

450

やはり腐女子を手伝うのはまちがっている。

457

一色いろは

やはりあざとい後輩に催眠アプリを使うのはまちがっている。

465

やはりあざとい後輩の夫になるのはまちがっている。

473

やはりあざとい後輩と海に行くのはまちがっている。

480

やはりあざとい後輩と一緒に暮らすのはまちがっている。

487

やはりあざとい後輩の違和感に気づくのはまちがっている。

495

やはりあざとい後輩が世界を変えるのはまちがっている。

503

やはりわたしがアプリを使うのはまちがっている。

510

やはりわたしがアプリを使うのはまちがっている。続

517

やはりわたしがアプリを使うのはまちがっている。終

524

城廻めぐり

やはりゆるふわな義姉ができるのはまちがっている。

531

やはりゆるふわな義姉と愛し合うのはまちがっている。

538

やはりゆるふわな義姉と学校するのはまちがっている。

545

やはりゆるふわな義姉と寄り道するのはまちがっている。

552

やはりゆるふわな義姉を焦らすのはまちがっている。

560

やはりゆるふわな義姉と保健室でやるのはまちがっている。

567

やはりゆるふわな義姉が卒業するのはまちがっている。

574

やはりゆるふわな義姉と恋人になるのはまちがっている。

581

相模南

やはりさがみんを拉致するのはまちがっている。

588

やはりさがみんを放置するのはまちがっている。

595

やはりさがみんを配信するのはまちがっている。

602

やはりさがみんを出演させるのはまちがっている。

609

やはりさがみんを犯し続けるのはまちがっている。

615

雪ノ下雪乃

やはりゆきのんを犯すのはまちがっている。

622

やはりゆきのんのセフレになるのはまちがっている。

629

やはりゆきのんと昼に一緒に居るのはまちがっている。

636

やはりゆきのんと放課後まで居るのはまちがっている。

643

やはりゆきのんが家に来るのはまちがっている。

650

やはりゆきのんがエロくなるのはまちがっている。

657

やはりゆきのんのマンションに行くのはまちがっている。

664

やはりゆきのんと夏休みを過ごすのはまちがっている。

671

やはりゆきのんと川辺で遊ぶのはまちがっている。

678

やはりゆきのんと夜の散歩をするのはまちがっている。

685

やはりゆきのんが酔うのはまちがっている。

692

やはりゆきのんとビーチに行くのはまちがっている。

699

やはりゆきのんと一緒に泳ぐのはまちがっている。

706

やはりゆきのんと花火を見るのはまちがっている。

713

やはりゆきのんと打ち上げをするのはまちがっている。

720

やはりゆきのんと貸切するのはまちがっている。

727

やはりゆきのんとイヴを過ごすのはまちがっている。

734

やはりゆきのんと正月を過ごすのはまちがっている。

741

やはりゆきのんの誕生日に参加するのはまちがっている。 | 748
やはりゆきのんをレイプしないのはまちがっている。 | 754
やはり私がレイプされているのはまちがっている。 | 761
やはり私がレイプされているのはまちがっている。 続 | 768
やはり私がレイプされているのはまちがっている。 終 | 775
やはり私が百合に進むのはまちがっている。 | 782
やはり私が百合に進むのはまちがっている。 2 | 787
やはり私が百合に進むのはまちがっている。 3 | 793
やはり私が百合に進むのはまちがっている。 4 | 799
やはり私が百合に進むのはまちがっている。 5 | 805

由比ヶ浜結衣

やはりガハマが病室に来るのはまちがっている。 | 811
やはりガハマがビッチじゃないのはまちがっている。 | 818
やはりガハマと学校するのはまちがっている。 | 825
やはりガハマの家に行くのはまちがっている。 | 832
やはりガハマと祭りに行くのはまちがっている。 | 839
やはりガハマと海に行くのはまちがっている。 | 846
やはりガハマと山に行くのはまちがっている。 | 853
やはりガハマとナイトプールに行くのはまちがっている。 | 860
やはりガハマをまた学校するのはまちがっている。 | 867
やはりガハマをオモチャにするのはまちがっている。 | 874
やはりガハマをまたまた学校するのはまちがっている。 | 881
やはりガハマとデートするのはまちがっている。 | 887
やはりガハマをビッチにするのはまちがっている。 | 893
やはりガハマの夜デートはまちがっている。 | 899

やはり私がビッチにされるのはまちがっている。 | 905
やはり私がビッチにされるのはまちがっている。 続 | 912
やはり私がビッチにされるのはまちがっている。 終 | 919

三浦優美子

やはりあーしさんを慰めるのはまちがっている。 | 926
やはりあーしさんを慰め続けるのはまちがっている。 | 933
やはりあーしさんとデパートに行くのはまちがっている。 | 940
やはりあーしさんと旅行に行くのはまちがっている。 前編 | 947
やはりあーしさんと旅行に行くのはまちがっている。 後編 | 954
やはりあーしさんと旅館に行くのはまちがっている。 | 961
やはりあーしさんと旅行先でするのはまちがっている。 | 967
やはりあーしさんと旅行を計画するのはまちがっている。 | 973

比企谷小町

やはり妹を犯すのはまちがっている。 | 980
やはり妹をまた犯すのはまちがっている。 | 987
やはり妹とくっつくのはまちがっている。 | 994
やはり妹と寄り道をするのはまちがっている。 | 1001
やはり妹と料理を作るのはまちがっている。 | 1008
やはり妹と学校に行くのはまちがっている。 | 1015
やはり妹と学校でするのはまちがっている。 | 1022
やはり妹が奉仕してくるのはまちがっている。 | 1028
やはり妹と繋がり続けるのはまちがっている。 | 1035

平塚静

やはり教師に逆レイプされるのはまちがっている。 | 1041
やはり教師にいいようにされるのはまちがっている。 | 1048

やはり教師に従うのはまちがっている。

やはり教師の家に行くのはまちがっている。

戸塚彩加

やはり戸塚が男装しているのはまちがっている。

やはり戸塚と関係が続くのはまちがっている。

やはり戸塚と千葉村に行くのはまちがっている。

10611055

107910731067

雪ノ下陽乃編

やはり魔王がペットなのはまちがっている。

俺こと比企谷八幡は夜の公園を『イヌ』を連れて散歩している。断つておくが、この『イヌ』は比企谷家で買ったわけでも誰かのでもない。

そもそもこの『イヌ』は犬でなく『人』だからだ。全裸の上、四つん這いで首輪にリードまで付けている。

断つておくが、俺がしろと命令したわけではない。この『イヌ』になりきっている人が勝手にしているだけで俺はつき合わされているだけだ。

ハッキリ言つて帰つて小町に癒されたいが、そう言うわけにはいかない。もしも勝手に帰るものなら小町に今の現状を暴露するぞと脅されている。

そんな事になれば二度と小町は俺と口を聞いてはくれないだろう。修学旅行の後にケンカした時に味わったあの気持ちは二度とゴメンだ。

だからしかたなくこの人に従っている。

「はあ……はあ……どうかした？比企谷君」

「……別に何でもありませんよ。陽乃さん」

「そう？じゃあ散歩の続きをしよう♪」

「……分かっていますよ。この『メスイヌ』」

「~~~~っ!?やっぱり比企谷君くらいだよ。私にそんな事を言うのは♪」

「……さいですか」

分かっていただけか。俺が今、散歩している『イヌ』が誰なのか。

そう俺が所属する奉仕部部长の雪ノ下雪乃の姉にして俺が魔王と恐れる雪ノ下陽乃さんなのだ。

どうして俺が『イヌ』の格好をした雪ノ下陽乃さんを散歩させてい

るのかと言うと約2週間前まで遡る。

修学旅行での嘘告白から奉仕部の関係が壊れ掛けて、そのまま生徒会選挙にクリスマス会など様々な事がある再び奉仕部として活動する事になり、春を迎え3年に無事に進級する事が出来た。

由比ヶ浜は怪しかったが、なんとか進級する事が出来たようだ。

それから数週間が過ぎて、俺は大学受験のために塾に通い学力を身に付けていた。そんなある日、塾で色々しているとすっかり遅くなつてしまい、急いで家に帰ろうとしていた。

普段は時間に余裕があるので公園を横切らないのだが、この日は急いでいたために横切った。

「はあ……はあ……で、でるう……」

すると茂みの方から若い女性の声が聞こえてきた。どこか聞き覚えのある声だったので少し確かめるために茂みを恐る恐る覗いて見るとそこに居たのは……

「……雪ノ下さん!？」

「……へ?……ひ、比企谷君!?!ま、待って!？」

しやあああ……

雪ノ下さんから水音がするのと同時にアンモニア臭が俺の鼻を刺激してきた。これってオシッコか？

「え?ど、どういう事!？」

「ああ……ああ……」

雪ノ下さんは小便を出して、すっきりとした顔になってしまった。そのまま、どさりと倒れこんでしまった。

「ちよ!?!雪ノ下さん!?!……ああ、しかたないか……すいません」

俺は倒れた雪ノ下さんを抱きかかえて近くのベンチまで移動した。改めて雪ノ下さんの格好を見た。

すっかりとしたスーツを着て出来る人のように見える。さつきチラツと見え掛けたが、この人……ノーパンだった!生で女性の性器を見た。チラツとだが!

「……ん?あれ……私、確か……」

「気が付きました?雪ノ下さん」

「え？……ひ、比企谷君?!ど、どうして、さっきのは夢じゃ無いの!?!」
どうやら雪ノ下さんは俺がいる事を夢だと勘違いしたらしい。
まったくしつかりして欲しい。

と言うか、面倒な事になる前に帰った方がいいな。

「そ、それじゃ俺はこれで」

「ちよ?!ちよつと待って!」

帰ろうとしたら雪ノ下さんに腕を掴まれた。しまった!?!魔王に捕まってしまった!?!

「大丈夫ですよ!俺はボツチだから喋る人はいませんし、雪ノ下や由比ヶ浜にだつて言いませんから!」

「だからちよつと待って!話を聞いて!」

ここは話を聞いて帰った方がいいな。とりあえず俺は雪ノ下さんの横に座った。

「……あえて聞きますけど、ここに何をしていたんですか?」

「……………その、ストレス発散を……／／／」

「ストレス発散?それを公園で小便をしていたと……?」

雪ノ下さんは顔を赤くして一回頷いて顔を下に向けてこつちを見ようとはしなかった。まあ、正面からこの人の格好を見るわけにはいかないからな。

「……………それで比企谷君にお願いがあるんだけど、いいかな?」

「お願いですか?どの道、俺に拒否権があるようには見えませんが?それで俺は何をするればいいんですか?」

「……………わ、私をしつけて欲しいの!」

「……………しつける?えっと、それはどういう意味ですか?」

俺は雪ノ下さんの言葉の意味が分からなかった。しつける?何を?犬か動物でもしつけるのか?

「だ、だから私を……犬のようにしつけて欲しいの!」

「……………すいません。他を当たってください。では……」

「逃がさないよ!」

俺はすぐさま立ち上がってその場から逃げるように立ち去ろうとしたが、そんな事を雪ノ下さんが許すわけなかった。

すぐさま腕を再び掴まれて逃げれなくなった。

「……どうしても逃がさないつもりですか？」

「逃がさないよ、絶対に。私の恥ずかしい姿を見ておいてすんなり返すわけないじゃない。それに私の言う事、聞いてくれないなら小町ちゃんに『比企谷君にレイプされて処女を奪われたの！』って泣きながら言うけど？」

雪ノ下さんは首を可愛く傾げながらとんでもない事を平然と言いつ放ったよ！この悪魔、鬼、魔王！

……って、魔王なのは元々か……。

「……分かりました。それで俺は何をすればいいんですか？」

「とりあえず、さつき言った事をやってみて」

「……さつき？もしかして犬がどうこうと言うヤツですか？」

「そう！それをやってみてくれない」

そう言った雪ノ下さんの顔はどこか子供のような笑顔をしていた。そんな顔をしないでくれ！勘違いしてしまう。

そして冒頭まで戻る。それにしてもこの人の格好は色んな意味で凄いな。

全裸で四つん這いに首輪にリードをしている陽乃さんは凄く色っぽいいし何より生き生きして見える。

そして俺もこの人に影響されてかこの時だけはスイッチが入る。

「ひ、比企谷君」

「どうかしましたか？それと俺の事は『ご主人様』と呼ぶように言っただけですけど？どこで誰が聞いているのかもしれないんですから。俺まで貴女のような変態と勘違いされたくはないんですよ。分かりましたか？」

「ご、ごめんなさい。ご、ご主人様……そ、それでそろそろ限界だから、出させてくれませんか？」

陽乃さんの言う「出させて」と言うのは大便の事だ。冒頭では言っていないかったが、陽乃さんのお腹は少し脹らんでいる。

別に陽乃さんが妊娠したという事ではない。これは「浣腸」をした結果、こうなったのだ。

野外での小便をした事でその気持ちよさが分かってしまった陽乃さんは今度は大便がしてみたいと言い「浣腸」をしたのだ。

しかもアナルピースで栓をして出ないようにした。

「わかりました。それじゃトイレに行きますか」

「え？その辺の茂みでしないの？」

「はあ？貴女はバカですか？小便ならまだしも大便をその辺の茂みでしたら公園を利用する他の人に迷惑がかかるんですよ。そんな事も分からないですか？栄養が頭ではなく胸だけに行っているんですか？」

「~~~~っ!?!:…さ、最高です。ご主人様♡」

この人は完全にドMになってしまったな。それと同時に俺もドSになってしまった。

しかたがなかったんだ！妹に言うのと脅されてしかたなくやってしまったんだ！そしてたらハマッてしまったんだ。

誰か止めてくれ!?!陽乃さんではなく俺を。このままだといつか陽乃さんの処女を奪ってしまいそうだ。

そんな事をすれば、社会的と物理的の二つの意味で殺されそうだな。でももういいか。この時の光景を目に焼き付けてオカズにしてすっきりしているからな。

そして俺と陽乃さんは公衆トイレに入った。

俺達が入ったのは車椅子などの人が使う大きめの個室だ。陽乃さんは俺にお尻を突き出してアナルピースが取り易い体勢をとってくれた。

「それじゃ抜きますよ」

「う、うん。でもゆっくりお願いね……」

陽乃さんは少し怯えたように声が震えていた。俺は少しずつアナルピースを抜き始めた。

「…………おおお…………お、尻から、抜き取られる…………っ!?!…………この、感覚…………すごく好き♡」

俺としてはかなり複雑な心境だ。年上美人から何がどうなったらアナルピースを抜く事になるんだ？「人生は小説より奇なり」と言うがこれは小説以上だ。

てか、この人……めちやくちやいい顔しているんだけど!? ホントにDMなんだな。

ぶりぶりいいい……ぶりい……ぶりい……

陽乃さんのお尻から大量の水でふやけた大便が出てきた。結構、臭いがきつい。

スカトロには興味はなかったが、陽乃さんがこのような事をしていると普段のギャップから興奮してしまう。

「お……尻からいっぱい、出た……」

「ええ、たくさんでましたね。よく頑張りましたね。えらいですよ」「~~~~っ!?!」

俺は陽乃さんの頭を優しく撫でた。アメとムチというやつだ。これをやるとこの人喜ぶんだよな。

そして陽乃さんは撫でられて気持ちよかったのか身体を震わして喜んでいた。

「……あ……あ……あ……あ……」

ちよろろろ……

陽乃さんはあまりの気持ちよさに小便を出した。ようは「嬉ション」と言うものだ。

この姿を家族が見たら幻滅するに違いない。

雪ノ下建設の社長令嬢で長女の陽乃さんが年下の俺に全裸で公園を犬のように散歩させられて「浣腸」して頭を撫でられて「嬉ション」をしたのだからな。

プレイを終えて俺は持って来たカバンからタオルを出して陽乃さんの身体に付いている汗や汚れを綺麗にした。

陽乃さんはすつきりとした顔をしていた。まあ、実際に出すもの出したのだからな。

「う〜んーホント、比企谷君はいつも私の期待に込えてくれて嬉しいよ♪」

「……そうですか。俺としてはいつも誰かに見られていないかビクビクしていますよ」

「そう言うのがいいとは思わないの?」

「思いません!!」

この人はさつきから何を言っているんだ? いつか本当に誰かに見られるな、絶対に。

「それでさ、次の事なんだけど」

「もう次の話ですか?」

正直、俺としてはウンザリしている。いつまでこんな事を続けるんだろうか?

俺は陽乃さんの恋人でも無いのに。早く彼氏でも作ってくれないものだろうか。マジで泣けてくる。

「もう、そんな顔しないの。次は私の処女あげるから♪」

「……もうそう言う事は………はあ? 今、なんて言いました?」

「だから私のはじめてをあげるって言ったの」

「……マジで!? 冗談とか……」

俺はこの人の言っている事が信じられなかった。この人マジで言っているのか?

「酷いなく私は本気だよ。君ならあげてもいいかなって前から思っていたんだよ」

「……マジなんですね」

陽乃さんは笑顔で頷いた。そして俺の耳元に近付き話しかけた。

「……次もよろしくね♪」

「……はい」

陽乃さんはそれだけ言って車に乗って帰ってしまった。俺は少し放心状態になりながらも家に帰った。

帰って、先程のプレイを思い出して八回ほど抜いた。八幡だけに。そして次のプレイの時に陽乃さんと出来ると考えただけで眠れずに寝不足になり次の日の朝、さらに目が濁っていた。

やはり魔王の初体験の相手が俺なのはまちがっている。

5月上旬にあるものと言われたら誰もが同じように答えるだろう。
GW——ゴールデン・ウィーク。憲法記念日、みどりの日、こどもの日と続いた連休だ。さらにこれに土、日まで加われればスーパー・ゴールデン・ウィークになる。学生にはとても喜ばしい日々になるだろう。

俺、比企谷八幡もこれの連休を怠惰に過ごそうと考えている。

誰にも邪魔されないように細心の注意が必要だ。去年の夏休みの時は由比ヶ浜の犬の……サブロー？いやサブゴロウ？を預かったために数日どこにも行く事が出来なかった。もとよりどこにも行く気はなかったんだがな！

まあ、それは置いておいて。

この連休は誰にも俺の邪魔はさせないぜ！そうと決まれば目を開けてここ数日録画したものでも見るかな。

そして俺は目を開けた。

「……………」

「おはよ。比企谷君♪」

あれ、可笑しいな？目の前に魔王がいるぞ？魔王城に殴りこみに行ったわけでもないのに魔王が目の前にいるぞ。

そもそもどうやって俺の部屋まで入ってきたんだ？小町は？両親は？

「……陽乃さん。一つ聞いてもいいですか？」

「私のスリーサイズなら全然教えてあげるよ」

「……それは知りたくないとは言え嘘になりますが、俺が聞きたいのはどうやって俺の部屋に入ってきたんですか？」

「朝、訪ねたら小町ちゃんがすんなり入れてくれたよ」

クソーー?! やっぱり小町が入れたのか!? 何をしているんだ。あの妹は!!

これは朝から文句を言わないとダメだな！

「……陽乃さん。少し退いてもらってもいいですか？これから小町に文句言ってくるんで！」

「それ無理だよ。だって、小町ちゃんのご両親と一緒にデイスティニーランドに行ったよ」

「……マジですか？」

「マジだよ♪」

クソ!!デイスティニーランドに行くなんて俺は聞いて無いぞ!!どうせクソ親父が小町の総武高校に入学したからそのお祝いで行く事にしていただろう。

俺を連れて行かなかったのは小町との時間を邪魔されたくないためだろう。そしていい訳として「八幡は今年、大学受験があるだろう？だったら勉強をしつかりしている」と言いそうだな。

あのクソ親父、帰ってきたら覚悟しているよ。隠しているAVを小町に見せてやる。パッケージに映っている子がどこか小町似なんだよな。

自分の娘に似た子をわざわざ見つけているからな。小町が見たらどん引き間違い無しだな。

「……比企谷君。今、君の顔、凄いくらい悪い顔になっているよ」

「そうですか？それはすいません。それよりいい加減、どいてもらってもいいですか？」

陽乃さんはベッドで寝ている俺を押し倒しているかのような立ち位置なんだよな。普通はポジションが逆だ。男が女を押し倒しているのが普通だ。

なのに今はその逆になっており、俺はベッドから出る事が出来ない。

「ええ……お昼ご飯を作ってくれるなら良いよ」

「まあ、それくらいでしたら構いませんけど」

「え？いいの？それじゃ、お昼ご飯食べたらやろうか」

「やろうかって、何をですか？」

「私の処女喪失と比企谷君の童貞卒業をだよ♪」

こ、この人は何を口走っているんだ?! 女性が自分から処女喪失とか言うものなのか? それより俺の童貞卒業って、え? 俺、今日中に大人の階段を上がるのか?!

この人の言う事は本当なのか嘘なのか分からない時があるな。

とりあえず、昼は冷蔵庫にあった余りものを使ってチャーハンを作って食べた。陽乃さんは食べている時、凄く美味しそうに食べてくれたのでこっちとしても嬉しかった。

そして俺は自分の部屋のベッドの上で正座していた。陽乃さんはシャワーを浴びている。

陽乃さんがシャワーを浴びている光景をつい想像してしまって勃起が収まらない。落ちつくんだ! 俺のムスコよ!! ここでこんなにも勃起しては痛いだけだぞ。

と自分に言い聞かせるが、落ち着く気配はない。そんなの当たり前だ! これからする事を考えると収まるのは無理と言った所だ。

「ひゃっはろー!! お待たせ、比企谷君♪」

「……陽乃、さん……」

俺は絶句してしまった。陽乃さんの今の格好は……全裸だった。

こ、この人には恥じらいと言うものは無いのか? ……いや、この人の恥じらいと言う部分を俺が調教して喜びにしたんだっけ……俺も今更、この人の全裸に驚いている場合ではないな。

「もう! 今まで散々見てきたでしょ!」

「……まあ、そうですけど……」

「あ! わかった! いつもは夜で暗くてあまり見えないけど、今は明るくてはつきりと見えるから興奮しちゃっているんだね!」

ああ!? この人はどうして人の考えている事がわかるんだ!! こっちがどれだけ隠そうとしてもすぐに見破ってくるし、それを言う辺り夕チが悪いな!

ニヤニヤと笑っている顔を見るとイライラしてくるな。陽乃さんはすでにDMスイッチが入っているようだから俺もDSスイッチを入れてやろう。

俺はスツと立ち上がり陽乃さんに近付きマンコに指を入れた。す

でに膣内は愛液でグチャグチャになっていた。

この人、シャワーしてる時にオナニーしたな。

「ひ、比企谷君?!き、急に指を入れないですよ!びっくりするじゃない!」

「……調子に乗るなよ『メスイヌ』が」

「くくく?!す、すみません。ご主人様♡」

俺が声のトーンを少し下げて睨め付けると陽乃さんは完全に『メスイヌ』モードに入った。すんなり入ったな、色々な意味で。

俺は陽乃さんのマンコをひたすらイジっていた。クチャクチャと厭らしい水音をたてていた。

くちやくちやくちやく……

「シャワーしている時にオナニーをしたな?」

「は、はい♡しました。に、二回ほどイキました♡」

「はあ……陽乃、『メスイヌ』が俺のいない所でオナニーして二回もイツたのか。これはお仕置きが必要だな」

「お、お仕置き?一体何をさせる気、ですか?」

お仕置きと言う単語にどこか楽しげな表情を見せてくる。陽乃さんのようなドMにお仕置きは逆に♡褒美になるんだよな。

「……お仕置きは……何もしない」

「……え?何もしないの?それってどう意味?」

「そのままの意味ですよ。俺は何もしません。だから『夜の公園の散歩』もしません」

「……ええええ?!そんな!!」

陽乃さんは絶望のどん底に叩き落されたような顔になっていた。なんだろうか、この気持ちは。陽乃さんが絶望している顔を見ると何かゾクゾクと込み上げてくるものがあるな。

「比企谷君が一番わかってるでしょ!!私があれをどれだけ楽しみにしているか!」

「ええ、だからですよ」

「鬼畜!鬼畜の所業だよ!お願い、もう比企谷君のいない所でオナニーしないから!」

陽乃さんは泣きながら抱きついてきた。本気で嫌だったようで、効果は抜群だ。

俺は片手で陽乃さんのマンコをいじり続けて、相手いる手でそつと頭を撫でて、陽乃さんを落ち着かせた。

「ええ、言う事を聞く『メスイヌ』を蔑ろにはしませんよ。それどころか、可愛がつてあげますよ」

「~~~~っ?!……ホント?!」

可愛がつてあげると言うと言いつつ陽乃さんの身体がびくついた。イキかけているな。

「もちろんですよ。ほらベッドの上で陽乃さんのマンコを見せてください。自分で足を支えて俺にしつかりと見せるような体勢をしてください」

「うん！待ってね。すぐするから」

陽乃さんは俺のベットの所でM開脚でスタンバイして待っていた。

俺は着ていた服を全部脱ぎ捨てて陽乃さんの目の前まで移動した。

「ついになんだね。凄くドキドキするね！」

「……そうですね」

「もしかして、少し怖気づいた？」

「この人はホント、鋭いな。ここは正直に言っておくか。」

「ええ、それはそうでしょ……」

「もう！男は度胸だよ。一気に入れちゃってよ。私もその方がいいし
さ」

陽乃さんの言う通りだな。俺に度胸なんて無いけど、ここまで来たなら最後までしてやる！俺は陽乃さんに覆いかぶさる様にして、入れ始めた。

「ひぎっ?!……身体に、何かが入って……来るのって、不思議な……感覚だね……っ?!はああああああああつ!?ぜ、全部入った？」

「そうですね。なんか、想像よりも膣内って、熱いんですね。それに纏わりついて、凄く気持ちいい、です！」

「しょ、処女は、痛いって……っ！聞いていたけど、そんなに、痛くないね……っ！」

この人、エロ過ぎだ。それにしてもこれが女性の……陽乃さんの膺内なのか！ヤバすぎる!! A Vで又くより気持ちいい。すぐにでも射精してスツキリしたいけど、俺には一つの疑念がある。

このまま射精してたら父親になるなんて事はないだろうか？ そうなったら周りからどんな目で見られるか！

特に小町に嫌われたら死にたくなる。

「……比企谷君。今、私とは別の女性の事を考えているでしょ？」

「え、いや、そんな事はないですよ？ うん、ホントに！」

「……………」

こいつ、怪しいな目的な目で陽乃さんが俺を見ている。ここは何としても誤魔化さない！

腰を引き、思いきり突いた。

ずずずつ……ぱんっ！

「っ?! ひ、比企谷君！ いきなり突くのはやめてよ!! びっくりするじゃない！」

「……すいません。でもこのまま出したら俺は父親になるんじゃないかと考えていたものですから……」

「そんな事を考えていたんだね。でも！ 大丈夫だよ。今日は安全な日だし避妊薬だって飲んでいるから。それに私だって大学生の内に子供を作ろうとか考えていないから」

そう言うことなら大丈夫だな。俺は遠慮なく引いては突きまくった。

ずずずつ……ぱんっ！ ずずずつ……ぱんっ！

「ひ、比企谷君!？ そ、そんなに……がつつかなくても、逃げたりしないから!!」

「陽乃さん。先に謝っておきます。すいません。俺、タガが外れてみたいで、陽乃さんを今から滅茶苦茶にしますんで……」

「ひ、比企谷君。目が凄くギラギラしているね……うん♪ いいよ、好きだけ犯して♡」

陽乃さんから許可も貰ったし遠慮はいらないな。

ずずずつ……ぱんっ！ ずずずつ……ぱんっ！ ずずずつ……ぱんっ

！

「ひい?!……す、凄い!!出たり、入ったり……して、一突き……毎に、頭が……真っ白になる……ああああああっ?!」

この人、乱れまくっているな。てか、俺が乱れさせているんだけどな!

「ひ、比企谷君?!ま、待って!これ以上は、無理だから!死んじゃうから!!」

「大丈夫ですよ。死ぬくらい気持ちよくしてあげますから」

「……あああ……っ?!」

あまりの事に絶望している陽乃さんだが、それと同時にどこか期待していた展開に喜んでいた。なので俺はその期待に応えるために陽乃さんを滅茶苦茶に犯した。

俺も初体験で興奮してしまった所為で俺は抜かずに二回も射精してしまった。その後は、陽乃さんの胸を枕代わりにして寝てしまった。

やはり魔王がメイド服を着るのはまちがっている。

ゴールドデンウィーク二日目の朝、妙な疲労感を感じて起きた俺は自分全裸で寝ていた事に少し混乱していた。

「……ああ、そうか。俺、陽乃さんとしたのか」

昨日の行為を思い出して思わず勃起してしまった。昨日、あれだけ出したのにまだ元気が有り余っていたようだ。

いや、そうではないな。陽乃さんの裸を思い出してだろう。あの美の女神のような綺麗で出ている所は出て、引つ込む所は引つ込んでいる身体を見ては興奮しない方が可笑しい。

「それにしても……陽乃さんはどこだ？」

ベットには全裸の俺だけで陽乃さんの姿は見えなかった。昨日の事は俺の夢ではないかと思ったが、部屋に籠っているイカ臭い匂いが夢ではないと言っているようだった。

では、どこに？と考えていると部屋の扉が開いて陽乃さんが入って来た。

「おはようございます。ご主人様♪」

「ど、どうも……って、何ですか？その格好は……」

「変かな？」

「いや、変と言うか何と言うか……」

今の陽乃さんの格好はメイド服だった。白と黒を中心にしたスタンダードのタイプだった。

ロングスカートがなんかいいな。

てか、何でメイド服を着ているんだ？陽乃さんは。一応、聞いてみるか。

「……何でそんな格好をしているんですか？陽乃さん」

「これはね、比企谷君がこれを着たら喜ぶんじゃないかな〜って着てみたんだけど、どう嬉しい？嬉しい？」

「その、えっと……」

「素直に言ったら凄いがご奉仕をしてあげ……けど？」

「凄く嬉しいです!!!」

俺は思わず土下座でお礼を言ってしまった。だって、あの陽乃さんがメイド服とかヤバ過ぎだろう！かなり興奮してまう。てか、誘う仕草がエロい！

「ふふっ……そんなに喜んで貰えて私も着たかいがあったね♪あ、比企谷君的には短いスカートのの方が良かったかな？」

「……………」

た、確かに短い方と長い方、どちらかといえば、短い方がいいな。陽乃さんのスラツとした白い足が綺麗だからな。

……これだけだと俺が足フェチに聞こえてしまうな。

「それじゃ今度は短い方を着てあげるね♪」

「……………はい。お願いします」

「うんうん。了解だよ。それじゃ朝食食べよ。その前に比企谷君はシャワーを浴びてきなよ。昨日の匂いが付いたままだよ」

俺はシャワーを浴びて着替えてから朝食を食べる事にした。それにしても陽乃さんが朝食を作ったのか。

この人が作ったのが意外だった。社長令嬢である陽乃さんは基本的に誰かが作ったのを食べるから自分で調理する事はないと思うのだが？

お嬢様が料理が出来ないというのは偏見なのだろうか？

「……………普通に美味しい」

「比企谷君。幾らなんでもそれは酷いんじゃないの？私だって人並みに料理くらい出来るよ。まあ、料理自体始めたのは最近だけど……比企谷君は知っているでしょ？私が凄いつて事♪」

確かにこの人が凄い事は知っている。高校時代から数々の伝説を残しているからな。

陽乃さんって、ホントにスペックが高過ぎだろう。

「そうだ、比企谷君。明日、予定無いよね？」

「いえ、家でゴロゴロしたり録画したプリキュアを見ないといけないので予定はあります」

「そう。無いのね」

「……あのく人の話聞いていました?」

いや、この人が俺の話なんて端から聞く気は無いだろう。なんせ、あの雪ノ下の姉だからな。

しかし予定なんか聞いてどうするんだ?

「明日から一泊二日の箱根温泉旅行だよ♪」

「へえ〜いいですね、温泉」

「何言ってるの? 私と比企谷君が行くんだよ?」

「……俺が? 嫌ですよ!」

「残念だね! 君に拒否権は無い!!」

陽乃さんはどこぞの名探偵が犯人を指差すようなポーズをとっていた。メイド服じゃなきや決まっていただろう。

メイド服でそのポーズはシニールですよ、陽乃さん。

「……と、とりあえず、何か準備する物とかありますか?」

「ん〜……何も無いかな。着替えは向こうにあるしお金は私持ちだから……必要な物はないかな。まあ、私が向こうでのプレイを考えておくから楽しみにしててね♪」

プレイを考えておくって何だかこの人に乗せられるのは危険な気がするが、今の俺にはどうしようも出来ない。

「……まあ、分かりました」

「うんうん。やっぱり君はいいよ♪それじゃ食器片付けるね」

「片付けは俺がやりますよ」

「まあまあ、ここはメイドの私に任せておいてよ。ご主人様♪」

折角、陽乃さんがやってくれるならここは俺が引いておくか。

「……それじゃお願いします」

「かしこまりました。ご主人様」

陽乃さんはスカートを摘みお辞儀をした。さまになっているな。

「ふふくん♪ふふくん♪」

食器を洗いながら鼻歌混じりに歌う陽乃さんを他所に俺はソファアに座ってテレビを見ていた。

ニュースではゴールデンウィークでの様子が映されていた。空港

や駅にごった返した人々で溢れている。

小町やお袋にクソ親父は今頃、デイズニーで楽しく遊んでいるんだろうな。

ニユースを見ていた眠たくなつたので二度寝をした。

どれくらい寝ただろうか？それにしても下半身に妙な感覚がある。生暖かいような？まるで温かいオナホを使っているような感じだ。

そこで俺は目を開けて下半身の感覚を確かめた。俺の目にとんでもない光景が広がっていた。

「あ、ほはほう(´)はいます」

「……陽乃さん。一体、何をしているんですか？」

「ぶはっ……何って、フェラでございませうが？」

寝ている俺にこの人は何をやっているんだ！でも凄く気持ち良かったな。

でも寝ている時にやるか？せめて起こしてからして欲しかった。

「……陽乃さん。次からは起こしてからしてください」

「かしこまりました。それでもうしなくてよろしいですか？」

「いえ、続けてください」

「ふふっ……素直な比企谷君もお姉さん好きだよ。……それ続けるね」

そう言つて陽乃さんは再び俺のムスコを口に啜えた。さつきはぼんやりだったが、今は意識が覚醒したのでフェラされている気持ち良さが凄く分かる。

ぺちやくちやぺちやくちや……

陽乃さんが顔を上げたり下げたりする度に唾液が絡みついて頭が溶けそうになる。そして俺は限界が近付いて来た。

「……っ!?陽乃さん！すいません!!」

「~~~~っ?!」

びゅるるるびゅるるる……びゅる、びゅる……

俺は陽乃さんの頭を両手で押さえ付けて奥まで啜えさせて喉のに

思いつきり射精した。精子が出る度にあまりの気持ち良さに意識が飛びそうになった。

昨日、散々陽乃さんの膣内に出したのにだ。口は膣内とはまた違った気持ち良さがある。

「んくっ……………苦っ……………でも癖になる味だね♪」

陽乃さんは俺が射精した精液を全部飲み干した。飲んだよ、この人。てか飲んで大丈夫なのか？

「…………いや、飲んで大丈夫なんですか？腹とか壊したりしないんですか？」

「多分、大丈夫じゃないかな？あ、比企谷君も飲んでみる？」
「全力で遠慮します！」

誰が自分で射精した精液を飲まないといけない。もし男で飲んだらそいつは変態を超えている。俺はそうはなりたくはない。

「そう？それじゃ続き始めよっか」

陽乃さんはそう言ってスカートを捲り上げてパンツを横に少しずらして俺に愛液がポタポタと落ちているマンコを見せてきた。

それを見た所為で俺のムスコも回復してガチガチに勃起した。どんだけ元気がいいんだよ！お前は。

「すっごー……………比企谷君も準備バチツリみたいだし入れるね」

「…………ちよつと待て、陽乃」

ソファアに座っている俺に覆いかぶさるように来たので俺はSスイッチを入れた。

「ひ、比企谷君？」

『メスイヌ』がいつから主人の許可無しに入れようとしているんだ？

…………し、しまった!?!つい、いつもの癖でSスイッチが入ってしまった!!不味い、非常に不味い！俺は恐る恐る顔を上げて陽乃さんの顔を見た。

しかし俺の予想していた顔とは全く違った。てつきり怒っているものかと思っただが、怒ってはいなかった。

それどころか嬉しそうな…………顔を赤くして喜んでいた。どんだけ

ドMなんだよ!!

「も、申し訳ありません。私はご主人様のペット♡で『メスイヌ』でした。どうか卑しい『メスイヌ』にお情けをください♡」

陽乃さんは覆いかぶさるのを辞めて身体を反転させてテーブルに両手をつけてお尻を俺の方に向けて振って振ってきた。

「だああああ?!?!この人の『メスイヌ』精神は筋金入りだ!しつてなんだが、エロ過ぎだろ!」

そして俺もノリノリだな!

「……まったく、しょうがないペットだな。そんなにこれが欲しいのか?」

「はい♡ご主人様の大きくて固くて逞しいチンポが欲しくて欲しくて堪らないのです!このだらしなない『メスイヌ』をしつけてください♡」

何なんだ!この人のエロさは!!興奮が収まる気がしないんだが!!

「そんなお願いをされては叶えてやらないと、な!」

「ひ、ひいいいい?!い、いきなり奥まで……っ!!出たり……っ!入ったり……っ!する度に、頭が……っ!真っ白に♡♡♡」

バックからするのは始めたけど、スゲー!!気持ちいい……。俺は陽乃さんのお尻に向けて平手打ちをした。

ばちんっ!!

お尻を叩いたらかなりいい音がしたな。そして陽乃さんのお尻には俺の手の跡が残っていた。

「……はひっ?!ご主人様?!一体、何を?」

「何って、陽乃のお尻を叩いたんだよ。それにしても叩かれ途端、膣内の締めまりが良くなったな。叩かれるのが嬉しいのか?陽乃」

「は、はい♡ご主人様にお尻を叩かれたら子宮が喜んで締まったんです♡だ、だからもつと叩いてください!ご主人様♡」

……この人、誰?!俺がしつける前の雪ノ下陽乃はどこに行つた?変態にも程があるだろ!!普段はSかと思うに今ではドMへと成り果てている。

普段の陽乃さんを知っている人間がこれを見たらどんなリアクションを見せるだろうか?

「まったく、普段の陽乃を知っている人間が今の陽乃を見たらきつと幻滅するぞ」

「いいんです……っ!!幻滅、しても……っ!ご主人様が、私を見てくれるなら……っ!!私はそれだけで幸せです……っ♡♡♡」

俺が腰を前後させて、膣内を滅茶苦茶にしているのにとんでもない事を言っているな陽乃さんは。

てか、メイドを犯しておるのが更に俺を興奮させてくれる!!

「そうか!だったら精一杯、愛してやるよ。陽乃」

「は、はい♡愛してください!!ご主人様♡♡♡」

びゅるるびゅるる……びゅるびゅる……

「ぐっ……!!」

「い、いくうううう……♡♡♡」

俺の射精と同時に陽乃さんも絶頂を迎えていた。イツた所為で腰が抜けたようで危うくテーブルに頭をぶつけようとしたので手を腹に回して陽乃さんを支えた。

「……ああ……ああ……」

「まだ、これからだぞ。陽乃」

陽乃さんは絶頂の余韻に浸っていたが、俺はまだ収まっていたなかつたのでお昼まで陽乃さんを犯し続けた。

「さ、流石にやり過ぎた……」

陽乃さんとやり過ぎた所為で腰が滅茶苦茶痛い。する回数をもつと調整しないとな。

昼食はデリバリーで済ませた。

「どうする?食べたらまたやる?」

「いえ、明日にとっておきましょう。てか、疲れたので休みたいです」
夜になり早めに寝る事にした。明日は温泉に行くのと今日のプレイで体力の殆んど使って早く寝たかった。

でも陽乃さんがすんなり寝かしてくれるわけでもなく、添い寝をし
てきた。

「……あのく陽乃さん。寝ずらいんですけど」

「気にしない。気にしない」

添い寝の所為で俺は殆んど、寝る事が出来なかった。

やはり魔王と寝取られ寝取りごっこをするのはまちがっている。

ゴールデンウィーク三日目の早朝、俺は陽乃さんの運転する赤いスポーツカーみたにな車に乗せられて温泉で有名な箱根に向かった。

正直な所、向こうに着いたらどんなプレイを始める気なのだろうか？
今から想像しただけで、身震いしてしまう。だが、陽乃さんとの『夜の公園でのイヌプレイ』で鍛えられた俺ではない。

今更、どんな変態プレイだろうとこなして見せる!!

そんな事を考えていると目的地の温泉宿に着いたのはいいんだが、予想していたのと違っていた。

「……ここに泊まるんですか？」

「そうだ。いい場所ですよ♪」

はつきり言っただ庶民の俺なんか泊まるには勿体無いくらいの豪華な宿だった。ここ、絶対金持ちが泊まるような場所だよ。

「お待ちしております、雪ノ下様。この度もご利用ありがとうございます」

「こんにちは。今回もよろしくね」

「はい。もちろんでございます。それで……あちらの男性は？」

「彼ですか？彼は将来の身内とだけ言っておきます」

「そうですか。では、ごゆるりとお楽しみください」

「ええ、それじゃ」

フロントから戻ってきたきた陽乃さんはどこかニコニコしていた。

何か言い事でもあったのだおろうか？

「おまたせ、比企谷君。それじゃまずは部屋の露天風呂を堪能しようか♪」

「……さっきのフロントの人と何を話していたんですか？もしかして前にもここを利用した事があるんですか？」

「話については別にいいじゃない。ここには前着た時はお父さんの仕

事の関係でね。その時はあんまり堪能できなかったから次は一人で来ようかなって思っていたんだけど、どうせなら比企谷君を誘ってみようかなって♪」

「……さいですか」

「それじゃさっそく部屋に行ってみよう!」

俺は陽乃さんに腕を掴まれてそのまま部屋に向かって歩き出した。

部屋に着き、中に入って見るとそこには予想以上の光景が待っていた。まさに金持ちが泊まるようにな立派な内装をしていた。

やっぱり庶民が手を出せる場所ではないな。もし俺が社会人になつてここに来ようとしたら一体、何年働かないといけないのか、想像するだけで嫌になつてくる。

「どうしたの?比企谷君。なんだか嫌な顔しているけど?」

「……いえ、俺がもしここに来ようとしたら何年働かないといけないのかを考えたらもの凄く嫌な気分になつて……」

「そんな事なら気にしなくていいのに。来たくなったら私がまた連れて来てあげるから♪」

え?!また連れてきてくれるのか?それはちよつとどころではなく凄く嬉しいな!でもそれだと迷惑じゃないだろうか?

「そ、それは畏れ多いかと……」

「まあ、気が向いたらでいいよ。それじゃここでするプレイについて発表します!」

この人は何を言っているんだ?!あ、そう言えば昨日言っていたな。プレイがどうこうとか。

「……聞くのが恐ろしいんですけど、どんな事をすんですか?」

「ここでするプレイは……ずばり『寝取られ』です!」

「……え?」

『寝取られ』です!」

「いえ、二度も言わなくても分かります。でもどうして『寝取られ』なんですか?」

そもそもこの人は『寝取られ』の意味を分かっているのか？俺はどこか陽乃さんも誰とも付き合っていないのに、『寝取る』とか無いだろ。

「うん。私は日々、比企谷君に喜んで貰う為に色々と勉強しているんだよ。その中で『寝取られ』って、ジャンルが気になって、実際にやってみたらどんな気持ちになるか知りたいんだよね♪」

この人はとんでもない変態になってしまった。てか、俺がしたんだけどね。

「それで今回は私が比企谷君を『寝取る』から♪」

「……え？俺を誰から『寝取る』んですか？」

「雪乃ちゃんから」

「どうして、ここで貴女の妹が出て来るんですか？」

「それは設定で出てもらうから。設定はこう、雪乃ちゃんと結婚した比企谷君を私が温泉旅行に誘ってそこで私の身体を使って誘惑するの」

凝った設定だな！俺が雪ノ下と結婚か。すぐに罵倒されて胃に穴が開くな。確実に。

「まあ、分かりました。それで俺は陽乃さんの事を何と呼べば？」

「私の事はハル姉か陽乃義姉さんかな？あ、私は八幡君って呼ぶから♪」

ホント、凝った設定だな。ここまでするか？今更ぐだぐだ言っても意味がないか。

「……陽乃義姉さん」

「……ん？何かな？八幡君」

あれ？妙に反応が悪いな？一体、どうしたんだ？

「露天風呂にでも入りませんか？」

「……そうだね。さっそく入ろうかな」

陽乃さんは『寝取られ』プレイを始めた途端、いつもの感じじゃ無くなっているような気がする。

「ふ〜露天風呂ってこんなに気持ちいいんだな。来て良かった」

「それは良かったね、八幡君」

「……陽乃義姉さん」

「うん？何かな八幡君」

「……この態勢、どうにかしてくれませんか？」

「う〜ん……無理。お風呂に入っている間はこのままでもらうから」

俺達の態勢は俺の後ろに陽乃さんが抱きついていているのだ。陽乃さんの二つの大きなお山が背中当たってむず痒いし、陽乃さんの声が左耳からダイレクトに聞こえるので興奮してしまう。

「それに八幡君も雪乃ちゃんに出来ない事をして見ない？例えば、パイズリとか？」

「そ、それは……確かにやって欲しいですね」

確かに今のそうだが、将来あいつがボインになるとは限らないからな。雪ノ下はこの先、あの貧乳だろうな。

「それじゃこっち向いてね……」

「は、はい」

何だかんだ言っていた俺も役になりきっているな。こんなシチュエーションは絶対にならないだろうな。

「それじゃ行くね〜」

陽乃さんのパイズリは前にやって貰ったが、前回もそうだが今回ももの凄く気持ちいいな！すぐに射精しそうだ。

びゅるるるびゅるるる……びゅる、びゅる……

「きゃ?!……もう八幡君。射精するなら事前に言つてよね！びっくりするじゃない！」

「す、すいません。あまりの気持ち良さに我慢できなかったもので……」

「次は絶対だからね！それじゃもつとパイズリで抜いてあげるね♪」

それにしてもさつきから妙だな？陽乃さんのテンションが著しく低い気がする。いつもならノリノリな気がするのだが？

俺が考え事をしているといつも間にか陽乃さんはパイズリを止めていた。どうしたんだ？

「……えっと、陽乃義姉さん？どうしたんですか？」

「……………ごめん。比企谷君」

あれ？呼び方がいつものに戻っているな。どうした？マジで!?

「ど、どうしたんですか？ホントに？」

「私、気付いたんだ……………」

「何に気付いたんですか？」

「私、比企谷君を『寝取る』ために頑張ってやったつもりだったけど……………全然、気持ちよくないの!!」

え、ええええええ?!?!この人何を言っているんだ？言いだしつぺだろ
うに。

「えっと、つまり……………」

「私が比企谷君を『寝取る』んじゃないなくて、比企谷君が私を『寝取って』
欲しいの!!」

この人の言っている事はたまに分からない事があるな。

「……………どうして、そうなったのか聞いてもいいですか？」

「……………うん。始めは面白かったけど、パイズリ辺りから何だか満たされ
ない私が居て、それを認識したら気持ち良くなれなくて……………やつぱ
り私には攻めは出来ないの……………比企谷君に攻めてもらわないと気持
ち良くなれないの!!」

とんでもない発言だな。まあ、俺も攻められるより攻める方が好き
だからな。

「……………それじゃ立場を変えやりましょうか？」

「……………うん。お願い」

「俺が結婚している陽乃さんを『寝取る』という事でいいんですね？」

「うん。お願い比企谷君」

「まずはお尻をこっちに向けてください」

「は、はい♡」

マジでドMだな。調教し過ぎたと今では思うが、後悔は……………無い!
俺の命令に従順だしな。

今日は役になりきって、陽乃さんを旦那（空想）から『寝取る』!!

「それじゃ……………行きますよ！」

「……………え？ひ、比企谷君！そ、そっち！お尻なんだけど……………っ?!」

「ドMの浮気女にはこっちで十分です、よ
ずずずずずずずず……」

「ひぎいいい?!お、お尻につ……比企谷君の……がっ?!入って、くる
……っ♡♡」

「流石に尻は締めりがいいですね。それでどんな気分ですか?結婚して1年も経っていないのに俺に犯されるのは?」

「ぎ、気持ちいいいい、ですっ♡あの男よりっ!比企谷君のチンポの方が、大きくって……っ?!?すごく、気持ちいいいいですっ♡♡」

うわあ……やっっておいてなんだが、この人、役になりきっているな。てか、空想の結婚相手の小さい設定なの?

まあ、俺もノリノリで役をやっているからな。

「そうですか。だったら、ご褒美を上げよう」

「……ひえ?い、いひやい?……」

呂律がまったく回っていない。役と言うよりドMとして覚醒してはないだろうか?それは前からだけど、これでさらにドMになったな。

「ぐっ!射精る……!」

びゆるるるる、びゆるるるる……びゆる、びゆる……

「おおおおおおっ♡……おひりに、ひきがやくんのが……っ♡でてるう♡いぐうううう♡♡♡」

お尻に射精したのが余程、気持ち良かったのだろう。アへ顔を晒して陽乃さんは盛大に絶頂した。アナルに入れての射精は初めてだったが、凄く気持ち良かった。

陽乃さんの顔は今、酷い事になっている。目からは涙、鼻からは鼻水を出している。その上、舌も口からだらんとしている。

「陽乃さん?しっかりしてください。陽乃さん?……完全に気を失っているな」

「ああああ……」

ずずずずず……ほこっ……ほこっ……

俺が陽乃さんのお尻からムスコを抜くとお尻の穴から俺が射精した精液が溢れ出してきた。

陽乃さんのお尻の穴は開いたり閉じたりして、まるで呼吸しているようだった。

それを見ているとまた入れたくなつたので……入れた。
ずずずずずつ……

「はひっ?!またっ♡おひりにっ♡……おとおおおっ!?!お、おひりはけちやうっ♡」

「その割には嬉しそうに聞こえますが?嫌なら抜きますけど?」

「やめっ!?!ぬ、ぬはないでっ♡もっとっ♡ずぼずぼしてっ♡……くらしやい♡♡♡」

陽乃さんが何を喋っているのか、まったく分からない。今の状態の陽乃さんを雪ノ下が見たらドン引き間違いないな。

「……まったく、ここがどこだか忘れたんですか?いくら個室と言っても露天風呂ですよ?声が周りに響いて、それを誰かに聞かれたどうするんですか?」

「き、きはれてもっ♡いいはらっ♡もっど、おはしてくださいっ♡♡♡」

……ああ、駄目だな、これは。完全に人格が可笑しくなっている。でも、いいか。エロいしな。

「それでは二度目の射精で無様にイってください!!」

びゆるるるるっ!びゆるる、びゆる……!

「はひ?!おひりにだはれて……っ♡いぐううううっ♡♡♡」

それから二度目の気絶して陽乃さんが目覚めたのが、三十分後だった。その間、お湯に沈まないように支えるのは大変だった。

やはり魔王とのプレイがエスカレートするのはまちがっている。

ゴールデンウィークに陽乃さんに連れられて温泉に来た。庶民の俺なんか泊まるのは場違いなほどの豪華な宿に泊まる事になった。それまでではない。だが、そこで陽乃さんが『寝取られ』プレイを始めた時は少しドキドキしていた。

普段は俺が攻めていたから攻められるのはどんなものかと少し期待していたが、途中で陽乃さんが自分はやっぱ攻められないと気持ち良くなれないと言ってきた。なので立場逆転して俺が陽乃さんを旦那（仮想）から『寝取る』事になった。

そこで俺は思い切って陽乃さんのアナルを犯した。その結果、陽乃さんは二回気絶した。

正直、陽乃さんのアナルを犯した事は後悔はない。マンコもそうだったが、陽乃さんはアナルも締まりが良く気持ち良かった。

気持ちよかったのは今は置いておく。何故なら陽乃さんがまだ、気絶したままだからだ。

「…………マジで、どうしよう？これ…………」

湯船に陽乃さんを残したままにするのは不味いしな。起きてくれないだろうか？かれこれ三十分くらい経っている。

「…………あれ？ここって…………」

「気が付きましたか？陽乃さん」

「あ、比企谷君だ……」

何だか、意識がはつきりしていないのか？陽乃さんは起きてても身体を起こす気が無いようで、俺にもたれ掛かっている。

「陽乃さん。大丈夫ですか？俺が言うのはなんですけど…………」

「そうだね。まさか比企谷君にお姉さんのお尻の穴を二度も犯されるなんて、これは是が非でもこれから私も私を気持ち良くしてもらわないといけないね♪」

「…………いいだろ」

「え？ひ、比企谷君？」

ちよつとイジめたくなつたのでSスイッチ、ON！俺は陽乃さんをぎゅつと抱き締めた。これでもかと言うくらいに強く抱き締めた。

「ひ、比企谷君。く、苦しいから……」

「もつと気持ち良くしてやるよ。もつと激しいプレイでな。嬉しいだろ？」

俺の声が耳の近くから聞こえるのが、快感になっているようで、小刻みに震えていた。振り返らないでも陽乃さんがどんな顔をしているのかが、分かる。

自分が望んだ事がこれからもあるという期待感と満足感だ。

「は、はい♡ご主人様♡♡」

「……とりあえず、プレイはここまでにして上がりましょう。でないと、のぼせます」

「そうだね。そろそろ夕食だね。ここの夕食は絶品だから楽しみにしててね♪」

「期待してます」

我ながら切り替えが速いな。

それにお湯に浸かり過ぎは不味いと思い、俺と陽乃さんは湯船から出た。お風呂上りの女性がなんだか色っぽいと思うのは俺だけだろうか？

特にうじなの辺りが色っぽい！

タオルで水滴を拭く陽乃さんはとてつもなく綺麗だった。眩しいくらいに。

宿が用意した浴衣を着た陽乃さんを俺だけの『女』にしたと思ってしまう。そんな事は出来ないよな。

夕食は陽乃さんが言うだけあって豪華だった。肉が出てきたが、肉厚がハンパなかった！他にも旬な食材をふんだんに使ってあって凄く美味しかった。

「どう？美味しいでしょ？この料理は」

「あ、はい。豪華過ぎて、庶民の俺には勿体ないです」

「もう！そんな事言わないの！折角の豪華な料理なんだし楽しく食べよ♪」

「はい」

俺は陽乃さんと豪華な宿の料理を食べ進めた。正直、腹が減っていた。

長い時間、掛けてここまで着てすぐにやったから体力は減っていた。なので完食してしまった。

食べた後は小一時間ほど備え付けのテレビを見て過ごした。

「それじゃお腹も落ちつて来た事だし始めよつか♪」

「何をですか？」

この時の陽乃さんの笑顔が妙に怖かった。いや、ホント。

「もちろんプレイをだよ。比企谷君♪」

「……ああ、なるほど」

「さあ！次はどんなプレイで私を楽しませてくれるの♪」

陽乃さんの目はキラキラと輝いて楽しみにしているようだった。まるで次に何が飛び出してくるのか分からないマジックを待っている子供のようだ。

「……そ、それじゃ……目隠しプレイと言うのはどうですか？」

「目隠し……なにそれ超楽しそうだね！」

陽乃さんはさつき以上に目を輝かせていた。言ったからにはやってやろう!!

俺と陽乃さんは寝室に行った。そこにはすでに布団が並べてあった。宿の人、準備がいいな！

「陽乃さん。とりあえず寝転がってもらっていいですか？」

「こう？」

「ええ、それと両手は頭の上で交差させるようにしてください」

「こんな感じ？」

陽乃さんは俺の指示通りに動いてくれた。俺は浴衣の予備の帯を使って陽乃さんの腕を拘束した。そつとやちよつとの力では外す事は出来ない。女性の陽乃さんには尚更無理だ。

足も帯でM字開脚に固定した。

「これ、ヤバイね。動けないこの状況なら私を好き方題だね。比企谷君」

「……今までも好き放題してきたと思いますけど?」

「まあ、確かにそうだね。これから何が起るのか想像しただけゾクゾクするよ」

「……さいですか。それじゃ目隠ししますね」

俺は陽乃さんの目を帯でしっかりと隠した。これで陽乃さんは視界ゼロだ。

「……これ、凄いや!比企谷君。音と身体の感触だけだから身体が今まで以上に敏感だよ!」

「あれ?比企谷君?聞こえているよね?比企谷君?どうして返事をしてくれないの?」

「ホント!返事をしてよ!!ねえ、比企谷君!」

俺は返事をする事なく黙っていた。ポツチを極めた俺にとって気配を消すこともお手のものだ。

気配を感じないのか陽乃さんはかなり不安がつているな。その所為なのか愛液がドバドバと溢れていた。

ホント、いじめがいがあるな陽乃さんは。

「ひ、比企谷君。部屋から出てないよね?ねえ!」

陽乃さんは音でなんとか俺を探そうとしたが、訓練されたプロボツチは音を出さずに子行動出来る。

そのため陽乃さんは今までに無いくらいの不安に襲われている。

「ひ、比企谷君!部屋に居るんでしょ!?!そうでしょ?」

俺は身動きが取れない陽乃さんを静に観察した。マンコからは愛液がドバドバと溢れている。

てか、陽乃さんはこの状況を絶賛楽しんでる。何故なら顔が少しニヤけているからだ。

「ひ、比企谷君！この部屋に居るんでしょ!?こ、声を聞かせてよ!ねえ!」

「……………」

陽乃さんは俺の声を聞きたがっているが、あえて無視する。その所為もあって陽乃さんは愛液を止め処なく溢れていた。

うん。陽乃さんはとことん変態だ。今更だが…………。

くちやくちや…………くちやくちや…………

「……………」

「ひい!?!」

俺は無言のまま、陽乃さんのマンコをいじり始めた。陽乃さんはいきなり俺が身体に触るものだからビクツ!と魚のように撥ねた。

「ひ、比企谷君!居るなら声を聞かせてよ!!身体、自由に動かせないし真っ暗で不安なの!?ねえ!お願いだから声を聞かせてよ!?!」

「……………」

陽乃さんは俺に頼みこんでいるが、それでも……………無視!だって、楽しいから。

普段の陽乃さんを見ているとついついいいじめてやりたと思ってしまふ。周りを巻き込んで好き勝手に振る舞っている陽乃さんをいじめるなど出来ないと思っていたからな。

その所為もあって俺のムスコはガッチガッチに勃起している。

そんな勃起したムスコを陽乃さんの胸で挟んだ。前の時は陽乃さんが挟んでしてくれていたが、自分で挟んでみると胸の素晴らしさが分かる。

温かく柔らかく押すと押し返してくる弾力。素晴らしいの一言に尽きる。

「ひ、比企谷君!ぱ、パイズリだね!?!だ、だったら一言くらい何か喋ってくれないかな?ずっと無言だからお姉さん、少し心細くなっちゃってさ!お願いだから声を聞かせてよ!?!」

「……………」

それでも……………無視！さつきもそうだが、楽しいから。スゲー超楽しい！

俺は腰を前後して陽乃さんの胸を楽しんだ。巨乳でなければ味わう事の出来ない気持ち良さだ。

あ、ヤバい。そろそろ射精そうだ。

「ぐう……………」

びゅるるるびゅるるる……………びゅるびゅる！

「きゃあ!？」

陽乃さんの胸の気持ち良さに思わず射精してしまった。うん。巨乳は素晴らしい。

「うううう……………」

陽乃さんが静かだから何かと思っていたら泣いていた。しかもガチ泣きだ。その上、陽乃さんは震えていた。流星にやり過ぎたと思う。

俺は急いで陽乃さんの身体を拘束していた帯を全て外した。目隠しも取った。

「…………あのく陽乃さん？大丈夫ですか？」

「大丈夫なわけないでしょ!…………もう本当に怖かったんだからね!?!目隠しでもいいけど、次やるときは声を掛けてね!!」

陽乃さんは怒りながらも抱き付いて来た。

目隠しプレイはやっていいのね。まあ、今回は俺もやり過ぎたと思うこともない。

それにしても俺の中にある気持ちはそうなんだろう。

俺は陽乃さんが好きだ。俺だけの女にしたい。

ここは言わないといけないよな。

俺は抱き付いている陽乃さんを引き剥がしてそのままベットに押し倒した。

「…………比企谷君?どうしたの?」

「陽乃さん。俺は貴女が好きです。結婚を前提に俺と付き合ってください」

「……………………へ?じよ、冗談、だよね?」

「俺はマジです。俺は雪ノ下陽乃さんが好きです。この際だから言いますが、俺は貴女の全てが欲しい。髪の毛、一本に至るまで全てです」
陽乃さんは顔を横に逸らした。俺は両手で顔を俺の方を向かせて固定した。

「陽乃さん。今、答えてください。俺に貴女の全てをくれるのか、くれないのかを。くれないと言えば、俺は諦めます。でもくれると言うなら俺は貴女の全てを貰います」

「……比企谷君。私は面倒な女だよ？」

「そんなの初めて会った時から知っています」

「……私でいいの？」

「陽乃さんがいいんです。それで答えてくれますか？」

陽乃さんはさつきから目線を合わせよとしなかったが、しっかりと俺と目を合わせてくれている。

「私を幸せにしてくれる？」

「死ぬまで幸せでいさせてみせます」

「これからよろしくね♪未来の旦那様」

「もちろんです。未来のお嫁さん」

俺と陽乃さんはキスをした。それもディープキスだ。長いも長い三十分くらいしてしまった。

「……ぷっはあ」

俺と陽乃さんは見詰め合っていた。なんだか照れ臭いな。

でも後悔はない。俺はこの人の全てを受け入れたのだから。宣言通り幸せにしてみせる。

だが、今は眠いので寝る事にした。

やはり魔王と恋人になっても今までと変わらないは
まちがっている。

どうも、皆さん。比企谷八幡です。ゴールデンウィークに陽乃さん
に連れられて箱根の温泉に来た俺ですが、そこで陽乃さんの要望で
『寝取られ』プレイで俺は陽乃さんをガチ泣きさせてしまった。

その際に勢い余って、陽乃さんに結婚を前提に付き合ってくれと
言ってしまった。

そして陽乃さんは俺の告白にOKをしてくれて、俺と陽乃さんは晴
れて恋人関係になった。

しかし俺は思う。

「……過去に戻ってあんな告白をした自分を殴りたい」

本当に過去に戻りたい。散々いじめておいて、ロマンチックもあつ
たものではない。それなのに陽乃さんはOKをしてくれた。

だから俺は頑張らないとな。この人を幸せにしないと。

それにしても陽乃さんは良く寝ているな。しかも俺の腕を枕にし
て熟睡している。寝顔が可愛いな。

「……んんっ……八幡、大好き……」

ちくしょーー!!!寝言で俺を悶え殺す気ですか?陽乃さん!貴女
のその寝顔と寝言は色んな意味で凶器ですよ!

それにしてもこの人が俺の彼女なんだよな。今までの事があるか
らイマイチ、ピンと来ない。

「でも俺の彼女なんだよな……」

ふと、俺は陽乃さんの胸に目が行ってしまった。呼吸するたびに揺
れる夢と魅惑の塊が俺を誘っているように見えた。

特にピンと立った乳首が美味しそうに見えてしまう。

「……頂きます。はむっ」

「はひっ?!」

うむ。陽乃さんの乳首に吸い付いたが、その所為で陽乃さんが起
きてしまった。まあ、起きない方が可笑しいか。

「もう！八幡。寝ている私の乳首にいきなり吸い付かないですよ！吸い付いてもいいけど、それは起きている時にしてよ！」

「……すいません。あまりにも美味しそうだったので、つい……」
「……?!もう！そんな可愛い顔しないでよ！言ってくればいつでも吸わせてあげるから！でもまだミルクは出ないよ！」

妊娠もしていないにミルクが出たなら問題だ。そもそも妊娠してたら駄目だろ。

「でも妊娠したら好きナだけ飲ませてあげるよ。私のミ・ル・ク♪」
「……その際には是ひ」

「……え？うくん……赤ちゃんの分は残しておいてね♪」

まだ出来てもいない赤ん坊に嫉妬とか情け無いな、俺。でも今から飲むのが楽しみだ。

でも今はもう少しだけ楽しむか。

「陽乃さん。もう少しだけ吸ってもいいですか？」

「え？……うくん。いいよ」

陽乃さんは胸をさらけ出した。俺は乳首に吸いついた。

「ちゅぱっ……ちゅぱっ……」

「は、八幡、んっ♡そんなに強くっ♡吸っちゃ♡ひい♡」

うむ。乳首の味は陽乃さんの汗の味がするだけだが、美味しいと思ってしまう。それに陽乃さんの喘ぎ声がなんとも堪らない！

俺は吸っていない方の乳首を指で磨り潰すようにグリグリと捻ったりして遊んだ。

「ちゅぱっ……ちゅぱっ……ぷはっ」

「もうっ……はあはあ……そんなに私の乳首、美味しかったの？八幡……」

「……ええ、それはもう、美味し過ぎていつまでも味わっていたいですね」

「はあはあ……そんなに？」

陽乃さんは息を整えようとしていた。そう言えば、陽乃さんは俺の事を「比企谷君」から「八幡」と呼び方を変えたな。

恋人として意識したと言う事だろうか？それは凄く嬉しいな。

そろそろ朝食の時間だな。風呂に入って身体を洗わないとな。

「……陽乃さん。朝風呂でも入りませんか？お互い昨日の匂いがキツいですし……」

「そうだね。これじゃ朝食食べれないね。それじゃいぎー！朝風呂に♪」

だが、陽乃さんは動こうとしなかった。どうしたんだ？

「どうしたんですか？陽乃さん」

「……ごめん、八幡。運んでもらってもいい？腰が抜けて立てないの」「いいですよ。よつと」

俺は陽乃さんを抱え上げた。ようは「お姫様抱っこ」というやつだ。それにしても陽乃さんって見た目ほど重くないんだな。

「ちよつと?!八幡！いきなりお姫様抱っこしないでよ!!私にだって心の準備があるんだよ!」

「……ちよつと、黙っている。『メスイヌ』」

「……え？は、はい。ご主人様♡♡」

ちよつと五月蠅かったのでSモードで黙らした。陽乃さんを黙らすにはこれが一番だ。

俺はお姫様抱っこで陽乃さんを部屋の露天風呂まで運んだ。陽乃さんは腕を俺の首に掛けてきた。これは抱えやすくしてくれ。

湯船に浸かる前に身体を洗わないとな。俺も陽乃さんも汗などでベタベタになっている。

「陽乃さん。とりあえず、身体を洗いますね?」

「うん。お願い」

俺はスポンジで陽乃さんの背中を重点的に洗った。他にも手が届きそうも無い場所を洗ってあげた。

「どこか痒い所はありますか？陽乃さん」

「うーん。大丈夫だよ♪そのまま続けて」

俺は陽乃さんに言われた通りに洗い、泡を洗い流した。すると陽乃さんは俺の手を引いて椅子に座らした。

「次は私が八幡を洗ってあげるね♪」

「お願いします」

次は陽乃さんが洗ってくれるとの事で椅子に座って待っていた。
むにゅ

背中に何やら柔らかい何かが当たった。それと小さな突起だと思
うものだ。これはもしかしくなくても陽乃さん、身体で洗っているのか
？

むにゅむにゅ

間違いない。胸で俺の背中を洗っている。てか、どんな洗い方をし
ているんだ、この人は。まあ、でも気持ちいいから構わないけどな。

「どう？八幡。私のおっぱいスポンジの感触は？」

「さ、最高です。てか、どこで覚えたんですか？」

「ネットとかだね。未来の旦那様を気持ちよくするための勉強をしつ
かりしているんだから。ほら、もつと行くよ♪」

むにゅむにゅ……むにゅむにゅ……

そう言った陽乃さんは胸を上下に揺らして俺の背中を満遍なく
洗って行った。それに空いている手で俺の乳首をいじるってきてい
る。

ヤバいな、あまりの気持ち良さに意識が飛びそうだ。

乳首、背中が洗われる度に射精そうになっていた。しかも出そうな
所で陽乃さんは出させてはくれなかった。

「……陽、乃さん……っ?!……いい加減、射精……っ?!させてはくれま
せんか?」

「射精すなら私の膣内でね♪」

陽乃さんは俺の背中から離れて泡を洗い流したら自分からM字開
脚した。膣内からは愛液がドバドバと溢れていた。

それを見た所為で俺の興奮が収まる気がしない!エロ過ぎだ!

「それじゃ……行きますよ」

俺は陽乃さんの膣内にゆっくり挿入した。

ずずずずっ……

「は、入ってきたっ!?……八幡のっ……!!すごっくっ!?大きっ♡」

陽乃さんの声、エロ!俺は引いたり入れたりを繰り返した。

ずずずずっ……ぱんっ!ずずずずっ……ぱんっ!ずずずずっ……

ぱんっ！

「入ったりっ♡出たりっ♡してっ!!気持ち、いいっ♡♡」

「でも!こんな事したらすぐに汗をかくからお風呂に入っても意味が無いですよ!」

「しよんな、こと……っ!なひもんっ♡」

陽乃さんの呂律はもう回っていないかった。それにしても朝からやるとか、俺も陽乃さんも元気があるな。

昨夜だって、散々してと言うのにな。そろそろ射精そうだな。

「陽乃、さん……っ!そろそろ射精しても、いいですか?」

「うんっ♡はひはんのっ!すきはそきにだしやてっ♡♡」

相変わらず、呂律が回っていない。ヤバい!射精る!!?

びゆるるるびゆるるるっ……びゆる、びゆるっ……

「ぐっ!」

「いぐうううう……っ♡♡♡」

俺も陽乃さんも派手に絶頂してしまった。

朝風呂でSEXした俺と陽乃さんはそれからまた身体を洗い、朝食を食べた。そしてお土産を買って千葉に戻る事にした。

「八幡。どれを買うか決めた?」

「はい。これとこれに決めました」

「そう?それじゃ支払いしちゃうね」

「……ホントにいいんですか?お土産まで買ってもらって」

「いいよいいよ。これくらい全然、大丈夫だよ」

陽乃さんはそう言って俺が選んだお土産を買ってくれた。正直、お土産だけでも思ったが、お土産もかなり高かった。

庶民の俺では手が届かない額だった。マジで恐ろしいな。

「それじゃそろそろ千葉に戻ろうか?」

「そうですね」

俺と陽乃さんは千葉への帰路についた。陽乃さんの運転はそれなりに慣れているようだった。最近、取ったと言っていたのにな。

そして高速に乗った時に陽乃さんから話を振ってきた。

「八幡。来週から私の借りているマンションで勉強会をするから参考書とか持ってきてね」

「べ、勉強会ですか。どうしてそんな事をするんですか？」

「もちろん！八幡にも私と同じ大学を受けてもらうためだよ」

俺が陽乃さんと同じ大学を受けるとか、無理ゲーだろ。いや、待てよ。陽乃さんに教えてもらえば、なんとかなるんじゃないか？

それに陽乃さんが教えてくれれば、塾に行く必要が無い。その学費を俺の懐に入れる事ができるじゃないか。

「えっと……それじゃ、お願いします。陽乃さん」

「うんうん♪お姉さんに任せておきなさい！八幡が苦手な数学を克服させてあげるから♪」

「お、お手柔らかに……」

陽乃さんと勉強会の事を少し話していると比企谷家に着いた。まだ、小町、母ちゃんにクソ親父は帰ってきていないらしい。

「小町ちゃんにご両親はまだ帰っていないんだね？八幡の彼女になったからご挨拶でもしようかなって、思ったんだけど？」

「……いや、それはまだやらないでください。面倒な事になりそうなんだ……」

小町は相当喜びそうだし、母ちゃんは素直に喜んでくれそうだし、クソ親父に関しては美人局を疑って気そうだな。昔から美人には気を付ける！と言ってきていたからな。

もしかしたら昔、親父は美人に酷い目に遭わされたのかも知れないな。

「八幡。小町ちゃんにご両親は明日には帰ってくるってさ」

「……さいですか」

陽乃さんがいつの間にか小町にメールを送っていた。行動が早いな、この人。

「それじゃ、やろ」

「……朝、散々したのに元気ですね？」

「まあね♪それにゴールデンウィークが終わったら暫くは会えないで

しよ？だから今の内にたっぷり楽しもうと思ってね♪」

まあ、付き合いますか。それじゃSスイッチオン！

「陽乃。まずは服を全部脱いで蟹股になれ」

「はい♡(づ)主人様♡♡♡」

陽乃さんは服を脱ぎ、股を大きく開いて、マンコを指で広げて膣内を見せてきた。そこから愛液がポタポタと垂れていた。

「それで、この後は？」

「そのまま、じつとしていろ。とりあえず、俺がプリキュアを見終わるまでその態勢で。もし少しでも崩したら、『今夜の散歩』はおわすけだ」

「え？……じよ、冗談だよね？」

俺は何も答えず、テレビに集中した。だが、このままでは不味い事に気が付いた。

俺はバケツを持ってきて陽乃さんの真下に置いた。これで愛液が床に落ちる事は無いな。

「あの〜八幡？後、どれくらいで終わるのかな？」

「……………」

とりあえず、無視！陽乃さんも俺が無視するので蟹股の態勢でプリキュアを見始めた。

結論から言って、今回のも良かった。マジで泣けるな、プリキュア。

ふと、陽乃さんを見ると最初の態勢からまったく動いていなかった。凄い!!

「ふう…………ふう…………ふう…………」

それにしても陽乃さんは凄いな。息が荒いが頑張って、踏ん張っている。そしてマンコから愛液がダラダラとバケツに落ちていた。バケツの三分の一くらいまで貯まっていた。

そろそろいいか。

「陽乃さん。お疲れ様です。もういいですよ」

「へ？もふ、いいほ？」

またしても呂律が回っていない。俺は陽乃さんをソファーに寝かした。

「は、はひまん……?」

「とりあえず、寝て体力回復してください。今夜、散歩に行きますよ」

「そんほ……?」

「ホントです。だから今は寝てください」

俺がそう言うのと陽乃さんは眠った。さて、俺は今夜の散歩の準備をしますかな。

やはり魔王を公園で散歩させるのはまちがっている。

ゴールデンウィークに一泊二日の箱根温泉旅行から戻ってきた俺と陽乃さん。それにしても恋人になっても俺達の関係は変わる事は無かった。

主人と犬、SとMと言う関係は。

むしろ、前より酷くなっていると言ってもいい位だ。恋人になったので下手な遠慮が無くなったからかもしれない。

ゴールデンウィークも後二日になってしまった。なので明日一日はゴロゴロ過ごすとして今夜は陽乃さんを公園で散歩させよと考えていると言うか、放置プレイを頑張ったご褒美をあげると言った方が正しいな。

「八幡。準備は終わった?」

「ええ、こっちは大丈夫ですよ。陽乃さんはどうですか?放置プレイで結構体力が無くなったんじゃないですか?」

「それなら寝てから問題ないよ♪さあ!散歩に行こうよ!」

「はいはい。分かりましたよ」

俺は今回、公園で使う道具をいくつかカバンに入れて家を出て公園に向かって陽乃さんと歩いた。

今夜、道具を用意したのは前から試したい事があったからだ。さて、今夜の散歩はどう陽乃さんを楽しめるかな?

今から陽乃さんがどんな声で絶頂してくれるか楽しみだ。

俺の家から少し歩いた所にある人気のない公園がある。てか、前に陽乃さんを散歩させた公園なんだけどな。

ホント、人気がないのは前から知ってはいるが、人っ子一人居ないな、ここ。

「それでそれで！八幡は今夜、ここでどんな事を私にしてくれるの！
今までに無いプレイをしてくれたら嬉しいな！全裸で小便するのは
前にやったからそれとは違うのをお願いね♪」

今夜も変態絶好調の陽乃さん。安心してください。今夜もたっぷ
りと可愛がつてあげますね。

「それじゃまず服を脱いで全裸になれ」

「はい♡ご主人様♡♡♡」

陽乃さんはなんのためらいも無く服を脱いでいき、下着すらすんな
りと脱ぎ捨てた。ある意味、格好いい！なんて男らしいんだろうか！
……いや、陽乃さんは女だ。

陽乃さんは右腕で乳首を隠し左手でマンコを隠した。ある程度は
恥じらいはあるらしい。

「流石の陽乃さんでも隠したいものなんですか？」

「違うよ。こうして隠していれば、八幡が命令でどかすように言うで
しょ？それを期待してやっているんだよ♪」

前言撤回！この人はどを越した変態だ!!まあ、俺の陽乃さんの事を
言えないけどな。この人をSからDMにしたのは俺だからな。

この人の反応が中々良かったので次は次はとやっている楽しくて
しようがなかった。

「……陽乃。手と腕をどけて全部、見せろ」

「はい♡ご主人様♪どうぞ♡」

うん。いつ見てもこの人の身体って綺麗だよな。女性は体形維持
が大変と聞いていた事があるが、この人は苦勞しているんだろうか？
まあ、いいか。

「それじゃ陽乃。これを」

「それって……」

俺はカバンからある物を取り出した。アナルビーズだ。しかも尻
尾付きだ。

「それじゃお尻を向けろ」

「はい♡」

陽乃さんはお尻を俺に向けてアナルを自分の手で広げた。自分で

広げるあたりドMだからだろう。

俺は陽乃さんのお尻の穴にアナルビーズを入れ始めた。

ぶずううううう……

「ひぎっ!?……お、おしりに、はいつてくる♡」

俺はアナルビーズを全部入れずに半分の所で止めた。そして抜けるギリギリの所まで引いた。

ずううううう……

「ひい!?ど、どうして全部入れてくれないの?」

「……大丈夫ですよ。すぐに入れてあげます……から!!」

ぶずううううう!!

「ひぎいいいい!!?……あ、ああああ……」

しやああああ……

俺はアナルビーズを一気に陽乃さんのお尻の穴の奥までブツ刺した。陽乃さんはあまり衝撃に失禁してしまった。

目の焦点もあやふやになっていた。今にも気絶しそうだな。

「陽乃さん?意識はありますか?」

「あ、ありましゆう……だ、だからつづきしゆて……ご、ごしゅんじんざま♡」

「……ええ。分かりましたよ。それでは今夜も存分に散歩をしましょうか?『メスイヌ』」

「は、はい♡」

「あ、その前に……」

俺は四つん這いになる陽乃さんになろうしたのを止めて、鞄から肉球手袋を出して陽乃さんに渡した。

陽乃さんは手袋を着けると今度こそ四つん這いになった。俺は首輪にリードを陽乃さんに着けた。最早、『犬』だ。

「最後にこれで準備完了だ」

「あ……」

俺はタオルを陽乃さんの目を覆うように巻きつけた。目隠しプレイ夜の公園散歩verだ。

「それじゃまず公園を一回りしますか」

「は、はい♡」

「……違うだろ？ 『メスイヌ』が人の言葉を喋るんじゃない。返事は『ワン』だ！」

「わ、ワン！」

「よしよし。いい子だ」

俺は陽乃さんの頭を撫でた。陽乃さんは嬉しそうに身体を振るわせた。さてと、本人が待ちに待った散歩を始めるか。

五月上旬の夜は中々、過ごし易い。それに人が誰も居ないのがいい。俺がボツチだから誰も居ない方がいいのかもしれないが、今夜は違うと思う。

何故なら俺の横を目隠しされて犬の格好をして四つん這いで歩いてる陽乃さんが居るからだ。

「はあ……はあ……はあ……」

陽乃さんはこの上なく喜んでるのが見て分かる。人の尊厳など踏みにじった格好をしているのに嫌がっていないからだ。

それに股から愛液を垂らしながら誰も居ない夜の公園を四つん這いで歩いている事に顔を赤くして興奮している。

陽乃さんは見られる事に期待している。自分のありのままの姿を誰かに見て欲しいのだ。

だからこんな格好をしているのだ。

「さてと……この辺でいいかな？」

「なにじゃなくて……クウゥン？」

「マーキングだよ。あの木が丁度いいな」

公園の所々に植えてある一本の木に俺達は近付いた。俺は陽乃さんの身体の向きを調整して片足を持ち上げた。

犬が電柱などにする際の姿勢だ。

「ほら、足を持っていてやるからさっさとしろ」

「わ、ワン！」

陽乃さんは力んで必死に小便を出そうとしていた。さっき、アナルをいじっている時に出したからすぐには出ない。

だからここで出させよとしているのだ。

「どうした？出ないのか？」

「く、クウーン……」

「まったくしようがないな」

くちやくちやくちやくちやく……

俺は陽乃さんのマンコをいじり始めた。俺がいじる前にすでに陽乃さんのマンコは愛液で濡れていた。

まったく興奮し過ぎだろ。この人。

しやああああ……

「あ、ああああ……」

陽乃さんは気持ち良さそうに顔を浮かべていた。目元は隠れていたが、声や頬を赤くしているの分かる。こんな格好でこんな事をやらせておいてなんだが、変態が過ぎるな。

「——ちよつとあれ見てよ」

「え？マジで?！」

陽乃さんの小便に気を取られていて気が付かなかった。若い女性、それも多分、女子高校生だろ。しかも二人組みだ。

しまったな。まさか夜のこの公園に人が来るなんてな。いや、待てよ。これは使えるかもしれないな。

「おい。『メスイヌ』、声がして方にちんちんだ」

「はあ……はあ……わ、ワン！」

陽乃さんは声がした方に身体を向けて上半身を起こして見せた。自らの痴態を他人、それも俺以外に見られると分かっただけか陽乃さんの顔は笑っていた。

心底、嬉しそうに。

「嬉しそうだな。だが、向きはそっちじゃない!!」
ばっちん!!!

「ひぎいいいい!?!」

俺は陽乃さんのお尻に平手打ちをした。叩いた際の甲高い音が回りに響いた。お尻には俺の手形が残っていた。

俺は二人組みが居た場所を見たが、そこには誰も居なかった。

「残念だな。折角、お前の痴態を見てもらおうと思ったのに居なくなってしまったな。お前も残念だと思おうよな?」

「……わ、ワン♡」

本当に嬉しそうに応えるな陽乃さんは……。でもしようがないか、俺がこの人の痴態を知って調教してこうなってしまうんだから。

「……散歩、続けるぞ」

「ワン♡」

俺と陽乃さんは一通り公園を散歩した。時間的にはそろそろ帰る時間だな。でもその前に陽乃さんを犯しておきたい。

俺は目隠しを取った。陽乃さんは不思議そうな顔をしていた。

「クウ〜ン?」

「もう犬語はいいですよ。帰る前にしたいんですけど、いいですか?」

「八幡が日々私の許可を取らなくてもいいんだよ。ほら、どうぞ♡」

陽乃さんは立ち上がって手袋を取って自分からマンコを広げて誘ってきた。変態でも誘い方が凄くいい。

「それじゃ……行きますよー!」

「うん♪来て♡」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「き、きたあああ♡」

「で、射精る?」

「びゅるるるびゅるるる……びゅるるる……」

「ひい!?!い、いくうううう♡♡♡……ああああ……♡」

俺はそのまま公園で全裸の陽乃さんを犯した。しかも気絶するまで何度もだ。

相変わらず、この人のマンコは最高の締めまりで俺のチンコの興奮が収まるまで小一時間も掛かってしまった。

帰った俺は気絶した陽乃さんを家に入れるとまずシャワーを浴びせた。公園で色々をやったから陽乃さんは汗塗れだ。

「……あれ?ここ……」

「気が付きましたか?陽乃さん」

「あ、八幡。私、気絶していたんだね……」

陽乃さんはぼんやりだが、どうなったか思い出したようだ。

「とりあえず、汗を洗い流しますね」

「……うん。お願い♪」

俺は陽乃さんに付いている汗をシャワーで流して、身体を洗った。汗塗れだった身体は綺麗になった。

「それにしてもお姉さん、また気絶したんだね。流星は八幡だね♪テクニシャン!」

「それはどうも。これで綺麗になりましたよ」

「うん。ありがとね♪」

俺が風呂場から出ようとすると陽乃さんに腕を掴まれた。

「どうしたんですか?」

「……もう一回、しよ?」

やっぱり陽乃さんの誘う仕草はエロい!!顔を赤くして少し視線を逸らすのが実にいい。てか、どこでそんな技を覚えたんだ?この人。

「……俺の部屋に行きましょうか」

「うん♪」

風呂場から俺に部屋に移動した俺と陽乃さん。陽乃さんは自分からベットのの上に上がり股を開いて見せた。

「それじゃ行きますよ?」

「うん。来て……」

「ずずずず……」

「は、入って、きたっ♡このおおきさ、すき♡つぎはどんなことをする

の？」

「そうですか？だったら、次は動画配信でもしてみますか？顔を隠して、陽乃さんの痴態を全国の男に見てもらうのは？」

「なに、それ。すてきいい♡いぐううう♡♡♡」

「ぐう……!!」

びゅるるびゅるるっ……びゅる、びゅる……

やっぱり射精は気持ちがいいものだな。さらにこんな美人な彼女なら尚更だな。

俺はまた陽乃さんの胸を枕代わりに寝てしまった。うん。最高に柔らかいクツションだ。

しかしそれが不味かった。

翌日、帰ってきた小町が一番に俺の部屋に来てしまったのだ。そこで合体している俺と陽乃さんを目撃してしまった。

それから両親を交えて緊急の家族会議が開かれて、俺と陽乃さんの関係を全部話す事になった。

小町とお袋は喜んでくれたが、クソ親父は美人局には気お付けろと言っただろうと言ってきたが、小町とお袋が黙らした。

それから陽乃さんは家族公認の俺の彼女になった。

でも俺と陽乃さんの関係は変わる事はないだろう。だって、陽乃さんの痴態の事を考えるのが、楽しくてしょうがなくなっていた。

さて、次は何をしようか？

やはり魔王が主導権を持っているのはまちがっている。

どうも、皆さん。比企谷八幡です。陽乃さんとの関係が家族にバレて小町とお袋に色々と聞かれて恥ずかしかった。

小町は「義姉ちゃんが出来た!」と喜び、お袋は「孫の顔が楽しみね!」と気が早過ぎだ!!

クソ親父に関しては何も喋る気にはなれない。何故なら「美人局には気を付けろと言っただろ!」と何度も言ってくるからだ。

まあ、小町とお袋に「ちょっと黙って!!」と言われてそれ以来、黙ってしまった。それから家族の力関係が変化した。

1位 お袋

2位 小町

3位 カマクラ

4位 俺

最下位 親父

と、こんな感じになった。以前と同じで俺は家では飼いネコより下なんだな。でも親父より上なのか前より小遣いがアップした。

お袋曰く、「これであの娘の欲しい物を買ってあげてしつかりと確保するのよ」と言っていた。ただ、社長令嬢の陽乃さんが欲しがる物を俺の小遣いが少しアップしたところで買える訳も無い。

てか、あの人の性癖を知ったら大抵の人間は引く、ドン引きしてしまう。だが、俺は引かない。そもそもあの人をDMへと調教した張本人だからな。

だからこそ、ちゃんと将来の事も考えている。つまりけ、結婚だ!考えただけで恥ずかしい!!だって俺が結婚だよ!?

目が濁っついて捨くれ者の俺が結婚だよ!?!一生俺には縁も縁も無いと思っっていたのがまさか出来るなんて!

しかも相手は美人の年上の陽乃さんだよ!!夢じゃないかと何度思っただ事か!!

でも夢じゃない。スゲー嬉しい!!そしてごめんなさい平塚先生。出合いがほぼ無い貴女より先に俺、結婚します!

まあ、言ったら鉄拳で沈められそうだな。さて、そろそろ起きるか。「あ、おはようございませす。比企谷さん」

「……………」

俺はもう一度、ベットに横になった。さっきのは見間違えだろうか?朝早くから陽乃さんが俺の部屋に居るのは不自然じゃ無い。

問題はそこでは無い!陽乃さんが俺の事を「比企谷さん」と言った事や格好が変だった!!

「もう!比企谷さん。起きたらちゃんと起きてください」
「……………」

もう一度、ベットに横になった。間違いなくあれは陽乃さんだ。陽乃さんが俺の事を「比企谷さん」と言っていた。

一端、それはおいて置くとしてまず落ち着いて整理しよう!うん、それがいい。

まずここはどこだ?俺の部屋だ。

今はいつだ?日曜の八時だ。

目の前に居るのは?俺の彼女の陽乃さんだ。

陽乃さんの今着ている服はなんだ?ナース服だ。

よし!分からん!それにしても陽乃さんのナース服は中々似合っているな。薄ピンクかと思っていたら真っ白、そう汚れ一つ無い真っ白!大事なので二回言った。

前は確かメイドだったな。

陽乃さんのコスプレを朝から見られたのは気分がいいな。いや、何か間違っていないか?

「…………陽乃さん。一体何をしているんですか?」

「もう!折角、お医者さんごっこで遊ぼとしているんだから乗ってよ!」

「それはすいません。それとお医者さんごっこではなくナースごっこの方がいいのでは?」

「そうだね!お医者さんは居ないもんね♪」

どことなく上機嫌な陽乃さん。何か良い事でもあったのだろうか？聞いてみるか。

「何か良い事でもあったんですか？」

「ん？良い事なら今から起こるんだよ。八幡と二人つきりなのは久しぶりだから今日はいっぱい楽しも♪」

そう言えば、陽乃さんとの関係が家族にバレてから一ヶ月近く何もしていなかったからな。ある意味、放置プレイと言えるかも知れないな。

それにしても陽乃さんのナース服はエロい!!それは何故かと言うと身体のラインがくつきりと分かるからスタイルのいい陽乃さんの美しさに更にエロさが加われれば最早、最強だ!!

……俺は何を考えているんだ？朝早くだから頭が混乱しているのか？俺はもう一度陽乃さんの姿を見た。

頭にはナースキャップ、服は真っ白なナース服、そして足は何も着てはいなかった。つまり、素足だ！そう素足だ!!

大事だから二回にしたぞ。

足の無駄毛をしっかりと処理した陽乃さんの足はそれは綺麗だった。正直、あの足を眺めているだけで半日は過ごせそうだ。

「さて比企谷さん！目が覚めたなら布団から出てください！」

「ちよつ!?ま、待つてください!!」

陽乃さんは俺から強引に布団を剥ぎ取った。今、剥ぎ取られると不味いんだよ！しかし俺の抵抗も虚しく布団は奪われた。

「……ん？ふくん……なるほどね。比企谷さんがどうして布団から出て来ないかと思ったらそういう事だったんだ」

「……………」

陽乃さんは俺のズボンの盛り上がった場所を見てそう言ってきた。そう、俺は今まさに朝立ちしていた。だって！朝からナース服の陽乃さんが居るんだぞ!!

それは朝立ちしてしまう!!しようがないだろ、生理現象なんだから!!

「どうしたのかな？比企谷さんのズボンが脹らんでいますよ？」

「……分かってて言っていますよね？」

「ふふっ……それじゃあズボンを脱ごうか♪」

「ちよっ!?待って!!」

陽乃さんは問答無用に俺のズボンを脱がした。すると俺の朝立ちのムスコがそり立っていた。朝から元気がいいな、お前は。

そんなムスコを見て陽乃さんはニヤリと笑っていた。一瞬、背筋がゾクツとした気がした。ちよつと怖いな。マジで……。

「比企谷さんのパンパンに腫れていますね。ここは私が腫れを治してあげますね♪……はむっ」

そう言って陽乃さんは俺のムスコを口に入れた。陽乃さんにフェラは何度かしてもらったが、今回は何故か凄く気持ちいい!!やっぱりシチュエーションだろうか？

ぺちやくちや……ぺちやくちや……

メイド服の時も良かったが、ナース服というのも悪く、いや良いものだな!!ヤバい!?そろそろ射精そうだ。

俺は思わず陽乃さんの頭を抑えて深く啜えさせた。

びゆるるるびゆるるる……びゆるるるびゆるる……

朝早くから気持ちのいい射精が出来たぜ。陽乃さんは俺の精子を零さず全部口に留めた。そして顔を上に向けて精子を飲み干した。

「……んっ……はぁ……ホント、独特な苦味があつて凄く癖になるよ♡」

「……ナースのキャラがブレていますよ」

「……もう比企谷さん!いきなり顔を抑えないでください!!ビツクリするじゃないですか。それじゃ比企谷さん、シャワーでも浴びてきてください」

「はっ……」

陽乃さんの言う通りに俺は風呂場に向かう事にした。だって、射精して股の所がベタベタとして気持ち悪かったからだ。

風呂場に行く途中で気が付いたが、今比企谷家には俺と陽乃さん、カマクラしか居なかった事が分かった。

日曜の朝早くからどこに出掛けたんだ？ウチの家族は？と考えているとある事を思い出した。

それは両親は仕事が忙しく会社に泊まる事と小町は昨日から友達の家泊まると言っていた事だ。すっかり忘れていた。

ガチャ……

風呂場の扉が開いてナース服の陽乃さんが入って来た。ナース服の陽乃さんが。

大事なので二回と言う事だ。それにしてもどうして入って来たんだ？すると陽乃さんが俺の背中にびったりと張りついた。

柔らかい二つのお山が服越しでも俺を興奮させてくれる。ありがとう……陽乃さんの二つのお山よ。

「もう比企谷さん。さっき射精したばかりなのにもうガチガチに勃起していますね。ナース服に興奮しているんですか？変態ですね♪」

「……今日は結構、攻めてきますね？攻めるのは苦手なんじゃないか？たんですか？」

「うん、苦手だったよ。でもメイド服の時に気が付いたの。服から入ってキヤラになりければどうにかなるんじゃないかってね♪」

なるほどな。プレイのキヤラになりきるか。まあ、確かにこれまでプレイを考えれば、そういう事に辿り着くのか。

でも悪い気はしないな。偶には陽乃さんが攻めでもいいか。俺はたっぷりだと飽きてきてしまうかもしれないからな。

「良いですね。偶には陽乃さんが攻めても」

「おっ！いいの？八幡」

「ええ、構いませんよ。俺ばかりだと……まあ、不公平ですからね」「ふふっ……それじゃ今日は徹底的に私が八幡を攻めさせてもらおうかな♪」

陽乃さんがそう言うのと右手で俺のムスコを抜き、左手で俺の乳首を摘みいじり始めた。二箇所同時かと思ったが違った。

「はむっ……」

左耳を甘噛みしてきた。陽乃さんの柔らかい唇の熱が耳を通じて脳に電気を送っているように感じた。

ヤバい!?もう射精る!!

びゅるるるびゅるるる……びゅるるるびゅるる……

陽乃さんも中々いい感じに攻めてくるな。マジで覚えてきたんですか?その技。

「比企谷さん。たくさん射精しましたね♪そんなに気持ち良かったですか?」

「……はあ……はあ……そ、それはもう……」

「そうですか。では、今度の攻めはどうですか?がぶっ!!」

「痛っ!?!」

いきなり陽乃さんが肩に噛み付いて来た。結構、強めの力で。流石に痛い!?だと言うのに俺のムスコは射精したばかりだと言うのにガチガチに勃起していた。

あれ?もしかして俺にも陽乃さん同様にMツ気があるのか!?まさか陽乃さんはそれを見越して今日は攻めているのか?

いや、そんなはずは無い。なぜならこの人はドを越したMなのだから。

例え魔王から白衣の天使にクラスチェンジしたとしてもこの人の本質は変わらない。変わるわけが無い。

それにしてもそろそろヤバいな。射精してしまう!!

「ぐっ!!」

びゅるるるるびゅるるる……びゅるるるびゅるる……

またしても射精してしまった。偶になら陽乃さんに攻められてもいいかもしれない。それにしても朝から連続でよくもまあ射精出来るものだな。

「漸く比企谷さんの興奮も落ち着きましたね♪」

「そ、それはこんだけ射精せば落ち着きますよ……」

いや〜ホント、よく射精したよ。それにしても陽乃さんは中々キヤラになりきっているな。今日は改めてプレイの際の服装が重要だと

認識できたな。

コスプレエッチに嵌まってしまったな、これは。

「比企谷さん。さっきの言葉、撤回しないとイケませんね」

「え？それは一体？……あ……」

陽乃さんに言われて何の事かと思っただらいつの間にか俺のムスコがまたしても勃起していた。お前!! さっき射精したばかりじゃないか!?

まだ射精したりないのか!!

「比企谷さん。手を壁に付いてお尻を突き出してくれますか?」

「壁に手を? お尻を突き出す?」

「ちゃんと綺麗にしないとイケませんよね? それが例え不浄な穴でも」
♪

俺は陽乃さんの指示に従って壁に手を付いてお尻を突き出した。はて? これで何をする気だ? 陽乃さんは?

それに不浄な穴? それってもしかして……!!?

れろっ……

「ひい!? ちよっ?! 陽乃さん!!」

れろっ……れろっ……

「ひいひいひい!」

今、陽乃さんが何をしたかと言うと俺のお尻を舐めたのだ。それもお尻の穴の付近をだ。流石にそこは汚いですよ!?

不味い。また射精してまう!!!

びゅるるるびゅるるる……びゅるるびゅるる……

……今なら同人誌に出てくる女騎士の気持ち分かる気がする。まさに「くっ殺せ」だ。お尻を攻められるのがこんなにも屈辱的だとは思わなかった。

改めて思う。俺はSだと。

風呂から出ても陽乃さんの攻めは続き、結局昼まで絞られるだけ絞られた。

ナース服にどんだけ興奮しているんだよ!?! 俺!!

やはり俺がSで陽乃さんがMの方がいいと再認識出来た。次は俺

が泣き出すまで攻めてやる!!!

やはり魔王を調教し直すのはまちがっている。

『デートに行きます』

「あ、はい」

『デートに行きます』

「え? いや、ちゃんと聞こえていましたよ。陽乃さん」

陽乃さんにアナル攻めを受けてから数日後の夜にいきなり電話が掛かってきて何を言うかと思ったら『デート』に行くこと事だった。

待てよ。そもそも俺って陽乃さんと一度もデートに行った事無いんじゃないか? 恋人になっても変態プレイしかしていないな。

デートなんて言った事も行った事も無い。

『それならいいよ八幡』

「それでどこに行くんですか?」

『ふふっ♪それなら私が考えているから楽しみにしてよ』

「そ、そうですか……」

なんか不安しかない。大丈夫だろうか? それにしても最近の陽乃さんは調子に乗っていると思う。いつの間にか陽乃さんの考えた変態プレイをやっている。

だからこのデートで分からせてやるつもりだ。誰が主人で誰がイヌかを。

楽しみにしていますよ。貴女だけを楽しませたりしませんよ。俺にだって考えがあるんだかな、陽乃さん!

『それじゃ明日、昼前に駅前に集合で♪』

「え? あ、明日?! ちょっと陽乃さん!」

陽乃さんは俺が言い返す前に電話を切ってしまった。まったくあの人はこれは改めて調教しないとイケないようだな。楽しみだな。

そして翌日、俺は駅前で陽乃さんを待った。俺の服装は小町が準備したものだ。最近の若者に人気な服装だそうだ。

俺にはイマイチ分からないが。それにしても待ち合わせ一時間前に来るのはどうかと思うが？

女性を待たせる男はカッコ悪いと小町が言っていたが、どうカッコ悪いんだ？

「はちまくん♪お待たせ〜」

「陽乃さん……」

陽乃さんが来たか。てか、陽乃さん集合時間の三十分前に来たよ。早くないですか？

「おっ……お姉さんを待っているなんてポイント高いぞ〜」

「そうですか。それは良かった」

「そこは『今来たところだよ。キラッ』と言う所じゃない？」

「俺がそんな事を言うと思ったんですか？」

「うん。全然♪」

だと思つたよ。それにしても陽乃さんの今日の格好は普段のイメージからは想像し難いな。六月が近いから半袖なのは分かる。

問題は下。なんとスカートを着ているんだ。陽乃さんのイメージだとジーンズとかズボンくらいだと思つたが今日は違っていた。

すると陽乃さんは俺の腕を引っ張って人気のない場所まで連れて来た。

「八幡。実はね、今日……ノーパンなんだよ♪」

「……はあ!?!じよ、冗談ではないですよね?」

「穿いてきていないよ。だから今、すごくドキドキしているんだよ。下、愛液で洪水だよ♡」

俺は陽乃さんから告げられた事に頭痛がしてきた。いや、確かにこの人の変態だと思つたがまさかノーパンをこんな昼間からするとは思ひもしなかった。

やっぱり調子に乗っているな。これはキツイ調教が必要だな。

そう思っていると陽乃さんは俺にピンク色のリモコンを渡してきた。

「……………これってもしかしくなくても……………」

「うん♪ピンクローターのリモコン♡今日のデートはこれでいっぱいイジメてね♡♡♡」

「……………」

俺はリモコンのスイッチを切って陽乃さんに返した。陽乃さんは意外だったのか少しの間、固まっていた。

「……………え？な、なんで返すの？八幡」

「最近、陽乃が調子に乗ってるから今日は改めて調教し直す。誰が主人なのかをハッキリさせてやる」

「わ、私のご主人様は八幡だよ？」

「ああ。けどな、イヌが主人に命令するとか主従関係が逆転しているよな？だからリモコンを返したんだよ」

こここの所、プレイは全て陽乃さんが主導権を握っていた。夜の公園散歩プレイに拘束プレイなど全部陽乃さんが考えて陽乃さんだけが満足していた。

それでは駄目だ。プレイの幅を広げるため俺は攻められるのを甘んじて受けたが、それが間違いだった。

「今日、ローターをONにしたらしばらくの間、膣中出しはお預けだ」
「……………え？」

陽乃さんは絶望したような顔をしていた。陽乃さんが好きなのは膣内出しだ。射精の時の絶頂が一番、気持ちいいらしい。

それをお預けになれば、この人は俺の命令に絶対服従する。

「お、お願い!!八幡、それだけは止めて!!」

「だったら俺の命令に従うよな？」

「し、従うから!だから……………!!」

「なら今日一日、俺がいいと言うまでローターのスイッチはOFFのままだ」

「それは……………」

陽乃さんは俺の言った事をすぐに理解した。自分でセッティングしたのにそれで気持ちよくなれないのだからな。スイッチを入れればお預けをくらってしまうからな。

まさに生殺し状態だ。俺は陽乃さんの耳に近づき小声で言った。

「だけど、今日一日頑張れたなら夜にたっぷりと瞳中出ししてあげるぞ」

「は、はい♡」

陽乃さんは嬉しそうに応えた。これでいい。俺が主人で陽乃さんがイヌ。

さて、お互いに我慢し合おうか。夜はきつと凄い事になるぞ。

陽乃さんが用意したデートプランに従って俺達は行動した。まず服を買いに行った俺のを。

陽乃さんが改めて俺に似合う服を選んでくれた。服を選んでいる間、陽乃さんは少し内股になり震えていた。

恐らく早く夜になってもらいたのだらう。気持ち良くなりたいたいがローターを使えば夜の楽しみがなくなってしまうから必死に我慢しているのだ。

服を買った後は軽く昼食を食べて最近人気の学園ラブコメの映画を見た。その際に陽乃さんは俺の手を握ってきた。しかも恋人つなぎだ。

スベスベで柔らかい陽乃さんの手を握っていると早く犯したいと思えてくる。

早くグチャグチャにしたい。

そして最後にやって来たのがラブホだ。ラブホだ。大事だから二回だぞ。

まあ、予想はしていた。ラブホが近付くにつれて陽乃さんはどこか嬉しそうにしていたからだ。でもいいか。来た事無いからな。

陽乃さんはラブホの部屋に入るなり服を脱いでベットの所でM字開脚をして準備していた。うん、エロい。

「は、八幡！もういいでしょ!?!ここまで我慢したんだから!!」

「ええ、そうですね。でも八幡?」

「ご、ご主人様!!」

「いい子だ。陽乃」

「っ!~~~~~／／／」

俺が陽乃さんの頭を優しく撫でてやると頬を赤くして喜んだ。ア
メとムチって大切だな。俺は陽乃さんのマンコにあるピンクロー
ターをコードを引つ張って出した。

「ひぎい!」

「それじゃそろそろ始めるか」

「う、うん」

俺はまずラブホの部屋に置いてあつた本格使用の手錠で陽乃さん
の腕を固定した。手錠されてこれから起こる事を想像してか陽乃さ
んの顔はとても喜んでいた。

「これだよ!これ!この拘束されて身動きが取れない感じがとつても
好きだよ。私!」

「そうですか。でもこれから地獄を味わう事になるんですよ?その余
裕、どこまで続きますかね?」

「君と居れば地獄でも楽しく過ごせるよ!」

「……その格好でなければ、凄くいいですけどね」

手錠で拘束されている状態ではとてもカッコよくない。まあ、別に
いいか。それよりも早く陽乃さんを犯すか。

「行きますよ」

「う、うん。早く来て♡」

「ずずずずつ……ぱんっ!

「き、きたああああ♡♡ひ、久しぶりの!八幡のおチンチン♡奥まで!!」

「おおおおお……凄い締め……!!」

久し振りとは言え、なんて締りのいいマンコだ。それじゃここまで
頑張ったご褒美に膣内出ししてあげますか。

「それじゃ射精すぞ!」

「き、きてえええ♡な、なかにだしてえええ♡♡」

びゅるるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いくううう♡♡……なかだし、さいこー♡♡」

陽乃さんはだらしがないアへ顔で絶頂した。普段からは想像もつかないほどのだらしがない顔だな、これは。

でもこの顔を見たからなのか全然、勃起が収まらない。まだ陽乃さんの膣内で固いままだ。俺は腰を引いてから突き出した。

ずずずずずつ……ぱんっ！ずずずずずつ……ぱんっ！ずずずずずつ……ぱんっ！

「ひい!?ま、まってーいま、いったばかり、だから……」

「言ったよな。地獄を味わってもらうつて……これを使ってみるか」

俺は陽乃さんがここに来るまでマンコに入れていたピンクローターを陽乃さんのクリトリスに密着させた。

「ま、待って!?」

「駄目だ!!これからだろ?」

ヴ——ツ

「ひぎいいいいい♡♡あ、あたま……まつしろに、なる♡♡♡」

陽乃さんはローターの振動が相当、凄いらしく身体がブリッチしているように仰け反っている。それにローターの振動が俺の方にもきているのでいい刺激になっている。

二回目の射精が来そうだ。もう一度、膣内出しだ!!

「二回目だぞー!陽乃!!」

「き、きてえええ!!なかに♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるびゅるるるつ……びゅるるびゅるるつ……

「い、いくうううう!!……あああ……」

陽乃さんはまたアへ顔になった。ああ、やっぱり最高に興奮させる顔をしてくれるな陽乃さんは。だからいじめたくなる。

陽乃さんのマンコからチンコを抜くと少し精子が逆流してきた。

俺は手を子宮の上あたりに置いて少し強く圧をかけた。

ぽこつ……ぽこつ……

「しゃ、しゃーめんがでしゃう♡♡」

呂律が回っていない陽乃さんは凄くエロい!!俺はさらに強く圧をかけて陽乃さんの子宮から精子を逆流させた。

「ひい!?しゃーめん、ぎやくしゅうで……いくうう♡♡」

ぷしやああああ!!

陽乃さんは絶頂と同時に潮を噴いた。それにしてもよく噴き出るな。陽乃さんの身体は震えてからベットに倒れこんだ。

陽乃さんは痙攣していた。少しやり過ぎただろうか?いや、これくらいかこれ以上が陽乃さんにとっては丁度いいくらいだ。

「……それにしても元気がいいな」

俺は自分のチンコを見てそう言うしかなかった。だって二回も射精したのにまだ固く勃起しているんだ。どんだけ元気がいいんだよ!?

いや、今の陽乃さんを見て元気がなくなるなんて事は無いな。

全裸で手錠で拘束されてアへ顔をしている陽乃さんが居るんだぞ!これで勃起しない男はゲイの可能性が高い!!

俺は陽乃さんの拘束を解いてから軽く身体をタオルで拭いてから眠る事にした。流石にデートなんて慣れない事をした所為か疲れていた。

「……お休みなさい。陽乃さん」

俺は陽乃さんの隣に転げて寝る事にした。それにしても陽乃さんの寝顔は凄く綺麗だな。これを俺は独り占めできている事にちよつと満足していた。

ささて、寝るか。

やはり魔王とラブホに長居するのはまちがっている。

正直、驚いている。まさか俺がラブホで一夜を過ごす事になるなんてな。しかも隣には彼女で美女の雪ノ下陽乃さんが全裸で寝ている。そしていつの間にか俺の左腕を枕にしている。いや、それは別に構わないが、いい加減退いて欲しい。腕が痺れてきた。

「……………えへへ……………」

しかしこれだ。一体、どんな夢を見ているんだ？時折、顔をニヤつかせて笑っているのだ。そんな顔を見せられたらまたいじめたくなるじゃないですか、陽乃さん。

それにしてもラブホの部屋って色々凄いな。天井には何故か鏡があるし冷蔵庫の中には様々な飲み物が準備してある。

さらに避妊用のゴムまで二ダースと大人のオモチャもすっかりとある。凄いなラブホ。凄すぎだろラブホ！

「……………んんっ……………あ、おはようございます。ご主人様♡」

「陽乃さん。普通に話してください。落ち着かないので……………」

「そう？昨日はあんなに攻められたのに八幡の顔を見たら火照ってきちゃった♪」

「そうですか。俺も陽乃さんの顔を見たらまたしたくなりました」

「うんうん♪八幡のココ、もう元気だね♡」

陽乃さんは布団で隠れている俺のムスコを手で優しく撫でてきた。陽乃さんの柔らかくスベスベの手に触られただけで少し興奮してします。

陽乃さんも俺のを触ってか顔が赤くなっていた。その顔、凄く好きですよ。

「……………ちゅっ……………」

陽乃さんが俺の頬にキスしてきた。ああ、ヤバいな。今すぐにでも犯していじめて無様なアへ顔にしたいと思ってしまう。

陽乃さんが身体を起こすと布団によって隠れていた裸体があらわになった。胸は巨乳と言っていいくらいのおおきさだし括れは細くお尻は安産型だと分かる。

肌は白くきめ細かい。普段からしつかりと手入れをしている証拠だ。だからこそなのか？この美しい裸体を汚したいと思うのは。

「？……どうしたの？」

「……いえ、何でもありませんよ。俺が下になるんで好きなように腰を振ってみてください」

「うん♪朝の濃い精子。膣内にたくさん射精してね♡♡」

陽乃さんは布団を退かすと俺のムスコの上に跨った。陽乃さんのマンコからは愛液がポタポタと垂れていてエロかった。

陽乃さんはゆっくりと腰を下ろしてきた。

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「ひいいい♡♡朝からずくくっ……おおきくてかたい♡♡」

凄いののはこっちのセリフだ。陽乃さんのマンコはギュウギュウに締め付けてくる。これではすぐにでも射精しそうだ!!

「ずずずずず……ぱんっ!ずずずずず……ぱんっ!ずずずずず……ぱんっ!」

「お、おくにこっこっ♡あたっている♡♡」

「陽乃!で、射精る!どこに射精して欲しい!!」

「な、なかに♡♡ドピユドピユだしてえええ♡♡♡」

「ぐっ!?射精る!!」

「びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるるるるっ……」

「んんっ……!!」

射精と同時に陽乃さんは前に倒れこんで俺にキスしてきた。柔らかい唇に押し付けられた胸、綺麗に整った顔。

「これだけ興奮して射精が止まらない。」

「びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるるるるっ……」

「ぐ、ぐ主人様のせいし♡♡が子宮であばれている♡♡♡」

「陽乃さん。エロすぎ……」

いや、マジで!エロい!膣内出しの際のうっとり顔がなんともたまらない。今更だが気になる事がある。この部屋はいつまで居られるんだ?

半日は経ってはいないだろうが、そろそろ出た方がいいのか?

「陽乃さん」

「うん？何、八幡」

「ここ、いつ出るんですか？」

「いつって……いつか？」

何故、疑問系？そもそも考えていなかったよ!!まさか……だよな。

「もしかして今日一日、ずっとここに居るつもりですか？」

「ずっとは流石に居すぎだよ」

よ、よかった。休みだからと言ってラブホに一日引き籠もるかと思つてしまった。

「もう半日はここに居るつもりだよ♪」

……前言撤回だ。もう半日は居すぎだと思う。でもいいかもっとたくさんいじめられるな。でもそれをする前にする事がある。

「陽乃さん。風呂、入りませんか？」

「そうだね。お互いに臭いしね♪」

昨日の夜に朝起きてしたのもだからお互いの汗や愛液、精子の臭いが部屋中からする。色々混じつて臭い。

流石はラブホだ。結構、いい風呂だな。俺と陽乃さんが入っても大分隙間がある。シャンプーもいいものだ。これならしっかりと洗い流せそうだ。

それはいいとして今、俺は非常に興奮している。それは何故かと言うと。

むにゅむにゅ

「どうかな？私のおっぱいスポンジは？」

「さ、最高です!!」

「そっか♪ならもつとしてあげるね♪」

そう俺は今、陽乃さんの胸——おっぱいで身体を洗われている。素晴らしきかなおっぱいスポンジ!!

泡がいい感じにヌルヌルして滑る。それに立った乳首が背中に擦れてさらに興奮してしまう。一体、陽乃さんはどこでこんな技を覚え

たんだ？

「ネットで色々調べているんだよ。八幡が喜びそうな事を♪」

「……ナチュラルに人の心の中を読まないでください」

「八幡の背中が語っていたよ？」

「えっ！マジで!!？」

背中が語っていた!?!?どんな背中だよ!!?てか、陽乃さんはそれが分かるのか？

「まあ、冗談なんだけどね♪背中じゃなくて八幡のガチガチに勃起したおチンチンを見れば一目瞭然だけどね♪」

「……ああ。なるほど」

それは一目瞭然だな。早く陽乃さんの膣内に挿入したくてしようがなかった。入れては引いてを繰り返してこの人が感じるのを見ていたかった。

そして膣内出しをして陽乃さんが絶頂でアへ顔になるのをずっと見ていたかった。

「早く膣内に出したい？」

「ええ。早くグチャグチャに犯して膣内出しでアへ顔にしたいです」

「／／……わ、私も早く挿入して欲しい♡」

顔を赤くした陽乃さんは俺から離れたら壁に手を付いてお尻を俺に向けて左右に振って誘ってきた。マンコからは愛液が溢れていた。

俺は陽乃さんの腰を掴んで挿入した。
ずずずずずつ……ぱんっ!!

「き、きたああああ!!おくまで届いている♡♡」

「さつきもしたのに陽乃のマンコはいい締め付けだ！」

「あ、ありがとうございます!ご主人様♡♡」

俺は陽乃さんの背中にぴったり張り付き脇から手を伸ばして胸をわし掴んだ。指が胸に食い込むくらいに。

「ひいいい!?!む、胸♡指が♡♡」

「痛いのは好きだよな?陽乃」

「は、はい♡しゅきです♡♡だから!もっど!!」

陽乃さんは更に痛みを求めてきた。だから俺は乳首を引っ張った。

取れるのではないかというくらい強く。

「ち、乳首♡取れちゃう♡でも！いい♡♡」

「自分だけじゃなくて俺も気持ちよくしてくれよ？」

「は、はい♡ご主人様♡♡」

ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっずっ……ぱんっ!!

「うひい!?お、おくにコツコツ♡あたって♡♡いつちやう♡♡♡」

「まだまだ……はむっ……」

左手は乳首を引つ張り右手でクリトリスを軽くすり潰すようにして右耳に噛み付いた。

「ひいいい!?そ、そんなにいっぺんに♡♡しえめらへらた♡♡がまん、できしやい♡♡」

「我慢する必要があるのか?ドMの変態女」

「ひいいい!?」

ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!

「そ、そしやに……おくに♡こっこっ……ししやら♡♡あしやま、まっしろに♡♡♡」

身体をいじると同時に言葉で徹底的に攻めた。すると面白いくらいに膣内がギュウギュウ締め付けてきた。

「陽乃。愛している」

「……へ?」

びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるびゅるるっ……

「い、いぐうううう♡♡しえーしが♡しきゆうで♡♡あ、あばれてる♡♡♡」

「これ、ヤバイ……!!」

射精と同時に陽乃さんは絶頂に達したようだ。膣内が蠢いている。俺から精子を搾り出そうとしているようだ。

びゅるるるびゅるるるっ……

俺はあまりの気持ち良さに連続で射精してしまいました。これは我慢出来るわけ無い。

「ひいひい♡♡ましや♡いぐううう♡♡………」

陽乃さんは俺の連続射精に更に絶頂したようで気絶した。俺は気絶した陽乃さんのマンコからチンコを抜くと俺が射精した精子が逆流してきた。

ぽこっ……ぽこっ……

「うわあ……」

思わず自分の射精した精子の量にドン引きしてしまった。陽乃さんのデートで性欲を抑えていたといえ昨日、それなりに射精したのに陽乃さんのマンコから逆流した精子の量は昨日射精したより多かった。

俺は陽乃さんの身体を洗ってからベットに運んで目を覚ますまで横になって休んだ。俺も頑張りすぎた。

一体、どれくらい寝ただろうか？結構熟睡したな。それにしても妙に下半身と言うより股間の辺りが生温かい何かに包まれているようだ。

「はむっ……んんっ………」

ぐぢゅぐぢゅ……

何か厭らしい音がするな。それとやっぱり股間に違和感がある。俺は起きて布団を捲った。そこには俺のチンコを口いっぱいにはお張る陽乃さんの姿があった。

陽乃さんが俺が起きた事に気が付いたようで口を放した。

「ふはあ……おはようございませす。ご主人様♡」

「……そのまま続けろ」

「はい♡♡……はむっ……んんっ♡」

陽乃さんは顔を上下させてチンコを口で味わっていた。ここまで散々射精したと言うのに俺はまた射精したと思ってしまった。ヤバい、限界だ!!

俺は起き上がって陽乃さんの頭をがっちり固定した。口、限界までチンコをほお張らせた。

びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるびゅるるっ……

「んんっ!!んんっ♡♡」

射精した。陽乃さんの口マンコに注ぎ込んだ。陽乃さんは苦しそうにしていたが同時に嬉しそうに笑っていた。

射精が終わると俺はチンコを陽乃さんの口から離れた。

「精子は飲まずに口の中を見せろ」

「ああ……」

「うわあ……えげつない量だな」

自分で射精した精子の量にドン引きしてしまった。陽乃さんの口の中は俺の精子で溢れていた。

「……飲んでよしー」

「んんっ……あはあ♡♡苦くて口の中にまとわり付くドロドロが凄く好き♡♡」

陽乃さんはどこぞのグルメポーターのようなセリフを言った。

これは女性ならではの感想だろうな。

それにしてもこんな陽乃さんを見たからかまたしても勃起してしまった。俺は陽乃さんを犯した。犯して犯して犯し続けた。

気が付いた時には陽乃さんは俺の精子まみれになっていた。

そして俺と陽乃さんは身体をまた洗ってからラブホを出た。その時、外は日が沈みかけていた。どんだけ居たんだよ!?

今回の事でわかった事がある。陽乃さんとラブホに居続けない方がいい。ガタが外れて獣になるからだ。

でも小町や両親の事を考えないでいいからたまにはラブホでするのもいいかもしれない。

やはり魔王が引越しするのはまちがっている。

うっす。比企谷八幡だ。陽乃さんとラブホで一夜を過ごしてから少し日が経ち夏に入った。そんな時に俺は、とあるマンションでダンボールを開いていた。

何故、ダンボールを開いているかとうと一言で済ませるなら引越しだ。ただし俺がここに引越すわけではない。

そもそもこのマンションは凄く家賃が高い。バイトをしていない俺には到底借りる事など出来ない。それに例えバイトをして住むならアパートの方が断然安いからそっちにする。

では、誰の引越しかと言うと。

「八幡。そっちが終わったら少し休憩しよ」

「分かりました。陽乃さん」

そう。このマンションに住むのは俺の彼女の雪ノ下陽乃さんだ。それにしても不思議だ。どうして陽乃さんが今更、一人暮らしをしようとしているのか？

大学生が一人暮らしをするには少し遅い気がする。それに一人暮らしなどしなくても実家暮らしの方が楽なのではないだろうか？聞いてみるか。

「陽乃さん。聞いてもいいですか？」

「うん？何かな八幡」

「どうして今更一人暮らしをしようと思ったんですか？来年には大学を卒業しますよね？だから一人暮らしをするには遅過ぎるんじゃないかと思って……」

「社会勉強の一環だよ。それに大学を卒業したら一人暮らしする予定だったのを少し早くしたただけだよ」

「……………本音は？」

「この部屋を誰にも邪魔されないご主人様とのイチヤイチャ部屋にするためだよ」

!!
こ、この人は凄い事を言ったな。それにしてもいい笑顔だな、おい

「それでも卒業してからでも良かったのでは？」

「だって……私も八幡も実家暮らしじゃない。それだと激しいプレイが出来ないじゃない。でもここなら防音対策がしっかりしてあって、どんなに大声をだしても隣に聞こえないから安心して出来るでしょ」

「ああ……なるほど」

確かに俺の部屋でしたら小町や両親に聞こえてしまう可能性がある。最悪、声が外に居る人に聞こえてしまう。

陽乃さんの家には使用人が居るそうだから絶対に聞かれてしまう。てか、使用人が居るとかどんだけ凄いだよ！雪ノ下家!!

「それじゃもう一頑張りしよっか？」

「そうですね。終わらせますか」

「……これが終わったらしようね♡」

「今日もたっぷり膣内出してやるからな。陽乃」

「は、はい♡ご主人様♡♡」

俺と陽乃さんは残りのダンボールを開けて整理をした。そして終わった頃には夕方になっていた。まあ、今日はこれで終わりだ。

荷物はまだまだあるので残りは明日だろうな。

「どうかな八幡？」

「気持ちいいですよ」

俺と陽乃さんは汗をかいたので風呂でさっぱりする事にした。そして俺は今、陽乃さんのエロエロなナイスボディで洗われている。

いわゆるおっぱいスポンジだ！おっぱいスポンジだ！大事だから二回言ったぞ！

むみゅむみゅ……むみゅむみゅ……

陽乃さんの胸は大きさ柔らかさ共に申し分ない。それに立った乳首が擦れて興奮させてくる。これはヤバ過ぎる!!

「んっ……はぁ♡んんっ……んっ♡はぁはぁ♡♡んんっ♡♡」

乳首が擦れて感じている陽乃さんのエロい声が更に興奮させてく

る。さつきから射精したくてギンギンに勃起している。

てか、もう我慢出来ない。俺は立ち上がった。

「陽乃。壁に手を付いて尻を俺の方へ向ける」

「は、はい♡どうぞ、ご主人様♡♡」

陽乃さんは壁に付いてお尻を俺に向けた。相変わらず、エロい尻だ。俺は腰を両手で掴んで一気に奥まで挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「き、きたああああ♡♡い、いきなりっ……おくまで♡♡」

「おおおお……すっ!!」

陽乃さんのマンコは凄く締め付けてくる。早く射精した!俺は腰を前後して引いては突き出すを繰り返した。

ずずずずずつ……ぱんっ!ずずずずずつ……ぱんっ!ずずずずずつ……ぱんっ!

「ひいいいい!?ま、待って!は、はげしい♡♡あたま、まっしろに♡♡」

「もっと感じて派手に行けよ!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひぎひぎ♡♡♡」

「射精るー!」

びゆるるるるびゆるるる……びゆるるるびゆるる……

「い、い、い、い♡♡♡……せいし、なかであばへる……♡♡♡」

「ふう……すつきり」

風呂で一回射精して汚れを洗い流してからもう一度陽乃さんを犯した。夕ご飯はデリバリーにする事にした。ご馳走さんです陽乃さん。

それにしても陽乃さんの今の格好が気になっしょうがない。

「……陽乃さん。聞いてもいいですか？」

「うん？ 何かな八幡」

「何です、その格好は？」

「結構、似合っているでしょ？」

陽乃さんは制服を着ていた。大学は私服なので高校の時の制服だ。それにしても二十歳過ぎの人が今更制服を着るとかちよつとどうかと思う。

「ギリギリアウトです」

「えええええ!!? まだまだ行けると思っただのに……」

「いや、それは無理でしょ。大学生って知っているから高校の制服を着るとコスプレしているだけに見えます」

「そっか……これで八幡と高校生SEXごっこしたかったのにな……」

と、陽乃さんは残念そうな顔を作って俺の事をチラチラと見てくる。そんな顔してくると犯したくなるじゃないですか。

「いいですよ。やりますか？」

「えっ? いいの? じゃあ、折角だから禁断の近親相姦ごっこをしよう好きででしょ?」

「いや、俺が好きなのは妹であって姉ではないんですけど……」

『禁断の姉弟愛。知られざる二人の秘密』は何かな?」

「ど、どうしてそのタイトルを……!!」

そのタイトルは陽乃さんと付き合いだした時に見つけたAVのタイトルだ。年上の陽乃さんといつか大人な関係を目指して頭の中で妄想を膨らませていたものだ。

あれは俺のPCの隠しファイルの中にロックを掛けていたはずなのに!?! どうして陽乃さんが知っているんだ!?!

「引越し祝い代わりに小町ちゃんから教えてもらったんだ♪」

「こ、小町いいいいいい!!?」

あのタイトルを知るのは小町以外にありえない。両親は基本、俺の部屋には入ってこないからな。その点、小町はお構いなしに入ってくるからな。

俺の黒歴史の1ページを知られてしまった。

「それじゃ初めよつか。弟の八幡♪」

「……わ、分かりましたよ。ね、姉さん……これ、恥ずかしいですよ!!」
「~~~~っ?!いいよ!八幡!!その恥ずかしがっている顔、凄く好き♪
ほらほらお姉ちゃんにいつぱい甘えていいんだよ?」

そう言うって陽乃さんは俺を抱きしめてきた。風呂上りのシャランプーの匂いが鼻から脳へ刺激を与える。

それに陽乃さんの巨乳が制服によって更にエロさを出していた。陽乃さんはベツトの上で服を捲り上げ胸をさらけ出しパンツを少し横にずらしてマンコを見せてきた。

「お姉ちゃん、もう我慢出来ないの弟の八幡チンコで私の姉マンコをグチャグチャにして♡♡」

「……かなり完成度の高いキャラですね。陽乃さん」

「もう!そこはお姉ちゃんでしょ!八幡。もしくはハル姉でもいいよ♪」

「……いえ、姉さんでいきます」

「ぶうーお姉ちゃんって呼ばれたかったのになく残念♪」

陽乃さんは頬を膨らませて文句を言ってきた。だってしようがないじゃないですか。お姉ちゃんなんて恥ずかしすぎです!!

それにしてもこのシユチユーションに興奮し過ぎだろ。俺のチンコ!!勃起が収まらないぜ!!

「それじゃ姉さん……行くよ」

「うん。来て八幡」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「き、きたああああ♡♡お、おとうとのきようぼうチンコ♡♡」

「ね、姉さん!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひいひいひい♡♡は、八幡の凶暴……チンコ♡出たり入ったり……き、気持ちいいいいいい♡♡」

「お、俺も気持ちいいよ!姉さんの膣内がギュウギュウ締め付けて、も

う射精そうだよ!!」

「だ、射精して! 私の姉マンコに思いつき射精して!!」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるる……びゅるるるびゅるるる……

「い、いくううううう♡♡♡……あああああ……」

俺は出すもの出して陽乃さんの上に倒れこんでしまった。胸が最高に良いクッションだな。陽乃さんはアへ顔でだらしない表情をしていた。

「えつと……大丈夫ですか? 陽乃さん……」

「だ、だいしようぶだひよ……お、おねえしやんは、これくらいしやい……へ、へいひしやんらから……」

「いえ、全然大丈夫ではないですね。呂律が回っていませんよ。一旦抜きますね」

ずずずずつ……ぽこつ……ぽこつ……

陽乃さんのマンコからは俺がさつき射精した精子が逆流してきていた。陽乃さんは逆流する精子の感覚を楽しんでいるようで笑っていた。

「あははっ……身体に力が入らないや……でも気持ち良かったから全然良いんだけどね♪」

「そうですか? それにしてもこれはまた風呂に入らないといけませんね」

「うん……そうだね。これはまた入らないと……」

俺と陽乃さんの身体は汗や精子でベトベトのドロドロに汚れていた。服は洗濯しないと。汚れ落ちるかな?

本日二度目の入浴。さつきと違ってエロい事はしていないぞ。ホントだぞ!! まあ、陽乃さんは俺に密着しているが。

俺の胸に陽乃さんの背中が引っ付いている状態になっている。

「いや〜さっぱりすると気持ちいいね♪」

「……そうですね。それと陽乃さん、聞いてもいいですか？」

「うん？何かな八幡」

「どうして高校の制服なんて持ってきたんですか？これからの生活を考えれば必要はないですよね？」

実際、大学生の陽乃さんにもう必要ない物だ学校の制服なんて。まさかプレイのためだけに持ってきたとか言いそうだな。

「そんなのもちろん性活のためだよ」

「上手い事、言ってるんじゃない!!寒いオヤジギャクか!!」

「ぶうー冗談なのに……」

例え冗談でも止めて欲しかった。それにしても陽乃さんの肌って白くて綺麗だよな。

「八幡。今日はもう無理だからね。私の体力の限界……」

「いや、もうしませんよ」

「そうかな？八幡のムスコさんは元気なようだけど？」

「え？」

俺は自分のが勃起しているのを確認した。まだこれだけの元気があるとは我ながら恐ろしいな。でも俺だってもう体力の限界だ。

「明日、またたくさんしようね♪」

「……陽乃さんは一人暮らしするべきではないですね」

「？何言ってるの？今日から八幡はここで暮らすんだよ」

「はあ!?!……聞いていませんけど？」

初耳もいいところだ。ここで暮らす？俺が？いやいや何だか可笑しな事になっていないか？陽乃さんは首を捻り俺と顔を合わせるとニヤリと笑った。

「大丈夫♪ご両親には私の方から言ってるから。特にお義父様は喜んでくれたよ？」

「あの……クソ親父いいいい!!」

どうせお前が喜んでるのは俺が家から出て小町を独り占め出来るからだろ!!それにしてもまさか陽乃さんの一人暮らしではなく俺

が同居する事になるとは……予想もつかなかった。
でもなるようになるか。頑張ろう。
こうして俺と陽乃さんの同居生活は始まった。

やはり魔王を看病するのはまちがっている。

うっす。恋人の雪ノ下陽乃さんのマンションに強引に引っ越しさせられた比企谷八幡だ。引っ越して数週間ですっかりこの生活にもなれてきた。

朝、俺が二人分の朝食を作り陽乃さんを起こして二人で食べる。それから学校に行つて帰りに買い物をして夕食を作つて食べる。

それから陽乃さんに勉強を見てもらい、そしてSEXしてから風呂に入つてから寝る。

と、こんな生活を送っていた。

それからたまに外での調教プレイなどして日々を過ごしていた。

しかしそんなある日、問題が起こつた。それは……陽乃さんが風邪を引いたのだ。大した事は無いが大事をとつて療養する事にした。

「だからこの間の雨の日のプレイは辞めようと言つたのに……」

「だ、だって！ 久し振りに時間が重なつたから……それに私はかなりストレスが溜まつていたんだよ!!……くしゅ!!」

「はいはい。大人しくする」

先ほど俺が言ったが、陽乃さんが風邪を引いたのは雨が降っているのに外でプレイをしたためだ。それも夜の公園で全裸散歩をしたからだ。

それはどんなバカでも風邪をひいてしまう。俺は止めたのだが、陽乃さんが強引に俺を連れ出してしてしまったのだ。

この所、お互いに忙しかつたのであまり出来ていなかったのですがストレスが爆発した。で、結果……風邪を引くとかアホ過ぎる。

でもそこが可愛いと思つてしまう。俺も俺である意味、重症だな。

「は〜ちくま〜ん〜……お腹すいた!!」

「はいはい。果物缶で良かったですね?」

「……うん。桃がいい……」

「はい。どうぞ」

「……………」

俺が桃をフォークで刺して陽乃さんの口に近づけたが陽乃さんは

口を開こうとはしなかった。うん？何が不満なんだ？

「ペンギン式を強く希望する！」

「ペンギン式？」

よく分からない要求だな。ペンギン式……つまりペンギンのように一度口入れてから食べさせろという事なんだろうか？

まあ、それが魔王さまのお望みとあらばするのはやぶさかでは無い。

「もぐもぐ……んっ」

「んんっ……」

俺は桃を口に含んで数回噛んで少し解してからベットで寝ている陽乃さんの上からキスをしてそこから桃を陽乃さんの口に流し込んだ。

前の俺だったら絶対にしなかった事だな。こんな事も恥ずかしくらずにするとは俺も成長したな。んん？これは成長したと言えるのか？

むしろ羞恥心がなくなった分、変態性が増した気がする。でも気にする必要は無いか。

「……もつとちようだい♡」

「わかりましたよ。もぐもぐ……んっ」

「んんっ……八幡の味がついた桃、凄く美味しいよ♪」

「そうですか？それじゃ帰ってくるまで大人しくしてくださいよ。一応、冷蔵庫に他の果物缶を買っているで食欲が出たら食べてください」

「すっかりお母さんみたいだね！八幡は♪」

「……こんな大きい娘はいませんから」

俺はそれだけ言っただけで学校にむかった。帰りに薬局に寄って薬を買っておかないとな。

学校が終わり薬局とスーパーに寄って買い物してからマンションに帰った。陽乃さんは大人しく待っているだろうか？まあ、風邪を引いているから大人しくしているだろう。

俺は鍵を開けて部屋に入った。

「……陽乃さん。大人しく——」

「ひいひいひい♡♡だ、だめ……い、いぐうううう♡♡♡」

……前言撤回。陽乃さんは大人しく待つ事が出来ないらしい。俺は俺と陽乃さんの寝室に入るとそこには全裸でバイブとローターで自分の身体をいじめていた陽乃さんが居た。ローターを胸にガムテープで貼り付けてバイブを両手で握りマンコを解していた。

「はあ……はあ……あつ……」

絶頂の余韻を堪能している陽乃さんが俺と目が合って動きを止めた。バイブとローターのスイッチを切った。

「貴女は大人しく待つ事が出来ないのか？このメス駄犬がつ!!」

「だ、だって！八幡、帰りが遅いんだもん!!それに身体が熱くて我慢出来なかったんだよ!!」

「それでも大人しくしている!!」

「いゝやくだ!!」

まったくこの人は。恋人になって子供ぼさが前より増した気がする。俺はタオルで陽乃さんの身体を拭いた。そして吹き終わった瞬間、俺は新しいタオルで陽乃さんの腕を拘束した。

「もう♪ご主人様♡夜まで待てないんですか？いいですよ、準備は出来ているので♡♡」

陽乃さんはノリノリでお尻を左右に振って誘ってきた。それを見ているとちよつとイラつと思ってしまった。

「ずずずずず……ぱんつ!!」

「うひひひひひ♡♡いきなり……おくまで♡♡」

「まったく『待て』すら出来ない『メスイヌ』が!!」

「す、すみません!ご主人様♡♡だって!ご主人様の事を考えたら切なくなつて身体が疼くから♡♡」

嬉しそうでなりよりだよドM令嬢さん。でも罰を与えないとな。

「嬉しいが今度は言う事をちゃんと聞けよ！でないと一週間……いや二週間、放置プレイをするからな！」

「そ、それだけは嫌です!!」

陽乃さんは顔を左右に振って嫌がった。前に放置プレイではなく無視プレイをした時、ガチ号泣したのは記憶に新しい。

そんな訳で陽乃さんはプレイの中で放置プレイだけは二度としなかった。構ってもらえないのは陽乃さんの中で相当トラウマになったしまった。

でもあの時の陽乃さんは凄くいい顔をしていたので近い内に似たようなプレイを計画している。

「なら次、絶頂するまで一言も喋らなかつたら許すけど、一言でも喋れば三週間のお預けだ。分かったか？」

「は、はい♡分かりましたご主人様♡♡」

ホント、嬉しそうだな。絶対に絶頂するまで喋らないな。たまにこの人は凄いのかバカなのかどっちか分からなくなる事がある。

でも別にいいか。たっぷりいじめてやるか。

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずずず……ぱんっ!!」

「んんっ!?!……んんっ!?!……んんっ!?!……んんっ!?!」

必死に我慢している陽乃さんはステキだな。ますますいじめたくなるから。腕をタオルで拘束しているので口を手で塞げないので必死に口を閉じている。

堪らなくステキですよ。陽乃さん!

「……頑張るな。これならどうだ？」

「んんっ!?!」

俺は買ってきた薬を出した。俺が買ってきた薬は座薬だ。アナルでも感じられるほどの変態の陽乃さんには問題ないと思ったので買ってきた。

俺は左手の人差し指と中指で陽乃さんのアナルを強引に広げて右手で座薬を入れた。

「んんんっ!!?...んんんっ♡♡」

「大丈夫ですよ。だたの座薬です。早く風邪を治せよ。でないと本気で愛せないだろ?」

「んんんっ!!んんっ!...んんんっ♡♡♡」

陽乃さんは嬉しそうに顔を縦に振った。それにしても陽乃さんのアナルもマンコに負けないくらいきつく締め付けてくるな。

指が口千切られそうだ。

「そろそろ射精そうだ!膣内にたっぷり射精してやるからな陽乃!!」

「んんんっ♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ...びゅるるるるびゅるるるっ
.....

「んんんっ!?!...んんんっ♡♡♡」

俺が射精して絶頂したはずの陽乃さんは必死に口を閉じて声を出さないようにした。ここまで来ると感心してしまう。

まあ、今回の罰はこれくらいにしておくか。

「陽乃。もう喋ってもいいぞ」

「は、はひ♡♡あしやま...まっひろ...♡♡♡」

絶頂で呂律が回らなくなった陽乃さん。凄く可愛いです!もつといじめる前に汗を流した方がいいな。このままだと更に風邪が悪化する可能性がある。

俺はチンコを陽乃さんのマンコから抜くと陽乃さんを風呂場まで運んだ。陽乃さんは脱力していたので運ぶのは苦勞した。

「陽乃さん?しっかりしてください。汗、流しますね」

「.....ふあくくく...それにしても酷くない?病人にするプレイじゃないと思うけど?」

「今更でしょ...それともSM無しの普通のがお望みで?」

「.....八幡ってホント意地悪だよね!!」

陽乃さんはどこか嬉しそうにニヤついた。ホントM魔王様だな。

「汗を洗い流したことだし...陽乃、壁に手を付いて尻をこつちに向ける」

「はい♡(主人様♡♡)」

陽乃さんの行動は早かった。浴槽から出てすぐに壁に手を付いた。俺は腰を掴んでそのまま一気に挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡♡お、奥まで一気に♡」

「まだまだこれからだ!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「そ、そこいひひひひ♡♡奥をコツコツ突いてきて♡いつちやうううう♡♡」

陽乃さんは気持ち良くなっているがまだまだ俺の攻めは終わってはいない。俺は陽乃さんの右耳に甘噛みし左手は右乳首をコリコリと摘み、右手でクリトリスを優しく撫でるようした。

「だ、だしえ♡しよんはにしへんに♡♡しはら……しゆぐにひっしやう♡♡」

「呂律が回っていませんよ?でも止めるつもりは無いから!陽乃の無様なアへ顔を見せてくれ!!」

「は、はひまん♡みへ……わはひのいくとほろ♡♡」
「で、射精る!!」

びゆるるるるびゆるるるるつ……びゆるるるびゆるるるつ……

「い、いぐうううう♡♡……はあ……はあ……♡♡」

陽乃さんは腰が抜けたらしくそのまま座り込んだ。あれにしても病人の陽乃さんは色々と興奮させてくれるな。

でも流石にここまでが限界だな。俺と陽乃さんは再び湯船に浸かり汗を洗い流した。

そして浴室から出た俺は陽乃さんを四つん這いにした。

「それじゃ行きますよ。陽乃さん」

「うん。来て八幡」

俺は陽乃さんのアナルを広げて座薬を入れた。一回入れたのだからもういいと思うが陽乃さんが念には念をと言ったので入れた。

正直、陽乃さんの今の格好は最高に無様だと思う。四つん這いになってお尻を高く上げて不安顔でこつちを見ている陽乃さんはまた犯したくなる。

でも今日はもうしない。陽乃さんの体力の限界があるし病状の悪化はしたくないからだ。

そして俺と陽乃さんはそのまま寝る事にした。陽乃さんの要望でお互いに全裸でくっついて寝る事になった。

次の日の朝に俺は全裸で仁王立ちしている陽乃さんを目撃する。

「私！復活!!」

「おおおお……」

思わず俺は拍手してしまった。すると陽乃さんは俺の顔を見て笑った。それは嬉しいからではない。あの顔は子供がイタズラを考えている顔だ。

出会って間もない時の顔に少し似ているな。嫌な予感しかしない。

「良かったよ。間に合って」

「？何が間に合ったんですか？」

「今日、お母さんがここに来るからその時に八幡を紹介するから」

「……………へ？」

俺は陽乃さんのとんでもない発言にフリーズしかけた。逃げようとしたが陽乃さんと昨日、やり過ぎた所為か動く体力がなかった。俺は魔王城に大魔王がやって来るまでに体力は回復しなかった。俺、生きていけるかな？

やはり魔王の城に大魔王が来るのはまちがっている。

うつつ、比企谷八幡だ。陽乃さんの一人暮らしに巻き込まれて同棲する事になってから色々な事があったが、今日と言うより今、とんでもない事態になってしまった。

それは陽乃さんの部屋に和服美人が一人、俺と陽乃さんと一緒に紅茶を飲んでいるからだ。正直、怖い。この人が出すオーラと陽乃さんの出すオーラが部屋の温度を5℃くらい下げているように感じる。

流星は毒舌少女と魔王を産んだ人物だな。

「ふう……比企谷、八幡さんでしたね?」

「は、はい……」

か、噛まなくて良かったよ。いきなり人の名前を言うんだからビツクリしてしまう!!和服美人がここまで怖いとは知らなかったぜ!?

どう対処したらいいのか分からない。陽乃さんはのん気に紅茶飲んでるし!?

「確か二年前の四月にウチの車で轢かれたのでしたよね?」

「は、はい。そうですけど、あれは俺が勝手に飛び出ただけですし、それに病院の入院費から治療代まで出してくれた相手に何か言う事はありませんので……」

「そうですか。それが聞いて安心しました。それで陽乃さんとお付き合いをされているという事でいいんですよね?」

「は、はひ!!」

お、思わず噛んでしまった。この人の威圧凄すぎ!?!俺は横に居る陽乃さんに助けを求まるかのように視線を向けた。

陽乃さんはニツコリ微笑んでから俺の腕に抱きついてきた。

「もう!お母さん。私のご主人様をあんまりいしめないでよ!!」

「……ご主人様、ですか。はあ……貴女という子は……」

陽乃さんのとんでもない発言にお義母さんはため息をつかれた。顔を見る限り完全に呆れているな、この人。

「陽乃さん。あえて聞きますが、彼と別れる気は?」

「無いけど?もし強引に別れさせるならゴシップ誌に私とご主人様の

色々なプレイを載せてもらうけど？そうなれば、雪ノ下家も一環の終わりだね♪」

「……それは脅しですか？」

「脅しだよ♪ご主人様——八幡の事に関して私は一切諦める気は無いから！」

陽乃さんの言葉に思わず涙が出そうになってきた。だが、嬉しい反面恥ずかしい。しかし俺の彼女は最高だと本気で思う。

今夜は思いつきり可愛がってやろう!!朝まで!!

「……………そうですか。本気、なのですね？」

「もちろん♪お母さん相手でも全力でぶつかるといいますよ？その時は粉々になる覚悟していた方がいいよ？」

「ふう……………分かりました。もう別れるといいません。ただし死ぬまで逃がさないようにしない。雪ノ下の女なら出来ますね？」

「うん♪絶対に逃がさないから安心して！」

なんか親子で物騒な会話をしているな。聞かなかった方が良かっただろうか？するとお義母さんが俺を見てきた。なんか緊張するな。

「それでは早速、見せてもらいましょうか」

「え？見せるって何を？」

「八幡さんがどういう風に陽乃さんを調教したのかをですよ」

陽乃さんの母親は娘の陽乃さんと同じくらいの笑顔でとても面白い事を言ってきたな。それをすんなり受け取れるようになったのは俺が成長しているからだろうか？

そして場面と言うか場所は変わって俺と陽乃さんの寝室だ。ちなみに俺と陽乃さんは全裸になっている。

どうして恋人の母親に全裸を見られないといけないのだろうか？どんな公開処刑だよ!?!しかもこれからSEXしなきゃいけないんだ

?

陽乃さんは陽乃さんでどこか期待している目をしている。やるしかないか。

「……陽乃。まずは何だ？」

「フェラからです！それじゃ……はむっ……」

陽乃さんはお義母さんの事など気にせず俺のを口に啜えた。頭を前後に動かして俺のを味わっている。口から離してウラ筋まで丁寧に舌で舐め回し金玉まで綺麗に掃除した。

俺もスイッチが入って陽乃さんの頭をガツチリと掴んで口奥までチンコを突っ込んだ。先に喉チンコがぶつかっただのが分かる。そろそろだな。

「陽乃！射精すぞ！しっかりとその口マンコで味わえ!!」

「んんっ！んんっ!!」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「んんっ!!んんっ！んんっ!!」

「あ、飲み込まずに口を開けろ」

「ああああ……」

陽乃さんは口を大きく広げて俺が射精した精子を見せた。相変わらず結構な量を射精したな。このままだと陽乃さんが精子で溺死するな。

「飲んでよしー!」

「んんんっ……はあ♡♡ご、ご主人様の精子♡喉奥に絡み付いて飲み込むのが大変だけど、凄く苦味があって濃い♡飲んだだけで軽くイッた♡♡♡」

陽乃さんは精子を飲み込み感想を言った。毎回思うが感想は要らないと思う。それにしても俺のチンコはまだまだ元気一杯だ!!

陽乃さんも次の俺に命令を待っている。その姿はまさに「イヌ」だ。

「それじゃ……陽乃。四つん這いになって尻を高く突き上げろ」

「はい♡♡ご主人様♡♡」

陽乃さんはお尻を高く突き上げた。いつ見ても綺麗なお尻だな。

俺はそこに平手打ちを叩き込んだ。

パンツ!!

「ひぎい!?も、もろ♡はたいへくたい♡♡」

「ああ、いいぞ!!」

パンツ!!パンツ!!パンツ!!

「ひい♡……うぎい♡……あひい♡♡……あああああ……」

ちよろろろろっ……

陽乃さんはあまりの快感にお漏らしをしてしまった。この時の陽乃さんの表情は最高に綺麗だと俺は思う。

「陽乃。こんな所でお漏らししたのか?」

「す、すみません……が、がはんへきませんでは……」

「ああ。いいんだ、これですんなり挿入出来そうだ」

「ま、まへって!?!い、イツたはかりだから……」

「俺には関係ない」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うぎいいいい♡♡」

俺は陽乃さんのマンコにチンコを奥まで一気に挿入した。陽乃さんはあまりの刺激にさらにイツたようだった。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ま、まへって♡こ、こわへる!?!ま、まん♡♡こわへちやう?!?!」

「壊れるくらいが一番いいだろ?それに……よっと!」

「へえ?」

陽乃さんのマンコは突く度にきつく締め付けてくる。もつと気持ちよくしてやろうと俺は陽乃さんの両手首を掴んで身体を起こして俺と陽乃さんが繋がっている場所をお義母さんに見せた。

「こ、このしやいへい♡♡だへええ♡♡♡」

「何が駄目なんだ?しつかりと見てもらえ!母親の目の前で年下の男にいいように犯されている自分を!」

「うぎいいい!?か、かんじしやい!かんじすひちやう♡♡」

母親に見られているのか陽乃さんのマンコはこれまでに無いくら

いきつく締め付けている。前に公園で見られた時もこんな感じだった。

俺は陽乃さんの耳に近づいた。

「陽乃。母親に謝った方がいいな。出来るような？」

「は、はい♡お、おかしゃん……わ、わしゃは♡ご、しゅひんさまの♡しいひより、めふいぬになつてしまいはした♡♡う、うんで……ふへたのに♡♡ごへんなしいい♡♡い、いぐううう♡♡♡」

「で、射精るー！」

びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるびゅるる……

「うひいひいひいひい♡♡♡♡♡」

俺の射精と同時に陽乃さんもイッたようで気絶した。結構、派手に果てたな。大丈夫かな？まあ、大丈夫だろう。あれ？何か忘れてるような？

「あ……」

俺と陽乃さんのプレイを最初から見ている人物の事をすっかり忘れていた。お義母さんはメチャメチャこつちを見ている。

いや、睨んでいると言ってもいい。こ、怖い!?誰か大魔王様から助けて!!

「……なるほど、これほどとは……」

「あの……」

「それで比企谷さん。貴方は結婚する気がありますか？」

「はひ!?え、じゃなくて……はい。あります」

いきなりで囁んじやつたよ。そしてとんでもない事に答えちゃったよ。

「まあ、私の娘をこんな淫乱にしたのですから……しつかりとリードを持っていてください。この子はたまに暴走する事があるので」

「は、はい。それはもちろんです」

「そうですね……では、私は帰ります。陽乃さんが起きたら次は家に来て父親に紹介しないさいと言っておいってください」

お義母さんはそのまま部屋から出て行ってしまった。部屋には俺

と気絶した陽乃さんだけになった。

「……あれ？お母さんは？」

陽乃さんが目を覚ましたようだ。部屋を見渡してお義母さんがない事に気がついたようだ。

「帰りました。それと次は家に来て父親に紹介するようにと言っていました」

「そっか。それより続きをしよ♪」

「え？まだすんですか？」

「もちろん♪それに八幡のは元氣一杯みたいだけど？」

陽乃さんに言われて俺は下を見た。そこには元氣一杯で固くなっているチンコがあった。少し休憩が必要かと思っただが、俺自身体力が相当付いてきたな。

「なら何と言えばいいか、分かるよな？」

「はい♡ご主人様の太くて固いたくましいデカチンコをメスイヌ陽乃に挿入してズコズコして、最後には膣内にたくさん精子を射精してください♡♡」

いや〜セリフがエロい。それにそこまで言う必要は無いんだけどな。まあ、いいか。陽乃さんはお尻を俺の方に向けて両手でマンコを出来るだけ広げて見せた。

俺はそこに一気に挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡♡お、おくまできている♡♡」

「まだまだこれからだ！」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

陽乃さんの両手首を掴んで腰を振った。もう発情した獣だ。

「うひい♡♡ごしゅひんしゃま♡♡い、いってへる♡いってへる、から♡♡」

「母親が居た時はもっときつく締めていたぞ！このド淫乱のメスイヌが!!受け取れ!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「い、いぐううううう♡♡♡……ああああ♡♡あしやま、まつひろ♡」

「おおおおお……すげーっ……」

陽乃さんは俺が射精したらマンコが俺から精子を全部吸い取ろうと蠢いていた。俺も頭の中が真っ白になりそうだった。

まあ、そんな激しいSEXを終えた俺と陽乃さんは風呂に浸かっていた。二人で入る必要は無いが、入らないと陽乃さんが文句を永遠に言ってくる。

なので、しかたなく一緒に入っている。お、俺も嫌々入っているんだから!!ちなみに俺の前に陽乃さんが居る。

「うくん……やっぱりお風呂は好きな人と入ると最高だね♪八幡」

「そうですね……」

「何?何か言いたげだね?聞いてあげるよ?」

「聞くだけでしょ。叶えるわけではない、でしょ?」

「流石、八幡♪私の事、分かっているね♡」

やっぱりだよ。この人はこういう人なんだよな。陽乃さんは俺の腕を自分のお腹の前に持ってきた。この体勢が一番のお気に入りだ。

「八幡。将来は子供はサッカーチームが出来るくらい産ませてね♪」

「……それは多いです。せめて3人か5人?ですかね」

「ふくん……つまりそれくらいは孕ませてくれるんだね♪楽しみ♡」

余計な事を言ってしまった。でもいいか。遅かれ早かれ聞いてきたからな。お風呂から出た俺は昼間予定した通りに陽乃さんを朝まで可愛がった。

グチャグチャになった陽乃さんの顔は最高に綺麗だった。

やはり魔王の水着がエロいのはまちがっている。

うっす、比企谷八幡だ。陽乃さんと同居を始めて数週間、日々楽しく過ごさせてもらっている。陽乃さんとのプレイも毎回、ヒヤヒヤさせられるが楽しんでる自分がいる。

例えば、マンションのベランダでしたり公園で全裸でしたりなど、見つければ大変な事になるようなプレイもたくさんした。プレイの中で声を我慢していた陽乃さんの顔が最高に興奮した。

それとこれは別の話だが、陽乃さんの母親に言われたとおり陽乃さんは父親に俺を紹介した。正直、何かされるのではないかと心配したが、そんな事はなかった。

それどころか大変喜んでた。年頃の娘に彼氏の一人も居ないのが心配だったらしい。まあ、俺としては『娘はお前にはやらない!!』と怒鳴られるのではないかと思っていた。

とりあえず、今はその話はおいて置いて俺は今現在、困惑していた。それは何故かと言うと陽乃さんの格好にだ。

以前はメイドやナース姿だったが、今回はなんと水着だ。水着だ。大事だから二回言ったぞ。

「どうかな?八幡。私の水着は?」

「えつと……」

「なに?はつきり言つてよ!」

「それじゃ……エロいです」

今、陽乃さんが着ている水着はなんと白色の旧スクール水着だ。ビキニのように上と下で別れておらず繋がっている水着だ。

この旧スクール水着の色は大抵、黒色だと思うが、その逆の白!!

「八幡はこの水着のどこがエロいのかな?」

「……………」

陽乃さんはワザとらしくニヤニヤした顔で俺に聞いてきた。この人、分かっているこういう事を聞いてくる。後でたっぷりいじめてやるか。

とりあえず答えておくか。

「……白い水着に綺麗な肌がマッチしていて見惚れてしますからだです！」

「……え？あ、そっか……見惚れちゃうか……えへへえ……」

陽乃さんの照れている顔は可愛いな。すぐ可愛がりたいと思う。よし、するか。

「ええ、そうです!!その証拠にもうこんなに勃起しています!!」

「おおおお……」

俺はズボンを降ろして勃起したチンコを陽乃さんに見せた。陽乃さんは勃起したチンコに近づき匂いを嗅ぎだした。

「すんすん……はぁ♡この匂い、好き♡」

「陽乃。フェラしていいぞ」

「はい。ご主人様♡♡」

はい。主従関係スイッチON!!陽乃さんはメス犬になって俺はSな主人になりました!陽乃さんは口に俺のチンコを咥えると頭を前後させながら舌を絡めてきた。

ちゅぱつ……くちや……くちや……

「陽乃。ホント、お前はフェラが上手くなったな?」

「は、はい♡ご主人様に褒めてもらう為に勉強しました。だからこんな事も出来ます」

「のおおおお……!?!」

陽乃さんはチンコの裏筋や金玉袋まで綺麗に舐めた。前までしなかったが、これはこれで気持ちいいな。俺は陽乃さんの頭を両手で掴んでチンコを口の奥まで差し込んだ。

びゅるるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

差し込んでからの射精。

「んんっ!?!……んっ♡♡……うくっ……はぁ♡♡ご、主人様の精子……ご、ご馳走様です♡」

「えらいぞ陽乃。ちゃんと溢さず飲み干したな?」

「は、はい♡この通り……あああ……」

陽乃さんは口を大きく開けて口の中に精子が無い事を俺に見せた。それなりの量を射精したと思ったが、全部飲み干したのか。凄いな。

俺はずっと疑問だった事を聞いてみる事にした。

「陽乃さん。聞いてもいいですか？」

「うん？何かな八幡」

「どうして水着を着ているんですか？」

「そんなの海に行くために決まっていますじゃん」

陽乃さんは『何？当たり前前の事聞いている？』というような顔をしていた。ああ、海ね。うん？

「ちなみに誰と行くんですか？」

「そんなの私と八幡と雪乃ちゃんにガハマちゃん、隼人とそのお友達だよ♪」

「葉山達もですか……」

葉山達も行くのか。三年になって葉山達と関わる事は少なくなつたが、あのグループは未だに健在だ。

葉山は嫌いだし三浦はウザいし戸部とはなんか気まずいし海老名さんは俺と葉山でよからぬ妄想をしているし、どうもあのメンバーの近くには居たくない。

「まあまあ、旅行の時は私が近くに居るから隼人はよっぽどの事がないと近づいてこないから大丈夫だよ♪」

「……だと、いいんですけど」

「それじゃ次行こうか！」

「次？」

俺が首を傾げていると陽乃さんは旧スクール水着を脱いで別の水着を着始めた。いくら彼氏と言って目の前で着替えるか？

ホント、羞恥心がないなこの人は。

「……………」

俺は次の陽乃さんの水着に絶句してしまった。陽乃さんが次に着た水着は紐水着だ。露出がハンパない!!

てか、胸は乳首しか下に関しては全然隠れていない。

「これはどうなか？八幡」

「……今すぐ着替えろ」

「え？気に入らないかな？」

「全部が気に入りません！」

「……え？」

陽乃さんは分からないように首を傾げていた。ホントに分かっていないのか？

「……陽乃さんがそんな水着を選んだ事やそれを着て人前が出るのが」

「もう！心配しなくてもこんな水着を着るのは八幡の前だけだよ！私だって裸を見せる人は選んでいるよ！」

そういう事なら安心だな。でも、イラツとさせたからな。ちよつといじめるか。

「……陽乃。そこでオナニーしろ」

「は、はい♡ご主人様♡♡……んんっ♡」

くちや……くちや……くちや……

陽乃さんは両手を使って俺に見せ付けるようにオナニーを始めた。

「み、見えていますか？ご、ご主人様♡私のオナニー……」

「ああ。愛液がポタポタと落ちているぞ。その水着でオナニーして興奮しているのか？」

「は、はい。そうです♡この水着で、オナニーすると……行っちゃいそうになります♡でもご主人様のデカチンコで行きたいです♡だから……」

「でも駄目だ！」

「……え？」

陽乃さんはがく然とした顔をした。すると手が止まってしまった。

「おい！誰が止めていいなんて言った？」

「っ!ご、ごめんさない！オナニーします!!」

くちや……くちや……くちや……

陽乃さんって意外といじめ易いんだよな。よし、もつといじめるか。

「陽乃。そこで小便を出せ」

「む、無理です……」

「俺は出せと言ったんだ。聞けないなら今日はもうお預けだ」

「お、お預けはイヤです!!出します!.....んんっ.....」

陽乃さんはオナニーをしながら力んで必死に小便を出そうとしていた。そしてその時はやってきた。

「で、出ます!.....ああああ.....」

しやああああああ.....

「あああ♡♡」

陽乃さんは小便を出して放心状態になっていた。床が陽乃さんの小便で汚れたがフローリングだから拭けば問題ない。

それにしても今の陽乃さんを見て俺も完全に準備ばっちりだ。

「あ♡.....は、早くご主人様のデカチンコで私のマンコをめちやくちやに犯してください♡♡」

「ああ、いいぞ。陽乃、四つん這いになって尻を高く上げろ」

「はい♡ご主人様♡♡」

陽乃さんは四つん這いになってお尻を高く突き上げた。この格好を見ていると最高に興奮する。俺は一気に奥まで挿入した。

ずずずずずっ.....ぱんっ!!

「うひいひいひい!!お、奥まできたああああ♡♡」

ずずずずずっ.....ぱんっ!!ずずずずずっ.....ぱんっ!!ずずずずずっ.....ぱんっ!!

「は、はげしい!?!こ、これだめ♡♡」

腰を激しく前後させると陽乃さんの膣内は俺のチンコを興奮させるために蠢いているのを感じる。これはすぐにくる。

「で、射精る!!」

「.....へ?」

びゅるるるるびゅるるるるっ.....びゅるるるびゅるるるっ.....

「い、いくうううう♡♡♡.....はあ.....はあ.....はあ.....」

陽乃さんは盛大にイッた。俺も結構な量の精子を射精したな。

ずずずずずっ.....こぼっ.....こぼっ.....

陽乃さんのマンコからチンコを抜くと精子がこぼっこぼつと溢れ出していた。ホント、毎回凄い量の精子だな。

「お〜い。陽乃さん、大丈夫ですか？」

「ら、らいしようぶ……♡」

「いや、全然大丈夫じゃないですよ！呂律が回っていません！」

陽乃さんも毎回、いくと呂律が回らなくなる。ホントに大丈夫なのか？陽乃さんは頑張って自分一人で立ち上がった。

「そ、それじゃ次のを着てくるからま、待ってて……」

「はあ……」

俺は陽乃さんの次の水着を待った。そして待つ事十分ほどが経った。結構、時間が掛かったと思っただろうやらシャワーを浴びていたようだ。

それは時間が掛かるから仕方ないか。

「おおおお……!!」

「どうかな？この水着は？」

「素晴らしいですよ。これまでの中で一番いいです」

「やったね♪」

次に陽乃さんが着てきた水着はビキニにパレオを巻いたものだった。ビキニは明るい青でパレオは模様の入った白いものだった。

最初の旧スクール水着やヒモ水着よりも断然陽乃さんに似合っていた。

「それにパレオがあるから少し垂れてもバレないよ♪」

「ああ、確かに……」

もしかしてそのためのパレオ？何だか使い方を間違っているような気がするが？

「それじゃこの水着で決定だね♪」

「ええ、前二つより全然いいですからね」

正直言つてスクール水着とヒモ水着は無いな。異様に目立つし露出が多いからそれは俺としては嫌だ。それにこの水着なら大丈夫だな。

それにしてもあれだけしたのにまた勃起した。今日の俺は水着に興奮しすぎだろ!!

「……陽乃。気持ちよくしてくれ」

「はい♡ご主人様……失礼します。はむっ……」

陽乃さんは胸でチンコを挟むと少し上に出た部分を口に咥えて奉仕を始めた。相変わらず陽乃さんの胸は最高の弾力だ！

むにゅ……れろっ……むにゅむにゅ……れろっ……

陽乃さんのパイズリフェラは最高に気持ちいい。絶妙な力加減に柔らかい胸、時より刺激してくる舌。

なんか上手くなりすぎな気もするが、気にしないでおこう。おっともう射精しそうだな。

「陽乃、もういいぞ。挿入しやすいように仰向けになれ」

「はい。ご主人様♡」

陽乃さんは仰向けになり下の水着を少し横にずらして挿入しやすいように構えた。マンコからは愛液が溢れていた。一回挿入して射精もしたから前戯はいらないな。

俺は一気に奥まで挿入した。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡お、奥まで……きたああ♡♡」

「まだまだ……!!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「のおおおお♡♡は、激しいっ?!し、子宮に♡コツコツ、当たっている♡♡」

「陽乃。いい締め付けだぞー!」

「は、はい♡んんっ……」

「んっ……」

陽乃さんは俺に抱きつきながらキスしてきた。それに合わせてマンコの締りがさらにきつくなった。俺はさらに腰を動かした。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「いく♡……いっちやう♡♡」

「待っているー!もう少しだからな!!」

「は、はい♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い……い……い……う……う……う……う……」

「おおおおおお……」

膣内出し。本日三回目の射精のはずなのにこの量は凄い!もし避妊していなかったら孕んでも可笑しくはないな。

「ああああ……」

「大丈夫かな?」

陽乃さんは行ったように放心状態になっていた。でもいいか、もう一回だけしておこう。

それから小一時間後、部屋を掃除して陽乃さんと共に海に行く準備を始めた。陽乃さんの水着は青のビキニに白のパレオだ!

海に行くのが少し楽しみだ!

やはり魔王と海でエロい事をするのはまちがっている。

ども、比企谷八幡だ。俺はと言うか俺達と言った方がいいな。海に行く事にあたってきたメンバーは俺に陽乃さん、小町、雪ノ下、由比ヶ浜、葉山、三浦、戸部、海老名さん、戸塚に何故か平塚先生も居た。戸塚は全然いいけど、平塚先生や葉山グループが居るのは少し納得がいらないが、仕方ない。まあ、そんなに話す事もないだろ。

ちなみにこれは旅行で二泊三日する事になっている。近くの旅館に泊り色々するようだ。

「ゆきのん！海、めっちゃ綺麗だよ！」

「落ち着きなさい由比ヶ浜さん。海は逃げたりしないわ」

「でもでも！」

由比ヶ浜と雪ノ下は相変わらず百合百合な関係だな。それにしても由比ヶ浜の水着が変わっている気がする。聞いてみるか。

「由比ヶ浜。お前の水着、去年と違うくないか？」

「え？う、うん。去年のきつくなっていて新しいのを買ったんだ。……ヒツキー。見てくれていたんだ」

由比ヶ浜はどこか嬉しそうにしていた。何がそんなに嬉しいだ？分からん。それにしても雪ノ下の水着は去年の千葉村で着ていた水着とまったく変わっていないかった。

それを見て三浦がまたしても鼻で笑った。三浦の水着はビキニだった。葉山へのアピールをしているようだった。

それにしてもさつきから海老名さんがこつちを見て「はあ……はあ……」と息を荒立てている。

間違いない腐女子としても妄想をしているのだろ。出来れば、俺は使わないでほしい。

「八幡。お待たせ！」

「おう。戸塚」

戸塚の水着姿を目に焼き付けようかと思ったが戸塚はパーカーを

着ていた。これじゃ戸塚の水着姿を目に焼き付けられない。

「っ!？」

戸塚にばかり目がいつているといきなり背筋がぞくっとなった。後ろを振り返ってみるとそこには陽乃さんが目が笑っていない笑顔を向けていた。

そして手招きしてきた。これは不味いな。俺は黙ってそれに従った。

「あのく陽乃さん?どこに行くんですか？」

「……………」

陽乃さんの沈黙がかなり怖い!それにしてもどこまで行くんだ?

ここは先程の場所からかなり離れた場所だ。

ここで何をしようと誰にもバレないな。

「んんっ……………」

「んっ!？」

するといきなり陽乃さんがキスしてきた。いきなりの事でびっくらしたが、俺はそれを受け入れた。キスを終えた陽乃さんはまだ不満顔をしていた。

「…………八幡は私の彼氏なんだよ。戸塚君ばかり見るのは駄目だからね!」

「ああ、そう事ですか……………」

つまり陽乃さんは嫉妬したんだ。相手は男なんだけどな。ここは俺が答えないとな。

「陽乃さん…………んんっ」

「んんっ…………♡」

くちや…………ちゅぱっ…………

俺と陽乃さんはキスをした。それも結構ソフトのやつを。今は主従ではなく恋人のような甘いキスだ。

たまにこんなキスもする。激しいキスもいいが、ただ互いに唇を合わせるだけのキスもいいな。それにしてもキスしただけで勃起して

しまった。

「陽乃さん……」

「うん。いいよ♡」

陽乃さんはそれだけ言って水着の下を少し横にずらした。俺は海パンを降ろしてそのまま陽乃さんのマンコに挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひひひひひひ♡」

「ちよっ!?陽乃さん、声大きい……」

「で、でもっ♡……いきなり奥とか、声が我慢っ♡出来るわけないじゃんっ♡♡」

「それでもです」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「だ、だったら……八幡、動かないでよ♡」

「それ無理」

陽乃さんは必死に声を我慢していたが俺はおかまなし無しに腰を動かした。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「んんっ!?ら、らめっ♡♡」

「ゆきのん。こっちには居ないねヒツキーと陽乃さん」

「そうね。どこにいったのかしら?二人して……」

腰を動かしていると由比ヶ浜と雪ノ下の声がしてきた。すると陽乃さんのマンコの締めりが強くなった。

しかも陽乃さんは目で動かないように訴えかけてきた。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「んんっ!?んんんっ……」

でも俺はその訴えを無視して腰を動かした。陽乃さんは必死に口を抑えて声が出ないようにしていた。少し涙目で。

二人に見つかるかもしれない。そんな事を考えただけでゾクゾクしてくる。

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺はさらに腰を激しく動かした。もうそろそろ射精しそうだ。

「陽乃さん。このまま膣内に出しますね」

「んっ!?ま、まって……」

「もう無理」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ

……

「ひっ……んんっ……♡♡」

「……うん?」

「どうしたの?由比ヶ浜さん」

「うん、今声が聞こえた気がして……」

「そう?私には何も聞こえなかったわ」

「じゃ!気のせいだね!」

陽乃さんのイッた声を聞かれたと思ったが流石はアホの子だ由比ヶ浜。それにしても陽乃さんの顔はあまりの快楽で腰に来ていた。

ガクガクになってしばらくは歩けないな。少ししたら戻ろう。

「あ!ヒツキー!陽乃さん」

「由比ヶ浜……」

陽乃さんが歩けるようになって戻ってみると由比ヶ浜が近づいてきた。胸が揺れて周りの男の視線を集めていた。

他にも陽乃さんがいるからな。

「ヒツキー!さつき、どこ行っていたの?」

「俺がどこに行こうと別に構わないだろ?少し静かな場所にだよ」

「そ、そうなんだ……」

「そんなに八幡君の事が心配だったのかな?ガハマちゃん」

陽乃さんが俺の背中にぴったりとくっついて来た。押し付けられる胸が凄く素晴らしい!!てか、雪ノ下の視線が怖いんだけど!?

「……姉さん。今すぐ比企谷君から離れないと妊娠するわよ」

「雪乃ちゃんってば、男の子にくっついただけで妊娠するわけないじゃない。性知識が偏っているね?」

「……子供がどうすれば出来るのかくらい知っているわ」

姉妹での視線だけの戦いが起こってしまった。てか、陽乃さんは俺の背中に居るので陽乃さんと雪ノ下の間に俺がいる。

せめて俺を間に入れないでして欲しい。

「お、お昼にしようゆきのん！」

「……そうね。そうしましょ」

「私達も行くかうか八幡君♪」

「いい加減、背中から離れてください……」

昼飯を食べている時は大丈夫かと高を括っていたが、陽乃さんが俺に食べ合いつこを要求してきて雪ノ下と由比ヶ浜の視線がとても痛かった。

小町はニヤニヤと見てきた上に写真まで撮る始末だ。昼飯の焼きそばの味がまったりわからなかった。

昼飯食べた後も遊ぶかと思われたが、雪ノ下は体力が無くなり由比ヶ浜と一緒に休む事にした。葉山達はまだまだ元気で海で泳いでいる。

小町はその辺、プラプラ散歩すると言っていたので俺は再び陽乃さんと二人つきりだ。

「いや〜さつきは雪乃ちゃん達に危うくバレるところだったね？八幡」

「俺は楽しんでるように感じましたけど？」

「あ、バレてた？あのスリルは中々味わえないからね。ホント、ゾクゾクしたよ♪」

うわあ〜あの状況を楽しむとか変態にさらに磨きがかかったな。俺もだけどな。雪ノ下や由比ヶ浜にあの状況を見られたらと思うと最高に興奮する。

まあ、その場合は即刻雪ノ下に警察に突き出されるけどな。

俺と陽乃さんは人気の無い場所を歩いていた。改めて陽乃さんの水着姿を見たが、やはりエロいな！

出る所は出て、引つ込む所は引つ込んでスタイル抜群だ!!

「……ここのでいいかな」

「……何が？」

「さっきの続き♡」

確かにこの辺りなら人気はなさそうだし誰かが近づいてはこないな。陽乃さんもそうだが、俺も昼間の続きをしておきたい。

一回だけ射精しただけでは俺は満足出来ない。俺はパンツを脱いだ。

「うんうん♪八幡もやる気だね♡それじゃさっそく……はむっ……」

くちや……ぺちや……くちや……

陽乃さんは半立ちの俺のチンコを口に咥えて舌を器用に動かして俺を興奮させてきた。それに陽乃さんの舌使いが凄くもう勃起してしまった。

「陽乃さん。俺もう……」

「うん。私も我慢出来ないから……挿入して♡」

「はいー」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡♡」

お尻をこつちに向けた陽乃さんの腰を掴んで一気に挿入した。昼間したばかりだと言うのに陽乃さんの膣内は最高だ。

ギユウギユウに締めてくるし膣内が蠢いているのを感じると陽乃さんが気持ちよくなっているのが分かる。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡は、八幡激しいからっ……すぐにきちやう♡♡」

「激しくなりますよ。こんなエロい彼女の水着姿を見たら！もっと行きますよー」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡だ、だへ♡あしやま、ましほ♡♡」

「まったく！気持ちよくなると呂律が回っていません……よ!!」

「ひひひひひ♡♡っ、つよすぎ♡♡♡」

昼間と違って陽乃さんは声を我慢する気が無いようで口をまった

く閉じようとしなかった。手は掴んでないので抑える事が出来るはずなのだが、陽乃さんはまったくしてなかった。

だから声が周りにダダ漏れだ。人は居ないよな？居てこれを見られたら大変な事になるな。それに昼間に外でするのはこれが初めてだ。

それでなのかいいつもより陽乃さんが声を出しているように感じる。

「お、お兄ちゃん!？」

「こ、小町!？」

「へ？小町ちゃん?」

陽乃さんとしている時に小町に見られてしまった!?不味いよな？これは。でも小町は顔を赤くしているが、視線を逸らそうとしなかった。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡は、八幡!？」

「……見てもらいましょうか？その方がいいでしょ?」

「で、でも……」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は小町が見ているのに腰の動きを止める所か動きを早くした。それにつれて陽乃さんのマンコは締りが強くなった。

「おおおおお……!!」

小町は小町でガン見していた。俺は小町によく見えるように陽乃さんの身体の向きを変えた。するとさらに締め付けが強くなった。

そろそろ限界だ!!

「陽乃さん!で、射精ます!」

「き、きてえええええ♡」

びゅるるるびゅるるるつ……びゅるるるびゅるるる……

「ひぎいいいいいい♡♡い、いくうううう♡♡♡♡」

「のおおおお……!!」

俺は陽乃さんのマンコに盛大に射精した。陽乃さんは陽乃さんで盛大にイッたようだった。身体を仰け反らせて気絶したからだ。

ずずずずずつ……こぼつ……こぼつ……

マンコからチンコを抜くと精子が溢れてきた。小町はそれを顔を近づけて見ていた。いや観察していた。

顔を赤くしても目は逸らさなかつた。俺と溢れ出た精子を交互に見ていた。

「……小町。この事はどうか内密に頼む」

「か、貸し一つだよ……それにしてもお兄ちゃんもそうだけど、陽乃さんもすごつ……精子つてこんな感じに出てくるんだ……」

「あ、あんまり見ないでくれないか？」

小町は俺の事をまるで屑を見るように見ていた。そ、そんな目で兄を見ないで!!

やはり魔王と貸切風呂でするのはまちがっている。

うつつす、比企谷八幡だ。陽乃さんの提案で俺、陽乃さん、小町、雪ノ下、由比ヶ浜、葉山、三浦、戸部、海老名さん、戸塚、平塚先生のメンバーで海に来ていた。

そこで俺は陽乃さんと外でSEXしてしまった。昼間の明るい内
にだ。

しかもそれを妹の小町に見られてしまった。俺と陽乃さんは砂浜
で正座で小町に説教を受けていた。

「いい！お兄ちゃんも陽乃義姉ちゃんも外であんな事をするなんて非
常識なんだからね！」

「……はい」

「分かったらもう二度としないでよ！見たのが小町だから良かったん
だかね!!」

「……はい。その通りです」

30分にも及ぶ砂浜での説教は流石につらい。正座した状態では
足が焼けてしまう。だからもう二度と昼間、外ではしないと俺と陽乃
さんは小町に誓った。

そして俺達は雪ノ下の母親が用意してくれた旅館に移動した。雪
ノ下は相変わらず体力が無いようで旅館に着くまでぐったりしてい
た。

旅館に着いた頃にはもう太陽が沈みかけていた。夏と言っても楽
しい時間はあつという間に過ぎてしまう。

まずやる事はお風呂に入る事だ。海で泳いだから少し身体がベタ
ベタするからな。陽乃さんがここの大浴場は中々凄いらしい。

ちなみにだが、平塚先生は海そつちのけで男を漁っていた。その証
拠に平塚先生の水着はビキニだった。しかも少し際どいものだ。

あれには俺もそうだが、来ていたみんなが引いていた。それでも男
は誰一人釣れなかったのがさらに虚しいな。

そしてお風呂の後はお待ちかねの夕食だ。旅館のコース料理は凄
かった。海が側なので海鮮料理が中心だった。

料理は宴会場みたな場所で全員で食べる事になっている。

「ゆきのん！これすごく美味しいよ！」

「だから落ち着きなさい由比ヶ浜さん」

「だべー！！隼人君！これ凄すぎだべー！！」

「そうだな。流石に豪華だ」

「ぐ腐腐腐っ……隼人×戸部はいい！」

「姫菜！少しは控えろだし！」

こんな感じで賑やかなものになっていた。俺としてはもつと静かに食べたかったな。リア充と食事なんて間違っている！

「八幡はもつと静かに食べたかったよね」

「……まあ、この際諦めますよ。連れて来てもらったんで文句はいいません」

「そうだよ。お兄ちゃん！こんなすごい所に泊まれるんだから感謝しなきゃ！」

俺の右には陽乃さん、左には小町が陣取っている。これは陽乃さん、小町、雪ノ下、由比ヶ浜の四人がジャンケンした結果だ。

雪ノ下と由比ヶ浜は負けた。まあ、俺としてもあの二人なんかより陽乃さんと小町の方が全然いいけど。

それにしても平塚先生は男が出来なかったようでやけ酒している。酔い潰れるのは時間の問題だな、あれは。

「卓球大会しよっ！！」

由比ヶ浜の一言で全員参加の卓球大会が始まった。それにしても由比ヶ浜は無駄に元気がいいな。

対戦カードは陽乃さんVS雪ノ下。俺VS戸塚。小町VS由比ヶ浜。葉山VS戸部。三浦VS海老名さん。

これに決まった。一回戦を勝ち残ったのは陽乃さん、戸塚、小町、葉山、三浦だ。

まず陽乃さんVS雪ノ下は陽乃さんの圧勝で終わった。そもそも海で遊んで体力を使い切った雪ノ下が動けるはずもなく負けた。

俺VS戸塚は俺が戸塚に見とれてしまってその隙に点を取られてしまった。流石、戸塚だ！

小町VS由比ヶ浜は凡ミスを連発した由比ヶ浜が負けた。小町の勝ちで終わった。

葉山と戸部は接戦だったが、葉山が勝った。どうでもいいけどな。最後は三浦と海老名さんだが、テニス経験者だった三浦に軍配があり三浦が勝った。

色々話は割愛するが優勝したのは陽乃さんに決まった。雪ノ下と由比ヶ浜がこれでもかと言うくらいに凹んでいた。

雪ノ下は体力全然ついていないな。

それからすぐに雪ノ下は部屋に戻った。恐らく寝たなあれは。由比ヶ浜は小町と戸塚の三人で旅館を探検してくるとかでいなくなっただ。

葉山グループは部屋に戻ってトランプをするそうだ。

そして俺と陽乃さんは貸切露天風呂に向かった。表向き俺は散歩してくると言っている。まあ、小町は全てを理解しているようでニヤニヤしていたがな。

陽乃さんとの貸切露天風呂は眺めがとても良かった。あと、背中の感触も。

むにゅ……むにゅ……

「んっ……こうして洗ってあげるのは久しぶりだね八幡♪」

「そうですね」

そう俺は今、陽乃さんに洗われていた。おっぱいスポンジで!!硬く立った乳首がいい感じに背中に触れている。

乳首が俺の背中と擦れるたびに陽乃さんの喘ぎ声がとても興奮させてくれる。

「んんっ♡……あんっ♡……んっ♡……」

「エロい声、出しすぎです……」

「出しすぎだと、何か悪いのかな♪あんっ♡ちよつと待つてね♪」
すると陽乃さんはいきなり俺の腕を自分の股で挟んで腰を前後させてきた。ど、どこでこんなエロい技を!?

身体を洗っているだけなのにこんなエロい事になるなんて!!

「は、陽乃さん。いつの間にこんな覚えたんですか?」

「えへん！私は八幡に気持ちよくなって貰いたいからそれなりに勉強しているんだぞ」

「そうですか……」

「そうだよ♪あんっ♡」

陽乃さんは俺の身体を肌を擦り付けて洗って洗ってくれている。俺の興奮がもの凄い事になっている!!もうビンビンにチンコが勃起している。

エロ過ぎだろ!?!ヤバイ、射精したい。

「陽乃さん。受け止めてくれませんか?」

「うん♡いいよ♪あ〜ん……」

陽乃さんは口を大きく手も使って開いてくれた。俺はそのまま喉奥までに突っ込むくらいに入れた。そして頭を掴んで腰を前後に動かした。

じゅぽっ……じゅぽっ……じゅぽっ……

陽乃さんの顔をまるでオナホのように扱うのはとても気分がいい。そろそろ射精しそうだ。俺は陽乃さんにチンコの根元までしっかりと啜えさせた。

「んんっ!」

「で、射精るー!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「のおおおおお……」

「んんっ……んんっ♡……んくんっ♡は、八幡のザーメン、とっても粘っこくて美味しいよ♡♡♡」馳走様」

「ホント、よく飲みますね?それ……」

「飲んでみる?」

「全力で拒否します!!」

誰が好んで自分から出てものを飲まなきゃいけない!?!これは少しお仕置が必要かもしれないな。

「陽乃さん。お風呂の縁に座ってください」

「縁に?わかった」

陽乃さんが縁に座ると俺は陽乃さんのマンコを舐め始めた。

くちや……ぺちや……ぺちや……

「んんっ!?は、八幡♡そ、そんないきなり♡だ、だめ♡♡」

ぺちや……くちや……ぺちや……

「あんっ♡き、きちやう♡い、いくううう……え?」

俺は陽乃さんのマンコを舐めるのを止めた。陽乃さんはどうして止めたのか不思議そうな顔をしている。その表情はたまらなく好きですよ陽乃さん。

「な、なんで途中で止めたの?」

「もつと気持ちよくなるためですよ。陽乃さん、俺の方にお尻を突き出してください」

「う、うん……」

「それじゃいきます……よ!!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひひひひひひ♡♡♡」

俺は陽乃さんの腰を掴むと一気に奥まで挿入した。その際の陽乃さんの声は中々に気持ち良さそうだった。そんな声を出されるともつといじめたくなるじゃないですか!

「もつと強めにいきますよ陽乃さん」

「ま、待って!?か、軽くイッたばかりだから……!!」

「ならなお更です……よ!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひひひひひひ♡♡だ、だめっ♡そ、そんなつよく、ひはらっ♡♡」

「もつと強くですね?」

「まっ——」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「うひひひひひひ♡♡♡♡♡♡」

「おおおおお……」

徐々に激しくしていくと陽乃さんはあまりの気持ちよさに奇声を上げていた。きつと目は♡マークになっているだろうな。

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「うひひひひひ♡♡♡……な、なか……あつい♡……」

ああ、スゲー気持ちいいぜ。陽乃さんも気持ち良さそうだ。腰がガクガクしてもう立っているだけで精一杯だからだ。

俺が支えていなかったらそのままお湯に浸かって溺れるな。

「陽乃さん？大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫じゃ……ない。気を抜いたら立てなくなる……」

まあ、あれだけやればそうなるだろうな。でも俺はまだ満足していない。俺は陽乃さんの足を挿んで器用に向きを変えた。

陽乃さんの顔が見られる体勢にした。

「えつと……八幡？」

「俺、まだ満足してないんで」

「ちよっ!?も、もう限界だから!」

「夜はこれからですよ?陽乃さん♪」

陽乃さんは顔を引きつらせていた。ホント、最高にいいじめがいきますね!

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「ひい♡」

「陽乃さん。期待していますね?」

「う、うん♡だから今度はもつといじめて?」

「了解です……楽しみしてください」

さっきのはそれほどSMは弱めだったからな。ならもつと強くもつと激しくしてあげますか。

本当に楽しみだ。露天風呂の貸切時間はまだたっぷりあるからな。

やはり魔王と夏祭りでエロい事をするのはまちがっている。

「うひひひひひひ♡♡♡」

「のおおおお……」

びゅるるるるびゅるるるる……

ども、比企谷八幡です。高三の夏休みに海の近くの旅館にある貸し切り露天風呂で、彼女の雪ノ下陽乃さんを犯しています。

かれこれ一時間になります。月光りに輝く海はなんとも言えない幻想な気分にかけてくれるな。

それにしても今夜は中々どうして結構射精したな。陽乃さんのお腹が少し脹らんで妊娠しているようだ。よし、ここは久し振りにアレでもやるかな。

「陽乃さん。久し振りに逆流ザーメンしますよ」

「は、はひひ♡……」

「……まあ、いいか」

意識がはつきりしていないが関係ない。

ずずずず……こぼっこぼっ……

俺は陽乃さんのマンコからチンコを抜いた。すると精子が溢れてきた。全部、出る前にしないとな。

俺は陽乃さんを抱えて風呂から出て背中に回り込んで倒れないように支えた。

「それじゃ……行きますよ」

「へえっ……」

ぐぐぐぐぐ……ぼっぼっ……

俺は子宮の上辺りの強く押した。そうしたら子宮にたんまり射精したザーメンがドバドバと出てきた。

「うひひひひ♡しゃ……しゃあめんぎゃひうで♡い、いくうううう♡♡♡」

「のおおおお……」

陽乃さんは気持ち良さそうに声を上げて、それに合わせてマンコから精子が出てきた。陽乃さんは気を失い掛けて身体が痙攣していた。俺は陽乃さんを抱いて露天風呂を後にした。とりあえず身体を拭かないとな。

陽乃さんの身体を拭いて服を着させてもらった。それから脱衣所で俺は陽乃さんが目を覚ますのを待った。陽乃さんはすぐに目を覚ました。

「……んんっ……あれ？私、寝てた？」

「寝ていたと言うより気絶してましたね」

「あははっ……いや〜八幡の攻めはとつても気持ちいいからついね♪」

「ついで気絶させてもこつちが困ります……」

ホント、運んだりするの大変なんだぞ！しかもそれが誰かに見られたら最悪だ。実際、小町にやっている所を見られたわけだが。

これからはしっかりと周りを見て気をつけよう！！

「それじゃ先に出るね。明日の夜も楽しもうね♪」

「え、はい。楽しみましょう。……んんっ？明日の夜？」

脱衣所から出て行く際に陽乃さんが言った事に俺は首を傾げた。はて？明日の夜が一体なんだと言うんだ？また特殊なプレイでもするの？

それはそれで楽しみだな。人に見られるか見られないかのギリギリの緊張感はなんとも言えない興奮があるかな。

よし、部屋に早く戻って寝て体力回復させて明日に備えるか！楽しみだな、明日の夜が。

「ゆきのん！金魚すくいがあるよ。しようよ！」

「やめておきなさい由比ヶ浜さん。ここからでは家に帰る前に金魚が

死んでしまう可能性があるわ」

「……そっか。そうだね！あ、あつちに林檎飴があるよ。一緒に食べよ！」

「ゆ、由比ヶ浜さん!？」

由比ヶ浜は雪ノ下を引つ張って行き一緒に林檎飴を食べていた。それにしても陽乃さんが言っていた。「明日の夜」とはこういう事か。ちなみに俺は浴衣を着ている。由比ヶ浜も雪ノ下も小町も戸塚も陽乃さんも着ている。葉山達も着ている。

旅館の近くの着物屋でレンタルしていたので折角なので夏祭りに合わせて着た。

まさか戸塚の浴衣姿を見られるなんて！俺はついている！

「……八幡。こつち」

「え？陽乃さん?」

俺はいきなり陽乃さんに林に連れ込まれた。

「んんっ……」

「んっ!？」

そこでキスされた。それもディープの方を。

「ぷあ……♡」

「は、陽乃さん?」

「……八幡。私、結構嫉妬深いから……」

「あ、はい」

さっきのキスは嫉妬の裏返しって所かな？人前するのはまだお互いに抵抗がある。まあ、変態プレイなら出来るのにな。

あ、ヤバい。勃起した。陽乃さんも密着して気が付いたようで離れて浴衣を器用にズラして挿入出来るようにお尻を向けてきた。

「いいよ。来て♡」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「んんっ♡」

「おおお……」

俺は陽乃さんのマンコの奥に一気に挿入した。陽乃さんは口を抑えて声を出さないようにした。ここで出せば見つかる。

俺は陽乃さんに密着して口を耳元に近づけた。

「……………ここでバレたら俺達の関係は終わりですね」

「そ、それはっ……………いやっ♡」

「ならどんな事があっても声を我慢して下さい」

「が、がんばるっ♡」

もう我慢の限界に見えるのは気のせいではないな。たぶん、一突きでもすれば声が出るな。でも俺はそれを進んでする。

だって、陽乃さんをいじめるのが楽しいから!!

ずずずずずっ……………ぱんっ!!ずずずずずっ……………ぱんっ!!ずずずずずっ……………ぱんっ!!

「んんっ!?うひい————」

大声が出そうだったので俺が手で口を抑えた。

「ゆきのん。何か聞こえなかった?」

「そう?私には何も……………それにしても比企谷君と姉さんはどこに行ったのかしら?迷子なんて情けない」

「ゆきのん。たぶん、あたし達の方が迷子じゃ……………」

「そ、そんな事はないわ!次はこっちの道を行きましょう!」

「ま、待ってゆきのん!」

今のは由比ヶ浜と雪ノ下か。抑えてよかった。危うくバレる所だった。それにしても雪ノ下は相変わらずの迷子になる体質は直っていないんだな。

そう広くはないと思うが。そろそろ合流した方がいいか。でもその前に射精しないと。

「陽乃さん。そろそろ射精しますね」

「ぎ、きてっ♡♡」

「では……………」

ずずずずずっ……………ぱんっ!!ずずずずずっ……………ぱんっ!!ずずずずずっ……………ぱんっ!!

「んんっ♡だ、だめっ♡こえっ♡でちやうっ♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……………びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「い、いぐううううう♡♡♡」

「ちよっ!?!声!」

陽乃さんは俺の射精でイッたようだ。それにしてもさっきの声は大丈夫か? 周りを見たが、誰もいなかった。よかった。

見つかるスリルが味わえればいいが、見られたら色々不味いからな。俺と陽乃さんは乱れた浴衣をきちんと直して由比ヶ浜達と合流した。

「まったくどこを歩いていたのかしら? 迷い谷君」

「人を入ったら出られない場所みたいに言うな。てか、迷子になっていたのはお前の方だろ」

「な、何を言っているのかしら? 分からないわ!」

雪ノ下は自分が迷子になったとは是が非でも認めないらしい。すると葉山達も現れた。向こうは向こうで楽しんでいたようだ。

小町と戸塚も楽しんだようだ。手には屋台で買ったと思われる品が大量にあった。

この後、花火大会があるが雪ノ下は歩き疲れたので小町と戸塚、由比ヶ浜と旅館に戻る事にしたらしい。

葉山達は花火大会を見て戻るそうだ。俺も帰ろうと口にしたら陽乃さんが後ろから抱き付いてきた。

「君はもう少しお姉さんに付き合ってよ♪」

「はあ……」

「それじゃまたねみんな♪」

俺は陽乃さんに強引に連れて行かれた。またしても林に。そこでまたキスしている。

「んんっ♡」

「んっ……」

「ぶあ……♡♡やて、♡♡で続きしよ♪」

「了解……」

陽乃さんはさっきしただけでは満足していないようだ。まあ、俺もまだ満足していないんだけどな。

俺は陽乃さんのマンコを触って分かったが、この人ノーパンだ！

「陽乃さん。もしかして下着、着けていないんですか？」

「うん♪着物だと下着のラインが見えるんだよね。それに無い方が興奮するでしょ？」

「ええ、早く犯したいです」

「あはあ♪八幡のおチンチン、もう固いね♡♡」

今回は向かい合ってするつもりだ。陽乃さんの片足を手で上げて挿入しやすいように体勢を整えて挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「んんっ!?うひい♡」

「おおおおお……」

さつきしたばかりなのに凄い締め付けてくる。陽乃さんは声を我慢しようとしたが、出来なかった。そんな声を出されるともつといじめたくなるじゃないですか。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「は、はちまんっ♡はげしすぎっ♡♡」

「それは陽乃さんのような美人な彼女をこうして外で誰かに見られるかもしれない状況で犯しているからですよ！陽乃さんはどうなんです？止めますか？」

「い、いじわるっ♡いわないですよ♡♡この、ぞくぞくするの。すごくすぎっ♡♡」

「ですよねー」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

腰を動かしながら陽乃さんに賛同した。このゾクゾク感は一度味わうとやみ付きになる。それだけの興奮がある。

でもそろそろ来る。

「陽乃さん！射精ます！」

「ぎ、きてえええ♡ぜんぶ、ちようだいっ♡♡」

びゅるるるるびゅるるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「ぐう……」

「うひいひいひい♡♡♡……はあ♡……はあ♡……」

搾り取られる。金玉の精子が陽乃さんの子宮に根こそぎ持つていかれるようだ。でもこの瞬間が最高にいい。

全ての事を忘れられる。目の前のメスとだけの事しか頭にない。ずずずずずつ……こぼっこぼつ……

陽乃さんのマンコからチンコを抜くと精子が逆流してきた。毎回思うが結構な量を射精しているよな。

「あは♪……ホント、凄い量だよな、これは」

「自分でもそう思います」

「……実は今日、危険日で薬飲んでいないんだよね」

「え!?ほ、ホントですか!!」

俺は陽乃さんの言葉に頭が白くなってしまった。陽乃さんの口調からこれはマジだ。これは陽乃さんの親御さんに社会的に殺されるな。

「——なんてね♪」

「二週間、お預け!」

「ぐ、ごめん!」

俺は陽乃さんの悪戯にイラついてお預けする事にした。本気で信じた自分がとてつもなく恥ずかしい。

それから服を整えてから屋台で軽く食事を済ませてから花火大会を見てから旅館に戻った。帰る際にビールを飲んで酔った平塚先生を二人で担いで戻る事になった。

平塚先生は昨日同様にナンパを期待していたが、まったく来なかった。自分から行ったがまったく相手にされなかったらしい。

寝言で愚痴を俺と陽乃さんに言ってきた。言った事でスッキリしたのか旅館についてすぐ寝た。

「いや〜楽しい旅行になったね八幡♪」

「そうですね。ちよつとヒヤツとした所がありましたけど……」

旅館に戻った俺は陽乃さんと二人で話していた。

「次は二人きりでどこか行こうね♪」

「そうですね。次は北海道とかですかね？」

「そうだね。海水浴の次はスキーもいいかもね！」

そこから俺は陽乃さんと次の旅行の事を話し合ってから部屋に戻って寝た。今回の旅行の費用を持ってくれた陽乃さんのお母さんには感謝しないとな。

お土産を陽乃さんに渡してもらおうようにしてもらった。次の旅行のために何かいいバイトでも無いだろうか？

帰ってから調べてみるかな。そして次の日の朝に俺達は旅館を後にした。

やはり魔王が幼くなるのはまちがっている。

「うひひひひひひ♡♡♡」

「のおおおお!!」

「い、いぐうううう♡♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

うつす、比企谷八幡だ。俺は今、魔王とSEXに励んでいる。バツクで突きまくっている。たまにお尻を叩き、手形を残している。

陽乃さんは後ろからが一番大好きなのだ。俺のチンコが一番奥まで突くからだ。それに身体を密着させる事も出来るからな。

それにしても射精が止まらない。毎晩、陽乃さんとはヤッているんだが、それでも精が簡単に尽きない。体力作りが効いてきたのか？

まあ、どちらでもいいか。陽乃さんを長時間犯せるのだから。でも最近、マンネリ化してきている。

何か解決方法を探しているけど、これと言った解決策が見つからない。いつその事、葉山辺りにでも陽乃さんとしてもらうと言うのも手だな。

だけど、陽乃さんが他の男で感じているのを見るのはなんか嫌だな。ならNTRは禁止だな。

「はあ♡……はあ♡……さ、最高でした。ご主人様♡♡」

「まったくこのメス犬はいつも犯しているのに最高の締めりだな!」

「はい♡ご主人様に満足してもらうために頑張っています♡」

「そうか……偉いぞ陽乃」

俺は陽乃さんの頭を撫でた。すると陽乃さんは犬のように嬉しそうな反応を見せる。まだチンコを抜いていないのでマンコの締めりが気持ち良さを俺に伝えてくれる。

なら今夜はもつと攻めないとな。

「今夜もまだまだぞ」

「はい♡このだらしなメス犬陽乃を躡けて下さい♡♡」

「ああー！」

「うひい!？」

俺は右手で陽乃さんのクリトリスをグリグリとすり潰すように抓んで、左手で胸を指が食い込むくらい押し込んだ。最後に耳に噛み付いた。

陽乃さんはいきなりの三点攻めでマンコをさらに締め付けてきた。

「い、痛い!?!ご主人様!痛いです!!」

「止めて欲しいのか?ならもう二度としないぞ?」

「……いじわるすぎです……もつとしてください♡♡」

「よく言った!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずず

ずつ……ぱんっ!!

「うひいいい♡」

三点攻めに腰を打ち付けるのは相当気持ちいいようだ。俺はさらに腰を動かした。さつき、イツた陽乃さんはかなり敏感になっているはずだ。

そこにさらに追い討ちの予告なし射精だ。

びゅるるるるびゅるるるるつ……

「うぎいいいい!?!……ああっ……おなかっ♡♡あついつ♡♡ま、まっつー!」

じよろろろろつ……

陽乃さんは小便を漏らした。本人は止めようとしているけど、出るのは止められなかった。これは明日、ベッドの掃除が大変だな。

陽乃さんは気絶するように眠ってしまった。さつきのは確かに俺も相当気持ち良かったけど、満足するものではなかった。

「陽乃さんが幼くなれば面白いんだけど……無理か」

俺も寝る事にした。だけど、俺は翌朝にとんでもないものを見る事になる。

カーテンから朝日が差し込んでいる。もう朝か。部屋にある時計

を見てみると8時を越えていた。陽乃さんはもう起きているのか？
キッチンからは匂いも音も感じられない。ふと布団の一部が盛り
上がっていた。

「そこに居たのか。陽乃さん、朝です……よ」

「うくん……もう朝なの？どうしたの八幡？」

「だ、誰だ！お前!？」

「何言っているの?」

俺は今、自分が置かれている状況を把握出来ていない。朝、起きて
みるとベッドに見ず知らずの中学生くらいの女の子が全裸で寝てい
たのだ。

「ここは陽乃さんと俺の部屋だぞ!」

「うん。そんなの今更言う事でもないよね?」

「……陽乃さんですか?」

「雪ノ下陽乃さんですけど?」

俺は愕然とした。目の前に居るのがあの陽乃さんだ?!ありえな
い。それにしても陽乃さんは自分がどんな姿になっているのかまだ
分かっていない。

とりあえず、陽乃さんには自分の姿を見てもらうか。

「陽乃さん、顔を洗ってきてください」

「うん。分かった……あれ?なんだか床がいつもより近いような?」

陽乃さんも少しは疑問に思ったようで首を傾げながら洗面所に向
かった。果たしてどのような事になるか。

「——きやああああ!!」

洗面所から悲鳴が響いた。そしてドタドタと足音がこっちに近づ
いてきて扉が勢いよく開いて陽乃さんが入ってきた。

「は、八幡!!私……幼くなっている……」

「ええ、中学生くらいには幼いですね」

「ど、どうして!?!ここ、これじゃ八幡を悩殺出来ない!?!」

「今、気にする所がそこですか!?!」

もつと他に気にならないのか?すると陽乃んは俺の肩を掴んで前
後に揺らし始めた。そんな揺らさないで!

「それよりどうしてこんな身体になったのか」

「実は陽乃さんはどこぞの黒の組織に謎の薬を飲まされたとか？」

「私はどんな謎でも解く高校生探偵じゃないわよ!!」

「ですよね……」

それなら謎が深まるな。調べようにも病院に行くわけにはいかな
いだろう。

「取り合えず、経過を見てみましょう。幸い夏休みですから」

「うん……そうする。あああ……私の自慢の巨乳が雪乃ちゃんくらい
まで無くなつたよ」

「それ、本人の前で言ったら発狂するんで控えてください」

確かに去年、千葉村で雪ノ下の水着を見た時にだいたいの大きさは
分かったからな。俺のチンコが挟んで隠れるくらいの巨乳だったに
な。

今はその影すら無い。貧乳一歩手前くらいだろうか？でもどうし
て陽乃さんの身体は幼くなつたんだ？

そもそも現実で身体が小さくなるとか無理だろ。

「陽乃さん。まず服を着た方が。風邪引きますよ」

「うん。そうだね。何かあつたかな……」

陽乃さんは服を探しに部屋を出て行ってしまった。俺はやる事も無
いので朝食と言うより早めの昼食に取り掛かった。

昼は軽くサンドイッチでいいか。それにしても陽乃さんは遅いな
？服が無いのだろうか。

「お待たせ〜どう？似合う」

「……何故、そのチョイス？」

「似合うでしょ？」

「確かに……」

陽乃さんが着ているのは制服だった。それも中学の時のだと思わ
れる制服だ。いつの間にか持ってきていたんだ？

「引越す時に整理していたら懐かしくて持ってきたんだよ。持って
きておいて正解だったよ」

「確かにそうですね」

「これなら八幡の事をお兄ちゃん！って言っても可笑しくないね♪」
「ぐっ……陽乃さん。もう一度言ってもらってもいいですか？」

「うん、いいけど。お兄ちゃん♪」

「上目使いで！」

「お兄ちゃん……」

「がはっ……」

幼い陽乃さんの『お兄ちゃん』攻撃に思わず8万ダメージだ!! 幼い陽乃さん、いい!! 多少大人びているけど、幼さの方がその上を行っている。

陽乃さんと色々遊んで時間を潰していたが、元の陽乃さんに戻る事はなかった。そして外はすっかり夜になってしまった。

「夜になっても戻らない……このままじゃ八幡を悩殺出来ないよ！」

「気にする所、やっぱりそこなんですな……」

「それはそうだよ！それにこんな姿じゃ大学にだって行けないよ……」

「言った所で不審者扱いがいい所ですかね？」

「だよね……」

陽乃さん、落ち込んでいるな。珍しい事もあるもんだな。俺はここでふと思った。今の幼い陽乃さんを犯したらどうなるんだろうか？

誰が大学生が中学生になったと思うだろうか？今しかないのでは？そうと決まれば即行動だ！

「陽乃さん」

「うん？何、八幡——きやあ!?!ちよ、何!?!」

「すみません。我慢出来ないんで」

「ま、待って——んんっ!!?」

俺は陽乃さんをベッドに押し倒してからガムテープで腕を動かせないように固定して、口を塞いだ。まるでレイプしているようだ。

いや、レイプするのか。まあ、どっちでもいいか。では早速始めますか。

「あんまり暴れると怪我しますよ?」

「んんんっ!!?」

「何言っているのか、分かりません」

俺は陽乃さんのパンツをゆつくり脱がした。そこには見慣れている陽乃さんのマンコはなく、まるで汚れを知らない可愛いマンコがあった。

マン毛は少し生えてきているな。綺麗に整えていないのだろう。これは綺麗にしないとな。

くちや……くちや……

「んんっ♡♡」

「いつも以上に濡れていますよ？興奮しているんですね」

「んんっ!!んんっ!」

「それじゃ行きますね!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「んんんっ!!」

「おおおお……キツイ。あれ?血……もしかして処女膜が元に戻ったんですか?」

まさかチンコをマンコに挿入したら陽乃さんの股から血が流れてきた。身体が若返ったら処女膜まで戻るとは嬉しい誤算だ。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「んっ!んんっ♡♡んんんっ♡♡」

「陽乃の中学生マンコ!締めまりが凄くいいぞ!いつまでも犯してられる!!」

今までにないマンコの締め付けだ。だからなのか腰が勝手に動いてしまう。本能を止められない!?

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「んんっ♡♡んんっ♡♡んんっ♡♡」

「凄い!突けば突くだけマンコも締め付けてくる!!」

いつまでも犯していたいけど、そろそろ限界が近づいてきた。俺は陽乃さんに抱きつき、チンコをマンコの奥底まで突っ込んで身体を固定した。そして射精した。

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「んんんっ♡♡♡」

「のおおおお……し、搾られる……最高だ！」

陽乃さんの中学生マンコは俺の精子をどんだん搾り取ろうと蠢いていた。普段とは違う気持ちよさがそこにはあった。

大人マンコもいいけど、子供マンコもどちらもいい。最高に気持ちいい。どんだん精子が射精してしまう。

「んっ……んんんっ……」

「あ、ヤバっ……」

陽乃さんは俺の射精で絶頂したようで痙攣していた。涙を流しながら意識が飛んでいた。身体がピクピクと反応のしているのはちよつと面白い。

俺は口のガムテープを取った。

「ひ、ひどいよはちまん……か、からだがいくのとまんない……」

「ああああ……そんな時に申し訳ありません。もう1回戦行きますね」

「ま、まってーい、いまされるとし、しんじやう」

「大丈夫です。今度は優しくしますんで！」

「ちよつと——」

俺は絶頂した陽乃さんにお構いなしに腰を動かした。その日は記憶が曖昧だ。何回陽乃さんに膣内出しをしたのか覚えていない。

そして最後の射精した後、俺はそのまま陽乃さんに倒れるように眠りについた。

「あれ？」

「おはよ♪八幡」

「陽乃さん？」

「なくなくお姉さんのナイスボディに見惚れて」

朝、起きてみると陽乃さんの身体は元の大学生の身体になってい

た。寝たら直ったのか？それは嬉しいような残念なような。

「どうしたの？」

「いえ、何でもないです」

「そ、なら朝食にしよ♪」

陽乃さんはそのままベッドから出てキッチンに向かった。幼い陽乃さんを犯すのはいい刺激になったな。今夜からのプレイに気合が入るもんだ。

次はどんな事をしようかな？

やはり魔王が増えるのはまちがっている。

うつす。比企谷八幡だ。俺は今不可思議な事に襲われている。両腕が重いのだ。片腕ならまだ分かる。陽乃さんが俺の腕を枕にして寝ているからだ。

しかし陽乃さんの頭は一つだけだ。なら両腕が重くなる事はない。俺は怖くて目が開けられないでいた。もし目の前に陽乃さん以外の女性が居たら修羅場確定だ。

だけど、俺は陽乃さん以外の女性と関係を持った事はない。断言する。え？人妻二人にOLになった元クラスメイトとよろしくやっただろ？って。

何の事かさっぱりだな。でもいい加減、確かめるか。俺は意を決して目を開けた。

まずは右側を確認した。スヤスヤと寝ている陽乃さんの寝顔だ。美人で寝てても綺麗なんだな。まずはこっちは問題なしだ。次は左だ。

左側を確認した。そこにはスヤスヤと寝ている陽乃さんの寝顔があった。いい夢でもみているのか少しだけ笑っていた。

「なんだ……両方陽乃さんかよ……焦って損した……うん？可笑しくないか？」

雪ノ下陽乃さんはこの世に一人だけだ。なのに俺の両腕に居るのは可笑しくないか!?もしかしてドツペルゲンガーってやつか!?

でもあれって確か二人が出会えばどちらかが消滅するんじゃないやなかったか?それなら二人居るのは絶対に無理だ。一先ず起こすか。

「陽乃さん！起きて下さい。緊急事態です！」

「うーん……もう少し寝かせてよ。大学の論文で疲れているし、八幡分が足りない……」

「んんっ……もう八幡、プレイの続きはお昼からにしよう?今日は日曜だよ……」

二人の陽乃さんは起きる気がないようだ。ここはSで起こすか。そっちの方が絶対に起きるだろうな。

「早く起きれば、前に言っていたSMホテルで調教してあげるって言ったら？」

「はい！起きました！」

「うん！ばっちり起きたよ！」

「……え？わ、私？」

「うそ？私なの？」

陽乃さんは目の前に居る自分と同じ顔の人物に心底驚いていた。開いた口が塞がらないとはまさにこの事だろう。

「……なくんだ。八幡、いつの間に寝室にこんな大きな鏡を置いたの？」

「なんだ、鏡か。びっくりさせないでよ、八幡」

「……か、鏡じゃない!？」

「……か、鏡だよね!？」

「いえ、ここに大きな鏡はありません。触れば一発で分かりますよ」

陽乃さんはお互いに触りあった。髪を触れ、肌を触れ、最後に胸を揉み合った。最後のはいらないと思うけどな。

「八幡……どうしようか？私が居る」

「八幡……どうなっているの？私が居るんだけど」

「とりあえず、服を着てから飯にしてから話し合しましょう」

「一番、冷静だね！」

「流石は理性のバケモノだね！」

俺と二人の陽乃さんは一先ず着替えた。あんな男殺しのナイスボディが二つとか死んでしまうわ！鼻血を出して。

それにしてもどうして二人に増えたんだ？まさか……幼くなった副作用？な訳ないか。

「どうしたの？八幡」

「どうかした？八幡」

「いえ、ちょっと……」

三人で朝食を食べている時に俺はテーブルの向こう側に二人を並べて観察してみた。プロボッチの俺に掛かれば、どちらが偽者なのかすぐに分かると言うものだ。

だてに陽乃さんの彼氏ではないからな！さあ、どちらが偽者だ!?

「どうしてだ……」

結果から言うところの二人の陽乃さんはどちらも本物と言うことが分かった。試しに質問して分かった。

「陽乃さん。風邪を引いた時に俺は何をしました？」

「お尻に座薬を入れた」

「胸に指が食い込むとどう感じますか？」

「痛いけど、最高に気持ちいい」

「次のプレイは深夜のメス犬徘徊ですけど、格好に希望はありますか？」

「全裸首輪で！」

と、全ての回答がまったく同じなのだ。変態が二人に増えるとうごく疲れる。どうして、増えたのかは後に回してどうこれから生活するか考えるか。

風呂に入りながらそんな事を考えていた。

「八幡♪身体を洗ってあげるね！」

二人の陽乃さんが強引に入ってきた。いつも一緒に入っているので今更だけど。すると一人は前にもう一人が後ろに周り込んだ。何をやる気だ？

「八幡はこれが興奮するでしょ♪」

「八幡はこっちの方が興奮するんだから♪」

前はチンコを胸で挟み、後ろは胸を背中に押し当ててきた。まさかこんな最高に気持ちいいプレイが楽しめるなんて幸せだ！

「ほらほら……おチンチンはすっかり元気になったよ♪」

「ふくん……でもそれは背中にある私のおかげでしょ？」

「何言っているの？八幡はパイズリが気持ちに決まっているじゃん！」

「そっちこそ、何を言っているの？八幡は押し付けられる方が気持ちいいにきまっているじゃん！」

前と後ろで二人の陽乃さんが喧嘩を始めた。俺を挟んでしないで欲しい。気持ちいいのを優先しているので無視している。

だって、こんな体験もう二度と出来ないかも知れないからな！

「何よー！喧嘩なら買うわよー！」

「ふん！どつちが八幡に相応しいか！白黒はつきりさせるべきね！」

「もう五月蠅い！お前らは黙って尻を並べろ！」

「はい♡ご主人様♡♡」

つい五月蠅かったのでSで対応してしまった。仕方ないじゃないか。本当に五月蠅かったんだから。

それにしても絶景かな。叩きがいのお尻が二つ並んでいる。しかも左右に振っている。これは一種の挑発だ。

早く叩いて、と言う。俺は両手を上げて、一気に振り下ろした。

ばっちん!!

「うひい♡も、もっと……」

「このMどもめー！」

ばっちん！ばっちん！……ばっちん!!

「あっ♡んんっ♡♡うひい♡」

連続や間隔を空けてお尻を真っ赤になるまで叩いたら二人の陽乃さんはそのままへたり込んでしまった。愛液がドバドバと出ている。

絶頂したな、これは。これには俺のチンコが爆発寸前だ。

「おい！メス犬ども。パイズリで射精させろ」

「はい。ご主人様♡♡」

むにゅむにゅ……むにゅ……

左右から巨乳にWパイズリに俺は感動を覚えてしまった。いつもと違う四つの胸に俺は射精してしまった。

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「あんっ♡八幡の精子、どうぞ♪」

「んんっ♡八幡の精子、ありがと♪」

二人の陽乃さんが顔についた俺の精子を仲良く舐めあっていた。百合、ご馳走様です。精子を舐めている二人の顔はうっとりしていて

いた。

それと二人が物足りなさそうに視線を俺に送ってきた。

「ベッドに行くぞ」

「はい♡」

風呂場からベッドの上に移動した。二人の陽乃さんは今か今かと我慢出来ずにオナニーを始めていた。そんなの見せられたらとことん犯したくなるじゃないか。

「陽乃。一人は仰向けなって、もう一人がその上に覆い被さるよにしる」

「こ、こう?」

「自分の上に自分が居るのって変な感じ」

「腰が浮いているぞ」

俺は挿入せずに陽乃さんのクリトリスで俺のチンコを挟むように陽乃さんの腰を押さえつけた。3Pじゃなければ出来ないプレイだ。

「は、八幡……クリが熱い♡」

「せ、切ないよ……挿入してよ♡」

「まだ駄目だ!」

俺は腰を前後に振ってクリトリスを刺激した。チンコに二人のクリトリスがいい刺激を与えている。

「あんっ♡んんっ♡だ、だめっ♡いっちやうっ♡♡」

「んっ♡あっ♡こ、これっ♡き、きちやう♡♡」

「お、俺も射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ

……

「あああああああ♡♡♡♡」

陽乃さんのお腹の上に大量に射精してしまったな。まさかやってみたいプレイがここまで気持ちいいものだとは思わなかったな。

「は、八幡の精子だ♪」

「はい。どうぞ」

「ありがとう♪」

またしても精子のおっそ分けをしている。手ですくって相手の口まで近づける。本当にこの人達は俺をどこまで興奮させてくれるんだろうか。

俺は上の陽乃さんのお尻を掴んで一気に挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひひひい♡♡♡」

「いいな。先に挿入してもらって。ならお手伝いするね♪はむっ」

「だ、だめっ！乳首、敏感にっ！」

「はむっはむっ」

下の陽乃さんが上の陽乃さんの乳首に吸い付いたようだ。空いている乳首は指で摘んでいる。するとマンコの締めまりがよくなったぞ。自分に攻められて感じているようだ。本当に今更だけど、変態だな。

「どんどん行くぞ」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずず

ずつ……ぱんっ!!

「だ、だめっ♡い、いっちやうっ♡」

「で、射精るー!」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるびゆるるるっ

「うひひひひひい♡♡♡♡」

射精したら上の陽乃さんが絶頂して、そのまま下の陽乃さんに倒れこんだ。チンコをマンコから抜くと精子が逆流してきた。エロい。

「もく……重いからどいてよ〜」

ずずずずずつ……ぱんっ!

「のおおお♡♡い、いきなりっ♡♡」

俺は動けない下の陽乃さんのマンコに挿入した。油断したのか、一気に奥まで到達する事が出来た。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

なんだったんだ？陽乃さんに聞いてみたが「何の事？」と言われてしまった。あれは俺の夢だったのか!?
とんだ夢才チだな。よし、もう一度同じ夢でも見てみるか。

やはり魔王とキャンプをするのはまちがっている。

うつつ。比企谷八幡だ。俺は今、山に来ている。登山ではなくキャンプだ。ただし俺一人だけではない。前の俺だったら一人でもこんな山奥まで来ないだろう。

それに今は夏休みとはいえ、大学受験の時期だ。こんな所で遊んではいられないけど、俺には強い味方の陽乃さんが居る。

彼女のおかげで志望大学に十分入学圏内に入る事が出来た。だから少し余裕があるし、リフレッシュが必要でキャンプに来た。

「八幡、そっちは終わった?」

「はい。終わりました」

俺とキャンプに来ているのは彼女の陽乃さんだ。このキャンプ場は陽乃さんの父の友人が管理している場所の穴場らしい。

しかも道具一式レンタル出来るのでいい場所だ。そもそもどうして俺と陽乃さんがこんな山奥のキャンプ場に来ているかと言うと陽乃さんの一言で決まったのだ。

『海に行った事だし次は山だね♪』

こんな感じで決まった。陽乃さんの行動力を俺は舐めていた。次の日には山の中なのだから驚くわ!でもこんな自然の中に居るのはたまにはいいかもしれない。

インドア派の俺には無縁だったからな。それにしても陽乃さんは楽しそうだな。そんなにキャンプがしたかったのか?」

「楽しそうですね?」

「それはもちろんだよ!八幡と二人つきりなんだよ。これでイチヤイチャ出来るじゃない」

「普段からやっていると思うんですけど?」

「でもここ一週間は雪乃ちゃんやガマハちゃんと勉強会で全然相手してくれなかったじゃない!」

「それは……」

大学受験に由比ヶ浜が勉強会をやろうと誘ってきた。最初は断っていたが、雪ノ下がそれを怪しんで仕方なく勉強に参加した。

朝から夕方まで勉強漬けは流石に疲れて、帰ってすぐベッドの直行して確かに陽乃さんの相手を疎かにしていた。そこは反省している。

「んんっ♡」

「んっ……」

だから陽乃さんのいきなりのキスも受け止める。陽乃さんが腕を俺の首に回してガツチリとホールドして離さなかった。

俺は陽乃さんのお尻を揉んで準備に入った。

「ぶはあ……それじゃ八幡、始めよ♪」

「はい。それじゃ陽乃、服を全部脱げ」

「はい♪」

俺の命令口調に陽乃さんは嬉しそうに服を脱ぎだした。その行動に迷いが無いのが逆に怖いと思うんだよな。もしかして陽乃さん、俺が死ねとか言ったら実行したりしないよな？

「どうしたの?」

「いえ、なんでもありません」

陽乃さんの全裸なんて見飽きたと思っただけど、そんな事はないな。グラビアアイドルが裸足で逃げ出すだけのプロポーションがそこにはあった。

大きな胸、細い腰、丁度いいお尻などこれを見て、惚れない男はホモくらいだろう。

「陽乃。そこに糞を出せ」

「はい。ご主人様♪うぐっ……」

陽乃さんはガニ股になつて踏ん張っている。歯を食いしばり、捻り出そうと頑張っている。それにしても酷い顔になっている。

誰にも見せられない顔だ。俺だけが独占出来ている。なんとも言えない優越感がある。

ぶぶぶぶっ……ぶぶぶぶっ……

「で、でた♪あ……」

ちよろろろろっ……

陽乃さんは糞を出した快感でオシッコまで出てしまったようだ。まったくこのメス犬はなっていないな。

俺は陽乃さんの後ろに回り、手を広げて振り下ろした。
ばちんっ!!

「うひい!?ど、どうして?」

「誰が小便まで出せと言った?糞だけでと言ったんだぞ。陽乃、お前は主人の命令一つ満足に遂行する事が出来ない駄犬なのか?」

「ち、違います!」

「ならそのデカいだけの胸を使って俺を満足させろ」

「は、はい!はむっ……れろっ……」

俺は折り畳み椅子にズボンを下ろして座った。半立ちしているチンコを胸で陽乃さんは挟んだ。相変わらずの乳圧だ。これだけで射精してしまいそうだ。

胸から出ているチンコの先を咥えて舌を巧みに動かして腰が砕けそうになりそうだ。

「で、射精る!」

「んんっ!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるるっ

……

俺は陽乃さんの頭を抑えてチンコを喉奥まで押し込んだ。この無理やり押し込む感じが最高なんだよな。

「陽乃。絶対に溢すなよ。溢したら10日お預けだ」

「んんっ!!うぐっ……全部飲みましたっ♡」

「いい子だ」

「あ、ありがとうございますっ♡」

俺が陽乃さんの頭を撫でると嬉しそうに笑ったよ。本当に犬のような人だな。だから俺はこの人を犯したい。

誰にも渡したくない。俺だけがこの人を犯せるんだ。もつとこの人を俺で染めてみたい。

「陽乃。尻をこっちに向ける」

「はいっ♡」

「さっきの小便と糞の臭いがするな」

「そ、そんなに嗅がないでください」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡い、いきなり奥までっ♡♡」

俺は向けられた陽乃さんの腰の辺りを掴んで一気に子宮の奥まで挿入した。相変わらず陽乃さんのマンコの締め付けは最高だ。

こんな最高のマンコを犯せるなんて俺は幸せ者だと思う。

「なんだ？陽乃は奥が突かれるのが好きだろ？それとも動かないでおいこうか？」

「も、もう……いじわるしないで。ガンガン奥を突いて子宮に思いつきり射精してよっ♡」

「分かったぞ!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡い♡♡お、おくまできてるっ♡♡」

「のおおお……凄い締め付け!」

「ぐりぐりしちゃだめっ♡♡おかしくなるっ!」

突きながら腰を回してみると陽乃さんは泣いて喜んでいて。頭が可笑しくなるで嬉しそうと思ってる俺はヤバイ奴かもしれない。

そろそろ膣内でするか。俺はさらに腰の動きを激しくした。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「い、いくうううう♡♡も、もうすこしゆっくり!」

「何言っているんだ？もっど行くぞ!」

「ひいひい♡♡♡」

俺が腰を突き出す度に陽乃さんは悲鳴を上げていた。マンコの締め付けを強めておいて何がゆっくりだよ。

激しいプレイが好きで癖にこんな時だけ優しくしてなんて何を言っているんだ？このメス犬は!

「で、射精るぞ!」

「いぐうううう♡♡♡」

「射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡……はあ……はあ……はあ……はあ」

最高の射精だった。陽乃さんのマンコは俺のチンコから精子を搾り取ろうと蠢いているし、野外SEXはいい。

外野が居るかもしれないのもいいけど、誰も居ないのもいいな。

「陽乃。まだやる事があるだろ?」

「は、はい。失礼します。はむっ……れろっ……」

陽乃さんは俺のチンコに付いた精子を綺麗に舐め取っている。たまにこの人が年上だと忘れてしまう。これ、雪ノ下が見たら絶対にドン引きものだな。

それにしてもいい加減、雪ノ下や由比ヶ浜に俺が陽乃さんと付き合っているのを言わないとな。

黙っているのも今の関係を壊してしまいそうだけど、言わないままなのは二人を裏切っているようで後ろめたいんだよな。

「ご主人様?」

「陽乃。誰が止めていいと言った?ちゃんと金玉も舐めて綺麗にするんだ」

「はいっ♡かしこまりました!れろっ」

陽乃さんは俺の金玉まで舐めて綺麗にしていた。舌を器用に使って、ここまで出来るなんて凄いな。おかげで再び俺のチンコは勃起した。

それを見た、陽乃さんは目を輝かせていた。まだまだ犯してあげますからね。

「陽乃。前を向け」

「はい。好きなだけ私を犯してください♪」

「うわぁ、エロ」

陽乃さんは自分からマンコを開いた。そこから俺が先ほど射精した精子が溢れていた。凄い量だとは毎回、思うんだよな。

俺って実は精子を作る機能が変なのだろうか!?

「行くぞー!」

「はいっ♡」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひひひ」

「まったく正面から突いただけでイッたのか？」

「はいいい♡♡ご、ご主人様の極太チンコで簡単にイッちゃいました♡♡」

「このド淫乱が！」

「はいいい♡♡私は淫乱っ♡♡」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

陽乃さんは俺に抱きつき腰を自分から振った。目の前で巨乳がバインバインと上下に揺れるのを見ていて興奮する。

俺は乳首にしゃぶり付いて、舌で乳首をこね回した。

「ち、乳首っ♡いいいいいい♡♡」

「ちゅっ……はむっ……」

「もつとーもつと乳首噛んでっ♡♡」

「ちゅっ……れろれろっ……」

「い、いっちやううう♡♡」

陽乃さんは乳首を攻められてさらに腰を激しく上下に振った。こんなに激しくされると簡単に射精してしまいそうだ。

「は、陽乃！射精るぞ！」

「だ、射精して！一番奥にっ♡♡」

「で、射精るー！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡」

俺は陽乃さんの腰をしつかりと掴んで子宮の奥へと射精した。同時に陽乃さんは絶頂したようだ。

陽乃さんのマンコが俺のチンコから精子を搾り取ろうと蠢いている。どれだけ搾り取るつもりなんだ！

「ま、まだ射精るー！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「あ、あふいっ♡♡ひゃへど、しちやうっ♡♡♡」

ダメ押し最後の射精が出た。もう頭の中が真っ白になってしまった。陽乃さんが絶頂の余韻で動けないので身体を俺に預けてくる。

その際に胸を押し付けてくるのですぐに俺のチンコが元気になっ
てしまう。陽乃さんのマンコの中で勃起したままで困っている。

「ご、ご主人様っ♡綺麗にしますね♪」

「ああ、しつかりな」

「はいっ♡はむっ……れろっ」

相変わらず陽乃さんのフェラはいい。口の温かさに舌の超絶テク
が相まって最後の射精と思っていたのにまた射精してしまいそうだ
！

「また射精るー！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんっ……んんっ♡♡ぷはあ……ご主人様のザーメン、ドロドロで
喉の奥で絡み付いてきますっ♡♡」

「うん。ちゃんと全部、飲み込んだな。偉いぞ、陽乃」

「はい♪」

俺が陽乃さんの頭を撫でると陽乃さんは嬉しそうに笑うんだよな。
この後、身体を綺麗にしてから俺と陽乃さんはテントで眠りについ
た。

もう少しで夏が終わって、秋になり、冬がやってくる。そしてたら
大学受験だ。これからは忙しくなりそうだ。

やはり魔王がミニスカサンタになるのはまちがっている。

うつつ、比企谷八幡だ。今は12月24日、クリスマスイヴだ。街はクリスマスで染まっているが、俺たち受験生には関係がない。

聖なる夜の前日でも雪ノ下のマンションに集まって勉強会だ。陽乃さんのおかげで俺は順調に成績を上げていった。

志望大学もこれなら余裕で合格出来るだろう。由比ヶ浜も頑張っている様で合格ラインをギリギリ超えそうだと言っていたな。

「比企谷くん。いいかしら?」

「何だよ、雪ノ下」

時間が来たので片付けていると雪ノ下が話しかけてきた。そう言えば、今日は妙に大人しかったな。大抵、俺の事を罵倒してくるのに。

何か変なものでも食べたのか!?

「姉さんと付き合っているのは本当なのかしら?」

「え?ああ……うん。付き合っている」

「嘘?!ヒッキー!陽乃さんと付き合っているの!?!」

由比ヶ浜は予想通りのオーバリアクションだ。そんなに驚く事だろうか?ここで隠しておく必要はないだろう。

いい加減、言った方がいいだろうな。

「誰から聞いたんだ?」

「前に実家に戻った時に母からよ。嬉しそうに話していたわ」

「そうですか……」

何を嬉しそうに話していたんだ?気になるな。

「比企谷くん。もし貴方が姉さんと付き合う前に告白していたら……付き合ってくれたかしら?」

「それはない。だってお前、罵倒ばかりしてくるじゃん。付き合ったら胃に穴が開く」

「そう……そうよね。ごめんなさい」

雪ノ下と付き合うとしたら相当のDM野郎だけだ。誰が好き好ん

で罵倒され続けて付き合うかよ。

「じゃ、じゃあ！私とは!？」

「それもない」

「どうしてだし!？」

「由比ヶ浜も罵倒してくるじゃん」

「うう……」

雪ノ下も酷かったけど、由比ヶ浜も酷かった。俺が傷つかないとも思っていたのか？確かに二人とは仲直りはした。

それだけだ。友達以上に関係には絶対にはならない。俺は荷物を片付けた。二人とも何か言いたげだったが、無視して帰る事にした。

これ以上二人と顔を合わせたくはなかったからだ。

「お帰り〜♪」

「何やつているんですか？」

「何って〜今日はクリスマススイヴじゃん！だからお姉さんがクリスマスプレゼントを上げようと思って〜♪」

「はあ……」

マンションに戻ってみると陽乃さんがサンタ服を着ていた。それも肩を全出しの上、胸の上部が見えて、スカートも短い。

ミニスカサンタの服だ。しかもお酒が入っているのか。酔っている。

「サンタがイヴに酔わないでくださいよ」

「サンタさんは〜忙しいんだから今日くらい呑ませてよ〜」

「だったら仕事しろ！」

クリスマススイヴに飲んだくれるサンタなんて聞いた事も無いぞ。テーブルの上には豪華な食事が作ってあった。

流石にスペック高いな、陽乃さんは。一人で作れる量ではないだろう。俺と陽乃さんは一緒に料理を食べた。

「それでは〜八幡へのプレゼントだよ♪」

「何ですか？」

「じゃーん！」

陽乃さんが出してきたのは『婚姻届』だった。まさかこの歳で見る事になるとは思いもしなかった。

ちやかり陽乃さんの欄はすでに埋まっていた。

「出すのはまだ先だけどね♪」

「そうですね。実感がありませんね……」

「だったら嫌でも実感させてあげる♪んんっ♡」

「んんっ……」

陽乃さんがいきなりキスしてきた。本当にこの人はいきなりだな。そこから俺は陽乃さんに連れられてベッドに移動した。

「八幡っ♡来てっ♡♡」

「陽乃さん!!」

ベッドに横になっている陽乃さんのマンコに飛びついた。てか、ノーパンかよ!?驚く事でもないな。

俺は陽乃さんのマンコから溢れてきている愛液を綺麗に舐めた。

「ひい♡そ、そこっ♡だめっ♡♡」

「ちゅぱっ……れろっ……」

「ひいひい♡♡♡」

陽乃さんは気持ちいいあまり絶頂して腰を浮かせて潮を噴いた。とっさに避けたので顔には掛からなかった。

「まったく、このド淫乱サンタが!危うく顔に掛かる所だったぞ!」

「すいません!」

「尻をこっちに向けろ」

「はい♪」

「ばちっ……!!」

「うひひい♡♡♡」

俺は陽乃さんのお尻を思いっきり叩いてやった。相変わらず嬉しそうだな。陽乃さんのお尻には俺の手形がしっかりと残った。

「ばちっ……!!ばちっ……!!」

「あんっ♡んんっ♡♡」

「跡が残るくらい強く叩かれて嬉しがって、これじゃ俺以外と結婚なんてまともに出来ないな?」

「は、はいっ♡♡私は変態ですっ♡ご主人様以外と結婚なんて考えてませんっ♡♡」

「分かってているじゃないか。この後、どうすればいいか分かるよな?」
「はいっ♡♡私の変態マンコにご主人様のオチンチンをお恵みくださいっ♡♡」

陽乃さんはベッドの上で仰向けになって両手でマンコを広げて見せた。マンコからは愛液が溢れていた。

さつき舐め取ったのにどんどん溢れている。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい♡♡」

俺は容赦なく一気に奥まで挿入した。陽乃さんはたった一突きでイッたようだ。だらしなく涎を垂らしていた。

まったく堪え性のない変態マンコだ。こんなんじや嫁の貰い手がなくなくなるだろう。平塚先生のように。

あの人はまだ結婚出来ていない。そもそも彼氏もいない。俺が3年が上がってから生徒に色目を使い出したとか。

しかし先生に手を出すアホは居ないので最近で婚活を頑張っているが全敗している。

「まったくくだらないメス犬だ。一突きでイッたのか?」

「はひい♡♡しゅひはへんっ♡ごしゅひんしやはまつ♡♡」

「何言っているんだ?」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひいい♡♡い、いったらかつ♡♡」

「何?イキ足りないだど?分かったもつと激しくだな!」

「ま、まへっ——」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひいひいひい♡♡♡♡」

陽乃さんのマンコは突くたびにギュウギュウに締め付けてくる。

この圧迫感が中々いい。おかげで射精しそうだ。

「陽乃！一発目だ、受け取れ！」

「はひい♡♡」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いぐうううう♡♡♡」

俺は陽乃さんの手を握って上から押さえつける様に射精した。陽乃さんは俺の射精と同時に絶頂したようで、身体を反らした。

絶頂を迎えたマンコは俺のチンコから精子を搾り取ろうと蠢いていた。本当に物欲しそうに動くので俺のチンコは元気になってしま

う。

「おひやのなしや……あふいつ♡♡」

「俺が大学に入ったらもつと凄い事をするからな」

「も、もつしよしゆごいほとっ♡♡」

「だらしない顔だな。俺のはまだ元気だから付き合ってもらおうぞ」

「い、いったばかりらはひやらっ♡♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡♡♡」

俺は陽乃さんの言葉を無視して腰を動かした。陽乃さんは堪らず絶頂した。今の陽乃さんの顔はとんでもなく酷いものだった。

「クリスマスにそんなに酷い顔のサンタは陽乃だけだろうな！年下の男にいい様に犯されて喜ぶなんてとんだ変態だ！」

「は、はひい♡♡へんはいしやんきでっ……ごへんなしやいつ♡♡」

陽乃さんの呂律はもう完全に回っていなかった。絶頂が続くと段々アホになってくるよな。普段押さえつけているものが外れるからだろうな。

俺は陽乃さんを仰向けからうつ伏せにして後ろから犯した。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひひひひひひ♡♡♡」

「おおおおお……凄い締め付け!!」

この体勢だと子宮口まで届く。チンコの先にコツコツと当たるのを感じる。子宮口が開いたり閉じたりするのも分かる。

それにお尻の穴がパクパクと物欲しそうにしていたので、人差し指と中指をお尻の穴に突っ込んだ。

「うひい!?お、おひりっ♡♡」

「こっちも締め付けが強いな。指が引き千切れそうだ」

「おひりっ♡らめっ♡♡」

お尻を刺激すると陽乃さんのマンコは締め付けを強くなる。さらに指を出し入れするとマンコは締め付けを強くする。

陽乃さんの身体は俺が開発したからな。どこをどう攻めれば気持ちよくなるか十分、理解している。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「のおおおお♡♡い、いぐう♡♡またいぐう♡♡」

「俺も射精そうだ!」

お尻に指を入れたまま腰を動かすとこれまで以上にマンコが蠢いている。射精を促している。これを我慢出来る男はいないだろう。

「で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡お、おふにあついのいっぱい♡♡」

陽乃さんの子宮の一番奥に大量に射精してやった。さっき射精したばかりなのに結構な量の精子を射精してしまった。

陽乃さんのお腹は少し膨らみが出来ていた。俺の精子が子宮を圧迫しているようだ。それから俺は陽乃さんをうつ伏せから仰向けに戻した。

「それじゃいつものやりますか!」

「……ああ♡♡」

陽乃さんは絶頂のし過ぎで放心状態になっていた。俺は少し膨らんだお腹を強く押した。すると俺が今まで射精してきた精子が逆流してきた。

ぽこっ……ぽこっ……

「へいひがでりゆるっ♡♡しやーへんがふひりゆうっ♡♡い
くうううう♡♡♡」

しやああ……

陽乃さんは逆流ザーメンでまた絶頂した。その際にまた潮を噴いて、ベッドを汚した。陽乃さんの身体はピクピクと痙攣しているようになった。

陽乃さんは気絶するように眠った。このままだと風邪を引きそうだったので軽くタオルで拭いてから俺も寝る事にした。すると陽乃さんが目を覚ました。

「いや〜八幡の攻めは凄いいよね。毎回♪」

「結構強めになっているんですけど、大丈夫ですか？」

「全然平気だよ♪むしろ強いくらいの方が気持ちよくなれるからね」

「そうですか。それと雪ノ下に俺たちの関係がバレました」

「お母さん辺りが喋ったんじゃない？」

まあ、その辺りが正解だろうな。学校やあいつのマンションでの勉強が気まづくなつたな。でも行かなければいい話ではないか？

よし、次回から誘われていかないようにしよう。

「流石は八幡だよ。抱き心地が最高だよ♪」

俺は陽乃さんに抱き枕にされて眠りについた。

やはり魔王の夫になるのはまちがっている。

うつつ、比企谷……じゃなくて雪ノ下八幡だ。俺は無事、陽乃さんと結婚する事が出来た。総武高校を卒業して、陽乃さんと同じ大学には入れなかった。

だって、あの人の大学レベルが高過ぎるんだもん。仮に入れてとして授業に付いていくのは無理なので俺にあった大学にした。

その事で陽乃さんは文句をブツブツと言っていたけど。宥めるのに公園で犯しつくした。機嫌が直って良かったと思うよ。

俺が大学を卒業して、次の月にはもう結婚した。スピード婚もいい所だ。陽乃さんは俺の希望の専業主夫をさせてくれている。

てか、陽乃さんの強い希望なんだよな。理由を聞いたらびつくりした。

『他の女が八幡に色目を使うのなんて許せないから♪』

これを聞いた時は背筋が凍りそうだった。だから俺は専業主夫をしている。高校の時に陽乃さんと同棲していたので家事スキルはかなりあった。

陽乃さんは雪ノ下建設に入社して、結構な大きな事業を成功させてかなりいいポジションに着いたとか。

入社してすぐにとかどんだけスペック高いんだよ。知っていたけど。

「は〜ちゅま〜ん♪手が止まっているぞ!」

「はいはい。大人しくしてください」

「早く早く♪」

俺は今、陽乃さんの耳掃除をしている。養って貰っているので俺は従順になっている。まあ、こんなのは昔からだから気にもしないんだけどな。

「出来ましたよ」

「流石は八幡だね♪すつきりしたよ!」

「そうですか……」

満面の笑みで陽乃さんはそう言った。ホント、この人がDMの変態

だとは誰も思わないんだよな。

「それじゃ、始めますか？」

「うん♪」

陽乃さんは服を脱ぎだした。下着も全て脱いで全裸になった。そして犬耳カチューシャを付けて、お尻の穴に犬尻尾アナルピースを挿入した。

それから俺が陽乃さんの首に首輪とリードを付けた。これで完全にイヌだな。四つん這いになった陽乃さん。いじめたくて仕方ない。

「陽乃。お座り」

「わん！」

「お手」

「わん！」

「ちんちん」

「わん！」

陽乃さんは俺の出す命令に忠実に実行した。俺の命令を聞いて、陽乃さんは興奮しているようで涎を出して顔を発情したように赤くしていた。

「どんだけ興奮しているんだよ。マンコがダラダラと愛液を溢れさせている。」

「フェラしろ」

「わん！……はむっ……ちゅぱっ♡……くちやつ♡」

「しっかりと奥まで啜えろ！」

「んんっ!？」

俺は陽乃さんの頭を掴んで喉奥まで押し込んだ。陽乃さんは苦しそうにしているけど、同時に嬉しそうにしていた。

「どこまで変態なのだと言いたい。でもここまで調教したのは俺なので何も言わない。」

「で、射精する！」

「んんっ♡」

「びゅるるるるびゅるるるる……」

「うぐっ……ああああ……」

陽乃さんは俺が射精した精子を見せてきた。口の中、いっぱいの子は我ながら凄いと思うってしまう。これ成人男性の平均量を超えているよな？

「よし」

「んぐっ……あは♡」

「俺の精子の味はどうだった？」

「はい♡喉に絡み付いて窒息するかと思いましたけど、とっても美味しかったです♡♡」

「そうか……」

毎度、精子を飲んでいられるだけの事はあるな。こんな事を言えるの陽乃さんくらいだろう。俺はリードを引っ張って陽乃さんを床に転ばせた。

「床に零れたのもちやんと舐め取れ」

「はい♡れろっ……」

「いいぞ。床のも綺麗に舐め取れよ」

「はい♡れろっ……」

陽乃さんは床に零れた精子を舌で綺麗に舐め取った。床はフロアリングだけど毎日、掃除しているので綺麗だから大丈夫だろう。

「綺麗になりましたっ♡」

「よし、ご褒美をやろう。尻をこっちに向けろ」

「はいっ♡♡」

陽乃さんはこっちにお尻を向けて、左右に振ってきた。早く犯してと言わんばかりだ。精子を飲んでマンコはすでに準備が出来ているようだ。

愛液であそこまで濡れていればすんなりと挿入する事が出来るだろう。だけど、まだ挿入しない。

「ばちんっ!!」

「うひい!?!」

「本当に叩かれるのが好きだな?陽乃」

「は、はい♡♡もっとな叩いて下さい♪」

陽乃さんはお尻を叩くと嬉しそうにマンコは愛液をダラダラと溢れてきた。お尻には俺の手形がくきつりと残った。

もうこれだけ濡れていればすんなり奥まで挿入出来るだろう。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡♡い、いひなりおひゅまへっ♡♡」

いきなりの挿入で陽乃さんは絶頂して、呂律が回っていなくなっていた。いくらなんでも早すぎないか!?

陽乃さんのマンコはもうギュウギュウに締め付けてくる。こんなのではすぐに射精してしましそうだけど、まだまだこんなものではないぞー!

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひいひいひい♡♡ひしゅうにこっこっつするらめえ♡♡」

「好きなくせに!なんなら止めてもいいんだぞ?」

「しよれはらめっ♡♡」

「どつちなんだよ!この!」

ばっちん!!

「ひいひい♡♡」

俺は陽乃さんのお尻を思いつきり平手で叩いてやった。お尻には俺の手形が赤く残った。お尻を叩くたびにマンコがキュンキュンと締め付けてくる。

とりあえず一発射精しておくか。

「いくぞー陽乃!!」

「き、きてえええ♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるる……

「い、いぐうううう♡♡♡♡」

マンコの一番奥に射精してやった。先ほどフェラで射精したのにまだこれだけの量が射精するのか。この射精で陽乃さんのマンコは全て搾り取ろうと蠢いている。

「おなか、あちゅいっ♡♡おく、いっぱい♡♡」

「うおお!?絞られる……!!」

陽乃さんのマンコは今日も絶好調だな!これじゃすぐにでも孕みそうだ。今日から陽乃さんは避妊薬を飲んでいない。

前までは学生だったので飲んでいただけ、俺と結婚して飲むのを止めた。それが俺と陽乃さんを興奮させているのかもしれない。

今日、絶対に陽乃さんを孕ませたい!陽乃さんは今週が排卵するので妊娠する確立は高いはずだ。後は俺の精子次第と言った所だ。

「陽乃。なに休んでいる?」

「ら、らっつてうごへなひらはっ♡♡」

「だから?今日は孕むまでするって決めているんだよ」

「は、はひい♡♡」

陽乃さんは疲れているようだけど、俺はまだするつもりだ。陽乃さんをうつ伏せから仰向けにして、指を絡ませた。

陽乃さんは涎を垂らしながらこれから起こる事を妄想して顔をニヤけていた。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひいひい♡♡」

「ほらもつと鳴け!普段からは想像も出来ないくらい無様な声で鳴いてみる!!」

「いぎうううう♡♡」

陽乃さんはいい声で鳴いている。身体は俺が抑えているので上手く動けない。それが余計にマンコに意識を行っているようで、さつきより蠢いてる。

「陽乃!今度もしつかりと全部、受け止めろ!!」

「は、はひい♡♡」

「もつと動くぞ!」

「うひい♡♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひいひいひい♡♡♡」

チンコを突きまくったら陽乃さんの絶頂が止まらない。視線も定

まっついていない。だけど、脚を俺の腰に掛けてマンコの奥への射精を促していた。

もう我慢出来ない。射精してしまう！

「で、射精る……!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡」

俺の精子が陽乃さんのマンコの奥の子宮にたつぷりと射精されているのが分かる。これだけ精子を注げば、余程の事がなければ絶対に孕んでいるだろう。

子宮がいつぱいになって、陽乃さんのお腹が少し膨らんでいた。

ずずずずず……どろっ

チンコをマンコから抜くと大量の精子が逆流してきた。俺はそれを手で塞ぎ止めた。これじゃ折角、射精したのにもったいない。

「はひい!?ご、しゅひんしゃまつ♡♡」

「溢すなんて、まったく駄目だな。ほら口で綺麗にしろ」

「はひっ♡はむっ……れろっ」

俺は陽乃さんの顔の近くにチンコを近づけた。陽乃さんは口で精子塗れのチンコを舌で綺麗に舐め取っている。

この舌の動きがいいんだよな。おかげでまた勃起してきた。

「ほら続きだ」

「は、はいっ♡♡いっぱい、精子をくださいっ♡」

「あ、ああ……朝まで覚悟しろよ!」

俺と陽乃さんは朝まで求め合った。そして朝には部屋が酷い状況になっていた。汗や精子などの異臭で一日喚起しても臭いがするほどだった。

その数カ月後に陽乃さんが妊娠した事が判明した。これには俺と陽乃さんより陽乃さんのご両親が大変喜んでくれた。初孫だからな。

俺はこれから頑張っている父親になろうと思った。将来、どんな子供に成長するか今から楽しみだ。

「これがお母さんとお父さんのプレイだよ♪」

「凄いね。二人とも性欲あり過ぎじゃない？」

「ちよつと陽乃！娘に何見せているんだ!？」

俺と陽乃の第一子は女の子だった。名前は愛乃だ。陽乃似で16歳でかなり美少女になっている。モデルのスカウトが何度かあったとか。

でも全部断ったとか。どうして？いや、今はそんな事はどうでもいい!!陽乃は何を愛娘に見せているんだ!

「これは私と八幡のSEXだよ？子供が大きくなったら見せようと録画していたんだよ」

「いつの間に……愛乃も見なくていいから!」

「嫌だ！お父さんとお母さんのプレイを参考にしたいんだから」

「何を参考にするつもりだ!？」

ヤバい。愛娘が変態になってしまう！俺と陽乃の間に産まれた子供は全部で5人だ。確かに性欲があり過ぎだと思うけど、末っ子が産まれてからは落ち着いた方だと思うけど。

「愛乃は恋愛対象は年上？年下?」

「年下かな」

「どうして?」

「だって、泣き顔がとっても可愛いんだもん」

駄目だ。愛娘がすでに手遅れな段階まで来ている。どんな手段を用いても直る気がしない。どうすれば、いいんだ。

「八幡♪」

「お父さん!」

「一緒に見よう♪」

「ああ……」

もう諦めるしかないのかもしれない。それならしつかりと受けとめてやるしない。将来、この子と相性のいいパートナーが見つかるのを父親として願うだけだ。

やはり私のご主人様が彼じやないのはまちがっている。

私、雪ノ下陽乃の朝は横で寝ている男性を起こす所から始まる。体育会系のガツチリした体をした彼の股に視線をやった。そこには昨晩から私を犯し続けた肉棒が勃起していた。

「はむっ……じゅるるるっ……じゅるるるるっ」

私はその勃起した肉棒を啜えてフェラを始めた。これが彼が起こす際に指定した起こし方だ。顎が外れるんじゃないかと言うくらいガチガチに勃起した肉棒を私は綺麗に舐めた。昨晚、私はこの肉棒に蹂躪された。

そもそもどうして私がこの男の肉棒を啜えているかと言うと雪ノ下建設が彼の会社を買収されたからだ。

そして彼が最初にした事が雪ノ下家の取り潰しだ。両親は何とか彼の機嫌を取って、取り潰しを回避したけど、その代わりに彼が要求したのが妹の雪乃ちゃんだった。

彼は雪乃ちゃんを嫁とするなら取り潰しを無しにすると言ったのだ。両親は喜んで雪乃ちゃんを差し出そうとしたけど、私が断固拒否した。

雪乃ちゃんの代わりに私を差し出す事で雪乃ちゃんを犠牲にせず済んだ。だけど、それは地獄の始まりだった。

「んんっ……陽乃、おはよう」

「おはようございます。ご主人様……」

「朝フェラも慣れたものだな？」

「そんな事はありません……」

「そうか？ならさっさと跨れ」

「はい。失礼します……んんっ!?!」

彼が起きてくだらない事を言ってきた。そして私は勃起した肉棒の上に跨って、ゆっくりと腰を下に落とした。

私の膣内に彼の勃起した肉棒が入ってきた。彼の大きな肉棒は私

の股を裂けさせるんじゃないと思うくらい太い。

「どうした？ さっさと腰を動かせ」

「は、はい。 んひい♡ あんっ♡ ああっ♡」

「いい眺めだ。 もつと腰を激しく動かせ」

「は、はい。 ああんっ♡ んんっ♡ ひゃあんっ♡」

彼はベッドに横なつたままで私が腰を動かす。 彼は下から私が動くのを眺めるのが楽しいらしい。 私の胸が揺れるのが面白いそうだとどこが面白いのか分からない。

昨晚の9時から朝3時までの6時間、休みなしで私を犯し続けた彼の肉棒は3〜4時間ほど休憩したら完全に回復する。

男は2〜3ほど射精したら萎えると聞いたけど、彼の場合は10回以上射精しないと萎えない。 だから毎晩、毎朝に5回ずつにしてもらっている。 でなければ私の体が持たない。

「朝一番だ！ 受け取れ！」

「ひひひひひ♡ あ、あしゅい♡」

「しつかりと孕めよ」

「はひい……♡」

彼の両親は高齢で早く孫の顔を見せてやりたいらしい。 だから毎日、私を犯し続ける。 もしこれが雪乃ちゃんだったら耐えられないだろう。

私だつてかなり限界が近い。 だけど、耐えられるのは私が毎晩見ている夢のおかげだ。 あの男に犯されるようになってみるようになった夢では比企谷君が私のご主人様だ。

どうして彼なのかは分からないけど、彼とのセックスは気分を高揚させてくれる。 彼との様々なプレイは心から私を幸せにしてくれる。

だけど、目が覚めると嫌でも現実を叩き付けられる。

「どうした陽乃。 さっさと腰を振れ」

「はい……んんっ♡」

「さっさとしないとお前の妹に代わって貰うぞ」

「それは駄目！」

「だつたらしつかりと動け」

「はい！あんっ♡うひい♡ああんっ♡」

この男は何かと雪乃ちゃんの名前を出してくる。雪乃ちゃんにこの地獄に来るのだけは絶対に阻止しないと！

雪乃ちゃんは比企谷君と最近、いい感じなんだから。もしかしたら彼が私の義弟になるのも時間の問題かもしれない。

だから絶対にこの男に雪乃ちゃんは触れさせない。私は必死になつて腰を動かしてこの男の機嫌を取った。

「朝からぐっ苦労さん」

「は、はい。ご主人様の貴重な精子を恵んで貰い、嬉しいです」

「そうかそうか。なら早く孕むんだぞ」

「はい。元気なご主人様の子供を産みます……」

男は満足したのか、部屋にあるバスルームへ行つて体を洗い出した。男が出た後で私も昨日と先ほどの汚れを洗い流した。でもいくら洗つて所で私はもう取れない汚れがある。

大学を卒業したその日に結婚して、その夜に男に体の自由を奪われて処女を強引に奪われた。男は私を性処理するためだけの存在とか認識していないようだった。

「雪乃ちゃん……比企谷君。私、頑張るから」

雪乃ちゃんのためにも絶対に男の子供を孕まなくては。ちゃんと排卵日を計算して男とはしているので孕んでいるはずだ。

でも不安だったので排卵薬も使ったので大丈夫だろう。男は最低でも2人は欲しいと言っていたので2年以上は耐えなくてはならない。

「比企谷君が私のご主人様だったらな……」

あの夢が現実だったらどれだけ良かっただろうか。考えただけでも胸の奥が熱くなる。でもそんな事は絶対にありえない。

卒業してすぐに結婚したので就職なんてしていない私は昼間は家でゆっくりと寝て夜に向けて体力を回復する。

そして夜になるとあの男との寝室に向かう。この時間だけは好きになれない。

「今夜も来たな」

「はい。ご主人様の貴重な精子を恵んで貰います」

「そうだよな。なら分かるだろ？」

「はい……」

私は男に言われる前に服を脱いでベッドに横になった。男の顔が私の股に近づいてくるのが分かる。男の吐息と気配が強く感じる。

「じゅるるるっ……じゅるるるっ」

「うひひひひ」

「じゅるるるるっ」

「んひひひひ♡ああああ♡」

男の舌が私の膣内に侵入してきて蹂躪してくる。私は必死に押し寄せてくる快楽を我慢する。この男に絶頂させられると思うと不快でしかない。

でも体は私の意志とは逆に男の舌から与えられる快楽を受け入れつつある。それが私は怖い。いつか私は今の自分と違う自分に変えられるんじゃないかと。

「じゅるるるるっ……解れてきたな」

「うひひ♡ひひ♡んひひ」

「今夜も我慢しているけど、いつまで耐えられるかな？」

「んひひひひ♡」

間髪いれずに男のガチガチに勃起した肉棒が私の膣内に挿入された。たった挿入しただけで私は絶頂してしまった。我慢していた分、押し寄せてくる快楽が倍以上に膨れたのだろう。

「どうした？耐えるんじゃないのか!？」

「ら、らめえ♡じぬううう♡」

「どうしたどうした!」

「んひひひひ♡」

「雪ノ下陽乃も所詮、メスだったんだな!？」

「ひゃああああ♡」

男は私の体を押さえ付けて、肉棒で私の膣内を蹂躪してくる。太く硬い肉棒は私をどんどん壊してくる。もしかしたら明日の私は今の私ではないのかもしれない。

「ほら濃い射精してやろう！」

「んあっ♡ああ♡ああんっ♡」

「射精るぞー！」

「ああああああ♡いやあ……」

男の濃い精子が私の子宮に溜まっているのが嫌でも分かる。好きでもない男の精子で私は孕まされる。憎くて憎くて殺したいほどの男の子供を私は産む事になる。

それから数日後、私は妊娠した事が判明した。男の両親にそれを報告したら大変喜んでくれた。私は愛想笑いを浮かべながら日々を過ごした。

「私にも母性があつたんだ……」

妊娠が分かって、男は私を犯さなくなった。それが嬉しいのか寂しいのかは分からないけど、自由な時間があるのはいい。

大きくなったお腹を見て、私はあの男の子供でも愛おしくなってしまった。母親になる実感が今更ながら出てきて思わず笑ってしまった。

「雪乃ちゃんの靴だ。来ていたんだ」

病院から家に戻ってみると雪乃ちゃんの靴があった。会いに来てくれたのかな？でも連絡なしなんておかしい。私は家の中を探したけど、雪乃ちゃんを見つけられなかった。リビング、キッチン、トイレなど探せる場所は探したけど見つからなかった。

「まさか……!!」

そこで私は一箇所だけ探していない場所を思い出した。それはあの男の部屋だ。妊娠してから部屋を別々にした。私は早足で男の部屋の扉を開いた。

そこにはとんでもない事が起こっていた。

「雪乃！気持ちいいか！」

「はい！ご主人様のおちんちん、気持ちいいですっ♡」

「雪乃ちゃん……」

「姉さん。おかえりなさい」

「何をしているの？」

「何って、ご主人様に種付けされている最中よ？」

雪乃ちゃんは何の言っている？と言わんばかりの顔をこちらに向けてきた。私は男に近づいた。殴りかかる勢いで。

「おいおい。これは雪乃が望んだ事なんだぞ？」

「なんですって!?!」

「そうよ。最初は姉さんのためだったのだけど、ご主人様のおちんちんを知って変わってしまったの」

男は雪乃ちゃんの事を諦めてはいなかった。どうすれば、雪乃ちゃんを自分のもの出来るかと考えていたのだ。そこで私を利用したのだ。

男は私の性行為の様子を隠し撮りして、それを妊娠が分かった時に雪乃ちゃんに送った。それ見た、雪乃ちゃんは私が自分のために身を犠牲にしている事を知った。

そこで男に私に酷い事をしない変わりに自分が私の変わりをすると言ったのだ。しかしセックスどころか恋愛すらした事がなかった雪乃ちゃんでは男の肉棒に勝てるはずもなく、簡単に堕ちてしまった。

「そ、そんな……」

私は膝から崩れた。これまでの努力はすべて男の思惑通りだったなんて、信じられなかった。私は比企谷君のように自己犠牲すら出来ていなかった。

それからの事はあまり覚えていない。数ヶ月後に私は出産した、雪乃ちゃんも。雪乃ちゃんの子供は戸籍上、私が産んだ事になっている。

男の金の力で戸籍なんて自由に出来てしまう。私は二人の子供に母乳をあげながら雪乃ちゃんと男の性行為を見ていた。

「雪乃！一人、産んだのに締まりがいいぞ！」

「はいっ♡ご主人様のおちんちん、気持ちいいですっ♡」

「すぐにまた種付けてやるからな！」

「はいいい♡ご主人様の子供、何人も産みますうう♡」

私は二人に対して何の感情も持っていない。これからも私は雪乃

ちゃんが産んだ子供を自分の子供として育てていくのだろう。

私と雪乃ちゃんの子供を寝かしつけたので私もゆっくりと瞼を閉じた。あの素敵な夢の世界へと逃げよう。私のご主人様が比企谷君である素敵な夢の世界に。

やはり私のご主人様が彼じゃないのはまちがっている。続

私、雪ノ下陽乃は毎晩、素敵なお夢を見ている。ふとした事で私のご主人様になった少年、比企谷八幡君だ。彼に抱かれる度に胸の奥から熱い何かがあふれて出てくるようだった。これが恋なんだと、これが愛なんだと思ってしまう。

しかし現実とは違った。雪ノ下建設を買収した男の所為で私は最愛の妹の雪乃ちゃんを救えなかった。救った気になっただけだった。

「よしよし……ご飯の時間だよ」

私は二人の赤ん坊に母乳を与えた。一人は私と結婚した男との間に出来た子でもう一人は雪乃ちゃんと男の間に産まれた子供だ。

戸籍では二人とも私の子供になっている。つくづく男の財力が凄い事が分かってしまった。戸籍を簡単に変えてしまうのだから。

「いい子だね……」

母乳に満足して赤ん坊たちはまた眠りについた。どちらもあの男の血を継いでいるとは思えないほど可愛い寝顔だった。私は部屋から隣の部屋に移動した。

「あんっ♡んひい♡ああんっ♡」

「雪乃! どうだ、俺のは?」

「はいいい♡♡ご主人様の極太おちんちんが私の子宮の入り口を叩いています♡♡」

「そうだな。子宮の入り口を叩くとマンコがよく締まるな!」

「んああ♡んひい♡ご、ご主人様の熱くネバネバしたザーメンください♡♡」

「で、射精するぞ! うっ……」

「ああああ♡♡」

朝から雪乃ちゃんと男はセックスをしていた。雪乃ちゃんはまだ子供を産んで一ヶ月も経過していないのに男に股を開いていた。

すっかり雪乃ちゃんは男のおちんちんの虜になっており、それ以外考えずにはいかなかった。

大学を中退して、今は男の秘書をしている。ただしそれは表向きだ。本当は好きな時に雪乃ちゃんを犯せるようにしたいだけだ。

「ご主人様……失礼します」

「おう。早くしてくれ」

「はい……じゅるるるっ……じゅるるるっ」

「やはりお掃除フェラは陽乃にやらせるに限るな」

先ほどまで雪乃ちゃんのマンコに挿入されていた男のおちんちんを私はお掃除フェラをしていた。男は絶対に雪乃ちゃんにフェラはさせない。

それは雪乃ちゃんとキスするためだ。自分のおちんちんを啜えた雪乃ちゃんの唇に触れたくないようだ。

私とは結婚してから一度もキスなんてしていないのに、雪乃ちゃんとはあの日以来、ずっととしている。それに対して私は何も思わなかった。

「で、射精るぞ！うっ！」

「んんっ!?……んぐっ……げほっげほっ！」

「ふうくすつきりした……」

男は射精してすつきりしたのか、雪乃ちゃんを連れてバスルームに移動した。そこで雪乃ちゃんの体を洗いながらまたセックスするのだろうか。

私は洗面台に行つて口の中にある男の精子を洗い流した。いつまでも口の中が男の精子臭かったら子供たちが泣き止まない。

「陽乃。今夜からお前も俺の相手をしろ」

「はい？それはどうして……」

ある日、男が私をまた抱くと言ってきたのだ。子供が産まれてから抱いていなかったくせにどうして？答えはすぐに分かった。

雪乃ちゃんを妊娠させるためだ。子供が増えるのに妻のお腹が大きくないと周りの目があるとか。どうせ、私には拒否権なんてない。

「さっさと跨れ」

「はい。ご主人様……んひい!？」

「久々の俺のチンコはどうだ？」

「はいいいい♡ご主人様の極太おちんちんは最高ですうう♡」

久々の男のおちんちんは太く硬かった。前と同じで男はベッドに横なっており、私が腰を上下に動かしている。雪乃ちゃんとしている時は様々な体勢でしたくせに。

私の時だけは一貫して、下から見上げるなんて最低だと分かっていたけど、ここまでとは思わなかった。

「ほらほらどうした？腰が止まっているぞ！」

「はいいいい♡んひい♡んんっ♡んああ♡」

「姉妹でもマンコの締め付けはまったく違うな！」

「んああああ♡ああっ♡ひゃあ♡」

男は私と雪乃ちゃんのマンコを比べていていた。せめてもの抵抗として出来る限り強くマンコを締めた。私に出来る抵抗なんてこれくらいが精一杯だった。

「おっ……締め付けが強くなったな。比べられて怒ったか？」

「んひあ♡そ、そんな事は!ああ♡」

「そうか。ならもつと激しくするか!ほら！」

「うひいひい♡いぐううう♡」

男が腰を上突き上げてきた。極太のおちんちんが私の子宮の入り口を何度も容赦なく叩いてくる。それが気持ちよくて何度も絶頂してしまう。

絶頂を繰り返す度に子宮が降りてきているのが分かる。またこの男の精子で孕もうとしている。嫌で嫌で二度と妊娠なんてしたくはなかったはずなのに。

どうして体はこの男の子供を産もうとしているの!?

「ほらほら!動きが止まっているぞ！」

「はいいいい♡申し訳、ありませんええ♡」

「ほら孕め！」

「ひゃああああ♡い、いぐううう♡」

男の濃い精子が私の子宮に大量に注がれている。私はこれに幸福

感を感じていた。雪乃ちゃんを駄目にして私をも駄目にしようとしている男の精子で。

これまで散々仕込まれた体だ。二度目だからなのか、分からないけど男の精子が私の卵子にくっつくのが何となく分かった。

「俺の事を憎んでいるのによく孕もうと思ったな？」

「……そんな事はありません」

「少し間があったな……雪乃と違って陽乃は頑固だな。ほら」

「うひい♡ち、乳首らめえ♡」

男は私の乳首を摘まんで母乳を出してきた。これはお前のじやなくて子供たちのご飯なのよ！勝手に出すな！と文句を言いたい。

でも私はそれすら言えないでいた。体はとっくに心も男のものに墜ちかけていた。早く男を満足させて夢の中に避難しないと！

「あんっ♡ああ♡ああんっ♡」

「いいぞ陽乃。もつと厭らしく腰を動かしてみろ」

「は、はいいいい♡ひゃあ♡んひい♡あああ♡」

「ほらもう一度だ！」

「ひゃああああ♡ああああ♡」

男の精子が私の子宮を満たしてくる。不味い、体が男に反応してきている。早く夢の中に避難しないと心までも男のものになってしまう！

「おつとどこに行くんだ？」

「え？も、もう満足したんじゃ……」

「何を言っている？陽乃、お前……俺がこの程度で満足しているの？」

私が早く男から離れようとする男は私の腕を掴んできた。もう5回は射精したはずなのに男のおちんちんはまだ私の膣内で硬かった。

だから私は早く男から離れようとした。もしこれ以上、犯されたら私は戻ってこれないかもしれない。

「つ、続きは夜にしますから！」

「それまで待っていられるか！」

「きやあ!？」

男は私をベッドに組み伏せた。体力が全快なら護身術でどうにもなるのに今はセックスの後で体力が半分も残ってはいない。

「おらー！」

「うひい♡ふ、深いっ♡」

「おっ……いい締め付け」

「ひゃあ♡ああ♡ああんっ♡」

男が私をバックで犯してくる。今まで下からだったのに！バックだから子宮まで余裕で届いてしまう。おちんちんの先が子宮に入ってきている。

早く逃げないと！私が壊れてしまう！必死に逃げようとする私に男の動きが止まった。どうして!?

「陽乃。ここで俺の孕み袋になると宣言しろ」

「だ、誰がそんな宣言！」

「やはりまだ心までは墜ちていなかったか。でもいいのか？」

「何が!？」

「雪乃だけ気持ちよくなって。思い出してみろ雪乃の顔を」

雪乃ちゃんの顔なんてこの男との関係を知ってからまともに見れていない。いや違う。見ていたけど、見ないようにはしていただけだ。

「陽乃……愛している」

「あっ♡」

違う！この男の言葉なんて嘘偽りだ！私の事なんて本気で愛していない！だけど、体が反応してしまう。たった一言だけで私の体は強く反応してしまう。

「俺の孕み袋になれば気持ちよくなれるんだぞ？」

「気持ちよく……」

「ああ、そうだ。姉妹仲良く俺の孕み袋になるんだ」

「……………」

ここで私は思い出した。雪乃ちゃんの顔を……この男に犯されて幸せになっている顔を。あれほど幸せな雪乃ちゃんの顔は見た事がなかった。

だから私は目を合わせようとしなかった。ここで私がこの男を受

け入れたらもう二度と戻って来れないだろう。

でも体が快樂を求めている。私の答えはもう決まっている。

「わ、私雪ノ下陽乃はご主人様……の孕み袋にまります！だからご主人様の熱い精子で孕ませてください！」

「よく言えたぞ陽乃！ほらお待ちかねのだぞ！」

「ひゃあああああ♡いぐううう♡」

男いやご主人様の熱い精子が私の子宮に流れ込んでくる。私は宣言してしまった。でも後悔はない。だってご主人様はロクでなしのクズでも最高のご主人様なのだから。

「姉さん……」

「雪乃ちゃん……」

「姉さんも一緒にご主人様に奉仕しましょ」

「うん！」

私は雪乃ちゃんと手を握った。こうして触れるのは何年ぶりだろうか？ 私たちは交代でご主人様に犯された。朝は私が、夜は雪乃ちゃんが。

ご主人様が休みの日には二人同時に犯して貰えた。キスだって雪乃ちゃんと同じくらいしてもらえた。私はついに幸せを掴んだ。

あの夢は私自身が早く墜ちるように見せたものだったんだろう。夢に溺れずにご主人様に溺れば良かったのだ。

「あんっ♡」

「陽乃。動きが止まっているぞ」

「申し訳ありません。ご主人様……うひい♡ああああ♡」

「射精る！」

「ああああああ♡あしゅい♡」

私はすっかりご主人様のものになった。精子を恵んでもらう度に幸せを感じられるようになった。これまでどうしてこんなにも幸福な事を嫌悪をしていたのだろうか。

「姉さんだけズルいわ」

「ごめんごめん。はい、雪乃ちゃん」

「ご主人様……き、きたあああ♡」

「おつとミルクの時間だ」

私は私と雪乃ちゃんの赤ん坊に母乳を与えながら雪乃ちゃんご主人様のセックスを眺めていた。早く雪乃ちゃんが絶頂して交代出来るのを待っていた。

私は今、とつても幸せだ。比企谷君がご主人様なんておかしな夢だった。ご主人様は今、目の前の男性なのだから。

「いい子だね……雪乃ちゃん、交代だよ」

雪乃ちゃんが絶頂したので子供を寝かせてまたご主人様に犯してもらうために近づいた。私たちは朝まで休みなく犯され続けた。

やはり私のご主人様が彼じゃないのはまちがっている。終

私、雪ノ下陽乃は起きてすぐに幸せな気持ちになった。それは私の横で腕枕をしてくれているご主人様がいるからだ。

私を孕み袋にして、女とは何かを徹底的に教えられた。だけど、それは私にとって幸せな事だった。ご主人様に犯されて、子供を産んだ事は人生で一番に幸福な事だった。

「ふふっ……あんっ♡ご主人様」

「朝から機嫌がいいな？陽乃」

「はい。ご主人様の寝顔が見れたので」

「そうか。寝顔だけで満足か？」

「そんな訳ありません。朝から発情している私のおマンコをご主人様の極太おちんちんでいじめてください」

私は四つん這いになって、お尻をご主人様に向けた。マンコからは早くご主人様のおちんちんに犯してもらいたくて、濡れている。

「おっ……よく締まる」

「うひひひいい♡き、きたああ♡」

「おら！おら！」

「んひい♡あんっ♡ああ♡」

ご主人様が激しく腰を叩きつけて来る。その度におちんちんの先が子宮の入り口を叩いてくる。それをやられると頭が真っ白になってしまう。

「陽乃……愛しているぞ」

「あっ♡ら、らめえ♡いぐいぐいぐっ♡」

ご主人様が耳元で囁くように言ってくる。それを聞いただけで子宮が反応して降りてきてしまう。ご主人様のおちんちんがより深く私を貫く！

「陽乃……お前は最高の孕み袋だ」

「は、はいいい♡」

「三人目もすぐに仕込んでやるぞ」

「は、はいっ♡すぐに孕んで、産みましゅううう♡」

「ほら濃いのだぞ！」

「ああああああ♡あ、あしゅいのたくしやんっ♡」

ご主人様の朝一番の精子が私の子宮に注がれている。あまりの精子の量に私の子宮が膨らんでいるのが分かる。避妊しても妊娠してしまうのではないかと思わせる精子の量だ。

「あんっ♡ご主人様のいっぱい……んっ♡」

「やはりお前は最高の孕み袋だぞ、陽乃」

「はいっ♡」

ご主人様がおちんちんを私のマンコから抜くと精子が逆流してきた。もつたいない。私は急いでマンコを手で塞いだ。折角のご主人様の精子が！

「姉さんばかりズルいわ……」

「雪乃ちゃん。おはよう！」

「ご主人様。次は私にも……」

「いいぞ！おら！」

「ひゃああああああ♡ご主人様の深くきたああ♡」

ご主人様は今度は雪乃ちゃんのマンコにおちんちんを挿入した。雪乃ちゃんはそれだけで絶頂して潮を噴き出した。雪乃ちゃんは堪え性がないな。

ご主人様のおちんちんはギリギリまで我慢した方が最高に気持ちいいのに！でも感じ方は人それぞれか！

「雪乃にも射精るぞ！」

「ああああああ♡あ、ありがとうございますううう♡」

「朝から私たちに精子を恵んでくださいませ、ありがとうございます。ご主人様」

「まったくお前たち姉妹はいくら犯しても飽きないな」

「あんっ♡ありがとうございますっ♡」

ご主人様は私と雪乃ちゃんの胸を揉みながら微笑んでくれた。それを見たら子宮が疼いてしまう。でも我慢しないと。

そろそろ朝食を作って、三人で食べないとご主人様は会社に遅れてしまう。私は雪乃ちゃんと朝食を準備して、ご主人様と一緒に食べた。

そして私は朝食の後片付けをして洗濯に掃除など家事を一通りこなした。ご主人様は雪乃ちゃんの運転で会社に出勤した。

「はい！家事終了！」

片付けや洗濯が終われば、私にとって暇な時間が訪れる。赤ん坊たちの世話はあるけど、それほどやる事はない。

ご主人様は今頃、雪乃ちゃんを犯しているのだろうか。ご主人様の秘書をしているのは雪乃ちゃんを家以外でも好きな時に犯せるからだ。

その分、帰ってからは私を優先的に犯してくれるので文句はない。赤ん坊の世話をしているとご主人様が雪乃ちゃんと帰ってきた。

「お帰りなさいませ。ご主人様」

「ただいま。んっ」

「んんっ♡」

ご主人様のただいまのキスを貰い、渡されたご主人様の服を私は洗濯した。ご主人様は午前9時か出勤して午後3時には帰ってくる。

社長の彼がする事は限られている。そして秘書の雪乃ちゃんが無駄なく仕事を振り分けるのでご主人様のする事が減ったのだ。

流星は雪乃ちゃん！おかげでご主人様は遅く出勤して早く帰宅してくれる。

「陽乃。子供たちはいい子だったか？」

「はいっ♡将来はご主人様に似るでしょう」

「そうか。しっかりと教育するんだぞ」

「はいっ♡お任せください」

ご主人様は子供には関心がないかと思われたけど、そうでもなかった。赤ん坊の世話を進んで手伝ってくれたりする。

その事に私は驚いた。てっきり子供には関心がないものと勝手思い込んでいた。だけど、助かる。流星に4人の赤ん坊を私一人で世話は骨が折れる。

そして夕食前3人で赤ん坊を世話して、夕食を食べてお風呂に入った後はついにお待ちかねの時間がやってくる！

「やはりお前たちの裸はいつまでも見ていたいと思えるほどだな」

「ありがとうございます。ご主人様」

「これも全て、ご主人様のおかげです」

「二人とも横になれ」

「はいっ♡」

「分かりましたっ♡」

私と雪乃ちゃんは服を脱いでベッドに横になった。ご主人様の指が私と雪乃ちゃんのマンコに入ってきた。ゴツゴツとした太い指が私たちのマンコを出たり入ったりしている。

「あんっ♡んんっ♡ひゃあ♡」

「んあっ♡ああ♡んひい♡」

「少し指を入れただけですぐに濡れているな？」

「はいっ♡ご主人様のおちんちんがすぐに挿入出来るようになりますっ♡」

「んあっ♡ご主人様のおちんちんで犯してもらえたいからですっ♡」

「そうか！ならもつと解しておかないと」

ご主人様の指の動きが先ほどよりも激しくなった。人差し指と中指でマンコを解し、親指でクリトリスをいじめてきた。

ご主人様は器用なのでこんな事までも出来てしまう。一度にそんなに刺激されてしまうと絶頂を我慢出来ない！

「ひゃあああああ♡」

「んひいひい♡」

「二人とも派手にイッたな」

「はひい♡」

「んひい♡」

「夜は陽乃からだな」

ご主人様が私に覆い被さるようにベッドに乗ってきた。そして私の指と自分の指を絡めてきた。恋人繋ぎされるのは私は大好きだ。

ご主人様のおちんちんがっいに私のマンコに挿入された。ご主人

様のおちんちんが半分くらい挿入してから奥に一気に挿入された。

「うひひひい♡お、奥までできたああ♡」

「おら！おら！」

「あんっ♡んひい♡ああんっ♡」

「気持ちいいぞ！陽乃」

「は、はいいい♡私も気持ちいいですうう♡」

ご主人様は腰を激しく私の腰に打ちつけて来る。おちんちんが子宮の入り口をノックする度に私は軽く絶頂してしまう。

やはりご主人様のおちんちんは最強だ。これに抗える女はどこにも居ないだろう。

「陽乃！射精るぞ！」

「はいいい♡ご主人様の濃厚精子、くださいっ♡」

「これで三人目を孕め！」

「ああああ♡いぐいぐいぐっ♡」

ご主人様の精子が私の子宮に注がれている。毎回の射精される精子は多いので子宮が広がってしまう。しかしそれが気持ちいい！

ご主人様のおちんちんが私のマンコから離れると、精子が収まりきらないので逆流してしまう。

「ご主人様……」

「次は雪乃だぞ！」

「はいっ♡き、きたああ♡」

「いい締めだ！」

ご主人様は次は雪乃ちゃんを犯している。あれだけ射精したのにご主人様のおちんちんはまだまだ硬かった。それにしても雪乃ちゃん顔は本当に幸せそうだ。

ご主人様のおちんちんは女を幸せにしてくれる。私も先ほど犯してもらったのにご主人様と雪乃ちゃんを見ていると疼いてきた。

「んっ♡ああ♡んんっ♡」

私はご主人様と雪乃ちゃんを見ながらオナニーを始めた。昔の私ならこんな事は絶対にしなかつただろう。でもご主人様に教えられた女の喜びのおかげでする事が出来る。早く雪乃ちゃん、絶頂してく

れないかな？

そうすれば、交代してご主人様の犯してもらえるのに。

「射精る！」

「んひいいいい♡あしゅい♡」

「ご主人様……もう一度、私につ♡」

「まったく仕方ない孕み袋だな」

「ひゃあああああ♡」

雪乃ちゃんに射精したすぐに私はマンコを開いてご主人様に懇願して、犯してもらえた。二回も連続で射精したにご主人様のおちんちんは硬かった。

今度は私がご主人様の上に跨って動いた。下から上にマンコが突き刺さる感覚が私は好きだ。前までは好きではなかったけど。

「あんっ♡ああっ♡んひい♡」

「ほらほらどうした？もっと動いてくれないと気持ちよくなれないんだが？」

「は、はいいいい♡がんばりましゅう♡んんっ♡」

「おっ……いい感じだぞ」

ベッドに横になっているご主人様の胸に手を置いて私は必死に腰を動かした。ご主人様を気持ちよくしななければならない。

それが孕み袋としての勤めだ。私は必死に腰を激しく動かした。するとご主人様のおちんちんが膨らんでいるのが分かった。

「陽乃！射精るぞ！」

「はいっ♡たくさん私の子宮にくださいっ♡」

「射精る！」

「ああああああ♡い、いくうううう♡」

ご主人様の精子が私の子宮を満たしていく。それと同時に私は絶頂してしまった。そしてそのままご主人様の胸に倒れこんだ。しばらく休まないと動けない。

だけど、ご主人様の射精はまだ終わっていないなかった。しばらくして漸く射精は終わった。

「あんっ♡ご主人様？」

「次は二人を同時に犯すか」

「はいっ♡ご主人様！雪乃ちゃん！いつまで休んでいるの!？」

「わ、分かったわっ♡」

「ひゃあああああ♡」

「うひひひひ♡」

私と雪乃ちゃんはご主人様に朝までたっぷりと犯してもらえた。二人とも朝にはご主人様の精子まみれになっていたのは言うまでもない。

そして今日はご主人様は休みなので昼まで休んで精がつく料理で回復してもらい、その日は雪乃ちゃんと一緒にたくさん可愛がってもらった。

「やはり私のご主人様は彼しかない……」

これからも私たち姉妹はご主人様の孕み袋としてたくさんの子供を産んだ。もちろん全員、愛している。誰もご主人様の子供なのだから。

こうして私の物語はハッピーエンドで終わるのであった。ご主人様、私は幸せ者ですっ♡

やはり私が彼を手に入れるのはまちがっている。

私、雪ノ下陽乃はこの日を待ちに待っていた。ここは一ヶ月前に一人暮らしのためのマンションだ。そして私はベッドに全裸で押し倒されている。

「雪ノ下さん……」

「比企谷くんの好きにしていいいんだよ」

私の目の前には同じく全裸の比企谷八幡くんが私に覆い被さる様になっている。私の全裸に興奮してか、彼のチンコはガチガチに勃起している。

それに私は嬉しかった。私の裸でここまで興奮してくれているなんて、頑張った甲斐がある。ついに私は比企谷くんの女になれる。

「い、行きます」

「うん。きてっ♡」

「のおおおお!!」

「うぎっ!?!……いい、痛い」

「だ、大丈夫ですか!」

「う、うん。思ったより処女喪失って痛いんだね……」

ついに比企谷くんのチンコが私のマンコに挿入されて、私の処女を破った。これが処女喪失の痛みなんだ。予想していたより痛いけど、比企谷くんと繋がれたことに比べたら全然気にならない。

「比企谷くんの好きなように動いていいんだよ?」

「で、でもまだ痛いんじゃない?」

「だから痛みを忘れるくらい気持ちよくしてよ」

「は、はい!動きますね……」

「うん……んひい♡ああああ♡あんっ♡」

比企谷くんがゆっくりと腰を前後に動かし始めた。彼のチンコが私のマンコを行ったり来たりして、私のマンコを刺激してくる。

これがセックスなんだ。こんなにも気持ちいいなんて、どうしてもっと早く比企谷くんとしなかつたんだろうか?」

「ひ、比企谷くん……」

「な、なんですか?」

「手を握って……」

「は、はい!」

比企谷くんは指と指を絡めてから握ってくれた。これがもう逃げられない。そもそも逃げるつもりは最初からない。

「動きます!」

「うん……んひい♡んああああ♡んんっ♡」

「雪ノ下さん!雪ノ下さん!」

「ひ、比企谷くんっ♡」

「雪ノ下さん!」

「ひゃああああ♡んひいひい♡んああああ♡」

先ほどとは違って激しく腰を動かし始めた比企谷くんは凄く素敵だ。ギラついた目は獰猛な獣を思わせる。今、まさに私は比企谷八幡くんに食べられている。

周りの人間は彼の目を腐っていると言うけど、私にとっては誰よりも好きな目だ。私の外見ではなく内面を全部、見てくれるこの目が私は大好きだ。

「ゆ、雪ノ下さん。もう射精る!」

「い、いいよっ♡全部、射精してっ♡」

「で、射精る……うっ」

「んひいひいひい♡♡」

私の子宮の奥目掛けて比企谷くんの熱い精子が大量に注がれている。あまりの精子の量に子宮が強引に広げられている。それがなんとも言えない幸福感を私に与えてくれる。

この精子をそのままにしたら私は彼の子供を孕むことになる。でもまだその時ではない。折角、比企谷くんと男女の一線を越えたのに、子供なんて作ったら彼との時間がなくなってしまう。

「あ、あしゆい♡ま、まらあ……でてりゆるううう♡」

「雪ノ下さんのマンコ、俺のチンコを離しません」

「君のせーしはせんぶ、わたしいのおお♡」

「し、絞られる……」

私はマンコをギュウギュウに締め付けて比企谷くんのチンコから精子を根こそぎ搾り出そうとした。この精子はこれから全部、私だけのものだ！

比企谷くんがゆっくりと私のマンコからチンコを抜いた。一回射精したらチンコは萎えるものだと思っていたけど、比企谷くんのまだまだ勃起したままだ。

「ゆ、雪ノ下さん!？」

「男の子はこれが好きだよね?」

「は、はい……好きです」

「素直な子はお姉さん、好きだよ。はむっ……じゅるるるっ」

「おおおおお!!」

私はベッドから起き上がって比企谷くんの勃起したチンコを私の胸で挟んだ。パイズリをするなんて、思いもしなかった。

胸から少し出てきたチンコの先を咥えて舌を絡めるように巻きつけた。これが私の処女を破ったチンコなんだと考えながらパイズリとフェラを始めた。

チンコの中に残った精子をしっかりと搾り取らないと！

「ゆ、雪ノ下さん。それ、ヤバいです!」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ!」

「ま、また射精る!」

「じゅるるるるるっ……んんっ?!……んぐっ……んぐっ」

比企谷くんは二回めの射精をした。びっくりしたけど、私は精子を一滴も零すことなく全部、飲み干した。

口から鼻に抜ける精子の臭い匂いを嗅いただけで、子宮が反応してしまう。早く比企谷くんの精子で孕みたがっている。

「比企谷くん。まだいけるよね?私のマンコが興奮しているから落ちて着かせてくれる?」

「雪ノ下さん。エロっ……」

私はベッドでM字開脚して自分でマンコを広げて比企谷くんに見せた。彼を好きになる前の私が見たら卒倒するかもしれないと思う。

だけど、今は比企谷くんを興奮させて、チンコで私のマンコを滅茶

苦茶にして欲しい。比企谷くんは私のエロい誘いを見て、またチンコを勃起させた。

「雪ノ下さん!」

「うひい♡お、奥に当たるううう♡」

「雪ノ下さんのマンコ、締め付けが強いです!」

「もつと私のマンコをいじめてえええ♡」

「は、はい!」

比企谷くんは私の足首を掴むと少し立ち上がってからチンコを上から下に突き刺すようにしてきた。こんな体勢なんて、凄く恥ずかしい!

でも比企谷くんのチンコがさつきよりも深くマンコに入り込んでくる。強い刺激で今にも気絶しそうなくらい気持ちがいい!

「雪ノ下さん!で、射精ます!」

「んんっ♡んひいいい♡ああああ♡」

「雪ノ下さん!で、射精る!」

「んひいいいい♡♡い、いぐううう♡♡」

比企谷くんの精子がまた私の子宮に大量に注がれた。子宮を大きく広げて、大量に精子が私のマンコから溢れてきた。

こんなにも精子を射精してくれるなんて、比企谷くんから愛を感じられずにはいられない。幸せでおかしくなりそうになる。

「比企谷くん。綺麗にするね……はむっ」

「おおおお!」

「じゅるるるっ……じゅるるるるっ」

「雪ノ下さん……凄く気持ちいいです」

私はマンコから抜いた比企谷くんのチンコを咥えて精子まみれのチンコを綺麗に舐め取った。あんなに射精したのにまだ精子がこんなにもあるなんて、比企谷くんの射精量を少し甘く見ていた。

これなら将来、たくさん子供を産んであげられる。早く比企谷くんが高校と大学を卒業しないかな?そしたらたくさんセックスが出来るのに。

「雪ノ下さん。今度は雪ノ下さんが好きにしてもいいですよ」

「え? いいの!？」

「は、はい。無茶なことではなければ……」

「なら比企谷くんは横になっていて、私が上で動くね」

まさか比企谷くんが私の好きにしているなんて、最高だよ。私は比企谷くんをベッドに横にしてチンコの上を跨いだ。

ゆっくりと腰を下ろした。下からチンコがマンコを上がって来ている。これはこれで凄く気持ちいい。

「あっ♡んっ♡あひあ♡」

「ゆ、雪ノ下さん。激しい!」

「こんなの止まんないよお♡んひゃ♡」

「そんなに激しくしたら……で、射精る!」

「んああああ♡♡♡」

三度目の子宮への射精は私を気絶させるんじゃないかと思わせるくらい気持ちよあった。頭の中が何度も真っ白になった。

もう腰がガクガクになってしまった。私はゆっくりと腰を上げると股から比企谷くんが射精した精子が逆流してきた。

「比企谷くん。凄く気持ちよかったよっ♡」

「お、俺もです……」

「また溜まったら言っつてね。比企谷くんの好きなこと、全部してあげるから」

「は、はい!」

流石にあれだけ射精しては比企谷くんのチンコは萎えていた。今は萎えているチンコが私の処女を破り、比企谷くんの女にしてくれたんだ。

「……比企谷くん?」

「すう……すう……」

「寝顔を激写!」

疲れたのか比企谷くんは寝てしまった。私は比企谷くんの寝顔を数枚、スマホで撮った。待ち受けにして、スマホを起動する度に比企谷くんの寝顔が見られる。私は比企谷くんの髪を撫でながら笑みを浮かべていた。

誰にも見せられない邪悪な笑みを。比企谷くんにだって、見せられない笑みだ。

「漸く君を私のものに出来たよ……隼人には感謝しないと」

私が比企谷くんを手に入れることが出来たのは一ヶ月ほど前に幼馴染の隼人からの相談が発端だ。同じくグループの男子が同じグループの女子に告白したいとのことで私にアドバイスを求めてきた。

そもそも私は恋愛なんてしたことないのにアドバイスなんて出来る訳ではないのでその時は保留したけど、数日後にこれを上手く利用すれば、比企谷くんを私のものに出来るのでは？と思った。

「雪乃ちゃんやガハマちゃんは本当にバカだな……私より付き合い長いのに、比企谷くんのことを信じてあげないなんて……」

今年の春からそれなりの関係を築いていたはずなのに、雪乃ちゃんとガハマちゃんは簡単に比企谷くんとの関係を捨てた。

まあ、私がそうなるようにしたんだけどね！もし雪乃ちゃんやガハマちゃんが比企谷くんを捨てなければ、別の手段を考えていたけど、そっちはお蔵入りになったから別にいいか！

「すう……すう……すう」

「ふふっ……もう君は私だけを考えればいいからね？」

それにしても彼の妹である小町ちゃんが止めを刺してくれたのが一番決定的だったかな？家族じゃなくて他人を信じるなんて、小町ちゃんは……比企谷家が終わっているのか。

彼のが気になりだした時に調べてみたけど、家庭環境は酷かった。ある意味、毒親より酷いかもしれない。

「でも比企谷くんを産んだことだけは感謝してもいいかな……その内に潰しておかないとダメかもしれないな」

今後、元家族が接触してくるかもしれないからその辺の対策を考えたおかないとダメかもね。でも今は彼とのひと時を存分に楽しみたい。

私は比企谷くんを抱きつき、彼の体温を感じながら眠りについた。漸く手に入れた私の幸せだ。誰にも邪魔はさせない!!

「お休み比企谷くん……起きたらたくさん愛してあげるからっ♡」

やはり私が彼を手に入れるのはまちがっている。 2

私、雪ノ下陽乃が比企谷八幡くんと一緒に暮らし始めて一週間が経過した。まず比企谷くんには総武高校から通信制の学校に転校してもらった。

総武にいとイジメに遭うし、比企谷くんの成長のためにもだ。それに通信制の学校のおかげで彼をずっとマンションに居させることが出来る。

「おはよく比企谷くん」

「おはようございます雪ノ下さん」

「今日もおいしそうだね」

「お弁当も出来ていますよ」

比企谷くんが私のマンションに来てから役割分をした。生活費などのお金は私が出す代わりに比企谷くんは家事全般をすることになった。

「雪ノ下さんって何でも出来るイメージだったんですけど……」

「箱入りお嬢様だからね。料理も専属のシェフが居たからね」

「専属のシェフって……」

比企谷くんはもの凄く驚いた顔をしていた。家にシェフがいるのっておかしいことなのかな？他人の家ってあんまり行ったことないんだよね。

それにしてもエプロン姿の比企谷くんはカッコいい！料理が出来る男子っていいよねと友人が話していたけど、確かにいい。

「それじゃ行ってくるね」

「はい。いってらっしゃい」

誰かに見送られるっていいものだね。比企谷くんも満更ではないようだった。私はいつも通りに大学で過ごして、昼に比企谷くんのお弁当を食べた。

その際に友人に彼氏の手製のお弁当だと自慢した。みんな、私に彼氏が出来たことにびっくりしていたけど。

「ただいま〜」

「おかえりなさい」

「はくぐく……」

「ちよ、雪ノ下さん!？」

玄関を開けると比企谷くんが出迎えてくれて私はそのまま抱きついた。比企谷くんの匂いが鼻腔を突き抜ける。帰ってすぐに比企谷くんの匂いが嗅げるなんて、最高の生活だよ。

「あれれ……比企谷くん、ここが大きくなっていてるね?」

「そ、それは生理現象ですよ!雪ノ下さんが抱きつくから……」

「寝室、行こうか?」

「……はい」

比企谷くんは私と生活することで少し素直になってきたと思う。いや、性欲に忠実になってきたのかもかもしれない。

私たちは寝室に移動して、すぐに服を脱ぎ捨てた。比企谷くんは服の上からでは分からないけど、結構鍛えているようでシユツとしている。

「比企谷くん……んっ♡」

「んんっ……雪ノ下さん」

「んんっ♡」

「んっ……」

このマンションに比企谷くんを住まわせて何回もしたキスだけで、する度に胸の奥と子宮が熱くなるのを感じる。体を密着させて、お互いの体温を感じる。

比企谷くんの瞳には私が映っている。周りが腐ついていると言う瞳が。この瞬間だけはこの瞳は私だけのものだ。

「今日は私の番だからね」

「はい……」

「はむっ……じゅるるるるっ」

「のおおおお!」

私はベッドに比企谷くんを座らせて、勃起したチンコをフェラした。比企谷くんは気持ち良さそうに声を出した。私のフェラで気持ちよくなってくれているなんて、勉強した甲斐があった。

「ゆ、雪ノ下さん。で、射精ます!」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「射精る!」

「んんっ!?……んぐっ……んぐっ」

比企谷くんのチンコから射精した精子を私は零すことなく全て飲み干した。臭い匂いで喉に絡みつく精子だったけど、飲み干した。

比企谷くんは私が精子を飲み干すのがいいのか、さらに興奮してくれる。私も子宮が反応してしまう。

「行くよ比企谷くんっ♡」

「は、はい」

「んんっ♡き、きたあああ♡」

「おおお!」

私は比企谷くんをベッドに仰向けにして、上に向いているチンコに腰をゆっくりと下ろした。下から比企谷くんのチンコが上がってきた。

そして子宮の入り口にチンコの先が接触した。それだけで軽くイッてしまった。勝手に腰が動いてしまう。

「あんっ♡ああ♡ああああ♡」

「ゆ、雪ノ下さん。は、激しい……!」

「ひ、比企谷くんのチンコ、気持ちいいからああ♡」

比企谷くんのチンコの先が私の子宮の入り口を何度も叩いてくる。チンコがノックする度に軽くイッてしまう。

イッてしまう度に背筋に電気が流れているようだ。腰が勝手に動いてしまう。比企谷くんが私が腰を動かす度にビクビクと動いているのを感じる。

「ゆ、雪ノ下さん!もう、射精ます!」

「い、いいからっ♡私のマンコに射精してっ♡」

「うっ……で、射精る!」

「ああああああ♡い、いくうううう♡♡」

比企谷くんのチンコが膨らんだと思ったら私の子宮目掛けて精子を思いっきり射精してきた。大量の精子に私の子宮が大きく膨らん

だ。

私の子宮では比企谷くんの大量の精子を受け止めきれないから大きく膨らんでしまう。だけど、それが私にとって心地いい。

「ひ、ひきたにくんのお……せーしで……いくうううう♡♡」

「ゆ、雪ノ下さんのマンコ、気持ちよ過ぎですよ……」

「ひ、比企谷くんのチンコだって気持ち良かったよっ♡」

「そ、そうですか。嬉しいです……」

比企谷くんのチンコはまだ私のマンコの中でガチガチに勃起している。あれだけ射精したのにまだ萎えていない。まったく性欲の怪物だよ、君は。

「だからもつと気持ちよくしてあげるね」

「え？ちよ、ちよつと待って——うひい!?ち、乳首は!」

「ほらほら……これがいいんでしょ?」

「あひゃ!?そ、それは……だめ!」

私は比企谷くんと繋がったまま彼の乳首を指で摘まんのだ。するとチンコがそれに反応してビクビクと動いた。女性は赤ん坊に授乳のために乳首があるけど、男性はこうして性行為の時に気持ちよくなるためにあるのかもしれない。

「乳首だけじゃなくこっちもだよっ♡」

「のおおおお!そ、そんなにいつぺんにしたら、また射精ます!」

「もつと君の精子、ちようだいっ♡」

「ゆ、雪ノ下さん……のおおおお!」

私は比企谷くんの乳首を攻めながら腰を先ほどよりも激しく動かした。チンコの膨らみで分かる。そろそろ射精する頃合だ。

私は腰をゆつくりと上げて、一気に下ろした。チンコの先が私の子宮に力強く当たった。

「で、射精るううう!!」

「ひゃああああああ♡♡い、いくうううう♡♡」

「のおおおお!!」

「んひひひひ♡♡ひゃああああああ♡♡」

比企谷くんは我慢が出来ずに射精してしまった。精子が私の子宮

の奥に勢いよく射精された。ドロドロで熱い精子が私の子宮を埋め尽す。

私は力が入らずに比企谷くんの胸に倒れ込んでしまった。彼の胸に耳を当てると比企谷くんの心音が聞こえてくる。

「はあ……はあ……雪ノ下さん」

「はあ♡……はあ♡比企谷くん」

私は彼から離れて横に仰向けになった。体力にはそれなりに自信があるけど、もう立てないくらい無くなった。それは比企谷くんも同じでまったく動かなくなった。

「比企谷くん。水、飲む？」

「は、はい。ください……んんっ!？」

「んっ……おかわり、いる？」

「はい……」

私は近くに置いているミネラルウォーターを一度、私の口に含んでから比企谷くんの口に持っていき、口移しで飲ませた。彼はびっくりしていたけど、おかわりを求めてきたので、何度も口移しで飲ませた。「元気になったね？」

「それはそうでしょ……」

「どうする？……する？」

「ホント、雪ノ下さんって意地悪ですよ」

比企谷くんのチンコが元気を取り戻したのもう一回することに。ただ、あれだけ激しくしたので汗まみれなので風呂場ですることにした。

「んんっ♡比企谷くんっ♡」

「雪ノ下さん。んっ……激しいですよ」

二人でシャワーを浴びながら激しくキスをした。冷たいシャワーのはずなのに体の火照りが全然静まらない。むしろさつきよりも熱くなってきた。

「雪ノ下さん……」

「いいから、きてっ♡」

「行きますー!」

「うひい♡き、きたああ♡」

壁に手を付いて、お尻を比企谷くんに向けた。比企谷くんは私の腰を掴んでからチンコをマンコの奥へと一気に挿入した。

それだけで私は軽くイッてしまった。もう私は比企谷くんのチンコの虜になってしまっている。挿入されただけでイッてしまうなんて。

「雪ノ下さん！雪ノ下さん！」

「あんっ♡んひい♡ああああ♡」

「雪ノ下さん!!」

「うひいい♡も、もっとはげしくっ♡」

比企谷くんの腰の動きは早くなってきた。子宮の入り口を何度も何度もチンコの先で叩いてくる。私は連続で軽くイッてしまっている。

マンコの中でチンコが膨らんできているのが分かる。そろそろ射精するのだろう。もし今、精子を子宮で受けたら私は気絶するくらい気持ちいい絶頂を味わえるかもしれない。

「雪ノ下さん！で、射精る！」

「全部、私にちょうだいっ♡」

「射精る！」

「ああああああ♡いぐいぐいぐっ♡」

比企谷くんのドロドロの熱い精子が私の子宮に大量に射精された。大量の精子で私の子宮は大きく広げられた。子宮で受けた快樂が体全体に広がった。

頭が真っ白になって、私はそのまま床に座り込んでしまった。私はそのまま気絶したようで、目が覚めた時には寝室で比企谷くんと寝ていた。

「ふふっ♡まだ熱い……」

私は子宮の辺りを撫でながら寝ている比企谷くんを抱きしめた。この熱は私だけのものだ。雪乃ちゃんでもガハマちゃんでも小町ちゃんでもない私だけのものだ。

私が比企谷くん……いや八幡くんと結婚する時は雪乃ちゃんたち

を招待して、悔しがる顔を存分に眺めてやるんだ！

「雪ノ下八幡……ふふっ♡子供はまだいいとして、結婚したらたくさん愛してあげるから……」

八幡くんには雪ノ下家に婿入りしてもらって、雪乃ちゃんには家を出てもらおう。その準備は進めつつある。数年はかかるけど、雪乃ちゃんたちが気が付いた時にはもう遅いはずだ。

「雪乃ちゃんの方がよっぽど無能だよね……お休み八幡くん」

雪乃ちゃんは八幡くんが無能と言っていたけど、雪乃ちゃんの方が無能だよ。私は八幡くんを強く抱きしめて、もう一度眠ることにした。

起きるにはまだ早いし、時間になったら八幡くんが起こしてくれるでしょう。それまで夢心地でいたい。

やはり私が彼を手に入れるのはまちがっている。 3

私、雪ノ下陽乃が比企谷八幡くんと同棲を始めて、数ヶ月が経過した。今は三月下旬で学生にとって春休みに入った。そこで私は八幡くんと温泉旅行に来ている。

八幡くんは家族旅行に連れて行って貰えていないので私が今まで出来なかつた旅行をたつぷりと味あわせてあげるからね。

それと私たちはお互いに名前で呼び合うようになった。おかげで彼との距離がグツと短くなった気がする。結婚まで秒読みかもしれない。

「ここまで計画通り……」

「陽乃さん。どうしました?」

「なんでもないよ♪それでどう?」

「凄いですね。いいんですか? 宿泊費、全部出してもらって……少しなら出せますけど」

「いいのいいの♪私がしたいだけなんだから」

高級宿に八幡くんは引け目を感じているのか、宿泊費を出そうとしたけど、高校生の彼にはここの宿泊費は出せない。

それにここの費用は雪乃ちゃんの一人暮らし用の費用から出ているのだから。十二月頃に雪乃ちゃんはやらかした。詳しい経緯は知らないけど、雪乃ちゃんは生徒会長になった。

生徒会長として初の大きな仕事が他校とのクリスマスイベントだ。だけど、それは失敗に終わった。出し物などを話し合いで時間をかけたけど、それは失敗に終わった。出し物などを話し合いで時間をかけた過ぎたのか、酷いものだった。

参加した小学生たちは途中で帰ってしまうほど酷かったようだ。それを知ったお母さんが雪乃ちゃんの一人暮らしを終了して、実家に連れ戻した。

そこで再教育が始まった。今では実家と学校を往復するだけの生活が始まった。食事や睡眠以外の時間は殆んどが勉強に当てられた。自由な時間は放課後の僅かな時間だけとなってしまった。私に助けを求めてきたけど、無視した。

「ほら露天風呂を楽しもう！」

「はい！」

私たちは部屋にある露天風呂に向かった。景色が最高で申し分なし！予約に結構時間が掛かったけど、間に合つてよかった。

今回の旅行は八幡くんの高校卒業と大学入学を祝うための旅行だから八幡くんには存分に楽しんでもらわないと。

「どうかな？」

「は、陽乃さん。それはヤバいです……」

「何がヤバいのかなく？」

「柔らかくて……ヤバいです」

私は胸にボディソープを垂らしてから八幡くんの背中に抱きついた。そして胸を上下に動かして八幡くんの背中を洗い始めた。

八幡くんのチンコはすぐに勃起して今にも射精しそうになっていた。片手で八幡くんのチンコを握ってシコシコした。

「ちよ、陽乃さん！それ、だめです！」

「一回、スツキリしようね〜ほらほら」

「ちよ……うっ！」

八幡くんは我慢出来ずに射精した。私はそれを手で受け止めてから口に運んだ。相変わらず、強烈な匂いでドロドロした精子だね。

精子の匂いを嗅いただけで妊娠しそうだよ。私は四つん這いになって、お尻を八幡くんに向けた。

「今度は私の子宮の奥に八幡くんのドロドロで熱い精子をちようだいっ♡」

「陽乃さん！」

「うひい♡き、きたああ♡」

八幡くんは容赦なくチンコを私のマンコに挿入してきた。チンコの先が子宮の入り口に接触した。本当に長さや硬さと最高だよ。

前に興味本位でバイブをマンコに挿入したけど、八幡くんのチンコほどではなかった。むしろ全然気持ちよくなかった。

「陽乃さん！陽乃さん！」

「ああ♡んひい♡ひやああああ♡」

「陽乃さん！」

「んああああ♡は、八幡くんのチンコがマンコで暴れているっ♡」

八幡くんは私の両手首を掴んで力強くチンコをマンコの奥に叩きつけてくる。チンコが子宮の入り口を叩く度に私は軽くイッてしまふ。

私がいッてしまう度にマンコがチンコを強く締め付ける。八幡くんのチンコが大きく膨らんできている。そろそろ射精するんだね。

「陽乃さん！もう、射精ます！」

「いいよっ♡八幡くんのドロドロの精子、私にちょうどいいっ♡」

「で、射精る！」

「んひゃああああ♡♡いくううう♡♡」

八幡くんのチンコから私の子宮目掛けて精子が射精された。大量の精子に私の子宮は大きく膨らんだ。精子を受け止めた子宮が頭に快楽を伝えてきた。

私はそれだけで頭が真っ白になってしまった。でも八幡くんの射精はまだ止まっていなかった。本当に性欲のバケモノだよ、君は。

「陽乃さん……す、すいません。痛くないですか？」

「全然大丈夫だよ。むしろ気持ち良かったから」

「そ、そうですか？ならよかったです……」

「あれだけ射精したのに……ほら見て」

私は八幡くんから離れてマンコを広げて逆流してきた精子を見せた。すると八幡くんのチンコが復活した。射精して萎えていたはずなのに。

逆流してきた精子を見たら復活するなんて、どうしてなんだろう？

「陽乃さん……エロです」

「私のエッチな部分は八幡くんだけにしか見せないよ？」

「う、嬉しいです。もう一回、いいですか？」

「今日は八幡くんが満足するまで私に射精してっ♡」

「陽乃さん！」

「あんっ♡」

八幡くんは仰向けの状態の私に覆い被さってきた。そしてそのま

まチンコをマンコに挿入してきた。容赦なくマンコの奥まで挿入してきた。

さつきイツたばかりで敏感になっている中、マンコの奥まで挿入されるとまたイツてしまう。

「んひいいいい♡♡ああああああ♡♡」

「陽乃さん！」

「は、八幡くんっ♡んんっ♡」

「んっ……」

私たちはキスをした。八幡くんの熱が私を内側から溶かしている気持ちになる。幸せな気持ちでこの時間が永遠に続けばいいと考えよう。

私がそんなことを考えている中、八幡くんはキスをしながら腰を激しく動かしている。私をそんなにも求めているなんて、嬉しさでどうにかなってしまう。

「陽乃さん。また射精ます！」

「八幡くんっ♡全部、私にっ♡」

「で、射精ます！ぐっ……」

「ひゃああああああ♡♡いぐいぐいぐっ♡」

また八幡くんの熱い精子が私の子宮を満たしてくる。精子の熱が私を彼に依存させる。この気持ちだけは絶対に誰にも渡さないし、譲るつもりもない！

八幡くんは力尽きたように私の胸に倒れ込んできた。八幡くんのチンコはまだ精子を射精していた。

「は、陽乃さん……」

「凄かったよ。八幡くん」

「陽乃さんが気持ちよくなったなら良かったです」

「ふふっ………続きは部屋でしょ？」

「はい」

私たちは軽く露天風呂を楽しんだら部屋着に着替えて布団を準備した。そして私が先に布団に横になった。早く八幡くんと繋がりたいと考えてしまう。

「陽乃さん。んっ」

「んんっ♡八幡くん……早くっ♡」

「はい！行きます……」

「んひい♡お、奥まで……きたああ♡」

八幡くんの勃起チンコが私のマンコの奥まで一気に挿入された。私はすっかり子宮の入り口をチンコの先で叩かれるとイッてしまう癖が出来てしまった。

八幡くんは私の指と自分の指を絡めて私が逃げないように拘束してきた。そして腰を必死に動かして私を気持ちよくしようとしている。

「ああ♡んひい♡ああああ♡」

「陽乃さん！」

「んああ♡んんっ♡ひやあ♡」

「陽乃さん！陽乃さん！」

八幡くんの必死な顔はいつ見ても最高だ。私だけを見て、私だけを愛してくれる。それだけ私は満たされる。もつとちようだい、君のすべてを。

他の誰かに絶対に渡さない。もう八幡くんは私だけのものなんだから。チンコが膨らんできた。そろそろ射精するんだね。

「陽乃さん！俺、もう……」

「いいよっ♡全部、私の子宮に注いでっ♡」

「陽乃さん！で、射精る！」

「ひやああああああ♡♡い、いくうううう♡♡」

「し、搾られる……」

「ああああああ♡は、はちまんくんのどろどろのせーし、いっぱい……」

八幡くんのチンコから射精された精子が私の子宮に大量に注がれる。この子宮が精子で広げられる感じが堪らない。

今、私の子宮にある精子は私を孕ませようと必死に泳いでいると思うと笑みが零れてしまう。

でもまだその時ではない。今は二人だけの時間を楽しみたいから

妊娠はお預けだ。

「陽乃さん……大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。それにしても八幡くんだね……精子で子宮が広がっているよ」

「す、すいません！」

「誤らなくていいよ。私は好きだから」

私が子宮の辺りを撫でながら言うのと八幡くんは顔を赤くして、可愛い。あ、写真に撮るの忘れた。惜しいことをした。

すると八幡くんが鞆から何かを取り出して、私に渡してきた。不思議がっているとか何かの正体が見えてきた。指輪だ。

「どうしたの？」

「その……俺からの婚約指輪ってやつです。安物ですけど……」

「値段とか気にしなくていいよ。気持ちが一番大事でしょ？」

私は八幡くんから婚約指輪を嵌めてもらった。それを見て、私は笑いが止まらなかった。私の予想を八幡くんは超えてきた。

この手のものはもう少し後になるかと思っていたからだ。男女の関係になったけど、八幡くんは私と少し距離を置いているように思ったからだ。

「これで私は八幡くんの女だね。もう一生、離さないですよ」

「陽乃さんを逃がしたら俺は一生、結婚出来ない気がするんで」

「私もだよ。八幡くん以外と結婚とか考えられないかな」

私たちは顔を見ながら笑った。私たちはある意味、似たもの同士なのかもしれない。それから私たちは部屋から出ることなく、宿泊期間中、ずっとセックスにふけ込んでいた。

でも最高の旅行になったので別にどうでもよかった。早く八幡くんが大学を卒業して、結婚したい。

やはり私が彼を手に入れるのはまちがっている。 4

私、雪ノ下陽乃はついに成し遂げた。今日は私と八幡くんとの結婚式があった。ここまですくさんの苦労があった。彼が高校生の時に修学旅行を利用して、周りから完全な孤立をしてから私が手をさし伸ばして、救う。

そして彼との同棲生活をして男女の関係を構築して、私から逃げられないようにした。雪乃ちゃんにガハマちゃん、小町ちゃんに否定されて拒絶されたことは八幡くんに止めを刺すのに十分過ぎることだったようで、簡単に私のものになった。

それにしても今日の雪乃ちゃんたちの顔は面白かったな。私の結婚相手が八幡くんだと知った時の表情なんて、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていた。

それから八幡くんに謝ろうとしていた。どうも修学旅行の真相を2月頃に海老川？海老原？だったか忘れたけど、その女の子が修学旅行の八幡くんの嘘告白の真相を話したそう。今更、謝罪なんて勝手だね。

だけど、お母さんが雪乃ちゃんに付ききりになって八幡くんに近づけなかったんだけどね。ガハマちゃんと小町ちゃんは謝ろうとしたけど、八幡くんに足蹴にされて惨めだった。

「ふふっ……」

「陽乃さん。髪、乾かさないと風邪引きますよ」

「八幡くんが乾かして〜」

「まったく……」

お風呂から上がってバスローブを着て、ベッドに横になって雪乃ちゃんたちのことを思い出していると同じくバスローブを着た八幡くんが近づいてきた。

私の髪が濡れているのを気にしてくれている。そしてタオルとドライヤーで優しく私の髪を乾かしてくれた。

「今日はお疲れ様。八幡くん」

「それは陽乃さんでしょ？」

「八幡くん……んっ♡」

「んんっ……疲れたのにまだ疲れるんですか？」

「明日はお休みだからいいでしょ？」

私たちはキスをしながら今日の結婚式のことを思い出していた。確かに疲れたけど、八幡くんとセックスは別だよ。快樂で疲労なんて吹っ飛ばよ！すると八幡くんが私の股を広げて顔を近づけてきた。「ちゅっ……じゅるるるるっ」

「んひい!?しよ、しよんなに舌、らめえ♡んひいひいひい♡」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「ひゃああああ♡♡」

八幡くんの舌で私のマンコが蹂躪されて、私はイッてしまった。その際に潮を噴いて、八幡くんの顔にかかってしまったけど。

八幡くんがバスローブを脱いで私に覆い被さるようになってきた。彼のチンコはガチガチに勃起して、今にも爆発しそうになっている。

「八幡くん。早くっ♡」

「陽乃さん！」

「んひい♡き、きたああ♡」

「陽乃さんのマンコ、キツイ！」

「あんっ♡んああ♡ああああ♡」

八幡くんが腰を激しく前後して、私のマンコを刺激してくる。チンコのカリの部分が私のマンコのいい所を刺激して、体に電気が走るようだ。

八幡くんのチンコが膨らんできた。そろそろ射精しそうなんだね。私のマンコは早く早く射精して欲しいことを伝えるように締め付けを強くした。

「は、陽乃さん！で、射精る！」

「全部、ちようだいっ♡」

「射精る！」

「んひいひいひい♡♡いぐいぐいぐっ♡」

子宮が八幡くんの精子を受け止めて喜んでいる。たくさんの精子が子宮を満たして、私を孕ませようとして来る。どうしようか、ここ

で孕んでもいいかも。

でもまだ結婚したばかりだし、二人の時間を楽しみたい自分がいるけど、早く八幡くんの子供を孕みたいと思っっている自分もいる。

「ああ♡ひゃあ♡んっ♡」

「陽乃さん。大丈夫ですか？」

「は、八幡くんは何人、子供が欲しい？」

「え？えつと……よ、4人ほど……」

「欲張りさんだね♪」

「ダメですか？」

「いいよ。たくさん孕ませてっ♡」

「陽乃さん！」

「あんっ♡」

射精の余韻を更なる快楽で私をいっぱいにしてくれる。八幡くんは本気で私を孕ませようと必死に腰を動かしてくる。

私の手首を掴んで、私を逃がさないように拘束してくる。まったく私は絶対に逃げないのに。まだ八幡くんは不安があるんだろう。

「陽乃さん！孕め、孕め！」

「んひい♡あんっ♡んああああ♡」

「孕め！」

「んんっ♡んああ♡うひい♡」

八幡くんは私を孕ませようと必死になって腰を激しく動かしている。もしかしたら今夜、私は八幡くんとの子供を孕むかもしれない。

これで私は完全に八幡くんの全てを手に入れられる。心も体、今も未来、その全てが私のものに。

「孕め！うっ……」

「んひいひいひい♡♡い、いくうううう♡♡」

八幡くんの射精で私はイッてしまった。子宮に注がれた精子で私の体は喜んだ。今、私の子宮には八幡くんとの子供の素がたくさんある。

これが数カ月後には人の形として産まれてくるなんて、不思議で堪らない。八幡くんは力尽きたのか、私の胸に倒れてきた。

「あんまり無茶しないでよ。八幡くん」

「だ、だって……早く陽乃さんとの子供が欲しくて……」

「もう！可愛いんだから！今度は私が動くね」

私は八幡くんとの体勢を交換して、私が上で八幡くんを下にした。私が腰を上下する度に子宮の入り口にチンコが当たる。

もしかしたらチンコが子宮の中に入ってくるかもしれない。子宮が降りるってこういうことを言うのかもしれない。

「は、陽乃さん、激しい！」

「八幡くんのチンコが気持ちいいからだよっ♡」

「陽乃さん！」

「あんっ♡ダメだよ、今は私のターンだよ。んんっ♡」

八幡くんは動きたいけど、私が八幡くんの腕を掴んで拘束した。私だけ気持ちよくなるなんて、絶対に駄目だ。これから一緒に夫婦として生活するためにもお互いを思え合える関係にしないと。

私だけが一方的に気持ちよくなっては駄目だ。そんな夫婦関係はすぐに破綻する。それにしても攻められている八幡くんの顔も中々いいね！

「は、陽乃さん！もう射精ます！」

「んっ♡いいよ、私を八幡くんの精子で……孕ませてっ♡」

「陽乃さん！で、射精る！」

「ひゃああああああ♡♡き、きたあああ♡♡」

私の子宮目掛けて精子が昇ってきた。ドロドロで熱々の精子がたくさん注がれた。子宮があまりの喜びに頭が真っ白になってしまう。

私の子宮が八幡くんのチンコから精子を根こそぎ吸い上げている。私の子宮は八幡くんの子供を孕みたがっている。

「八幡くん……すごかったよっ♡」

「は、陽乃さんこそ……」

「今ので孕んだかもね？」

「だと嬉しいですね……」

八幡くんはどこか不安そうな顔をしている。恐らく元両親のことを考えているんだろう。自分も子供に素っ気無い態度を取るのでは

?と。

でも安心してよ、八幡くん。私が君を一人にはしないよ。心の底から安心出来るようにしてあげるから!

「八幡くん……来てっ♡」

「陽乃さん!」

「うひい♡お、奥に来たああ♡」

四つん這いになってお尻を八幡くんに向けて誘うと八幡くんは私の腰を掴んでからチンコをマンコの奥に一気に挿入してきた。

チンコの先が子宮の入り口に当たってきた。私は軽くイッてしまった。八幡くんは力強く腰を前後に動かしてきた。

「んあっ♡ああっ♡んんっ♡」

「は、陽乃さんのマンコ、凄い締め付けです!」

「あんっ♡それだけ八幡くんのチンコが気持ちいいんだよっ♡」

「陽乃さん!」

「あんっ♡んひい♡ああああ♡」

八幡くんの腰の動きが激しくなってきた。次の射精で終わりだろう。だから頑張つて腰を激しく動かしているんだろう。まったく八幡くんは健気だね!

私はそれに答えるようにマンコを強く締め付けた。するとチンコが膨らんできた。

「陽乃さん!で、射精ます!」

「全部、ちようだいっ♡」

「射精る!」

「き、きたああああ♡い、いくうううう♡♡」

八幡くんのたくさんの精子が私の子宮に注がれている。精子で私の子宮が大きく広げられた。子宮から快樂が全身を駆け抜けた。

もう今の私は全身が性感帯になった。指を絡めるように握られている手から伝わる八幡くんの体温だけでも心地いい。

「あんっ♡……八幡くんのせーし、たくさんっ♡」

「は、陽乃さん……」

「ふふっ……もしかしたら数カ月後にはパパになっているかもね?」

「そういう陽乃さんはママですね」

「だね」

私は八幡くんから離れると子宮の辺りを撫でて未来のことを妄想していた。男の子でも女の子、どちらでもいい。男の子だったら八幡くん似かもしれないし、女の子だったら私似かな？

「まずは綺麗にするね。はむっ……じゅるるるるるっ」

「のおおお……陽乃さんの掃除フェラ、凄いです」

「じゅるるるるるっ……じゅるるるるるっ」

「で、射精るー！」

「んんっ……んぐっ」

射精を繰り返したチンコに私はフェラでチンコに付いた精子を綺麗に舐め取った。そして最後の射精をして、八幡くんは気絶するように眠ってしまった。

この寝顔はもう私だけしか見られない。もう八幡くんは私から離れられない。さらに子供まで出来れば、八幡くんを縛るには十分だろう。

「もう君は私だけのものだからね……ふふっ♡」

私も体力の限界だったようで、気絶するように眠ってしまった。それから数週間後、私は無事に八幡くんの子供を妊娠することが出来た。

やはり私が彼を手に入れるのはまちがっている。 5

私、雪ノ下陽乃は八幡の子供を妊娠することが出来た。それから10ヶ月後に私は無事に第一子の長男を出産することが出来た。

そして私は八幡と一緒に私の実家に帰ってきた。安定期まではマシオンだったけど、お母さんの提案で出産後からは実家で暮らさないかと言ってきたのでそのお言葉に甘えることにした。

実家にはお手伝いさんにお母さんもいるから子育てするには十分過ぎる環境だ。まあ、理由はそれだけではない。単純にお母さんが孫とずっと居たいからだ。もう孫バカになりそうな予感。

「それで雪乃ちゃんはまだ言っているの？お母さん」

「ええ、そうなのよ。まったくあの子は……」

「雪乃ちゃんは後のことを考えないから」

私は今、実家のリビングでお母さんとお茶していた。話題は雪乃ちゃんのことだ。雪乃ちゃんは隼人との婚約を高校生の時にしていたけど、修学旅行の真相で隼人のことを信頼出来る訳もなく、婚約破棄をこの数年間、ずっと言っている。

だけど、大きなパーティーで婚約を発表してしまい、簡単には婚約破棄なんて雪ノ下家の顔に泥を塗ることになるので、お母さんがずっと阻止している。

「雪乃ちゃんにも困ったものだよね〜」

「それがあいつだからですよ」

「だよね〜」

私は久々に八幡と二人っきりの夜を過ごしている。息子はお母さんが面倒見てくれているので、久々に八幡とセックスが出来る。

今まではフェラやアナルでしていても、出産が近づいてからはどちらもしない。八幡もそうだけど、私も欲求不満になっている。

「八幡。弟か妹を作ってあげよ♪」

「陽乃……そうだな。一ヶ月以上、溜まっているから覚悟しろ」

「八幡っ♡……んひい♡」

久々に八幡のチンコが私のマンコの奥まで挿入された。久々だか

ら刺激が一気に体を貫いた。息子を産んでからマンコが広がっているかと思っただけ、八幡の表情からそんなことはなかったようだ。

「出産したのに強い締め付けだな！」

「あんっ♡久々だから頑張るよ。んひい♡」

「陽乃！陽乃！」

「んあっ♡ああっ♡あんっ♡」

「陽乃！」

八幡はすっかりスイッチが入ったようで激しく腰を動かしてきた。そして何度もチンコの先が私の子宮の入り口を叩いてくる。

私はその度に軽くイッてしまう。この体に電気が走る感覚は懐かしい。今、私は八幡に抱かれているのを実感出来る。

「陽乃！一発目、いくぞ！」

「うんっ♡きてっ♡」

「で、射精る！」

「んひいひいひい♡きたきたきたっ♡」

八幡のチンコから私の子宮に大量の精子が注がれている。熱くてドロドロの精子が子宮を満たしている。あまりにも大量の精子で私の子宮は広げられる。

子宮から体全体に快樂が万遍なく広がる。今までの人生でこの瞬間がもつとも幸せを感じる時だ。

「あんっ♡八幡の精子が出ちゃうっ♡」

「わ、悪い陽乃。初めから飛ばし過ぎた……」

「いいよ。気にしてないから……それよりもう終わり？」

「あ、ああ！まだやれるぞ！」

八幡が一度、チンコを私のマンコから抜いた。すると射精された精子がマンコから逆流してきた。これだけの精子があれば、妊娠は確実だろう。

でも私も八幡も満足していない。その証拠に八幡のチンコはまだガチガチに勃起している。私だって、一回の射精程度じゃ満足出来ない体なんだから！

私は股を開いて、手でマンコを広げて八幡を誘った。これで八幡が

興奮しなかったことはない。

「んひい♡ひゃあ♡あああ♡」

「陽乃！なんて、エロい妻なんだ！」

「ああ♡んんっ♡んあああ♡」

「陽乃！また孕め！何度も孕め！」

「んあああ♡は、はらむうう♡」

「で、射精るぞ！うっ……」

「い、いぐううう♡♡」

また私の子宮に八幡の精子が注がれた。子宮に入りきらなかった精子がチンコとマンコの隙間から溢れてきた。マンコをしつかりと締めても漏れ出てきた。

私は二度目の絶頂を余韻を噛み締めていた。その時だった、子宮から何かを感じた。もしかしたら私の卵子と八幡の精子がくっ付いたのかもしれない。

二度目の妊娠は感覚的に分かることもあるって聞いたけど、もしかしたらそうかもしれない。

「陽乃。まだだ……」

「は、八幡？」

「次はこの体勢で」

「ま、待って！イッたばかりでびんか——んひいひい♡♡」

八幡は私を仰向けからうつ伏せにしてから後ろからチンコを挿入してきた。本当に乱暴なんだから。でも後ろからだど仰向けよりマンコの奥に届くからいいんだけど！

「陽乃！陽乃！」

「んひい♡あああ♡んあああ♡」

「陽乃！孕め！孕め！」

「ああ♡んんっ♡んあああ♡♡♡」

八幡のチンコが私の子宮の入り口をノックする度に子宮が喜んでいる。体の相性抜群だよ、私たち。これなら倦怠期の心配はないね！

本当に八幡は私をまた孕ませようと頑張っている。まあ、一ヶ月以

上我慢してくれていたからね。八幡のチンコが大きくなってきた。

「陽乃！射精るぞー！」

「んひい♡ああああ♡ひひひひひひ♡」

「で、射精るー！」

「ひやああああああ♡♡い、いぐうううう♡♡」

八幡のチンコから射精された精子が私の子宮に注がれている。子宮が大きく膨らむ。子宮から体全体に快楽が流れる。

頭が真っ白になって、何も考えられない。視界がチカチカと光っている。脱力感の所為で体が上手く動かない。

「陽乃……」

「は、八幡？」

「まだだぞ……」

「ちよつと休憩を——のおおお!?!」

八幡は私をうつ伏せから仰向けにして、子宮の辺りに手を置いたと思ったら、子宮を思いつきり上から押さえつけてきた。

すると子宮に注がれた精子が逆流してきた。精子がマンコを逆流することで私はまたイッてしまった。

「い、いぐうううう♡♡」

「これでまた射精できる」

「ま、待って！これ以上は！」

「陽乃……愛している」

「あつ♡——んひひひひひひ♡♡」

私は八幡に囁かれた一言で許してしまった。八幡は遠慮なくチンコをまたまた私のマンコに挿入してきた。チンコは私のマンコの入りに一気に到着した。

連続でイッた私のマンコは敏感になり過ぎており、たった一突きだけで潮まで噴いてしまった。

「はむっ……ちゅうううう」

「んひい♡乳首、らめえ♡ひやああああああ♡」

「ちゅうううう……れろっ……ちゅうううう」

「んひひひひひ♡ああああああ♡♡」

八幡は私の乳首に吸いてきた。そして母乳を吸ってきた。いつも赤ん坊にやっっているけど、八幡の場合は吸うだけではなく歯で軽く噛み付いて、舌で乳首を転がすように舐めてくる。

赤ん坊の授乳とはまったく違う感覚に私はイクことが止められなかった。しかも両乳首でやってきて、快樂2倍になってしまう。

「は、八幡。乳首はらめええええ♡♡」

「ちゅうううう……ちゅうううう」

「んひひひひひ♡♡」

「ちゅうううう」

八幡は乳首を吸うのを止めてはくれなかった。本当にまったく仕方ないな。これは本来、赤ん坊のものだけど、私のものは八幡のもので、八幡のものは私のものだからね。

母乳を吸って、八幡のチンコが膨らんできた。そろそろ射精するんだろう。これで今回、最後の射精だろう。私はしっかりと受け止める準備をした。

「陽乃……射精る！孕め!!」

「あひゃああああ♡♡いくいくいく♡♡」

「陽乃……最高だよ」

「八幡もね♡」

私の予想通りで八幡は体力の限界で私の胸に倒れこんで来た。私の方はとつくに限界を迎えていたので、気絶するように寝てしまった。

そして数ヶ月後に私は双子の女の子を出産した。双子の出産は両親だけではなく八幡も将来、美人になってお嫁にいくことを心配していた。

流石に20年以上先のことを今から心配する必要はないでしょ？それから一年後に私は末っ子の男の子を出産した。

「陽乃。お疲れ様」

「八幡。私、すごく幸せだよ」

「俺も陽乃おかげで幸せだよ」

私は八幡を手に入れた幸せを噛み締めていた。やはり私が彼を手

に入れるのはまちがっていなかった。

これも雪乃ちゃんや隼人、ガハマちゃんのおかげだね。ちなみに三人は幸せになれなかった。それもそうだよね、そもそも私が三人を幸せにはしないよ。

まず雪乃ちゃんだけど、隼人と大学を卒業後に入籍したけど、結婚式は挙げていない。ずっと婚約破棄を願っていたけど、お母さんに逆らえるはずもなく隼人と入籍だけはしたけど、すでに家庭内別居をしているとか。今では引き籠もって嘗ての美貌は太って消えてしまった。

隼人は大学卒業後は葉山のおじ様の下で弁護士の卵として経験を積んでいたけど、まったく弁護できない弁護士として汚名で世間に知られてしまった。

まあ、隼人は優秀であつても有能ではないからね。周りに流され易いし、嘘吐きだからね。

ガハマちゃんは大学でヤバい連中と付き合っていたらしく、大学を中退して体を売っているらしい。八幡と付き合えなかったことが相当ショックだったようだ。

何度か八幡を返せとか会社まで来て喚いていたけど、警察のお世話になってからは来なくなった。どうもご両親と田舎に引っ込んだようだ。

「まったく八幡を大事にしていれば、幸せになれたのに……」

私は子供たちと遊んで疲れて寝てしまった夫の八幡と子供たちの寝顔を見ながら誰にも見せられない邪悪な笑みを浮かべていた。

さて、もつとこの幸せを噛み締めないとね。本当に私は幸せ者だよ



由比ヶ浜舞衣編

やはり人妻を睡姦するのはまちがっている。

俺、比企谷八幡の高校生活は文化祭での実行委員長の相模に対しての暴言に始まり、修学旅行での嘘告白での戸部の告白の邪魔をした事で更にどん底へと落ちた。

雪ノ下からは「あなたの事、嫌いだわ」と言われる始末に由比ヶ浜からは「もつと人の気持ち考えてよ!」と言われてしまった。

なら聞くが、雪ノ下お前は依頼を受けて癖に俺に丸投げしたじゃないか。それで俺のやり方に文句を付けるなら最初から受けないか、もしくは自分でどうにかしろよ。

そして由比ヶ浜、お前はどうかんだ?人の気持ちとか言うが、告白を受ける海老名さんの事を考えたのか?

お前こそ、人の気持ちを考えろ!毎度毎度、何かある度に俺を「キモい」と罵倒して俺が傷付かないとでも思っているのか?

こつちは傷付いているんだよ!それを我慢して我慢して押し殺しているんだよ!!それだというのにお前も雪ノ下も俺を罵倒して俺の性格を直すよりお前らの性格を先に直せよ。

自分達の方が、正しいと思っっているなよ。いつか必ず壊してやる。心を精神を粉々に砕いて潰して原型すら残さない。絶対にだ!!

それはさて置き今日の晩ご飯を考えないとな。俺は絶賛、妹の小町とケンカ中だ。原因は修学旅行での事だ。

流石は俺の妹だけあって俺の言動が気になったようで、しつこく聞いてきたので怒鳴り返したらキレられて家を追い出された。

幸いにも修学旅行で殆んど使わなかった金があるのでしばらくは大丈夫だろう。だが、出来るなら節約をしておきたい。

ここは腹を括ってネットカフェ難民にでもなるか?いや、それでも金の問題が残る。バイトでも始めるか。それとも小町と仲直りして家に帰るかの二つだな。

そして仲直りをしようと決めて家に帰ろうとした時に人にぶつ

かかってしまった。

「きやあ?!」

「す、すいません!?俺が前を見て無いばかりに……」

「大丈夫だから気にしないで……あら、もしかして君、ヒツキー君?」
「ひ、ヒツキー君?」

目の前の女性は俺の事をいきなり「ヒツキー君」と言ってきた。待てよ、俺の事を「ヒツキー」と言うのはこの世に一人しかいない。

それにこの女性をよく見てみると誰かに似ていた。この顔、それにこの大きな胸、この人はもしかして……

「……由比ヶ浜のお母さん?」

「ええ、そうよ。初めまして、ヒツキー君」

驚いた。目の前の女性は由比ヶ浜のお母さんだとはな。由比ヶ浜の胸が大きいのは母親譲りなのだろう。

娘の由比ヶ浜もそうだが、母親のこの人の胸も中々に大きい。雪ノ下が見たら自分の胸を触り勝手に落ち込むのだろうか。

「どうしたの?ヒツキー君」

「い、いえ……何でもありません」

「そう?ヒツキー君は晩ご飯はまだかしら?」

「ええ、まだですけど。それが?」

「良かったらウチに晩ご飯食べに来ない?」

「……え?」

いきなりの由比ヶ浜の母親からの晩ご飯への招待に驚いてしまった。それにしてもどうして俺を誘うんだ?

「ど、どうして、誘ってくれるんですか?」

「実は今日、主人も結衣もないのよ。だから一人でご飯食べても美味しくないでしょ?だから誘ったの。もし予定があるなら断ってもいいのよ」

「い、いえ。お邪魔させてもらいます……」

俺は由比ヶ浜のお母さんの誘いに乗る事にした。帰ろうと思ったが、しばらく時間を空けた方がいいと思っただからだ。

由比ヶ浜家はごく一般の二階建ての家だった。特に変わった所は見られなかった。

「さあ、入って入って。すぐに夕飯の準備するからヒツキー君はリビングでテレビでも見ててちょうだい」

「……分かりました」

家上がった俺は言われた通りにテレビを見始めた。だが、ニュースなど見ても内容が頭に入っってこなかった。

そこで持ち歩いているラノベでも読もうかと鞆を漁ってみると睡眠薬の瓶が出てきた。

どうして、こんな物が俺の鞆から出て来るんだ？

「……そうか。小町に追い出された時に慌てていたからな」

クソ親父と母ちゃんが使っている薬だ。二人は社畜として働いているので、家に帰ればすぐに寝るが、たまに疲れ過ぎて眠れない時があるのだ、そういう時に飲んでいるのだ。

それを見て俺は自分の中にある黒い何かが沸き上がってきたのを感じた。

「おまたせ、ヒツキー君。さあ、食べましょ」

「あ、はい。すぐに行きます」

俺は呼ばれたのですぐにキッチンに向かった。睡眠薬の瓶から数錠をポケットに入れてだ。

由比ヶ浜のお母さんが作った料理はすぐ美味しそうだった。娘の由比ヶ浜が作れば、絶対に暗黒物質になるだろうにな。

あいつももう少し料理を勉強するべきだろう。

「……凄く、美味しいです」

「そう？ありがとね、ヒツキー君。さあ、まだあるしいっぱい食べてね」

「は、はい。由比ヶ浜のお母さん」

「その『由比ヶ浜のお母さん』って言うのは辞めてくれない？」

「……それじゃなんと呼べば？」

「舞衣。そう呼んでちょうだい」

この人は娘の同級生に名前と呼べと言うのか!!こつちが恥ずかしいわ!!でもそんな期待された目を向けられると呼ばないのも不味いよな。

「……舞衣さん」

「うん。でも娘の同級生に名前と呼ばれるのはなんだか照れ臭いわね」

舞衣さんは照れているようで顔が少し赤くなっていた。少しだけ会話しかしていないが舞衣さんは優しい。どうしてこの人からあんなビッチが産まれたのだろうか?謎だ?

この人が母親、もしくは恋人だったらどんだけ良かっただろうか。ぶるぶる!!ぶるぶる!!

晩飯を食べていると携帯の着信音が耳に入ってきた。俺ののではないな。俺に電話してくる物好きはいないからな。

「あ、私のね。ごめんなさい」

そう言っただけ舞衣さんは席を外した。その時だった、俺の頭に悪魔の囁きが聞こえたのは。

——由比ヶ浜の母親を犯して妊娠させてお腹の子が大きくなった時に由比ヶ浜に真実を教えて絶望させるのはどうだ?

——お前の手には睡眠薬があるじゃないか。眠らして犯すんだよ。

——初めはゴム有りでも犯してそれを録画して脅すんだよ。

——何、眠っているから向こうは夢だと思うさ。

俺は自分の手にある睡眠薬をスプーンで潰してコップの中の水に混ぜた。入れ終わると同時に舞衣さんが戻ってきた。

「ごめんなさい。主人からだったわ。しばらく帰れないかもしれないから戸締りをしっかりしろだって」

「そうですか。あ、ご馳走になったから俺が食器を洗いますよ」

「そう?ありがとね、ヒッキー君」

俺はその後も何事もない様に食事を続けた。食事が終わりそうになると次第に舞衣さんに異変が現れた。

頭を支えて瞼をぱちくりし始めたのだ。

「……眠いなら寝て来ていいですよ？」

「……でも、お客様のヒツキー君を残して寝るなんて……」

「俺なら大丈夫ですから寝てください。あ、鍵を貸してもらえますか？帰ったら鍵を掛けてポストの中に入れておくんで」

「……そう？それじゃお願いね。あ、これが鍵だから……」

俺は舞衣さんから鍵を受け取った。舞衣さんはすぐに自分の寝室に向かった。

それから俺は皿洗いをして時間を潰して二階の舞衣さんの寝室に向かった。その際に玄関には鍵を掛けてチェーンロックもした。これで安心だ。

「……舞衣さん？起きていますか？」

「……」

俺の声に反応がないので部屋に入ってみると服だけを脱いだ舞衣さんがベットの所で寝ていた。睡眠薬はしっかりと効いていたようだ。電気が消えていない。

服の上からじゃあまり分からなかったが、流石は由比ヶ浜の母親。大きい胸しているな。

「……あんたが悪いんだ。娘をしっかりと躡けていないから……!!」

俺は舞衣さんから下着を少し横にずらしてマンコを見た。気付かないようにゆつくりとだ。呼吸する度に少し揺れる胸が俺を興奮させてくれる。おっと、スマホをいい位置に置いて録画しておかないとな。

「……んっ……あなた、ダメ……」

ドキッ!となったが、起きたわけではなかった。寝言だった。ビツクリしたな。

ここまで来たんだ。やってやるさ! 由比ヶ浜を絶望させるために俺は今からこの人を犯すんだ!

半裸となった舞衣さんを犯すため俺は全裸になった。そして高校男子の必需品のゴムを勃起したムスコに装着した。

俺はゆつくりと舞衣さんのマンコに俺のムスコを入れた。

ずずずず……

「……んっ……あ、あなたの……大きい……っ!!」

どうやらご主人とSEXしている夢を見ているらしい。エロ過ぎだろ、この人。てか、旦那より俺の方が大きいのか。

ずずずずっ………ごっちんっ

「あ、あなたっ……すごい、奥まで、きたっ……」

旦那のは奥まで行かなかったのか? だとしたら小さかったんだろ。うな。残念だったな旦那さん。あんたの妻は今、娘の同級生が犯して気持ち良さそうにしているよ。

それにしても女性の性器がこれほど気持ちいいなんて、思わなかったな。

ずずずずっ………ぱんぱんっ………ずずずずっ………ぱんぱんっ………ずずずずっ………ぱんぱんっ!

俺は入れたり引いたりを繰り返した。何だろ? 入れたり引いたりする度に舞衣さんの膣内が締まって気持ちいいな。ヤバイ、そろそろか。

「次は生で犯して孕ましてやる………ぐっ?! 射精るっ!!」

びゆるるるびゆるるるっ………びゆる、びゆる……

「あ、あなたの熱いのが、お、奥に………出て………いくうううっ!!」

ゴム越しの射精で絶頂したらしい。その際、身体が少し痙攣していた。それにしても女性の膣内への射精が気持ち良かったな。おっと、これ以上は流石に不味いな。

下着などある程度、元通りにして家を出る事にした。もちろん鍵はポストに入れるのは忘れていない。

俺は家に帰り、出迎えたのは小町だった。

「もう! お兄ちゃん!! こんな時間までどこ行っていたの!?!」

「すまん。これ、お前が欲しがっていたアイスな」

「え？ホント！ヤッター!!お兄ちゃん大好き！」

この妹はホントにちよろいな。これで機嫌は少しは良くなったな。俺は小町に謝ってから部屋に籠って録画した舞衣さんとのSEXを何度も見て射精を五回もしてしまった。

その時、俺の心にあつたのは由比ヶ浜の母親を犯した罪悪感より人妻を犯して絶頂させた満足感だった。

「……次は睡眠薬なしで犯したいな……」

また、由比ヶ浜や旦那のいない時に食事に誘ってくれないだろうか？いや俺がその状況になるように仕組めばいいんだ。

次、生で犯した時の舞衣さんの反応が楽しみだな。娘の同級生に犯させたらどんな顔を見せてくれるんだろうか？

「……ああ、早く犯したいな……」

この時の俺の頭には舞衣さんを犯し孕ませ由比ヶ浜を絶望させる事しかなかった。待っていてくださいいね、舞衣さん。

次は必ず孕ましてあげますから!!

やはり人妻をまた睡姦するのはまちがっている。

由比ヶ浜の母親——舞衣さんを睡姦してしばらく経った。あの日、舞衣さんを睡姦した日の事は色んな意味で忘れられないものとなっている。

正直、今まで抜いてきた中で一番の気持ちよさだったと断言してもいい!!

あれから俺の生活に変化は特に無い。放課後になれば奉仕部の部屋に行き、雪ノ下と由比ヶ浜に罵倒される日々を送っていた。

由比ヶ浜が俺を罵倒する分、俺は性欲が高まっているのを感じた。早く舞衣さんを犯して孕ませて由比ヶ浜を絶望させたと何度も思った。

と、言ってもあれから舞衣さんを犯すタイミングが掴めないでいた。

何故ならその時に「一色いろは」と言う一年の後輩女子の問題を奉仕部で当たっていたからだ。

まあ、何とかその問題も解決したのはいいが、俺の性欲は増すばかりだ。由比ヶ浜の罵倒がウザい!!

あいつが俺の事を「キモい！」などと罵倒するたびに舞衣さんの睡姦した時の動画を見て射精と同時にストレスを発散させている。

しかしここ数日は見飽きたのか、最近では抜けない。

これは不味い!非常に不味い!これでは俺のストレスと性欲をどこに吐き出せばいいんだ!?

何とかしてまた舞衣さんを睡姦出来ないものだろうか?

そのためには由比ヶ浜と父親がいない日に由比ヶ浜家に行かなくてはならない。だが、そんな都合がいい日がまた来るだろうか?

自分で何とかしたあつたが、今まで何も出来てはいない。どうにかしないとな。

「あれ?ヒツキー君?」

「……え?あ、舞衣さん」

まさか学校から考えながら帰っているとさっきまで考えていた人物が目の前に現れるとは誰が予想できただろうか?

しかしある意味、助かったのかもしれない。舞衣さんの事を考えるあまり勃起しかけていたからだ。考え続けていたら間違ひなく勃起していただろう。

『どうしたの？ヒッキー君』

「え？あ、いえ……何でもありません。に、荷物重そうですね？持ちましようか？」

『いいの？ありがとね。ヒッキー君』

話しかけてきた舞衣さんの両手には買い物袋が握られていた。今日はチャンスではないな。買い物袋の重さからしてそれなりに食材を買ってきてるから今夜は家族にご馳走でも食べさせようとしているのだろう。

「あ、そうだ。ヒッキー君。もし良かったら今日もウチで夕食食べていかない？」

「……今日ですか？こんだけ買い物したからご馳走でもするんじゃないですか？」

「そうなんだけど。主人が今夜、同僚の人飲んでその人の家に泊まるそうなのよ。結衣は雪乃ちゃん？だったかしら？その子の家で勉強するから夕食はいいって言ってきてね。こんなに買ったし勿体ないでしょ？」

なんて幸運なんだ俺は!!こちらとしても願ったり叶ったりだ。また舞衣さんを睡姦出来る!!

断る理由なんて無い!そうと決まれば小町に連絡だな。

「すいません。ちよつと待ってください」

俺はそう言つて小町に連絡した。

『どうしたのお兄ちゃん?』

「小町。俺、晩飯いらさないから!」

『え?どうして……』

小町が不思議がつて聞いてきた。ここで「友達に誘われたから……」と言えば、一発で嘘だと言われる。

「ここは正直に言つた方がいいな。」

「……実は由比ヶ浜のお母さんに夕食に誘われてな」

『それって、結衣さんもいるの?』

「いや、由比ヶ浜は雪ノ下の家で勉強するらしいから夕食はそこで食べるんだろ」

『……ふくん。そう言うことね。小町は全然良いよ。お母さんとお父さんは今日も遅くなるって言っていたから小町は外で食べようとしていたから』

それはなんと都合がいい事か。これでまた舞衣さんを犯せる。

例え朝帰りしても大丈夫だな。まあ、俺達の両親としては普段の事だしな。

「それじゃ食べてきてもいいよな?」

『うん。いいんじゃないかな?それじゃ結衣さんには小町から言っておくから』

それだけ言つて小町は電話を切った。由比ヶ浜に知られたら後で面倒だが、ここで嘘を言うよりはマシか。

「それでどうだった?ヒッキー君」

「……ええ、大丈夫です。妹は外で食べるそうですし、両親はどちらも遅くなるそうなのでご馳走になります」

「それじゃ行きましょ」

舞衣さんに付いて行くかと思つたが、俺はある物を準備した方がいいと思つた。

「あ、すいません。先に行つてください。俺、ちょっとコンビニで買いたい物があるので」

「そう?わかつたわ。それじゃ待っているから」

舞衣さんを先に行かせて俺はダッシュでコンビニに行きある物を買つた。それはビニール紐だ。

今回は舞衣さんを拘束して犯そうと考えている。それに今回は一回で終わりはない。

朝まで犯すつもりだ。その途中で起きられたら不味い事になるので何か拘束出来る物が必要だなのだ。

だからビニール紐を買つた。それにスマホの充電は十分あるので問題なし。

俺は急いで由比ヶ浜家に向かって走った。チャイムを鳴らした。

『はい』

「ひ、比企谷、です。はあはあはあ」

全力ダツシユし過ぎたな。息をするのが辛い。

『玄関は開いているからはいってきて良いわよ』

「わかりました」

舞衣さんの許可も得たのでそのまま俺は家の中に入った。舞衣さんは夕食の準備に取り掛かっていた。

エプロン姿を見て思わず考えてしまった。人妻の裸エプロン姿を。

うん。エロい。いや、エロ過ぎるな。

「いらつしやい。ヒッキー君」

「……どうも。何か手伝いましょうか?」

「大丈夫よ。すぐに出来るからソファアにでも座っていてちょうだい」

「わかりました」

俺は舞衣さんの言われるままソファアに座った。そして鞆の中に用意した物を確認した。

睡眠薬、よし! ビニール紐、よし! スマホの充電、よし! ボイスレコーダー、よし!

このボイスレコーダーには奉仕部の会話が入っている。念のため用意した。奉仕部の部室で由比ヶ浜が俺の事を「キモい!」など罵倒の言葉がしっかりと録音してある。

これを用意したのは万が一、舞衣さんが犯している途中で目が覚めた場合、これを使って脅すためだ。

「……準備は問題無い」

「ヒッキー君。準備出来たからこっちに来てくれる?」

「はい。すぐに行きます」

舞衣さんに呼ばれたので行ってみると、テーブルには前回と同じようにご馳走が並んでいた。美味しそうだ。

「あ、ごめんなさい。お風呂のお湯、出しっぱなしだったわ」

舞衣さんは風呂場に向かった。俺としては好都合だ。この隙に睡

ずずずずずつ……ぱんっ……

俺は舞衣さんの膣内にゆっくりと挿入した。そして膣の奥まで俺のムスコは届いた。

舞衣さんの膣内が俺のをギュウギュウと締め付けてくる。

「……んっ……あ、貴方の、大きい……」

やっぱり旦那さんのは俺より小さいらしいな。これなら俺のムスコの虜にする事も可能かもしれないな。

でも最初は抵抗して欲しいな。抵抗している人妻を堕とすのをやってみたいからな。

ずずずずずつ……ぱんっ……ずずずずずつ……ぱんっ……

「あっ……いいっ！貴方……ステキ!!」

今更だが、舞衣さん。寝言、凄過ぎないだろうか？夢ではなく現実で犯されているからかもしれないが、おっと……そろそろ射精しそうだな。

「舞衣さん！俺の子を孕んでください!!射精るっ!!」

びゅるるるるびゅるるる……びゅるる、びゅるる……

「ひい!?いぐうううう!!」

俺の射精と同時に舞衣さんも絶頂したようだ。これだけの事をしても起きないとは睡眠薬が効いている様だな。

なら色々としてみるか。膣出しの次はパイズリだな。

娘の由比ヶ浜より大きい胸でしごいたらどれだけ気持ちいいだろうか。早速やってみるか。

むにゅむにゅ

おおっ!!……ただ、人肌に包まれているだけだと言うのに何だ？この気持ち良さは!?膣内とはまた違った気持ち良さがそこにはあった!

俺は腰を前後に振った。さらに手で舞衣さんの胸をこれでもかと寄せた。

温かく柔らかく弾力がある胸を左右から力を加えると更に気持ち良くなった。素晴らしい巨乳だな。

「んっ……貴方……」

舞衣さんは相変わらず夢の中で旦那さんとSEXしているようだが、現実では俺に犯されているとは思ってはいないだろう。

そろそろ射精しそうだ。このまま顔に射精してやろう。
びゅるるるびゅるるる……びゅるるびゅるる……

「あんっ……」

舞衣さんの顔は俺が射精した精液で白くなっている。なんだろう。この満足感は何？

俺は今、不思議な気分になっていた。

舞衣さんの顔には俺の精液がべったりと掛かっているし、マンコからは俺が射精した精液がドロドロと逆流してきていた。

ああ……これだよ。俺はこの場面が見たかったんだ。

「……でもまだ終わってはいない。これからですよ舞衣さん」

俺は舞衣さんの胸からムスコを抜くと下の方に戻り、またマンコに挿入した。

ずずずずず……ぱんっ……

「あんっ……貴方、ダメ……」

舞衣さんの寝言なんて関係ない。俺は気にせず、ムスコを引いたり入れたりを繰り返した。

ずずずずず……ぱんっ……ずずずずず……ぱんっ……ずずずずず……ぱんっ……

「んっ……貴方、そこ、いい……」

ああ……本当に最高ですよ舞衣さん。夢ではさぞかし旦那さんと愛あるSEXしているんでしょうね。

でも現実では俺の子供を孕んでいるかもしれないのにな。
それでは二回目の膣内出しをしますか。一回では確実性に欠けるからな。

びゅるるるびゅるるる……びゅるるびゅるる……

「い、いぐうううう!!」

俺の射精で舞衣さんは絶頂を向かえた。でもまだまだですよ舞衣さん。夜はこれからですしね？

こうして俺の由比ヶ浜結衣への復讐の第一段階は始まった。

子供が産まれたら楽しみにしておけよ、由比ヶ浜!!

やはり人妻を脅迫するのはまちがっている。

清清しい気分で朝を迎えられたのはいついらいだろうか？今はそんな事を思っている。何故なら一晩中、舞衣さんを犯していたからだ。

それにしても睡眠薬で眠らせたからと言って俺が犯し続けても寝ているなんて睡眠薬が効き過ぎたのか？

まあ、どつちにしても結果オーライだな。

「……でも換気をしないと……流石に臭いな」

一晩中、犯していたから部屋の中はイカ臭くなっている。俺は一体、どれだけ射精したんだ？

途中から数えていないな。10回以上は射精したと思うな。

「我ながらよく射精したな……」

途中で水分補給したり精力剤を飲んだりして舞衣さんを犯し続けた。今の舞衣さんは俺の射精した精液塗れになっている。

髪に顔に胸にお腹にマンコに足にべったりと掛かっている。正直、汚い。

「んんっ……あれ？」

どうやら舞衣さんが起きたようだ。

「おはようございます。舞衣さん」

「え？ヒツキー君!?!こ、これはどういうことなの!?!」

舞衣さんは身体が縛られて動けない事に気付いたようだ。気付かない方が無理か。

「俺が昨日の内に縛ったんですよ」

「ヒツキー君がこれを!?!そ、それにこの匂いは……もしかして……」

「あ、気付きました。俺が昨日の夜からずっと舞衣さんを犯していたんですよ」

「犯つ!?!ひ、ヒツキー君!!貴方がやった事は犯罪よ!!分かっているの!?!」

舞衣さんはこれでもかと言うくらい大声で言ってきた。もちろん、分かっているさ。

「ええ、分かっていますよ。そんな事を言われるまでもありません」
「なら！どうしてこんな事をしたの!？」

「そんなの由比ヶ浜への復讐ですよ」

「……ふ、復讐？結衣に？どうして!？結衣が貴方に何をしたと言うの!？」

ああ、舞衣さんは知らないのか。いや、そもそも知っている方が可笑しいか。

「由比ヶ浜は雪ノ下と一緒にになって俺を罵倒しているんですよ。奉仕部に入ってからずっとね」

「ゆ、結衣がそんな事をする訳がないじゃない!？嘘を言わないで!!」

まあ、普通は信じないよな。自分の娘が同級生を二人で罵倒しているなんてな。俺は舞衣さんから離れて鞆からボイスレコーダーを持ってきて再生した。

『視姦谷君。由比ヶ浜さんを視姦するのは辞めなさい』

『え!？そうなの？ヒツキー！マジ!!キモい!!』

『由比ヶ浜さんの胸が大きいからと言ってそこを見過ぎじゃないのかしら?』

『え!？ヒツキー！マジキモい!!ちよー最低だし!』

少し前の奉仕部での会話だ。いきなり雪ノ下が俺が由比ヶ浜を視姦しているなど何だのと言ってきて、由比ヶ浜は俺の事を「キモい」など「最低」など罵倒して来た。

舞衣さんはそれが信じられないような顔をしていた。

「……そんな結衣が、あの子がそんな事を言うなんて……」

「分かりましたか？これが由比ヶ浜結衣。貴女の娘なんですよ。雪ノ下と二人で俺を罵倒して楽しんでるんですよ。あいつらは!」

「それは違うわ！結衣はヒツキー君の事が好きで!!」

「好きな相手なら罵倒してもいいと思ってるのか!!」

「ひい!？」

俺の声に舞衣さんは完全にビビッていた。それにしても由比ヶ浜が俺の事が好き?そんな訳ない。

それなら罵倒して来ないはずだ。それなのにあいつは雪ノ下と一

緒になっていつまでも俺を罵倒してくる。

由比ヶ浜は……

『もつと人の気持ち考えてよ』

と俺にそう言った。ならお前は俺の気持ちをよく考えろよ！バカが!!

人をいじめるのは楽しいか？二人して俺を傷つけて楽しいか？人の気持ちを無視するのは楽しいか？

「由比ヶ浜——貴女の娘が俺をただけ傷つけたか分かりますか？毎日毎日毎日……俺を罵倒した！そして修学旅行であいつは俺を否定した。ろくに考えもしないで依頼を受けて俺が尻拭いをする破目になった！だから決めたんだ。由比ヶ浜に復讐してやるってね」
「わ、分かったわ。ヒッキー君がお、怒っているのは凄く分かったわ。でもこんなの間違っている。こんな事をして何の解決にもならないわ」

「……何言っているんですか？解決する必要はもうどこにも無いんですよ。貴女には俺の子供を産んでもらいますから」

「な!?!ひ、ヒッキー君？何を言っているの?」

舞衣さんは俺の言葉を理解しようとはしなかった。これで理解したら頭が可笑しいか。

娘のクラスメイトがいきなり『俺の子供を産め』なんて言えば混乱するよな、普通は。

「何って舞衣さんに俺の子供を産んでもらうんですよ。それをもって由比ヶ浜への復讐が完了する」

「ふ、ふざけないで！そんな事、絶対にしないわ!!」

「あ、言い忘れていたんですけど。舞衣さんを犯すのは今回で二回目なんですよね」

「……………え？そ、それって……」

信じられないものを見ているかのような表情をしていた。

「前に食事に誘ってもらった時ですよ。眠たく成りましたよね?」

「あ、あの時に……!!」

「ええ、臆内出ししました。今回は保険みたいなものです」

まあ、前はゴムを付けたから絶対に妊娠なんてするわけないけど。舞衣さんは完全に信じているな。

「そんな……あなた、結衣……」

舞衣さんはご主人と娘に対して謝っているように見えた。でも舞衣さんは俺を睨み付けてきた。まだ反抗する気持ちがあるようだ。

「ヒツキー君！貴方を警察に差し出すわ。それで貴方も私も終わりよ！！」

「……なるほど。そう出ますか。あれ見てください」

「あれ？」

俺は舞衣さんの化粧台の上に置いてある俺のスマホを指差した。舞衣さんは最初、分からなかったがすぐに録画されている事が分かる。と顔を青くした。

「も、もしかして……」

「ええ。ばっちり録画済みですよ。もし舞衣さんが俺を警察に突き出すならその前にネットに俺と舞衣さんの性行為をばら撒きます。そうなるとうなるでしょうね？」

「そ、それは……」

舞衣さんはこれから起こるであろう事を想像してか。さらに顔を青くした。

「俺はレイプ犯として少年院と言った所でしようか？それで舞衣さん達はまずご主人が離婚を言い出すかもしれませんね。それで舞衣さんは近所から白い目で見られる。そして由比ヶ浜——貴女の娘は学校かそれ以外の場所で見知らぬ男どもにレイプされる。それから見知らぬ男の子供を孕む事になるでしょうね」

「そんな……お、お願い！それだけはやめて！」

舞衣さんは俺の説明を聞いて、反抗するきだったのに俺に懇願し始めた。

「だったら俺の子供を産め」

「それは……」

「舞衣さん。貴女はもう逃げられないんですよ。俺との性行為の動画はいつでもネットに拡散出来るんですよ」

まあ、拡散する気はないんだけどな。俺だけが見ればいい。誰にも見せるつもりはない。

「それじゃもい一度、臆内出ししていきますか」

「い、イヤアアア!?来ないで!!お願いっ!!もうやめてっ!!!」

「……ならもう何もしません」

「——え?」

俺は舞衣さんの拘束を解いてから服を着て何も言わずに由比ヶ浜家を出た。舞衣さんはただ、ぼう然と俺を見ているだけで警察を呼ぶわけでもなく何もしなかった。

俺は帰る前にシャワーを借りて汗などを洗い流した。その間、舞衣さんは二階から降りては来なかった。

舞衣さんを睡姦してから数日、俺は舞衣さんにも由比ヶ浜にも何もしていない。俺には確信があった。あの時、舞衣さんの顔はどこか期待していたような表情をしていた。

だから何もしない。エロ本の見過ぎかもしれないが、もしかしたら向こうから求めて来るかもしれないからだ。

想い過ごしかもしれない。でも俺は少しだけ期待していた。

「あ、ヒツキー!!」

「由比ヶ浜。……と、舞衣さん」

「こ、こんばんは……ひ、ヒツキー君」

今夜は両親が小町を連れて夕食に行っているので晩ご飯はコンビニで済ませようと歩いていると由比ヶ浜親子に遭遇してしまった。

二人して大きな買い物袋を手に持っていた。由比ヶ浜は相変わらぬだが、舞衣さんは俺にビビッていた。

結局、舞衣さんは警察にもご主人にも言わなかったらしい。今まで無事に過ごせているのが、その証拠だ。

「どうしたんだ？由比ヶ浜」

「ママと買い物していたらヒツキーを見かけたから声を掛けたんだ」

「そうか」

「そ、それでね……ヒツキー。良かったら晩ご飯、ウチに食べに来ない？」

「そうだな……」

俺は舞衣さんの顔を見たが、表情が固かった。あの時の事を思い出しているのだろう。

「ママ！良いよね！ね！」

「そ、そうね。ヒツキー君が、良ければけど……」

「それじゃお邪魔します」

それから俺は由比ヶ浜親子が持っていた買い物袋を半分持って由比ヶ浜家に向かった。

「え？今夜はお前が作るのか？由比ヶ浜……」

「そうだよ！任せてよ!!」

今夜はまさか舞衣さんではなくて、由比ヶ浜が作るとはな。大丈夫だろうか？

「……由比ヶ浜。間違っても暗黒物質を練成するなよ？」

「そんな事しないし！ヒツキー、マジ失礼だし!!」

「いや、一学期に焦げたクツキー作ったくせに良く言えたな」

「あ、あれからがんばって料理を覚えたんだからね!!」

まあ、ここは期待しておくか。すると舞衣さんが立ち上がった。

「ま、ママ。お風呂を洗ってくるから結衣はしっかりと火を見ているのよ？」

「うん！大丈夫だよ！しっかり見ておくから！」

「……悪い由比ヶ浜。トイレ借りていいか？」

「うん。いいよ。お風呂場の近くだから」

「分かった」

俺は舞衣さんの後を追いかけた。お風呂掃除をしている舞衣さん

に近付いた。

「……………何？」

「いえ、驚いただけです。あの時の事、誰にも言わなかったんですね？」

「あ、あれは貴方が脅すから……………仕方なく、従っているだけ!!」

ネットにばら撒くと信じているから誰にも言わなかったのか。なんとも家族想いな人だな。だからもつとこの人を犯したくなる。

もつとグチャグチャにしてみたいと思う。それにしてもいいお尻だな。

「だったら舞衣さん。パンツを脱いでお尻をこっちに突き出してください」

「っ?!あ、貴方は……………どこまでも最低なの!!」

「どこまでつて……………どこまでもですよ?それに罵倒を一切、やめない貴女の娘さんも似たようなものでしょ?」

「結衣と一緒にしないで!!」

舞衣さんは俺に怒鳴り付けるかのように言ったが、俺が口パクで『ど・う・が』とした途端、パンツを脱いでお尻を俺の方に突き出した。

そして俺はある事に気が付いた。垂れていたのだ、愛液がポタポタと風呂場の床に。

俺は確信した。この人はドMだと。

でなければ、こんなにも愛液を垂らすわけがない。この間の事を思い出して興奮しているのだ。

「……………このドMの淫乱人妻が!」

やはり人妻がメスに堕ちるのはまちがっている。

「……このドMの淫乱人妻が」

「っ!？」

俺が舞衣さんを罵倒すると舞衣さんは身体を小刻みに震えさせた。もしかして感じているのか？

マジで、淫乱だな。もう少し様子を見るか。

「どうしたんですか？何か言い返さないんですか？それとも認めるんですか？自分が淫乱でドMな事」

「ち、違うわー！私は……別に……」

舞衣さんは否定していたが、本当の所どうなんだろうか？試してみるか。俺はポケットからある物を舞衣さんに渡した。

「舞衣さん。これをどうぞ」

「……これって、もしかして?」

「ええ。睡眠薬です」

俺が舞衣さんを二度に渡って犯す事が出来た必需品だ。流石は不眠症で寝れない俺の両親を寝か躡けてしまうほど強力な睡眠薬だ。

舞衣さんは睡眠薬を見て固まっていた。まあ、そうだろうな。

「……これを今夜、誰に使うかは舞衣さんにお任せします」

「そ、それは……どう意味なの?」

「ここまで来て惚けるつもりですか？まあ、いいですよ。選択肢は三つです。一つ、俺に飲ませる。二つ、自分が飲む。三つ、娘に飲ませる。一つ目は今夜は何も起きません。二つ目はまた睡姦ですかね？でも由比ヶ浜が居るんで出来ない可能性が高いですね。三つ目は一晩中、犯してあげますよ。どれがいいですか？舞衣さん」

「そ、それは……」

「まあ、晩ご飯を食べ終わるまでに決めてください。では……」

俺はそのままキッチンで料理をしている由比ヶ浜の様子を見に戻った。舞衣さんは結局、お風呂掃除から戻ってきたは10分も後の事だった。

この時の俺は舞衣さんが誰に睡眠薬を使うのか大体、検討が付いて

いた。今夜は楽しくなりそうだ。

由比ヶ浜が作ったのは意外や意外、ハンバーグだった。まさかあの由比ヶ浜がハンバーグを作るとは思いもしなかった。てつきりゆで卵かと思っていたからだ。

「……由比ヶ浜って、ハンバーグを作れたんだな」

「それ！どう意味だし!？」

「そのままの意味だ。表面は完全に焦げていない。奇跡だな……」
「ヒツキー！マジで失礼だし!？」

由比ヶ浜が作ったハンバーグはどこも焦げてはいなかった。一学期に焦げたクツキーを作った同一人物だとは思えなかった。

箸でハンバーグを軽く圧してみると肉汁が溢れてきた。ホントにハンバーグだ。

てつきり圧すと緑の液体が出て来ると思っていたのにな。

「……ホントに成長したな。由比ヶ浜」

「泣くほど!?!ヒツキーマジキモい!!」

褒めたのにまたしても罵倒された。まあ、いいか。楽しみだな、舞衣さんは誰に睡眠薬を使うのだろうか？

兎に角、今は由比ヶ浜のハンバーグを食べてみるか。

「いただきます」

ぱくり……もぐもぐ……

俺はハンバーグを箸で摘むと豪快に一口食べた。肉汁が口いっぱい広がるのが分かる。

どろり……

何か口の中に不思議な食感が広がり始めた。どこか甘くほろ苦い、これはまさかそうなのか？

「……由比ヶ浜。一つ聞いていいか?」

「うん。何?」

「どうしてハンバーグの中にチョコレートを入れた?」

「え?入れているのもあるよね?」

「……それはチーズだ。誰がハンバーグにチョコレートを入れる奴がいる。後味、最悪だぞ」

「え？嘘!?……うえ……ホントだね。後味、最悪だし……」

味が最悪とは言え、責任を持って全部食べ終えた。こいつは目を離すと勝手にアレンジを加えるから駄目なんだよな。

メニュー通りに作らないのが一番駄目なんだよな。基本がなっていない。

そして食事を終えた頃、由比ヶ浜に変化が起った。

「……ふあく……」

「……結衣。眠たいなら自分の部屋で寝なさいよ」

「で、でもヒツキー……いるし……」

由比ヶ浜は急な眠気に襲われたのだ。俺が渡した睡眠薬を舞衣さんが娘に飲ませたのだ。なら今夜はたっぷりと犯してあげますか。

「俺の事なら気にするな。もう帰るから」

「ほらヒツキー君もこう言っているんだし早く寝なさい」

「……うん。お休みママ。ヒツキー、また明日ね……」

由比ヶ浜は二階の自分の部屋に向かった。俺と舞衣さんはテーブルの上の料理を片付けた。

「まさか自分の娘に飲ませるなんてね」

「そ、それは……」

「まあ、いいですよ。あ、そう言えばご主人は？」

「……主人は短期の出張で戻るのは明後日よ」

それは都合がいいな。由比ヶ浜は睡眠薬で寝ている。ご主人は出張でいない。これほど都合が良い日は無いだろ。

「それじゃ舞衣さん。服を全部脱いでください」

「っ!?!」

俺がそう言っても舞衣さんは服を脱ごうとはしなかった。だから俺はズボンを下ろした。勃起した俺のチンコを見せた。

「これで犯して欲しくないんですか？」

「っ!?!……は、はい」

舞衣さんは服を全部脱いだ。前も思ったが、人妻にしては凄く綺麗

で引き締まった身体をしているな。早く犯したい。

「それじゃテーブルの上に乗ってマンコを自分で広げて———と
言ってください。」

俺は舞衣さんの耳に近付き小さな声である事を言うように言った。
舞衣さんはテーブルの上に乗るM字開脚でマンコを自分の指で広げ
た。

俺はスマホで録画を始めた。

「わ、私……由比ヶ浜舞衣は……ひ、比企谷八幡君の子供を……産む事
を……ち、誓います。あなた、結衣、ごめんなさい。でもママ、もう
我慢出来ないの!」

やらせておいて何だが、エロいな。マジで。

「それじゃ舞衣さんも我慢の限界のようですし挿入ますね」
ずずずずず……

「は、入ってきた……っ!?す、すごくおおいっ!」

「まだまだ奥まで挿入します、よ!」

ずんっ!!

「ひい!?お、おくに当たっている!」

舞衣さんは俺のチンコがマンコの奥まで行くと軽く絶頂したよう
に見えた。

ずずずずず……ぱんっ!ずずずずず……ぱんっ!ずずずず
ず……ぱんっ!

「ひいひいひい!?で、でたり……っ!?は、はいいたり……っ!?しゅご
い……♡」

俺が腰を引いたり入れたりするたびに舞衣さんは乱れまくった。
仕舞いには俺に抱き付いて来た。

巨乳が顔を挟んできて心地よかった。うん!巨乳、サイコー!!!

「舞衣さん。そろそろ射精そうですけど?どこに射精して欲しいです
か?」

「な、膣内につ!!ヒッキー君の子供、孕ませてっ!」

「分かりました!射精る!!!」

「いくうううう!!!」

びゆるるるるるびゆるるるる……びゆるるるるびゆるるる……

「あ、熱いのが、膣内に……っ♡赤ちゃん、出来ちゃう♡」

射精した余韻を俺が楽しんでいる中、舞衣さんはうっとり顔で絶頂していた。そこには人妻の顔は無く、ただの性に溺れたメスが一匹がいた。

「舞衣さん。まだまだこれからですよ」

「ええ。ヒツキー君の精子、もつとちようだい♡」

うん。舞衣さん、堕ちたな。娘のクラスメイトで好きな？男の精子を自分から求めてくるなんて、人妻として一線を踏み越えたな。

ふと、俺はある事が気になり出した。

「舞衣さん。聞いてもいいですか？」

「うん。何？」

「さつき、我慢出来なかったって言っていましたよね？何が我慢出来なかつたんですか？」

「……ヒツキー君が私を犯した次の日に主人とねたの……でもあの人が、一回だけ出ただけで寝てしまってお、オナニーしても全然気持ち良くなれなくて」

なるほど。ご主人は仕事などで疲れていたから激しい行為が出来なかつた上、一回だけの射精では舞衣さんは満足出来なかつたのか。

そして今日までオナニーをしても気持ち良くなれなくて、我慢の限界で一回挿入しただけで堕ちてしまったのか。

「そうですか。でも安心してください。俺の金玉にはあの日から溜め込んだ精子がたんまりとありますから膣内が俺の精子で溢れるくらい注いで上げますよ」

「ほ、ホント!?ちよだい♡ヒツキー君の赤ちゃんの素♡たくさんちようだい♡」

「ええ。今夜は徹底的に種付けして上げますよ!!」

ずずずずず……

「ああっ!?ま、またおきにつ♡きたっ♡」

「ぐっ!?凄い締め付け……!」

舞衣さんの膣内は俺のチンコを離さないようにギュウギュウに締

め付けてきた。まるで膣内だけ違う生き物ようだ。

「ま、舞衣さん。次は身体の位置を変えてみましょう」

「そうね」

「テーブルから降りてお尻をこっちに突き出してください」

「はい♡」

舞衣さんはテーブルから降りて俺にお尻を付き出した。うん。いい形のお尻だな。

「ずずずっ……ぱんっ!!」

「い、いきなりっ♡おくにっ!!」

俺は舞衣さんの両手首を掴んで思いつきりチンコを奥に押し込んだ。舞衣さんは軽く絶頂したようだった。

「ヤバイ!?もう射精してしまう。」

「びゆるるるびゆるるる……」

「お、おくにヒツキー、くんのがっ♡あ、あつい……♡」

「おおっ……!?ま、舞衣さんに搾り取られる!!」

舞衣さんの膣内が俺の精子を搾り取らんと言わんばかりに蠢いている。これでは今日まで溜め込んだ俺の精子が無くなりそうだ。

それだと言うのに俺のチンコはまだ舞衣さんのマンコの中で固いままだ。どんだけ元気が良いんだ!?

「はあ……はあ……舞衣さん。んっ」

「んっ……ヒツキー、君。んっ」

俺は舞衣さん身体を少し逸らすとそのままキスをした。まさかファーストキスが人妻だとは思わなかったな。でも唇、柔らかいな。

「しかもキスがこんなにもいいものだとは思わなかった。」

「舞衣さん……んんっ」

「んっ……ひ、ヒツキー君♡……またヒツキー君のが膣内で大きくなっただわね」

舞衣さんとのキスが凄過ぎて俺のチンコは更に大きく固くなってしまった。犯してなんだが舞衣さん、エロ過ぎだろ!!

「夜はこれからですから俺の精子を全部出し切ってあげますよ!!」

「うん♡ちようだい♡ヒツキー君の赤ちゃんの素♡」

ホントに堕ちるところまで堕ちた人妻はエロいな。さつきから俺のチンコを舞衣さんのマンコがギュウギュウと締め付けてくる。

さつき射精したばかりだというのにまた射精そうになった。

「ま、舞衣さん！また射精ます!？」

「き、きてっ♡ヒッキー君♡」

びゅるるるびゅるるる……

「ぐっ……」

「ああああ……ヒッキー君のが流れてくる♡」

俺は出しきつたと同時に舞衣さんに抱きついた。もう俺の金玉はカラになってしまった。溜め込んできた精子は全て舞衣さんの膣内に出した。

俺は舞衣さんに抱きついたまま寝てしまった。しかも繋がったまままだ。

朝、起きた時には舞衣さんと一緒にソファで寝ていた。俺は由比ヶ浜が起きてくる前にシャワーを借り手汗や匂いを洗い流して家に帰った。

それから数週後、舞衣さんから連絡が着て妊娠したと聞かされた。もちろん孕んだのはご主人ではなく俺の子供だ。

ああ、ついに由比ヶ浜への復讐の最終段階に来たな。待っている由比ヶ浜。

お前が真実を知った時の絶望する顔を見た届けてやるぜ。

あ、そうだ。舞衣さん子供の名前を考えておいてくれと頼まれたからしつかりと考えておかないとな。

やはり人妻が裸エプロンをするのはまちがっている。

舞衣さんから『妊娠』と連絡が着た時は思わず笑ってしまった。これで俺が由比ヶ浜に真実を伝えたらあいつはどんな表情で絶望してくれるだろうか？

最初は俺の言葉を信じないかもしれないから舞衣さんからも伝えるように言っておかないとな。

それにしても高校生で父親になるとは夢にも思わなかったな。でも最高に気分がいいな。由比ヶ浜にどんだけ罵倒されても平気なくらい気分がいい。

もうすぐ高三になる。俺は無事に進級できた。それと由比ヶ浜も進級した。正直、由比ヶ浜が進級出来るとは驚きだ。雪ノ下と頑張つて勉強したらしい。

それでなんとか進級出来ようだ。由比ヶ浜が留年したら面白そうだったのに。

三年になつても俺達、奉仕部の関係は特に変わる事は無いだろう。舞衣さんは由比ヶ浜が俺の事を好き？だと言っていたが、それらしいアプローチはまったくと言って無い。本当に由比ヶ浜が俺の事を好きだとか疑わしいな。

三年の卒業式が終わってから由比ヶ浜はよく奉仕部の部室でスマホを見てはニヤついていた。何がそんなに嬉しそうなのかと思つていたら舞衣さんと並んで撮った画像を見てニヤついていた。

ああ、なるほどな。舞衣さんが夫と娘に『妊娠』した事を言つたから喜んでいたのか。

お腹の子が俺の子供だとも知らずにな。

「由比ヶ浜さん。最近、機嫌が良い様だけど何か嬉しい事でもあったのかしら？」

「え？……うん！実はね。ママが妊娠したんだ！」

「そう。それはおめでとうね」

「うん！あたしお姉ちゃんになるんだ！楽しみだな……早く産まれて来て欲しいな」

由比ヶ浜はスマホを見てまたニヤついた。俺がニヤつけば「キモい！」と罵倒してくるくせに。ホント、自己チューな奴だぜ！

「そう焦らなくても産まれてくるのだから少しは落ち着きなさい」

「う、うん。でも嬉しくてさ。あ、そうだ。ゆきのん！一つお願いがあるんだけど、いいかな？」

「ええ、構わないわよ。私に出来る事なら何でも言っっちゃうだい」

「料理を教えて欲しいの!!」

「……………」

由比ヶ浜のお願いに雪ノ下はフリーズした。それもそのはずだ。去年、由比ヶ浜が奉仕部に入る前に依頼して来た「手作りクッキー」を作る際に焦げたとても食べられる事の出来ない暗黒部質を作ったのだから。

「……………どうして急に料理を教えて欲しいなんて？」

「うん。ママのお腹が大きくなったら色々大変だから料理くらいはあたし自分で出来るようになりたいの！」

「由比ヶ浜さん……………そう言う事なら是非、協力させてちょうだい!!」

ホント、この二人は百合百合しいな。俺は完全に空気だけだな。今更だが……………

「そう言う訳だから部屋は閉めるわ。空気谷君はすぐに出なさい」

「……………へいへい。分かりましたよ」

俺は部屋を出てこれからどうするか考えた。家に戻っても特にやる事は無いしな。

「それじゃ私の部屋で練習しましょうか。由比ヶ浜さん」

「うん！ママと赤ちゃんには栄養のあるものを食べさせてあげたいんだ!!」

「ええ、分かっているわ。任せておいて」

「それじゃ今晚はゆきのんの家に泊まってもいい？」

「ええ。もちろん良いわよ」

雪ノ下と由比ヶ浜は料理の練習について話していた。雪ノ下の家のキッチンが無事に済めば良いけどな。だが、これからの予定が決まったな。舞衣さんを犯す。

お腹が大きくなったら暫くは出来ないからな。今の内に出来るだけ射精しておかないと。

俺はすぐに舞衣さんに連絡した。そしたらご主人は今夜は同僚の人と飲むから帰らないそうさ。由比ヶ浜も雪ノ下の家に泊まるから今夜は犯し放題だ！

そうと決まれば急いで向かうか！

「いらつしやい。ヒッキー君」

「こんにちは。舞衣さん」

由比ヶ浜家に着くと舞衣さんは笑顔で俺を迎い入れてくれた。笑顔がステキだな、この人。

「さつき結衣から連絡があつて今夜は雪乃ちゃんの家泊まるそうなのよ。主人も今夜は帰つてこなからヒッキー君と一晩中、SEX出来るわね」

「俺も舞衣さんとSEXしたい気分です。それにお腹が大きくなると出来なくなりますから」

「そうね。安定期まで我慢しないとイケないのよね……」

舞衣さんは残念な表情を浮かべながらお腹を擦っていた。あのお腹の中に新しい生命がいるんだな。

「そんな表情をしないでください。だから今夜はたっぷり犯してあげますから」

「ええ♡楽しみしているから♡」

舞衣さんは心底嬉しそうな顔をしていた。吹っ切れた人妻は強いな。

「それじゃ夕食の準備を始めるからヒッキー君はソファにでも座つていて待てちようだい」

「はい。……あ、舞衣さんにお願ひがあるんですけど。いいですか？」
「何かしら。私で叶えられることなら良いわよ」

「……舞衣さんの裸エプロンが見たいんですけど、良いですか？」
「裸エプロン……」

舞衣さんは少し難しい顔で考えて俺の方を見た。

「お婆さんの裸エプロンなんて見ても楽しいものでもないと思うのだけれど?」

「……それでもお願いします。あ、今ここで服を脱いでしてください」「ふふっ……ヒッキー君も男の子なのね。いいわ……」

舞衣さんはなんの躊躇もなく服と下着を脱いだ。ホント、エロい身体をしているな。子持ちの身体ではないだろ。

一体、何歳なんだよ。おっと、女性に年齢を聞くのはマナー違反だな。

「ど、どうかしら?ヒッキー君」

「き、綺麗です。夕食の準備はその格好でしてください。後ろで見ているんで」

「こ、この格好で?分かったわ。ヒッキー君のお願いだしね」

舞衣さんは裸エプロンのまま夕食の準備を始めた。俺は後ろから見ていた。もちろん、録画している。こんなエロい場面を撮らない訳が無い。

調理を進めていくにつれて舞衣さんは俺の方を時折見ても小刻みに震えていた。見られて興奮していた。

その証拠に舞衣さんの足元にはマンコから垂れた愛液が水溜りを作っていた。

「ひ、ヒッキー君。な、何もしないの?」

「舞衣さんは俺に何かして欲しいんですか?」

「そ、それは………れて欲しいの」

舞衣さんの声が小さくてここまでではつきりと聞こえなかったな。ちよつと意地悪してみるか。

「ちやんと言ってくれないと何もしないですよ?」

「っ!?……わ、私のに、ヒッキー君を入れて欲しいの……」

「はつきりと言って俺を誘ってみて下さいよ」

「わ、私のマンコにヒッキー君のチンコを入れて欲しいの!!」

舞衣さんは俺にお尻を突き出し自分でマンコを広げて誘ってきた。裸エプロンの人妻にここまでされてはやるしかないな。

いや、そもそもやりに来ただけだな。

「それじゃ……いきますよ!!」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「き、きたああああ♡ヒツキー君の!!お、奥まできてるうう♡♡」
す、凄い!舞衣さんの膣内は妊娠しても締まりがいい!それどころか、妊娠する前より絡みついて来る。

ま、不味い。これではすぐに射精してしまう!?

「ま、舞衣さん。俺、もう……」

「ええ♡来て!ヒツキー君の熱いのちようだい♡♡」

「ぐっ!?!で、射精る!!」

びゆるるるびゆるるる……びゆるるびゆるる……

「き、きたああああ♡ひ、ひつきーくんのあついのが……おなかにたくさん……また、あかちゃん、できちやう♡♡♡」

俺の射精と同時に舞衣さんは絶頂した。それによって膣内の絡みがさらに強くなった。俺のチンコから精子を全部絞り出さんと蠢いている。

頭の奥が痺れるこの感覚が凄く良い!!

「はあ……はあ……舞衣さん。んっ……」

「んっ……ヒツキー君の熱いのがお腹の中にまた、たくさん……」

俺とキスを舞衣さんは子宮あたりを優しく撫でたい。それにしてもこの中に俺と舞衣さんの子供がいると思うと自分が父親になると嫌でも思い知らされるな。

早く産まれてきて欲しいな。そしてお前の姉である由比ヶ浜を絶望させてくれよ。

ずずずずず……ぽこっぽこっ……

「んっ……はあ……はあ……あ、ヒツキー君のが出ちやう……」

舞衣さんのマンコからチンコを抜くと射精した精液がボトボトとマンコから溢れ出してきた。ホント、よく射精したな俺。

やっぱり舞衣さんの裸エプロンに興奮したからだろうな。それにクラスメイトの母親に自分の子供を産ませると言う特殊なシチュエーションが更に興奮させるのだろう。

「大丈夫ですよ舞衣さん。ご飯を食べた後でまた射精してあげますから」

「ホント？嬉しいわヒツキー君♡」

一瞬、舞衣さんの瞳が♡マークに見えた。人妻が堕ちるところまで来るんだな。ああ、もつと舞衣さんを犯したい。俺の精液で髪や顔や胸など全身くまなくマーキングしたい。

この人妻は俺の女だどご主人や娘の由比ヶ浜に嫌でも分からせない。

そう思っているとさつきまで柔らかかった俺のチンコが固く勃起してしまった。まだこれだけの元気があれば、今夜もまた楽しめるだろう。

そして一通りした後、舞衣さんは料理を再開した。まだ途中なんだよな……激しい運動で更に空腹になってしまった。

舞衣さんの料理が出来上がりそれを食べた俺達は由比ヶ浜家の夫婦の寝室に向かった。もちろん舞衣さんは裸エプロンのままだ。

睡姦した時と同じように寝室で舞衣さんを犯す。前回の時はそれほど思わなかったが、夫婦の寝室という場所でする事で更に興奮出来る。

やはり寝室は夫婦だけの部屋なので、そこで犯す事で罪悪感を舞衣さんに味わってもらおう。

「舞衣さん……んっ」

「んっ……ヒツキー君。ふふっ……なんだか不思議な気分ね」

寝室のベッドで横になりキスをした俺と舞衣さん。舞衣さんは俺を抱き寄せて頭を撫でた。その感触がとても気持ちよかった。

物心ついてから親に頭を撫でられた事なんて無かったからとても気分がいい。

「舞衣さん……」

「うん？何、ヒツキー君？」

「俺、舞衣さんの事を愛しています」

「ヒツキー君……」

この言葉は本気だ。最初は由比ヶ浜を絶望させてやらろうとした

けれど、舞衣さんが妊娠したと聞いた時から由比ヶ浜を絶望させるより舞衣さんとお腹の子供を幸せにする事に変わっていた。

「私、おばさんよ?」

「それでも俺は舞衣さんを愛しています!!」

「ヒツキー君……嬉しいわ。私もヒツキー君の事を愛しているわ♡」

「舞衣さん……!!」

嬉しい。俺の心に幸せな気持ちが溢れ出てきた。俺の人生はこれまで録でもなかったが、これからは違う。

俺には舞衣さんとお腹の子供が居る。絶対に幸せにしてみせる。

すると舞衣さんは左手の薬指から指輪を外した。そして自分でマンコを広げてみせた。

「ヒツキー君。私をもっと愛して♡」

「は、はいー!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は舞衣さんに誘われるまま挿入した。舞衣さんのマンコは今までと変わらず締まりの良いものだった。

「き、きたああああ♡ひ、ヒツキー君のが、おくまで♡」

「舞衣さん舞衣さん舞衣さん!!」

「ヒツキー君♡もうわたし♡」

「お、俺も……射精る!!」

びゆるるるるびゆるるる……びゆるるびゆるる……

「……ああああ」

「おおっ……」

舞衣さんは絶頂した事により意識が飛び掛けている。俺も射精した事で頭が真っ白になっていた。これまでの事が嘘のように思えてきた。

そのまま俺は睡魔に襲われてしまった。だが、寝る前に舞衣さんに頭を優しく撫でられて事だけははっきりと覚えていた。

やはり人妻とボテ腹SEXをするのはまちがっている。

安定期。

それは妊娠中の体調不良やつわり症状などが落ち着いて、妊婦生活が安定している時期をさす。そうになると妊婦は動くのに人苦労になっってくるだろう。

そして舞衣さんがついてに安定期に入った。この時を待っていた。舞衣さんが安定期に入るまでずっとオナ禁して……はいない。定期的に舞衣さんにフェラやパイズリをしてもらって性欲処理してもらっていた。

だが、やはり膣内……マンコに挿入しないと本当に性欲が発散されたと俺は思わない。だから舞衣さんが安定期に入ったと連絡してきた時には思わず小躍りしてしまった。

俺の中には早く舞衣さんを犯したとそれしかなかった。

しかし思う。エロ同人誌などでNTRものでお腹に子供が居る状態でSEXしても大丈夫なのだろうか？

いくら安定期に入ったからと言っても出産するまで安心は出来ないと思うが。でもだからこそ確かめてみたと思う。

それに妊婦になった舞衣さんだからこそ更に犯したいと強く思うようになった。愛した女性、その愛した女性との間に出来た新たな生命をしっかりと感じてみたかった。

「ごめんなさいねヒツキー君」

「いいですよ。これくらい」

「……うう……ごめんヒツキー」

舞衣さんが妊娠して数か月、すっかり大きくなったお腹。俺は今、由比ヶ浜家で洗濯物を畳んでいた。

何故、俺が由比ヶ浜家で洗濯物を畳んでいるかと言うと由比ヶ浜がまったくと行って出来ないから舞衣さんに助けを求められたからだ。

料理の方はだいぶ……ある程度は食べられるようになった由比ヶ浜だが、それ以外の家事がまったくと言って出来なかった。

そのため由比ヶ浜家は大量の畳んでいない洗濯物で溢れていた。洗濯物の中にはアイロンをしないといけない物があるが、舞衣さんはまだ娘にアイロンは早いと判断した。

そこで俺に白羽の矢が立った。俺としても由比ヶ浜家に行く理由が出来たので良かった。舞衣さんもその辺りを計算しているのかもしれない。

「結衣は料理は凄く上手になったんだけど、他がまだね……」

「まあ、そうですね。雪ノ下に勉強や料理だけじゃなくて他の事も習ってきたらどうだ？由比ヶ浜」

「うん……そうするね」

ホント、由比ヶ浜の料理は最初は食べられる物ではなかったが、最近はそうでも無い。多少のアレンジを加えるものの食べられる物になって来ている。

それは大きな進歩と言えるだろう。よくやったな由比ヶ浜！

「結衣。そろそろ時間じゃない？」

「え？あ！ホントだ！……えっと、ヒツキー」

「雪ノ下と約束があるんだろ？俺はもうちよつとしたら帰るから行って来いよ」

「うん！それじゃママ、行って来るね!!」

由比ヶ浜は雪ノ下と約束をしていた。あいつは舞衣さんの負担にならないように大学受験の勉強を塾ではなく雪ノ下に習っていた。

相変わらず、雪ノ下と百合百合事だな。まあ、俺としては別にどうでもいいけどな。

「ヒツキー君」

「舞衣さん」

愛している女性が目の前に居るからな。俺は舞衣さんに近付きキスをした。

「んっ……ヒッキー君♡」

「んんっ……舞衣さん」

「ほらパパが来てくれたわよ藍衣（あおい）」

舞衣さんがお腹の子供に合図を送るようにお腹を優しく撫でた。ちなみに藍衣（あおい）とはお腹の子の名前だ。名付けたの舞衣さんになっているが俺が考えた。

安定期に入って性別が分かったので舞衣さんに名前を考えてくれと言われて一生懸命考えた。母親と姉の『衣』と言う文字を使わせてもらった。

「ふふっ……あ、今お腹を蹴ったわ」

「ホントですか？元氣な女の子なんですね」

「ええ。結衣と同じでやんちゃな子に育つと思うわ。でも安心してヒッキー君。この子は結衣のような人を傷つけるような子には育てないから」

「ええ。俺も協力するんで立派な人間に育てましょうね。舞衣さん」

姉であるあいつのような人を傷つけない優しい性格の子に育ててみせる。

「それでねヒッキー君。久し振りに……しない？」

「そうだね安定期に入った事ですしね。それに俺も久し振りに舞衣さんを犯したいですから」

すると舞衣さんは服を脱ぎだしたので俺も舞衣さんに続き服を脱いだ。舞衣さんの体形は前より変わったが、それはお腹周りだけでは全然変わっていなかった。

スタイル良過ぎだろこの人妻は！

「ふふっ……どうかしら？お腹周りだけ大きくなちゃったから……」

「綺麗ですよ、凄く。……早く犯したくてもう俺のが勃起しぱなしですよー！」

「あら……流石ねヒッキー君」

舞衣さんはギンギンに勃起した俺のチンコを見て嬉しそうに笑っ

た。その表情を言うなら性の虜になった獣のようだった。

俺も似たようなものだよな。クラスメイトの母親に手を出したんだから。

「まずはヒッキー君が好きなパイズリからね」

「はい。お願いします」

むにやむにやむにや……

俺は椅子に座り舞衣さんは中腰になった。そして舞衣さんの巨乳が俺のチンコを挟んで扱き始めた。この乳圧が堪らなく気持ちいい。俺は舞衣さんの乳首を摘んだ。

「ひいひい!?だ、ダメー!」

「……えっ?」

びゅびゅびゅ……

舞衣さんの乳首から母乳が出てきた。俺は手に付いた母乳を口に入れて味わった。甘い優しい味がしたように感じた。

「もう!ヒッキー君。いきなり乳首を摘まないで。母乳が出るようになったのだから」

「すいません。舞衣さんに気持ちよくなって欲しく……もつと舞衣さんの母乳、飲んでもいいですか?」

「ふふっ……いいわよ。でも少しは残していてね」

「は、はい。あ、舞衣さんが椅子に座ってください」

俺は椅子を舞衣さんに譲った。流石にずつと中腰では辛いと思っただからだ。そして俺は舞衣さんの胸に飛びこみ乳首に吸い付いた。

ちゅぱっ……ちゅぱっ……ちゅぱっ……

「んっ……ひ、ヒッキー、君。あんまり……っ、強く吸わ、ないで……♡」

舞衣さんは俺が母乳を吸うたびに軽い絶頂を感じているようだった。それを見るたびに motto 舞衣さんが感じている顔が見たかったので吸う力を弱める事無く吸い続けた。

ちゅぱっ……ちゅぱっ……ちゅぱっ……ちゅぱっ……ちゅぱっ……ちゅぱっ……

「ひ、ひつきーくん♡ま、まって……っ!?っ、っよい……わっ!?……ああああ」

舞衣さんは母乳を吸われて完全に絶頂したようだった。幸せそうな顔でヨダレが溢れていた。気持ちよくなれて良かった。

「ひつきーくん♡もうがまんできないの……ちようだい♡♡」

「はい。それじゃ挿入れますね」

舞衣さんは自分でマンコを広げて俺のチンコの挿入を誘ってきた。これに乗らないわけにはいかない。てか、もう我慢できない!!

「ずずずずず……ぱんっ!」

「き、きたああああ♡ひ、ひつきーくんのが、おくまで♡」

「ぐっ!す、すごい……」

腹ボテSEXなんて知った時は気持ちいいのか?と思ったが、気持ちいいなんてレベルでは無い。凄く気持ちいい、だ!

舞衣さんの膣内は妊娠しているのにも関わらず俺から精子を絞り出そうとして蠢いている。この人妻、エロ過ぎだろ!!

「ま、舞衣さん!俺、もう我慢できません……っ!!」

「だ、だしてなかに……ひつきーくんのたくさん♡♡」

「で、射精るっ!」

びゅるるるびゅるるる……びゅるるびゅるる……

「きたああああ♡……たくさんでた……あおい、ぱぱのせいしをしっかりとあびていいこになるのよ♡♡♡」

膣内出しの余韻を感じていると舞衣さんは藍衣に言い聞かせるように言った。妊婦に膣内出しがこれほど気持ちいいとはもう舞衣さんとしかSEX出来なくなったらどうしようか?その時は舞衣さんと結婚だな。

舞衣さん、優しいし養って……いや、違うな俺が舞衣さんを養うんだ。

「舞衣さん!俺と結婚しましょう!!」

「ふふっ……それはダメよヒツキー君」

「どうしてですか!?俺は舞衣さんの事を愛しているんですよ!」

「私には主人が居るし……それに世間体があるのよ。こんなお婆さんと結婚したら周りから色々と言われるは……」

舞衣さんは俺を優しく説得してきた。舞衣さんだって心の中では

俺と一緒にになりたいはずだ！でも世間体か、確かにどうしたらいいんだ？

待てよ。そうだよ、あいつを利用しよう。そうすれば俺達は一緒になれる。

「舞衣さん。だったら俺は将来、由比ヶ浜……貴女の娘と結婚します。そうすれば俺達は一緒に……家族になれますよ！」

「……そうね。それは凄くいいアイデアね！……でもいいの？結衣はヒツキー君を今まで傷つけてきたんでしょ？結婚できるの？」

「出来ませう！舞衣さんと家族になれるならそれくらい我慢出来ます！舞衣さんは嫌ですか？」

「ふふっ……そんな事はないわ。私もヒツキー君と家族になりたいから」

よし！舞衣さんも俺と気持ちは一緒だ。凄く嬉しい。こんなのは初めてだな。

「あら？ヒツキー君のがまだ固いままね。まだ出来るなら続きしましょう？」

「はい！舞衣さん!!」

「ずずずずずっ……ぱんっ！」

「き、きたあああ♡ひ、ひつきーくんのが、おくまで♡」

腰を引いて改めて押し込むと舞衣さんの膣内はさらに蠢いていた。この人妻に底は無いのだろうか？それは俺もか、興奮が収まる気配が無い！

それどころか更に興奮して来ている自分が居る。ああ、全ての精子を舞衣さんに注ぎたい！

「舞衣さん！舞衣さん！舞衣さん！」

「ヒツキー君！ヒツキー君！ヒツキー君！」

「ずずずず……ぱんっ！ずずずず……ぱんっ！ずずずず……ぱんっ！ずずずず……ぱんっ！」

「舞衣さんのマンコ、すごいっ!？」

「ひ、ヒツキー君のチンコ、すごくっ!?!おおきいっ♡」

あまりの気持ち良さに腰が勝手に動いてしまう。それは舞衣さん

も同じなようで更に俺から精子を絞り出そうとして膣内がギュウギュウに締めてきた。

その上、腕と足で俺の事をしつかり抱き寄せて離さないようにしていた。

そんな事をしなくても離れないのに。俺も舞衣さんを抱き寄せた。

「ま、舞衣さん！もう射精ますっ!!」

「ぎ、きてえええ♡ヒツキーくん♡」

びゅるるるびゅるるる……びゅるるびゅるる……

「おおっ……」

「いくううう♡」

俺の射精と同時に舞衣さんは絶頂した。舞衣さんは絶頂の余韻に浸り幸せそうな顔をしていた。そんな顔を見たら俺までも幸せな気分になってしまう。

俺はゆっくりと舞衣さんのマンコからチンコを抜いた。

ずずずずっ……こぽっこぽっ

舞衣さんのマンコからはさきほど俺が射精した精子が落ちてきていた。ホント、AVや同人誌で射精するより量が多いんだよな。

まあ、いいか。さて、もうすぐ舞衣さんは出産だ。

「早く顔を見せてくれよ。藍衣」

俺は舞衣さんのお腹を優しく撫でた。もうすぐだぜ、由比ヶ浜。お前が絶望するのは!

やはり人妻と不倫旅行に行くのはまちがっている。
前編

「温泉旅行？」

「うん！ヒツキー、一緒に行かない？」

舞衣さんが藍衣を出産して約1カ月が経っていた。その間、舞衣さんとは会っていないと言うか会えない。

出産したばかりはそれなりに慌しかったようで時間が合わなかった。

そんな時、俺は由比ヶ浜と一緒にペットショップで飼いネコのカマクラの餌を選んでいるとサブレ？の餌を買いに来ていた由比ヶ浜が「温泉旅行に行かない？」と誘ってきた。

どうも福引で引き当てたらしい。

「親子で行かないのか？」

「実はパパが旅行の日に大事な会議があるんだって、それなら知り合いを誘ったらいいよってパパが言ったの」

「……それなら俺より雪ノ下を誘ったらどうだ？」

「ゆきのんは行く日は家で用事があるんだって」

なるほどな。そこで俺なのか？それにしても他に誘う人間は居なかったのか？

「それでね、ママに相談したらヒツキーを誘ったらって言ったんだ。

それで、その……どうかな？」

「そうだな……」

ナイスだ！舞衣さん。旅行先で舞衣さんを犯せるぜ！邪魔な由比ヶ浜は居るが寝ている時に出来そうだな。

「そっちがいいなら俺は全然、構わないぞ」

「ホント!? ヤッター!! それじゃママに言っておくね!」

「ああ……」

それから由比ヶ浜はすぐに舞衣さんに連絡した。テンション高めだな。ウザいな。

電話が終わると由比ヶ浜は更にテンションを上げていた。何がそんなに嬉しいのか分からないな。

「ママがオツケーだって!!」

「……そうか。行くのは3人なのか?」

「ううん。ママとあたしとヒツキーと藍衣の4人だよ!!」

「……分かった。俺も小町に言っておくから。心配するから」

「うわあ……出たシスコン」

まったくこの由比ヶ浜の顔を見るたびに怒りが沸き出てくるぜ。舞衣さんとの関係や藍衣の本当の父親の事は3月の卒業式が終わった辺りにでも教えてやろうかと思っている。どれだけショックを受けるだろうな、由比ヶ浜は。

頭の中がお花畑だからな。知った時の由比ヶ浜の顔を想像するだけで楽しくなってきた。

「ヒツキーのその顔、キモッ!」

「……へいへい。そうかよ」

「……あ、その……」

「それじゃまたな、由比ヶ浜」

「う、うん。またね!ヒツキー!!」

俺は買い物を終えて店から出た。出なければ怒りを露にしていたかもしれないからだ。ホント、由比ヶ浜は俺の事が好きなのか?舞衣さんもきつと勘違いをしていたんだな。

好き、つまり好意を寄せているなら罵倒などしないはずだ。

例え照れ隠しだとしても限度というものがある。由比ヶ浜は俺の限界を超えた。もうあいつがどうなろうと知った事ではない。

早く舞衣さんと旅行に行きたいな。

そう言えば、俺はまだ藍衣と会っていないな。舞衣さんから写真は送られてきたが実際にはまだ会っていない。

舞衣さんもそうだが、藍衣にも会ってみたいな。将来はきつと美人になるだろうな。

楽しみだな。

それから数日後、俺と舞衣さんと由比ヶ浜と藍衣の4人の温泉旅行当日になった。まずは電車で近くまで行きそこからバスに乗って旅館に到着らしい。

俺は電車に揺られながらぼんやり外を眺めていた。腕の中には藍衣がスヤスヤと寝ていた。何故か由比ヶ浜が抱こうとすると泣き出すらしい。なので産まれてから由比ヶ浜は藍衣を抱いた事が無い。

どうして泣くのかは分からないが、妹を抱く事が出来ない事に由比ヶ浜は結構、不満があるらしい。

「もう！どうしてヒツキーには抱かれてあたしには抱かせてくれないの!?!」

「由比ヶ浜。寝ているんだから大声は止せ」

「だ、だって！一回も抱っこした事がないんだよ!?!」

「……だから声が大きい」

「ヒツキーには泣かずに抱かれるのに!!」

それから駅に到着するまで由比ヶ浜は藍衣の不満を俺へぶつけてきた。耳もとで由比ヶ浜の大音量で喋るものだから耳が痛くなった。

こんな事なら来るんじゃないかな。もう遅いが……

そして何とか旅館に到着して部屋に向かった。和室で日当たりも景色も良かった。

「ヒツキー！大浴症、行こうよ!!」

「大浴場な。お前、それで受験大丈夫なのか？」

「だ、大丈夫だし!!ゆきのんと勉強たくさんしたんだから!!」

「はいはい。それに大浴場は男女別だから一緒に行っても意味が無いだろ?」

「……あ、と、途中まで一緒に行こうよ!!」

途中まで一緒に行つて意味があるとは思えないな。それにしてもいつも以上にテンションがウザいな。2拍3日もこのテンションでは無いだらうな?

だとしたらマジで嫌だな。

仕方ないので俺は由比ヶ浜と一緒に大浴場に向かった。

「あ、すまん。由比ヶ浜。部屋に忘れ物だ、先に行つてくれ」

「え? ヒツキー!?!」

大浴場に行く途中で俺は部屋に忘れ物があると言つて戻つた。部屋にはまだ舞衣さんが居るはずだ。

「あら、ヒツキー君。どうしたの?」

「舞衣さん!! んっ」

「んんっ……♡」

部屋に戻るなり俺は舞衣さんとキスをした。久し振りの舞衣さんの唇は最高だった。だが、あまり長くしていると由比ヶ浜が戻つて来てしまいそうだからな。

早めにしないと。俺は舞衣さんから離れるとズボンとパンツを降ろした。すると舞衣さんは服を捲り上げて胸を露にした。相変わらずの巨乳だ!!

舞衣さんはさつそく俺のムスコを巨乳で挟みしごき始めた。ああ、

この乳圧は舞衣さんでしか味わう事が出来ない!

むにゅむにゅむにゅ……

「今は時間がないからこれで我慢しましょ♡」

「は、はい。でも夜になったら……」

「ええ♡たくさんしてね♡」

「もちろんですよ!!」

舞衣さんの巨乳は相変わらず、最高だ!! 温かいし柔らかいしスベスベして最高に気持ちが良い!!

舞衣さんは手を巧みに使い胸を前後させたり左右で違う動きをして俺のムスコに刺激してくる。まったくこれでもう射精してしまう。

「ま、舞衣さん!!」

「ええ♡射精してもいいのよ?」

「で、射精る!!」

びゅるるるびゅるるる……びゅるるびゅるる……

「んんっ!!……んっ……ごっくんっ……はあくヒツキー君の精子、たくさん♡♡」

舞衣さんは射精したザーメンを一滴も零さず、口で受け止めて飲み干した。ホント、美味しいそうに飲み干したな舞衣さん。

でもそんな表情見せられたらまた勃起してしまう。実際にもう勃起している。

「舞衣さん。俺……」

「ふふっ………続きは夜にね♪それまで我慢して。私も我慢するから」

「はい!」

それから俺は舞衣さんより先に先に部屋に出て大浴場で汗を流した。それにしても流石は大浴場だ。手足を大きく広げても大丈夫だ。

俺は他にも露天風呂などにも入って身体を温めた。

「ヒツキー!これ凄く美味しいよ!!」

「はいはい。分かったから落ち着けよ。これで高校生とか詐欺だな」

「どういう意味だし!?ヒツキー、マジキモツ!!」

風呂から上がって食事をしていると由比ヶ浜のお得意の「キモツ」が飛んできた。ホント、早く絶望させてやりたいが我慢だ。

まだ絶望させるには早い。もっともっと貯めに貯めてからだ。

「結衣。食事中にそんな事を言うものではないわ」

「ご、ごめんなさい……」

「分かればいいのよ。ほらこっちのも凄く美味しいわよ」

「うん!ホントだ!!凄く美味しい!!」

舞衣さんに進められた料理を次々と口の中に送っていく由比ヶ浜。俺も食べたが凄く美味しかった。正直、旅館の人には悪いが由比ヶ浜の料理には『アレ』を入れさせてもらっている。

「……ふあく……」

「結衣。疲れたならもう寝た方がいいわよ」

「……うん。ママ、ヒツキーお休み……」

由比ヶ浜は布団に行つてそのまま寝てしまった。そう！由比ヶ浜の料理には舞衣さんを犯す時に活躍した睡眠薬が入れてあったのだ。

一生懸命この料理を作つた料理人のは悪いと思うが、こうでもしないと俺が舞衣さんと楽しめないんでな。

「舞衣さんーんっ」

「んんっ……ヒツキー君♡」

由比ヶ浜が寝た事を確認したら俺は舞衣さんとキスをした。デイープの方だ。舞衣さんはキスをする時、両手を俺の首に回してきて抱き寄せる。

その際、舞衣さんの巨乳が俺に押し付けられるので凄く好きだ。だからか舞衣さんとキスだけで俺のムスコはすぐに勃起してしまう。

「舞衣さん。俺、早く挿入したいです」

「ふふっ……ええ。私も早く挿入して♡」

舞衣さんは布団に横になつてマンコを両手で大きく開いて挿入を促した。俺は勢いに任せて挿入した。

「舞衣さん!!」

「ずずずずずっ……ぱんっ！」

「き、きた♡久し振りの、ヒツキー君の大きいのが♡」

「おおっ……!!」

久し振りの舞衣さんの膣内は相変わらずキツキツに俺のムスコを締めてくる。藍衣を出産したばかりなのにこの締め良さ。

ホント、寝取つて正解だった。いつまでだつて挿入していたと思える。そろそろ射精しそうだな。

「舞衣さんー！そろそろ……!!」

「来て♡もう一人、産ませて♡♡♡」

「もう一度っ!!孕めっ!!」

びゅるるるるるびゅるるる……びゅるるびゅるる……

「き、きたあああ!?ひ、ひつきーくんの……あついのがなかであればてる……♡」

「舞衣さん……」

久し振りの膾出しだ。最高に気持ちいい、射精だったぜ。気持ちいいのか萎える事なく固く勃起したままだ。まだ射精したり無い。

本当にもう一人産んでもらおうかな。まあ、その前に藍衣の父親が俺だと言つて由比ヶ浜を絶望させてやるけどな。

「おぎやおぎや!!」

「あら、起こしちやつたかしら?ごめんなさい」

「おちやー……」

流石にあれだけ大声を出せば、起きるか。藍衣は元気よく泣いている。舞衣さんは藍衣を抱きあやし始めた。

それも俺と繋がった状態だ。我ながら凄い状態だな。それにしても由比ヶ浜は睡眠薬が効いているのかよく寝ている。

すると藍衣が舞衣さんの乳首に吸い付き母乳を吸い始めた。

「お腹が空いていたのね。いっぱい飲んで大きくなるのよ」

「それじゃ俺もお邪魔しますか」

「え?ひ、ヒツキー君!」

「ちゅうちゅうちゅう……」

「ひい!?ま、待ってー!り、両方……ど、同時に吸わないで!?!い、いくうううう♡」

舞衣さんは俺と藍衣に乳首を吸われて絶頂した。そんなのお構い無しに吸い続けた。やっぱり舞衣さんの母乳は味が良い。

まるやかで後味も悪くない。それに乳首に吸い付き母乳を吸いだす度に舞衣さんは軽く絶頂していた。

舞衣さんの母乳を吸って元気を貰ったのか、俺のムスコは準備が整った。

「舞衣さん。また射精しますね……」

「ま、待ってー!今、射精されたら!」

「もう射精ます!!」

びゅるるるびゅるるる……びゅるるるびゅるるる……

「い、いくうううう♡♡♡」

舞衣さんは派手に絶頂した。舞衣さんが絶頂しても藍衣はまだ母

乳を吸っていた。そして満足したのかまた寝てしまった。

ずるるるる……ぽこっ……ぽこっ……

舞衣さんのマンコから俺のムスコを抜くと射精したザーメンが逆流してきた。二回、膣出しただけなのに相当の量を射精していた。

このままだとザーメンが全部逆流していまいそうだ。何か栓をしないとな。

「……あ、そうだー！」

ずずずず……

俺は再び舞衣さんのマンコに挿入した。これで栓をすればいいんだ。これで孕んだとして、また女の子だといいな。

俺はそのまま舞衣さんに抱き付きながら寝た。流石に疲れた。

やはり人妻と不倫旅行に行くのはまちがっている。
後編

温かい。

意識がはつきりしだした時に感じた人の温もりだ。そして瞼を開けると最初に瞳に映ったのは微笑む舞衣さんの顔だった。

「おはよヒツキー君♡」

「おはようございます。舞衣さん」

舞衣さんは俺の頭を優しく撫でてくれた。いつ以来だろうか？母親に頭を撫でられたのは？

いや撫でられた事は無かったな。もちろん父親にもだ。

あの二人は俺に対して親らしい事は殆んどしてもらった事は無い。ホント、子供は産まれてくる場所を選べない。

「?どうしたのヒツキー君?」

「……いえ、何でもありません。それよりこのままいいですか?」

「もちろんよ♡私もこの旅行が始まった時から我慢出来なかったのだからもつと頂戴♡ヒツキー君の赤ちゃん、もう一人産ませて♡」

「もちろん、産んでください。俺の——俺達の子供を!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひいひい!!あ、朝からヒツキー君の固くて、奥まで届いている♡」

「まだまだ行きますよ!」

ずずずずずつ……ぱんっ!ずずずずずつ……ぱんっ!ずずずずずつ……ぱんっ!

「す、すごい♡あ、あたまがまっしろにっ!!なるっ!!」

「ま、舞衣さん!俺、そろそろ……!!」

「き、きて♡ひつきーくんのあついの♡なかにいっぱいちようだい……♡」

「ぐっ!!で、射精る!!」

びゅるるるるるるびゅるるるる……びゅるるるるるるるる……

「い、い、い♡♡♡♡♡」

俺の射精と同時に舞衣さんは絶頂した。今の舞衣さんは何だか凄く綺麗に見えた。口からは涎が出て、目からは涙が溢れていた。

だが、とても幸せな表情をしていた。それにしても朝から最高に気分が良い。

「舞衣さん……んっ」

「んんっ……ヒツキー君♡」

「舞衣さん。もう一回射精してもいいですか？」

「ええ。もちろんよ♡」

よし！舞衣さんからお許しが貰えた事でもう一回射精するか！俺はまた腰を引いては突き出すのを続けた。俺のムスコはまだまだ元気に勃起している。

ずずずずずず……ぱんっ！ずずずずずず……ぱんっ！ずずずずずず……ぱんっ！！

「す、すごいつ！いつかいただいたの♡ひつきーくんのまだっ！おおきい♡ままです！！なかをでたりっ……はいつたりっ……きもちいいいいい！」

「舞衣さん。声が大きいですよ。抑えてください」

「ひつきーくんがおえさせてっ♡」

なんか舞衣さんが可愛く見えてしまう。ヤバい、キスしたくなっ

「舞衣さん。んんっ……」

「んんんんっ……ひつきーくん♡♡」

そろそろ射精しそうだ！！

びゅるるるるびゅるるるる……びゅるるるびゅるるる……

「んんんんっ……♡♡♡」

「はあ……はあ……はあ……」

また膣内出しをした。二回目だというのに勢い良く射精したな。ホント、朝からスッキリさせてくれるな舞衣さんは。

気持ちいいのか射精の間隔が短かったな。でもいいか、気持ちいいしな。

「舞衣さん……んんっ」

「んんっ……ヒツキー君♡」

「……朝風呂、行きませんか?」

「……そうね。流石に匂いが……」

舞衣さんとのキスをした後、匂いが気になった。まあ、俺も舞衣さんも朝からしたものだから汗をかいてしまった。このままでは由比ヶ浜に気付かれてしまう。

まだ、早い。ここで俺と舞衣さんの関係がバレるのは不味い。風呂に行つて汗を洗い流すか。とりあえず、部屋は消臭しておかないとな。

俺と舞衣さんは朝風呂に入つて部屋に戻ってきた。時間をズラして入らないとな。部屋に入ると由比ヶ浜が頬を膨らまして睨んできた。まるでハムスターだな。

「もう!ママもヒツキーもどこ行つていたの!」

「朝風呂だ。なんか妙に汗をかいてな。由比ヶ浜も入ってきたらどうだ?朝風呂なんて旅館にでも来ないと出来ないからな」

「うくん……朝風呂か……」

「朝食までまだ時間があるし、入つてきても大丈夫よ結衣」

「うん!それじゃあ入つてくるね!!」

舞衣さんに言われてか由比ヶ浜は勢い良く部屋を出て行った。舞衣さんは流石だな、これならまた舞衣さんと出来る。

昨日の由比ヶ浜の入浴時間は結構、長かった。おそらく今回も長いはずだ。

「舞衣さん。しましろう」

「ええ。結衣が戻ってくる前に♡」

舞衣さんは壁に手を付いてお尻を突き出してきた。それにしてもとても形の良いお尻だ。マンコからはもうすでに愛液が垂れていた。

ホント、興奮させてくれるな、この人妻は!俺はそのまま後ろから

突っ込んだ。

ずずずずずつ……

「す、す……い♡もう、おくまで♡きもちいいいい♡♡」

「おおっ………凄い締め付け………」

先程、したばかりだと言うのに舞衣さんのマンコの締め付けは弱いどころかさつきよりも強く締め付けてきた。膣内は俺から絞り出さんと蠢いていた。

だから俺も頑張つて腰を前後に振った。

ずずずずずつ………ぱんっ！ずずずずずつ………ぱんっ！ずずずずずつ………ぱんっ！

「いい♡ひつきーくんの♡おおきのがっ!!でたりっはいたり♡い
くううううう♡♡♡」

「俺もそろそろ………でももつと気持ちよくしてあげますよ!」

俺は舞衣さんの背中にぴったり引っ付き胸に手を伸ばして乳首を強く摘んだ。すると勢い良く母乳が吹き出した。

「ひいいいいい!?ち、ちくびもきもちいいいい♡♡」

「舞衣さん!?!そろそろ射精ます!どこにほしいですか?」

「なかつ♡そのままです♡ひつきーくん♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるるびゅるるるる………びゅるるるるびゅるるる………

「い、いくううううう………♡しゅぐく、きもちいい………♡」

「おおっ………凄い………」

舞衣さんの膣内は俺のムスコからザーメンを全て子宮に送ろうと蠢いていた。流石に朝からやり過ぎたなと思う。

もう弾切れだ。それに腹が減った。

由比ヶ浜が戻ってくる前に部屋を片付けた。もちろん換気もして

匂いもぼつちり部屋には残ってはいない。

戻ってきた由比ヶ浜は疲れていた舞衣さんを気にしていたが特に何も聞かなかった。ホント、バカで良かったぜ。

そして朝食を食べてから何故か俺は由比ヶ浜と旅館の遊戯場に来ていた。ホントに何故？

「ヒツキー！卓球勝負だよ！」

「……勝負になるのか？」

「どういう意味だし!？」

「お前、鈍臭いじゃん」

「トロ臭くないし!!」

「……鈍臭いな」

ホント、こいつは大丈夫なのか？大学受験？俺とも雪ノ下とも違う大学だから同じ内容の勉強は出来ないからな。

舞衣さんや由比ヶ浜の父親がよくここまで由比ヶ浜を進学させられたよ。素直に感動してしまう。

「あたしが勝つたら言う事を聞いてもらうから！」

「なら俺が勝つたらお前が俺の言う事を聞いてもらえるんだな」

「負けないし……そ、それと、えっちなのは無しだからね!？」

「誰がするか!!」

由比ヶ浜に勝つたとしても誰がエロい事をするか!？そんな事をすれば雪ノ下に社会的に殺されてしまう。

それに性欲なら舞衣さんで解消出来ているからお前はお呼びじゃないんだよ!!この似非ビッチが！女を磨いて出直してこい!!

そして俺と由比ヶ浜の卓球勝負は俺が負けた！それもワザと負けた。俺はテニスの授業の時に壁打ちをしていたおかげか、それなりにラリーをする事が出来た。卓球はテニスと似ているからな。

それにしても由比ヶ浜はサーブもラリーもド下手だった。

「……それじゃ俺は何をすればいいんだ？」

「うくん……あ、それじゃ運動して疲れたからジュースを買ってきてよ！」

「……わかった」

俺は遊戯場から出て自販機の所まで行き由比ヶ浜が欲しそうなフルーツミックスを買った。そして遊戯場に戻った。

「ほらよ。由比ヶ浜」

「ありがとヒツキー」

「舞衣さんもどうぞ」

「私も？ありがとねヒツキー君」

ついでに舞衣さんの分も買ってきた。この旅費は向こう持ちなのでこれくらいしか俺には出来ない。

由比ヶ浜はいつの間にか近くにあつたマツサージマシンに座つてマツサージを受けていた。どこかおっさんぽかったとは絶対に言わない方がいいな。

「すう……すう……すう……すう……」

由比ヶ浜は卓球で疲れたのか寝てしまった。呼吸するたびに胸が揺れたが舞衣さんの巨乳を知っている俺からしたら何か物足りない気がした。

そうだ。面白い事、考え付いちゃった。俺は舞衣さんを由比ヶ浜の目の前に連れていた。

「ヒツキー君？もしかして結衣の目の前ですか？流石に起きてしま
うわ」

「それがいいんじゃないんですか。声、我慢してくださいね」
ずずずずずず……

「っ!?ま、待つて……」

俺は舞衣さんをバックで犯し始めた。舞衣さんはいきなりで驚いて小声で待つてと言つたが待つわけがない。

ずずずずずず……ぱんっ!ずずずずずず……ぱんっ!ずずずずずず……ぱんっ!
ずず……ぱんっ!

「~~~~っ!?!」

引いたり突いたりするたびに舞衣さんは軽い絶頂を味わっていた。それにしても今の舞衣さんのマンコの締めりはこれまでの比ではないな!

娘の前で犯すだけでこれほど締まるとはな。そろそろ射精しそう

だな。

「舞衣さん。このまま臍内出しますね」

「ま、まって……っ!?」

びゅるるるびゅるるる……びゅるるびゅるる……

「~~~~~♡♡♡……あああ」

「おおっ……」

舞衣さんはこれまでに味わった事のない絶頂に身を震わせていた。よほど、気持ち良かったのか足が覚束なかった。まるで産まれたので小鹿のようだった。

それからすぐに乱れた服を綺麗に戻した。

「ふぁ~~~~…あれ?寝ちやってた?」

「寝る子は育つと言うが、お前の場合はどこか成長するんだろうな?」

「え?何が?」

由比ヶ浜はバカ丸出しだ。それにしても母親が目の前で犯されていたのに寝ているとかどんだけ熟睡だったんだよ。

「ママ。どうしたの?顔が赤いけど?」

「え?な、何でもないわ。それより結衣、もう一度お風呂に入って来ない?結衣はヒツキー君と運動して汗かいたでしょ?」

「うん。それじゃヒツキー、あたしとママはもう一度お風呂に行くけど?ヒツキーはどうする?」

「俺ももう一度、行くとするか。流石に服がベトベトする」

まあ、俺と舞衣さんの服がベトベトなのは汗だけじゃないけどな。そしてもう一度、風呂に入って汗を洗い流した。

この旅も終わりに近付いていた。うるさい由比ヶ浜は居たが舞衣さんと来られたのが良かった。次があれば、二人いや、藍衣も入れた三人で来たい。

旅館でする事は風呂に入ることくらいだろ。それ以外だと食事をしたりお土産を選んだり遊戯場な場所で遊ぶ事くらいだ。

だから基本、暇だ。由比ヶ浜が近くに居たり起きていると舞衣さんを犯せない。だから暇だ。

「ああ……旅行、終わっちゃうねヒツキー」

「そうだな。でも楽しかったぞ」

「ヒツキーが素直だ!？」

「……お前って一言、余計だよな」

まったく由比ヶ浜を早く絶望させてやりたいぜ。最高に顔を歪めてくれるだろう。

こうして俺と舞衣さんの不倫旅行は終わった。

そろそろ由比ヶ浜を絶望させるかな。楽しみにしててくれ由比ヶ浜結衣。

やはり人妻が娘を壊すのはまちがっている。前編

三月の卒業式が終わって一週間ほどが経った。卒業した総武高校をついに！

これでもう平塚先生の暴力に悩ませられる事は無い。単位などはギリギリだったがなんとかあった。

そして俺は由比ヶ浜家にお邪魔していた。由比ヶ浜が卒業パーティーを奉仕部のメンバーだけでしようと言う事になり集まったが、雪ノ下が急に来れなくなってしまった。家で何かあったのだろうか。本人は残念がっていた。

なので卒業パーティーのメンバーは俺と由比ヶ浜と舞衣さんの三人だけだ。ちなみに由比ヶ浜の父親は出張で居ない。

なんとも最高のシユチュエーションだ。由比ヶ浜の父親は居ない。雪ノ下も居ない。後は由比ヶ浜を眠らせば舞衣さんを犯せる。

そして今夜、ついに藍衣の父親が俺であると由比ヶ浜にバラす。さあ、絶望の時間だぜ！由比ヶ浜!!

「ゆきのんが居ないけど、卒業おめでとー!!」
「……おめでと」

「二人とも卒業、おめでと」

由比ヶ浜の声から始まった卒業パーティー。由比ヶ浜はいつも以上にテンションが高い。そしてウザい。

早くその飲み物を飲むんだ由比ヶ浜。由比ヶ浜の持っているコップの中には睡眠薬が入っている。早く飲んで眠れ!!

「……もう奉仕部は無いんだよね」

「それはそうだろ。あれは総武高校の中だけだ。それにメンバーは結局、俺達三人だけだったしな」

「うん……」

そう。奉仕部は結局、部員は俺達だけだった。一年生が入学しても誰も入部して来なかった。まあ、そもそも勧誘していなかったからな。

あそこは平塚先生が面倒事を押し付ける場所だったしな。そこに

好きこのんで入部しようなんて物好きはいない。

「小町ちゃんが入ってくれると思っただけどなく」

「まあ、小町には他にやりたい事があつたようだからな」

小町は結局、奉仕部に入部しなかった。何でも「お義姉ちゃん達の邪魔はしたくないから!」だそうだ。

誰がお義姉ちゃんだ!雪ノ下と付き合うものか!!由比ヶ浜は舞衣さんとの関係をカモフラージュするために考えてはいるが、罵倒しかしてこない女と付き合う気は無い。

まあ、結局俺達は卒業するまで特に親しい関係にはならなかったがな。

「……奉仕部が無くても集まろうと思えば集まれるだろ?」

「うん!そうだね!次は卒業旅行で三人でいっぱい思い出作ろうね!」

「ああ。そうだな」

俺は適当に相槌を打った。そして由比ヶ浜はついに飲み物を飲み干した。良し!飲んだな。飲み物に入れた睡眠薬は少ない。あんまり使い過ぎると怪しまれるからな。

そして食事を食べ終わる頃に由比ヶ浜は睡魔に襲われた。

「あれ……?どうして、眠たく……:……すう……」

由比ヶ浜は眠った。すると舞衣さんが立ち上がりスカートを捲くり上げてお尻を突き出した。しかもノーパンだった。

舞衣さんのマンコはすでに濡れていた。

「もう濡れていますね?興奮しています?」

「ええ♡また結衣の前で犯されると思うと、凄く興奮するの♡だから今、ここで犯してヒッキー君♡」

「わかりました。それじゃ……行きますよ!!」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「ひひひひひ♡ききたああああ!ひ、ひっきーくんのおおきいのが♡……お、おくまひ♡」

「ずずずずず……ぱんっ!ずずずずず……ぱんっ!ずずずずず……ぱんっ!ずずずずず……ぱんっ!」

「す、すごい♡おくにっ!?!……でたり……はいったり♡き、きもち
いいいい♡」

「舞衣さんって娘の前で犯すと締めりが凄いですね?」

「だ、だって……ゆいにみられてるとおもうと……す、すごくかんじ
ちやうの♡」

舞衣さんってもしかして見られて感じるタイプのか? 公衆の面前
で犯してみようかと思ったが、他の誰かが舞衣さんをオカズするのは
嫌だな。

この人妻は俺だけが犯すんだ。他の誰かになんてやらせるものか。
それが例え夫でもだ。

「舞衣さん。そろそろ射精そうです。どこに射精しましょうか?」

「なか♡このまま、だして♡」

「分かりました。射精ます!!」

びゅるるるるびゅるるるる……びゅるるびゅるるる……

「い、いくうううう♡♡♡……き、きもちいい……ひつきーくん
のあついのが、なかであばれている……♡」

ホント、舞衣さんの膣中出しは気持ちいいな。いくらでも射精出来
そうだ。でもお楽しみはこれからだ。

夜は長いからな。

「舞衣さん。俺は由比ヶ浜——貴女の娘に俺達の関係を教えようと
思います。どう思いますか?」

「……それはヒツキー君が望んでいる事なの?」

「ええ。俺はあいつを絶望させたい」

「……だから私を犯して関係を持ったの?」

「ええ……そうですよ。幻滅しました?」

俺はこの時のために舞衣さんと関係を持った。もちろん結婚した
いという気持ちには偽りはない。だが、俺の目的は由比ヶ浜を絶望さ
せる事だ。

「……いいえ。結衣がヒツキー君の事を傷つけてしまったのは私に責
任があるわ。それに今、ここでヒツキー君を否定したらもう二度とし
てくれ無いでしょ?」

「ええ。この関係はもう終わりです」

「そんなの嫌！もう主人のでは気持ち良くなれないの！だからお願いヒッキー君！これからも私を犯して！結衣に話してもいいから!!」

自分の性欲を満たすために娘を犠牲にする母親。果たして他人の目にはどう映るだろうか？

最低の母親？人でなし？淫乱な女？

自分の気持ちを優先させて何が悪い？もう後戻りは出来ないのだから。

だからこそ、舞衣さんは堕ちた。堕ちるところまで堕ちた。もう堕ちる事はないが、上がれもしない。

さあ、始めよう。終わりにして絶望の時間だ。

「それじゃ続きは娘さんの部屋でしましょうか。しっかり種を付けてあげますから」

「うん。早くもう一人ヒッキー君の赤ちゃん産ませて♡」

舞衣さんも待ち遠しいようだし早く犯してあげますか。俺は由比ヶ浜を抱えてこいつの部屋に向かった。

部屋の中は少しだけ散らかっていた。そして由比ヶ浜を床に降ろした。

「それじゃ舞衣さん。ベッドの上で俺を誘ってみてください。できるだけやらしく」

「ええ。ヒッキー君、この夫では満足出来ない私を身体を好きにして、そして貴方の赤ちゃんを産ませて!!」

舞衣さんは娘のベッドの上でマンコを両手で広げてみせた。そこから先程、射精したザーメンが逆流していた。

俺はその様子を録画していた。後で由比ヶ浜に見せるか。

ずずずずずつ……ぱんっ！

「き、きたああああ♡ひつきーくんの！おっきいのがっ！おくまで♡」
「す、凄い。舞衣さんの膣内の締まりが強いです。娘の部屋で犯してもらって興奮しているんですか？変態母親ですねー！」

「そ、そうなの！へんたいで、むすめのすきなこに！おかされていとおもうとー！こ、こうふんするの♡♡♡♡」

「いけよー変態が!!」

びゅるるるるびゅるるる……びゅるるびゅるる……

「い、いくうううう!!……いしゃ……あしゅい、せいしゅが……おなかであ、あばれてる……♡♡♡」

俺の射精と同時に舞衣さんは絶頂した。その上、お漏らしまでした。ベツトが汚れたな。まあ、別にいいか。

ずずずずつ……ぽこつぽこつ……

舞衣さんのマンコからチンコを抜くと大量のザーメンが溢れてきた。ホント、毎回我ながら大量のザーメンを射精できるものだな。

「……あああ」

舞衣さんは絶頂の余韻で幸せそうな顔をしていた。だが、その顔は汗や涙などでグチャグチャになっていた。

でもそれを綺麗だと俺は思ってしまった。まだだ、もつとこの人を犯すんだ!!

「舞衣さん。夜はこれからなんですから気を失っては困りますよ。俺の子供を孕んでくれるんでしょ?」

「ひ、ひつきーくんの……あ、あかしゃんをもつしよ……うむ♡だ、だから……もつしよ……ち、ちようしゃい……ひつきー、くんのあかしゃんのもと♡」

「ええ、もつともつともつと注いであげますよ舞衣さん」

舞衣さんは絶頂で呂律が回っていなかった。舞衣さんの体力的にそろそろ限界か?でもそんなの関係無い。もつと犯す!

ずずずずつ……ぱんっ!!

「ひぎいいいい!!また、おくまで♡ひつきーくんのがっ!!き、きてるうううう♡♡」

「舞衣さん。射精ます!」

「き、きてえええ♡ぜんぶ、なかにちようだい!!」

「ぐっ……」

びゅるるるるびゅるるる……びゅるるびゅるる……

「い、いくうううう♡♡♡」

舞衣さんは派手に絶頂した。それにしても舞衣さんのイッた顔は

どうして綺麗だと思うのだろうか？

さてとそろそろ由比ヶ浜を絶望させるかな。

「……んんっ……あれ？ここはあたしの部屋？でもなんで？」

おー！丁度いいタイミングで由比ヶ浜が起きたようだな。ここが自分の部屋だと分かったようだな。

「え？ヒツキー!?な、何やってんの!?!裸で!?!それに……ママ!?!」

「よお、起きたか由比ヶ浜」

「はあ……はあ……ゆ、結衣。起きたのね」

「な、何やってんの!?!それにママもヒツキーも裸って……」

この状況でまだ分かっていないのか？頭が悪いな。

「何って、子作りよ。ヒツキー君に二人目を種付けしてもらっているのよ」

「なっ!?!ママ、浮気だよ!?!」

舞衣さんが言った事を由比ヶ浜はようやく今の状況を理解したようだ。だけど、もう遅い。

「これは罰なの」

「ば、罰!?どうして!?!」

舞衣さんはうっとり顔で由比ヶ浜に言った。ああ、早く絶望した顔を見せてくれ由比ヶ浜。

それにしてもどうしてだど?こいつは自覚が無いんだな。腹がたつ!!もういい、全部教えてやる。

俺は由比ヶ浜に言った。

「修学旅行の件だよ」

「……え?」

俺は由比ヶ浜に全てを話した。戸部は別に海老名さんからお願いされた事を。戸部の自分への告白阻止の依頼を。

由比ヶ浜は信じられないような顔をで話を聞いていた。

そして聞き終わると顔は青ざめていた。ここでもようやく俺がした嘘告白もとい告白阻止の意味を理解した。

「そ、そんな……」

「由比ヶ浜。お前はどんな理由で戸部の依頼で受けたんだ?まさか何

も考えていなかった……なんて言わないよな？それとも俺なら依頼を完遂出来ると思ったのか？」

「そ、それは……ひ、姫菜と戸部つちが付き合い出せば、あたしもヒツキーにこ、告白する事が出来るんじゃないかと、思ってた……」

そんな理由で依頼を受けたのか！そもそもこいつは何も考えてはいなかった。俺が居れば、どうにかするだろうと思っていたようだ。

こいつの頭は幼稚園児以下だ!!!

すると舞衣さんが由比ヶ浜の目の前に立ち言い放った。

「結衣。貴女がヒツキー君を深く傷つけたのよ。それだと言うのに貴女はヒツキー君に一言も謝ろうとしなかった。その所為でねママ、ヒツキー君の赤ちやんを産む事になったの。これからもヒツキー君の赤ちやんを産んで優しい子に育てるの。貴女のような駄目な子にならないように」

「あああああああ!!!?」

由比ヶ浜はそのまま!気絶した。まあ、いいか。後で起こしてやれば。

俺は舞衣さんを犯し続けた。さあ、由比ヶ浜結衣、絶望しろ!!!

やはり人妻が娘を壊すのはまちがっている。後編

由比ヶ浜主催の卒業パーティーの夜、俺と舞衣さんの関係を由比ヶ浜に見せたところ気絶した。まあ、気絶したところで俺の気持ちは収まらないんだけどな。

今夜、由比ヶ浜の『処女』を奪うつもりだからな。ああ、楽しみだぜ。

でもその前に舞衣さんに膣内出しをしないと。今夜は舞衣さんは危険日だ。もう一人、確実に孕んでもらわないと。

「iiiiiiii♡♡ひっきーくんのお、おくにとどいているううう♡♡」

「舞衣さん！もう、一度！射精ます!!」

「き、きて!!なかにあついのちようだい!!」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるる……びゅるるるびゅるるる……

「い、いくうううう♡……ひ、ひっきーくんのあ、あついのが……なかで、あばれているううう……♡は、はらんじやう……♡」

舞衣さんへの膣内出しはこれで八回目だ。八幡だけに！寒いオヤジギャグをかましている場合か!!

それにしても射精したな。舞衣さんのお腹なんて妊娠しているように少し膨らんでいる。これは抜いたら逆流するな、確実に。

でも大丈夫だ！舞衣さんが家族に内緒で通販で買ったこのバイブがあれば！逆流の心配も無い！さて、抜くか。

ずずずずず……ぽこっぽこっ……

「あ、あふれているう……♡」

「それじゃ塞ぎましょうか」

俺は舞衣さんのマンコにバイブを突き刺した。

ずずずずず……

「ひい!?……ヒッキー君、これじゃ気持ち良くなれないわ♡」

「これは栓をしただけです。後でまた犯してあげますから」

「お願いよ。それでどうするの?」

舞衣さんは気絶した由比ヶ浜を見せてそう言ってきた。もちろんやることは決まっている。由比ヶ浜の『処女』を奪う!!

「これから由比ヶ浜の『処女』を奪います。手伝ってください」
「ええ。もちろんよ♡」

自分の娘の『処女』を奪うと言った男に協力するとかもう駄目だ。この人。でも俺はそんな舞衣さんでも愛している!!

それでは準備を始めますか。まず由比ヶ浜の服を脱がす。それから舞衣さんを犯す時に使ったビニール紐で由比ヶ浜の身体を固定する。暴れられると困るからな。

そしてスマホをベッドがよく映る場所にセットして由比ヶ浜をベッドに移動させてうつ伏せの状態にしたら準備は完了だ。

「さてと……おい！起きろ由比ヶ浜!!」

「へえ!?!あ、あれ？動けない!?!」

「ようやく起きたか由比ヶ浜!」

「ひ、ヒッキー!?!ど、どうして!夢じゃなかったの!?!」

由比ヶ浜はさきほどの事を夢だと勘違いしていたようだ。まあ、いいか。これからたつぷりと現実——絶望を教えてやるよ!!

「今からお前の『処女』を奪おうと思うんだ」

「なっ!?!ま、ママ!!助けて!?!」

「結衣。大丈夫よ、痛いのは最初だけだし結衣はヒッキー君の事、好きでしょ?初体験が好きなんなんてステキじゃない」

「な、何言ってるの……ママ……助けてよ!!」

由比ヶ浜は舞衣さんの言った事が信じられないと言った顔をしていた。まあ、母親が助ける事無く見ていただけなのがさうとう堪えているな。

舞衣さんは自分のお腹を撫でた。

「結衣。貴女はもうお姉ちゃんなんだからしつかりしないといけないのよ?そんな大きな声で叫ばないの。お腹の子がびっくりしちゃうじゃないの」

「ま、ママ……さつきから何言っているの?……」

「それとね言うのが遅くなったんだけど結衣。藍衣は私とヒッキー君

の子供なの」

「なっ!?……ま、ママ? 何言ってるの? ヒツキーとの子供? ママとヒツキーの子供……う、嘘だよね! ねえ!」

由比ヶ浜は舞衣さんが言ってる事がショックなのか嘘だと想いたいようだ。自分が好意? を寄せている俺と母親がまさか子供を作っているなんていきなり言われても信じられないよな。

まあ、今はそんな事はどうでもいい。由比ヶ浜の『処女』を奪うか。俺は由比ヶ浜の腰に手を添えて動かないように固定した。

「ひい!? ひ、ヒツキー! さ、触らないで!!」

「それじゃいくぞ」

ぴとっ……

「ひ、ヒツキー……そっち、お、お尻……」

「ああ。そうだけど?」

そう。俺は『処女』とは言ったがマンコとは一言も言ってはいない。俺が最初から奪おうとした『処女』は後ろ、アナルの方の『処女』だ。ずずずずず……

「き、キツイな……」

「ひぎい!? い……痛い!? 痛い痛い痛い!! ひ、ヒツキー!? 抜いて抜いて抜いて!!」

流石にアナルはキツイな。それに俺、アナルに挿入するのは初めてだな。舞衣さんの時はマンコか口だけでアナルには挿入した事がなかった。

それにしても由比ヶ浜はそうとう痛がつているな。それだと言うのにそれを冷静に見ている俺と舞衣さんはある意味、人として歪んでいるな。

「あ……出る」

「え?……何が……」

じよろろろろ……

「ひ、ヒツキー!? 何してるの!」

「すまん。我慢できなくてな」

ずつと我慢していたのでつい小便を漏らしてしまった。まあ、いい

か。由比ヶ浜のアナルに出したことだしな。

「抜いて抜いて抜いて抜いて!!ヒツキーは何してんのさ!!」

「……別にいいだろ?どうせ、臭いクソを出すんだから。これはあれだ……小便浣腸だ。お前の腸を俺の小便で綺麗にしてやるよ」

「やめてやめてやめて!!抜いて抜いて抜いて!!」

由比ヶ浜は暴れているがビニール紐で固く固定しているのでまともにも動けない。そろそろ抜いてやるか。本人もこういつているようだから。

「ずずずずつ……ぽんっ!!」

由比ヶ浜のアナルから抜いた瞬間、いい音がしたな。それにしても由比ヶ浜はさつきから小刻みに震えているな。

「ひ、ヒツキー!お、お願い、と、トイレにい、行かせて!!」

「ああ。トイレね……」

小便浣腸が効いているようだ。でも行かせてやらないんだよな。あれが丁度いいかな。俺は部屋にあったある物を由比ヶ浜のお尻の前に持っていった。

「トイレには行かせないけど、これにならしていいぞ」

「ご、ごみ箱に出来る訳ないじゃん!!」

「……なら自分のベットの所で盛大に漏らせよ」

「っ!?……ま、待って!!」

ゴミ箱を元の場所に戻そうとしたら由比ヶ浜が待ったをかけた。ベットに漏らすくらいならゴミ箱にした方がまだマシと考えたようだ。

「ほら、しろよ」

「ううう……ひ、ヒツキーは部屋から出てよ!」

「それだとお前が臭いクソをしている所が見れないだろ?」

「ぶりぶりぶりっ……ぶりぶっ……」

「あ……あああああ!!……ひいぐ……酷いよヒツキー……」

由比ヶ浜は我慢の限界でゴミ箱の中にクソを漏らした。それにしても絶望に染まっている由比ヶ浜の顔は最高だな。もっと見たいな。そう思っていると俺のムスコがいつのまにか勃起していた。そろ

そろ回復したから舞衣さんでも犯すかな。さて舞衣さんは……？

「はあ……はあ……はあ……♡」

バイブでマンコを解していた。見てて分かる。もう舞衣さんのマンコはトロトロで厭らしい臭いを部屋中に漂わせていた。

「舞衣さん」

「ひ、ひつきーくん♡まだなの？もうわ、わたし……♡」

「お待たせしました。犯してあげますよ。あ、そのバイブは娘さんの前の『処女』でも奪ってあげてください」

「ええ、わかったわ……」

舞衣さんはマンコからバイブを抜いた。俺の射精したザーメンでバイブはべつとりと汚れていた。

俺はベットで放心状態の由比ヶ浜を仰向けにした。これで挿入しやすいだろ。

「ああああ……」

由比ヶ浜は小便浣腸で糞を強引に漏れさせたのが相当堪えているようでまだ意識は戻ってきていない。

舞衣さんはそんな娘などお構いなしにバイブを挿入した。

「ずずずずず……みちちちち……」

「いつ!?痛い痛い!?ま、ママ!!止めて!!!」

やぱり処女喪失は痛いんだな。あ、血が流れている。痛そうだな

……。ああ、でも痛がっている由比ヶ浜を見ると自然と興奮してくる。

舞衣さんがお待ちかねのようだし挿入するか!!

「ずずずずず……」

「き、きたああああ♡ひ、ひつきーくんのおおきいつ!!」

「ずずずずず……ぱんっ!ずずずずず……ぱんっ!ずずずずず……ぱんっ!」

「で、でたりっ……はいいつたり……っ!?おく、つかれて♡き、きもちいいいいいい♡♡♡」

やっぱり舞衣さんのマンコは凄い。俺から全部を搾り出そうとしてマンコが蠢いている。これに耐えられる男はいないだろ。

「ぐっ……で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるっ……

「い、いくううう!!……ああ……ひ、ひつきーくんの♡ざーめん、なかで、あばれている♡♡♡」

「や、ヤバッ……!!」

気持ち良すぎて舞衣さんのマンコに休む事無く射精し続けている。これ、俺が干からびる事はないだろうか？

それにしても今夜はいつも以上に射精したな。やっぱり由比ヶ浜に見られたのが良かったのだろうか。

そんな由比ヶ浜は母親にバイブで処女を散らされたのが余程、シヨックだったようで完全に放心状態になっていた。

ずずずずず……ぽこっぽこっ……

「あら、やだ。出ちやう……」

マンコからチンコを抜くとやっぱりザーメンが逆流してきた。舞衣さんは由比ヶ浜からバイブを抜いて自分のマンコに挿入して栓をした。

そして少し零れたザーメンを掬って口に運んで味わっていた。

「……んんっ……ああ、ヒッキー君のザーメン、とっても美味しいわ」「そ、そうですか……」

実際、あれがよく味わえるよな。まあ、舞衣さんが美味しいならそれでいいか。それで問題が由比ヶ浜だ。

このままにしておくかと雪ノ下か平塚先生にでも言いそうだな。それに葉山グループの面々が由比ヶ浜の態度の変化に気が付けば、絶対に怪しむ。

どうしたものか……。

「……え……ひ、ヒッキー? ママ?」

「由比ヶ浜……」

「結衣……」

まだ何も考えていないのに目を覚ましやがった!?

「あれ?……どうして、動けないの?」

「それはヒッキー君との初体験して疲れているのよ」

「そ、そうなの?」

舞衣さんは思わず嘘を付いたが乗り切れそうか? いや、これで行くしかない!

「で、でもどうしてママがここに居るの?」

「俺たちがやり方が分からないと言ったら舞衣さんが協力してくれたんだろ? お前も了承したじゃないか……」

「そうだっけ?」

「そうよ。初体験はばっちりだったわよ」

由比ヶ浜はボケている。舞衣さんは騙す気だ。

「そうだぜ。俺達が恋人になったんだからHな事をしていくの舞衣さんがアドバイスをくれたんだぜ!」

「え? あたしとひ、ヒツキーと恋人!」

あ、そっちね。話題をズラすならそっちの方がいいか。それから俺は由比ヶ浜に色々と話、なんとか納得してもらえた。

そして一つ気になった事があった。それは由比ヶ浜の目が死んでいた。それはある意味、思考を停止させてるのだろう。

つまり由比ヶ浜結衣は完全に壊れたと言うことだ。

でもいいか。由比ヶ浜の絶望した顔が見れたことだし、文句はない。

さあ、由比ヶ浜母娘、もつと壊してあげますから楽しみしてください。さー!

「さあ結衣。もつとヒツキー君に可愛がってもらいましょ?」

「うん! ママ!!」

「ヒツキー君。もつと私達を壊して?」

「ええ。粉々に壊してあげますよ」

舞衣さんは結衣と抱き合ってマンコをこっちにみせた。俺は朝まで二人を犯し続けた。俺の復讐はこうして終わった。

でもまだまだ舞衣さんの身体を堪能するぞ!!

やはり人妻家族と間違った関係が続いているのはまちがっている。

舞衣さんとの関係を由比ヶ浜に見せて色々してからそれから高校を卒業して大学に入学した。それから四年後、俺は無事に大学を卒業する事ができた。社畜になりたくなかった俺は大学時代にバイトをしていた喫茶店に就職した。

と、言うかこの元々の持ち主の老夫婦が俺に全部譲ってくれた。二人ともいい歳だったので店を畳もうかと考えていたので俺に譲ってくれないかと聞いたらすんなり譲ってくれた。

これで社畜にならずに済んだ。

「……悪くはないわね」

「そこは普通に美味しいとは言えないのか？雪ノ下」

俺の目の前のお客は元奉仕部部长雪ノ下雪乃だ。ビジネススーツを着こなしていた。なかなか似合っていたが相変わらず貧乳だ。色気が無い。

「あら不味くないと言わないだけ感謝してもいいとおもうのだけど？比企谷……いえ、今は由比ヶ浜だから八幡君と言った方がいいかしら？」

「お前の好きなように呼べよ」

雪ノ下の言った通り俺の今の性は比企谷ではなく由比ヶ浜だ。大時代には俺は由比ヶ浜……結衣と付き合って結婚した。そして俺は由比ヶ浜家に婿入りした。

家族で特に親父が婿に行けと散々頼んできた。今は小町を独り占めしている。てか、高校卒業と同時に俺はシスコンを卒業した。

「ゆきのん！来てくれてありがとう。良かったらどうぞ」

「……ありがとう。ゆ、結衣さん」

雪ノ下はどこか寂しそうな顔をしていた。昔のような関係ではなくなっただけからな。

俺にとっても雪ノ下にとっても奉仕部の関係は居心地が良かった

からな。でも自分の親友の恋愛は応援したくれたようだから安心した。

雪ノ下は飲み終わると立ち上がった。

「……それじゃ私はそろそろ行くわ。結衣さん、また来るわね」

「うん！待っているから！」

「またな、雪ノ下」

「……ええ」

雪ノ下はそれでけ言っただけで店を出て行った。時間を見てみると1時過ぎになるうとしていた。この喫茶店では平日の2時から4時まで店は一時的に閉めている。

昼休憩だ。とつてもこの時間帯はお客は誰一人として来ない。

「ご、ご主人様……そろそろ頂だい……」

「ホント、お前も好きだよな。ほらいつも通りお願いしてみろ」

「は、はい♡このメス豚のだらしないアナルに♡ご主人様のおおきいおチンチンを入れてください♡」

「いいぜ」

この店を一時的に閉めている理由がもう一つある。それは結衣が俺を求めてくるからだ。しかもアナルに。

高校の時に小便浣腸をしたからなのか結衣はあれ以来、アナルSE Xにどっぴりと嵌まった。

それと結衣には俺の事を「ご主人様」と呼ばせている。こいつに名前を呼ばれたくないからだ。

「結衣ったらもう少しは我慢できないの？」

「ママ」

店の奥からお義母さんの舞衣さんが現れた。相変わらず、綺麗だ。年齢はすでに40歳を超えていると言うのに見た目は30歳と言われれば信じるくらい若い。

それとこの喫茶店には店長の俺以外の従業員は舞衣さんと結衣しかいない。舞衣さんは結衣の隣に並んだ。

すると舞衣さんはスカートを捲くり上げてお尻をこっちに突き出してきた。

「わ、私だつて……は、早く八幡君の大きいのを挿入して♡」
「あーママ、最初はあたしだからね！そうでしょご主人様♡」
「まったく母娘で淫乱だな？まあ、俺も我慢出来ないんで一気に行くぞ!!まずは結衣からだ!」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「き、きたああああ!!ご、ごしゅじんしゃまのおおきいのがっ♡♡」

「ホント、相変わらずのアナルの締まりが良いな!だ、射精ぞ!!」

「きてええええ♡なかにあついのを!たくさんだして♡♡」

「びゅるるるびゅるるる……びゅるるるびゅるるる……」

「で、でているううう♡♡」

結衣のアナルに射精したぜ。結衣とは大学時代にも何度も犯したが全部アナルに射精した。時には小便浣腸もした。

ここまでくるとド変態アナル狂いビッチだ。

結衣が絶頂する度にこいつを壊した夜の事を思い出して最高に気分がいい。

「おい、結衣。出すなら便所でしろよ。店を汚したらもう二度としないからな!」

「う、うんー!じゃ、じゃあ……出してくるね」

結衣はお腹を抱えてトイレに向かった。俺が射精した精子を糞と一緒に出してアへ顔になっているな。

まったく気持ち悪い奴だ。まあ、いいか。舞衣さんを犯すかな。

「それじゃ舞衣さん」

「ええ!は、早く……♡♡」

「それじゃ……行きますよ!!」
「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「き、きたああああ♡♡は、はちまんくんの♡お、おくまで……きているううう♡あたま……まつしろになるううう♡♡♡」

舞衣さんは挿入しただけで絶頂したようだ。相変わらず締まりがいいな。この人の肉体は衰えないのか?

「これならまだまだ犯せるぜ!!」

「休憩時間にやっておかないといけない事があるから早めに済ませま

すよー!」

「や、やること?なに?」

「今夜の楽しみですよ!ほら!もつと淫らになってくださいよ!舞衣さん!!」

ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!

「ひいひい!?!」

舞衣さんは子宮口に俺のチンコが突くたびに絶頂していた。その度にきゆうきゆうとマンコが締め付けてくる。

こんなんではすぐに射精しそうだ。

「舞衣さん。もう射精ます!!」

「き、きて♡♡なかに!!だ、だして♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるる……びゅるるるびゅるるる……

「あああ……はちまんくんの♡なかで、あ、あばれている……♡♡♡」

舞衣さんのマンコへの膣内出しは最高に気持ちいいな。それにまだ昼休憩は始まったばかりだ。もつと犯してあげますよ舞衣さん。

「ホント、三人も産んだのに全然、凄い締めまりですね!犯しがいいありますよ!!」

ちなみに三人目は男の子だった。藍衣を産んだ翌年に生まれた。もしかしたら俺に似るかも知れない。

「もつとーもつと、おかして♡」

「ええ。もつと犯してあげますよ!!」

ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!

「い、いいいい!!はちまんくん♡♡つかれて……きもちいい♡♡♡♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるる……びゅるるるびゅるるる……

「い、いくうううう♡♡……あああ……な、なかであばれてい

るううう♡き、きもちいいいい……♡♡♡

「おおおお……絞り撮られる」

舞衣さんのマンコは劣れをまったく感じなかった。ホントに四十過ぎなのか？キツキツに締めてきて俺のチンコから全部のザーメンを出そうとしている。

さてと今夜は特別だから準備をしないとな。

「ママ、パパ。結婚記念日おめでとう!!」

「ありがとう結衣」

「ありがとね結衣」

そう。今日は結衣の両親の結婚記念日だ。豪華な料理は全て結衣が作った。これほどの料理を一人で作るなんて昔なら想像すら出来なかったな。

ちなみに二人（俺と舞衣さん）の子供は寝ている。流星にまだ夜遅くまで起きてはられない歳だ。

「お義父さん。俺からはこれをどうぞ」

「ワインか！ありがとう八幡君。さっそく皆で飲もうか！」

お義父さんがさっそく俺が買ってきたワインを開けてそれぞれのグラスに注いだ。中々高かったのでしっかりと味わったのんだ。

そしてお義父さんは寝てしまった。睡眠薬をこっそり混ぜたのだ。こうして見るとバカな父親だな。

自分の妻が娘の夫に寝取られたなんて知らないのだからな。

「お義父さんは寝たことだし……二人とも分かっているな？」

「ええ。八幡君♡ほら結衣も」

「うん♡あたしも準備出来ているよ。ご主人様♡」

舞衣さんと結衣は服を全部脱いでお尻を俺に突き出した。二人ともすでにマンコは愛液で濡れていた。ホント、だらしない淫乱母娘だ

な。

「ずずずずつ……ぱんっ!!」

「ひいいい!き、きたああああ……♡♡♡は、はちまんくん……のっ!♡お、おくまで……とどいている♡♡♡」

昼間していたと言うのに舞衣さんを犯すとなると俺のムスコは元氣一杯だ!!

「あんまり大きい声だと上に居る哀れな男に聞こえますよ?それとも声を聞こえさせようとしています?」

「ち、違うわ!八幡君に突かれるのは、すごく気持ちいいの♡♡」

「そうですか。だったら射精してあげますね!!」

「き、きてえええ♡♡♡」

びゅるるるるびゅるるる……びゅるるるびゅるるる……

「い、いくううう♡♡♡……な、なかで♡あばれてる♡♡」

「おおおお……まだ射精る!」

びゅるるるびゅるるる……

「ましや……なかに♡♡」

射精したのにまた射精してしまった。舞衣さんの子宮が俺の精液で満たされているのを感じる。きつと今、子宮はパンパンにだらうな。

これで孕んだな。早く産まれてきてくれよ。俺達の子供。

「ご主人様!は、早く!!お尻に挿入して♡」

「お前はこれでも挿入している!」

「ひぎっ!」

俺はうるさい結衣のアナルにワインを挿入した。ワインは結衣のお尻へと流れていった。結衣は嬉しそうな顔になっていた。

「おおおおおおお……おひり、やへる♡♡」

「全部、飲み干せ。このアナル狂いのビッチが!!」

「は、はひ♡」

結衣は言われて通りにワインを飲み干した。俺は瓶を引いたり入れたりして結衣のアナルに刺激を与えていた。

「だ、だめえ!?おひり、ばかに♡なちやうさら♡♡」

「お前は元々、バカだろうが!!今更だろ!!」

「い、いくうううう♡♡♡」

ぶりぶりぶりぶり!!

結衣は盛大にクソをワインと一緒に噴出してアへ顔になった。まったく汚いな俺の妻は。でもこれで舞衣さんに集中出来る!

「お待たせしました舞衣さん」

「は、八幡君。は、早くずぼずぼ奥まで突いて♡」

「ええ、いきますよ!!」

ずずずずつ……ぱんっ!……ずずずずつ……ぱんっ!……ずずずずつ……ぱんっ!!

「ひい!?す、すごい♡おく、つかれるたびに♡あしやまがまっしろに♡きもちいいいい♡♡」

「ラストスパートだ!これでまた孕め!!」

びゅるるるびゅるるる……びゅるるるびゅるるる……

「い、いくうううう♡♡♡……おなかのなか、せいしが……あばれている♡♡」

「おおおお……流石、舞衣さん!!」

舞衣さんはいい歳なのに締りの良さが最高だ!!まだまだ射精出来る!でも続けるにもまず部屋を綺麗にしないと。

結衣が盛大にクソを撒き散らしたからな。そしてその結衣は絶頂の余韻でだらしないアへ顔でテーブルの上に居る。

「まったくこのビッチは……」

俺は結衣のクソを処理してテーブルの上の料理を片付けてから結衣を部屋に運んでから舞衣さんと夫の寝室に向かった。ちなみに夫は椅子に座ったままだ。

寝室に入るなり舞衣さんはベットの所で股を開いてマンコをしつかりと俺に見せてきた。俺が射精した精液が逆流してとてもエロかった。

それからすぐに結衣が部屋に入ってきて舞衣さんのように股を開いた。

「八幡君♡もつとたくさん精液を頂戴♡また貴方の子供を産ませて♡

♡」

「わたしもご主人様の子種ちようだい♡♡」

「ああ。二人にはこれから俺の子供をたくさん産んでもらうからな。だからたくさんを犯してあげるからな」

「八幡君。愛しているわ♡」

「ご主人様♡大好き♡」

「俺も二人の事、大好きだし愛している」

そして俺は舞衣さんと結衣を犯した。それも朝日が昇るまで何度も何度も二人を犯し続けた。二人の顔に胸にお腹に足に俺の精液がべっとり付くまで犯した。

それから舞衣は俺の子供を妊娠した。やっぱり舞衣さんは最高だな。ついでに結衣も。

やはり人妻家族と間違った関係が続いているのはまちがっている。

やはり人妻家族と間違った関係が続いているのはまちがっている。続

うつつ由比ヶ浜八幡だ。俺が由比ヶ浜家に婿入りして十数年の時
が経った。俺は今日も舞衣さんを犯していた。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずず
ずつ……ぱんっ!!

「ひいひいひい♡八幡君の♡デカチンコ♡サイコー♡♡♡」

「舞衣さん凄く締め付けてきますね!!」

「もつと私をダメにしてええ♡♡」

舞衣さんは大きな声で乱れていた。今は昼休憩なので喫茶店には
お客が居ないから問題ないけどな。それにしても舞衣さんは今だ綺
麗だ。

少し前に年齢を聞いてみると何とまだ50歳になっていなかった。
結衣を16歳の時に妊娠して出産したらしい。

ちなみに駆け落ちをしたと言っていた。どおりで若いと思つたぜ。
結衣が17歳の時、まだ31〜32歳くらいだったと言う事だ。

ちなみに結衣は今子育て中だ。俺と結衣の間に来た子供は三人。
全員女の子で将来きつと母親と祖母に似て巨乳になるだろうな。

まだまだ手の掛かる時期でお金も必要になってくるが問題ない。
結衣に命令して雪ノ下に援助を頼ませた。

すると雪ノ下のやつはなんと500万をぽんつと用意してくれた。
結衣も雪ノ下もどつちもバカな女だよ。

まあ、でもこれでお金については大丈夫だろう。雪ノ下建設は安泰
だから結衣を通じて雪ノ下からいくらでもお金は引っ張れる。

だから俺は自営業の喫茶店を続けていける。社畜には絶対になら
ないぞ!!

それにしても四月になって温かくなってきたな。すると店の扉が
開いて一組の男女が入って来た。

「ああああ!!お母さん!!もうお父さんともうしている!」

「お、帰ってきたか藍衣」

「お父さん！ただいま!!」

俺と舞衣さんの娘、藍衣。ずい分成長してもう高校生になった。高1だと言うのにすでに巨乳とっていいくらいの大きさになっていた。

流石は舞衣さんの娘だ。高校時代の結衣くらいはあるかもしれない。

「母さん、父さん。ただいま」

「おかえり九太郎」

藍衣と入って来た少年、中学三年ほどの男の子だ。俺と舞衣さんの息子、由比ヶ浜九太郎（きゆうたろう）。

藍衣は舞衣さん似だけど九太郎は俺似だ。ぴんと立ったアホ毛が俺とお揃いだ。俺の血をしつかりと受け継いでいるな。ちなみに目は腐っていない。

中学では勉強と運動が出来て女子にモテモテだそう。べ、別に羨ましくないぞ!!

「お母さん！早く代わってよ！私もお父さんに犯してもらうんだから」

「ま、待っていないさい♡も、もう少しでイクから♡♡」

舞衣さんはキツくマンコを締め付けてきた。これではもう射精しそうだ!?

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるびゅるるっ……

「い、いくうううう♡♡……はあ……はあ……」

「おおおおお……絞られる!」

歳をとつても舞衣さんのマンコは締りがいい。これで三人にの子持ちの50歳近い人妻とは思えない。

ずずずずっ……ぽこっ……ぽこっ……

舞衣さんのマンコからチンコを抜くと精液が逆流してきた。俺も相変わらず結構な量を射精したな。俺もまだまだ行けるといふ事か。

舞衣さんが絶頂している様子を藍衣と九太郎はマジマジと見ていた。

「九太郎。これがSEXだよ。私達が今からするんだよ」

「う、うん。凄いね姉さん。緊張してきた……」

ちなみに藍衣と九太郎は俺と舞衣の子供だと知っている。藍衣は舞衣さん似だけど、九太郎は自分達の父親とあまり似ていないため舞衣さんに聞いたのだ。

舞衣さんは隠す事無くバラしたのだ、二人の父親が別にいる事を。そしたら藍衣が俺に犯して欲しいと言ってきたのだ。

舞衣さんはそれを勝手に承諾した。そしたら九太郎も童貞卒業したいと言ってきた。

そして今に至るのだ。

「それじゃ待たせたな藍衣」

「うん！お父さん!!……んっ」

「んんっ……んんっ……」

くちや……ぺちや……ぺちや……くちや……

俺と藍衣の唇が重なる。お互いに求めて厭らしい音を立てる。それが耳に響いてさつきまで元気がなかった俺のチンコはすっかり元気になった。自分の娘とキスとか最高に興奮するな!!

「はあ……♡ファーストキスがお父さんで良かった♪」

「ファーストキスの相手が父親とか嫌じゃないのか？」

「全然嫌じゃないけど？むしろファーストキスはお父さんって決めていたから！」

俺の義妹(実の娘)は俺に似てとんでも変態のようだ。でもいいか、人が誰かを好きなるのは本人にの自由なんだから。俺が舞衣さんを好きなになった様に。

「それじゃ脱ぐね」

「あ、出来れば制服のそのまま頼む」

「え？うん、いいけど。お父さん制服JKを犯したいんだね！」

藍衣はパンツだけを脱いでテールブルの上に乗って自分からマンコを開いてみせた。母親に似てエロい!!

「お父さん……きいて♡」

「ああ、行くぞ」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「痛つ……!?!」

「大丈夫か? 藍衣……」

「う、うん。大丈夫だよ……痛いけど、それ以上にお父さんに処女をあげれた事が嬉しいの♪お母さんとした時みたいに動いていっぱい精子ちようだい?」

「あ、藍衣……」

ずずずずずつ……ぱんっ!! ずずずずずつ……ぱんっ!! ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひい!? す、すごい♡お父さんの! 出たり入ったりして♡気持ちいいいい!!」

「まだまだこんなもんじゃないぞ。でもそろそろ射精しそうだ」

JKで処女マンコがあまりにも気持ちいいものだからもう射精しそうだ。学生時代、結衣の処女は大人のオモチャで処女喪失したからな。

処女マンコがこんなにも気持ちいいものなのだ!! 今この瞬間しか味わえない感覚だ!!

「きて♡お父さん!! 私の膣内に♡お父さんの子種、射精して!!」

「藍衣!!」

藍衣は射精する直前に俺に抱きついて離そうとはしなかった。俺も藍衣に抱きつき全ての精子を子宮に射精した。

びゅるるるびゅるるるつ……びゅるるるびゅるるる……

「い、いくううううう♡♡……お父さんの精子、私の膣内で暴れる……それにとつても熱いから火傷しそう♡」

「ああ、お父さんも凄く気持ち良かったぞ」

「ホント!? 嬉しい!!」

藍衣は本当に嬉しそうに笑った。娘が自分の父親に犯されてする顔ではないな。ある意味、そこは舞衣さんによく似て歪んでいるな。

おっと、舞衣さんと九太郎は?

「母さん! 母さん! 母さん!」

「大丈夫よ九太郎。ゆっくりでいいのよ」

「母さん！うん、行くよ！」

向こうは向こうで勝手に始めていた。俺の息子の九太郎。八幡の次だから九で男だから太郎で九太郎になった。

俺とは性格は似ても似つかない程、勉強も運動も出来る。

「す、すごい!?これが母さんのマンコなんだね！」

「九太郎のおチンチン♡八幡君と同じで大きい!?奥まで届く♡♡」

「母さん!!」

九太郎は初めて味わうマンコに凄く興奮して必死に腰を振っていた。童貞卒業がまさか自分の母親がいいとはこっちもどんでもない変態のようだ。

まあ、近親相姦は背徳感があってかなりそそるからな。勃起しっぱなしだぜ!!

「九太郎ってば、お母さんのマンコがそんなに気持ちいいのかな？」

「舞衣さんのマンコは名器だからな。あれを味わうともう雄の本能を抑えて置けないからな」

「じゃあ私のは？お父さん」

「藍衣のも母親譲りで名器だな」

「ホント!?ヤッター!!だったらもっと気持ち良くなってね♪お父さん♡」

藍衣は抱きつき喜んだ。その際に胸を押し当ててきたのを俺は堪能していた。舞衣さんほどではないにしても中々の大きさだ。

由比ヶ浜家の女は全員、巨乳になるようだな。

「ねえお父さん。お願いがあるんだけど、いいかな？」

「うん？なんだ藍衣？」

「お父さんの子供、産ませて！」

「藍衣……」

我が子ながらとんでもない事を言ってきたな。それはそれで嬉しいが！世間体とかきにしないといかないからな。

「だったらまず高校と大学を卒業するんだ。それからバカな男を見つけて結婚するんだ。そしたらいくらでも孕ませてやるからな。藍衣」
「うん♪早く学校卒業してバカな男と結婚してお父さんの子供、たく

さん産むね♡♡」

「続きしようか？」

「うん♡」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「うひいひい♡お、おとうさんの♡♡おくまできてる♡♡」

「まだまだ!!」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずず

ずつ……ぱんっ!!」

俺は必死になって腰を振って藍衣のマンコを味わった。親子であるだけマンコはまるで舞衣さんと瓜二つのような。腰が止まらない!!!

「で、射精るぞー!藍衣!!」

「き、きて♡お父さん!!!」

びゆるるるるびゆるるるるつ……びゆるるるびゆるる……

「あああああ!!!」

俺と藍衣は同時に絶頂した。俺は藍衣を抱きしめて精子を全て藍衣の子宮に注ぎ込んだ。もし避妊していなかったら確実にやらんでも可笑しくない量の精子を射精した。

「あああ……」

「やり過ぎたか……少しお休み藍衣」

処女の藍衣には最初から激しくし過ぎたようだ。舞衣さんと九太郎の方を見てみると向こうも終わったようで九太郎は舞衣さんに抱きつき寝ていた。

余程、疲れたんだろうな。九太郎が射精したと思われる精子が舞衣さんの周りの飛び散っていた。

俺は藍衣と九太郎の身体を拭いてから奥の部屋に寝かせた。残ったのはマンコから九太郎の精子を逆流している舞衣さんと俺だけだ。

「舞衣さん」

「は、はちまんくん♡♡」

舞衣さんはまだ絶頂の余韻を味わっているようだ。九太郎の奴、無茶し過ぎだ。どんだけ射精したんだ？

でも舞衣さんと九太郎のSEXを見ていたら俺も舞衣さんを犯したくてしようがなくなつた。

「それじゃ挿入ますね。舞衣さん！」

「ま、まって……!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひいひい♡♡だ、だめ♡こわれちゃう♡♡」

「もう壊れているでしょ!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずず

ずつ……ぱんっ!!

俺は舞衣さんに構わず腰を振つた。舞衣さんの子宮の中には九太郎が射精した精子がたっぷり詰まっている。

それを思うと勃起が収まらない。九太郎が射精した以上に舞衣さんの子宮に射精してまた俺色に染め直してやる!!

「これで行け!!どスケベ人妻が!!」

びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いくうううう♡♡♡」

俺の射精と同時に舞衣さんは派手に絶頂した。この時の舞衣さんを見るのがとても好きだ。例え、誰かに俺と舞衣さんの関係が間違っていると言われてもいい。

だって、俺はともて幸せなのだから。この関係がまだまだ続く事を願うだけだ。

さてと舞衣さんを綺麗にして店を開けますかな。歪んでいる家族のため頑張りますかな!

やはり私が彼を襲うのはまちがっている。

私、由比ヶ浜舞衣はここ数週間、おかしい夢のせいで寝不足になっていた。夢の内容は娘の結衣が好意を寄せている男の子であるヒッキー君こと比企谷八幡君が私を犯すと言う内容だ。

本来なら不快でしかない夢のだけど、不思議と子宮が熱くなる。ヒッキー君に犯されるのが嬉しい私がいる。それが私を可笑しくしてしてしまう。

つい数日前に娘と一緒に歩いているヒッキー君を見た瞬間に娘に嫉妬してヒッキー君に発情してしまった。

そして私は通販で購入したバイブを使って自分を慰めていた。

「ひいひい♡ああああ♡」

だけど、全然気持ちよくなれない。夢で見たヒッキー君のおちんちんはこんなものではなかった。太く硬く凶悪なおちんちん。

あれで膣内を蹂躪されたらどれだけ気持ちいいだろうか？そんな事ばかり考えてしまう。考えないようにしても夢をみる度にヒッキー君に犯されたいと思う感情が溜まっていく。そろそろ限界だ。

「はあ……どうしたのかしら？私は……」

娘どころか夫にすら相談なんて出来ない。それが悪循環になって、私の性欲を高めている。早く解決方法を見つけないと駄目よね。

でもどうしたらいいのかしら？不倫なんてもっての外だし……この際、ヒッキー君に相手をしてもらうとか？

「何を考えているの、私は……でも、もしそうすれば……」

あの凶悪なおちんちんで膣内を蹂躪されたらきつと気持ちいいんでしょうね。そんな事は出来ない。彼は娘の好意を持つ子なのよ！

そもそも彼だってこんなおばさんを相手に興奮するなんてありえないわ。でも夢では何度も犯して貰ってわね。

私は顔を左右に振って考えを放棄した。これ以上、考えていると可笑しくなってしまう。

「あら、誰かしら？」

「どうも……」

「ひ、ヒツキー君!？」

「ゆいがは……結衣さん、居ます?」

誰か来たと思ひ、玄関を開けてみるとそこにはヒツキー君が立っていた。これは不味いわ。さつきまで彼の事を考えながらオナニーをしていたのに。

それに今、私の膣内にはバイブが挿入されたままだ。もし落ちたなら淫乱な女だと思われるでしょう!

「ごめんなさいね結衣が約束を忘れてるようで……」

「いえ、大丈夫です。お構いなく……」

ヒツキー君は結衣に用事があったようだけど、結衣は雪乃ちゃんの家に行っていた。しかも連絡が付かない。早く帰ってきてよ、結衣。

彼と二人つきりなんて、気まずいなんてものではないわ! 思わず家にかけてしまったけど、上げた以上、相手をしない訳にもいれない。

「それで最近、結衣とはどうなの?」

「由比ヶ浜とですか」

「私も由比ヶ浜よ。そうね……舞衣って呼んで」

「そ、それは……ちよつと」

不味いわ。夢の彼と重なって体がどんどん熱くなってきている。それに膣内のバイブの弱い振動がもどかしくて、可笑しくなってしまうわ。

一先ず、トイレに行つてバイブだけでも抜かないといつ落ちるか分からないわ。

「ご、ごめんなさい。少しトイレに……」

「舞衣さん。何か落ちましたよ」

「え?」

「これって……」

立つた瞬間に間の悪い事にバイブが落ちてしまった。しかもヒツキー君がそれを拾ってしまった。私の愛液で汚れた極太バイブを。どうして今日に限つてスカートを履いたのだろうか!?

ヒツキー君はバイブと私を交互に見て、顔を赤くしていた。私はヒツキー君の股間がテントを張っているの見てしまった。

ヒツキー君は私が落とすとしたバイブで興奮してくれたのだ。もう我慢出来ない。

「ヒツキー君も男ね……私のここ、触って……」

「ま、舞衣さん!？」

「んんっ♡」

私はスカートを捲り、マンコをヒツキー君に見えた。そしてヒツキー君の指を私の膣内に入れた!夢と同じくらいの太さに長さにあるは夢ではなかったのではないかと思ってしまう。

「んひい♡ひ、ヒツキー君、動かしてみて」

「え?あ、あの……」

「いいっ♡もつと激しくしてっ♡」

「こ、これが……女性の」

やはりヒツキー君だつて男の子だもの、興味くらいはあるわね。ヒツキー君の指が私のマンコを刺激してくる。でも少し物足りない。夢ではもつと容赦なく解してくれたのに。現実のヒツキー君はどこか遠慮しているような気がする。それがとつても、もどかしい!

「ヒツキー君。んっ」

「んんっ!？」

「んんっ♡」

「んっ……」

私は我慢出来ずにヒツキー君にキスしてしまった。だって、彼つて全然攻めてこないんだもん!それもそうか、だって彼は夢のヒツキー君とは違うのだから。

襲うと言うより襲いたくなる。そんな気持ちにしてくるのだから。

「えいー」

「ちよ、ちよつと!？」

「ヒツキー君のおちんちん。はむっ」

「のおおおお!!」

私はヒツキー君のズボンをパンツごと強引に脱がした。夢と違うとはいえ、やはりヒツキー君のおちんちんは大きく、匂いも強烈だった。

私はヒツキー君のおちんちんに舌を巻きつけて、顔を上下に激しく動かした。するとヒツキー君のおちんちんが段々と太く硬くなってきた。

「ヒツキー君のおちんちん……素敵ね」

「ま、舞衣さん。これ以上は……」

「でもこのままじゃあ、家から出れないでしょ？」

「そ、それは……」

年頃の男の子が勃起したままで外なんて歩けるわけない。もし女性が見たら変質者として通報されてしまうかもしれない。

なら私がする事は決まっている。私は再びヒツキー君のおちんちんを啜えた。

「はむっ……じゅるるるるっ……じゅるるるるるっ」

「のおおおお!!」

「じゅるるるるるっ……じゅるるるるるっ」

「ま、舞衣さん！離れて！うっ……!!」

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

フェラをしているとついにヒツキー君は限界が来たようで射精した。この量、匂い、喉に絡みつくような粘着性は夢に見たヒツキー君の精子だ。

いきなりの射精で驚いて全て飲み干してしまった。もつと時間をかけて味わっておけばよかった。

「ま、舞衣さん……」

「ヒツキー君はまだ元気ね」

「こ、これ以上は不味いですよ!」

「ここには私とヒツキー君しかいないのよ?」

「……………」

私がヒツキー君に跨って腰を下ろそうとしてきたけど、ヒツキー君はまだどこか躊躇しているようだった。でも私は躊躇する事無く腰をヒツキー君のおちんちんの上に降ろした。

「あはっ♡」

「のおおおお!!」

「あんっ♡んひい♡ああっ♡」

「ま、舞衣さん!ま、待って!」

ヒツキー君は私を必死に止めようとしたけど、私は止まる事無く腰を上下に動かし続けた。ヒツキー君のおちんちんの先が私の子宮の入り口をノックしてくる。

夫では届かなかった所にまで届くなんて、流石はヒツキー君ね。いえ、それだけではないわね。

私の子宮がヒツキー君のおちんちんの反応して降りてきているのだろう。だから届いたんだろう。

「ヒツキー君っ♡んんっ♡」

「んんっ!?ま、舞衣さん……ちよつと落ち着いて!」

「駄目なの!ヒツキー君のが欲しいのっ♡」

「だ、駄目だ!で、射精る!」

「いいわ!きてっ♡」

「ああああああ!!」

「うひいひい♡あ、あしゅい♡」

ヒツキー君はついに我慢出来ずに射精してしまった。私の子宮がヒツキー君の精子で満たされている。熱く火傷するんじゃないかと言うくらい精子がたくさん泳いでいる。

私はヒツキー君から離れた。夫は一回射精したら萎えていたけど、ヒツキー君のはまだ元気よく勃起していた。

「えいっ♡」

「ま、舞衣さん!?!」

「ふふっ……男の子はこれ、好きよね?」

「あ、その……」

私は服を脱いでブラを外して胸でヒツキー君のおちんちんを挟んだ。私の胸で挟んでも先が出てくるほどの大きさなんて、ヒツキー君のおちんちんを改めて凄いと思ってしまう。

「はむっ……じゅるるるるっ」

「おほっ!?舞衣さん、駄目だ!」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「ま、また射精する！うっ……」

「きやあ?!……す、すごいっ♡はむっ」

ヒツキーがまた射精したけど、量は私の膈内に射精した量とそんなに変わらなかった。もう三回は射精したのにまだこれだけ出来るなんて！

私は射精した精子を口に運んだ。ヒツキー君の精子を飲み込んだだけで子宮が熱くなる。もう私は駄目なのかもしれない。

私はスカートを脱いで、壁に手を付いてお尻をヒツキー君に向けてマンコを広げて見せた。先ほどヒツキー君が射精した精子が漏れ出ていた。

「ヒツキー君はもう満足？」

「ま、舞衣さん！」

「あんっ♡」

「舞衣さん舞衣さん！」

「ああ♡んひい♡ああんっ♡」

ヒツキーはやはり満足していなくて、後ろから力強く腰を打ちつけて来た。後ろからなのえヒツキー君のおちんちんの先が私の子宮に入ってくる。

それが私を熱くさせてくれる。夫と違って私を満足させてくれるおちんちんがここにある。

夫は結衣を孕んでから全然私を相手にしてくれなかった。私はもっとしたかったのに。タイミングが合わずに今日までしてこなかった。

でも私はもっとセックスをしたかった。できれば結衣に弟か妹を作ってあげたかったのに。

「ま、舞衣さん！俺もう……!!」

「いいわ！全部、私の膈内に射精してっ♡」

「で、射精る!!」

「ひゃああああああ♡いくいくいくっ♡」

ヒツキー君の精子が私の子宮に注がれている。それだけでは私は絶頂してしまった。今日は危険日だ。これは確実にヒツキー君の子

供を孕んだかもしれない。

「舞衣さん……子供が」

「大丈夫よ。今日は問題ないから」

「ほ、本当ですか!？」

「ええ、ヒツキー君は心配しないで」

私は嘘をついてしまった。ごめんなさいね。でもそうでもしないとあなたは心配するでしょう？大丈夫よ、今夜夫には精がつくものを食べさせてするから。

きつとあの人も自分の子供だと勘違いするでしょう。私は結衣と夫に対する背徳感でまた絶頂してしまった。

ヒツキー君を帰した後、二人にバレないように掃除をした。ヒツキー君とは連絡先を交換したので今度はヒツキー君から誘われるかもしれない。楽しみねっ♡

やはり私が彼を襲うのはまちがっている。 続

私由比ヶ浜舞衣はヒッキー君と関係を持った。夢とは違うけど、それでもあのおちんちんを味わう事が出来た。もう最高としか思えなかった。

淡泊な夫とは違うおちんちん。子宮まで届くほど太く硬いおちんちんは私を最高に気持ちよくしてくれた。

もうあのおちんちんを味わっては夫のなんて物足りない。私は機嫌よく夕食を作っていた。

「ママ。機嫌がいいな」

「きつといい事があったんだよ」

「そうなの？でも良かった、最近不機嫌な日が続いていたから」

「そうだね」

後ろで夫と結衣が話しているのが聞こえる。今、私の子宮にはヒッキー君の精子が泳いでいる。それを考えると背徳感で絶頂してしまいうそになる。

「そうだ、ママ。今週末、出張になったんだ。だから月曜の夜に帰るか」

「あ、私も週末にゆきのんの家でお泊り会する事になったら月曜に帰ってくるから」

「二人とも居ないならママも羽を伸ばそうかしら？」

これはチャンスね！週末にヒッキー君を呼んで一日中と言うのは無理かしら？確か結衣がヒッキー君はボツチだと言っていた。

そんな彼が友達の家に泊まるなんていい訳には出来ないわね。だったら半日の間でたっぷりと楽しませよう。

「やっぱりあなたでは満足出来ないわね……」

「すう……すう……」

夜、夫婦の寝室で夫はベッドで大の字になって寝ている。夫は酒に弱く、度数の高いワインを一口で酔って眠ってしまう。

ヒッキー君の子供を産むためのアリバイを作ろうとしたのだけど、夫のおちんちんは一回の射精ですっかり萎えてしまっていた。

「量も匂いも全然駄目ね……」

夫の精子はヒツキー君のと比べたら射精した量に匂いが弱かった。確かに夫は若いとは言えないけど、それでも期待していたのに残念ね。

私はヒツキー君に夫と結衣の週末の予定を連絡して週末に楽しもうとメールを送った。返事はすぐに返ってきた。彼も楽しみのようだ。

そして週末となり、夫は出張に行き、結衣はゆきのんちゃんの家にお泊りに行った。私は念のため、ヒツキー君を裏口から入れた。近所の人に見れたら面倒になるからだ。

「いらっしやい。ヒツキー君」

「ど、どうも……ま、舞衣さん」

「っ♡……ヒツキー君、んんっ♡」

「んんっ!?!」

彼に名前と呼ばれると背筋がゾクゾクしてしまった。私は我慢出来ずに彼に抱きついてキスしてしまった。彼の口の中に私の舌を入れて、歯茎を綺麗に舐め回した。

彼は突然のキスに驚いていたけど、おちんちんはしっかりと勃起させてくれた。ズボンに大きなテントを張って、苦しそうだった。

「あはっ♡ヒツキー君のおちんちん……はむっ」

「おふうー!」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるるっ」

「ま、舞衣さん!は、激しい!!」

「じゅるるるるるっ」

「ま、舞衣さん!で、射精る!」

「んんっ!?!……んんぐっ……んんぐっ」

私はズボンを脱がしてヒツキー君の勃起したおちんちを啜えた。そして顔を動かしてフェラを始めた。そしてヒツキー君は我慢出来ずに射精してしまった。

私はヒツキー君の精子を一滴も零さずに飲み干した。この味に匂いを私は求めていた。

「ヒツキー君。入れるわね」

「ま、舞衣さん……」

「ああああ♡きたあああ♡」

「のおおお!!」

私はヒツキー君をソファーに座らせたまま、跨った。そしてヒツキー君のおちんちんが私のマンコの奥まで挿入された。夫のとはやはり違う!

私の子宮が降りてくるほど、体が反応する。ヒツキー君のおちんちんは私のマンコに挿入されてさらに太く硬くなった。

「あんっ♡ああん♡うひい♡」

「ま、舞衣さん!舞衣さん!」

「ひ、ヒツキー君!もつと激しくしてっ♡」

「舞衣さん!!」

「ひやあああああ♡」

ヒツキー君は必死になって腰を動かした。その度にヒツキー君のおちんちんの先が私の子宮の入り口をノックする。それが堪らなく気持ちいい!

ヒツキー君のおちんちんが膨らんでいるのを感じる。そろそろ射精しそうなのだろう。私に抱きついて、精子を私の子宮に全て射精したいのだろう。

「いいわ、ヒツキー君。全部、ちようだいっ♡」

「ま、舞衣さん!」

「あんっ♡ああ♡うひい♡」

「舞衣さん!舞衣さん!」

「ヒツキー君っ♡」

「で、射精ます!うっ……」

「ひやあああああ♡あ、あしゅい♡」

ヒツキー君のおちんちんから射精された精子が私の子宮に溜まってきている。熱く子宮を膨らませるほどの量と夫とはやはり違った。

ヒツキー君のおちんちんは射精したと言うのにまだ硬く射精し足りないようだった。私は壁に手を付いて、マンコを開いてヒツキー君

に見せた。

「今度はヒツキー君が私を気持ちよくしてくれる?」

「は、はい!いい、行きます……」

「うひやあ♡お、奥までできたああ♡」

「舞衣さんの膣内、すごい締め付けです!」

「ヒツキー君のが奥にあたるううう♡」

ヒツキー君のおちんちんが私の子宮の入り口を何度も容赦なく叩いてくる。その度に子宮が反応して感じてしまう。

夫では絶対に届かない子宮にヒツキー君は何度も叩いてくれる。それが気持ちよくて頭が真っ白になってしまう。

「舞衣さん!舞衣さん!」

「あんっ♡んんっ♡ああんっ♡」

「舞衣さん!!」

「ああああ♡」

ヒツキー君は私の胸に手をやって、まるで牛の乳搾りのように揉んできた。それが私の体を反応させてくる。ヒツキー君の手が私の胸を気持ちよくしてくれる。

やはりヒツキー君も男の子だから胸が好きなのね。もっと強く滅茶苦茶にして欲しかった。

「ひ、ヒツキー君っ♡」

「ま、舞衣さん!また射精ます!」

「ちようだいっ♡私が全部、受け止めるからっ♡」

「射精ます!うっ……!!」

「ああああああ♡いくいくいくっ♡」

またヒツキー君の精子が私の子宮を埋め尽くしてくれる。収まりきらない精子が私のマンコとヒツキー君のおちんちんの隙間から溢れていた。

もしこのままヒツキー君のおちんちんが離れたら精子が子宮から漏れ出るだろう。それだけの量をヒツキー君は射精したのだ。

「す、少し休憩にしましょう……」

「そうね。ヒツキー君は休んでいて……はむっ」

「のおおおお!?ま、舞衣さん!?!」

「はむっ……じゆるるるるっ……じゆるるるるっ」

「ほおおお!!」

私はソフアアで休んでいるヒツキー君のおちんちんにフェラを始めた。数回射精して萎えていたヒツキー君のおちんちんは私のフェラで元気を取り戻した。

やはり若いっていいわね!私はブラを外して胸でヒツキー君のおちんちんを挟んだ。

「ま、舞衣さん!それ……」

「ふふっ……これすごいでしょ?」

「は、はい!のおおおお!!」

「えい!えい!」

左右の胸を寄せたりして、ヒツキー君のおちんちんを刺激した。ヒツキー君のおちんちんは私の胸の中で熱くなってきていた。火傷するんじゃないかと思うくらいね。

「ま、舞衣さん!で、射精ます!」

「いいわ。このまま胸の中に!」

「で、射精ます!」

「きやあ!?!……凄いわ。はむっ……じゆるるるるっ」

ヒツキー君の射精は私の胸の中から飛び出て私の顔にたくさん射精してくれた。私は思わず驚いてしまったけど、すぐにフェラを始めた。

尿道に残っている精子を全て吸い取るようにフェラをした。本当にヒツキー君のおちんちんは凄い。また硬く勃起してくれた。

「ヒツキー君。お風呂に入りましょうか」

「は、はい……」

私はヒツキー君と一緒に風呂に入った。そして彼の体を洗ってあげた。自慢の胸をヒツキー君の背中にぴったりとくっ付けてだ。

男の子はやはり胸が好きでこれだけでも興奮してくれる。ヒツキー君のおちんちんが硬く勃起してくれるのは私としても嬉しい。

「ま、舞衣さん……これ、ヤバい!」

「ふふっ……喜んでくれて嬉しいわ」

「で、射精る！」

「待って！」

「うぎっ!?ま、舞衣さん!？」

私は射精しそうなヒツキー君のおちんちんを思いつき握って射精を止めた。ヒツキー君は涙目になっていた。少し強く握り過ぎてしまった。

「射精すならここにね？」

「は、はい！」

私は背中を壁に預けて片足を上げて、マンコを広げてヒツキー君を誘導した。ヒツキー君のおちんちんが再び私の膣内に入ってきた。

「きたあああ♡」

「舞衣さん！舞衣さん！」

「あんっ♡んひい♡ああんっ♡」

「舞衣さん!!」

「ひいひい♡」

ヒツキー君の激しい腰の動きに私は軽く絶頂を繰り返していた。ヒツキー君のおちんちんが私の子宮の入り口を何度もノックしてくれる。

夫のとは長さも太さも硬さがまったく違うおちんちんが私を女にしてくれる。早くヒツキー君の子供を孕みたい！

「ヒツキー君！んんっ♡」

「んっ！ま、舞衣さん！俺、もう……!!」

「いいわ！全部、ちょうだいっ♡」

「で、射精ます!!うっ……」

「きたきたきたっ♡いくうううう♡ひつきーくんのあしゆいわっ♡」

ヒツキー君とキスしたら彼は我慢出来ずに射精してしまった。私の子宮にヒツキー君の精子が大量に泳いでいる。これで確実に孕んだでしょうね。

ヒツキー君が私から離れるとマンコからは先ほど射精された精子が溢れて出てきていた。本当に夫とは違う。

「ま、舞衣さん……俺まだ」

「ええ、いいわよ」

「はいー」

あれだけ射精したと言うのにヒツキー君のおちんちんはすぐに回復していた。そこから何回膣内射精されたのか、数えるのが面倒になった。

夕方まで私はヒツキー君に犯してもらった。最高に女として幸せな時間だった。それから数週間後、私は無事にヒツキー君の子供を孕んだ。

夫と結衣も私の妊娠を喜んでくれた。早くヒツキー君にも報告しないと。

「産んだらまた孕ましてもらわないと……ヒツキー君っ♡」

私はまたヒツキー君に孕ませてもらう未来を想像しながら家族と過ごした。早くヒツキー君に犯してもらおうために。

私を幸せにしてくれるヒツキー君との時間を今か今かと待ちながら。

やはり私が彼を襲うのはまちがっている。終

私由比ヶ浜舞衣は無事にヒツキー君との子供を産んだ。夫も結衣も祝福してくれた。でもごめんなさい二人とも。

この子はヒツキー君との子供なの。あなた、結衣……裏切る事をしごめんなさい。でも仕方ないのよ。あなたは全然、相手をしてくれないから欲求不満だったのよ。

そんな時にあんな夢を見てしまったんだから。私の性欲が爆発したのよ。でも許してくれるわよね？

「結衣も抱っこしてみろ？」

「いいの!？」

「ええ、ゆつくりね」

「う、うん……お姉ちゃんだよ」

結衣は妹を緊張しながら抱っこしていた。姉としての自覚が出てきたようだ。でも結衣、その子はあなたの好きなヒツキー君との子供なのよ。

先にヒツキー君との子供を産んでしまって、ごめんなさい。でも可愛いから許してくれるわよね？お姉ちゃんだものね。

「結衣。ヒツキー君とは最近、どうなの？」

「ヒツキーとは順調だよ！デートだってしたし、き、キスだって」

「あら順調ね」

「うん！」

私はヒツキー君にアドバイスして結衣と恋仲になるようにした。そうすれば、ヒツキー君が私に会いに来て、結衣に会いに来たと偽装出来る。

もちろん結衣にもアドバイスした。夢では結衣が素直になれないのが原因で私がヒツキー君に犯されたから。

結衣にはちゃんと素直になれるように教育し直した。おかげですっかりヒツキー君とは恋仲になった。

「あ、寝ちゃった……」

「結衣も寝ていいわよ。疲れたでしょ？」

「い、いいの？ママの方が……」

「結衣のおかげで休めたから。休んでいいわよ」

「うん……少しだけお休み……すう……」

結衣はソファーに横になってそのまま眠ってしまった。妹の世話で疲れているのもそうだけど、結衣が飲んだ飲み物に睡眠薬を入れておいた。

これからする事で起きたら面倒なのよね。さて、私は玄関で待っている彼を家に入れた。

「舞衣さん！んっ」

「んんっ♡もうヒツキー君、落ち着いて」

「は、はい」

「ふふっ♡3週間ぶりね」

「はい！」

出産して家に帰って3週間以上、ヒツキー君とは会っていない。本当はもっと早く会いたかったけど、色々と立て込んでいて無理だった。

でも今日、ついにヒツキー君のおちんちんを再び味わえる。もうマンコは楽しみで朝から濡れている。

「はむっ……じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「はふっ?!……ま、舞衣さん！」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「で、射精ます！うっ……」

私はすぐにヒツキー君のズボンを下ろして勃起したおちんちんが露にした。そしておちんちんを啜えてフェラをした。

そしてヒツキー君の久々の精子が私の口に流れ込んできた。この味に量、ドロドロ具合がもう最高だ！

「んぐっ……んぐっ……ヒツキー君っ♡」

「舞衣さん……」

「きてっ♡」

「はー！」

「うひゃ♡」

私たちは服を脱いで全裸になった。そして私は片足を上げてヒツキー君にマンコが見えるようにした。ヒツキー君は私のマンコに勃起したおちんちんを奥まで一気に挿入してきた。

私はそれだけで軽く絶頂してしまった。久々のヒツキー君のおちんちんに私のマンコが喜んでいるが分かる。

「舞衣さん！舞衣さん！」

「あんっ♡ああ♡はひい♡」

「舞衣さん！」

「ああっ♡んあっ♡ああんっ♡」

ヒツキー君も久々の私のマンコに挿入出来たのが嬉しいのか、腰の動きが激しい。容赦ない腰の動きに私の体は喜んでいた。

私のマンコがヒツキー君のおちんちんを強く締め付けた。それに反応してヒツキー君の腰の動きが激しくなる。

「舞衣さん！もう俺……!!」

「いいわっ♡射精してっ♡」

「で、射精る！うっ……」

「いぐいぐいぐっ♡ああああああ♡」

「ま、舞衣さん……」

私たちは疲れてそのままソファに倒れこんだ。ヒツキー君は私の胸に顔を埋めている。ヒツキー君のおちんちんから精子が大量に私の子宮に注がれている。

私の子宮に入りきれないほどの量が注がれている事に私は満足していた。夫ではこうはいかない。幸せを感じてしまう。

「久々だからヒツキー君のおちんちん、まだ元気ね」

「はい。あれからずっとオナ禁していたんで」

「あら嬉しいわ。私のために精子を溜め込んでいたのね」

「はい。全部、舞衣さんに射精したかったのよ」

まったくヒツキー君はどうして私を喜ばせる事を言ってくれるのだろうか？おかげで子宮が反応してしまう。私はヒツキー君から離れてお尻を彼に向けて、お尻の穴を少し広げて見せた。

「夫にも許していないの場所よ。ヒツキー君が初めてになるわ」

「ま、舞衣さん！」

「ふぎい!?!のおおお♡」

「っ、強い締め付けだ！」

ヒツキー君のおちんちんが私のお尻の穴に挿入された。夫にも許さなかった不浄な穴を娘の恋人に許してしまった。もう私は妻も母としても失格だ。

私はもう一人の女になってしまった。それも性欲を優先してしまふ。とんだ、ビッチだ。でもそれでいい、ヒツキー君を好きでいられるなら。

「動いていいのよ」

「は、はい！」

「うひい♡のおおお♡ひゃんっ♡」

「お、お尻の穴……凄いい！」

ヒツキー君の凶悪極太おちんちんが私のお尻の穴を陵辱してくる。排便のための穴でヒツキー君は興奮してくれている。おちんちんが膨らんでいるのが分かる。

そろそろ射精しそうなのだろう。もしこのままお尻の穴にヒツキー君の熱い精子を注がれたら私はさらに最低の妻で母になってしまう。

「お願いっ♡このままお尻の穴にっ♡」

「舞衣さん！」

「ああああああ♡いぐううう♡」

「射精る射精る……」

「あしゅい♡」

ヒツキー君の熱い精子が私のお尻の穴に注がれている。口もマンコもアナルも私の全てはヒツキー君のおちんちんで汚された。でも最高に満たされた気分になった。

お尻の穴からヒツキー君のおちんちんが抜けるとお尻の穴はパクパクと呼吸しているように動いた。

そして穴からは先ほどヒツキー君が射精した精子が逆流してきていた。お尻の穴が上手く閉まらなくなってしまった。

「ま、舞衣さん……」

「ヒツキー君。はむっ……じゅるるるるっ」

「のおおおお!!ま、舞衣さん!」

「じゅるるるるるっ……じゅるるるるるっ」

「で、射精る!」

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

私はヒツキー君のおちんちんをお掃除フェラした。ヒツキー君は我慢出来ずにまた射精した。だけど、匂いに量と薄れる事はなかった。

男性としてこれほど理想な人はいるだろうか?女の性欲を完璧に満たしてくれる男性こそ女の幸せを感じさせてくれる。

「ヒツキー君。お風呂に入りましょう」

「はい。そうですね」

私はヒツキー君を連れて風呂場に入った。私は体にボディソープを付けて体をヒツキー君に密着させた。特に胸でヒツキー君の体を隅々まで洗った。

するとヒツキー君のおちんちんは元気を取り戻した。若いっていわね。夫なら4〜7日ほど掛かるのに。

「どう?気持ちいいかしら?」

「は、はい!気持ちいいです!」

「そうね。おちんちんもすっかり元気になったわね」

「す、すいません……」

「怒っているのではないわ。嬉しいのよ。ヒツキー君……今度は私が気持ちよくしてあげるわ」

「ま、舞衣さん……」

私は板状の浮き輪の上にヒツキー君を寝かせて、ローションを取り出して体に纏わせた。そしてヒツキー君に覆いかぶさるように密着した。

体を前後に動かしてヒツキー君を刺激した。ヒツキー君のおちんちんは今にも爆破しそうなくらいビクビクと動いている。

「ま、舞衣さん!き、気持ちいいです!」

「嬉しいわ。これならどうかしら？」

「はひううう!!」

「これがいいのね」

私はヒツキー君のおちんちんを胸で挟んだ。私の胸の感触が気持ちいいのか、ヒツキー君の腰が少し浮いている。おちんちんも脈打っている。

「で、射精るー!」

「きやあ!?……あれだけ射精したのにまだこれだけ……」

いきなりのヒツキー君の射精に驚いてしまった。射精するだけ気持ち良かったのね。私はヒツキー君の上に跨る様に立った。

興奮してか、股からは愛液がダラダラと垂れてヒツキー君のおちんちんに掛かってしまった。そして私は腰を一気に下ろしておちんちんをマンコに挿入した。

「ひゃああああああ♡」

「ま、舞衣さん。いきなり過ぎです!」

「ごめんなさいっ♡でも我慢なんて出来るわけないでしょ♡」

「舞衣さん!」

「あんっ♡んんっ♡ひいいいい♡」

ヒツキー君のおちんちんが気持ちいいのか、腰が勝手に動いてしまう。早くヒツキー君を射精させて受精したいと思ってしまう。

だから仕方ない事なのよ。これは女としての本能なのよ。だから仕方ない事なのよ。

「ま、舞衣さん!俺、もう……」

「全部、ちょうだいっ♡んんっ♡」

「んんっ!!」

私がキスした事でヒツキー君は我慢出来ずに射精してしまった。また子宮にヒツキー君の熱い大量の精子が注がれた。二人も妊娠したからわかる。

今、私の卵子とヒツキー君の精子がくっ付いた。10ヶ月には結衣の妹か弟に会えるわ。ヒツキー君は疲れて寝てしまった。

流星にあれだけ連続で射精すれば、疲れるわよね。まだ昼前だから

夕方、ヒツキー君が帰る前にもう一度、大量に射精してもらいましょう。

「舞衣さん……」

「ヒツキー君……」

「大好きです」

「私もよ。んっ♡」

次の日も朝からヒツキー君に家に来てもらい大量に精子を注いで貰った。女としての満たされて最高の2日となった。夫が帰って着た時にアリバイ作りをしたので、また自分の子供だと勘違いするだろう。

そして10ヶ月後に結衣の弟が誕生した。もう一人くらい孕んでも良かったけど、これ以上は夫に感づかれるかもしれないので止めた。

「舞衣さん！舞衣さん！」

「あんっ♡ヒツキー君」

「舞衣さん！」

「ヒツキー君っ♡」

でも定期的に私はヒツキー君の腰の上で乱れている。子供は作っていないけど、ヒツキー君の性欲は結衣だけでは発散出来ないから。やはり彼を襲ったのはまちがいでなかったのね。私は今、最高に女として満たされている。

雪ノ下姫乃編

やはり社長夫人に逆レイプされるのはまちがっている。

うつす、比企谷八幡だ。俺は今、病室の天井をぼんやりと見ていた。このベットで過ごす様になって早数週間になる。

どうして病室に居るかという俺が入学式の日に事故に遭ったからだ。入学式に浮かれ早めに家を出たのが運のツキだった。

犬の散歩をしていたと思われる地味に目の女の子の事を眺めているとその犬の首輪が外れて道路に飛び出した。

俺は何も考えずに飛び出し気づいた時には犬を抱えていた。そしてそのまま黒色の高級車に轢かれた。

気がつけば病院のベットで目が覚めた。

お見舞いに来た小町の一言は「何を馬鹿なことしているの？」だった。怪我をした兄に対して一言目がそれなの？お兄ちゃん、悲しいよ。

そして両親は特に心配していなかった。親父に関しては死ななかつたのが残念がっていた。息子にそんな事を言う奴は本当に親か？まあ、俺も別に両親に心配されたくは無い。

俺には興味ゼロだからな。

それと小町から聞いたがこの病院の個室は車の持ち主が全額負担してくれるそうだ。その時、俺は思った。これは口止め料だと。

あの時、俺を轢いた車には事故にあつた事が周りに知られると困る人物が居るようだ。運転手か同乗者かのどちらかだろう。

まあ、俺にはどうでもいいけど。病院の個室って結構な金額が必要だからな。それを全額負担してくれるのだ。文句を言える立場ではない。

それにしてもあの時の犬の飼い主は来ないのか？あれから数週間経っているのに一行に来た気配が無い。来た時には文句を言ってるつもりだ。

首輪は丈夫なのを買えつてな。それにしても病院の個室のベットって最高に気持ちがいいな。フカフカで夢心地だ。

そんな人が最高の気分な時に病室の扉が開いた。はて？一体、誰がこんな目の腐ったボツチの見舞いに来るんだ？

小町は昨日来たし両親が来るわけ無い。では誰だ？

視線を扉に向けてみるとそこには和服の美人が経っていた。どこか鋭い刃物を思わせるオーラを出しているように見えた。

ホントに誰!?! こんな美人に知り合いはいないぞ!!もしかして美人局と言うやつか？親父が口煩く言っていたな。

俺を騙した所で盗れる金などが知れていると言うのに。

「……比企谷八幡さんですね？」

「は、はひ!?!」

「……ぷっ……」

いきなり名前を呼ばれたものだから噛んでしまった!?!でもこの美人は笑った。笑ったから少しオーラが和らいだ気がした。

和服美人は俺のベット前に椅子を置くとそこに座った。動作一つ一つが綺麗で魅入ってしまった。

「まず私は雪ノ下姫乃と言います」

「えつと……知っているようですけど。比企谷八幡です」

「ええ、知っています。この度は貴方に申し訳ない事をしてしまいましたね。分かっているともいますけど」

「ええ。ここは口止め料なんですよね？飛び出したのは俺ですし全額負担してもらっているの俺は喋ったりしません」

実際、喋った所で俺にメリツトがあるわけでもないしな。それを聞いて雪ノ下さんは満足気な顔をした。ここに来たのは確かめるためだったのか。

俺が喋る人間かどうかを。

「そうですか。ですが、しっかりとした証拠がある方がいいですね」

「証拠と言っても……」

証拠も何も言葉以外無い。そもそも証明すら出来ない。すると雪ノ下さんが俺に近付いて来た。爽やかな香水の匂いが鼻から脳に抜

けるのが分かる。

もう雪ノ下さんの顔がくっ付いて可笑しくない距離だ。マジでヤバいんだけど!? どうヤバいかと言うとチンコが勃起した。

こんな美人の匂いを嗅いでしまったらそうなっちゃうぜ!

「ふふっ……やはり男の子ですね。んっ……♡」

「んんっ!」

俺は今、キスをされた。ファーストキスはレモンの味とか言った奴! 出てこい!! 全然そんな味じゃないしそれどころか頭が痺れるぞ!!

「ぶはあ……ふふっ……こんなおばさんとのキスは嫌だったかしら?」

「あ、いえ……そのファーストキスでした」

「あら、そうだったのね。それで私とのキスはどうだったかしら?」

「そ、その……頭が痺れました」

俺がそう言うのと雪ノ下さんは満面の笑みを浮かべた。だが、俺には獲物を狙う大型の肉食獣に見えた。

雪ノ下さんはいきなり布団を退かし俺のズボンを剥ぎ取った。

「ちよ!?! 雪ノ下さん!!」

「あらあら、もうこんなに大きく……♡歳のわりに立派のものを持っているのね比企谷さんは♡♡」

そう俺のチンコはデカイのだ。その事で中学の時からかわれた。だからあまり良い思いではない。

それなのに雪ノ下さんは俺のチンコの先端を優しく撫でていた。

それが刺激になって更に俺のチンコは立派にそそり立った。

「ふふっ……素敵ね。はむっ……♡」

「おおおおお!」

雪ノ下さんがいきなり俺のチンコを口に咥えた。こ、これがフェラチオか!! 口の生暖かさが最高に気持ちいい!!

くちやくちや……ぺちやくちや……くちやぺちや……

雪ノ下さんが顔を上下させる度に厭らしい水音が病室に響きいていた。そして俺の中から熱い何か昇ってきた。

俺は雪ノ下さんの頭を抑えてチンコを全部咥えさせた。そしてそ

の時は来た。

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるる……

「おおおお……!!」

「んんっ!」

これが射精か！精子が俺から射精する度に頭に電気が走っているように痺れる。雪ノ下さんがチンコから顔を離すと精子を零さないように手を添えていた。

「んんっ……♡んっ……♡はあ……♡ドロドロのプリプリで喉に絡みつく濃い精子……お粗末さまです♡♡」

の、飲んだ?!しかも食レポみたいな事を言っているよ。それにしても気持ちいい射精だったな。フェラがこれほど気持ちいいとは知らなかった。

オナニーじゃ到底味わえない感覚だ。

「あら……あれだけ射精したのにまだ固いままなんて若いって良いわね」

「も、もう辞めてください!!」

「辞める?どうして?こんなに気持ちよくて素敵な事を」

「こ、これって浮気じゃ……」

いや浮気じゃ済まされない。これはレイプ……男女立場が逆だから逆レイプだ。雪ノ下さんは雪ノ下建設の社長の妻だ。

そんな人が親子ほど離れている俺にこんな事をすれば大問題だ。

「それならもう気持ちいい事はしなたくない?でも本当にそうかしら?」

「ど、どういう意味ですか?」

「貴方の心はどうなのかしら?もっと気持ちよくなりたくないんじゃないの?」

「そ、それは……」

確かに雪ノ下さんの言うとおり気持ちよくはなりたくない。でもこんなの間違っている。これ以上されたら頭が可笑しくなる。

その前に止めるんだ。否定するんだ。

「ふふっ……男性はこれが好きよね?」

「なっ!？」

俺が止めようとした時、雪ノ下さんは和服の胸の所を上手い具合に脱ぎ乳を露にした。雪ノ下さんの胸は大きかった。巨乳だった。和服で抑えられた巨乳が開放されてぶるんつと飛び出した。

そしてその巨乳で俺のチンコを挟んだ。こ、これがパイズリか!!人肌で暖かくそして柔らかい。それをチンコ全体から感じる。

こんな事されたらもう我慢出来ない。後の事なんて知るか!!

「ゆ、雪ノ下さん!も、もう我慢出来ないんです!!ど、童貞卒業させてください!!」

「よく言えましたね比企谷さん……いえ、八幡さん。貴方の童貞は私が貰いましょう♡」

雪ノ下さんはベットに上がってきて股を開きゆつくりと腰を落としてきた。俺はそれをただ黙ってみていた。もう少して童貞が卒業出来る!!

そしてその時はついに来た!!!

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「おおおおお!!」

「八幡さんの童貞、確かにいただきました。どうですか?私の膣内は?」

「す、すごく温かく気持ちいいです!!頭が真っ白になりそうです!!」

「そうですか。それは良かったですね、ですがこれからですよ?」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

雪ノ下さんが腰を上下される度に頭に電気が流れているようだ。俺は今、SEXしているんだな。それ以外の事なんてもうどうでもいい気がしてきた。

ま、不味い。もう射精しそうだ。

「ゆ、雪ノ下さん。もう射精そうです!」

「いいですよ。このまま膣内に射精しても。それと私の事は名前です—

— 姫乃で構いませんよ」

「ひ、姫乃さん!もう射精ます!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるるっ……

「おおおおお!!」

「い、いくうううう♡♡素敵でしたよ八幡さん」

そう言つて姫乃さんは俺の頭を優しく撫でてくれた。まるで母親のように。マンコに思いつき射精したのか頭が痺れている。

もっともつと気持ちいい事がしたい。心を満たしたい。

「それに二回も射精したのにまだ元気がいい。もつと気持ちいい事したいですか?」

「は、はい。したいです」

「ですけど、少し元気が足りないみたいです」

確かに二回も射精して少し落ち着いたのか先ほどよりチンコは固くない。

「これならどうですか?」

「おおお!!」

姫乃さんがいきなり俺の尻に指を突っ込んできた。細くて綺麗な指が不浄な穴をいじめている。しかも二本だ。

無理やり広げられて腸を撫でるだけではなく金玉も撫でた。前立腺攻めと言うやつか!?

でも嫌いじゃないな。童貞だけではなく不浄な穴までも姫乃さんに捧げる事が出来た。嬉しい。俺はそれを感じていた。

「ふふっ……これでいいでしょう。さあ八幡さん、続きをしましょう」

「は、はい。姫乃さん!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずず……ぱんっ!!

姫乃さんの腰使いは凄いの一言に限る。腰が動く度に胸も揺れてエロい!!頭の中が真っ白で目の前の事しか考えられない。

「いいですよ八幡さん。もしかた射精しそうに言ったださいね」

「は、はい!実は言うともう射精そうです!!」

「いいですよ。んんっ♡」

「んんっ!」

姫乃さんがキスしてきた。それだけではない。口を強引に開けて唾液を流し込んだ。何だろう？唾液ってこんなに甘かったけ？

「うぐっ……ひ、姫乃さん！もう!!」

「いいわ八幡さん。全部、私の膣内に射精しない」

「はいー!」

びゅるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「あああああ!!」

「いくうううう♡♡♡」

また膣内に射精してしまった。気持ち良かった。姫乃さんが俺から離れた。

「ふふっ……とても良かったですよ八幡さん」

「お、俺も気持ち良かったです……」

姫乃さんはまた俺の頭を撫でてくれた。この人が母親だったらいいなと思うな。姫乃さんは何も言わずに病室から出て行った。

その時の笑顔は忘れられない。またしてももらえないだろうか？

もしかしたらまた来てくれるかもしれない。また尻とか耳とか乳首とかを責めてくれないだろうか？

完全にMに覚醒した俺。次はどんな責めがあるかな？次が楽しみでしようがない。早く来てくれないかな。

やはり社長夫人の火遊びに付き合うのはまちがっている。

俺は今、相当機嫌が悪い。姫乃さんに逆レイプされて童貞を卒業したのは良かった。でもそれから姫乃さんは来なかった。一週間もだ。その間、ずっとオナ禁状態だった。何度もオナニーしようとした。でも途中までは気持ちよかったが、射精までは行かなかった。

やはり姫乃さんに責めてもらわないと気持ちよくなれない。いたい姫乃さんはどうしたんだ？何か用事で来れなかったの？

あの人に命令されたい。あの人の手で胸でマンコで思いつきり射精したい。

それとこれは話が変わるが今日、ついに俺は退院する事ができた。三週間は短かった。もつと入院していたかった。これだけの期間、学校に行かなかったのだ。

学校ではすでにグループが出来上がっているだろうな。これでポッチ生活確定だな。それにしても犬の飼い主は来なかったな。文句が言えなかった。

まあ、いいか。これから会うとは限らないしな。向こうもそう思っ

て来なかったのかも知れない。
とりあえず病院生活はこれで終わりだ。帰ったら小町に言って撮り溜めてもらったプリキュアを見よう。今日は木曜で学校は来週からだ。

病院で出て少し歩いていると俺の横に一台の車が止まった。

「こんにちわ。八幡さん」

「ひ、姫乃さん!？」

車から顔を出したのは雪ノ下姫乃さんだった。こないだ来た時とは服装と髪型が違ったので誰だか一瞬、判らなかつた。

姫乃さんは手招きしてきた。車に乗れと言う事だろう。俺は誘われるがまま車に乗った。この際だから姫乃さんに聞いてみるか。

「ひ、姫乃さん。聞いてもいいですか？」

「何かしら?」

「どうしてあれから来てくれなかったんですか?」

「ごめんなさい。あの日から会社の方が色々あつてバタバタしていたもので」

「そうですか……」

まあ、あの雪ノ下建設だからな。てか、姫乃さんはどこに行こうとしているんだ?俺の家ではないよな?反対方向だしな。

「……あのく姫乃さん。どこに向かっているんですか?俺の家では無いですよね?」

「ええ。八幡さん、私の遊びに付き合ってもらえますか?」

「……………はい?」

俺は姫乃さんに連れられるがまま、ラブホに連れてこられた。ラブホに。ここ、大事だからな。それにしてもラブホなんて初めて入ったよ。

しつかりと作られているんだな。ちよつとびつくりだ。

「八幡さん。んんっ……」

「んんっ!」

いきなり姫乃さんにベッドに押し倒されて唇を重ねられた。姫乃さんの味が匂いが感触が一気に頭に流れ込んでくる。

この痺れる感じが最高に気持ちいい。

「ぶはあ……ふふっ……八幡さんたらキスしただけで勃起していますよ?そんなに気持ち良かったのですか?」

「はあ……はあ……は、はい。姫乃さんの唇、最高です」

「それは良かったわ。ならもつと味合わせて上げましょう。んんっ」

「んんっ……」

ぺちやくちや……ちゅぱっ……

俺は姫乃さんと更に唇を重ねた。さらに舌をお互いに絡み合わせ
てさらに厭らしい水音を立てた。唇を合わせるたびに頭に電気が
走っている。

「んんっ!？」

キスしていると姫乃さんがいきなり俺の勃起したチンコをズボン
越しに触ってきた。しかも優しく撫でるようにだ。

それが気持ち良くてさらに勃起してズボンの中で苦しい。

「そろそろですね……」

「姫乃さん……もう俺、限界です。早く射精させてください!!」

「いいですよ。ただしまずはおれからです」

姫乃さんは上着とスカートを脱ぎ捨てブラとパンツだけの姿に
なった。正直、この人が俺の母ちゃんやんと歳が近いとは思えなかつた。
大きな胸に引き締まった括れ整ったお尻、自分の母ちゃんと比べる
とそれが分かる。

俺はズボンを降ろして勃起したチンコを出した。もういつ射精し
ても可笑しくなくらい勃起している。

「八幡さんはそのままベットに座っていて結構ですよ……」

「おおおおお……」

姫乃さんが胸で俺のチンコを挟んだ。柔らかく温かい人肌で挟ま
れる経験が少ないからとても不思議な感覚だ。

すると姫乃さんは胸を上下し始めた。

「どうですか？八幡さん。気持ちいいですか？」

「は、はい。すごく気持ちいいです。今にも射精しそうです……」

「それは嬉しいですね。こんなおばさんの胸で気持ちよくなってくれ
て。もっと気持ちよくして上げますね。はむっ……」

「おおおおお……」

姫乃さんがまた胸で挟みながら口に咥えた。その上、舌をチンコに
絡めてきて下半身が痺れてきた。

むにゅ……むにゅ……ぺちやくちや……

「あああああ……」

本格的にこれはヤバイ!!で、射精そうだ。俺は姫乃さんの頭をしつ

かりと掴みそのままチンコを全部飲み込ませた。そして射精した。

びゅるるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「んんっ!?……んんっ♡……うつくんっ……ふふっ……♡やはり若

いですね。濃厚な精子で喉に絡みつく……とっても美味でした♡」

「そ、それは……良かったです……」

き、気持ちいい射精だったぜ。姫乃さんの顔にべつとりと精子が付いている。それを姫乃さんは綺麗に手で掬って口に含んだ。

その顔はなんて言うか小型の草食動物を狙う大型の肉食動物に見えた。

「ええ。ですが、萎えてしまいましたね……しかしこれで元気になるでしょう!!」

「おおおおお!!」

き、キタアアア!!姫乃さんのアナル攻め!!人差し指が俺のお尻に入ってきた!!そして直腸から金玉の裏側を爪で軽く搔いてきた。

先ほどとは違う痺れが頭に流れ込んできた。すると俺のチンコは元気良く勃起した。

「ふふっ……元気になりましたね」

「ひ、姫乃さん!?もう射精そうです!!」

「まだ駄目です!!」

「うぎいい!!」

アナル攻めで射精しそうな所、姫乃さんが俺のチンコを思いっきり握ってきた。あまりの痛みに射精寸前だったのに止まってしまった。

「ど、どうして……」

「次の射精はこちらにですよ八幡さん」

姫乃さんはブラとパンツを脱いで俺の上に跨った。マンコからは愛液がポタポタと垂れていた。そのまま姫乃さんは腰を降ろしてマンコに俺のチンコを挿入した。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「おおおおお……!!」

「んんっ♡大きく固くて八幡さんのはやはり素敵ですよ♡♡」

「そ、それは良かったです。ひ、姫乃さんに喜んで……もらって俺は嬉

しいです!!」

「ふふっ……」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「いいですよ八幡さん♡♡もつ♡もつと激しく腰を動かすのです♡そして濃くてドロドロの精子を私の子宮に残さず射精しなさい!!」

「は、はい!!」

俺は姫乃さんに言われるがまま腰を上下した。腰を動かすたびに姫乃さんの巨乳が上に下に揺れて大変楽しませてもらった。

巨乳が揺れるだけで興奮するな。それにすごく気持ちいい。もう他の事なんてどうでもいい。この時間が永遠に続けばいいと思うけど、そろそろ限界だ!!

「ひ、姫乃さん!もうで、射精そうです!!」

「いいですよ。そのまま全部射精しなさい!!」

「は、はい!」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!」

姫乃さんのマンコはすごい締め付けてくる。それに中が蠢いて俺のチンコをさらに刺激してくる!げ、限界だ!?

「で、射精る!!」

びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるびゅるる……

「い、いくうううう♡♡……本当に八幡さんの射精は勢いがすごいですね。ふふっ……とても気持ち良かったですよ♡それによく頑張りましたね」

姫乃さんが笑って俺の頭を撫でてくれる。そして姫乃さんはゆっくりと腰を上げてマンコからチンコを抜いた。

「ずずずずずっ……ぽこっ……ぽこっ……」

マンコからチンコを抜くと先ほど射精した精子が垂れてきた。あれだけ射精したから俺のチンコは萎えてしまっている。

もつと姫乃さんに射精したかったんだけどな……。

「す、すいません姫乃さん。回復するまで待ってくれませんか?」

「ええ。待つのは構いませんが、私がすぐに勃起させてあげますよ」
「……え？」

姫乃さんがいきなり俺の足を持ってお尻の穴が上に向く体勢にした。これはこれで結構、屈辱的な気分になる。

すると姫乃さんはラブホに置いてあったローションを手にとると俺にお尻に目掛けて垂らしてきた。

「冷っ!?……ひ、姫乃さん！冷たいです!!」

「あらごめんなさい。冷たいとは思わなかったわ。次は温かくして使った方がいいわね。それと後はこれを入れるだけ」

「ひ、姫乃さん?……おおおお!?」

姫乃さんがローションの次に俺のお尻に入れたのはピンクローターだった。ローションは俺のお尻にローターを挿入しやすくするためだったのか!!

そして姫乃さんはローターの電源を入れた。

ヴヴヴっ……ヴヴヴっ……

「のおおおおお!?」

ローターの振動が腸内に響く。その影響か先ほどまで萎えていた俺のチンコは立派に勃起した。ローターの振動が金玉を刺激しているのが分かる。

ああ、駄目だ。頭の中が本格的に可笑しくなりそうだ。だけど、姫乃さんはそんな俺などお構いなしにまた俺の上に跨った。そしてかん発いれずに腰を下ろしてマンコにチンコを挿入した。

ずずずずっ……ぱんっ!!

「いいいいいい♡♡オモチャを使うのは初めてですけど、いい具合ですね♡八幡さんはどうですか?」

「き、きもちいい、です!!もつと、もつと振動を、強くして、ください!!!」

「ええ。いいですよ。では最強に……」

姫乃さんはローターのリモコンの振動の強弱スイッチを弱から強に切り替えた。その振動は先ほどとは比べ物にならないかった。

ヴヴヴヴヴっ……ヴヴヴヴヴっ……ヴヴヴヴヴっ……

「のおおおおおお!!??」

「い、いいですよ八幡さん♡♡先ほどより腰が激しくなっています。さあ、射精すのです。だらしのないその顔で私の子宮に♡♡」

「で、射精ますうううう!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「また……いくうううう♡♡」

「あああああ……」

「はあ♡……はあ♡……はあ♡……」

俺の射精で姫乃さんはイッたようだった。それはとても気分がいい。それに姫乃さんが前のめりに倒れてきて胸が押し付けられてその温もりが俺をさらに気持ちよくさせる。

「……さて、八幡さん。もつと二人で気持ちいい気分になりましょう」

「………は、はい。姫乃さん」

「うふふっ……やはり見込みどおりの子でしたね」

その後の事はあまり覚えていない。だけど、俺は姫乃さんのマンコに十回は射精したと思う。そして朝が来て俺は姫乃さんに送られて家に帰った。

家に入る前に姫乃さんとは次も気持ちいい事をする約束をした。次が楽しみだ。

やはり社長夫人に会いに行くのはまちがっている。

うつつす。比企谷八幡だ。姫乃さんとのただならぬ関係をもって一年が過ぎようとしていた。俺は二年に進級してそこで現国の授業で『一年を振り返って』という作文でリア充爆発しろなど書いた所為で現国の平塚先生に訳の分からない部活『奉仕部』なる部活に勝手に入れられた。

まあ、そこまでは別にいい。問題はそこには姫乃さんの娘である雪ノ下雪乃が居たことだ。正直、気まずい。

ただらなぬ関係を持っている女性の娘と二人つきりとかどんな拷問だよ!? まあ、雪ノ下は俺と姫乃さんの関係を知らないからいいけど、うっかりボロが出そうで怖いぜ。

「……比企谷君。先ほどから私の事を視姦するのを辞めなさい。警察に突き出すわよ?」

「いや、どうして俺がお前を視姦しなくちゃいけないんだよ。てか、どっただけ自分がモテると勘違いしているんだ?」

「あら私はモテるのは当たり前じゃない。私ほど完璧美少女は他には居ないわよ」

「……いや、探せばいるだろ。お前より性格がいい美少女くらい……」
俺が奉仕部に強制入部させられて数日はこんな会話が続けている。ハッキリ言って不毛だ。何が悲しくてこんな奴と一緒に空間に居ないといけないんだ?」

それは作文の事は自分でも少しはふざけていると思ったよ。でもそれでどうしてここに来ないといけないんだ?

早く姫乃さんにいっぱい射精してもらいたい。この一年、俺は姫乃さんにとことん開発された。

ローターでのお尻開発にビルとビルの間でのバレるかバレないかギリギリの射精やろうそくや洗濯ばさみなどのかかなり痛いプレイもやってきた。

そう言えば、最近マンションに買ったと言っていたな。次からはそこで会う事になっている。楽しみで仕方ない。

そんな姫乃さんとの楽しいプレイを思い出していると雪ノ下がこつちをもの凄いい怪しい目で見してきた。

「……その卑しい顔をこつちに向けしないで妊娠してしまいそうだから……」

「いや、顔だけで妊娠するか!?それよか、顔を向けただけで妊娠すると本気でおもっているのか?だとしたら頭の中、大丈夫か?」

「性知識くらい人並みにあるわ。それくらい知っているわ」

イチイチむかつく奴だな!!本当に姫乃さんの娘なのか疑いたくなる。その時だった。雪ノ下のスマホが鳴った。

画面を見た雪ノ下は一瞬、嫌そうな顔をしたが、電話はただたようですぐに出た。

「はい。雪乃です。………はい。分かりました。比企谷君、今日の部活は終わりよ。すぐに部室から出て行きなさい。でないと警察に変態として突き出すわよ」

「部室を出ないだけで変態扱いかよ……まあ、終わるならなんでもいいけど」

その後、雪ノ下とは何も喋らずに学校を後にした。そして姫乃さんが言っていたマンションに向かう事にした。

「……これは凄いな」

姫乃さんが指定したマンションはこの辺で一番の高級マンションだった。俺は入り口のパネルに番号を打ち込み姫乃さん呼び出した。

『はい。八幡さん、いらっしやい。そのまま上がってきてください』
「はい。分かりました」

俺は姫乃さんの部屋に直行した。行くのが楽しくてしかたなかったからだ。そして部屋の前に着くと同時に扉が開いた。

「……え？」

出てきたのはもちろん姫乃さんだけど、その格好に俺は思わず驚いてしまった。何故なら白いTシャツ一枚しか着ていなかったからだ。サイズはどう見ても女性用ではなく男性用だった。服がダボダボになっている。

「ひ、姫乃さん。その格好は……」

「これですか？この部屋は私のプライベートのために借りたのですよ。だから私がどんな格好していいという方がいいじゃないですか。それとも八幡さんはこの格好は嫌いですか？」

「い、いえ……凄く好きです」

俺がそれを言うと姫乃さんが俺の手を引いて部屋の中に連れ込んだ。扉を閉めた途端、姫乃さんは唇を重ねてきた。

「んんっ♡……んんっ♡……」

「んんっ!?!……んんっ……」

いきなり激しいキスに身体が上手い具合に動かなかった。姫乃さんとキスをするとう頭に電気が走るからだろうか？それとチンコが勃起した。

それを姫乃さんが優しく撫でてくるから余計に動けない。

「ふふっ……八幡さんは本当に素直ないい子ですね。もうこんなに固くして……そんなに待ちどうしかったですか？」

「は、はい……それはもう待ちました。早く俺を気持ちよくしてください姫乃さん!!」

「ええ、もちろんですよ。さあ、こちらに」

俺は姫乃さんに手を引かれて寝室と思われる場所に連れ込まれた。そしていきなり俺の服をひん剥いた。

ちゅっ……れろっ……ちゅんっ……

「おおおおお……!?!ひ、姫乃さん！そ、それヤバいです!!」

「ふふっ……乳首が立っていますよ」

姫乃さんは俺から服を脱がすといきなり乳首を舐めてきた。舐められるたび、ゾクゾクと気持ちいい感覚が頭に流れ込んでくる。

さらに続けてズボンを下ろして勃起したチンコを握り締めてきた。

絶妙な力加減で今にも射精しそうだ。

乳首の刺激とチンコの刺激が混ざり合って限界を迎えた。

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるる……

「ああああ……」

「あらあら……こんなにも射精してよほど気持ち良かったようですね八幡さん。でもまだ私が気持ちよくなっていないのですよ？さあ私を気持ちよくしてください」

「は、はい……」

姫乃さんは服を脱ぐとベットに横になり自分の手でマンコを広げて見せた。マンコからは愛液がタラタラと垂れていた。

俺はそんなマンコを舌で綺麗にする様に舐めた。

れろっ……れろっ……ぺちやつ……くちやつ……

「んっ♡……いいですよ八幡さん♡♡もつとクリトリスや膣内を舐めて私を気持ちよくするのでですよ♡」

「は、はいー」

ぺちやくちやつ……れろれろっ……

「んんっ♡……そうです。舐めると同時にしっかりと自分の舌で私の愛液の味を味わうのです。そしたらこの後でもつと気持ちよくしてあげますよ八幡さん♡♡」

「が、頑張ります!!」

俺は姫乃さんからのご褒美を期待してさらに舐める速度を早くした。

「んんっ♡♡♡」

俺が姫乃さんのマンコを舐めるたびに姫乃さんが感じてくれているようになんだか嬉しい。感じている姫乃さんを見れたのでさらに頑張れる!!

「はあ♡……はあ♡……はあ♡……とつても気持ち良かったですよ八幡さん。こんなにも気持ちよくなれたのは八幡さんの頑張りのおかげですね♡」

「あ、ありがとうございます。そ、それで姫乃さん……」

「ええ、分かっていますよ。さあ、ベットに横になって」

「は、はい!!」

俺がベツトに横になると姫乃さんが俺に跨ってきた。マンコから愛液を垂らしながら俺を獲物を狙うライオンのような顔で見してきた。ゾクゾクして興奮します!!早く姫乃さん、俺を犯してください!!

「ではいきますよ……」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「おおおおお……!!」

「あああああ……♡♡」

やはり姫乃さんのマンコは凄く気持ちがいい!!これがいい、これで俺は気持ちよくなれる!!

「ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!」

姫乃さんが腰を上下させる度に胸もそれに合わせて動いてとてもエロい!!もつと長持ちさせたいが、もう限界だ!!

「ひ、姫乃さん!俺、もう限界です!!」

「いいですよ。思いつきり私の膣内に射精しなさい」

「は、はい!で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ

……

「い、いくうううう♡♡♡」

「あああああ……!!」

「……ふふっ……今回もいい射精でしたよ八幡さん。膣内が火傷しそうですね」

姫乃さんは自分のお腹——子宮辺りを笑顔で撫でていた。

今回も気持ちよく姫乃さんのマンコに射精したが、今回も気持ち良かった。姫乃さんは俺の頭を撫でてくれるのでそれも気持ちがいい。それに姫乃さんも気持ちよくなってくれたようで俺は気分がいい。それに姫乃さんが胸を俺に押し付けてきるのでその感触がとても好きだ。

「はあ……はあ……はあ……ひ、姫乃さん。俺、まだ……」

「ええ、私もまだ気持ちよくなりたいですからね。でも……」

姫乃さんは俺の上からどくと俺の萎えたチンコを見て残念そうな顔をした。寝室から出て行った。でもすぐに戻ってきた。

そして手にはローターとローションが握られていた。これから起こる事に俺は期待して手で足を掴んでお尻を上に向くようにした。

「ふふっ……八幡さんは本当にお尻をいじめられるのが好きなようですね？」

「は、はい。お尻をいじめられると凄く感じるんです。で、ですから早く……!!」

「ええ、行きますよ」

姫乃さんはローターを俺のお尻に入れた。本来は出すだけの穴だが、そこに異物を入れられると凄く気持ちがいい！

姫乃さんはローターのスイッチを入れた。振動がまるで全身を刺激しているかのように感じてしまう。

ヴァアヴァア……

「おおおおお!!?……これ、すごっ!」

「あらあら八幡さん。もうすっかり元気になって、素敵ですよ」

先ほどまで萎えていた俺のチンコはすっかり元気を取り戻してそり立っていた。姫乃さんはまた俺に跨り挿入させてくれた。

ずずずずず……ぱんっ!!

「あああああ♡♡」

「のおおおお!!」

ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!

姫乃さんは容赦ない腰の動きだ。それにお尻にあるローターとの刺激で頭が可笑しくなりそうだ。もう限界だ。

「で、射精る!!!」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるびゆるるるっ

……

「いいいいいい♡♡はあ……はあ……はあ……八幡さん。気持ち良かったですか？」

「は、はい……」

射精で出したのにまだ射精したと思う。それに姫乃さんの膣内が俺の精子を全部搾り取ろうと蠢いている。射精したばかりなのにまた射精してしまう。

「ま、また射精るううう!!?」

びゆるるるるびゆるるるるっ……

「えっ……ひゃああああ♡♡♡」

続けざまの射精は姫乃さんにとって不意打ちだったようで可愛い悲鳴が聞けた。姫乃さんは前のめりに倒れてきた。

「はあ……♡はあ……♡は、八幡さん」

「す、すいません……」

姫乃さんの顔はもの凄い不満顔になっていた。先ほどまで自分が主導権を握っていたのに不意打ちとはいえ行かさせたのが気に入らないらしい。

「……どうやら八幡さんにはさらにキツイお仕置きをする必要があるようですね」

「は、はい」

その後、俺は姫乃さんに朝まで射精させられた。途中で栄養ドリンクなどで元気を取り戻させてだ。

でも最高に気持ち良かった。そしてまた会おう約束をして俺はマンションを後にした。

次はどんな事してもらおうか今から楽しみだ。

やはり社長夫人とS Mクラブに行くのはまちがっている。

うつつ。比企谷八幡だ。俺はすっかり姫乃さんに調教されてMになった。それもドが付くほどのMだ!!

毎回、姫乃さんの調教は素晴らしい!俺の気持ちいい所を丁度いい力加減で攻めてくるのですぐに射精してしまう。

姫乃さんも俺にストレスをぶつけている様で発散になっているよ。うだ。どうも下の方の娘が反抗期らしい。遅いのでは?

ちなみに俺には反抗期は無かった。何故なら反抗した所で相手にしてもらえないからだ。無性に悲しくなった。

だからなのだろうか。俺が姫乃さんの言いなりになっているのは?相手してくれるから関係が続いているのだろうか?

まあ、なんでもいいか。それと二つ報告がある。

一つ目が俺が妹離れをした事だ!姫乃さんと会うのが楽しみでもう妹の事なんてどうでもよくなった。今では前までどうしてあんなに可愛く見えていたのか不思議に感じる。

二つ目が一人暮らしをさせられている事だ。小町が自分に構わなくなつた俺を両親に言つたら親父に家を追い出された。

学費は払ってくれるので卒業までは大丈夫だ。ちなみに今は姫乃さんが借りている高級マンションに住まわせてもらっている。

あそこは姫乃さんの趣味をするために借りている部屋なのでいつも居るわけではない。そこで姫乃さんが部屋の掃除をするなら住んでもいいといってくれた。

バイトでもしてどこかボロアパートでも住もうかと考えていた。そうなると姫乃さんとの会う時間が減ってしまう!

だからこそ姫乃さんが俺に部屋を貸してくれたのだ。やはり姫乃さんは最高だ!!!

そして俺は姫乃さんのために料理をしていた。全裸エプロンで。

「中々、お上手ですね八幡さん」

「いえ、お口に合って良かったです。でも良かったんですか？俺の手料理で？姫乃さんなら高級料理を食べ放題だと思っただけですけど？」
「確かにそうですね。でもたまには誰かの手料理を食べてみたいものですよ。それにしても本当に美味しいですね」

姫乃さんに気に入ってもらえて良かった。俺も作ったかいがあると言うものだ。それにしても姫乃さんの格好は目のやり場に困る。

姫乃さんの今の格好は大きい目のTシャツだけでブラやパンツをまったく着ていない。Tシャツの胸の膨らみがエロい!!

「さて、八幡さん。出かけますよ」

「出かける？どこにですか？」

「とっっても楽しく素敵な所です」

「あ、はい。分かりました」

はて？姫乃さんの言う素敵な所とは一体？まあ、出かける準備をしておくか。

姫乃さんの運転する車に乗ってとあるビルに到着した。ビルに入ったのはいいが、上上がるのではなくて下に下りた。

そして扉が目の前に現れるとカードキーと暗証番号を姫乃さんが入力して部屋の中に入って行ったので俺もそれに続いた。

その部屋には異様な光景が広がっていた。

「ひいひい!?だ、だめえええ!!!」

「だらしがないぞ！このメス豚！」

「はあ……はあ……もつと痛いのをください！」

「もつと痛くしてあげるわ！」

「おらおらおらおらもつと締めろ！」

「はいいい!!らめえええ……」

俺の親父ほどの年齢の男性が女子高生ほどの娘の尻を平手打ちしていた。尻は赤く腫れていた。他の場所では二十歳そこそこの男性が歳の近い女性に鞭打ちを受けて喜んでいた。

さらに他では筋肉もりもりの大男が巨乳の女性の尻を犯していた。

何なんだ、ここは？

「ひ、姫乃さん。ここは？」

「ここは会員制のSMクラブですよ。私は前まで見るだけでしたけど、今は八幡さんが居ますから折角なのここですものもいいのかと思っただけですよ」

「凄く楽しみです！」

「ふふっ……そうですか。ですけど、もう少し待ってくださいね。知り合いに挨拶にいかないと」

「はい！」

なんて素敵な所なんだ！ここではどんなプレイが出来るんだ？それにここがあるのは自分達のプレイを見せるためだろうな。

結構、凄いプレイだな。特に向こうの二人は凄い。なんとって女性同士だからだ。女子高生くらいの女の子が年上の女性を縄で縛ってバイブやローターで攻めまくっている。

そして反対側では小太りのおっさんが若干中学生に見える女の子にお腹を叩かれていた。

色んな人が居るんだな。

「あら奥様、お久しぶりですね」

「ええ、ここに来るのはずい分、久しぶりです」

「それでそちらが奥様の？」

「ええ、そうなんです」

姫乃さんは誰か分からない女性と話していた。会話からして親しいようだ。そしてその女性の後ろには全裸の俺と同じくらいの男が居た。

顔を隠して両乳首にローターをテープで貼り付けた格好をしていた。その姿を見た俺は凄く羨ましいと思ってしまった。

「ひ、姫乃さん……俺もう……」

「ふふっ……八幡さん、向こうでしますよ」

先ほどの奥さんと分かれて俺は姫乃さんに手を引かれてあるベットの所まで来た。そのベットの側には色々と大人のオモチャがたくさんあった。

「さあ、八幡さん」

「は、はい！」

俺は服を脱いでベッドの上で四つん這いになった。すると姫乃さんが俺の尻にローションを垂らしてきた。そしてすぐにローターを入れてきた。

「のおおおお!!」

「本当に八幡さんはお尻が好きですね」

「は、はいいい！す、好きですうう!!」

まだスイツチは入ってはいないがそれでも俺のチンコは勃起して準備万端だ！早く姫乃さんのマンコに挿入したい!!

「ひ、姫乃さん、早く！」

「ええ、分かっていますよ。さあ、ベッドに横になってください」

「は、はい！」

「では……」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「おおおお!!」

「んっ……やはり八幡さんのは大きくて固いですね♡動きますね？」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずず

ずつ……ぱんっ!!

「おおおお!!」

「い、いいですよ八幡さん♡もっと、もっと腰を激しく♡動かすのです

♡♡」

「は、はいいい!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずず

ずつ……ぱんっ!!

俺は姫乃さんに言われたとおりに腰を激しく動かした。やはり姫乃さんが上の方がいいな。姫乃さんが俺を屈服させているようだし胸が上下に揺れるのを見るのは中々いい。

「八幡さん！腰が、止まっていますよ？もっと激しくです♡」

「は、はい！」

「……もっと頑張れば、私のお尻の穴を使わせてあげますよ。夫にも

触らしたことない、私の不浄な部分、見たくはないですか？」

「み、見たいです。犯させてください！」

夫にも触らしたことのない不浄な穴。もしかしたアナル処女を俺が頂けるのか!?是非、犯したい!!

俺は頑張つて激しく腰を動かした。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひいいい♡♡そ、そうです!すごく激しいですよ♡八幡さん、周りを見てみなさい」

「周り……?」

激しく腰を動かしていたのに姫乃さんはいきなり周りを見ろと言う。俺は周りを見てみるとさつきまで様々なプレイをしていた人達が動きを止めてこつちを見ていた。

視線に敏感なプロボッチが気づかなかったとは!

「見てあの二人ここで一番激しいかも……」

「あの男の子、羨ましいな……」

「俺はあのご夫人に比べたらまだまだ……」

「す、素敵!」

みんなが俺達を見て色々と言っている。その視線が身体に刺さるこの感覚は凄く気持ちいい!!!

ずずずずずつ……こぼっ……こぼっ……

いきなり姫乃さんが腰をあげてしまった。その際にチンコが抜けた事でマンコから精子がボタボタと垂れてきた。

すると姫乃さんがお尻を俺の方に向けてきた。俺は迷わずそのお尻に飛びついて不浄の穴を舐めた。

ちゅっ……くちや……くちや……

「んんっ♡♡いい、いいですよ八幡さん♡お尻の穴を舐められるのは♡は、初めてですけど、いいですね♡♡」

俺は一心不乱に姫乃さんのお尻——アナルを舐め回した。独特の臭いに頭がクラクラしてきてが、それでも辞めなかった。

「そろそろですね……」

姫乃さんはローターのリモコンをONにした。しかも強さは強に
しただ。

ヴヴヴ……

「おおおおおお……」

ローターの振動でさっきまで萎えていた俺のチンコはすっかりそ
り立っていた。この刺激はとっても気持ちがいい!!

そしてある程度、アナルが解れたと思ったら姫乃さんがベットに四
つん這いになって自分からアナルを広げて見せた。

「さあ、どうぞ」

「は、はいー」

俺はたまらず姫乃さんのアナルに挿入した。

ずずずずず……

「のおおおお♡♡は、八幡さんのデカチンコが私のお尻にいいい♡
♡」

「ひ、姫乃さん!!」

ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずず
ず……ぱんっ!!

「うひいいい♡♡お、お尻でそんなに激しくっ♡♡いいっ♡もつと
もつとです!八幡さん♡」

「は、はい姫乃さん!お尻、すごく気持ちいいですうう!!」

ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずず
ず……ぱんっ!!

アナルはマンコとは違った感覚だ。マンコは蠢いていたがアナル
はきつく締め付けてくる。それだけだが、それでもまた違った気持ち
良さがある!

それに周りの視線を受けてかいつも以上に興奮してしまう!!見て
くれみんな!獣のような。人が人としての理性を無くして本能のま
まに性欲を貪る姿を!!

「ひ、姫乃さん!俺、もう……」

「いいですよっ♡お尻に全部射精しなさい八幡さん♡♡」

「は、はい……で、射精る!!」

びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……
びゅるるるるびゅるるるるるっ……

「おおおおお!!」

「うひひひひひ♡♡♡」

射精した。姫乃さんのアナルにこれまで以上に射精してしまった。気持ちいいのが止まらない。頭に電気が流ればなしで、どうにかなってしまおう。

びゅるるるる……

ようやく射精しきった。今、姫乃さんのアナルには俺が射精した大量の精子がある。チンコを今、抜いたらどんな事になるだろうか？興味がある。

俺はチンコを姫乃さんのアナルから抜いた。

ずずずずず……どびゅどびゅ……

姫乃さんのアナルからすごい量の精子が溢れ出た。しかも糞と一緒に。

「のおおおお♡♡……こ、これはすごいですね♡八幡さん……」

「姫乃さん……」

俺と姫乃さんは性行為の後、俺の頭を撫でてくれる。俺はこれが好きだ。まるで母親のようになってくれる。

俺のお袋はこんな事は一度もしてはくれなかった。したとしても小町にだけだ。

俺は飢えていた母親の愛に。俺は求めていた優しさを。

姫乃さんはそのどちらも持っていた。俺はもうこの人から離れない。

それから色々と周りの人を交えて乱交プレイをした。姫乃さん以外の人に攻めてもらったがそれはそれで良かったと思った。

特にマンコとアナルの二本挿しの時の姫乃さんの顔は最高に気持ち良さそうだった。でもまさか朝までし続けるとは思いもしなかった。

俺もだが、会員の人達体力あり過ぎだな。

「また来ましようね♡」

「はいー」

俺は姫乃さんと帰ってもSEXしまくった。SMクラブに行ったのが原因か分からないがたくさん姫乃さんに愛してもらった。

また近いうちに行きたいな。楽しみだ。

やはり社長夫人と下の娘を調教するのはまちがって
いい

「八幡君……」

「雪乃……」

うつつ、人妻大好きドMの比企谷八幡だ。姫乃さんとの生活は俺にとつて変え難いものとなった。姫乃さんと一緒に行つたSMクラブはいい刺激になった。

あれから俺は姫乃さんのアナルを犯させてもらっている。旦那さんですら触らした事がないそうさ。やったー！姫乃さんのアナルバンジーはいただいたぜ！

そんな素敵なMライフを送っていると姫乃さんから下の娘である雪ノ下雪乃について聞かれる。あいつとは同じ部活でよく顔を合わせる程度だ。

高校に入学してから反抗期が続いているのでどうにかしたと俺に頼んできたので俺は雪ノ下を俺と姫乃さんで調教するのはどうかと提案した。

俺としては将来、姫乃さんの義理の息子になりたいと考えているので姫乃さんの二人居る娘のどっちかと結婚を考えていたので渡りに船だった。

雪ノ下を調教して俺のいいなりにしてしまえば、姫乃さんとずっと一緒に居られる。

そこで俺は比較的会う雪ノ下にターゲットを絞つた。最初は無理に近づかずに雪ノ下の好きなパンさんのグッズなどで興味を引いた。そこからはチョロかった。猫の写真を送りたいと言えばメアドをすぐに送つてきた。そこからは夜に寝る前に少しメールをしてグツと距離を縮ませた。

そしてお互いに名前前で呼べる関係になった。だって、姫乃さんと紛らわしいからだ。そしてさらに進んだ関係になる事に成功した。

俺は今、雪乃の部屋のベッドの上に裸になつている。姫乃さんと

比べると可哀相な胸だな。俺の視線に気が付いたのか、雪乃が睨んできた。

「やはり男性は胸が大きい方が好きなようね」

「まあ、小さいよりかは大きい方がいいな」

「むっ……」

雪乃は不満そうに頬を膨らませた。俺と付き合うようになって素直になってきたのだ。以前はツンドラのようだった雪乃が今ではツンデレのさらに上のドロデレになっている。

ちなみにドロデレとは二人つきりになると抱き付いてくる。まるで俺から何かしらの成分を吸い取るように。

そこがちよつと可愛いんだけどな。

それに雪乃と付き合い合いだして分かった事がある。雪乃は基本、毒舌だがSと言うわけではない。むしろ俺と同じMだ。

むしろ雪乃は構ってちゃんなのだ。

自分を見て欲しい。自分を認めて欲しい。

そんな願望を持っているのだ。だからその願望を叶えてやれば素直になる。そこからは雪乃は俺に依存した。

依存した雪乃をコントロールするのはもの凄く簡単だった。俺の言う事なら大抵の事ならすぐに聞く。

今だってキスした後、ベッドの上で縛られている。しかもM字開脚でだ。姫乃さんの娘とは思えないくらい貧乳だけど、縛られている雪乃はとてもエロい！

それも顔を嬉しそうに赤くしているともっといじめたくなる。

「は、八幡君。は、早く私の膣内をメチャクチャにして♡」

「ああ、でも今日はもつと凄い事になるぞ」

「凄い事？それはいったい……」

「——随分、はしたない格好ですね。雪乃さん」

「お、お母さん!？」

いきなり現れた母親に雪乃はこれまで見た事のない顔で驚いていた。いや、面白い顔だな。

雪乃は俺と姫乃さんを交互に見て今の状況を理解していなかった。

「ど、どういう事なの？八幡君!？」

「こういう事だ。んっ」

「んんっ」

「…………え？」

俺と姫乃さんがキスをしたら雪乃は目を見開いてこつちを見続けた。それにしても姫乃さんとのキスは脳が痺れるな。

まるで麻薬のようだ。いや、実際に麻薬なんてもものを使った事はないんだけどな。

「——と、盗らないで！私から八幡君を！」

「安心しなさい。雪乃さん」

姫乃さんは雪乃に近づき顔をそつと撫でた。まるで赤ん坊を撫でるように。

「お、お母さん？」

「雪乃さん、貴女は八幡さんが好きなのね？」

「は、はい！だから……」

「そうですか。安心してください、私も八幡さんが好きです。もう息子のように思っています」

そ、そんなふうには俺の事を思ってくれていたのか姫乃さんは!!流石は俺の愛している人妻だ。最高だあ!!

「もし雪乃さんが今後、私の言う事を聞いてくれるなら将来、八幡さんとの結婚を許してもいいですよ」

「ほ、本当ですか!？」

「ええ、聞いてもらえますよね？」

「もちろんです。何でも聞きます。だから彼と結婚させてください!!」

上手いもんだな、姫乃さんは。それにしても雪乃はそんなに俺と結婚したいんだな。最初は毒舌ばかりで嫌だったが、今は俺の言う事なら大抵の事は聞くからな。

おかげで色々とプレイが出来たのがいい。

「八幡さん」

「はっ」

俺は姫乃さんに呼ばれ縛られている雪乃を真ん中にして俺が左で姫乃さんが右に並んだ。すると姫乃さんが雪乃のクリトリスをいじり始めた。

「ひい!?お、お母さん!？」

「さあ、八幡さん。始めますよ」

「はい」

雪乃の悲鳴を無視して俺と姫乃さんは雪乃の身体をいじり始めた。姫乃さんはクリトリスと乳首を。俺はマンコと乳首をいじり始めた。

「うひひひひひひひひひひ」

雪乃は両乳首にクリトリスにマンコを同時にいじられ感じていた。これまで俺は同時に二ヶ所しかいじってなかったが、今は同時に四ヶ所だ。

雪乃は今まで感じた事のない快楽を感じているだろう。

「やつ……ひい♡そ、そんなにっ♡い、いぐううううう♡」

「もっと自分を解放しなさい。雪乃さん」

「いいぞ、雪乃。もっと気持ちよくなれ」

「ひぎひひひひひひひひひ」

俺と姫乃さんの攻めに雪乃はだらしなく涎を出し涙を流していた。そしてついに雪乃はイッた。それも派手に小便をまき散らした。

ぷっしやあああああ……

「あああああ……♡」

雪乃はイッて気持ちよさそうに小便を出していた。ベッドは黄色く汚れた。掃除が大変だな、これは。

「雪乃さん。まだまだこれからなんですよ?」

「や、やすませてっ……♡」

「八幡さんはどう思いますか?」

雪乃を休ませてやりたいのは山々だが、俺がもう限界だ。俺のチンコはもう爆発寸前だ。これを雪乃か姫乃さんのマンコに挿入して思いつきり射精したい。

姫乃さんは俺のチンコを見て微笑み雪乃を少し起こして背中に周り身体を支えた。

「八幡さん。さあ、最初は雪乃さんにどうぞ」

「はい！姫乃さん」

「ま、まって……やすませてっ」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

俺は雪乃の制止を無視して一気に奥まで挿入した。さつきまで俺と姫乃さんで解していただけあってもう雪乃のマンコはトロトロになっっていた。

それでも締め付けはきつかった。胸は小さいがマンコは俺のがスッポリ挿入出来るくらいのちょうどいい大きさだ。

「うぎいいいい♡♡♡」

雪乃は身体を動かさそうとしたが、縛られているのでまったく動けなかった。そんな事などお構いなしに俺は腰を動かした。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひいいいい♡ま、まってっ……きもちよすぎてっ♡とぶっ♡♡」

「飛んでしまえ!!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひいいいい♡♡♡」

腰を動かす度に雪乃は歯を食いしばっていた。身体が自由に動かせないからな。それにしてもだらしない雪乃の顔を見ると普段とのギャップで萌える。

「ふう……」

「ひい♡」

「おおおお……」

姫乃さんが雪乃の耳に息を吹きかた瞬間、マンコの締りがさらに強くなった。さらに乳首とクリトリスを摘まみグリグリと磨り潰すようにいじり始めた。

そうするとさらに雪乃のマンコは締め付けを強くした。もう限界だ!!

「だ、射精すぞ！雪乃！」

「き、きてえええ！そのままっ♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いぐうううう♡♡」

雪乃の膣内に射精と同時に雪乃は絶頂した。普段はキリツとした顔が蕩けてアへ顔になっていた。鼻水を垂らし涎が口から溢れていた。

「ああ♡へ、へえ♡」

「おくい、大丈夫か？」

雪乃はすっかり延びきっていた。姫乃さんが雪乃を縛っていた紐を解いて今度は自分がベッドに横なり雪乃を自分の上にうつ伏せにした。

母娘のマンコが並んでいるとなんとも言えない光景だ。

「さあ、八幡さん。今度は私も気持ち良くしてください」

「はい！任せてください!!」

俺は姫乃さんと雪乃の間にチンコを入れた。これ、前からやってみたかったんだよな。クリトリス挟み。

俺は腰を前後に振った。

「あんっ♡お母さんっ……これっ♡きもちいいっ♡♡」

「んんっ♡ええ、気持ちいいですねっ♡雪乃さんっ……んんっ」

「んんっ!？」

姫乃さんは雪乃の唇を塞いだ。雪乃はいきなりキスされて驚いていた。母娘でキスとかご馳走様です!!俺はさらに早く腰を動かした。

「お、お母さんっ♡い、いきますっ♡♡」

「ええ、私もいきますっ♡八幡さん、射精する時はお腹の上につ♡」

「はい！で、射精ますー!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いぐうううう♡♡」

俺は思いつき姫乃さんのお腹の上にザーメンを射精した。雪乃

を自分の左側に除けて姫乃さんはお腹の上のザーメンを手ですくつて口に運んだ。

「んんっ♡はあ……♡八幡さんの特濃ザーメンっ♡んんっ♡」

「お、お母さんっ……わ、私にもっ」

「ええ、はい。雪乃さん」

「はむっ……んんっ♡はあ……♡」

姫乃さんはお腹の上のザーメンをすくって雪乃の口にも運んだ。雪乃は自分の母親の指についた俺のザーメンを綺麗に舐め取った。

その姿は子供が母親から食事を与えられているような光景だった。

「どうぞ、八幡さん」

すると姫乃さんは指で自分のマンコを広げて見せてきた。俺の興奮はまだ冷めてはいない。だから姫乃さんはそれを分かっていた。

俺は姫乃さんのマンコに挿入した。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡♡♡さ、流石は八幡さんっ♡うひひ♡♡雪乃さんっ!?!」

「お母さんの胸……はむっ」

「うひひひひひ♡♡♡」

雪乃が姫乃さんの乳首を口に含んだ。そして吸い出した。母乳が出るわけでもないが、それでも吸い出した。母乳が

俺はさらに腰を動かした。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「のおおおお♡♡♡くるっ♡きてしまっ♡♡♡」

「ひ、姫乃さんっ!!!」

「は、八幡さんっ♡」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるびゆるるるっ

……

「い、い、い、い、い、い♡♡♡」

俺は姫乃さんのマンコに射精してからの記憶がなかったが、起きた時には姫乃さんを真ん中に雪乃と一緒に気持ちよく寝ていた。

母娘との3Pは最高に気持ちよかったぜ。次もしたいな。

やはり社長夫人と下の娘に好きにされるのはまちがっている。

「うひひひひひひ♡♡♡」

「うぎひひひひひ♡♡♡」

どうも人妻大好きドMの比企谷八幡だ。俺は今、雪乃の寝室で姫乃さんと雪乃を犯している。母娘のクリトリス擦りは最高に気持ちがいい。

雪乃はすっかり素直になった。出会った頃は毒しか吐かない性格の悪い貧乳女だったが。

「八幡君っ♡」

「八幡さんっ♡」

雪乃と姫乃さんが俺におねだりしてきた。そんな表情されたら勃起しちゃうじゃないですか。萎える気がしないな。

「最初は雪乃からだ！」

「ええ、早く来てっ♡♡」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「はひひひひひひ♡♡♡」

雪乃は挿入しただけでイッたようだ。その証拠に潮を噴き出した。腕や脚が震えて産まれたての小鹿のようだ。

「ぱんっ!!」

「ひぎゅっ!」

俺は思いつきり雪乃の尻を叩いた。一回だけ叩いただけなのに赤く腫れた。しかも俺の手形がくつきりと残った。

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」
「ずずずずずっ……ぱんっ!!」
「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「えひやああああ♡こ、こわれるっ♡」

「はむっ……」

「ひい!?お、お母さん!」

「雪乃さんは胸がコンプレックスなのですね。ですが、大丈夫ですよ。」

強い刺激を与えれば、すぐに大きくなるでしょ。はむっ」

「だ、だめええええ!!?」

姫乃さんが雪乃の胸を攻めだした。乳首を甘噛みして反対側を指で挟んで擦った。その刺激に雪乃は絶頂を連続で迎えていた。

同時にいろんな所を攻められて頭がパニックになっているだろうな。でも止めない。

「雪乃!で、射精るぞ!」

「き、きてええええ!!」

びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「うひいひいひい♡♡♡」

「おおおおお……」

射精したら雪乃の膣内はギュウギュウに締め付けてきた。精子を全て雪乃の一番奥に射精するように出した。

ずずずずずっ……こぼっこぼっ……

俺がチンコを抜くと精子が逆流しだした。すると姫乃さんが雪乃をベッドに寝かせて精子を吸いだした。

「じゅるるるっ……じゅるるるるっ……」

「うひい!お、お母さんっ!」

「ふふっ……八幡さんの精子と雪乃さんの愛液が混ざった味はとっても美味しいですよ。じゅるるるっ……じゅるるるるっ……」

「うぎいひいひい♡♡♡」

姫乃さんはさらに吸い出した。そして呑んだ。雪乃は吞まれたのが気持ちよかった様でイッた。体力の限界で雪乃はぐったりした。

俺と付き合うようになって体力作りをしているがまだまだ必要だな。

「八幡さん。んっ♡」

「んんっ……姫乃さん」

雪乃が寝てしまったので俺は姫乃さんとキスした。姫乃さんとのキスは頭が痺れてくれる。すると俺のチンコがさらに大きく固くなった。

「ふふっ……やはり八幡さんの素敵ですね」

「ひ、姫乃さん！早く！」

「ええ、どうぞ」

姫乃さんは四つん這いになってこっちにお尻を向けた。ホント、綺麗だな。この光景を見れるのは俺だけだ!!俺は雪乃同様に一気に奥まで挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡いいですっ♡八幡さんっ♡もつと私を気持ちよく……」

「はい！頑張りますっ!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひひひひ♡す、凄いつ……お、奥までっ♡」

「おおおおお……」

姫乃さんのマンコは締りがいい。雪乃も締まりはいいけど、姫乃さんののは蠢いているのが凄く気持ちいい!!

もう腰を振る事しか考えられない。

「姫乃さん！姫乃さん！姫乃さん！」

「いいですよ八幡さんっ♡もつと奥を突いてっ♡♡」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は必死になって腰を動かし姫乃さんを気持ちよくしようとした。でも姫乃さんが気持ちよくなる前に俺が気持ちよくなってきた。

「ひ、姫乃さん！俺もう……」

「いいですよ。思いつきり膣内につ！」

「は、はいっ!!で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いくうううう♡♡」

「おおおおお……」

だ、出し切った。もう射精せない。さつき萎えないと思ったが、今はすっかり萎えてしまった。回復には時間が掛かるな。

「八幡君……」

「雪乃。起きたのか」

さつきまでイツて気絶していた雪乃が起きていた。その顔は物欲しそうにこつちを見ていた。そんな視線を送ってももう萎えてしまったから勃起しません！

「ふふっ……雪乃さん。八幡さんが勃起しなくなったら時の対処法を教えてください」

「はい！お母さん！」

何か凄く気持ちよくなる予感がする。姫乃さんもそうだけど、雪乃もなんだかイキイキしているな。

「さて、八幡さん。分かっていきますね？」

「はい！」

今度は俺が四つん這いになった。すると姫乃さんが俺のお尻に人差し指と中指をゆくつりと入れてきた。

「のおおお……」

「いいですか雪乃さん。萎えた時はこうしてお尻から指を入れて金玉の刺激するのですよ」

「前立腺ですね」

「ふふっ……ええ、そうです」

微笑ましい母娘の光景だ。男の尻をいじっていないなければな。

「ひ、姫乃さん、そこ！」

「ふふっ……八幡さんは金玉の裏側を撫でられるのが好きでしたよね？」

「はい！そうです！」

「それとこうするともっといいのでしたね」

「おとおお……」

姫乃さんは尻の穴と同時にチンコを握りしこり始めた。この同時攻めが最高に気持ちがいい!!ヤバイ、射精そうだ!!

「お母さん、気になったのですが、指を入れて汚くないのですか？」

「それは大丈夫ですよ。八幡さんも私もする前には浣腸をするようにしているの腸の中は綺麗なのです。雪乃さんも今度からそうする

ように」

「はい！お母さん！」

「自分だけ気持ちよくなる事は絶対に駄目です。相手も気持ち良くしてあげなくては」

姫乃さんは淡々と雪乃に説明しているが、母親が娘にする説明じゃない。てか、説明の間も休まず俺のチンコと尻の穴を攻めている。

「ぐっ……」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

俺はあまりの気持ちよさに射精してしまった。姫乃さんはいつの間にか両手で俺の射精した精子を受け止めていた。

「どうです雪乃さん」

「す、凄いです。さっきまで萎えていたのに勃起して射精するなんて……」

「そうでしょ？では雪乃さんもどうぞ」

「はい！お母さん。んんっ」

姫乃さんは俺の精子を雪乃と半分にして呑んだ。二人は顔を緩まして微笑んだ。

「はあ……♡八幡さんの精子は喉に絡みつくほど濃厚ですね♡雪乃さんはどうですか？」

「はい。最初はこの苦味が嫌でした。でも最近は慣れました。それに精子を呑むと八幡君が喜ぶので……」

「そうですね。少し休憩にしましょう」

そう言つて姫乃さんは部屋から出て行った。シャワーでも浴びるのだろう。もしくは水分補給かもしれない。

「八幡君……」

「おう、雪乃。お疲れ」

「ええ、お疲れ様。聞きたいのだけど、貴方はお母さんとその……」

「何だよ？」

「子供を産んで欲しいとか結婚したいとか思わないの？」

いきなりとんでもない事を聞いてくるな。それも真顔で聞いてきているのが笑えない。

「無いな。そんな事を一度も思った事は無い」

これは事実だ。俺と姫乃さんの関係なんて所詮、肉体関係だけだ。それ以上深い関係になりたいとは思わない。

「そう。ならいいわ」

「一体何が聞きたかったんだ?」

「何でもないわ。それで貴方は私とその……結婚したいと思う?」

「そりゃしたいな。雪乃以外と結婚出来るなんて思わないしな」

それを聞いて満足したのか雪乃は機嫌がよくなった。

「シャワーを浴びましょ。汗臭いわ」

「お、おう」

俺と雪乃は汗を流すために浴室に向かったが、すでに姫乃さんがそこには居てシャワーを浴びていた。

「あら、二人も来たのね」

「お母さん。少しやりたい事があるのだけど」

「何かしら?」

雪乃は姫乃さんにしか聞こえないように耳打ちした。何か猛烈に気持ちよさそうな予感がするぞ!!

「八幡君はそこに立っていてちょうだい」

「お、おう」

俺は言われるがまま立っていると姫乃さんが俺の前に周り雪乃は後ろに周り込んだ。すると姫乃さんがパイズリして雪乃が俺の尻の穴を舐めだした。

「はむっ……じゅぱっ……じゅるるるるっ……」

「れろっ……れろれろっ……ちゅっ……」

「おおおお……姫乃さん、これ凄すぎですっ……」

「そうでしょう。でもこれからですよ。はむっ」

姫乃さんは胸で俺のチンコをしごいて、先っぽを口に含んで舌で舐め回した。雪乃の穴舐めも凄い!

「雪乃。もっとゆっくりやってみてくれ」

「ええ、分かったわ。まさか私が貴方のお尻の穴を舐めるなんてね」
「嫌か?」

「まさか。貴方のその情け無い顔を見ただけでやったかいがあったわ」

雪乃は満足そうに笑った。そして俺の指示通りにゆっくりと舌を腸の中に入れて腸壁を舐め回した。

「おおおおおお!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「うぐっ!?……んっ……はぁ♡あれだけ射精したのにまだこんなにも濃い精子が……」

「お母さん。私にもください」

「ええ、どうぞ。雪乃さん」

「はい!んんっ♡……んっ♡」

姫乃さんから貰った精子を呑んだ途端、雪乃はイッた。身体を震わせながら喜んでいようだった。

「姫乃さん、俺もっど……」

「ええ、分かっていますよ。どうぞ」

姫乃さんは手を壁に付いてお尻をこっちに向けてきた。俺は姫乃さんのマンコに一気に挿入した。

「ずずずずっ……ぱんっ!!」

「い、いいですよっ!八幡さん♡♡もっど膣内を掻き回すように!!」「はいー!」

「ずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!」

俺は必死に腰を動かし膣内を掻き回すように突いた。

「うひい!」

するといきなり尻に何かが当たった。後ろを見てみると雪乃が俺の尻の穴に舌を入れていた。その所為で腰が勝手に動いてしまう。

「ゆ、雪乃!お、お前それはちよっと待て!!」

「私は貴方を気持ちよくしたいわ」

「だからって!——ひい!」

雪乃は俺を気持ちよくしたい一心で俺の尻の穴を舐めた。それだ

けはない、手で金玉をマッサージし始めた。

そんな事をしたらすぐにイッてしまう!!

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「のおおおお♡♡」

姫乃さんがあまり聞いた事の無い声を上げた。それでも雪乃の攻めは止まらない。だから俺の腰も止まらない。

「で、射精るうううう!!!」

びゆるるるるびゆるるるる……

俺はこの射精後の記憶は無かったが、起きた時にはベッドの上だった。母娘でするのも気持ちがいいな。たまになら雪乃に攻められるのも悪くないな。

もつと気持ちよくなりたいたいぜ。次はどんな事をするのだろうか？
楽しみだ。

やはり社長夫人に二人で縛られるのはまちがっている。

うつつ、比企谷八幡だ。人妻とただならぬ関係は今も継続しています。しかもその娘と付き合っています。もうドロドロを通り越してデウルデウルになっている気がする。

それと嬉しい事があった。なんと！雪乃の胸が大きくなってきているのだ。この事は本人が一番喜んでいた。

俺も嬉しい。だって、今まで姫乃さんしか出来なかったパイズリが出来るようになるのだから。

と、言ってもまだまだ先の事だけど、嬉しい。

姫乃さんも娘と仲良く出来たと喜んでくれた。この間の3Pは最高に気持ちよかったな。またしたと思うてか、今夜辺りまた出来そう
だ。

まあ、夜まで楽しく待っているか。俺はラノベに集中した。

今は学校で奉仕部の部室だ。俺に雪乃、由比ヶ浜の三人だけの空間。嫌いではないな。

「依頼人、来ないね……」

「そうね」

「来ない事に越した事はないだろ。これまでの事から面倒な依頼になる」

「そうだけど、来ないと暇だよね」

由比ヶ浜は相変わらずスマホをいじり俺と雪乃は本を読む。これがここで俺達がしている事だ。これを部活として認められているかどうかは思うが。

仕方ない事だ。あの独身暴力女教師が顧問なのだから。自分では解決出来ない依頼を俺達にやらせて自分だけこなせる依頼だけをして教師としての株を上げようとしているのではないかと最近、疑っている。

「でもでもやる事無いと暇だよ……」

「なら由比ヶ浜さん、勉強してはどう？・期末試験がもうすぐでしょ？」

「……ホント、どうして勉強しているのかな？」

「バカだから？」

「二人とも酷い!？」

学生の自分は勉強だというのに由比ヶ浜は何をバカな事を言っているんだ？思わず雪乃と被ってしまった。

勉強もしないで怠けている連中の気がしれないな。そもそも勉強嫌いなのに進学校の総武に入学したんだ？

もしかして由比ヶ浜って、裏口入学？でもあれって金持ちが出来るもので、一般家庭の由比ヶ浜家に出来るのか？

「由比ヶ浜、お前ってやっぱ裏口？」

「八幡君、いくらなんでもそれは無いわ」

「そうか？でもな……」

「せめて、補欠入学にしておきなさい」

「さつきから二人とも酷い!？」

由比ヶ浜はオーバーリアクションだな。それに声が一々大きい。大きいのは胸だけで十分だったの。まあ、雪乃も最近ワンカップほど大きくなったけど。

それにしても先日、姫乃さんと雪乃の三人でデパートに下着を買いに行った時は凄くよかった。二人が買っている間、ずっと放置されて他のお客さんに白い目で見られていた。

もし姫乃さんが考えたプレイだしたら最高に気持ちよかった。

「そろそろ終わりましたよか」

「うん。あ、もうこんな時間だ。じゃあね！ゆきのん、ヒツキー」

「おう、またな」

由比ヶ浜はすぐさま部室から出て行った。俺も帰ろうとしたら雪乃に袖を掴まれた。どうしたんだ？

「どうした？」

「……ちよつと来てちようだい」

「お、おう」

俺はそのまま奉仕部のある階の男子トイレに連れ込まれた。何が

起こるんだ？

「雪乃、お前はいつから男子トイレに入るような変態に……」

「ち、違うわよ。それに変態はお互い様でしょ！これを見て欲しいのよ……」

雪乃はいきなり服を脱ぎだした。全裸になった雪乃の身体はロ―プで縛られていた。エロいな。これは。

「これって……」

「ええ、お母さんがしてくれたのよ」

「おおおお……」

姫乃さんってこんな事も出来るのか!?お、俺も縛られたい。

「ちなみに今日、八幡君を縛るようよ。朝から楽しみにしていたわ」

「マジか!?た、楽しみだ!」

俺は雪乃と急いでマンションに帰った。これから起こる事を想像して誰にもバレないように勃起させた。

マンションに着いてすぐに雪乃が姫乃さんに縛られた。しかもM字開脚でマンコもアナルも丸見えだ。

それにアナルにはローターを振動・弱で入れられている。ああ、俺もやって欲しいぜ!

「お、お母さん……ろ、ローターを抜いてっ……くださいっ」

「ふふっ……雪乃さんたらそんなにおマンコから愛液をたくさん出して」

自分の娘を縛り上げていじめる母親って酷いだろうか?俺は全然思わない。だってお互いに気持ち良くなっているのだから!

早く俺も縛って罵ってくれないだろうか!?足で俺のチンコを優しく踏みつけて欲しい!!

「ひ、姫乃さん!俺も早く、縛ってください!!」

「ええ、もちろんですよ。では八幡さん、ベッドに横に」

「は……」

姫乃さんは俺をベッドの上で両腕を上げた状態にして縛り俺のチ

ンコに輪ゴムを巻き付けた。

「おふっ!?ひ、姫乃さん!」

「しつかり我慢してくださいね」

「こ、これはヤバい!?姫乃さんの笑顔がとっても素敵だ。そんな顔されるのもっと大きく勃起してしまう!」

「あらあら……流石は八幡さんですね。さつきより大きく固くなっていますよ」

「ええ、ですけど。今日はこれでいじめて上げますね」

そう言つて姫乃さんはオナホールを取り出した。するとオナホにローションを流し込んで滑りをよくした。

それにしても輪ゴムが思ったより締め付けが強く射精しそうだけど、出来ない。輪ゴムの所為で精子が金玉から出ない。でもいい。

今更ながらすっかかりドM根性が身に染みているな。ふと雪乃が気になって見たら凄い事になっていた。

「んんっくく!!んっ……っ!!」

乳首とクリトリスにローターをセロハンテープで固定されており、マスコはあえて何もされていなかったが、愛液がドバドバと溢れていた。

ちよつと羨ましいと思つてしまった。

そんな俺は姫乃さんにオナホでチンコを扱かれ、キスされていた。

「ちゅ……んんっ……」

「んんっ……ぶあ……ひ、姫乃さん!射精させてください!も、もう俺……」

「そうですね。いいですよ」

姫乃さんは俺をベッドの上で上半身だけ起こして雪乃の正面を向くように向きを調整した。そしてオナホをチンコから抜き、輪ゴムも取ってくれた。

びゅるるるっ……びゅるるるるっ……びゅるるるるるっ……

輪ゴムが取れた瞬間に思いつきり射精してしまった。輪ゴムから解放された感覚が癖になりそうだ。次もやってくれないかな?

俺はうっかり忘れていた。射精した先には雪乃が居るのを。

「……………♡♡♡」

雪乃の頭から精子をかぶっておりちよつと無様だった。だけど、本人は掛かったのを気にしてなかった。

何故なら雪乃は盛大にイッて小便を漏らしていたからだ。

「えくと……雪乃?」

「はっ!?は、八幡君、いくらなんでも射精しすぎじゃないかしら」

「いや、精子が顔に掛かって喜んでる人間に言われたくはない」

雪乃は澄ました顔で文句を言ってきたが、顔を精子でドロドロにしている人間なんて怖くともなんともない。

すると姫乃さんが俺の拘束を解いてくれた。

「さあ、八幡さん。雪乃さんに挿入してあげましょうか」

「はいー」

俺は動けない雪乃の前に移動して挿入の準備をした。さつき姫乃さんに射精させてもらったのにもうギンギンに勃起している。

俺はゆつくりと雪乃のマンコに挿入した。

ずずずずず……

「おおおお……相変わらず凄い締め付けだ!」

「うひひひひひ♡♡」

雪乃のマンコは相変わらず狭いから締め付けがいい。それにマンコはヌレヌレですんなり奥まで挿入出来た。

ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!

腰が凄く動く。俺はMで攻められるの好きなんだけど、雪乃の時だけ攻めたくなる。雪乃は毒舌だけど、Sじゃないんからな。

Mは同じMの気持ち分かる。だけど、雪乃が攻めてきたらどんなプレイになるかな?ちよつと想像してしまう。

「雪乃さん、八幡さん。まだまだですよ」

「お、お母さん!」

「ちよ!?ひ、姫乃さん!」

姫乃さんは俺と雪乃を縛った。これではまともに腰を動かす事が出来ない。もどかしいぞ、これは。

「ひい!？」

いきなり尻に冷たいものが垂れてきた。見てみると姫乃さんが俺の尻にローションを尻に垂らしていた。姫乃さんを見ると男の勃起したようなものを装着していた。

あれって確か双頭デイルドだったかな？

それを姫乃さんは俺の尻に挿入してきた。

ずずずずずつ……

「のおおおおおお……」

「デイルドを通じて八幡さんのお尻の締め付けを感じますよ」

俺は尻を攻められて更にチンコを大きく勃起させてしまった。ただでさえ狭い雪乃のマンコが広がった。

「うひい♡♡は、八幡、君♡♡だ、だめっ!?!うぎいい♡♡」

「む、無理だ!で、射精る!!」

びゆるるるるるつ……びゆるるるるるるつ……びゆるるるるるるつ

……

「あああああ!!」

俺は雪乃と同時にイッてしまった。俺は射精し雪乃のマンコは俺から精子を全て搾り取ろうと蠢いていた。

頭の中が全て白一色に染まり、他の事なんてどうでも良くなった。

雪乃はぐったりしていた。どうやら体力を使い尽くしたようだ。

前と比べたら体力は付いてきたが、まだまだ足りないようだ。

そしていつの間にか姫乃さんはデイルドを俺の尻から抜いていた。気持ち良すぎて抜いたのに気が付かなかった。拘束も解かれていた。

姫乃さんが今度はベッドの上でマンコを広げていた。俺は雪乃の拘束を解いてから姫乃さんに抱きついてチンコを挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「おおおおおお……!!」

「ふふっ♡八幡さんのあれだけ射精したのにまだまだ固く大きく逞しいですね♡♡」

「姫乃さん!姫乃さん!姫乃さん!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!

俺は必死に腰を動かした。もう無我夢中に他の事なんて考えずに腰を動かした。体力の限界なんて知った事ではない!!

俺はもつとこのマンコを味わいたいんだ!!

「姫乃さんーも、もう射精ます!!」

「き、来ていいのよ♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるるっ……びゅるるるるるるっ……びゅるるるるるるっ

……

「ほおおお……!!」

「い、いぐうううう♡♡♡」

さつき雪乃のマンコに全部射精したと思っていたが、また射精してしまった。どんだけ射精出来るんだよ!

もうどうでもいいか。俺には姫乃さんが居る事だしな。すると雪乃がいつの間にか起きてこつちを見ていた。

「あらあら、雪乃さん。さあ、こつちに」

「はい。お母さん……」

「もつと三人で楽しみましょう」

「はい。姫乃さん」

俺と雪乃は姫乃さんに抱きついた。それから俺達三人は朝まで身体を重ねた。もうドロドロになるくらい交わった。

俺も雪乃も姫乃さんから離れられなくなった。でもどうでもいいのだって気持ちいいならそんな些細な事なんて気にしなくていいのだから。

やはり社長夫人が義母になるのはまちがっている。

うっす。比企谷八幡、ではなく雪ノ下八幡だ。俺は高校の時から付き合っている雪乃と大学を卒業して雪ノ下建設に就職して一年後に結婚した。

大学の話は色々あったので割愛させてもらう。まあ、高校の時も大学の時も色々あってここでは語れないのでいつか語ろう。

でも今は俺の新しい家族について語ろう。

「うひひひひひひ♡♡♡♡」

「おおおおお……」

俺は今、妻である雪乃を犯していた。二人目を仕込む中だ。俺と雪乃の間には子供がすでに一人居る。名前は綾乃だ。

可愛い女の子で目にも入れても痛くないくらい可愛い。まさか俺がこんな可愛い子供の親になるなんて思いもしなかった。

雪乃は泣きながら子供を抱いた。それに姫乃お義母さんも俺達を祝福してくれた。

綾乃は将来、雪乃や姫乃お義母さんのような美人になるに違いない。俺はそう確信している。だから雪乃には俺の子供を産んでもらいたいと思っている。

次はどんな可愛い子だろうか？もし男でもきつとカツコイイ男になるだろう。

「あ、あなたあ♡は、激しいいいいい♡♡」

「何言っているんだ？激しい方が好きなくせに！それとも緩めてもいいのか!？」

「だ、だめえええ♡♡き、気持ちよく、なれないいいいい♡♡」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!」

俺は雪乃のエロい声を聞いてさらに腰を激しく動かした。こんなエロい妻の声を聞いては興奮するに決まっている。

それに興奮するのは別の理由もある。

「八幡さん。もっと叩きつけるようにですよ」

「はい！姫乃お義母さん！どんどん行くぞ！雪乃お!!」

「うひひひひひひ♡♡♡♡」

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺と雪乃の性行為を姫乃お義母さんが傍らで見ているからだ。腕には俺と雪乃の娘である綾乃がスヤスヤと寝ていた。

高校の時に車に轢かれてから始まった俺と姫乃お義母さんとの関係は今も続いている。と言っても身体だけの関係だ。

俺は別に姫乃お義母さんに俺の子供を産んで欲しいとは思っていない。それは姫乃お義母さんも同じだ。

ただ気持ちいい事をするだけの身体だけの関係で満足していた。それに今では俺の子供は雪乃が産んでくれるので問題ない。

今日は雪乃の危険日だ。だからたくさんの精子を子宮に飲ませてやるつもりだ。そう思うと興奮する。

「はむっ……」

「ひい!?だ、だめっ!!」

俺は雪乃の胸と言うか乳首に吸い付いた。高校の時は貧乳だった雪乃の胸は今ではすっかり爆乳になってしまった。姫乃お義母さんより大きくなってしまった。

そして子供を産んだから母乳が出てきた。それを俺は思いっきり吸った。

「ちゅう……ちゅう……」

「だ、だめえ!?あ、あかちゃん分、がっ♡♡なくなるっ♡♡」

「いいだろ、別に。これだけ大きいんだ。まだたくさんあるさ。ちゅう……」

「うひひ♡♡」

雪乃はマンコは突かれ、乳首を吸われて連続でイッたようだった。身体はイキ過ぎで震えていた。後で休ませてやるか。でも今は犯すぜ!

「おぎやあああ!!」

もつと雪乃のマンコを突いてやろうと思っていると綾乃が泣きだ

した。この泣き方はご飯を求めている時の泣き声だな。

父親になって綾乃の泣き方を観察して何を求めているかすぐに分かるようになった。

「姫乃お義母さん。綾乃を」

「はい。どうぞ」

俺は綾乃を受け取ると雪乃の左胸に綾乃をもって行った。すると綾乃は雪乃の乳首に吸いついた。俺は右に吸いついた。

「うひひひひひひ♡♡♡だ、だめえええ！ど、どうじなんてっ♡♡い、いぐうううう♡♡♡」

「おおおおお……す、凄いぞ！雪乃、もつと行くぞ！」

両方の乳首を吸われて雪乃は頭がどうにかなるっっているだろう。俺はそんなのお構いなし強めに吸った。綾乃もお腹が減っているように存分に吸い込んだ。

「ちゅう……ちゅうちゅう……」

「あああああ……」

雪乃はイッたように余韻で延びていた。そしてそのまま気絶した。綾乃は満足したのかまた寝てしまった。俺は綾乃をそつとベッドに戻した。

「はむっ……じゆるるるっ……じゆるるるっ……ふふっ……八幡さんたらあれだけ雪乃に射精したのにまだまだ固いままですね」

「体力が高校の時からついでいますから」

高校の時から姫乃お義母さんに色々と仕込まれたからな。これくらいでへたる体力ではない。ドM根性舐めないでもらいたい!!

今では10回以上射精したくらいでは収まらなくなっているからな！もつと射精したいぜ！

すると姫乃お義母さんが和服を脱ぎだした。高校の時からこの人の肌年齢は衰えを知らないのか？と思ってしまうほど綺麗だ。

きめ細かい肌は一つの芸術と言っても過言ではない!!

それを俺が汚せるとなると興奮するぜ！今日は金玉の中の精子が空になるまで射精してやるつもりだ！

「さあ、どうぞ。八幡さん♡」

「姫乃お義母さん！」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい!?し、子宮まで、一気に♡♡」

「す、すづっ……!!」

姫乃お義母さんのマンコはやつぱり凄い締め付けをしてくる。雪乃の使い慣れたマンコもいいが、たまに挿入する姫乃お義母さんのマンコもいい。

膣内が蠢くこの感じは雪乃にはない気持ち良さがある。俺の快樂が脳を本能を刺激する!!

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

腰が勝手に動く。もつと気持ちよくなりたいと本能が叫ぶ!他の事なんてどうでもいいほど俺は姫乃お義母さんの身体にのめり込んでいる。

「は、八幡さん♡昔のように呼んでもいいですよ?」

「ひ、姫乃さん!姫乃さん!姫乃さん!」

「うぎん♡♡」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は昔のように快樂を楽しむだけの関係の時のように姫乃お義母さんと呼んだ。今も凄くいいけど、昔も本当によかった。

快樂が脳を麻痺させていく感覚はこの身体に刻まれている。

「ひ、姫乃さん!俺、射精します!!」

「な、なかにつ♡♡たくさん射精してえええ♡♡♡」

「で、射精るううう!!」

びゅるるるるびゅるるるるつ……びゅるるるびゅるるるつ……びゅるるるるるびゅるるるるるるつ……

長い長い射精をした俺はもの凄い快樂に襲われた。雪乃にあれだけ射精したのにまだこれだけの精子があったとは我ながら恐ろしいな。

それに姫乃お義母さんは俺の射精を受けてイッたようだ。でもま

だまだこれからだ！

俺は姫乃お義母さんと気絶から起きた雪乃の三人で快樂を貪った。2時間以上も俺達は互いに快樂を与えて気持ち良くなっていた。

今日辺り雪乃は孕んでいそうだな。でも念のため夜になったらもう一度犯すか。その時だった、俺のスマホが鳴った。相手は警備員だった。

「はい。どうしました？」

『はい。社長の家族を名乗る者達が社長に会わせろと言っているのです』

「また着たのか……」

俺の『元』家族が金を貸せとやって来たよ。俺は雪乃と結婚して雪ノ下建設の業績を上げた。姫乃お義母さんが色々と手を回してくれて大きな企画の責任者を俺にしてくれたおかげだ。

だから俺はスピード出世した。そして綾乃が産まれた事で俺は社長に就任した。それを知った俺の『元』家族が『今まで育てた恩を返せ』と言ってきたのだ。

俺はふぎけるなど思ったが、ここは葉山弁護士を立てて追い返した。ちなみに葉山弁護士とは葉山隼人の事だ。あいつは雪乃に好意を寄せていたが、俺と付き合いだしたのを機に三浦と正式に付き合い合うことにしたそうだ。

そして先月二人は結婚した。だからあいつらとは中々の付き合いがある。

「追い返してください。それでも帰らなかったら警察と葉山弁護士事務所に連絡を」

『分かりました。それでは』

「はぁ……」

警備員からの電話を切っておもわずため息が出てしまった。俺の『元』家族が俺に会いに来るようになって俺も彼らについて色々調べた。

まず小町だが、俺と同じ総武を受けようとして落ちた。滑り止めなんて用意してなくて1年間、無駄に過ごしたそうさ。そして総武とは

違う高校を受けてなんとか高校生活を始める事が出来たらしい。同級生より1年遅い高校生活を。

次に親父だが、俺を比企谷家の戸籍から除籍していた。俺が小町に構わなくなった事が相当気に入らなかつたようだ。

そして高校生になつた小町が色々とおねだりをして借金があるそうだ。額はともではないが高校生が使う金額を余裕で超えていた。金額は800万だ。八幡だけに。

そして母親だ。母は親父が俺を除籍にした事や借金の事を知らなかつたようで、今離婚の準備をしている。後、孫に会いたがつていた。会わせるつもりは毛頭ない。

今まで俺だけ除け者にしてきた天罰が下つたのだと思つている。

例えどんなに苦しくても俺は助けるつもりはない。

「八幡さん。どうしたしたか？」

「いえ、またアホどもが着ただけです。追いつ返すように言つただけなので」

「そうですか。貴方の頑張りは私がよく知つていますよ」

「姫乃さん……」

つい素で昔の呼び方をしてしまった。姫乃お義母さんは俺をそつと抱きしめてくれた。この温かさは俺の癒しの一つだ。

「八幡さん。どうぞ、溜め込まずに」

「はい」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

姫乃お義母さんは俺にお尻を向けてきた。俺はそのまま姫乃お義母さんのアナルに挿入した。マンコもいいがアナルも中々の締め付け具合だ。

てか、俺のチンコを引き千切るくらいの強さがありそうだ。それでも俺は腰を動かした。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「のおおおおおお♡♡♡♡」

「す、すづっ……!!」

姫乃お義母さんって本当に年取っているのか？そんな疑問はあったが、気持ちいい感情がそれを上回った。

「は、八幡君……」

「起きたか雪乃。だったら」

俺は起きた雪乃を仰向けにしてその上に姫乃お義母さんを覆い被せるようにした。そして姫乃お義母さんのマンコからチンコを抜いて二人のクリトリスに擦り付けた。

「んんっ♡あっ♡だ、だめえ♡八幡君♡」

「いい、ですよっ♡八幡さん♡」

「おおおおお!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるるるびゅるるるる……

俺は射精の際、二人から離れて全身に精子が掛かるようにした。二人は俺の精子でべったり汚れていた。それにしても俺のチンコはすっかり萎えてしまった。

すると姫乃お義母さんが俺のお尻に人差し指と中指を挿入してきました。するとチンコは一気に勃起した。

「まだまだですよ八幡さん。雪乃さんもまだ行けますね？」

「はい。お母さん」

俺は姫乃お義母さんに攻められながらも雪乃を犯した。そして今度は俺が姫乃お義母さんを犯している時に雪乃が攻めてきた。

それを朝まで続けた。そして寝る時に俺と雪乃は姫乃お義母さんに抱きつきながら眠りについた。

この人が俺の義母で良かったと思う。俺達の関係は限界が来るまで続くだろうな。

川崎沙希編

やはりサキサキと社会人になって再開するのはまちがっている。

うっす。比企谷八幡だ。総武高校を卒業して無事大学に進学して地獄の就活を終えて大学も卒業して会社員になる事が出来た。

ちなみに俺が就職した会社は残業が殆ど無い。大学時代に必死になって探したから。両親のような社畜には成りたくなかったからな。

それから数年の月日が経ち、今や立派な社会人だ。高校の時、平塚先生は俺には社会でやっていけないとか言っていたが全然やっていけている。

俺の今の姿を雪ノ下と一緒に見せてドヤ顔をしてやりたい。それとこれは噂が平塚先生はまだ結婚が出来ていないらしい。

俺が大学卒業辺りに急に俺の所に現れて「結婚してくれ!!」と迫られた。冗談ではない!!どうして俺が二周り年上の暴力女と結婚しなくてはいけない?!

それに俺には結婚なんて縁遠いものだ。職場には女性は居るけど、全員結婚しているか彼氏が居る。

つまり俺には結婚以前に出会いが無い。

「お〜い比企谷!」

「どうしました?先輩」

仕事をしていると俺の教育係の先輩が話しかけてきた。この先輩は凄くいい人だ。前に何回もお酒の席で奢ってくれたし仕事のやり方だつて丁寧に教えてくれた。

ちなみに三歳になる娘さんが居るお父さんだ。奥さんは美人だ。写真を見せてきて自慢された。マジで美人だった。

「明日、新人が来るからお前、そいつの教育係な」

「お、俺がですが!」

「大丈夫大丈夫。俺がしたようにすればいけるって」

「はあ……まあ、分かりました。頑張ってみます」

「おう。それじゃ明日、よろしくな」

まさか俺が新人教育を担当する事になるとは思いもしなかった。いつかはする事になると分かりきって事だ。覚悟を決めろ比企谷八幡!!

よし! 帰りに居酒屋によって飲んで帰ろう。

「……………」

俺は目の前の新人に驚きのあまり一言も喋れないでいた。女性では結構身長高めで青みかかった長い黒髪をポニーテールしスーツをビッシと着て身長と相まって中々似合っている。いや、今はそんな事を考えている場合か!?

「こつち新人の川崎沙希さん。それでこいつが君の教育係の比企谷八幡。仕事で何か分からない事があれば彼に聞いてくれ。それにしてもどうした? 比企谷、さつきからあ然とした顔をしているぞ?」

「……川崎さんとは高校時代のクラスメイトです……」

「おおお! そうか。それなら大丈夫そうだな。それじゃ後は頼んだ」

先輩は俺の肩を叩いて行ってしまった。それしてもさつきから川崎の顔が少し怖い。だって凄く不満顔をして睨んできているんだ。

俺にどうしろと! だけど、仕事は仕事だ。頑張れ俺!

「そ、それじゃ仕事の内容について説明するから分からない事があつたら聞いてくれ」

「……はい。比企谷……先輩」

「……あく先輩は付けないでくれ。高校のクラスメイトに『先輩』呼ばわりされるのはどうもむず痒い」

「……分かった。よろしく比企谷」

「ああ。それで——」

とりあえず挨拶を済ませた俺は川崎に仕事について教えた。事前

に練習したからな。だけど、結構緊張したぜ!!

だって、新人がまさか高校時代のクラスメイトとか分かる訳ないじゃん!! だけど、完全に知らない人間よりかはマシかな。

「……って、事だから。ここまで大丈夫か?」

「うん。付いてきているよ。進めて」

「ああ。それで……」

川崎は俺の説明にしつかり付いてきてすぐに仕事に慣れ始めた。正直、ここまで川崎が優秀だと思わなかった。これなら俺の教育係もすぐに終わりそうだな。

そして俺が川崎に仕事を教えてもうすでに一ヶ月が過ぎていた。よし定時だ。今夜は久し振りに飲んで帰るかな。

「……比企谷」

「川崎か。どうした?」

「これから予定とかある?」

「いや、これから飲んで帰る所だけど……」

「じゃあ、あたしと飲まない?」

川崎からのお誘いだ。まあ、別に一人で飲もうが二人で飲もうが変わらない。断る理由もないしいいか。

「ああ、いいぞ。それでどこにする? 俺のお薦めでいいならそこに行くか?」

「一応、予約出来る所を取ってある。そこに……」

「おう。分かった」

川崎が予約した所ってどこなんだ? いい穴場なのだろうか?

川崎が予約した店は個室のオシャレな店だった。それにしても個室ってのがいい。プロボッチがまだ抜けない俺としても周りを気にしないで飲めるのがいい。ナイスチョイスだ川崎。

俺は気になる事を川崎に聞いてみる事にした。

「川崎ってどうしてウチに転職してきたんだ？」

「……どうしてそんな事を聞くの？」

「ああ……なんか気になって。別に話したくないなら……」

「上司のセクハラや仕事のミスを擦り付けられた……」

「なんだか結構ベヴィな内容だな。それにしてもクソな上司だなぞいつ。」

「それにムカついて金的思いっきり蹴ってやった」

「ひいひい!？」

俺は思わず股間を押さえた。怖い!?川崎さん、意外にアグレッシブだ!俺も蹴られないように気を付けよう。

「ま、まあ……とりあえず飲もう。な?」

「うん。乾杯……」

「か、乾杯……」

俺は川崎のグラスに軽くぶつけた。カーンと音がしてから酒を飲み飲んだ。

「……………(ん)ど(ん)?」

いつの間にか眠ったらしく起きた時にベットの上で大の字になっていた。ここがどこか分からないが一つだけハッキリとしている事がある。

ここは俺の住んでいるマンションではない。だってベットが異様に広いからだ。ダブルベットくらい広い。

「……あ、起きたんだ。比企谷」

「川、崎……………」

俺は川崎の姿に絶句してしまいました。何故なら川崎はバスタオル一枚しか身に付けていなかったからだ。身体が少し濡れている事から風呂かシャワーでもしたのだから。

それにしても川崎って結構、いい身体しているな。いや、そういう事ではなくて!!

「ふ、服を着たらどうなんだ？風邪を引くぞ……」

「比企谷……んんっ……」

「んんっ!?……んんっ!!……ま、待て川崎!」

いきなり川崎に唇を重ねたと思っただら舌を口の中に入れられた。中々激しかったし川崎の唇、柔らかかった。いや、そこじゃなくて!!

「な、なんでこんな事を……」

「……高2の文化祭の時、『愛している』って言われて好きになった」
「ぶ、文化祭?」

俺、そんな事を言ったのか?ヤバい。まったく覚えていない。もし覚えていない事を言ったら不味いよな。

『愛している』なんて言われたからあたしも比企谷を『愛する』』

「ちよ、ちよっと待て!!」

「比企谷の方も準備、大丈夫そうだし」

「……へ?……あつ!」

俺は自分の股間を見た。すると八幡のハチマンが元気よくそそり立っているではないか!まあ、川崎の姿に欲情しなかったらしなかったらで問題だけど、出来れば今は押さえておきたかった。

「それじゃ行くよ」

「ま、待ってくれ!」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「痛っ……!?!」

「おおおおお……!!」

川崎は自分から腰を降ろし俺のチンコをマンコの膣内に挿入させた。それにしてもSEXがこれほど気持ちいいとは知らなかった。

これで俺は童貞卒業か!それにしても川崎はなんだか辛そうな顔をしている。よく見てみると川崎のマンコから血が流れていた。

「お、おい川崎。お前、大丈夫なのか?血が出ているぞ」

「……『初めて』だからね」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「ひい♡……ひ、比企谷!？」

「……そんな事を言われたら興奮するだろ。俺は理性のバケモノと言われた事があるけど、もう理性を保てそうにないぞ。覚悟しろ川崎」
「うん。来て比企谷♡」

川崎は俺と位置を入れ替えた。川崎が下で俺が上になった。これなら動き易い。俺はもう堪らず腰を前後に動かし川崎のマンコを味わった。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ああ♡♡ひ、比企谷♡も、もう少し……ゆっくり♡してくれない♡♡頭、真っ白になる♡」

「無理だつてさつき言ったような?お前が俺をここまで追い込んだぞ!?!や、ヤバイ!!もう射精する」

「だったら膣内に!!」

川崎は足を俺の腰の辺りで交差させて身体を固定した。不味い!?!このままだと膣内射精してしまう。

「だ、駄目だ川崎。もし妊娠でもしたら!」

「だ、大丈夫!安全日だから♡全部、あたしに射精して♡比企谷♡♡」
「か、川崎!!射精る!!」

びゆるるるるびゆるるるるつ……びゆるるるびゆるるるつ……

「ああああああ♡♡♡」

俺の射精と同時に川崎は絶頂した。その際にお互いに思いっきり抱きついた。俺は全ての精子を川崎の子宮に注ぎ込んだ。量が多かったらしくマンコから溢れ出ていた。

川崎は人には見せられない酷い顔になっていた。これが俗に言うアヘ顔というやつだろう。これは酷い。

「か、川崎?大丈夫か……」

「は、はいしょうぶらから……」

うん。大丈夫ではないな。呂律が回っていない。それに痙攣しているようで身体が小刻みに震えていた。でも何だろうか?この気持

ちは……俺はもつと川崎を犯したいと思う。

「川崎……もう一回行くぞ」

「ま、ましえ……いい、いしやばかひだから……」

「俺は我慢出来ない……」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひい♡……しえめてはさひく……」

「それ無理」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は川崎の頼みを無視して腰を動かした。川崎のマンコがこんなに気持ち良いものだったとは思ひもなかった。

こんな気持ちを味わったらもう他の事なんてどうでもいいと思える！

「しやめ♡あたま、おしゃいくなしゅ♡♡」

「お前が悪いんだ!!お前がこんな所に俺を連れて来るから!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

別に川崎に怒っている訳でもないが、なんだか昔——忌まわしき総武高校の2年の時を思い出してその時の想いが一気に心の奥底から溢れ出たという感じだろうか。

「ひ、比企谷♡も、もう少しゆっくりして……」

「だから無理だつて……それにもう射精そうだ!」

「またなかで♡いいから……♡♡」

「川崎!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は腰を一心不乱に動かした。俺の頭の中にはもう川崎の事しか無かった。この女をもつと犯したい。

「あっ♡んんっ……ひ、比企谷♡♡」

「川崎!!」

びゅるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「ああああ♡♡♡」

「おおおおお……」

二度目の射精も凄い勢いで出てしまった。川崎のマンコが蠢いて凄いい事になっている。まるで全部の精子を吸い尽くすと思わせる感じだ。

その後の事は覚えていない。体力の限界かそのまま寝てしまったからだ。

目が覚めたのは次の日の昼前だった。

やはりサキサキとまた飲みに行くのはまちがっている。

どうも皆さん。社会人の比企谷八幡だ。俺は今、ホテルの一室でもの凄く昨日の事を後悔していた。俺が勤めている会社に高校時代のクラスメイトでちょっとした問題を解消した人物——川崎沙希が転職してきた。

そして俺は彼女の教育係を先輩に言い渡された。俺は一ヶ月の間、色々川崎に教えてきた。そんな時に川崎から誘われて飲みに行つた。だが、それが間違いだった。

酔って寝た俺はいつの間にか川崎にホテルまで連れて来られて童貞を卒業してしまった!!

しかも川崎は俺が高校2年の文化祭に言つた『愛している』を今でも覚えていたらしくホテルで性行為に及び童貞卒業と処女喪失を同時ににした。

それにしても俺はもう高校の事なんて殆んどつていうかまったく覚えていない。思い出してもいい事なんて一つも無かつたからな。

それはおいて置くとして来週からどんな顔をして会社に行けばいいんだよ!?!一週間も休む訳にはいかない。だが、幸いに今日明日は休みだ。

俺が勤めている会社は土日が休みが多い。だから週末に思いっきり酒が飲める。

それが良かったのか悪かったのかは分からないが、どんな顔して川崎に顔を合わせればいいんだよ!?!

休みたい。本当に休みたいけど、皆勤賞を逃してしまう。高校時代は皆勤賞なんてどうでも良かったが、今はどうでも良くない!!

頑張れ!俺!!

しかし俺の予想と違って川崎はここ数日の間、普通に接してきた。仕事で分からない事があれば聞いてくるし特に変わり榮えしなかつた。

俺の童貞卒業はまさか夢だったのか!?じゃあ俺はまだ童貞? いやでもあれが夢だとは思えない。リアルな感触だったしな。

ならどうして川崎は何も言ってこないんだ?こんな時誰かに相談出来ればいいが、異性の事を相談出来る相手がいない。

先輩にでも相談するか? いや無理だな。あの人、今相当忙しいと言っていたからな。ここは覚悟を決めるしかない。

「……川崎。ちよつといいか?」

「……………いいけど」

ま、間が長かった!?今の間は一体なんなんだ?怖いが行くしかない。覚悟を決めたんだろ!男を見せる比企谷八幡!!

「今夜、飲みに行かないか?この前、酔ったて寝た時に世話になったから今夜は俺が驕るからさ……」

「……………うん。いいよ」

「お、おう。そうか、終わったら言ってくれ」

俺はそれだけ言って川崎から離れた。なんとか誘えた。よし俺も早く仕事終わらせよう。それに明日は仕事は休みだからな。

「……………」

俺と川崎は仕事を終わらせて俺が行きつけの居酒屋のカウンターで酒を黙って飲んでいた。沈黙が痛い。

そもそも何を話したらいいんだ!?

「そう言えば、妹……小町だっけ?元氣?」

「あああ……元氣じゃないか?知らんが」

「知らないの?」

「ああ。俺、高2の終わり辺りから一人暮らしさせられてそれ以来実家には帰っていないんだ」

俺が一人暮らしをさせられた原因は修学旅行での嘘告白だ。恐らく由比ヶ浜が小町に教えたのだろう。その事で小町と口論になり小町が両親に泣きつき親父が俺を家から追い出した。

卒業までの学費は払ってやるからそれ以外は自分でどうにかしろと言われた。そこで俺はバイトを始めた。それからは奉仕部には行っていない。

それに雪ノ下と由比ヶ浜は俺に来て欲しくないみたいなき事を俺は聞いてしまった。それからはバイトに明け暮れた。

平塚先生は何度も俺を奉仕部に連れて行こうとしたが俺は全力で逃げた。

俺はその事を川崎に話した。すると川崎はかなり不機嫌な顔になった。怖っ!?

「そんな事があったんだ。……それにしても雪ノ下も由比ヶ浜も何もしていないのに比企谷を否定とか何がしたいのあの二人?」

「さあ?俺の知った事ではない……」

俺が奉仕部に行かなくなり少し経った時、雪ノ下は何故か生徒会長に立候補して生徒会長になっていた。

それとこれは噂だが、1年の女子がいじめに遭い転校したとかしてないとか。まあ、俺にはどうでもいいけど。

「川崎の方はどうなんだ?確か……けーちやんだっけ?元気か?」

「うん。元気だよ。今年総武に入学したから」

「マジか!?あのけーちやんがもう高校生かよ……」

何か時間の流れを感じるな。そんな事を思いながら俺と川崎は酒を飲んだ。それからは黙って飲んだ。会話が途切れてしまった。

川崎は俺に気を使っているんだよな。雪ノ下や由比ヶ浜の話聞いて不機嫌になったからな。

俺も川崎も今日は飲みたい気分だったが酔いたい気分ではなかった。なので少し早めに切り上げた。

「どうしてこうなった……」

俺はまたしてもホテルに居る。しかも川崎と一緒にだ。川崎が行きたい所があるかと言っていたのでどこかで飲み直すとばかり思っていた。

そして着いてみればホテルだった。

前に川崎とした時の事を思い出してもうムスコは勃起していた。準備がいいなお前は!?

すると川崎がバスルームからバスタオル一枚で出てきた。普段はポニテにして髪を下ろしているので新鮮に感じてしまう。

川崎は俺の隣に腰を下ろした。肩が触れてもおおかしくないくらいの距離だ。

「比企谷は……あたしとまた、したい?」

「川崎……んっ」

「んんっ!?!……ぴちゃ……くちや……」

俺は川崎を押し倒して唇を奪った。その際に川崎が身体に巻いていたバスタオルがはだけて川崎の裸体が露になった。前の時も思ったが川崎って巨乳だよな。

高校の時も結構なっと思ったが、さらに大きくなったではないだろうか?

それはさて置き俺と川崎はお互いの唇を食った。もうグチャグチャに溶け合うのではないかというくらいに。

「くちや……ぴちゃ……くちや……」

「はあ……♡はあ……♡比企谷。早くもうあたし……♡」

「はあ……ああ、俺もだよ。行くぞ……」

「ずずずずず……」

俺は川崎の膣内にゆっくりと挿入した。川崎の膣内は前回、味わった時と同じで俺のムスコを締め付けてきた。

気を抜いたらもう射精しそうだ!!

「ひ、比企谷……が、我慢しないで、いいから!」

「か、川崎!!」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「うひい♡ひ、比企谷……そ、そんなにつよくは……♡こ、こわれる♡♡」

「か、川崎!!俺はお前を壊したい!!」

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひいいいいい♡♡だ、だしえ……あたま、しろくなるから♡♡すこし、おさへて♡」

「だから無理だつて!!お前のそんなエロい姿見せられたらなお更だ!!」

俺は川崎の膣内にチンコを容赦なく突いては引いて突いては引いてを繰り返した。それを繰り返す度に川崎は段々エロい声を出していった。

「だしえ♡♡しゅごくへ♡もうひ、比企谷の♡ことしか、かんがえらへない♡♡」

「俺も川崎の事しか考えられない!!愛している!!」

「っ!!いい、いま……そんなこというか♡♡」

川崎の膣内がさつきより締まりが良くなった。ギチギチに締め付けてきてもう射精する!!

「か、川崎!もうで、射精る!!」

「いいから♡♡またなかに……ちようだい♡♡」

川崎は足を俺の腰に回し俺が逃げられないようにしてきた。元より俺は逃げるつもりはない!俺の理性的や本能が外に射精するなど言っている。

目の前のメスに射精して孕ませろと言っているようだ。川崎もそれが分かっているのか膣内が強く締め付けてくる。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「か、川崎!!」

「ひ、比企谷♡♡」

びゅるるるるるっびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「おおおおお!!」

「あああああ♡♡♡♡」

俺の射精と同時に川崎も絶頂したようだった。俺はそのまま川崎の胸に倒れこんだ。ちよつと疲れたな。

「……比企谷。重い……」

「わ、悪い。でもちよつと疲れたからこうして休みたいんだけど……なんて？ 駄目か？」

「……ちよつとだけならいいけど……」

川崎はどこか顔がニヤついているように見えた。え？ 何か言い事でもあったのだろうか？ 処女喪失は前回だと思おうし何がそんなに嬉しいんだろうか？

「それにしても比企谷の全然、萎えていないね」

「ああ……そのうちよつと前まで童貞だった俺にあんな気持ちいい事を知ったらオナニーじゃ満足できなくてここ3〜4日ほど溜めていたので……」

この間の川崎でしたのが童貞卒業だった。それまではオナニーで発散していたんだ。そこに女を味わえば、オナニーだけでは満足出来ない。

「ふくん……そうなんだ……」

「あの〜川崎さん？」

川崎はさつきからブツブツと何か言っているようだが、聞かない方がいいかもしれない。それにしても川崎の身体、エロ過ぎ!!

「ねえ比企谷。男の人って一回射精したらしばらくは出来ないって聞くけど、アンタは違うみたいだね」

「え？……まあ、な」

俺の愚息はいまだに元気がいい。川崎の膣内で大きく固いままだ。俺の心はもつと川崎を犯せと言っているのだ。

「……いいよ」

「え？ いいのか？」

「だ、だからそう言ってるでしょ……な、何度も言わせるな」

「お、おう。じゃあ……」

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「ひい♡い、いきなり激しすぎ♡♡」

「まだ溜めた分、射精してないんだ。それにお前がいいと言ったん

じゃないか!!」

俺は問答無用に川崎に腰を打ちつけた。川崎の手を掴んで犯し続けた。それはまるで愛のある性行为ではなく獣の交尾に近かった。

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「ひいひいひい♡♡だ、だへ……たしやま、しろくはる♡♡」

「何言っているのか!分からないぞ!!川崎!!」

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

俺は腰を引いては挿入してを何度も繰り替えた。その度に川崎の顔は凄い事になっていった。目からは涙が止まらず鼻から鼻水が出続けて口からは涎が溢れていた。

そんな顔を見たのか俺は限界が近かった。もう射精しそうだ!!

「か、川崎!またこのまま膣内に射精していいよな!」

「き、きへ♡ちよはい♡♡ひきがやのへーし♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるる……びゅるるるびゅるるる……

「い、いぐうううう……♡♡♡」

「おおおお……絞られる!!」

俺は射精の直前に川崎の手を離して川崎の身体に抱きついて密着した。川崎は足を俺の腰に回してホールドしてきた。

俺は精子を全部、川崎の膣内に射精しきった。

そして俺と川崎はそのまま寝てしまった。でもここ数日で気持ちいい射精だったな。

やはりサキサキが俺の部屋に泊まるのはまちがっている。

うつつ。社畜にならずに済んだ比企谷八幡だ。それにしても就職した会社に高校時代の同級生の川崎沙希が転職してくるとは思いもしなかった。

高校時代より色々大きくなって大人の魅力に溢れていた。俺が会社で教育係になり色々と指導して二人で飲みに行った。

そこまでは良かったが、酒に酔って寝て起きたらホテルで川崎とSEXした。それも二度もだ。

俺はあやふやな関係は良くないと思い川崎に思い切って告白したらすんなり上手いき、俺と川崎は晴れて恋人同士になった。

最初、俺は断られるのではないかとビビっていた。これまでの人生で女性に対してどこか諦めていたからだ。

でも川崎は違った。俺が出会ってきたどの女性にも当てはまらない。

小町のように俺をゴミ扱いしないし人の話をちゃんと聞いてくれる。

雪ノ下のように毒舌をしてこないどころか褒めてくれる。

由比ヶ浜のように「キモツ」と罵倒してこない。

平塚先生のようにすぐに暴力に訴えてこない。

雪ノ下さんのように人をからかってこないし回りも巻き込まない。

相模のように仕事を投げ出さない。

海老名さんのように自分の問題を人任せにしてこない。

俺が出会ってきた女性は色々と問題があった。でも川崎は違ったのだ。俺は嬉しさのあまり川崎の前で号泣してしまった。

そんな俺を川崎は優しく撫でて慰めてくれた。

それから俺と川崎の生活にはちょっとした変化があった。週末、仕事が終わると二人で飲みに行くようになった。

交互にどこに飲みに行くのかを決めている。俺は安くて美味しい他

にも大勢客の居る店だが、川崎は個室があるゆったり出来るお店に行く。

そして飲み終わったら俺のマンションに来てシャワーを浴びてからSEXをする。酔っているので一回だが、それでも結構激しい行為だ。

それから寝る。それをもう二ヶ月近くしている。これが中々いい感じで馴染んでいる。

そして今、俺は川崎をベッドの上で押し倒していた。

「川崎……」

「比企谷……来て♡」

お互いにもう全裸で手慣れたものだ。俺のチンコは固く勃起しており川崎のマンコはすでに濡れている。俺はゆっくりと川崎のマンコに挿入した。

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「ひい♡も、もう奥まで♡♡」

川崎のマンコは凄く締め付けてくる。これは何度味わっても頭の奥が痺れる感覚になるが、それがとても心地いい。

「川崎!!川崎!!」

「ひ、比企谷♡比企谷♡♡」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!」

腰を引いて突き出す。それを繰り返すたび、川崎のマンコは反応してきつく締め付けてくる。

それに普段と違って川崎が淫らな表情をしていると凄く興奮する!それとついついじめたくなる。

俺は川崎の耳に近づいた。

「……川崎。凄く可愛いぞ」

「っ?!ひ、比企、谷……そ、そんな冗談はいいからっ!!」

「冗談じゃなくて本気でそう思うんだ。可愛いし綺麗だ……」

「だ、だめ!!そんなこと言う……♡♡」

川崎が先ほどよりきつく締め付けてきた。川崎は「可愛い」とか「綺麗

麗」だとか言われるとマンコの締め付けが強くなる。

でも一番強くなる言葉は違う。俺は先ほどよりも感情を込めて川崎に一番締まる言葉を言った。

「……沙希。愛している」

「っ!?そ、そんなこと、言われると……♡だ、だめになる♡♡」

「沙希。世界で一番愛している」

歯が浮きそうな言葉と自分でも思う。だけど、川崎にはこれが一番効く。その証拠に川崎のマンコはさつきよりきつく締め付けてきた。

俺は頑張つて腰を動かした。

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「だ、だめ!?!ひ、比企谷♡い、いぐうううう♡♡♡」

「ぐっ……!!」

びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるびゅるるっ……

俺の射精と同時に川崎はイッたようだ。その際に俺は川崎に抱きつき精子をマンコの奥に全部射精しきった。

避妊していなかったら絶対に妊娠しても可笑しくない量の精子だ。平日溜め込んだものをこの時に射精するのがとてつもなくいい。

開放的な気分になるからだ。でも酒飲んでしたからもう寝よう……。

「……あれ?川崎?」

朝というか昼前に空腹で目が覚めると横で寝ていたはずの川崎がどこにも居なかった。それにしても臭いし一旦シャワーを浴びた方がいいな。

部屋から出てると川崎が台所で料理をしていた。それはいい。問題がある。

川崎は俺のシャツを着て料理をしているのだ。男性用だからいくら背が高い川崎でも少し袖を余しているようで捲くついていた。

「…………お、おはようひ…………は、八幡」

「お、おう。おはよう川崎」

「……………」

あれ？川崎が一気に不機嫌になった。俺、何か不味い事でも言ったか？ただ朝の挨拶をしたただけだよな？

何が不満なんだ？分からん。それにしても川崎の裸シャツはエロい!!

上は谷間が見えるほど開いており下はギリギリパンツを履いているかいないかが分からない。

そんな姿を見たからか俺のチンコは勃起してしまった。

「…………先にシャワーでもしてくれば」

「お、おう…………」

川崎の奴はまだ機嫌が悪いらしい。どうすれば直るんだ？シャワー浴びたら聞いてみるか。このままだと居心地が悪い。俺の部屋なのに。

「あのく川崎、どうしてそんなに機嫌が悪いんだ？俺、何かしたか？」

「…………名前で呼ばなかった」

「え？名前？」

「昨日は名前で呼んでくれたのに朝は呼んでくれなかった…………」

機嫌が悪かったのは名前で呼ばなかったからか。昨日、呼んだ気があるような無い様な？でも呼ばないといつまでも不機嫌なままだよな。

「その…………すまんさ、沙希」

「ん…………いいよ八幡」

名前で呼ばれるのって少し恥ずかしいな。でも嬉しいぜ。ヤバイ、沙希の今の姿を見ていると興奮してしまう。

裸シャツにエプロンだからな。エロ過ぎだ!!

「その…………沙希。朝から悪いんだけど、いいか？」

「朝から？まあ、いいけど」

「あ、出来ればそのままの服装で！」

「……変態」

沙希は俺の事を変態と言うがその変態の言われるがまましてきた
プレイはどうなんだ？と言わない方がいいな。機嫌が悪くなる。

でも俺の言う事はしつかりと聞いてくれるので嬉しい。椅子から
立ち上がってテーブルの上に手を付いてお尻を俺の方へ向けてきた。
するとポタポタと愛液が垂れていた。沙希も俺同様に興奮してい
るようだ。

俺は沙希の両手首を掴むと一気にマンコに挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡い、いきなり、奥まで♡♡」

「奥を突かれるの好きなくせに！」

「そ、そうだけど♡いきなり、過ぎ♡♡」

「行くぞ沙希！」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずず
ずつ……ぱんっ!!

「ひいひいひい!!だ、だめ♡そ、そんなにつかれたら♡♡すぐにいく♡
♡♡」

「いけよ！朝から濃い射精してやるからな！」

「ま、待って!?!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずず
ずつ……ぱんっ!!

俺は沙希のマンコに容赦ない腰の動きで攻め続けた。マンコはい
い締りをしていた。これはすぐに射精る！もう射精る!!

「で、射精るぞ！沙希、愛している!!」

「うひいひいひい♡♡♡♡」

びゆるるるるびゆるるるるつ……びゆるるるびゆるるるつ
……

「いぐうううう♡♡♡♡」

「おおおお……搾られる……」

沙希に「愛している」と言ってから射精すると最高に気持ちいい！

きつく搾るようにマンコが蠢く。避妊していなかったら確実に孕んでいるんじゃないかと思う。

沙希はイツた余韻を味わっていた。俺が両手首を離すとそのままテーブルに倒れこんだ。お尻が震えていた。痙攣でもしているのか？

目からは涙を鼻からは鼻水を口からは涎をダラダラと出している沙希はとつても無様で素敵だった。

とんだ鬼畜の変態になってしまった俺。でも仕方がないじゃないか！沙希とベットを共にして理性がだんだん抑えられなくなったんだから！

雪ノ下さんは俺の事を「理性のバケモノ」と言っていたがもう俺は他の人間と同じ「本能のケダモノ」だよ！！

「……変態のケダモノ」

「うっ……」

「……鬼畜の権化」

「ぐっ……」

「……発情期のサル」

「あがつ……」

沙希に散々言われてしまった。その度に胸に針が刺さるようだ。俺は全力の土下座をした。これで許してもらえないだろうが、全力で謝る！！

「す、すいませんでした！！」

「……………」

ち、沈黙がこれほど怖いと思った事は無い。しかも睨まれているんだけど!?怖い怖いよ沙希さん!!

沙希は服を脱ぐと俺の手を取って、そのままソファーに押し倒した。

「あのく沙希さん？」

「あたしだって八幡の事を気持ち良くしたい……………」

「ああ…………ど、どうぞ。好きに……………」

「んっ……………」

沙希はいきなりキスからしてきた。俺はされるがまま、受け入れた。なんと言うか沙希のキスはどこかぎこちなかった。

まあ、キスは基本は俺からするからな。沙希からするのはこれで片手で数えられるほどか？もどかしいがここは我慢する。

朝からさせてもらったからな。でも沙希からするのは新鮮だな。

「んんっ……んんっ……」

「ぶはあ……沙希、早く挿入してくれ……また、したくなった」

「今回はあたしが上になるから……」

沙希は俺を押し倒したままゆつくりと俺のチンコをマンコに挿入し始めた。

「ずずずずず……」

「んっ……ホント、一回射精したのに……すぐに固くなるの？」

「そ、それはこんな美人で可愛くステキな彼女だからだ」

「っ!?ふ、不意打ちするな!!」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

そ、それは沙希もだろ!?!いきなり全部、呑み込むから刺激が強い！でも嫌いではない。

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……」

「ず……ぱんっ!!」

沙希が腰を上下される度に胸が揺れて大変素晴らしいな！それにもうそろそろ射精しそうだ!!

「さ、沙希！もう射精そうだ！」

「ま、また膣内に射精しな！」

「で、射精る!!」

「びゅるるるるびゅるるる……びゅるるるびゅるる……」

「ああああああ♡♡♡」

「で、射精たな……」

起きてから二回も射精してしまった。沙希は疲れてようで俺に倒れ込んできた。胸が押し付けられているこの体勢は良いな!!

あ、そうだ。あれを沙希に渡そうと思っていたんだ。忘れると事だった。

「さ、沙希」

「何？八幡」

「渡したい物があるんだ」

「渡したい物？」

俺はソファの下に隠していた物を沙希に見せた。それは手の平に収まるほどの小さな箱だ。

「これって……」

「川崎沙希さん。俺とけ、結婚してください」

俺が取り出した小さな箱の中には指輪がある。婚約指輪だ。俗に言う給料3ヶ月分と言うやつだ。

「……いいの？あたしで……」

「沙希がいいんだ。そ、それで返事を聞かせてくれないか？」

「……うん、よろしく八幡」

沙希は泣きながら頷いてくれた。ああ、チョー緊張した。人生で一番緊張したな。今後、これ以上の緊張する事は無いな。

沙希から返事を貰った俺はベッドに移動してさらにSEXした。次の日、俺と沙希は腰を痛めてしまったのは別の話だ。

やはりサキサキとコスプレを楽しむのはまちがっている。

うつつ、比企谷八幡だ。社畜社会人を回避してホワイト企業に絶賛勤務しているぜ。そこにまさか高校時代のクラスメイトの川崎沙希が転職してくるとは驚きを隠せない。

てか、恋人になったのが今でも信じられない!!

だってスタイルが抜群でも目つきが怖い。料理がめっちゃくちや美味いけど目つきが怖い。身体の相性抜群でも目つきが怖い。

てか、俺はただだけ沙希の目つきを怖がっているんだ!? 知られたら殺される!!

それにしてもこの間は勇気を出して良かったぜ。沙希に婚約指輪を渡したのは人生で一番緊張したぜ! でも渡せて良かった。

俗に言う給料三ヶ月分ってやつだ! 時々、沙希は指輪を見てはニヤニヤしている。ちよつと不気味だったのは心に仕舞っておこう。

さて、話は変わるが俺は今、沙希と一緒に裁縫をしている。別に俺の服が破れた訳では無い。これは作っている。

それもあるアニメのキャラが着ている服だ。それにしても沙希さん、手馴れていらしゃる。

「……なあ、沙希」

「何? 八幡」

「お前ってコスプレするの?」

「……はあ?」

こ、怖っ!? 今の「はあ?」は素だ。マジもんの素だ!! 人の言葉でこれほど短くて怖いと思った言葉は無い!!

「あ、いや……じゃあこれ、誰が着るんだ?」

「海老名さん? か、その知り合いかな?」

「海老名?」

「高二の時の……」

「ああ! あの腐女子の……」

思い出した思い出した。よく葉山と戸部だったけ？その二人を見
ては鼻血を出していた。彼女か！

でも今は大人だから女子ではなくて……なんて言えばいいんだ？
まあ、いつか！

「これ着て何をするんだ？」

「確か、同人誌を売る時に着ると目立つから売り上げが伸びるんだっ
て」

「てか、なんでそれを沙希が作っているんだ？」

「衣装作るの得意だから頼まれたの……材料費は全部、向こう持ちだ
からただで出来る趣味ね」

「さいで……」

それにしても海老名さんか。今はどうしているんだろうか？彼女
もどうだが、雪ノ下とか由比ヶ浜とか小町とか俺の癒しの天使の戸塚
とか。

え？材木座？誰それ？そんな奴居たの？どうでもいい。

「沙希はさ……」

「何？」

「着たいと思わないのか？」

「……着て欲しいの？」

「出来れば……」

沙希がコスプレとか普段のギャップがあって興奮すると思う。俺
の中でぜひ着て欲しいキャラのコスプレがある。

たぶん、似合うと思う。だってちよつとそのキャラと似ているか
ら。

「……ちよつと待ってて」

「お、おう……」

沙希がいきなり立ち上がって部屋から出て行った。何しているん
だ？そして沙希が戻ってきた。俺はその服に思わずあ然としてし
まった。

何故ならその服はとある魔術のヒロインの一人の神裂火織の墮天
使エロメイドの服だったからだ。

あれは俺が沙希に着て欲しいと思っていたキャラの服の一つだ。てか、いつの間に用意したんだ!?

「な、なんで……そのコスプレ?」

「前に部屋を掃除していたら見つけた……」

「ああ、なるほど……」

しまった!? 片付けるのすっかり忘れていた! あの同人誌は沙希と再会してすぐにあったイベントで購入した。

俺はたまに遠出したりする。その時に購入したものだ。見た目とかどことなく感じが似ていたので購入した。でもまさか本人が着てくれるなんて最高だ!!

俺はスマホのカメラモードを起動して写真を撮りまくった。アニメの本人と変わらないスタイルだから最高に決まっている!

「ちよっ!? 写真は撮らないでよ!!」

「頼む! 俺だけの宝物にするから! 絶対に誰にも見せないから!」

「……誰にも見せないでよ」

沙希は強めに頼みと最後には言う事を聞いてくれる。俺は沙希を一周しながら色々な角度で写真に収めた。うん、エロい!

ヤバい、勃起して来た。よし犯そう! もう犯す! 今日はコスプレSEXをするぞ!

「沙希。今、したい」

「え? 今……着替えたいんだけど」

「その格好で犯したい。いや犯させろ」

「え、あ……♡」

俺はいつの間にか沙希をベットに押し倒していた。沙希も沙希で抵抗はしなかった。彼女もまたしたいようだ。

「沙希。俺の事は今だけでいいからご主人様って言うてくれないか?」

「……ご、ご主人様……」

沙希は顔を赤くして視線を斜め下に向けた。うん、可愛い!! 俺は沙希の胸の服を下に降ろしパンツを脱がした。うん、安定の黒のレースだ。エロい!

「なんだ？前戯をする前にもう濡れているじゃないか。お前は本当に淫乱なメイドだな？」

「ご、ご主人様。お願いです♡は、早くください！」「何を？」

「っ!？」

ちよっといじわるしてみた。それに沙希も何だかんだでメイドになりきっている。

「……ご、ご主人様の大きくて、逞しいおチンチンをこの淫乱メイドにお惠民ください♡♡」

「……いいだろう!!」

沙希さん。一体いつの間にそんなエロいセリフが言えるように!?俺は一気に奥まで挿入した。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい♡」

「おおおお……」

沙希のマンコはいつになく締まりが強くなってた。それだけ彼女も興奮しているという事だろう。それにしてもまるでアニメのキャラを犯しているような気分になるな。

背徳感がヤバいくらい押し押せてくる。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ま、待ってー!」

「無理だ。それに凄く興奮する!!」

「ひい!？」

俺は沙希の両腕を掴んで身動きが出来ない状態にしてさらに腰の動きを早くした。本当にヤバいくらい興奮する。

もちろん沙希の事は好きだけど、アニメのキャラを犯していると思うと腰が勝手に動く!

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい♡♡♡♡♡♡」

「おおおおお……凄いい締め付け！も、もう射精る！」

「ま、まっして……♡♡」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ……

「ああああああ♡♡♡」

「おおおおお……!!」

俺は沙希の制止を聞かずに思いっきり膣内射精した。これまで何度も沙希としてきたが、今回は今まで気持ち良さの比ではなかった。

これは嵌るな。また別のコスプレをしてくれないだろうか？

「……………」

「えくと……沙希さん？いい加減、機嫌を直してはくれませんか？」

「……………」

「衣装を汚した事は謝ります。すいません」

あの後、沙希はご機嫌斜めになってしまった。それもそうだよな。押し倒してうえに服を俺の精子で汚したんだからな。

そうして今は全力で謝っているが、一向に機嫌が直る気配は無い。このまま別れる事になるのは嫌だな。

「……………」

「あ、沙希……」

ついには部屋から出てってしまった。今回の事は全面的に俺が悪い。何とか晩飯で機嫌を取るしかないな。まずは部屋の掃除だな。散らかりすぎだ。

掃除が一段らくした時に部屋の扉が開いた。そこに立っていた居たのはもちろん沙希だ。

しかしその服がさつきまでとは違っていた。

「まったく先ほどはやってくれたなマスター？」

「……沙希さん？どうしたんですか？その格好は？」

「私の事は師匠と呼べと言ったはずだが？マスター」

沙希の今の格好は黒の全身タイツだ。その服はFGOのスカサハ師匠だった。しかも口調まで真似てくれて俺はいい彼女をもって幸せだぜ！

沙希は俺の腕を縛ってベットに押し倒した。お、今度は沙希から攻めてくるのか？ここは彼氏と受け止めないとな！

「あの〜師匠？」

「まったく情けないなマスター。女に押し倒されて、ここを大きくして」

「それは……」

沙希がズボン越しに俺の勃起したチンコを絶妙な力加減で触ってきた。それにしても触り方がエロい！！

沙希は自分でマンコの周りのタイツだけを破って俺に跨ってきた。

「覚悟はいいな？マスター」

「お、お手柔らかに……」

「んっ……♡」

「ずずずずずっ……ぱんっ！！」

「んんんっ♡」

沙希は挿入と同時にイッたようで口を手で抑えて必死に声が出ないようにしていた。そこがなんだか可愛く思えてしまう。

沙希は声には出さなかったが、思いつきり顔が緩んでいる。

「無理しないでいいからな？」

「む、無理なんてしてないからっ！！」

「そうか。でもそつちが動かないなら俺から動くな」

「ちよっ!？」

「ずずずずずっ……ぱんっ！！ずずずずずっ……ぱんっ！！ずずずずず」

「ずっ……ぱんっ！！」

「うひい♡♡」

俺が腰を動かすと我慢出来なかったのか沙希がついに声を出してしまった。本人はまた口を抑えたがもう遅かった。

「ずずずずずっ……ぱんっ！！ずずずずずっ……ぱんっ！！ずずずずずずっ……ぱんっ！！」

「あんっ♡だ、だめっ♡んんっ♡♡」

沙希は今度は我慢出来ずに最初から声を出してしまったようだ。それにしても汗でタイツが身体にピッタリ張り付いているのがなん

とも言えないくらいエロい!!

それに胸も上下に揺れて大変眼福です!お、手の拘束が緩まったのでそれを解いて沙希のお尻を掴んだ。

「ひい♡は、八幡っ♡♡」

「沙希。さつきは悪かったな、ごめん。やっぱり俺は沙希が居ないと駄目なんだ。どこにも行かないでくれ」

「っ!?そ、そんなのはアタシもお、同じだから……」

「さ、沙希!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

俺は我慢出来ずに腰を動かした沙希も俺と同じ気持ちとか嬉しいじゃないか!もう絶対に沙希を孕ませる!

俺の嫁にして子供と一緒に幸せに暮らすんだ!

「沙希!子供は何人欲しい?」

「へ?こ、子供っ!?そ、そんな事、急に聞かないですよ!」

「答えてくれ!」

「っ!?……さ、三人!」

そうか。沙希は三人欲しいんだな。よし、なら俺は頑張って沙希を孕ませるぞ!仕事も頑張って教育費を稼ぐぞ!

でもその前にやる事やるか!

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひいひいひい♡♡ま、まっ♡♡」

「もう射精そうだ!」

「ま——」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「い、いくうううう♡♡♡♡」

「のおおおお……!!」

沙希は俺の胸に倒れこんできた。イッた余韻で身体が少し痙攣していたが、少しすれば大丈夫だろ。それにしても完全に嵌ったコスプ

レSEXに。

よし、今度沙希と一緒にコスプレ服の専門店に行つて色々とお買おう。次は何がいいかな？ナースや普通のメイドも捨てがたいな。

え？もうナースもメイドも犯しただろ？つて……。何のことだから？

まあ、服もそうだが後が大変だった。ノリノリな気分が落ち着いたのか沙希はコスプレSEXの事を今更ながら恥ずかしがり布団に引き籠もった。

でも何とか機嫌も直ったので良かった。次もしようと約束した。顔を真っ赤にしてたけど。さて、次はどんな服を着てもらおうかな？

やはりサキサキがコスプレに嵌るのはまちがっている。

うつす、比企谷八幡だ。先日沙希の両親に結婚の許しを貰いに二人で川崎家に行った。正直、ガンコ親父でも出てくるんじゃないかと思っただが、まったく逆だった。

沙希に彼氏が出来ないのを本気で心配していた両親は二つ返事で結婚を許してくれた。その上、孫の名前を決める会議までする始末だ。

悪気は無いのは分かるが、そういうのはもっと後にして欲しい。沙希なんて終始顔を真っ赤にしていた。

それと久しぶりにけーちゃんに会ったが、JKの沙希を見ているようだった。髪型が沙希と同じでポニーテールだったのも関係している。

流石に高校生になったのか「はーちゃん」ではなく「八幡お義兄ちゃん」と呼ばれて心にグツと来てしまった！

義妹最高だ!!!実妹なんてクソ喰らえだ！

結婚の許しを貰って一週間ほど経った今日、俺の部屋に川崎家から来客が来た。義弟になる大志だ。昔より体つきが良くなっている。

べ、別に羨ましくないからな!?

「いや〜まさかお兄さんの事をお義兄さんと呼ぶ日が来るなんて驚きっすー!」

「俺もまさかあの時の妹の同級生が義弟になるなんて思いもしなかったよ」

「それで姉ちゃんとはよろしくやっているんですか?」

「張っ倒すぞ!それで何しに来たんだよ?」

「あ、そうでした。これ両親からの早めの結婚祝いです」

大志が綺麗な封筒を俺に渡してきた。これは沙希と相談して何に使うか決めないとな。

「ああ、ありがたく頂戴するわ。それでお前の方はどうなんだよ?」

「自分っすか？彼女は居ません」

「お前確か小町を狙っていたんじゃないのか？」

「……ああ。小町さんですか。ちよつと自分は遠慮したい人です」
「？どう言う事だ？」

俺は訳が分からなくなった。確か大志と始めてあったのが沙希のバイトの件を小町経緯で聞かされた。

その時の大志は小町を狙っていたように感じたんだが、小町に告つていないのか？

「知らないんですか？」

「高2から家を追い出されてな。そこから家族がどこで何をしていたなんか知らないんだ」

「そうなんっすね。実は……」

それから大志は小町について教えてくれた。小町は総武を受験したが落ちた。それは清々しいほどに合格点に満たなかった。

それで親父が学校に抗議したが、受け入れてもらえなかったようだ。滑り止めを用意していなかった小町は自分の実力より二つ下の高校に入学した。

それからは真っ逆さまの高校生活の始まりだった。まず総武に入学出来なかったのが相当精神にきていたようで不良と一緒に居るようになった。

そしてお酒とタバコに手を出して警察のお世話になった。しかし反省の色がまったく見えなかった。

そこから援助交際などにも手を出すようになったようだ。金遣いが荒くなり学校で後輩相手に恐喝して金を巻き上げるようになった。それで高校を中退した。

それが枷を外す事になったようでヤバイ所からお金を借りて返せなくなるのと知らない男に身体を売ったそうだ。

初めは大志や友人が止めていたが、それでも聞かなくなり離れいった。大志が知っているのはそこまでだった。

自分の妹がそこまで堕ちたとは始め思えなかったが、大志の顔は真実だと嫌でも物語っていた。

「そうか。そんな事になっていたんだな、小町は……」

「はい。自分も今は連絡もしていません。見ていると辛いので」

「ありがとな。教えてくれて」

「いえ、それじゃ自分はこれで。お昼、ご馳走様でした！」

大志は昼飯だけ食べて帰っていつてしまった。これで沙希とイチヤイチャ出来るぜ！

「大志。帰ったの？」

「ああ。ついさっきな」

皿洗いを終えた沙希が現れた。エプロンを着ている沙希も中々エロい！早く犯したい。すると沙希が俺に抱きつきキスしてきた。

「んっ♡……するんでしょ？」

「分かるか？」

「もちろん。八幡のここ、もう固くなってる」

沙希は視線を下に向けてニヤニヤとしている。沙希は俺から離れて部屋に入った。そして五分後、部屋から出てきた。

その格好は艦これの長門のコスプレだ。頭から足までかなり頑張って再現した。これを準備するのに約一カ月半ほどかかった。

それにしてもかなり高い再現度だ。普段はポニテの沙希だけど、下ろした髪方も素敵だ。短いスカートに適度に露出した腕や胸元など大変よろしい。

まさか沙希がコスプレにド嵌まりしてしまうなんてな。でも俺としては楽しいので構わないけどな。

「わ、私の提督は無事なんだろうな！」

「もちろんだ。長門、お前が俺の言う事を聞けばな」

「くっ……」

今沙希が演じている長門は好きな提督が無実の罪で捕まりそれを助けるためにゲス提督に身体を許した、という設定になっている。

設定が細かすぎるが、沙希が楽しんでるので俺としては何も言わない。

俺は沙希の後ろに周り込んで胸を掴んだ。この大きさはなんとも言えない感動がある。この巨乳で色々としたな。

俺が色々と思い出していると沙希が不満顔でこっちを睨み付けていた。怖っ!?

「こっちに集中して」

「わ、悪い悪い」

「んんっ♡」

「ふう……」

「はひい!？」

俺は沙希の胸を揉みながら耳に息を吹きかけた。すると沙希は可愛い声を出してくれた。普段なら絶対に出さないが、俺と二人つきりだとすぐに出てしまう。

だから俺は沙希の可愛い声が聞きたくてついついいじめてしまう。

「さて長門、そろそろ始めるか」

「わ、分かった……」

「パンツだけ脱いで尻をこっちに向けろ」

「くっ……こ、こようか？」

沙希はノリノリで俺にお尻を向けてきた。相変わらず綺麗なお尻だ。俺はそのまま沙希のアナルに挿入した。

「ま、待て！心の準備が!？」

「ごっちは物欲しそうにしているぞ！」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「のおおおお♡♡」

「酷い声だな、これがあの秘書艦長門が出した声とは思えないな！」

「ま、待ってくれ……お、おひりが、やける!？」

「お前が前が駄目だというからしかなく後ろを使っているんだろうが！」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!」

俺は沙希のアナルに腰を激しく打ちつけた。マンコと違って締め付ける強さが段違いだ。マンコは温かく締め付けるが、アナルは力強く締め付けてくる。

「おおおおお♡♡は、激しいいいいい♡お尻が、とじなくな

るううう♡♡」

「だったらガバガバになってしまえ！そしたらマンコを使ってやるからな!!」

「ま、前は……だめだあ♡前は、提督のためえにあ、あるんだあ♡お前のではないっ!」

沙希さんつてば、完全になりきっているな。俺も全力で相手になるか!

ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!

「うぎいいいい!!」

「射精るぞー!しっかりその汚いケツマンコで受け取れ!!」

「ま、まって——!?!」

びゅるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いぐうううう♡♡♡」

「おおおお……射精る射精る。流石は秘書艦長門だけの事はあるな。さて、次はマンコだな」

「ま、まってくれ。前はだけは……」

俺は沙希の身体をベットに押し倒して仰向けにした。そして足を掴んでマンコを丸見えにした。沙希はマン毛を全部剃ってくれている。毎日の手入れが大切だな。

ずずずずず……ぱんっ!!

「うひいいいい♡♡ま、前だけは……」

「お前のような淫乱秘書艦は犯されるためにいるんだよ!!」

ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!

俺も乗ってきて腰をさつきより激しく動かした。その度に沙希の胸が揺れるのは見てて楽しい。

「孕めえ!!」

「だ、だめえええ!!」

びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いぐうううう♡♡」

と、まあこんな感じでいつもコスプレプレイを楽しんでいます。まるで同人誌のような体験だ。少し休憩していると沙希が次の衣装に着替えてきた。

次はメイド服だ。それもただのメイド服ではない。ラノベの「ハイスクールD×D」に出てくる悪魔メイド、グレイフィアの格好だ。髪方もしつかりと再現している。

それにしても沙希って年上系お姉さんキャラがとっても似合う気がする。顔立ちがしつかりしているからだろうか？

しかし沙希ってコスプレしていると生きいきしているように見えるんだよな。

「……貴方の指示通りにしました」

「そうか。ならスカートを上げて見せてみる」

「っ……」

沙希はスカートを捲くり上げて中を見せた。下着を着けていなかった。今回の設定は弱みを握られて下着を着けられない状況に追い込まれた悪魔メイドという設定になっている。スカートを捲くり上げて顔を赤くしているのはグツとくる！エロい!!

「下着も着けずによく働けたな？」

「それは貴方が……」

「魔王のメイドも所詮、女か」

「んんっ……」

くちやくちやく……

沙希のマンコはさつきしたよりグチャグチャに塗れていた。愛液が糸を引いているようだ。沙希はさつきより興奮しているな。

顔にはあまり出ないが、俺にはなんとなく分かる。この顔は相当、興奮している顔だ。

「夫や息子に申し訳ないと思わないのかね？この淫乱メイドが」

「好き勝手な事をつ……うひい♡」

「その割りには嬉しそうな声が出ているぞ？尻をこっちに向けろ」

沙希はスカートを持ったままお尻をこっちに向けた。ホント、いつでも綺麗なお尻をしているな沙希は。

俺はそのままバックで挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡♡」

「なんだ？挿入しただけでイッたのか？やっぱり淫乱じゃないか！」

「そ、そのよう……ひゃあ♡♡」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

役になりつきている沙希を犯しているのは本当に楽しいな。キアラを犯しているのもそうだが、沙希がコスプレしているのは似合っている。

そんな沙希を自分だけのものにしていくという優越感がたまらなく好きだ。

「夫以外の男のザーメンで妊娠しろ!!」

「だ、だめ!うぎひひひひ♡♡」

「射精るぞ!!」

「のおおおお!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

思いつきり膣内出しは最高に気分がいい。それに沙希も精子を根こそぎ吸い取ろうとマンコを締め付けてくる。

最後の一滴まで出し尽くした。その後、二人でシャワーを浴びながらまたSEXした。コスプレしてキアラになりきっているのもいいが、素の状態の沙希も犯したかった。

「沙希……」

「八幡……んんっ♡」

俺は今、最高に幸せを感じている。俺は沙希が寝た後、十年ぶりに実家に電話した。

「もしもし?八幡だけど……」

俺は久しぶりに家族の声を聞いた。

やはりサキサキがアニマルになるのはまちがっている。

うつすホワイト社会人の比企谷八幡だ。産まれてから彼女が居なかった俺にもついに彼女が出来て結婚の約束までする事が出来た。

こんな嬉しい事はない。それに家族、いや元家族と言って方がいいな。彼らと縁を切る事が出来たのは俺から重しを取ったようなものだ。身体も心も本当に軽い。

それにしても小町の事は正直驚いた。あそこまで墮ちるなんて思いもしなかった。親父もお袋も甘やかすからそのツケが回ってきたんだろうな。

だけど俺も甘やかしていたからな。二人の事は言えないな。家族を見捨てたてから家庭崩壊とか笑えないな。

でも俺にはもう関係ないか。親父が勝手に俺を家から追い出して絶縁したんだからな。おかげで俺は自由の身だ。

誰かに振り回れる人生はもうご免だ。これから沙希と未来に居るであろう子供のために奉げよう。

そして今日は二人の休日だ。同じ会社の同じ部署なのだから余程の事がない限り休日がズレる事なんてないんだよな。

そんな休日に俺は沙希にあるお願いをした。最初は凄く嫌そうな顔をしたけど、俺がお願いした土下座したら渋々了解してくれた。

「沙希。ほらお尻に入れるから自分で広げてくれ」

「わ、分かった。い、痛くしないでよ!」

「もちろんだ!俺の嫁を傷つける訳ないだろ!」

「俺の嫁……」

俺の目の前で沙希は自分でお尻を大きく広げた。お尻の穴がしっかりと見える。それにしても相変わらず綺麗な身体しているよな沙希は。

胸は大きい。腰はスリム。お尻はいいかんじのポリウムがある。こんな素敵な嫁は他に居ないんじゃないか!?

俺はお湯で温めたローションを沙希のお尻に垂らした。

「うひい!? た、垂らす時は言つてよ!」

「わ、悪い……ほらもつと垂らすぞ」

「う、うん……」

俺は再び沙希のお尻にローションを垂らしてお尻の穴に塗りこんだ。これをしておかないと痛いからな。俺はアナルビーズ動物の尻尾付きを沙希のお尻に挿入した。

「ずずずずず……」

「うひいい!?」

沙希はアナルビーズがお尻に入ってくる度にイッているようで小刻みに震えていた。痙攣ではないよな？

足がガクガクで産まれたての小鹿のようだった。すると次の瞬間、沙希は漏らした。

「しゃああああ……」

「ひ、ひゃあ♡……だ、だめえええ!」

床はフローリングだから拭けばいいだろう。俺は沙希の頭に犬耳を付けた。沙希の場合、犬ではなく狼の方が似合うな。絶対に。

それにしても涙目になってこっちを見る沙希はとってもエロい!!

ケモノ沙希、エロ過ぎだ!!俺は沙希のマンコに触った。そこはもう大洪水だった。

「沙希、濡れ過ぎだろ……」

「そ、それはアンタが……ひい♡」

沙希がグチグチ言っているのでアナルビーズのリモコンで振動を強にした。しかしアダルトグッズって色々あるんだな。

アナルビーズに付いている尻尾はまるで機嫌がいい犬のように振っていた。

「だ、だめっ! おひりがっ!」

「そんな事言わずに感じるよ」

「うひいいい♡♡」

俺はリモコンで振動の強さを弱くしたり強くしたり止めたりして沙希で遊んだ。ピクピクと震えている沙希を見ていると犯したくて

仕方ない。

俺は沙希のお尻をしっかりと両手で掴んでチンコを挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひひひひひい♡♡」

「おおおお……凄いい締め付けっ……」

沙希のマンコに挿入した俺のチンコが押し潰されそうなくらいの力で締め付けられた。それに沙希は軽くイッたようだった。さらに興奮するじゃないか!

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひあああ!?や、やめっ♡♡は、はげひしいっ♡♡」

「交尾SEX、凄いな!沙希のマンコ、いい締め付けだぞ!」

「み、みみもとでっ♡しや、しやへるなっ♡♡」

「なら……ふう〜」

「ひい!？」

耳元で喋るなど言うので俺は息を吹き掛けた。沙希はこの手の攻めに弱い。だから俺はトコトンそこを攻める。まず耳を舐める。

「ちゅっ……れろっ……」

「ひゃあ!?み、みみはっ!……だめっ♡♡」

「それは無理だ。沙希の獣マンコ、凄いい締め付けだから止めたくない。それにもう射精そうだ!」

「いまはっ!?だめっ!!」

「で、射精る!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡」

「おおおお……搾り取られる……」

射精の瞬間、俺は沙希のお腹に腕を回して身体同士を密着した。すると沙希のマンコが凄く蠢いて俺から精子を全て搾り取ろうとした。

膣内出しは本当に最高だ。俺と沙希の子供が楽しみだ。子供は三人くらいは欲しいな。例えば男の子でも俺はクソ親父と違って可愛が

るぞ。

そんな事を考えたらまた勃起してしまった。もつと沙希を犯すか。ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ら、らめっ♡い、いくっ!」

「行っつていいぞ!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡♡♡」

俺は必死に腰を振った。沙希のマンコは突く度にギュウギュウと締め付けてきた。獣のように腰を振るって最高に興奮する。

それに時々、見せる沙希の涙目がエロくて、そそる!!

「沙希!愛している!!お前は最高の俺の嫁だ!」

「だ、だめっ!?!いっぺんにいうなっ♡♡♡」

「もつと俺を感じてくれ!」

「ま、待って!?!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は沙希の制止の言葉を聞かずに腰を振った。俺は今、沙希に発情している。目の前の雌を孕ませる事しか考えられない。

子宮の一番奥に俺の精子を注いで俺と沙希の愛の結晶を作りたい。

「沙希。獣のようにSEXして人と思えないけど、それでもお前が好きだ!」

「こ、こんなじよ、状態でっ♡言うなっ♡♡♡」

「言われるの好きなくせに!だからもつと言っつてやる!」

「だ、だめっ♡♡♡」

俺は腰の動きを止めて俺の胸を沙希の背中にぴったりとくっ付けた。腕を沙希の胸の下辺りでホルドした。そして耳元に近づいた。

「……沙希。お前と再会出来て付き合っつて家庭を持つなんて夢のようだ。感謝している。だから……年老いて死ぬまで俺の側にいてくれ」

「……ちよっ……そ、そんな事を今言わないでよ」

沙希のマンコはさつきよりもギュウギュウに締め付けてきた。嬉しがつているのが嫌でも分かる。そろそろラストスパートにするか。ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「ひい!?は、八幡っ♡だ、だめっ♡♡今、敏感になっっているからっ♡♡」
「無理だ!俺は今、沙希を孕ませる事しか考えていない!産んでくれ!俺の……いや俺達の子供を!で、射精る!」

びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いぐうううう♡♡♡」

「おおおお……」

もの凄く気持ちいい射精だ。沙希はさつきからお腹と言うか子宮?辺りをしきりに触っていた。腹痛でも起こしたのか?

「どうした?沙希」

「……なんでもない。それにしても毎回思うんだけど、射精し過ぎじゃない?こんなに射精して大丈夫なの?」

「特には。むしろ射精すると凄く気分がいいけど」

これは本当だ。確かに自分でも精子の量が多いと思うけど、だからと言って体調が悪くなった事は今まで一度もない。

念のため病院で診て貰ったが、異常はなかった。健康体そのものだと医者に言われた。まあ、少し血糖値が高かったので糖分を少し控えろと言われたが。

「沙希。余韻に浸っている所、悪いんだけど。もう一回、いいか?」

「まだするの?」

「その……今度は向き合ってしたいんだ。今日はずっとバックでしていたから」

「……いいわよ。遠慮しないでよ」

沙希は仰向けになっ自分でマンコのビラを広げてみせた。そこから俺の精子が逆流していた。なんとも言えないエロさがあった。

「あ、ちよっと待って」

「え……」

いきなり沙希は立ち上がって部屋に入って行った。それから五分

ぐらいだろうか？沙希は出てきた。

俺は沙希の格好に驚いた。沙希の頭には真っ直ぐ伸びたウサギ耳に黒いドレスを着ていた。しかも胸上が露出したエロいドレスだ。

もしかして作ったのか？俺が知らないドレスだったが、とつても似合っていた。

沙希はベッドの上に移動してスカートを捲り上げた。下着は黒のレースだった。どんだけエロいんだよ！俺の嫁は!?

もう犯したくてしかたないんだが!?!誘う姿だけでもうギンギンに勃起してしまう。

「……た、たくさん可愛がって……」

「沙希!」

「きゃあ!?!」

俺は沙希をベッドに押し倒してお尻を持ち上げてクリトリスを攻めた。この体勢だと沙希のお尻の穴までぼっちり見える。ヒクヒクしていた。

さっきのアナルビーズは抜いたのか。

「沙希のマンコ、もの欲しそうにエロい匂いがプンプンしているぞ」

「そ、それはそうでしょ。八幡に……は、孕ませて欲しいんだから……」

「沙希!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい!?!」

俺は一気に沙希の子宮の奥まで挿入した。この挿入はさっきの比ではないくらい気持ち良かった。それに沙希のマンコは俺のチンコを離さないように強く締め付けていた。

これは腰が勝手に動く!

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひいひいひい♡♡♡♡」

「凄いぞ！沙希!!お前は一生！俺の女だ！いいな!?!」

「う、うん。あたしはは、八幡の女だからもつと!」

「ああ、もつと気持ちよくしてやるよ!」

ずずずずずず…ぱんっ!!ずずずずずず…ぱんっ!!ずずずずずず…ぱんっ!!

俺は必死に腰を動かした。もう沙希は俺の嫁なのだから必要無いと思っていたが、やはりまだ必要のようだ。

もつと沙希を俺の色で染めたい。誰も手が出せないくらいに上から塗り潰したい。その時の沙希の顔はとつてもエロかった。

もつと見たかった。沙希が俺だけにしか見せない親すら見た事の無い顔をもつと見たかった。

そこからはもうグチャグチャになって俺達は時間を忘れて獣になった。部屋の中がイカ臭くなくてもお構いなしにやった。

沙希のマンコは途中から俺の精子でいっぱいになって溢れていたが俺はそれでも沙希のマンコに射精しまくった。

一体どれがいつ射精した精子なのか判らないくらい精子まみれになってしまった俺と沙希は。

「…ホント、ケダモノ」

「す、済まん…」

「発情サル」

「返す言葉もございません…」

機嫌が良いのか悪いのか判らない沙希。さつきからお腹を撫でていた。もしかして妊娠したとか?いや流石にまだ判らないだろ。

でもその前にやる事があるので先にそれをそつと済ませておかないとな。それでも子供は楽しみだ。

やはりアタシがバイトをするのはまちがっている。

アタシ、川崎沙希は昼休憩に生徒指導の教師に呼び出されていた。どうせ、遅刻が多いから注意されるだけだろう。ここ最近、年齢を偽って始めたバーのバイトの所為で遅刻が多くなってしまった。

今日、学校に到着した時に呼び出した教師に見つかり、こうして生徒指導室に向かっている。呼び出した男性教師は女子の間で、セクハラ親父と影で呼ばれている。

女子に向ける視線が厭らしいものだからだ。どうして教師をクビにならないのか不思議なくらいだ。

「失礼します」

「やつと来たか、川崎」

「購買に寄っていて、遅くなりました」

「まったくもつと早く来いよな」

「それでどうしてあたしは呼ばれたんですか？」

「ああ、それはこれだ」

男性教師はスマホの画面を見せてきた。そこに映っていたのはバーで働くアタシだった。顔もバツチリ映っており、言い逃れは出来ない。

「これはお前だよな？川崎」

「……違います」

「そうか？このバーには大学の時の後輩が働いているんだ。それで聞いたら、名前は川崎沙希だそうだが？」

「……」
もう名前もバレており、完全に言い逃れは出来ない。なんとか、言い逃れが出来ると思ったけど、甘かった。

「お前で間違いないな？」

「……はい」

「まずは〴〵両親に来てもらって話を……」

「ま、待ってください！両親に迷惑を……」

ここ最近、忙しい両親に迷惑を掛けなくなかった。あまり両親に金

銭的負担を増やしたくないために始めたバイトなのに。

アタシはどうしてバイトを始めたのか、理由を説明した。何も言わなければ、両親を呼ばれてしまう。

「なるほどな……うちはバイトを禁止していないが、年齢を偽るのどうかと思うが？」

「すみません……」

「なら先生のバイトをしてみるか？」

「先生のバイトですか？」

「俺専用の性処理係のバイトだよ」

この教師は何を言っているんだ!?生徒の前で正気とは思えなかった。でも逆らう選択肢はアタシにはなかった。

「……分かりました。先生の性処理係になります……だから親には」

「分かっている。まずは服を脱いでもらおうか？下着もだ」

「……はい」

先生の前でアタシは服とスカートに下着を脱いだ。先生はそれをニヤニヤしながら見ていた。最後の抵抗と手で乳首と股を隠した。

他人の前で全裸になるなんて、思いもしなかったのももの凄く恥ずかしい。すぐにでも叫んで、目の前の男の人生を終わらせてやりたい。

でもそうするとアタシがバイトしていたことが両親に知られるかもしれない。それだけは絶対に避けたい。

「年の割りに随分と成長しているんだ？川崎」

「……そんなことはありません」

「下着が黒なのは年齢がバレないためか？」

「……するなら早くしてください。昼休憩が終わります」

「そうだな」

「……うひい!？」

先生がアタシの手を強引に引き剥がした。そして膣内に先生の指が侵入してきた。膣内に異物が入ってきて、体が反応してしまう。

先生の指が膣内を前後している。こんなにも不快な気分なのは初めてだ。ただただ早く終わってほしい！

「川崎。感じているな」

「そ、そんなことはありません!」

「これでもか?」

「っ!」

先生は自分の指に付いた愛液を見せてきた。粘り気がある液体はこれまで何度も見てきた。アタシだって、年頃の女だ。オナニーくらい週に数回ほどストレスが溜まるとすることがある。

「川崎の感じる場所はここかな?」

「うひい♡んんっ♡んんっ♡」

「我慢するな。体に悪いぞ?」

「んっ♡んんっ♡ひい♡」

先生の指が先ほどより激しく膣内を移動して刺激してくる。何かが上がってくるのを感じる。もし、これが頭まだ上がってくると絶対に声を我慢出来なくなる。

早く終わってほしいけど、その前に何かが上がってくる。あたしは必死に先生の手を退かそうとしたけど、先生の力が強いのとあたしの腰に力が入らずに上手く退かせない。

「ほらーイケ、川崎!」

「んひいひい♡♡」

「派手にイッたな?川崎」

「はあ……はあ……はあ」

アタシは先生の指で絶頂した。その際に潮まで嘔き出して、アタシの足元には潮で水溜りが出来ていた。あたしはそのまま腰が抜けた。今までオナニーは何回もしてきたけど、さつきより気持ちいが良かったことはない。アタシは教師を睨み付けた。

「川崎の準備は終わったようだし、そろそろ始めるか」

「ひい!」

先生がズボンを降ろすと勃起した肉棒が露になった。前に弟の志と風呂に入った時に見たよりグロテスクだった。血管が脈打っているように見えた。

アタシは怖くなって、四つん這いで扉に向かった。腰が抜けて、上

手く歩けない。もつと早く部屋から出ないと！

「後ろからしてほいいのか？ならいくぞ」

「い、いやあ……うぎい!?い、痛い!」

「おおお！いい締めりだ。流星は現役JKだな」

「痛い痛い痛い！抜いて抜いて！」

先生の肉棒がアタシの膣内に入ってきた。処女膜があっさり破られた。股が裂ける痛みがアタシの体を襲ってくる。

逃げ出したいけど、先生がアタシに覆い被さるに乗ってきた。耳元に先生の声と息が掛かって、気持ち悪い！

「ほら動くぞ！おらおら！」

「んひい♡ああんっ♡んんっ♡」

「可愛い声じゃないか。川崎」

「んひいひい♡ひやああああああ♡」

先生の声が脳の奥まで響く。肉棒が膣内を蹂躪して、アタシの体を掻き回しているようだ。早く終わってほしい。それか、誰でもいいから来て！

「そろそろ射精るぞ。川崎」

「で、でる?まさか……!」

「射精る！」

「いやあああああ!」

先生の肉棒から熱い何かがアタシの子宮目掛けて出された。それが何かはすぐに分かった、精子だ。

今、あたしの子宮に先生の精子が大量に注がれている。もしかして、これでアタシは先生の子供を妊娠したかもしれない。

「は、早く抜いて！赤ちゃん出来ちゃう!」

「そんなに暴れるな。安心しろ川崎。先生は種無しでな。それで離婚したことがあるんだぞ」

「た、種無し?」

「ああ、だから妊娠はしない」

それを聞いて安心した。もし妊娠でもしたら、バイトをしていた以上親に迷惑を掛けてしまう。妊娠しないと云っても先生の精子な

んで、不快でしかない。

アタシは必死になって先生から逃げようとしたが、先ほどの先生の射精で絶頂して、体に力が入らなかった。

「今度はこの体勢でだな」

「うひい♡も、もういやあ……」

「感じている声を出して何を言っているんだ？」

「んひい♡あんっ♡んああああ♡」

先生はアタシを抱きかかえるような体勢にした。下から先生の肉棒が膣内に入っていく。先生の肉棒があたしの子宮の入り口を何度もノックしてくる。

先ほどよりも深く肉棒が入ってくる。頭の中がグチャグチャになって、何も考えられない。逃げ出したいのに体が先生から与えられる快楽に溺れ掛けている。

「もっとエロい声を出してみろ」

「んひい♡ら、らめえ♡んひいひいひい♡♡♡」

先生がいきなりアタシのお尻を叩いてきた。振動が子宮に響いて、あたしは絶頂した。痛いはずなのに体が気持ちいいと感じてしまう。

逃げなきゃいけないのに逃げ出せない。もっとこの快楽を味わいたいアタシが居る。

「ほらもっとエロく腰を振ってみろ。川崎」

「んんっ♡んあっ♡ひゃあ♡」

「エロい見た目だけじゃなく本当にエロいとはな！」

「ち、ちがうっ♡んひいひい♡」

「そろそろラストスパートだぞ！射精る！」

「んあっ♡ああああ♡ひゃああああああ♡♡♡」

また先生の熱い精子がアタシの子宮に注がれた。そしてアタシは絶頂してしまった。泣きたくなった。

脅されていたはずなのにいつの間にか快楽に身を委ねてしまった自分に心底、軽蔑した。でもそれ以上にまたこの快楽を味わいたい自分が居る。

「ふう〜……中々良かったぞ、川崎」

「あひやあ♡んっ♡ああ♡」

「先生の番号を携帯に入れておいた。次も頼むぞ。それと誰にも喋るなよ」

「……………」

先生はそれだけ言って生徒指導室から出て行った。アタシは先ほどの絶頂の余韻で頭が真っ白になっていた。これからアタシの高校生活はどうなるのだろうか？

あたしは教室に戻るために立ち上がった。机の上にはあたしのスマホがあり、下にはアタシがバイトしている時の写真があった。

「……自分で蒔いた種だから仕方ないか」

そもそもはアタシが年齢を偽ってバイトをしたことからこんな目に遭ったんだ。もし年齢を偽らなかつたらそもそもこんな目に遭っていなかった。

アタシは昼休憩が終わる前にトイレで子宮に射精された種無し先生の精子を掻き出した。妊娠しないのはある意味、救いかもしいい。

アタシは帰ってすぐにバイトを辞めて、先生に犯されたことを思い出して、オナニーをしてしまった。

「んんっ♡あんっ♡んひいいいい♡♡♡」

酷い目にあつたのにアタシは今までのオナニーより気持ちいいと感じてしまっていた。

やはりアタシがバイトをするのはまちがっている？

アタシ、川崎沙希が生徒指導の教師に犯された。処女を破られて、射精をたくさんされた。妊娠しないとはいえ、子宮が熱くなった。帰ってすぐにオナニーを犯された時のことを思い出しながらした。

そして次の日、昼休憩にすぐにお弁当を食べてから生徒指導室に向かった。数回、ノックして部屋に入った。先生は惣菜パンを食べていた。

「来たか、川崎」

「……先生が来いつて」

「そうだな。する前に渡す物がある。ほれ」

「これは……？」

先生が渡してきたのは封筒だった。中身を確認すると10万ほど入っていた。アタシは先生と封筒を交互に見た。何がなにやら分からなかった。

「バイトだと言っただろ？これは昨日と今日分だ。昨日のは色を付けた」

「も、貰えませんか！」

「バイトなんだから川崎はこれを受け取る権利がある。それとこつちのパンフレットを渡しておく」

「これは何ですか？」

「塾と大学の奨学金制度の案内だ。審査はあるが、川崎の学力があれば問題はないだろう」

「態々、調べてくれたんですか？」

「これでも教師だからな」

あたしは信じられなかった。昨日、散々あたしを犯した教師があたしのためにここまでしてくるなんて。一通り、案内に目を通した。これならあたしの学力でいけると思った。両親の負担が思ったより軽くなる。思わず、この教師にドキッとしてしまった。

「それじゃするか。川崎、昨日と同じように脱いで机の上に座れ」

「……はい」

「やはりいい体をしているな？」

「……………」

ちよつとでもドキツとした自分が恥ずかしい。この教師はやはりクズな人間だと思う。でもそのクズな人間に犯されてアタシはお金を貰っている。

先生の顔がアタシの股に近づいてきた。先生の息が当たって、ゾクゾクする。

「ふんふん……昨日より匂いがキツいな？帰って、オナニーでもしたか？」

「し、していません！」

「なら……れろっ」

「んんっ♡」

先生の舌がアタシのクリトリスを舐めてきた。オナニーで摘まむより声が出てしまった。思わず手で塞いだけど、遅かった。

先生はアタシの感じた声を聞いて、ニヤリと笑ってきた。女子が先生を気持ち悪いと思うのが分かった気がする。

「れろっ……じゆるるるるじゆるるるるっ」

「んひい♡あんっ♡ひゃああああ♡♡」

「舌だけでイクなんて、随分と敏感なんだな？川崎」

「そ、そんなことはありません！」

今までで一番感じてしまった。先生の舌はクリトリスを攻め続けた。絶頂した際に頭の中が真っ白になってしまった。気持ちいいと同時に不安になってしまった。

このまま先生に犯されたらどうなってしまうのか、分からないからだ。でももつと味わいたいと思う自分がある。

「ならお待ちかねのものだぞ？」

「っ!？」

先生がズボンを降ろすと勃起した肉棒が露になった。これが昨日、アタシの処女幕を破った肉棒なんだね。大志と比べるまでもない。

今からこれで犯されると思うと少し興奮してしまう。アタシは自分で股を大きく開いた。

「自分から開くなんて、川崎はよほど待てなかったようだな？」

「は、早くしてください。昼休憩が終わります」

「そうだな……ほら、奥まで入ったぞ」

「うひひいひい♡♡」

先生の肉棒がアタシの膣内の一番奥まで一気に到達した。子宮の入り口に先生の肉棒の先が当たったのが分かった瞬間、アタシは絶頂してしまった。

声を我慢出来ずに卑猥な声が出てしまった。頭の中が一瞬で真っ白になってしまった。

「挿入しただけでイッたのか？だが、まだまだぞ！」

「んひい♡ああああ♡ひゃあ♡」

「可愛い声じゃないか。ほらもつと先生に聞かせてくれ」

「ら、らめえ♡き、きくなあ♡んんっ♡」

先生がアタシを抱き寄せて、密着する体勢になってしまった。耳元に先生の声が響くと膣内が肉棒を強く締め付けてしまう。

アタシの声が勝手に上下に動いてしまう。もつと気持ちよくなりたいと言っているようだった。でもアタシの心はそれを否定して、体の動きと止めようとしている。

「どうした？しっかりと体を動かせ！」

「はひい!?!んあっ♡んんっ♡あんっ♡」

「川崎は叩かれると感じるのか？」

「ち、ちがううう♡」

先生がアタシのお尻を力いっぱい叩いてきた。振動がそのまま子宮に到達すると膣内が肉棒を締め付ける力が強くなった。

否定しても体が快楽を脳へと送ってくる。それが体全体に送られて、アタシは自分を止めることが出来ないでいた。

「川崎！まず一発目だ！」

「んひい♡んっ♡んんっ♡」

「しっかりと、子宮で受け止めろ！で、射精る！」

「ひゃあああああ♡♡んひいひいひい♡♡」

先生の精子がアタシの子宮に大量に注がれた。熱くてドロドロの

精子が子宮を押し広げているのが分かる。

アタシは先生の射精で絶頂してしまった。その際に思い切り、先生に抱きついてしまった。頭の中が先生のことしか考えられなくなつた。

「おおお……搾り取られる。そんなに先生の精子が気に入ったのか？川崎」

「ち、ちひやううう♡い、いふうのおとまらあない♡」

「ははっ……いい牝の顔じゃないか。もつと犯してやるぞ」

今のアタシの顔がどんなものかは分からない。でも酷い顔なのはなんとなくだけど、分かった。アタシの体は先生の与えられる快楽を受け入れてしまった。

「ほら、きちんと綺麗にしろ」

「はむっ……じゅるるるるっ」

「いぞ川崎。フェラは中々のものだな？」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

先生がアタシの股から肉棒を抜くと机の上に背中から倒れたアタシの顔の近くに精子まみれの肉棒を近づけてきた。

アタシはそれを口に咥えて舌で精子を舐め取った。苦く、ドロドロして喉に絡みついてくる。

「で、射精るー！」

「んんっ!？」

「飲み干せー！」

「んぐっ……んぐっ……苦っ」

先生がアタシの口の中に射精してきた。精子が喉に絡み付いて、危うく窒息するかと思った。

先生の肉棒はまだ勃起したままだった。アタシはいつの間にか、先生に犯されるのを楽しみにしていた。アタシは自分で股を開いていた。

「せ、先生……もう一回、お願いします」

「ははっ！川崎、エロくなったな？先生は嬉しいぞー！」

「い、いいから早くー！」

「そう焦るな……ほら！」

「うひい♡」

先生の肉棒がアタシの子宮の入り口に接触した。その瞬間、アタシの体に電気でも走ったような感覚になった。

アタシの子宮はすっかり先生の肉棒を気に入って、少し触れただけで絶頂するようになった。

「川崎はチンコをマンコの奥まで挿入されるのが好きなんだな？ならこれでどうだ？」

「うひいいいい♡♡ら、らめえ！い、いぐううう♡♡」

「好きなだけイケ！」

「ひゃああああ♡♡」

先生の肉棒がアタシの子宮の入り口を何度も叩いてくる。その度に絶頂して、頭が真っ白になった。もう先生の肉棒以外、考えられない。

先生の肉棒の先がアタシの子宮の中に少しだけ入った。先生の肉棒がさつきよりも子宮の奥に入ってくる。

「川崎の子宮が降りてきたな。そんなに先生のチンコが気に入ったんだな」

「ひゃあ♡んんっ♡あんっ♡」

「ほらほら！もっと感じている声を聞かせて見せろ！」

「んああああ♡♡うひいいいい♡♡」

先生の腰の動きが先ほどよりも早く激しくなってきた。それに肉棒が先ほどよりも膨らんでいる気がする。そろそろ射精するのだろうか。

もし、このまま先生の射精を子宮で受け止めたら、アタシはどうなってしまうのだろうか？考えただけでゾクゾクしてきた。

「で、射精るー！」

「ああああ♡♡いぐいぐいぐっ♡♡」

「おおおお……射精る射精るー！」

「ひゃああああ♡♡」

先生の精子がアタシの子宮に注がれた。妊娠しないけど、熱くて体

が絶頂を強制させられて、頭が真っ白になる。子宮が先生の精子を喜んでいる。

「川崎。綺麗にしてくれ」

「はむっ……じゆるるるるじゆるるるっ」

「おおおー！いいぞ、舌の使い方が分かってるじゃないか」

先生の肉棒を綺麗にするのは慣れたものだ。大きいので顎が外れるんじゃないかと思うけど、なんとかフェラは出来ている。

さっきまでアタシの膣内に入って暴れまわっていたかと思うと興奮してしまう。アタシは舌を先生の肉棒に絡めるようにして、刺激した。

「で、射精るー！」

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

「川崎はマンコも口マンコも最高だな」

「べ、別に褒めても……」

先生に気持ちよく出来たならアタシも気分がいい。アタシは体を綺麗にして教室に戻って、授業を受けて何事もなく過ごした。

授業中に先生に犯されたことを思い出して、隠れてオナニーをしてみました。段々と先生に染められているかもしれない。

「次はもっとして欲しい……」

いつも昼休憩だけしか、犯してもらえないので長時間、アタシは犯されるのを妄想していた。休みの日とか出来ないか相談してみよう。

海老名姫菜

やはり腐女子に告白するのはまちがっている。

「俺と付き合ってください！」

俺、比企谷八幡は人生で二度目の告白をしていた。と言つてもこれは嘘告白だ。何故、俺が嘘告白をする事になったかと言うと奉仕部に持ち込まれた二つの依頼による。

いや、一つは依頼とは言えないな。どっちかと言うとお願いだろう。回りくどい事を。そもそもこの依頼自体、奉仕部がする事ではない。

魚を与えるのではなく釣り方を教える。

それが奉仕部の理念だったはずだ。だけど、由比ヶ浜が強引に依頼を受けた。雪ノ下は由比ヶ浜に甘い。

そもそも恋愛をした事のない毒舌絶壁女に教える事が出来るのか？と聞かれたら、100%出来ないと言言出来る。

理念がどうこう言っていたのに簡単にそれを曲げる。そんな奴が世界をどうこう出来るはずがない。

しかもクラスが違うから殆ど何もしていないし最後には俺に「任せろわ」と丸投げとか笑える。仕事を途中で放棄するとか人間として最低だ。

同じグループだから行けると思っていた由比ヶ浜は何も出来ない。修学旅行の三日目の自由時間なんて俺と雪ノ下と回っていただけだ。

ポンコツの二人に期待していた俺が馬鹿だった。そもそも恋愛をした事が無い俺達に依頼する事ではないと思う。葉山もそうだが、戸部のアホ。

だから俺は新たな黒歴史を作る覚悟を決めた。俺が戸部の前に告白して誰とも付き合う気が無い事を戸部に伝える。

雪ノ下も由比ヶ浜もきつと俺の考えを理解してくれるだろう。

ここで告白を断れば、すべて上手く行く。だが、もし海老名さんが

俺の告白を断らなかつたらどんな未来があるのだろうか？

そんなの関係ないか。断られるんだから。

「うん。これからよろしくね！」

「……………え？」

「だからこれから彼氏としてよろしくねって言ったの！」

「え、いや違うだろ！」

違う。俺が望んだのは海老名さんが俺の告白を断ってくれないと

「誰もが傷つかない世界」が出来ないじゃないか！

「違わないよ。これが証拠だよ。……………んっ」

「んんっ!？」

俺は海老名さんに顔を固定されて、キスされた。キスされた。いや

ちよつと待て！

「んんっ……………」

「んんっ……………!!」

俺は海老名さんを引き剥がそうとしたが、今度は腕を首に巻かれて引き剥がせなかつた。先ほどより密着してしまつた。

その際に海老名さんの胸が俺の胸に当たつた。あ、海老名さんの胸の大きさが判明してしまつた!!

由比ヶ浜ほど大きくは無いが、雪ノ下より少し大きいくらいか？

「……………ふあ……………キスって凄いな。癖になつちやうよ……………」

「お、お前……………」

海老名さんは唇を触つてキスの余韻に浸つていた。確かに癖になりそうだった。俺は戸部の方を向いた。するとぼう然とした顔になつていた。

まるで魂が抜けたようだ。隠れている雪ノ下や葉山達の方を見てみると向こうも何が起つたのか理解していないようだ。

「それじゃ戸部っち、私はひきた……………じゃなくて比企谷君と行くね」

「お、おい!?!ちよつと……………」

俺は海老名さんに手を引かれて戸部から離れた。どうすんだよ、これ。依頼と全然違うじゃないか!?!そもそも誰とも付き合うつもりは無かつたんじゃないのか？

だから俺にお願いしたんじゃないのか？ 訳が分からない。俺もそうだが、残された戸部や葉山、雪ノ下達はあ然としていた。

ここはちゃんと聞かないとな。俺は強引に止まった。海老名さんは不思議そうな顔をしていた。

「どうしたの？」

「どうしたじゃないだろ。あそこは俺の告白は断る所だろ。ではないと解消……」

「確かにあれじゃね……」

「ならどうして」

「……なんかさ。隼人君にがつかりしちゃったんだよね」

葉山にがつかりか。まあ確かにグループの問題を他人に丸投げするなんてどうかと思う。しかも三浦とあと二人を除け者にしていった。

所詮、葉山にとってあのグループはそれだけの価値しかなかったのだろう。

「だからもう比企谷君と付き合うかなって！」

「だからって……」

告白した手前、俺にも責任があるんだろうな。でも誰かと付き合うとか気が進まないんだよな。中学の事があるからな。

「ここは俺の変態癖を見せて距離を取ってもらうか。」

「付き合うならもう遠慮はいらないよな？」

「え？う、うん……どうしたの？」

「お尻を舐めさせてくれ」

「……え？」

「お尻を舐めさせてくれ」

「いや、聞こえていたから！」

聞こえていたならいい。二度も言わせるから聞こえていないと思っていた。俺は海老名さんを誰も居なさそうな竹林の場所まで引っ張った。

「俺はお尻……アナルが好きなんだ！」

「いや……そんな真顔で言われても……」

海老名さんは完全に引いていた。それはそうだ。いきなりアナル

が好きなんだと真顔で言われたら誰だって、俺だって引く。

海老名さんは引きつった笑顔をしていた。俺は嫌われるためにハシカチを取り出して海老名さんの手首で結んで拘束した。

「ちよっ!?比企谷君、こういうの止めてよ」

「もうどうにでもなれ……」

「ひ、比企谷君?め、目がいつもより怖いよ?」

「前より後ろだよな……」

「は、話を聞いてよ!」

海老名さんが何か言っているようだけど、今の俺には何も聞こえない。俺は海老名さんの手に竹を掴ませて、パンツを下にズラした。

女子のお尻を生で見たのは始めてだ。いや大抵の人間は初めてだろう。でも修学旅行中は風呂はクラスで一緒だから他人の身体を見られるか。

「ま、待って……ここまでにしよ?ね!」

「知った事か」

「ずずずずず……」

「うぎいいい!?お、お尻には、入っている!?痛い痛い痛い!!抜いて!お願い!!」

俺はついにやってしまった。マンコよりアナルにしたのには理由がある。もしマンコに挿入して射精して妊娠してしまったら俺は本当に社会的に殺される。

一生晒されて生きていけないといけない。いやレイプしている時点でもう終わりか。修学旅行が終わったらどこかに逃げるか。

でも今はこの体験を楽しもうと思う。俺は腰を動かした。

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「うぎい!?や、止めて!お願い!!お尻が痛いのだ!!」

「凄いなアナルの締め付けて……」

「お願い!私の話を聞いて!」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「い、痛い!?!」

俺は海老名さんの言葉を無視して腰を動かし続けた。まさか修学

旅行で初体験が出来るなんて思いもしなかった。レイプだけだな。

しかもアナルで童貞卒業するなんて想像も付かなかったな。

「あ、ヤベっ……」

「え……う？」

じよろろろろろっ……

「ひ、比企谷君？な、何を……」

「悪い。我慢出来ずに小便出してしまった」

「なっ!？」

我慢していた小便を海老名さんのアナルに出してしまった。けど、しようがないよね。出るものは出てしまうんだから。

しかしこれは同人誌とかである肉便器状態だな。興奮してしまう

!!

「抜いて抜いて！お願いだから抜いて!!」

「……分かった」

ずずずずっ……ぽんっ!!

俺が海老名さんのアナルからチンコを抜くとい音響いた。海老名さんは必死にお腹を押さえていた。脚はガクガクで立つ事が出来ないようだ。

そして俺の事を強く睨んできた。俺はその視線にイラついて思いつき海老名さんのお尻を叩いてやった。

バチイイイイ!!

「うぎいいい!？」で、出ちやう……」

ぶりゆるるるるるっ……ぶりゆるるるるるっ……

「うわあああ……」

海老名さんは思いつき噴出した。アナルからは俺の小便と海老名さんの大便が混ざったもの出てきた。

凄い臭いがしてきた。その臭いを嗅いで俺は冷静さを取り戻して自分がやった事の重大さを知った。

このまま海老名さんが先生に報告すれば俺はレイプ魔のクソ野郎だ。怖くて仕方なかった。俺はスマホを取り出して小便と大便をして放心状態の海老名さんを写真に収めた。

それも何枚も撮った。正直、見ていて再び興奮した。スカト口では無いと思っていたが、案外そうなのかもしれない。

「こ、この事を誰かに喋るとこの写真をバラまくからな！いいな！喋るなよ！」

俺はそれだけ言ってホテルの自分の部屋に戻った。自分がいつ寝たのかまったく覚えていなかった。

そして次の日の朝を迎えた。

正直、今すぐに新幹線に轢かれたかった。自分がどれだけのクズか改めて認識した。嘘告白をしてその後すぐにレイプとか駄目だろ。

帰って小町に会いたかった。朝食なんてどんな味だったのか全然覚えていない。今は帰りの新幹線を待っている。

死にたいと思っていると海老名さんが近づいてきた。俺は逃げようとしたけど、腕を掴まれた。

「ちよつと来てくれる？」

「……はい」

俺は海老名さんの圧に負けて彼女に付いて行った。向かった先が男子トイレだった。不味いだろ。女子の海老名さんが入るのは!?

「昨夜の事なんだけど……」

「す、済まない！俺はとんでもない事をしたと自覚している！帰ったら先生にも葉山達にも喋ってくれて構わない！」

俺は土下座する勢いで謝った。ここでは土下座は出来ない。俺は殴られる蹴られる覚悟は出来ていたが、いつまで経ってもどちらもこない。

罵倒すら全然来ない。どうなっているんだ？

「大丈夫だよ。昨夜の事は誰にも喋らないから」

「え？いやでも俺はレイプしたんだぞ？誰にも言わないとかありえないだろ!？」

「だって昨夜は貴重な体験が出来たんだよ！」

「き、貴重な体験？」

貴重な体験ってレイプの事か!?それは貴重だろうさ。俺は怖くて仕方なかったが、海老名さんが後ろを向いてお尻を突き出してきた。しかもパンツを横にズラして。俺は訳が分からなくなってきた。

「昨日からずつとお尻が疼いているんだよね。お願いだからまた挿入してくれない?」

「……………はあ!?!」

俺は思わず反応するのに数秒掛かってしまった。目の前にはパンツをズラしてお尻の穴を見せてくる腐女子が居る。

俺はどうしたらいいのかと思っているとチンコが勃起していた。目の前のお尻の穴を見て興奮していたのだ。俺は躊躇する事無く挿入した。

ずずずずつ……………ぱんっ!!

「うひひひひひ!!こ、これだよ!お尻、凄く気持ちいいいい!!」

「おおおお……………チンコが押し潰される!?!」

「動いて、オシッコでもザーメンでも私の腸内に全部出してみて!」

「お、おう……………」

ずずずずつ……………ぱんっ!!ずずずずつ……………ぱんっ!!ずずずずつ……………ぱんっ!!

俺は最高に興奮していた。昨夜もそうだったけど、本来挿入するはずもない穴に入れるのがこんなにも興奮するとは思いつかなかった。

いや正確にはその後が興奮するのか。俺のザーメンと一緒に糞が捻り出されるのを見るのがとっても興奮する。

「で、射精する!」

「き、来て!!」

びゅるるるるびゅるるるつ……………びゅるるるびゅるるるつ……………

俺は海老名さんのアナルに思い切り射精した。今、俺のザーメンが海老名さんの腸内に出されたと思うと興奮が収まらない。チンコだつて勃起して小さくなる気配がない。

俺は海老名さんのアナルからチンコを抜いた。

ずずずずつ……………ぱんっ!

昨夜と同じでいい音が出るものだ。海老名さんは便器に座り直し

力んだ。

「んんっ!!で、出るよ!!」

ぶりりりりりっ……ぶりりりりっ……ぶぶっ……

お尻から臭い臭いザーメンと糞を海老名さんは出し切った。その時の顔はとつてもエロかった。

「これ……快感だよ……ぐふふっ……」

海老名さんは快感の余韻で腰と言うより足がガクガクになっていた。俺はこの時、思った。またアナルを犯してみたいと。

その時、海老名さんはどんな顔をみせてくれるのだろうか？楽しみだ!!

やはり腐女子と付き合うのまちがっている。

火曜日。俺の地獄の高校生活の始まる日だ。修学旅行での告白の横入りは絶対に拡散しているに違いない。

帰って小町に癒されたい。意外だったのが、帰ってからの小町の反応だ。由比ヶ浜辺りが小町にある事ない事言いふらしているのではないかと疑っていたが、何もなかった。

これには正直、驚いた。あの馬鹿コンビが何もしないなんて。それもあつて学校に行きたくなかった。

でもいつまで行かないわけにはいかない。ならもう覚悟を決めてさっさといじめられた方がまだマシと言うものだ。

だから俺は授業ギリギリに到着するように学校に向かった。途中でクラスメイトに会う事もなく教室に着いた。

そこで俺は違和感に気が付いた。妙に静かだったのだ。まだ教師は来ていない。なのに誰一人喋っていないかった。

あのカートス1位葉山グループですら誰も喋ってはいなかった。てか、クラスで一番暗かった。そして葉山の左頬は赤く腫れていた。

何があつたんだ!?あの葉山を平手打ちする人間がこのクラスに居ると言うのか!?俺は驚かずに自分の席に着いた。

俺が席に着くと同時に教師が入ってきた。教師も葉山の左頬には気が付いたが何も言わなかった。

それから昼休みまで誰一人一言も喋らなかった。授業と授業の間の休憩時間にすら誰も何も言わなかった。これはこれで恐怖を感じる。

時々、葉山と由比ヶ浜の二人がチラチラと俺の事を見てきたが、こつちに来る事はなかったので無視した。

そして昼休憩に真っ先に俺の席に着た人物が居た。

「ヒキオ。ちよつと付いて来るし」

「……………ええええ……………」

三浦優美子だ。葉山グループの女王的ポジションで金髪縦ロールの髪型をしている。態度がデカく苦手なタイプだ。

修学旅行の時に釘を刺された。もしかしてあの時の事で俺をボコボコにする気なのか!?

俺は渋々三浦の後に着いて行つた。それと海老名さんも一緒に。

三浦が連れて来たのは校舎裏だった。まさか、ここで俺を殴るんじゃない!?もしくはカツ上げか!?どつちにしてもすぐに帰りたい。

だが、三浦は俺が逃げれないように壁に追い詰めてきた。まさか三浦に壁ドンをされる日が来るなんて思つてもみなかった。

「……ヒキオは姫菜が好きなん?」

「え?まあ、好きだけど」

ここで嘘告白しましたなんて言える訳がない。てか、三浦!顔が近い!?そもそも海老名さんは全然助けてくれないんだだけど!?

それにしても三浦の奴、眼つきが怖すぎるんだだけど!?

「姫菜から全部聞いた……」

「全部、聞いたのかよ……」

「あーしだけ知らなかった。だから隼人……葉山を締めて全部吐かせた」

「うわあ……」

もしかして葉山の左頬が赤かったのは三浦がしたのか?後がくつきり残るほど強く叩いたんだな。

それにしても三浦は強いな。全部を聞いて自分からグループを壊したんだから。もっと葉山の顔を見ておくんだった。惜しい事をした。

「言つておくけど!姫菜を泣かしたらあーしが許さないから!」

「お、おう……」

三浦はそれだけ言つて教室に戻つて行つた。オカンだな、あれは。それにしてもこれは三浦公認と言う事でいいんだろうな。

「ひ、比企谷君。ここでしない?」

「マジで……?」

「うん。ここなら凄い事になりそうだから」

海老名さんはそう言つて手を壁に付いてお尻をこつちに向けてパンツをずらした。お尻の穴はヒクヒクとしていた。

俺は人差し指と中指をお尻の穴に入れた。

「うぎい!?お、おひり!」

「しつかり広げておかないとな」

「うひい♡」

俺は二本の指を入れたり引つ張ったりしてお尻の穴の筋肉を解していた。最初は俺の指を引き千切りそうなくらい強かったのが今はパクパクと開いたり閉じたりしている。

そろそろいいかな。俺はチャックを降ろして勃起したチンコを出した。

ずずずずつ……ぱんっ!!

「うぎいいいい♡」

「す、すごつ……!!」

一気に海老名さんのお尻の穴に挿入した。お尻なら避妊をする必要がないからいいな。え?もうたくさん膣内出ししているだろうって?

何を言っているんだい。そんな事は一度もないぜ!!俺は腰を振った。

ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……!!

「うおおおお♡♡おひし♡ばかになる♡♡」

「処女のくせにエロ過ぎだろ!誰かに見られるかもしれないに!」

「見られてもいい♡お尻の穴をズボズボされて♡気持ちいいの♡♡」

「声がデカイ!」

海老名さんはよほど気持ちいいのかさつきから声が大きい。これじゃ誰かが近くを通れば絶対に気づかれる。

もし気づかれたら教師にバレて高校生活終わりだな。でもそれはそれで楽しみだ。その時の葉山達の顔がどんな表情をするだろうか?

「え、海老名さん!俺もう!」

「うん!そのまま射精して!」

「う、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「うひひひひひ♡♡♡♡」

「うおおおおお……!!」

俺は海老名さんのお尻の穴に精子をこれでもかと言うくらい射精した。きつとお尻の穴は俺の精子で大洪水になっているだろう。

ずずずずずっ……ぽんっ!

俺がお尻の穴からチンコを抜くといひ音が鳴った。精子がお尻の穴から逆流しそうな所、海老名さんがキュとお尻の穴を閉じた。

そして俺を連れて近くのトイレに駆け込んだ。そして便器にパンツとスカートを脱いで座った。

「く、来るよ……」

「ああ、いつでもいいぞ」

俺はスマホで海老名さんの大便のシーンを撮影していた。これは彼女からの要望だ。自分の糞を出しているのを見たいと言ったのだ。ついにその時はやってきた。海老名さんの力んだ顔を見れば分かる。

ぶりゅるるるるぶりゅるるるっ……ぶりゅるるるるぶりゅるるるっ

……

「うぎひひひひ!!」

「すっっ……」

女性が糞をしている場面を真正面から見る事になるとは思いもしなかった。しかも俺が射精した精子が混ざった糞だ。

こう言うのをスカート口と言うのだったか? 知った時はこれで興奮するのはどうかと思っただが、意外に悪くない。

それに糞を出し切った海老名さんの表情は凄く興奮する。口からは涎が、鼻からは鼻水が無様に溢れ出ていた。

女性がここまで酷い顔を晒していると何とも言いがたい感情が込み上げて来る。

「ありがとね比企谷君。これはBLの資料と使わせてもらおうね」

「あ、ああ……」

BLの資料か。俺のチンコが海老名さんの手によって薄い本になるわけだ。なんだか複雑だ。でもいいか、どうでも。

海老名さんはパンツとスカートを履き直して教室に戻っていった。

「海老名さん……!!海老名さん……!!」

俺はトイレに残ってチンコを擦ってさつきまで海老名さんが座っていた便器に向かって精子をぶっ掛けた。

びゅるるるるびゅるるるるっ……

自分でもどうしてこうも興奮するのか分からなかった。でも一つだけ分かった事があった。それはもう一度海老名さんのお尻の穴――アナルを犯したい。

それだけだった。もつと犯してお尻の穴に精子や小便、浣腸剤などを入れてその後の反応を見てみたい。

「……自分がここまで変態とは……」

童貞卒業して……いやそもそもアナルでも童貞卒業したと言えるのだろうか？童貞卒業の定義がどこからどこまでなんだ？

アナルでも卒業したと言えるのか？誰かに聞きたい所だけど、こんな事を聞ける知り合いはいない。

そもそも質問が変態過ぎるから絶対にドン引きされる。

放課後になった。だが、未だに俺のクラスは御通夜な沈黙が続いていた。カートス2の相模ですら黙っていたのだ。

戸部に至っては放心状態だった。これは戸塚から聞いたのだが、修学旅行の帰りの新幹線を待っている時に戸部と葉山で一悶着あったそう。

その時に葉山だけじゃなく由比ヶ浜や雪ノ下に暴言を吐いたそう。だ。「話と全然違うじゃなか！」とそれは大声で叫んでいた。

恐らくそこで三浦が今回の海老名さんと戸部の告白の件を知ったのだろう。そして休みが明けて葉山と問い詰めたところだ

ろ。

葉山も最初から戸部に打ち明けていたらこんな事態にならなかっただろうに。でももう遅い。ハリボテの城は崩れ去り、家臣達は離れて裸の王様だけが残った。

所詮、恋愛相談をした相手が間違っていたと言う事だ。ご愁傷様、葉山。

そんなクラスを他所に俺はまた海老名さんと一緒に便所に来ていた。もちろん俺がアナルを犯すためだ。

今日のお昼の時に海老名さんとは連絡先を交換していた。彼氏彼女の関係になったなら必要でしょ、と教えてくれた。

そして放課後にまたお尻を犯してみないと？と連絡があつたので俺は速攻で食い付いた。だって海老名さんのアナルを犯せられるのだから。

俺と海老名さんは学校の帰り道の公園の公衆トイレに入った。少子化の影響か公園には誰一人いなかった。

「え、海老名さん。早くしてくれ」

「比企谷君。目が怖いよ。はい、どうぞ」

海老名さんはパンツを脱いでスカートを捲り上げてくれた。海老名さんのアナルはこれから犯されるのが分かるのか、ヒクヒクしていた。

俺は人差し指と中指を使ってアナルを解した。もう少し広げておかないと入らないからな。

そして俺はアナルに挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うぎゅ」

「おおおおお……」

これだよ、これ。俺のチンコを引き千切ろうと締め付けてくる。これがもの凄く好きになってしまった。

これは腰を上手く振れないが、そこは強引に引いた。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あはっ♡♡す、すごいっ……おひりひろはる♡♡」

「海老名さんのアナル！とつてもいいよ！」

「そ、そう……う・お、おしゅっこでる？」

「ああ、出るぞ」

じゅろろろろっ……

俺は海老名さんの要望に応えてオシッコを海老名さんのアナルにぶちまけた。まさに肉便器になっているな。

「で、射精るー！」

びゅるるるるっ……びゅるるるるるっ……

オシッコが出た気持ちよさのあまりザーメンまで射精してしまつた。

「おおおおおお!!ちよ、腸内でま、まざっていひる♡♡」

海老名さんは腸内で混ざっている俺のオシッコとザーメンと自分の糞を感じているようだった。俺は思いっきりチンコを抜こうとした。

「ま、待って!？」

俺は海老名さんの制止を聞かずに抜いた。

ぶりゅるるるるるっ……ぶりゅるるるるるるっ……

「い、いぐうううう♡♡♡」

海老名さんは色々混ざったものをアナルから出しながらイッた。あまりの勢いで便器の外にまで撒き散らした。

俺はとつさに避けたので掛からなかった。それにしてもそこそこ綺麗だった便器が一瞬で汚くなった。

まあ、使えば汚れるのは当たり前だけど、これは酷い。

海老名さんは未だに出した時の余韻を感じていた。これはしばらくこのままだな。そして海老名さんが気がついた後でもう一度アナルを犯した。

今度、アナル拡張を試してみたいな。やらせてくるだろうか？もし断れたとしても強引にするんだけどな。楽しみだ。

やはり腐女子を手伝うのはまちがっている。

うつつす、比企谷八幡だ。俺は今、修学旅行で嘘告白したのに付き合う事になった海老名姫菜さんの家で漫画を描いていた。

もちろん女性向けの薄いBL本だ。男の俺がどうしてBL本を描いているんだろうか？ つつい現実逃避したくなる。

でもまだ背景などだから救いようもあるか？ でも付き合っている彼女の家で二人つきりつてシチュエーションとしてはバツチリじゃないか!?

思春期の男子ならエロい展開を期待しているだろう。でも相手は腐女子だ。そんな事はないか。残念だ。

「お！流石、比企谷君。背景が上手いね」

「まあ、男同士が絡み合っている絵を描くよりかは何倍もマシだからな」

「え!?!もしかして描きたかった?」

「絶対に嫌だ!」

何が悲しくて男同士の絡みを描かなくてはならないんだ!?!でも海老名さん的には俺に描かせたいようだ。

それを眺めて興奮したいそうだ。俺は背景担当です！永久に!!

それにしても漫画を描くのは少し楽しいと思っている。BLじゃなければ尚もよし。

「比企谷君。ズボン脱いでくれない!」

「ええええ……」

海老名さんからのいきなりのとんでもない要求をしてきた。俺としてはこの要求を断る事が出来ない。何故ならバイト代をすでに貰っているからだ。

それも結構な額を。薄い本つてそれなりに儲かるんだな!

俺はズボンを下ろした。すると海老名さんは必死に俺のチンコをスケッチし始めた。色々な角度から見て事細かく描いていた。

ここまでチンコを他人にマジマジと観察されたのは初めてだ。誰だっけそうはないか。

そして海老名さんは満足したのかスケッチを終えた。やっと終わったか。観察されてかれこれ30分は経ったな。

「いや、生の資料が近くにあるっていいね！凄く捗るよ！」

「さいで……」

「あ、ズボンはまだ履かないで！」

「え……？」

俺はズボンを中途半端な状態で上げていた。俺は再びズボンを下ろした。今度は何をさせる気だろうか？

顔を上に向けて黙って座っていると股間の辺りが急に生暖かくなった。ふと下を見てみると海老名さんが俺のチンコを口に頬張りながら写真を撮っていた。

「な、何をしている!？」

「ふえ？ひひようはよ？」

「啞えながら喋るな!!」

海老名さんはあろう事かフェラをしていたのだ。半勃起だったのが完全に勃起してしまった。初めての感覚に頭が痺れてきた。

どう処理しているのかまったく分からない。どうしたらいいんだ!?

「ちよ、海老名さん！それ不味い！」

くちやちゅぱつ……くちやちゅぱつ……

海老名さんは俺の事なんて無視してフェラを続けた。頬にはお張ったり軽く歯に当てるなど凄いエロテクニクだ！どこで覚えたんだ？

しかしそれだけでは終わらなかった。口を引く際に舌を器用に俺のチンコに絡ませてくるので刺激がハンパない!!

「で、射精る!!」

「うぐつ!？」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるるびゆるるるるっ……

俺は射精の際に海老名さんの顔をしっかりと掴んでチンコを喉奥まで挿入した。海老名さんは驚いていたが、そんな俺には関係な

い。

俺のチンコが海老名さんの口の奥まで来ると苦しそうに顔を歪めていたがその表情がとっても魅力的だった。

「げほっ……げほっ……もう苦しかったよ。女の子は優しくしないと駄目なんだよ」

「その割には嬉しそうだったけど？」

「それは……」

海老名さんは気まずそうに顔を反らした。その仕草がとっても可愛くてもっといじめたくなかった。次はどんな事をすれば今の表情をしてくれるのだろうか？

もっと見たい。もっと眺めていた。もっと俺にその表情を向けて欲しい。

「海老名さんが俺を気持ちよくしてくれたから今度は俺の番だな」

「え？ひ、比企谷君？ちよっと目がいつもよりこ、怖いよ？」

「大丈夫だ。海老名さんが気に入ってくれるように準備してきたから」

「ひい!？」

海老名さんは嬉しそうに可愛い悲鳴を漏らした。まだしてもいないのに喜んでくれるなんて俺は嬉しいぜ。

俺はさっそく準備を始めた。

「ひ、比企谷君……もう少し紐を緩めてくれないかな？」

「え？それだと意味ないだろ？」

「で、でもこの体勢、キツイんだよね……」

今の海老名さんの体勢は仰向けの状態で腕を足に紐で縛られて固定されているのだ。しかも半裸で。お尻の穴がヒクヒクして可愛いな。

俺はバケツとタライと大きい目の注射器を持ってきた。この日のた

めに通販で購入しておいたのだ。

「そ、それって……」

「ああ、想像通りだ。これからゼリー浣腸をする」

「え、えっと……それはまだ早いかな？」

「そうかな？」

俺としてはこのゼリー浣腸はぜひともやって欲しかったランキングベスト5に入るほどだ。自分や小町にはさせられないからな。

それにこのゼリー浣腸は中々に素晴らしい。注入したゼリーの素が腸内で固まり硬く長い一本のゼリーとして出てくるのだ。

前にエロサイトで見た時はよくこんなやるなと思っていた。でも今ならあの脱糞映像で興奮出来ると。

でも実際に見られるわけではないと思っていたが、思いのほか早かったな。

俺は注射器を持ってゼリーの素を入れた。そして海老名さんのお尻の穴に挿入した。

「うひい!?お、お願い!比企谷君!!」

「俺は海老名さんの手伝いをしたんだ。海老名さんも俺のオナニーの手伝いをするべきだよな?」

「え、う、あ……」

海老名さんは諦めて受け入れる覚悟を決めたようだ。俺は注射器の中身を一気に海老名さんのお尻の穴に流し込んだ。

後は、数分待つだけだ。俺はその間、ラノベを読んで時間を潰していた。海老名さんはその間も身体を固定されていたので体勢を崩せないで辛そうだった。

「ひ、比企谷君!で、出る!!」

「お、もうそんな時間か」

「お願い!早く!!」

海老名さんが俺を急かす。もうちょっとで糞が出るのだろう。我慢しているけど限界のようだ。それにしても凄いな。

ゼリーは大きくなると書いてあったけど、海老名さんのお腹が妊婦のように膨らんでいた。これは凄いのが出てきそうだな。

俺は海老名さんのお尻の穴の前にタライを設置した。これでいつ出てきても大丈夫だ。海老名さんも限界でついに脱糞した。

海老名さんのお尻の穴からは青色の長い一本のゼリーが出てきた。ぶりゆるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるっ……

「うぎいいいいいい♡♡♡おおおお……♡♡♡」

「すごっ!」

「おしひばしやになるうううう♡♡♡」

「お〜い?海老名さん?」

海老名さんは糞ゼリーを出してあまりの気持ちよさに脳が処理限界を迎えたように呂律が回っていなかった。

それにしても海老名さんの糞ゼリーは中々長いな。1mはあるな。そしてお尻の穴は指が二本余裕で入るくらいに開いていた。

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「うひい!」

俺は絶頂の余韻に浸っている海老名さんに構う事無くチンコをお尻の穴に挿入した。さつきあれだけ大きい糞ゼリーを出したのに締め付けがよかった。

俺は腰を振った。それは全然海老名さんの事を考えていない。相手をオナホと言わんばかりに腰を振った。

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!」

「うぎいいいいいい♡♡♡おひぎるー!らめええ!!」

「まだまだ!!」

俺はさらに早く強く腰を海老名さんのマンコに打ち付けた。このチンコを締め付ける感じが最高に良い。

でもそろそろ射精しそうだ。俺はラストスパートに向けて腰をさらに動かした。

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!」

「や、やへしえてええええ♡♡♡」

「もう射精るぞー!」

「ま、まへてえ!!」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「おおおおお♡♡♡……あ、あへえ……♡♡」

「ああああ……射精る射精る」

俺の射精で海老名さんはアへ顔になってしまった。涙を流し涎を垂らし身体は痙攣していた。ちよつとやり過ぎたと思っってしまった。ずずずずっ……ぽんっ!!

俺のチンコを海老名さんのお尻の穴から抜くと良い音が響いた。そして精子が穴から逆流してきた。精子が出てくるたびに海老名さんはピクピクと小刻みに震えていた。

正直、射精し過ぎたと思っっている。俺の精子が海老名さんのお尻の穴からまだドロドロと逆流している。

「あっ♡……うひい♡」

「お〜い〜……海老名さん?大丈夫か?」

「おひり……しよひない……♡」

「あ、うん。それはごめん……」

俺は海老名さんを固定している紐を解いた。すると海老名さんは勢い良く起き上がり同人誌の続きをもつての凄く速さで描き始めた。

さつきまでアナルSEXしていて体力を消耗したはずなのに。どこにあるんだその体力。

「ぐ腐腐腐腐っ……漲る!……どんどん浮かんでくる!!」

「そ、それはよかったな……」

海老名さんの想像力は俺の予想を軽く超えていた。俺は少し気になつて海老名さんの横からBLを覗いてみた。

そして描かれている人物に驚愕した。なんと俺と戸塚だった。葉山とくっ付けられるより全然いい。

と言うより戸塚ならむしろ文句はない!完成したら一冊買おう。

「ひ、比企谷君さ……もしなんだけど、前は興味ない?」

「前と言うと……マンコか?」

「うん……」

興味が無いと言えは嘘になる。それは確かにマンコでしてみたいと思う。そもそもアナルでは童貞卒業したと言えるのだろうか？

最初は嫌われるためにアナル好きと言ったが、マンコにも挿入してみたい。そんな俺の願望を察したのか海老名さんはこつちにお尻を向けてきた。

ずずずずずつ……

「痛っ!？」

「だ、大丈夫か!?痛いなら抜くけど？」

「だ、大丈夫だからそのまま続けて！」

「分かった……」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うぎい!?!こ、これで私は処女じゃなくなつて比企谷君は童貞じゃなくなつたね……」

「お、おう。それでもマンコはアナルと違って締め付けるんじゃないやなくて圧迫してくる!!」

アナルとマンコはまったく違うと思っていたが想像以上に違った。

アナルは締め付けは強いけど、マンコはチンコの圧迫が凄い。

俺は腰を前後に動かした。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずず

ずつ……ぱんっ!!

「おおおお♡♡おひりもしゅごいへど♡♡まへもしゅごい♡♡
♡」

「こ、腰が止まらない!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は必死に腰を動かして海老名さんのお尻に打ちつけていた。アナルもいいが、マンコは違った感覚だ。

でも妊娠の心配をすることでどうしても後ろの方が安全じゃないかと思う。童貞は卒業したし次からはアナルだけにしよう。

「え、海老名さん!もう俺……!!」

「いい、来ていいからあ!!」

「で、射精る!!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「い、いくうううう!!」

「のおおお……」

海老名さんは俺の射精と同時にイッたようだ。それにしてもマンコの射精がこんなに凄いと思ひもしなかった。でも次からはゴムを付けるかアナルだな。

高校生で父親にはなりたくはないからな。

一色いろは
やはりあざとい後輩に催眠アプリを使うのはまちがっている。

うつす、比企谷八幡だ。俺は今、とんでもない状況に陥っている。皆は目の前で一年下の女子が半裸でオナニーしていたらどんな反応をするだろうか？

俺は固まってしまっている。どうしたらいいのかまったく分からない。

「しえんぱい……もつと♡めいへい、しへくらい♡」

「い、一色……」

「しゅきへです♡」

俺の前まで一年で生徒会長に就任したあざとい後輩、一色いろはがテーブルの上でイッたのだ。マンコから愛液がドバドバと溢れていた。

顔は涙と涎でグチャグチャになっていた。でも俺はその顔を見ると犯したくて仕方なかった。もつと一色を自分の色に染めてやりたかったからだ。

「どうしてこうなった……」

ホント、過去に戻れたら自分をぶん殴ってやりたい。でもそんな事は出来ない。過去には戻れない。受け入れるしかない。

この現実を。でもどうしてこうなったのかを振り返ってみるか。あれ、いつも通り一色に生徒会の仕事を手伝わされたからだな。

「一色。聞きたいんだが……」

「なんですか？せんぱい」

「どうして生徒会室なのに他の生徒会役員が居ないんだ？」

「それはみんなには自分の家で仕事をしてもらっているからです♪」

「俺もそうしたいんだけど……」

「せんぱいはダメです。終わったのか確認しないといけないんで」

「明日でもいいだろ……」

今日も俺は一色の生徒会の仕事を手伝わされていた。俺が一色を生徒会長になるように言ったのだから少しくらいは手伝ってもいいと思ったが。

「これ、手伝いつてレベルじゃないだろ？」

「えええく……いいじゃないですか！今更！」

「帰りてえ……」

ここ数日は一色と生徒会で仕事をしていた。しかも全然手伝ってこない。一色を生徒会長に勧めたクラスメイトは馬鹿以外の何者でもないな。

「せくんくぱくい」

「あざとい。チェンジで」

「そんな事よりこれ見てくださいよ」

「おい。それ、俺のスマホじゃないか!？」

一色はいつの間にか俺のスマホを取って色々何かしていた。画面にはうさん臭いタイトルがあった。

『催眠アプリ。どんな人物も思いのまま!』……って、こんな信じているのか？一色。材木座より痛い奴だと思われるぞ」

「別に私は痛い子じゃありません……それよりこれ使ってみてくださいよ」

「誰に?」

「私に」

「誰が?」

「せんぱいが」

俺は耳が可笑しくなったのだろうか?このあざいと後輩の言っている事が理解出来ない。いや、元々一色の発言はあいつ並に理解出来なかったな。

待てよ。あいつって誰だ？俺は誰と一色を比べていたんだ？
分からん。

「すぐに消すわ」

「ちよつと!?だったら消す前にやってみてくださいよ!」

「ちつ……分かったよ」

「舌打ちしました!」

俺は一色の事を無視して催眠アプリの使い方を見た。まず催眠を
掛けたい人物に次の画面の模様を見せる。

それだけなのか？簡単だな。俺はさつそく一色に画面を見せた。

「……これで?」

「さあ?」

「命令してみてくださいよ!」

「じゃスカートをめくれ」

「……わあ……せんぱい、流石にそれはドン引きものですよ」

一色から軽蔑の眼差しを向けられた。しかしプロボツチの俺はそ
んな事くらいではへこたれないぜ!

そこで俺は一色がスカートを捲っているのを見た。

「い、一色……お前」

「え?なんです……きやああ!?ちよつとマジマジ見ないでください
!」

「す、すまん。てか、スカートを下げろよ!」

「さ、下げられないんです!」

一色は何を言っているんだ?まさか催眠アプリが効いているのか
?いやありえないだろ。ここは一色が絶対にしない事を命令して
みるか。

それで本当にしたら催眠アプリは本物と言う事だ。

「一色、パンツを脱いで俺に渡せ」

「はあ!?何言っているんですか!?冗談は……ダメ!動かないで!」

「マジか……」

一色はパンツを脱いで俺に渡してきた。よく見てみると一色のパ
ンツはシミが付いていた。これってまさか。

「か、返してください!!」

「そこから動くな!」

「くっ!?!」

一色がパンツを取り返そうとしたのでとっさに命令してしまった。この時、俺はある衝動に駆られていた。

それは一色のパンツに付いたシミを味わいたいと言うものだ。自分でも変態だと自覚しているけど、我慢できなかった。

「な、何しているんですか!?!」

「すう……はあ……すう……はあ……」

「やめて下さい!!」

一色は顔を真っ赤にして言ってきたが、身体が動かないから俺からパンツを取り返さないでいた。その間も俺は一色のパンツに付いたシミを味わっていた。

シミを舐めたり匂いを嗅いだりした。一色の臭いが脳を直撃した。まるで雷にでも打たれたような感覚だ。

俺が臭いを嗅いでいる間、一色は顔を真っ赤にして震えていた。俺は我慢出来ず勃起してしまった。

もっと一色を味わいたい。我慢出来ない。俺はさらなる命令を一色にする事にした。

「一色。スカートを脱いでテーブルの上に座れ」

「はあ!?!せ、先輩?何言っているんですか?じよ、冗談はやめて下さいよ」

一色はスカートを脱いでテーブルの上に座った。だけど、脚を閉じて一色のマンコを俺は見れなかった。

「一色。脚を開け」

「だ、ダメ!う、嘘……見ないでください!!」

「これが女性の……一色のマンコか……」

「せ、先輩!い、息が当たっています!!」

俺は一色のマンコをマジマジと観察した。毛の手入れをしているのか気になった。一色のマン毛は綺麗に整っていた。

自分で綺麗に切っているんだろうな。そんな事を考えながら観察

していると一色のマンコから何やら液体がどんどん溢れてきていた。

「これが愛液か……れろっ……」

「ひい!?せ、先輩!何、舐めているんですか!？」

「いや、美味しいかなって……」

「味を確かめないでください!」

「でも美味しかったぞ」

「っ!？」

一舐めしたらまさか愛液がここまで美味しいとは思いませんでした。もつと味わいたい。一色のマンコに刺激を与えればもつと出てくるのかな？

しかし一色は手でマンコを隠した。だから俺は新たな命令を出した。

「二色!今からお前は淫乱JKだ。机の上で俺に見えるようにオナニーしろ!」

「あ……先輩♪私のオナニー見てください♪んっ……」

一色は上着を少し乱した。一色の半裸がこんなにもエロいなんて思いもなかった。興奮して勃起したチンコが痛い。

一色は右手でマンコを解し、左手で乳首を摘んだ。

「あっ♡んんっ♡き、きもちいい♡♡しえんぱいにみしやれてるっ♡♡い、いくうううう♡♡♡♡」

ぶしやああああ……

一色は絶頂したようで潮を噴出した。避けなかったら顔に掛かっていただろう。それにしても一色の顔、エロ過ぎだろ。

「しえんぱい……もつと♡めいへい、しへくらい♡♡」

「い、一色……」

「しゅきへです♡」

そして冒頭に戻る。俺は一色をこんな状態にした事より一色を犯したい感情に駆られていた。勃起して痛いチンコを一色のマンコに挿入した。

でもそれをしてしまうとレイプになってしまう。それを一色が学校に言えば俺は社会的に抹殺されてしまう。

「すまん。一色……」

「へえ？」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「うぎい!？」

「のおおおお……!!」

一色のマンコに俺のチンコを挿入してしまった。これで俺はレイプ魔だ。でも後悔は無い。だってこんな気持ちいい感覚を味わえたのだから。

俺のチンコを押し潰そうとしてくる一色のマンコは最高だ!!俺は腰を動かした。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あつ♡だ、だめつ♡しえんぱいつ♡♡はげしゅいつ♡♡♡」

「一色!お前、エロ過ぎだ!!」

「しえんぱいつ♡♡」

「おおおお……!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は腰を前後に必死に動かした。その度に一色のマンコは蠢いていた。これがSEXなのか!こんなの俺の理性が持つはずが無い!

俺は我慢出来ず一色の唇に吸い付いた。まあ、キスをしたのだ。

「んんっ……しえんぱいつ♡もっどっ♡」

「この淫乱JKがつ!!」

「そうしえすひよ♡♡わしやしはひんはんっ♡♡」

一色の奴、呂律が回っていなかった。何を言っているのかまったく分らない。でも一色がエロいだけはわかる。

そんなエロい一色にさらに興奮した俺はさらに強く腰を動かした。ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひひひひひひ♡♡しえんぱいつ♡♡こわ入るっ♡♡」

「知るか！エロいお前が悪い!!」

「ひいひいひい♡♡」

「一色！そろそろ射精るぞ！」

そろそろ射精しそうになった。ここは抜かないといけないけど、何故かそれはしたくはなかった。このまま、一色の膣内に思いつき射精したい。

でもそんな事をするとは妊娠する可能性がある。まだ間に合うはずだ。だけど、膣内射精なんてするれば、完全に戻れない。

「だ、射精すぞ！」

「しえんぱいっ♡」

俺は一色を机の上から抱きかかえるように持ち上げた。そして一色が逃げないようにホールドした。

これで俺はもう戻れない。だけど、本能が一色に膣内射精しろと言っているように叫んでいるようだ。

そして俺は一色に膣内出しをした。

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「のおおおお!!」

「い、いくうううう♡♡♡」

「し、絞られる……!!」

「あっ♡はへっ……しえいひっ♡あひいっ♡♡」

俺の射精と同時に一色は絶頂した。俺は最後まで精子を一色の膣内に出しきった。だけど、これで俺はとんでもない屑だ。

それでも一色の膣内出しは魅力的だったのだ。一色はアへ顔を晒していた。こんな顔見たらまた犯したくなるだろ。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい♡しえ、しえんぱいっ♡♡」

「エロいお前が悪いんだぞ」

「ひやしゅまへてっ……」

「駄目だ！」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!

俺は一色の事など考えずに腰を振った。もつと一色を滅茶苦茶にしたい。もつと一色が乱れた所が見たい。

もつと一色にエロい顔をさせたい。そんな事だけが頭にあった。

「しえぱいつ♡らめっ♡」

「何が駄目だ!俺のチンコを全然離しそうにないぞ!お前のマンコは!?!」

「や、やひやしふっ♡」

「断る!」

ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっずっ……ぱんっ!!

俺は一色の静止を断りひたすらに腰を振った。一色は一突きごとを感じているようで凄い顔になっていた。

俺はそれから一時間の間に何度も膣内出しをしてしまった。

やはりあざとい後輩の夫になるのはまちがっている。

………うつす、比企谷八幡だ。俺は今、生徒会室で一つの過ちを
してしまった。後輩女子をレイプしてしまったのだ。

それだけでも許されないので俺は臆内出しまでしてしまった。止
められる場面はあったのに本能で行動してしまったのだ。

「あっ♡しえんぱいつ♡しゅひっ♡♡」

一色はアへ顔で何か言っているけど、何を言っているのかまったく
分からない。俺は冷静になって急に怖くなった。

「い、一色！身体を綺麗にしてさっきの事は全部忘れろ！」

「はひっ♡♡」

「じゃ、じゃあな！」

「……………」

俺はズボンを履き直してすぐに生徒会室を出た。催眠アプリを最
初に自分に使えと言ってきた一色が悪いんだ。

俺は何も悪くない。そう、自分に言い聞かせて学校を後にした。そ
の時、一色の顔が笑っていたのに俺は気が付かなかった。

「先輩……もう私のものなんですよ」

何か聞こえてきたが、俺は気にしないで一目散に逃げた。

朝、俺は重い足を動かして学校に向かった。正直休みたい気分だっ
たがどのみち一色が学校に言えば、俺は退学の上に警察に捕まる。

なのに足は学校に向かっていた。そして生徒会室に着いていた。
その時だった、背中に何かがタツクルしてきた。

「先輩♪」

「い、一色……」

「どうしたんですか？」

「あ、いや……何でもない」

「そうだよ。俺は昨日、催眠アプリの力で全部忘れろって命令したじゃないか。それなら一色が誰かに喋る事はないじゃないか。」

「何をビビッていたんだか。そうだよ、これまで通りの生活が出来るじゃないか。」

「先輩♪」

「なんだよ……」

「昨日の事で話があるんですけど♪」

「へ……？」

俺は汗が止まらなかった。ダラダラと全身から汗が噴出した。どうして？どうして？確かに俺は昨日、催眠アプリで記憶を忘れるように命令したはずだ。

「だから一色が覚えているわけない。もしかしてカマを掛けているのか？」

「ち、ちなみに昨日の事って……」

「もちろん先輩が私をレイプした事です♪」

「ちよ、デカイ声で！」

「それと昨日の催眠アプリって一時間しか効力が無いみたいですよ？」

「マジか!？」

「マジです♪」

俺は一色から教えられた真実にさらに汗を噴出した。つまりあのレイプの後半は一色の意識がはつきりとしていたわけか。

「終わったな。一色が誰かに言えば俺は終わりだ。昨日の俺が一色に膣内出した精子もきつと取っているだろう。」

「レイプの動かぬ証拠だ。警察に捕まるんだろうな。とっていたが、一色の様子が変だ。」

「先輩？私は昨日の強引な先輩は嫌いじゃない所か好きです」

「はあ!？お、お前、自分が何を言っているのか分かってるのか？」

「はい。昨日のはレイプじゃなくて合意の上でしたって事ですよ」

俺は一色の言っている事が理解出来なかった。何を言っているん

だ？合意の上？俺の事が好き？段々頭が混乱してきた。

その時だった、一色が俺の顔を両手で掴んで顔を近づけてきた。

「んっ♡」

「んんっ!？」

一色から俺にキスしてきた。俺は数秒間、固まった。そしてキスされた事を理解した時に一色の唇の柔らかさや匂いで頭がいつぱいになった。

俺は一色を引き剥がした。

「ちよ、お前、何やっっているんだよ!？」

「何って……先輩にキスを」

「そういう事は好きな奴にしろ!」

「だから私が好きなのは先輩だけですよ?」

「何っっているんだよ……お前が好きなのは——」

言葉が出なかった。俺は一色が好きな奴の名前を知っているはずだった。なのに口にしようと思いつくやうにしたらまったく出てこなくなつた。

そもそも一色って誰が好きだったんだ？頭に霞が掛かっているよ
うだ。

「先輩?」

「あ、いや……大丈夫だ」

「それじゃ責任取ってくださいね♪」

「せ、責任……」

一色は一枚の紙を出してきた。それは役所に提出する『結婚届』
だった。まさか一生ボツチで縁がないと思われたものが出てきたよ。

ちよつと待てよ。これは可笑しくないか？

「未成年の俺達じゃ結婚なんて出来るわけないだろ」

「何っっているんですか？十年前に少子化の対策として政府が高校生以上なら未成年でも結婚できる法律を作ったんですよ。それに子供が出来れば補償金が貰えるんですよ。忘れたんですか?」

「そ、そうだったけ……」

「そうですよ♪」

一色がそう言うなら間違いはないだろう。どうして俺は忘れていたんだ？でもそれなら俺が取る行動は一つだ。

「一色いろはさん」

「え？ど、どうしたんですか？急に……」

「俺の妻になってください。そして俺の……俺達の子をたくさん産んで下さい」

「は、はい！」

俺は一色にプロポーズした。自分でも不思議なくらいスラツと言える事が出来た。すると一色は俺に抱きついてきた。俺は一色を抱き返した。

「嬉しいです！先輩！」

「俺もだ」

「先輩……いい雰囲気か台無しです」

一色は俺の勃起したチンコを睨み付けた。抱きついているから嫌でも分かるようだ。

「し、仕方ないだろ！生理現象なんだから。それに勃起するのは一色が魅力的過ぎるのがいけないんだろ！」

「嬉しいです。先輩……私、我慢出来ません♡♡」

一色はスカートと捲ると一色のパンツが濡れて足を伝って愛液が床に落ちていた。俺はズボンのチャックを下ろして勃起したチンコを出して一色のパンツを少しだけ横にズラしてそのまま挿入した。

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「うひい♡♡せ、先輩、こんな所でするなんてっ♡」

「そんなに誘ってくるお前が悪いんだろ！」

「誰かに見られますよっ♡」

「なら俺と一色のラブラブ具合を見せ付けてやるよ!!」

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!」

「うひい♡♡♡♡」

俺は興奮に身を任せて腰を振った。一色は目を♡にして奇声を上げていた。俺は一色の体勢を変えて後ろから突いた。

手首を掴んで腰を前後に振り続けた。

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡♡♡」

「おおおおお……!!」

「お、おくにっ♡しきゆうにつ♡ごっごっ……あしやるっ♡♡」

俺のチンコの先が一色の子宮に当たっているのがしっかりと分かる。一色のマンコは突かれる度にイっているようで潮を出し続けている。

その所為で床がビチョビチョになっている。掃除が大変だな。俺はそこでふと窓を見た。そして一色を外が見える窓まで移動させた。

「しえんぱいっ♡♡ここしやとっ♡み、みへましゆうっ♡♡」

「一色、その割にはマンコはきつく締め付けてくるぞ?」

「しよれは……」

俺は一色の手首から手を離して顔を思いつきり窓にくっ付けてやった。一色の顔はもの凄く酷い事になっている事だろう。

「しえんぱいっ♡しよとからっ♡み、みへるっ♡♡」

「見られる方が好きだろ?締め付けが強くなったぞ?」

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡♡♡」

一色のマンコはいい締め付けで俺のチンコを離さない。腰を動かしたがそろそろ限界が近い。一色の子宮に濃い精子を全部、射精しきってやる!!

「一色!!」

「き、きてええええ♡♡♡」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「のおおおお……」

「い、いぐうううう♡♡……あっ♡♡」

一色の子宮に精子を射精してしまった。一色のマンコは俺の金玉

から精子を全部吸い上げるように蠢いていた。

俺の長い射精が終わって、チンコを抜いてみるとマンコから精子が逆流してきた。

「ずずずずずつ……」

「うひい♡」

抜いたのに精子が逆流してきたのを見たら無性に栓をしたくなつたので再び挿入した。これで逆流はないだろう。

「先輩、どんだけ孕ませる気ですか？これじゃ確定ですね♪」

「ああ、今日中に孕ませるつもりだ」

「だったらこれ、書いてくれますよね？」

「当たり前だろ？」

俺は一色が渡してきた『結婚届』に俺の名前を書いた。続いて一色も名前を書いた。これを役所に届ければ俺達は夫婦になる訳か。

「その……先輩。いい加減、私の事は名前で呼んでください」

「あ、おう。い、いろは……」

「っ!?……えへへ……て、照れくさいですね」

少し顔を赤くして笑っているいろはとつても可愛く見えた。あれ？いろはってあざといだけの後輩じゃなかったけ？

それにしても何か忘れていないか？時計を見たら一時限が過ぎていた。

「あ！……授業、もう始まっている!？」

「？何言っているんですか？今日は土曜ですよ？」

「ど、土曜!?!じゃなんでいろはも学校に居るんだよ!？」

「私は忘れ物をしたのと生徒会の仕事の確認ですよ」

なんて事だ。曜日も忘れていたとは俺はどうかしているな。でもそのおかげでいろはとこうして夫婦になれたのだから別にいいか。

「先輩、この後私の家に来て両親に挨拶してくださいね」

「お、おう。許してもらえるかな？」

「大丈夫です！私の両親は先輩の事を絶対に気に入るはずですよ」

「そ、そうか？補償金だけじゃ生活は厳しいかもしれないからな。バイトでもするかな」

「それも大丈夫ですよ。私のお父さん、実は社長なので十分生活していけますよ」

「そうなのか？てか、いろはって社長令嬢だったのか!？」

「知らなかった。いろはの家がお金持ちなんてな。まるで……のようじゃないか。あれ？まただ、時々誰かの名前どころか存在を忘れているような感覚に陥る。」

でも忘れるほど大して重要じゃないんだろう。

「先輩・私、赤ちゃんは5人は欲しいです!」

「おう。任せておけ!これからどんどん孕ませてやる!!」

「はい!お願いしますね。は、八幡さん!」

いろはに名前を呼ばれるだけでチンコが元気になる。俺はこの後、生徒会室で2時間もいろはとSEXした。

もう理性なんて崩壊してお互いに獣でもなったように求め合った。生徒会室が俺の精子といろはの汗で臭くなってしまった。

昼前に生徒会室を綺麗にして俺はいろはと一緒にいろはのご両親に挨拶に向かった。いろはの言うとおりであった。

いろはのご両親は俺の事をすんなり受け入れてくれた。そして初孫が見られると大変喜んでくれた。

それから結婚式や一軒家をプレゼントしようなど話になった。いろはのご両親は俺をすでに息子のように接してくれた。

俺はそれがつっても嬉しかった。思わず泣いたほどだ。

その日は一色家にお泊りする事になった。夕食をぐ馳走になったり色々な事を話した。その夜にもいろはとよろしくやりました。

ベッドの上で乱れるいろはも中々にいい。気がついた時には朝日が昇っていた。それから昼間で二人で寝たらご両親にからかわれた。

やはりあざとい後輩と海に行くのはまちがっている。

青い海、白い空、熱した砂浜。まさに絶好の海水日和だ。俺、比企谷八幡いや一色八幡は妻のいろはと一緒に海に来ていた。

いろはが青春を楽しもうと連れて来られたのだ。俺としては家の中でイチヤイチャでも良かったのだが、いろはが水着を見せたいとかで、海に来た。

プールでも良かったけど、一色家がプライベートビーチを持っているとかでそこに来ている。周りに誰も居ない砂浜なんて始めてみたな。

「せ〜ん〜ぱ〜い〜!」

「おつと。いろは、危ないだろ!」

「先輩なら受け止めて貰えると思って。てへえ!」

「可愛いから許す!」

背中にあるのがダイブしてきてバランスを崩す所だったし、危うくいろはが怪我をする所だった。危ないから注意したら可愛くポーズしたので許した。

いろはの行動は全て許されるのだ!

「それでどうですか? 私の水着は?」

「ああ、最高に似合っている!」

「先輩も意外と筋肉質なんですね。カッコいいですよ」

いろはに褒められてしまった。照れてしまう。それにしてもいろはの水着、ビキニだ。青色と似合っている。

これは他の誰かに見られたくないな。プライベートビーチで良かった。見た野郎は誰であろうと地獄を見せてやる。

「先輩! これ、塗ってください」

「お、おう。任せておけ」

俺はいろはから日焼け止めクリームを渡された。塗るのは始めてだから上手く行くだろうか? いろはすでにシートを敷いて準備万端のようだ。

しかもビキニの紐を解いて背中が隠す事無く晒しだしている。白

くきめ細かい肌に俺は興奮してしまった。

「先輩。私の背中で興奮するなんて、ホント、どれだけ私の事が好きなんですか？」

「そんなの世界一好きに決まっているだろう！」

「……即答されると恥ずかしいですね。ほら早く塗ってください」

「ああ……」

手にクリームを乗せて、いろはの背中に触れた。強く押しただけで壊れてしまいそうな華奢だと思う。

「ひい!?先輩!クリームは少し手で温めてから塗ってください!」

「わ、悪い!だって仕方ないだろ!日焼け止めなんて誰かに塗るなんて始めなんだから!」

「……始めてですか。また一つ先輩の始めてを貰いました!」

「馬鹿言っていないで。どんどん塗っていくぞ」

「ひい!?あんっ♡先輩っ♡♡だ、ダメっ♡」

俺はいろはのエロい声を聞きながら一心不乱にいろはの身体全体にクリームを塗った。正直、押し倒して犯したかったけど、我慢した。

折角、海に着たのに泳がずに体力を使って勿体ないだろ。

「先輩!早く泳ぎましょうよ!」

「お、おう。ちよつと待て!」

「早く早く!」

「だから待ってって言っているだろ!」

いろはに強引に海に連れて行かれて一緒に泳いだ。海で泳ぐなんて久しぶりだ。

思いつきり泳いだ。昼間で泳いだので俺もいろはも疲れて休憩している。喉に流れるコーラが最高にいい。

それはいいけど、どうも場違いな人物が居る。

「なあ、いろは」

「はい。なんですか?」

「このコックさん。テレビで見た事あるんだけど」

「はい。三ツ星レストランのシェフです」

「そんな人を砂浜に呼んで料理を作らせるな！場違いにも程があるだろ!？」

三ツ星レストランのシェフが砂浜で焼きそばを作っているんだけど!?もつといい人が居ただろ!?もしくは近くの海の家から買って来い!

「小さい事を気にしないでくださいよ、先輩。ほらあくん♡」

「お、おう。あくん……」

いろはが焼きそばを口移しで食べさせてきた。いろはの唾液も付いて最高に興奮した。お返しに俺も口移しで食べさせた。

それを何度か繰り返し返すと焼きそばはなくなった。それにしても興奮でチンコが爆発しそうだ。

「せくんくぱーい！泳ぎますよ!」

「あ、ああ。でもちよつとスツキリしたいんだけど……」

「だからですよ!」

「お、おい!」

いろはが俺の手を引いて、ゴムボートに乗せた。するといろはがビキニを脱いだ。俺はいきなりの事でどうしたいのか分からなかった。

それにしてもいつ見てもいろはの身体は綺麗だな。するといろはが俺の手を自分のマンコに持っていった。マンコは濡れていた。

「興奮していたのは先輩だけじゃないんですよ。もう我慢出来ないの、私からしますね!」

「ちよつと待て!」

「わあ……いつ見ても先輩の勃起チンポは凄いですね!はむっ」

「のおおお……!!」

いきなりのフェラで腰が浮いてしまった。最近のいろははフェラを勉強しているようでこれだけで射精してしまいそうだ。

俺はいろはの頭を押さえつけて喉奥まで突っ込んだ。

びゅるるるるびゅるるるる……

そして射精した。その間も頭を押さえつけていた。口の中に俺の

精子がたくさん射精しているのが分かる。

射精し終わって、いろはの頭を解放するといろはは精子を零さずに全て飲み干した。

「ホント、先輩は強引なんですから。でも好きです!」

「俺もいろはが好きだ。頼む、早く続きをしてくれ。いろはのマンコに思いつきり射精したいんだ!」

「はい。どうぞ、先輩っ♡♡」

「いろは!」

「ずずずずっ……ぱんっ!!」

「うひい♡♡しえんぱいのおちんぽがおくまでっ♡い、いっちやうううう♡♡」

「ああ、たくさんイカせてやる!」

いろはのマンコを後ろから突いた。するといろはは軽く絶頂したようだ。これだけ絶頂しては体力が持たないぞ、いろは!

俺はいろはの両手首を持って、腰を前後に振った。

「ずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!」

「ひいひいひい♡♡しえんはいっ♡おく、ごりごりしちややめっ♡♡」

「好きなくせに何を言っているんだ!」

「ほわへちやうっ♡♡」

「壊して、俺以外では満足出来ないようにしてやるからな!」

「わ、わしゃひはっ♡♡へんしゃいしゃけがすひでしゅっ♡♡」

いろはの言葉は呂律が回っていなかった。何を言っているのか分からない。それにしてもゴムボートの上なのでバランスが取れないのが動きに緩急をつけているのでいろはのマンコをかき回していた。

「いろは!射精るぞ!」

「はひい♡おひにしやねすへえひへふしやいっ♡♡」

「で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「い、いぐうううう♡♡おしやあっ♡あしゅいっ♡♡しえんしや

いのこだねっ♡♡」

「いろは、エロ過ぎだ……」

射精していろはが絶頂した。いろはのマンコは俺のチンコから精子を根こそぎ搾り取ろうとして蠢いている。

びゅるるるるるっ……

「ましやつ♡♡しえんぱいのこだねっ♡♡」

「いろは。まだまだだからな！」

「はひっ♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡♡ましえひだしやいつ♡」

「また射精るー!」

びゅるるるるるびゅるるるるるっ……びゅるるるるるびゅるるるるっ

……

「いぐううううう♡♡……はあ♡♡……はあ♡♡」

「いろはのマンコ、凄く締め付けてくるぞ」

いろはのマンコが気持ち良すぎて、すぐに射精してしまった。いろはのマンコは今、俺の精子で埋め尽くされている。

「いろは。そろそろ戻ろうぜ」

「そ、そうですね。身体がベトベトしますからシャワーを浴びたいです」

「そうだな……」

俺はゴムボートを漕いで浜辺まで戻った。早くシャワーで身体を綺麗にしたい。

ゴムボートから浜辺に戻ってきた俺といろははすぐにシャワーを浴びる事にした。精子や汗、海水の所為で気持ち悪くなっていた。

浜辺を見渡せる一色家の別荘に向かった。別荘があるとか凄いな一色家!別荘に着いてすぐにシャワー室にいろはと一緒に入った。

「先輩。んっ♡」

「いろは。お前のキス、エロいぞ」

「先輩の所為ですよ。だから死ぬまで責任取ってください」

「もちろんだ！幸せにしてやる！」

「はい。んんっ」

「んんっ……いろは」

シャワー室で俺はいろはとディープなキスをした。あれだけ射精したのにいろはとキスしただけでまた俺のチンコは勃起してしまった。

また犯したい。それはいろはも分かっているようで、手で俺のチンコを扱っている。その扱いが絶妙で射精を促していた。

「先輩。早く……来てっ♡」

「あ、ああ。いくぞ」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひい♡せ、先輩の奥まで来てるっ♡♡」

海では後ろからだっただけど、今度は正面からいろはのマンコに挿入した。片足を上げてもらい、そこに一気に挿入した。

それにしてもどうしているのはマンコはこんなにも気持ちいいんだろうか！腰が勝手に動いてしまう。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「しえんぱいっ♡はげひいっ♡♡」

「いろはのマンコが凄いのが悪いんだ！」

「しよ、しよんなっ♡♡」

「五月蠅いぞ！んんっ」

「んんんっ!?!」

いろはが五月蠅いので口を塞いでやった。するといろはのマンコはさらに締め付けてきた。俺は左手でいとはの頭を固定して、右手でいろはの尻を揉みまくった。

その度にいろはのマンコはギュウギュウに締め付けてくる。この事からいろはが軽く絶頂しているのが分かる。

もっともっと犯して俺だけを愛するようにしていやる！

「いろは！俺の子供を孕め！」

「はひっ♡しえんぱひのしょもしゃらひましゅっ♡♡」

「もつと動くぞ！」

「ずずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!」

「うひひひひひひ♡♡♡い、いひましゅっ♡♡」

俺はいろはを孕ませたい。いや、絶対に今日、今をもっていろはを孕ませるんだ。この射精で孕ませる!!

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ

……

「いぐうううう♡♡♡」

俺の射精と同時にいろはが絶頂した。するといろはの身体がダラりとなった。どうやら気絶したようだ。

でも俺はまだ犯し足りない。俺はベッドまでいろはを運んで続きをする事にした。

「いろは。まだ行けるだろ？」

「は、はいっ♡もつと先輩の子種、くださいっ♡♡」

「ああ、行くぞ！」

そこから俺は朝までいろはを犯し続けた。朝には部屋が精液と汗などで臭くなっていた。いろはは気絶していたのでシャワー室に移動して洗い流しながらさらに犯した。

やはりあざとい後輩と一緒に暮らすのはまちがっている。

うつつ。比企谷八幡……ではなく一色八幡だ。あざとい後輩だった一色いろはと夫婦になってもう二ヶ月の時間が経過した。

その間に一色父から一軒家をプレゼントされた。流星は社長だぜ。家をプレゼントとか想像していかった。

俺はこの家でいろはと同棲している。結婚届だったけ？婚姻届？まあ、どちらでもいいか。もう俺は一色いろはの夫なのだから。

結婚式も行った。と言っても小規模なものだった。俺は呼ぶ人間が殆どいなかったからな。戸塚と川崎に材木座くらいだろうか？

家族は一応呼んだのだが、その日に北海道に旅行に行きやがったのだ。別に期待はしていなかったがな。

でもそんな些細な事はもうどうでもいいんだ。俺にはいろはが居る。優しくしてお茶目で小悪魔ほい所がなんとも可愛い。

胸は……発展途上だから数年後に期待している。そんないろはは俺の腕を枕にして爆睡している。

お察しの通りだ。昨夜もよろしくやったのだ。それは最高の一言だ。

「最高だ……」

「んんっ……」

いろはの髪を軽く撫でるとくすぐったいのか、いろははモゾモゾと動いた。その際に乳首が俺の身体に擦れるので感じているのだろう。

もう一度いろはの顔を見ようとしたらいつの間にか消えていた。

「あれ？……のおおおお？」

ちゅぱっ……ちゅぱっ……

いきなり下半身に強烈な刺激が襲ってきた。俺は布団を剥ぐとそこにはいろはが俺のチンコを口に咥えていた。

顔を上下させつつ、舌をまるで別の生き物のように動かして刺激を強めてきた。

「……………はっ♡……………おはようございます、先輩♪」

「おう、続けてくれるか？」

「はいー」

ちゅぱっ……………れろっ……………ちゅぱっ……………

いろはの朝フェラは凄くいい。まるで頭まで溶けていくようだ。他の事なんてどうでもいい。この時間がいつまでも続けばいいと思う。

でもそうも言っていられない。そろそろ射精しそうだ。

「いろは!!」

「んんっ!!」

びゅるるるるびゅるるるっ……………

俺はいろはの頭を両手で押さえてチンコの根元まで啜えさせた。そしていろはの口マンコに射精した。この瞬間、頭に雷でも落ちたような感覚を覚えた。

いろはは口をチンコから離しても精子を零さずに全て飲み込んだ。

「んっ……………先輩の特濃ザーメン、喉にへばり付いて窒息するかと思いましたが。でもとっても美味しかったですよ♡♡」

「そうか。俺もいろはにそう言われて気分がいいぜ」

「それじゃ私は朝食の準備するので少ししたら来てくださいね」

「おう」

いろはは朝食の準備のために下に降りて行った。俺といろはの寝室は二階にある。ダブルベッドで大きさは申し分ない。

さて便所に寄ってからいろはの朝食を食べるかな。俺はベッドから出て一階に降りた。

じよろろろろっ……………

「ふう……………」

俺は便器平塚の口に小便を出した。平塚の口は俺の小便でいっぱいになった。俺は平塚の腹を一発殴った。

すると平塚は口にあつた小便を飲み込んだ。

「やっぱり臭いな……新しい便器に交換した方がいいかもしれない」

俺は手を洗いキッチンに向かった。そこには裸エプロンで朝食の準備をしているいろはが居た。

俺はミルクの準備をする事にした。ミルク精製機由比ヶ浜だ。俺は胸に吸引機を装着した。そしてスイッチを入れた。

後は自動でミルクを搾ってくる。一定量取れたのでスイッチを切った。

「いろは。ミルク、準備出来たぞ」

「はい！こつちも準備オツケーですよ！」

テーブル雪ノ下に乗せられた料理はなんとも美味しそうなものばかりだ。いろはなんと俺のために料理教室に通っているのだ。

だから朝から凄く豪勢でなおかつ性がつくものばかりだ。

「ぐんっ……ぷはあ……やっぱり由比ヶ浜のミルクはいい味だしているな」

「んっ……ふう……そうですね。朝はこれですね！」

俺といろははテーブル雪ノ下の上に乗っている料理を食べ始めた。するといろはが口に半分ほど啜えた料理を差し出してきた。

俺はそれの中でグチャグチャしてからいろはに戻した。

「どうだ？美味しいか？」

「はい！先輩の唾液の味も最高です。次は私ですね」

「おう……」

「もぐっ……はひ、しょうじょ」

「ごつくんっ……うん、いろはの唾液も最高だ!!」

俺達の朝食はいつもこんな感じだ。お互いの唾液を混ぜて料理を食べさせ合う。まさに最高の夫婦と言えるだろう。

「そうだ。いろは」

「何ですか？」

「便器平塚の口が臭いんだ。新しいのにした方がいいんじゃないか？」

「そうですね。もう少し使ってみてダメなら新しいのにしましょう」

朝食を食べた俺達はリビングでテレビをぼんやり見ていた。二人

全裸で。この家には俺というはしか居ないので大胆な格好が出来る。それにしてもいろはの胸、少し大きくなったか？毎日見ているから俺には違いがはつきりと分かるようになった。

「もう！どうしたんですか？胸ばかり見ても何も出ませんよ！」

「いや、ちよつと大きくなった？」

「分かります？私の旦那さまが毎晩、刺激を与えるものだから」

「そうか。これならいろはが巨乳になるのも近いな！」

「はい！だからその時はパイズリしてあげますよ」

いろはのパイズリか。それは楽しみだ！これから大人になるいろはが待ちどうしいな。そして産まれてくる子供はきつとカツコイに違いない。

俺はいろはを抱き寄せた。

「いろは。シャワーを浴びようぜ。昨日の臭いが付いたままだ」

「そうですね！私の身体で隅々まで洗って上げますね♪」

俺はいろはと風呂場に向かった。いろはに洗われるのはいつもの事だ。最高に気持ちいいんだよな。俺の洗いたい場所を的確に洗ってくれるから。

「ちゅ……んんんっ……キスしただけでももう元気になりましたね？」

「しようがないだろ。いろはのキスは俺を興奮させるんだから」

「嫌でした？」

「そんなわけあるか！」

いろはのキスが嫌いになる事は絶対はない!!最高に興奮させてくれるんだぞ！俺はいろはを抱きしめた。

そこからキスをした。俺の本気のディープキスをした。舌をいろはの口の中に入れて歯を舐め回した。

「ふはあ……どうだ？いろは、俺のキスは？」

「さ、最高です……腰が抜けてしまいました……♡♡」

俺はいろはを抱きかかえた。腰が抜けて立てない様だったので。いろはの顔は蕩けて涎が口から零れていた。

勿体ないのでその涎を俺は舌で掬って飲み干した。いろはの涎はどの飲料水より美味だ。

「もう我慢出来ません……早く入れてください♡♡」

「ああ、いくぞ!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひひひひひひ!!?」

「のおおおお……!!」

いろはのマンコは相変わらずの締まりだ。キツキツで俺のチンコを圧迫する。これじゃすぐにでも射精しそうだ。

だけど、我慢だ。すぐに射精しては勿体ない。俺は腰を動かした。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずず

ずつ……ぱんっ!!

「あつ♡んんっ♡は、はげしいっ♡♡」

「激しい方が好きなくせに!何言っているんだ!!」

「お腹に赤ちゃんがいるんです!」

「……マジか……」

「はい」

いろはの衝撃の一言に俺はフリーズしてしまった。いろはは手を子宮の辺り優しくなで始めた。色々と衝撃的過ぎて頭が戻ってくるのに少し時間がかかってしまった。

「いつ分かったんだ?」

「今朝、調子が悪かったので調べたら……」

「おおおお!!俺が父親か!」

「私は母親です。私達の子供がここにいるんですよ」

俺は腰を止めているいろはの子宮をゆっくり触った。まだまだ時間がかかるが、ここに俺というはの子供がいると思うと、これからのいろはとの性行為を考えないとな。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずず

ずつ……ぱんっ!!

「あつ♡せ、先輩っ!もつとゆっくりっ♡」

「今から俺の精子を注ぎ込んでやる!」

「そんな事しなくてもお腹の子供は私達の子ですよ」

「ああ、分かっている！いろはは!!」

「きゃあ!？」

俺は止めていた腰を動かし始めた。子供が大きくなる前にもっといろはを犯していたかった。安定期までお預けかもしれない。

その前にもっといろはのエロい顔をもっと見ておきたかった。

「先輩……ちゅっ♡私を先輩でいっぱいにしてください……」

「お前は どうして俺をこんなにも興奮させてくれるんだ!!」

ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずずず……ぱんっ!!

「んっ♡すごいつ♡も、もうイキます!!」

「俺もそろそろ限界だ！受け取れ！いろははっ!!」

びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「いひひひひひ♡♡♡♡」

「おおおおお……!!」

いろはの子宮への射精が止まらない。それにいろはのマンコは俺から精子を全て吸い取ろうとしているように蠢いている。

俺はチンコをマンコが一番奥にぴったり付けてから何度も射精した。

「先輩のまだまだ元気ですね！」

「当たり前だろ。いろはを犯しているんだぞ！こんなもんで萎えるかよー！」

「ステキです！もっと先輩の赤ちゃんの素くださいー！」

「ああ、いくらでも注いでやるぞー！」

ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずずず……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡先輩っ♡♡」

「いろはは!!」

俺は腰を動かした。感じているいろはの顔は凄く色っぽかった。一色だけに。寒いな。いろはの小さな身体を優しくだけど、強く抱きしめた。

俺の最愛の人、どんな事があっても離すもんか！そんな俺の気持ちを感じてくれたのかいろはも俺に抱き返してきた。

その後、風呂場で一時間もやってしまった。今後は気をつけないとな。でも俺が父親か。俺はあのクソ両親によるにはならないぞ。

男の子だろうと女の子だろうと平等に愛してやるぞ!!子供が出来た事は一色家だけで俺の家には言わないでいいだろ。

風呂から上がってから昼食を二人で作った。もちろんいろはの格好は裸エプロンだ。丸見えの背中とお尻がとつても可愛かった。

昼食はお互いに食べさせあった。いろはの唾液は最高のスパイスだ。

俺はキツチンを掃除しているあるものにいろはに聞く事にした。あれが噂の。

「いろは。あれがお掃除ロボ比企谷か？」

「そうですよ。自分と同じ苗字が気になりますか？」

「何言っているんだ？俺の苗字は一色だろ」

「そうでした！私ったら、いい加減、慣れないとダメですね」

最近は本当に便利になったな。あんな高性能のお掃除ロボがあるなんてな。人間みたいな見た目をしているんだな。

くちやつ……ちゅぱつ……

「それよりこっちに集中してくださいよ」

「悪い悪い。そろそろだからよ」

「はい！はむっ……」

俺は今、ソファアに座っているいろはにフェラをしてもらっている。俺の手はいろはのお尻を撫で回している。

スベスベしていつまでも触っていられる。

「うっ……で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「んんっ!!……うくんっ……はあ……先輩の精子、とつても美味しい

です」

射精した精子を飲み込んでいろははうつとり顔でそう言ってきた。そんな顔されるともつと犯したくなるだろ。

「いろは。上で続きやるぞ」

「もう夜まで待てないんですね。でもいいですよ、私ですから」

「それじゃいくぞ！」

「きやあ!?もう!先輩!!」

いろはをお姫様抱っこして2階に上がって夕食まで俺達は求め合った。やはりいろはは最高の嫁だ!!

やはりあざとい後輩の違和感に気づくのはまちがっている。

うつす、一色八幡だ。俺が後輩女子いろはと結婚して妊娠が判ってから数ヶ月の時間が流れた。その間にいろはのお腹は大きくなって、先日CTスキャンでお腹の中を見てみるとなんと双子の女の子を授かっていた。

一色両親にいろはは大いに喜んでいて。俺ももちろん喜んだ。そして来月、ついに出産予定日だ。だから二週間後に病院で入院しておく事が決まった。

だから俺は生徒会の業務をいろはから色々教えてもらっている。入院したら生徒会の仕事が溜まるから俺が処理する事になったのだ。ちなみに俺は生徒会では『生徒会長補佐』と言う役職になっている。副会長では?と思いきや違う。

ようはいろはの仕事の手伝いだったり、お茶汲みなどをやる役職だ。

「なあ、いろは。ちょっと聞いていいか?」

「何ですか?先輩」

「この御奉仕部ってなんだ?」

「ああ、それですか」

部活の一覧を見ているとふと目に入ってきた。どこか懐かしい響きなような、そうではないような気持ちにさせる。

無性に気になる部活だ。名前からどんな事をしているのかまったく判らない。

「学生とは常にストレスに晒されています」

「あ、うん。どうした?」

「それは次第に性欲に変わります。性欲を発散させないとストレスはさらに膨れ上がります!」

「そうだな……だから?」

「そんな十代の余りある性欲を発散させてくれる部活が御奉仕部なの

です！」

「お、おう……」

いろはの説明に若干、引いてしまった。こんな説明をするなんて珍しいな。ますます気になるな。

「どんな部活か見に行きます？」

「え、いいのか？」

「もちろんですよ。先輩には私が戻ってくるまで代行をしてもらわないとですか？」

「おう、それじゃいくか」

俺は車椅子を用意した。いろはに何かあつては不味いからな。それにお腹が重くて歩くのに一苦労するからな。

嫁を気遣える夫になるぜ、俺は。

俺といろはが来たのは学校の特別棟だった。ここは主に文化系部活の部室がある棟だ。ここに御奉仕部とやらがあるのか。

部室の前にすぐに到着した。俺は扉を開けた。そこに広がっていた光景に思わず絶句してしまった。

「おら！もつと腰を振れよ！」

「もつと締めろよ。ガバガバになるぞ！」

「最高だよ。この胸で何回抜いた事か」

「舌を使ってくれよ」

「ちんたらせずにしつかりとしろよ」

「おら射精すぞ!!」

部屋の中の男女が乱交中だった。一人の女子が複数の男子に犯されている光景は何とも言えなかった。それにしてもこの部室には来た覚えがあるんだよな。

「では紹介します。顧問の平塚静先生です」

「顧問も部活に参加しているのか。熱心だな」

「ただ、あの顧問の顔を見ると無性に腹が痛くなった。どうしてだろうか？殴られたとか？だとしたらあの顧問は教師を続けているわけ

がない。生徒に暴力を振るっただから。

「ほらどうした？もつとお前達が溜めているものを全部、私に吐き出せ！」

「先生、もう無理……」

「や、やめてください……」

「俺はもつと若い子とやりたかったんだ！」

男子3人を相手にしていた。マンコとアナルに口を使って男子の精子を搾り出そうとしていた。なんだか逆レイプしているようでありと怖い

「次に部長の雪ノ下雪乃部長です」

「あいつは知っている。学年主席だったな」

「そうです！」

学年主席の女子と有名な雪ノ下がまさか男子のチンコをマンコとアナルに挿入させているなんて想像も出来なかった。

「どうしたよ？気持ちいいんだろ？認めるよ」

「そうだぜ。もつと俺達と気持ちよくなるうぜ」

「だ、誰が気持ちいいなんて……!!」

「反抗的な態度がそそられるぜ」

「嫌と言っておきながら顔が蕩けているぞ？」

確かに否定しておいて顔だけは気持ち良さそうに緩んでいた。これはあれか？身体は許しても心は許していないみたいなの？

どの道、気持ちよさそうに腰を振っているので台無しだな。

「次は副部長の由比ヶ浜結衣先輩です」

「あの巨乳の……」

あの顔にも覚えがあった。見ていると段々イライラしてきた。何かを言われた気がするけど、思い出せない。

「結衣ちゃんのおっぱいで挟まれるの夢だったんだ」

「マンコも散々使っているのに締め付けるじゃないか！」

「アナルの気持ちいいよー！」

「口もチンコを頬張って離さないなんてどんだけビッチなんだよ！」

「ビッチケ浜って改名した方がいいぞ！」

「い、いや！もうやめて!!」

それにしてもあの由比ヶ浜は5人同時に相手にしているよ、どんだけビッチなんだよ。あの嫌がるのは演技か？

「ちなみに由比ヶ浜先輩は学校一ビッチで校長先生に身体を売ってここに入学出来たんです」

「え?!入学って事は中学の時にはもうビッチだったのかよ……ひくわ……」

中学生で身体を売るとかビッチ通り越してクソビッチじゃないか。神経を疑うな。

「それであちらに居るのが三浦優美子先輩と海老名姫菜先輩です」

「三浦の事はある程度、知っている。女王とか言われているんだよな」
金髪ロールの髪型はまさに女王と言わんばかりだけど、性格もかなりきついらしいと聞いた事がある。そしてあちらは凄い事になっていた。

「ほらアナルに指を入れられてチンコを勃起させているんじゃないし！」

「も、申し訳ありません！優美子様！」

「とつと無駄出し射精しろだし！ドピュドピュって床に出せだし！」

「は、はい。で、射精る!!」

三浦は男子のアナルに指を入れて勃起させて射精までさせたよ。同じ男子としてあんなプレイはしたくはない。

四つん這いになって床に精子を出している姿はまるで牛のようだった。

「この！この！腐女子とか言っていたのに！このクソ女！」

「も、もう止めて！あ、謝るから！」

「黙れ！俺の告白を台無しにして！おらおら!!」

「い、いやああああ!!」

三浦の横で海老名が少しちゃらい男子に押しさえつけられながら犯されていた。あの男子は確か戸部だったか？

去年の修学旅行で告白したけど、玉砕されたと噂になっていたな。もしかしなくてもその事を恨んでか？別にどうでもいいけど。

「ほらほらお姉さんのオッパイはどう？」

「す、すごく柔らかいです！」

「ま、マンコもヤバイ！」

「だったらこうだ！」

「アナルも締め付けが！」

「もつと出来るよ」

高校生と思えない女性が3人の男子を手玉に取っている。3人はたまらず射精してしまった。チンコはすっかり萎えていた。

誰だ、あの女性は？どこか雪ノ下に似ているような。

「あの人は総武高校のOBの雪ノ下陽乃さんです。雪ノ下先輩のお姉さんですよ」

「へえ……OBの人も参加出来るんだな」

「御奉仕部はOBの方は参加してもらえるように呼びかけたんです」

「そうなのか……」

流石はいろはだ。OBの人も参加してもらえるように説得するか俺には出来ないだろうな。

「それであちらが城廻めぐり先輩です」

「前の生徒会長か……」

ゆるふわな感じの生徒会長だったのは覚えてはいるけど、あまり話した事は無かった気がする。俺が生徒会に関わるようになったのはいろはが生徒会長になってからだしな。

「城廻先輩の口、ヤバイです！」

「脇に挟まれる感触が気持ちいいですよ！」

「膝下もスベスベで最高です！」

「もつとおチンチンちようだい♡♡みんなの熱々の精子掛けて!!」

城廻先輩は結構、マニアックなプレイをしていた。脇とか膝下とかにチンコ挟ませて精子まみれになっていたよ。

それと端つこの所にもまだ誰か居たよ。男子の腹の上で腰を振っていた。

「もうや、やめてくれ！」

「どうして？葉山君は私のマンコに熱い精子を射精していればいいん

だよ」

「嫌だ！好きでもない子に射精すなんて!!」

「グチグチうるさい!」

凄いい事になってるな。それにしてもあの男子の顔を見ていると由比ヶ浜と同じでイライラしてきた。顔を殴りたい。

「あの人は葉山隼人先輩。御奉仕部で有一の男子部員です。主に女子の性処理を担当しています。たまに男子の相手をしています」

「それを聞いてドン引きだわ……」

男子の相手つて……想像しない方がいいな。それにしてもこの学校にこんな部活があるなんて知らなかった。

「もしかして先輩も向こうに混ざりたいとか考えています?」

「はあ!?そんな訳あるか!俺はいろは一筋だ!!」

「もうそんな事を聞かされたら先輩の欲しくなっちゃうじゃないですか!」

「もう安定期だし、しばらくは会えないしいいだろう?」

「仕方ないですね。はい、先輩♡」

いろはがマンコを広げて俺を誘惑してきた。これに抗える男はいないだろ。俺はゆっくり挿入したお腹の赤ちゃん達に大事無いように。

ずずずずずつ……ぱんっ!

「うひい♡しゃ、先輩チンコが子宮口をノックしています♡♡」

「ボテ腹JKのマンコがこんなにも気持ち良いなんて!!」

「先輩のチンコはっ♡大きくなり過ぎですっ♡♡」

「ゆっくり動くぞ?」

「は、はいっ♡」

ずずずずずつ……ぱんっ!ずずずずずつ……ぱんっ!

ゆっくり動くのは前よりいろはのマンコの蠢きを感じ取れる。こんなのに射精してしまいそうだ。

「い、いろは。もう俺……!」

「き、来てくださいっ♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いくううううう♡♡♡……はあ♡お腹の子は先輩の精子を浴びてきつと先輩の事が大好きな子に育ちますよ♡」

いろはは手をお腹に当ててうつとり顔で面白い冗談を言ってきた。流石にフアザコンに育つのは心配だ。彼氏くらいちゃんと連れて来て欲しい。

娘達が連れてきたなら俺は受け入れるつもりだ。

「いろは。大丈夫か？結構な量だったから」

「大丈夫です♪この子達もお父さんの先輩の精子をたくさん浴びて元気になりますよ」

「それは楽しみだな。いろは、もつといいか？」

「いいですよ。しばらく会えませんから。私も先輩の精子をたくさん浴びたいです」

「ああ、もつと掛けてやるよ！」

そこから俺はいろははともうやりまくった。お腹の子供達に負担が掛からないように細心の注意をしてだ。

いろはのマンコはボテ腹なのに最高に気持ち良かった。いろはは最高の嫁だ!!!

「比企谷君！」

「ヒッキー!!」

「ヒキタニ!!」

「……え？」

俺は雪ノ下、由比ヶ浜、葉山の三人に呼ばれた。その時だった、俺の頭に何か引つかかっていた何かが取れた。

俺は思い出した。俺と一色は恋人ではない。学生同士で結婚出来るはず無い。御奉仕部なんて部活なんて存在しない。

俺は結果……その場で吐いた。そして一色の顔を見た。

「い、一色……お前……」

「もう！三人の所為で先輩の洗脳が解けたじゃないですか！先輩は大切だからゆつくり洗脳してきたのに台無しじゃないですか!!」

「お、お前。何言っているんだ？洗脳？い、いつから!？」

「そんなの私が先輩のスマホにアプリを入れる前ですよ」

そんな前から俺は一色に洗脳されていたのか!？そして結婚して子供まで妊娠させたのか？頭が痛くなってきた。

「先輩の洗脳はもつと強くないとダメですね。平塚先生、雪ノ下さん。先輩の身体を押さえつけてください」

「ちよ……平塚先生!？雪ノ下さん!？」

二人に押さえつけられてまったく身体が動かない。いろはは俺の耳にイヤホンを付けて、スマホの画面を見せてきた。

「目が覚めたら私の先輩になっていますよ」

「ま、待て——」

俺の意識はそこでブラックアウトした。

やはりあざとい後輩が世界を変えるのはまちがっている。

不思議な夢を見た。まだ俺が学生の時の夢だったと思う。目が覚めたら忘れてしまった。俺の名前は一色八幡。

一色コーポレイションの女社長一色いろはの夫だ。妻のいろはと結婚してもう20年以上になる。学生の時に結婚して色々あったが、まったく思い出せない。

それにしても妻は40代手前なのに美人だ。下手すれば20代後半と言えば信じてしまうほど若く見える。

それにスタイルだってボンキュボンとモデルでもしているのかと言うくらい美しい。ちまみにいろはは5人の子供を産んでいる。

なのにスタイルがいいのだ。こんな美人でスタイルよく一途な女性はいろはくらいしか俺は知らない。

「もう20年経つのか……」

この20年は怒涛の時代になった。まず俺の大学に進学する年に世界政府が設立した。バラバラだった人間が一つに纏まったのだ。

人種、宗教、国境の枠を超えて世界は手を取り合ったのだ。それから貧困や食料、紛争の問題を世界中の人間で考えるようになったのだ。

これを知った時は奇跡でも起こったのかと思ったほどだ。

その立役者の一人がなんといろはの父親だったのだ。いろはの会社が世界に貢献したのだ。いろはは父の後を引き継いで世界をよりよくするためのリーダーの一人になった。

俺はと言うと長年の夢である専業主夫になる事が出来た。その事に関していろはには感謝してもしきれない。

そんないろはは俺の腕枕でスヤスヤと寝ていた。俺達は昨夜もよろしくやってたのだ。20年も使っているマンコなのにまったく締まりが緩くならない。

俺のチンコを啜えて離さないマンコだ。それに胸も巨乳と言って

良いくらいに成長してパイズリも余裕で出来るほどだ。
そろそろいろはを起さないと。遅刻してしまう。

「いろは。起きろ、遅刻するぞ」

「んんっ……先輩？」

「おいおい。寝ぼけているのか？もう学生じゃないんだぞ」

「あ、そうでした。えへへ……」

ああ!!この何年経っても変わらない可愛い笑顔は俺をどんだけ萌えさせるんだ!?!襲いたくなるだろ!!

我慢したかったが、もう無理だ。昼から大事な会議がいろはにはあるが、知ったことではない。

「いろは。済まん」

「へ?きやあ!?!あ、あなた？」

俺はいろはをベッドに押さえつけて後ろから挿入した。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい……あ、朝から奥まで♡♡」

「朝からエロい、いろはが悪いんだぞー!」

「は、激しい……♡♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

俺は腰をいろはのお尻に何回も打ちつけた。その度にいろはのマンコはギュウギュウと締め付けてきた。

どうしているのはのマンコはこんなにも素晴らしいんだ!こんなマンコを味わってしまったらもう他の女性など目に入らないじゃないか!

「いろは!愛しているー!」

「わ、私ですー!」

「で、射精るー!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「い、いくうううう♡♡♡」

「まだ、まだ射精る……」

朝からたくさん射精してしまった。お互い40歳近いのに朝からよくやるなと思ってしまう。でもこんなにも相性のいい相手はいろいろには居ないだろう。

「あなた……重いわ」

「す、済まん！」

射精した後、俺はそのままいろはをベッドで挟んでしまった。俺はすぐにチンコを抜いた。するといろはが俺のチンコに飛びついて口に咥えた。

「ちゅぱっ……あはあ……朝からたくさん射精しましたね♪」

「悪いな、会議があるのに……」

「気にしないでください。今日の会議はそんなに話す内容ではないので」

「娘たちを起こして朝食にするか」

「はい！」

「おい！メイド雪乃、結衣。いろはの着替えを手伝え」

「……はい。承知しました」

一色家の専属メイドの雪乃と結衣に命令を出した。俺が手伝いたいけど、俺は娘達を起こす仕事があるから出来ない。

一色家には専属のメイドが複数人居る。ただし全員が鉄仮面を付けていて素顔を見たことは無い。

俺は着替えを終えているはと一緒にダイニングに向かった。キツチンから食材を切る音が響いていた。

俺といろはの娘達が朝食を作っているのだ。メイドにやらせればと考えるだろう。それでは将来的に駄目だと思い、出来る事なら率先してするようにが我が家の教育方針だ。

「おはよう。皆」

「あ、お父さん、お母さん。おはよう」

「二人ともおはよう」

最初に挨拶してきたのはいろはが高校生の時に産んだ双子の姉妹だ。二人ともいろはに似て美人に育った。大学生になってさらに綺麗になったと思う。

長女はスポーツ万能で剣道で全国制覇をしてしまうほど強い。次女は中学高校の模試で常に1位を取ってきた勉学少女だ。

「パパ！おばあちゃん！」

「パパ、おばあちゃん。おはよう！」

「おはよう」

次に挨拶してきたのは俺と双子の姉妹の娘達でいろはにとつては孫だ。俺が大学を卒業してしばらくして世界政府は身内同士の結婚を許可したのだ。ついでに重婚も。

つまり近親相姦が公認になったのだ。これも少子化対策なのだろう。だから俺は娘達とこうして子供を作る事が出来ただけだな。

「お父さん、お母さん。おはよう」

「おはよう。お父さん、お母さん」

「ああ、おはよう二人とも」

「おはよう」

次は三女と四女だ。三女はいろはが大学生の時に産んだ娘で、長女に似てスポーツが得意でソフトボールをしている。

個人競技より団体競技の方が好きなようだ。成績も全国ベスト4になるほどだ。我が娘ながら凄すぎる。流星はいろはの娘だ。

四女は運動も勉強も平均より少し上なだけで普通の女の子だけど、料理の腕がすでにプロレベルで店だつて持てるくらいだ。

料理については俺が教えていたけど、いつの間にか抜かれていた。将来はシェフになるのが夢だそうだ。すぐに叶いそうだ。

「お、お父さん。お母さん。お、おはよう……」

「ああ、おはよう」

「おはよう。昨夜はちゃんと寝た？」

最後に最後に挨拶してきたのが、末っ子の五女だ。姉達と比べると引つ込み思案だけど、中々優秀だ。勉強は姉から教えてもらっているので成績も上々だ。

「お、お父さん！これ!!」

「これは……」

末っ子が俺に出してきたのは『婚姻届』だった。そう、今日は末っ

子が16歳になったのだ。これで俺と結婚出来る。

姉妹の中で結婚していないのは末っ子だけだ。恐らく今まで仲間外れにされているようで今日から自分も仲間に入れてもらえるのが嬉しいのだろう。

「今日、放課後に迎えに行くから一緒に役所に出しに行こうか？」

「う、うん！これで私もお姉ちゃん達と同じでお父さんのお嫁さんになれるんだよね？」

「ああ、そうだ。今夜はパーティをしてその後には処女をお父さんが奪って、孕ませるからな。お父さんの子供、産んでくれるか？」

「も、もちろんだよ！たくさん産むよ！」

「そうか。お父さんは嬉しいぞ」

俺は末っ子の頭を撫でた。すると顔が赤くなつて幸せそうな顔になった。娘達は俺に撫でられると絶対この顔になる。

よほど気持ちいいのだろうな。もつとしてやりたいけど、他の娘達が見ているので止めた。末っ子は残念そうな顔になった。可愛いな。

「ほら！お前達、もう時間だぞ」

娘達はそれぞれの学校に向かった。いろはも仕事に向かったので俺は家の掃除を鉄仮面メイドとして、末っ子が渡してきた『婚姻届』の自分の欄に名前を書いた。

これで『婚姻届』を書くのは6回目だ。人生で6回も書くのは俺くらいだろう。

そして学校が終わる時間を見計らって末っ子を迎えに行つて、そのまま役所で『婚姻届』を出してきた。

これで晴れて俺と末っ子は夫婦になった。よほど嬉しいのか役所の帰りに車の中で泣いた。俺も嬉しい。

家に帰ってみると他の娘達がいろはと一緒にパーティの準備をしていた。ご馳走が食べられると小さい娘達は大はしゃぎだった。

そして夜、末っ子の部屋に俺はやってきた。今夜、末っ子の処女を奪い、孕ませる為に。

「緊張しているのか？」

「う、うん……最初は痛いつて聞くし……」

「そう緊張するな。優しくするからな」

俺はそつと末っ子を抱きしめた。末っ子も俺を抱きしめてきた。俺は末っ子をベッドに押し倒した。そして服を全部脱がした。

いろはと同じで美しい身体だ。それに巨乳に育ったな。いろはの場合、高校生の後半で急に大きくなったよな。

だけど、彼女は16歳ですでに大きい。これは揉みがいがあるな。俺は末っ子を犯した。最初は処女膜を破られて痛がっていたが、段々と俺のチンコに夢中になった。

そして膣内出しを5回ほどした。今日が排卵日な末っ子は射精した時にお腹を撫でて俺の熱い精子を感じていた。

これで妊娠したかは分からないが、今夜から一週間は犯し続ける予定だ。姉達の時もそうして妊娠した。

ただ、初めてだった事もあって5回目の射精で末っ子は気絶するよううに寝てしまった。俺はまだ射精したりないのに。

「お疲れ様。あなた」

末っ子の部屋から出るといろはが立っていた。俺はいろはの姿を見た瞬間にさらに性欲が強くなった。

「ああ、だけどまだ……」

「たくさん射精したのに凄い……」

いろはは俺の勃起しっぱなしのチンコを凝視した。末っ子に結構な量の精子を射精したのにまだまだ元気な俺の下半身。

「いろは。鎮めてくれ」

「いいですよ。行きましょう」

俺いろはの寝室に到着した。いろはがベッドの上に行くとき足を開いてマンコを手で大きく広げて誘ってきてくれた。

「私も興奮して鎮めて欲しかったんです♡」

「行くぞ。いろはー!」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「うひひひひひ♡♡あ、あなたの奥までっ♡し、子宮をノックしたっ♡♡」

「いろはー!お前、エロ過ぎだ!!」

高校の時より歳を重ねたのか色っぽい過ぎだろ、俺の妻は！そのまま俺はいろはと朝まで求め合った。

ずずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「あつ♡んんっ♡♡そ、そんなに激しいとっ♡すぐいくっ♡♡」

「俺も射精するぞ！いろは!!」

「いっばいきてっ♡」

「射精る!!」

びゅるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いくうううう♡♡♡」

「おおおおお……まだまだ射精るぞ……」

久しぶりに最高の射精だったぜ。さつき末っ子に散々射精したのにまだ射精するとかどんだけ溜まっていたんだよ。

「いろは！まだまだぞ！」

「もちろんいいですよ♡たくさん愛してください♪」

それから俺はいろはの膣内に5回ほど射精した。もつというはを愛してやりたかったけど、でも今日は打ち止めだ。

もう射精出来ないほど射精したと思う。金玉の精子がスツカラカンになってしまった。やはりいろはに射精するのが一番気持ちいいな。

「あなた」

「どうした？いろは」

「もし私が自分以外の人を都合のいいように操っていたら怒りますか？」

「いや。いろはがそうするのは理由があるからだろ？もしそれで人に怒られるようなら一緒に怒られてやるよ」

「ありがとうございます。先輩」

いろはの意味不明な言葉を忘れて俺は眠りについた。例えば、俺がいろはに操れているように俺はいろはを一番に愛している。

例えば、いろはが俺の事を操っていたとしても俺はいろはを愛するだろう。

やはりわたしがアプリを使うのはまちがっている。

わたし、一色いろはは、今女子トイレである生徒たちを眺めていた。彼女たちはわたしを生徒会長に勝手に推薦した人たちだ。

4人グループで毎日一緒にいるのを見かけている。葉山先輩に慣れ慣れしいわたしの事が気に食わないようだ。

だからわたしを困らせようと生徒会長に推薦したけど、わたしが見事に生徒会長になった事で面白くないように毎日、睨んでくる。

流石に生徒会長をいじめたとなれば、停学では済まない事くらいわかる様で関わって来なくなった。

「だからってわたしが許したとは話が違うよね？」

「うひいひい♡」

「ひやああああ♡」

「ああああ♡」

「んああああ♡」

わたしを推薦した人たちをわたしはスマホに勝手ダウンロードされていた催眠アプリで復讐していた。最初はこんなアプリで人を操れるなんて思っで見なかったけど、実際に操れたので驚いている。

でも催眠アプリを使うのは今回が初めてではない気がするの。気のせいだろうか？

「い、一色さん！もうやめでえええ！」

「いぎたぐないいいい！」

「許じて許じて許じてっ！」

「ごめんざいごめんざい！」

「ええ〜どうしようかな〜」

わたしは推薦した人たちを催眠アプリで意識だけ残して体の自由を奪った。かれこれ一時間、オナニーをさせている。しかも感度10倍にして。

床は彼女たちの愛液で水溜りが出来ている。このままだと脱水症になっておかしくない。匂いだって酷いものだ。

「もうしませんがらー！」

「もうわたしは生徒会長になっているのに？」

「じません！じません！」

「んんん……」

「いぎだぐない！」

「でもな……」

「なんでもじまず！」

「それなら……今からオナニーでイカなかつた人だけ許してあげましょう！」

わたしがそう言うと彼女たちはさつそくオナニーを始めた。でもすぐに彼女たちは絶頂して潮を噴き出した。おおお……噴水みたい！

「ひあいいいい♡」

「あああああ♡」

「うひいいいい♡」

「んああああ♡」

「はくい！全員、イッたので罰ゲームです！」

「そ、そんな……」

リーダー格の女子が絶望したように顔を青ざめた。まあ、感度50倍ではすぐにイッてしまうんだけど、彼女たちはそれを知らない。

わたしを勝手に生徒会長に推薦したからこうなるんですよ。大人しくしていれば平和に学校生活を送れたのに。

「では入ってください！」

「ふう〜!!ふう〜!!」

「ひい!?せ、先生？」

「ふう〜!!」

部屋に入ってきたのはわたしたちのクラス担当の教師だった。わたしの話をまったく聞かずに勝手に納得した意味不明の教師だ。

でも普段と様子が違う事が彼女たちを不安させた。それもそうだと息を荒げて、全裸でチンコを勃起させていれば、悲鳴を出してしまうよね？

「先生には催眠アプリで性欲を極限まで我慢して貰っているんです

よ」

「ふうく!!ふうく!!」

「これからみなさんには先生の子供を孕んでもらいます!」

「へ?い、いやあ!」

「逃げられませんよ?」

「ふうく!!」

一歩一歩、息を荒げている全裸勃起の教師が近づいてくれば逃げてくもなるよね。でも催眠で体がいう事を聞かなければ、意味ないけどね!

「じゃあ、最初はあなたで!」

「いやあ!お願い何もしないから!」

「もう遅いでくす!では、先生。彼女の処女を奪ってあげてください」

「ふうく!!」

「うぎい!?痛い痛い!!」

教師の勃起した肉棒が彼女の膣内へと挿入された。股からは一筋の赤い血が流れている。良かったね、これで大人の女性になれたよ。

「ふん!ふん!」

「せ、先生!もうやめてっ!」

「ふん!ふん!」

「うぎい!?ああっ♡んあっ♡な、なんで!?!」

彼女は痛みが段々と快楽になっていくのが不思議でしようがないようだった。それもそのはずだ。これも催眠アプリで痛みが快楽に変換しているのだから。

催眠アプリで色々と実験したけど、感情に痛覚までも自由に操れた。だから彼女には先生に抱かれる度に痛みが快楽に変換して、先生に対する好感度がMAXになるようにしておいた。

「先生、すきっ♡もっと先生の突いてっ♡」

「ふん!ふん!」

「あんっ♡ああ♡うひい♡」

「ふん!!」

「ひゃあああああ♡」

リーダー格の彼女は先生の射精で絶頂したようで、アへ顔になっていた。目からは涙が、鼻からは鼻水が、口からは涎が垂れていた。やらせておいてなんだけど、酷い顔だと思う。でも自業自得ですよ。男子たちに媚びていただけでわたしをいじめようとするんですから。

「それじゃ……次の人！行ってみましょう！」

「い、いやああ!!」

「こ、来ないで！」

「おねがいじまずっ!!」

「ふうく!!」

それから残った彼女たちは先生にたくさん射精してもらった。みんな、最後はアへ顔で嬉しそうにしていた。喜んでくれたなら嬉しいですよ！

数カ月後が楽しみですね。産まれる前にはちゃんと人格を戻してあげますから。それまで楽しんでください。

「いろは？」

「あ、先輩！」

わたしが部屋から出ると先輩に遭遇した。時間を見てみるともう昼休憩になっていた。彼女たちの反応が面白くて時間を忘れていました。

「ほら弁当持ってきたから一緒に食べようぜ」

「はい！生徒会室、開けますね」

「おう」

わたしはもちろん先輩にも催眠アプリを使った。わたしの事は名前呼びにして、毎日お弁当を作ってくるようにした。先輩のお弁当は毎日、違うおかずで飽きないんですよ。

「んんく……わたし、幸せですよ」

「弁当一つで幸せになるとはな」

「先輩のだからですよ！」

「分かっているよ。それでいろは……」

「分かっていますよ」

先輩はズボンを脱いで勃起したおちんちんを露にした。いつ見ても凶暴なおちんちんですね。匂いを嗅いただけで孕んでしまいそうです。

「はむっ……じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「のおおおお!!いろは、いいぞー!」

「じゅるるるるるっ……じゅるるるるるっ」

「そ、それヤバい!で、射精る!」

「んぐっ……んぐっ……先輩のせーし、すぐくネバネバですね」

わたしは先輩のおちんちんにフェラをして射精させる事に成功した!先輩の精子は苦く粘々で喉に絡みついてくるけど、ちよつと癖になりそうな味をしている。

先輩にはわたしが幼馴染で想い寄せているという催眠をかけた。これが思いのほか、楽しい!

あの腐った目でわたしの事をチラ見してくる時の表情が可愛らしくて最高に興奮する!あ、鼻血が出そうになった。

「次は先輩の番ですよ?」

「分かっている。じゅるるるるるっ……じゅるるるるるっ」

「うひい♡あんっ♡ひゃああああ♡」

「じゅるるるるるっ」

先輩がわたしのスカートの中に顔を入れてマンコを舐めて愛液を吸っている。お互いの性器を舐めるのは恋人のなる前の大切な儀式と催眠をかけているので先輩は何の疑問を持つことなくしてくる。

先輩はわたしのマンコを舐めるだけではなく舌を膣内に侵入させてきた。舌がわたしの膣内を蹂躪している。

「せ、先輩!」

「じゅるるるるるっ」

「ひゃああああああ♡」

「んぐっ……んぐっ……」

「の、飲まれているううう……♡」

先輩がわたしの潮を零さずに飲み干してきた。本当にそこまで催眠はかけていないのに変態なんだから先輩は。

先輩の股間は大きくなってテントを張っている。本当はここで先輩と繋がりたいけど、流石に学校では雰囲気が出ない。

「放課後まで我慢してください。そしたら明日の朝まで出来ますよ」

「あ、ああ。いろはが言うなら我慢する」

「いい子ですね。先輩」

「じゃあ、放課後に俺の家でな」

「はい！放課後に」

わたしは生徒会室で先輩と別れて昼前に教師と彼女たちを残した部屋に向かった。部屋に入つてすぐに鼻に強烈な匂いが入ってきた。

部屋の中を見渡して見ると教師が女子生徒を押さえつけて犯していた。

「ふん！ふん！」

「ああ♡んあ♡ああんっ♡」

「ふん!!」

「ああああああ♡」

先生は容赦なく腰を女子生徒に叩きつけていた。女子生徒は元気がなくなっていた。あれから1時間ほどしか経っていないけど、性欲開放モンスターとなった教師相手では限界なんてすぐに来たのだろう。

「先生。もういいですよ……寝てください」

「すう……すう……すう……」

「さて、換気換気！」

わたしはすぐに部屋中の窓を全開にして、部屋の匂いを外へと出した。それにしても性欲開放モンスターとなった先生が射精した精子の量はかなりヤバいですね。

もしかしたら先生はもう使い物にならない可能性がありますね。今度する時はもっと性欲をコントロール出来るようにしておかないと。

「おくい……大丈夫ですか？」

「しえ、しえんへい……しゆきい♡」

「大丈夫ですね。この程度で終わったと思わない事ですね」

わたしの復讐はまだまだこんなものではないですよ？今回で孕んだか分からないから次は校長や教頭にでも犯してもらいましょう。

そしてお腹が大きくなった時に催眠を解除して全校生徒のまで出産ショーでもして貰いましょうか。

「さあ、みなさん！早く立って体を綺麗にして午後の授業を受けて帰ってください。それとこの部屋の掃除をするのを忘れずに！」

わたしはそれだけ言って部屋を後にした。匂いが酷くて鼻が曲がりそうだったので、早く離れたかった。わたしも授業を受けて、夜の準備をしないと。

今夜は先輩が寝かせてくれないはずですから！楽しみで股が濡れてしまいます。先輩はどんな風にわたしを抱いてくれるのだろうか？

「先輩。わたしは絶対に裏切りませんか……」

近々、あの人たちへの制裁を考えておかないと。でも今は先輩との今夜の事に集中です！本当に楽しみです！

これでわたしも立派な大人の女性の仲間入りですよ！先輩の心をガツチリと掴んでみせます！

「その前に授業授業っと」

わたしは早足で教室へと向かった。今夜の事を妄想しながら股を濡らしていた。

やはりわたしがアプリを使うのはまちがっている。
続

わたし一色いろははついにやった！先輩こと比企谷八幡と週末をベッドで過ごした。ベッドの上での先輩は獣と言うよりケダモノと言った感じだった。

わたしをベッドに押さえつけて性欲のままにわたしを犯した。激し過ぎて何度、気絶した事か。それだけ先輩はわたしの事を想っていると知れて良かった。

催眠アプリは万能ではない。ある程度の意識を変える事は出来ても人格ほのものを変えると脳が処理出来ずに廃人になってしまう。

「あの時の先輩はすごかったな……」

思い出しただけでも鼻血が出てしまう。それともう一つ分かった事もある。先輩の性欲を一週間も押さえつけては反動でこっちの身が持たない。

これからは三日に一度は発散させた方がいいかもしれない。先輩の子供は卒業してからも遅くないし、今は学生カップルの関係を楽しんだ方がいいよね。

「さて、お待たせしました。相模先輩！」

わたしは先輩のクラスメイトで文化祭実行委員長の相模南先輩を人が寄り付かない部屋に来るように催眠アプリで命令しておいた。

先輩の悪名は文化祭の最終日に屋上で女子を泣かした事がある。その泣かした女子と言うのが相模先輩だ。

「相模先輩。どうして文化祭最終日に屋上に行ったんですか？」

「……それは——」

わたしは相模先輩から文化祭最終日の真相を聞きだした。そして相模先輩を殴りそうになった。先輩は自分を犠牲にして相模先輩を救ったんじゃないですか！

それなのに相模先輩は先輩に感謝する訳でもなく、普通に学校生活を満喫していると！わたしを生徒会長に勝手にした人たちも最低で

すけど、この人もこの人で最低ですね。

「ここは先輩の代わりに制裁を加えないといけませんね。相模先輩、服を脱いでください」

「……はい」

「相模先輩の体はそれなりにいいですね。これなら来年にはわたしの勝ちですね！」

結衣先輩ほどではないけど、雪ノ下先輩よりある胸に少しムカつきましたけど、あれくらいなら来年にはわたしが勝てる！

「とりあえず1時間オナニー、感度10倍で」

「……はい。ああ♡んひい♡ああ♡」

「同性のオナニーを間近で見ると色々思うところがありますね……」

「んひい♡んあ♡♡ああああ♡」

「あ、イッた……」

「んん♡♡んあ♡♡んひいひい♡♡」

相模先輩は絶頂してもなお、オナニーを続けた。1時間まで50分以上ありますからね。相模先輩は乳首やクリトリスを摘まんだり、マスコに指を挿入したりしてオナニーを続けた。

「ああ♡んひい♡あひゃ♡」

「相模先輩はそんな風にするんですね……」

「んひいひいひい♡ああああ♡♡」

「またイッた……この調子じゃあ持ちませんよ？聞いていないか……」

相模先輩はオナニーを続けて絶頂を何度もしていた。絶頂する度に涙、涎、鼻水を流していた。酷い顔ですね、誰にも見せられない顔ですね。

相模先輩の下の床には愛液で水溜りが出来つつあった。それにしても30分で大いぶ、水溜りが出来ましたね。

「そろそろ頃合かな？……意識だけ戻っていいですよ」

「んひい♡あ、あれ？……な、何!?んひいひい♡」

「こんにちは。相模先輩」

「だ、誰?!ああ♡♡」

「生徒会長の一色いろはですよ」

「い、一色さん？んひいいい♡」

相模先輩は今の状況が理解出来ないようで混乱している。それもそうだよ。気がついたら全裸でオナニーをしているんだから。

わたしを生徒会長に推薦した彼女たちもそうだった。体が長時間のオナニーで敏感になっており、思考が追いつかない状況なのだから。

しかもオナニーは止められないオマケ付きなら当然ですよ。

「あ、1時間経ちましたね」

「ああ♡」

「流石にこれで正気ではられないでしょう……」

感度10倍の1時間オナニーなんて誰にだって正気ではられないものです。彼女たちだってそうでしたから。

「相模先輩。いい加減、起きてください」

「ど、どうして?」

「どうして、自分がオナニーをしているか? って事ですか。わたしが相模先輩に催眠をしたからですよ」

「な、何で!?!」

「文化祭での先輩の評価を台無しにしたからですよ」

「ど、どうしてあんなやつ的事なんで!」

わたしはそれを聞いてキレました。自分で委員長になったくせに仕事は放棄して危うく文化祭を台無しにしようとしたくせに!

最後には逃げ出して迷惑をかけるなど、救いようがないクズですね!
!これはしつかりと教育しないとダメですね!

「みなさん!お願いします!」

「え? な、なに?」

わたしが部屋の扉を開くと全裸の男子が10人ほど入ってきた。もちろん性欲を我慢させて、今にも射精しそうになっている。

ども先輩と比べてまだまだですね。先輩のは見た目と同じで凶暴ですからね。そろそろ始めないとわたしが先輩と楽しめません。

「相模先輩には文化祭で迷惑をかけた委員会の人たちの性処理をして

もらいます」

「ふ、ふざけんな！誰がそんな事を！」

「拒否権なんてある訳ないでしょ？迷惑をかけたなら謝罪しないと」

「い、いやあーこ、来ないで！んひい♡」

男子たちが一斉に相模先輩に触れた。相模先輩は揉みくちやにされて感じていた。まだ感度10倍のままなので相当感じるでしょうね。

「ああああ♡んひいい♡んああああ♡」

「どうですか？男子に滅茶苦茶にされる気分は？」

「や、やめてっ♡あんっ♡ふれるなっ♡」

「そんな事を言っても無駄ですよ？」

「んひああああ♡」

相模先輩は唇を強引に奪われ、胸を揉まれ、乳首とクリトリスを摘ままれて絶頂していた。体は身動きが取れず、他人にいいようにされているのは相当苦痛のようだった。

でも安心してください。これが終わった時には相模先輩は立派なドMの性処理肉便器になっていますから！

「ら、らめえええ♡抜いて抜いてっ♡いぐいぐいぐっ♡」

「おおおお……すごいですね」

「ああああああ♡んああああああ♡」

相模先輩は口にマンコにアナルに男子たちのチンコを挿入されていた。3本も一度に啜えるなんて凄いですね！

おかげで相模先輩は段々と幸せそうな顔になってきましたね！相模先輩に挿入している3本以外の男子たちはチンコをシコツて精子をぶっかけていますね！

「ひゃああああ♡んああああ♡」

「あ、イッた」

「もつとちようだいっ♡まえもうしろもついてっ♡」

「相模先輩がビッチになってきましたね。大丈夫ですよ、10人も居るんですか」

「ああああああ♡」

相模先輩が男子たちのチンコを啜えるようになって、数時間が経過した。ずっといるのは面倒なので終わった頃に見に来た。

部屋は精子臭く、相模先輩は精子まみれになっていた。男子たちは射精してもう勃起してはいなかった。

「相模先輩。文化祭の事を公表してくださいね」

「は、はいいい♡ぜんぶ、はなしましゅう♡」

「そうですか。明日も違う10人の相手、お願いしますね」

「はいいい♡」

わたしは精子まみれの相模先輩を部屋に放置して先輩の下に向かった。精子まみれの相模先輩を見ていたらわたしも先輩に滅茶苦茶にして欲しくなった。

「いろは？どうしたんだ」

「先輩に抱いて欲しくて、もうここが大変な事になってしまつて」

「そ、そうか。分かった……でも学校だし……」

「なら生徒会室に行きましょう！」

わたしは先輩を生徒会室に連れ込んだ。すると先輩がわたしを壁に押し付けてきた。先輩に壁ドンをされるなんて、鼻血が出てきそうです！

「んんっ♡せ、先輩……」

「いろは……いろは！」

「あんっ♡先輩、焦らなくてもわたしはどこにも行きませんから」

「あ、ああ」

「ほら先輩」

「いろは！」

「はひい♡」

先輩は生徒会室に入るなり、わたしに勃起したチンコを押し付けてきた。ズボン越しでも大きく勃起しているのが嫌でも分かる。

先輩はわたしのパンツを少しズラして容赦なくチンコをわたしのマンコに挿入した。一気に子宮の入り口までチンコの先が当たった。

「いろは！いろは！」

「あんっ♡ああっ♡ああんっ♡」

「いろは！」

「うひいっ♡」

先輩の容赦ないチンコがわたしの膣内を出たり入ったりして絶頂させようとしてくる。先輩のチンコの先がわたしの子宮の入り口を叩く度に頭が真っ白になる。

「先輩っ♡んんっ♡」

「んっ……いろは、射精る！」

「全部、くださいっ♡」

「で、射精る！うっ……!!」

「あああああ♡しえんぱいのたくしやんっ♡」

先輩の精子がわたしの子宮にたくさん注がれている。熱く大量の精子がわたしの子宮を泳いでいるのが分かる。もちろん避妊薬を飲んでるので妊娠はしない。

でも飲んでいなかったら排卵期でなくても妊娠しそうなくらい元気がいい。それに先輩のチンコはまだわたしの膣内で硬い。

「いろは……もう一回いいか？」

「もう仕方ないですね……わたしだから受け止められるんですよ。他の人なら先輩の性欲は受け止められませんから」

「ああ、分かっている。ありがとう、いろは」

「んっ♡今度は後ろからどうぞ」

「いろは！」

「あひい♡んんっ♡ああああ♡」

わたしが壁に手を付いてお尻を向けると先輩はわたしの腰を掴んでお尻に腰を叩きつけて来た。先ほどよりもチンコがわたしの膣内を蹂躪してくる。

「いろは！もう射精るぞ！」

「はいっ♡先輩、んんっ♡」

「んっ……射精る射精る」

「いくいくいくっ♡しえんぱいのいっぱいですっ♡」

先輩の精子がわたしの子宮に溜まってきている。先輩は射精で疲れたのか、そのまま寝てしまった。寝顔は可愛いですね。

さて、次は大本命の人たちですね。早く制裁を終わらせて、先輩とのラブラブの学校生活を始めないと。

「待っていてくださいね。先輩っ♡」

わたしは最後の制裁の準備に取り掛かった。あの人たちにはしっかりと教育しないとダメですよね！

やはりわたしがアプリを使うのはまちがっている。
終

わたし一色いろはは、奉仕部の部室にやって来ていた。最後の制裁を加える相手は雪ノ下先輩、由比ヶ浜先輩、葉山先輩、海老名先輩の四人だ。

葉山グループの三浦先輩と戸部先輩は嘘告白の事をまったく知らなかったので、制裁対象から外した。

「いろは！いろは！」

「んひい♡先輩、はげしいっ♡」

「好きだ、いろは！」

「わ、わたしも好きですっ♡」

「で、射精る！」

「あああああ♡しえんぱいのたくしゅんっ♡」

わたしは奉仕部の部室で先輩とセックスしていた。周りには先ほどの四人が居るけど、先輩には彼らの存在は見えなくしておいた。ホント、催眠アプリって便利ですよ。

「いろは。俺はお前の事が好きだ！」

「分かっていますよ、先輩。わたしも先輩が大好きです！」

「いろは！」

「もう分かりましたから」

先輩は射精して疲れているのにわたしを抱きしめて放そうとしない。ホント、先輩は人の事を信じられない人生を送ってきたんですよ。

ちよつと素直になるように催眠アプリで仕向けるようにしただけでわたしに依存してくれるなんて、驚きです。

「大丈夫ですよ、先輩。わたしには先輩しかいませんから」

「本当か!？」

「はい！だから授業に出てください」

「分かった。ちゃんと授業に出てくる」

先輩はご主人様に怒られた犬のようにしよんぼりしながら奉仕部の部室を出て行った。本当に可愛かったですね！もつとたくさん愛してあげたかったですけど、わたしにはやる事があるので放課後までお預けです！

「さて、みなさん！お待たせしました。喋っていいですよ」

「いろは！これはどういう事なんだ!？」

「いろはちゃん！これ、どうなっているの!？」

「一色さん。私たちに何をしたの?」

「これ、どうなっているの?」

葉山先輩に由比ヶ浜先輩、雪ノ下先輩と海老名先輩が次々と何が起こっているのかの説明をわたしに求めてきた。まったく全裸で叫んで誰かが来たらどうするんですか？

まあ、全校生徒はすでに催眠アプリでわたしの支配下なんですけどね！

「文化祭と修学旅行の件と言えば分かりますよね?」

「そ、それは……」

「頼んでおいて、最後は丸投げとか最低ですね。葉山先輩」

「ち、違うんだ！これには訳が!」

葉山先輩は見つとも無くい訳を口にした。そもそも催眠アプリで事前に何があったのかを聞いているので無駄なんですけど。

「文化祭も修学旅行も比企谷君が勝手にやった事よ!」

「でも依頼を受けたのは雪ノ下先輩ですよね?」

「それは……」

まったく言い返さないなら黙っていてほしいですね！由比ヶ浜先輩に海老名先輩も二つの件で何も言い返さないようですね。

「先輩はきつとあなたたちに何も思わないと思うのでわたしが勝手にさせてもらいます!」

「お、俺たちに何をさせるつもりだ?いろは……」

「簡単ですよ。葉山先輩にはこれから三人を犯してもらいます」

「は?な、何を言っているんだ?いろは」

まったくサーカー部の次期部長が一度聞いただけで理解してほし

いものですね！でも何があるのか分からずに怯える葉山先輩も中々悪くないですね。

でもわたしには先輩がいるのもう恋愛対象ではないんですよね。

「まず雪ノ下先輩からで」

「ま、待ってくれ！いろは！」

「こ、来ないで!?さ、触らないで！」

「ち、違うんだ！体が勝手に！」

「ひい!?や、止めなさい！」

葉山先輩は雪ノ下先輩の体に触れ始めた。二人とも必死に抵抗していますけど、催眠アプリの効果は絶対なので人格さえ変えなければ、体は結構自由に操れるんですよね。

「雪乃ちや……雪ノ下さん！これは俺の意思じゃないんだ！」

「だ、だったら早く離れて！触れないで！」

「いろは！頼む！こんな事はやめてくれ！」

「うひい♡な、何で!?ああ♡んあっ♡」

「あ、言い忘れていました。雪ノ下先輩は葉山先輩に触れると感じるように催眠をしておいたんです。触れる時間が長ければ長いほど葉山先輩に対しての好感度が高くなるんですよ」

「ふ、ふざけないで！ああああ♡」

雪ノ下先輩は葉山先輩に胸に膣内を触れて絶頂したようだった。潮まで噴き出して、相当感じているようだった。でも本人は顔を青ざめていた。

余程、葉山先輩に触れられて潮を出したのが嫌だったようだ。葉山先輩、嫌われていますね。でも大丈夫ですよ、すぐに雪ノ下先輩は葉山先輩の事が好きになりますから！

「離れて！離れて！」

「いろは！これだけは止めてくれ！」

「っ!?!いい、痛い……!!」

「すまない……すまない」

「処女開通、おめでとうございます！先輩たち」

雪ノ下先輩と葉山先輩はわたしの事を睨んできますけど、全然怖く

ないんですよ。葉山先輩に関しては望んだ事なのに睨まれる理由が分かりませんか？

「ああっ♡こ、腰を動かさないで！んああっ♡ああああ♡」

「体が勝手に動くんだ！だ、駄目だ！」

「ああああああ♡あ、あなた……よくも!!」

葉山先輩は射精してようですね。それでも早漏ですね。先輩はもう数分、持ちますのに。童貞の葉山先輩に好きな子の膣内は刺激が強すぎましたか？

「雪乃ちゃん！好きだ！」

「あんっ♡や、止めなさい！うひい♡んんっ♡」

「雪乃ちゃん雪乃ちゃん！」

「ああ♡ひい♡ああんっ♡」

葉山先輩の催眠の一つが発動しましたね。葉山先輩には一度射精した相手に対して好意が止まらないと言うものだ。

つまり雪ノ下先輩に対しての好きが暴走してしまっている。もうわたし以外に葉山先輩を止められません。

「だ、射精る！」

「止めない！」

「射精る!!うっ……!!」

「い、いやああ!!ま、また膣内に……」

二回連続で膣内射精で疲れたのか、雪ノ下先輩はぐったりしている。葉山先輩のおちんちんもぐったりしている。

「葉山先輩。あそこに二人もあなたに犯してもらいたい女子がいますよ」

「お、俺に？」

「そうですよ。何をすればいいか分かりますよね？」

「お、俺は犯す！」

「隼人君、止めて！」

「落ち着いてよ、隼人君！」

わたしが葉山先輩の耳元で囁くように言うと葉山先輩のおちんちんは元氣を取り戻して由比ヶ浜先輩と海老名先輩に襲い掛かった。

「ああつ♡ら、らめえ♡うひい♡」

「んあつ♡ひい♡だ、だめえ♡」

「犯す犯す犯す犯す!!」

「ひやああああああ♡」

「んひいひいひい♡」

「射精る射精る射精る!!」

葉山先輩は由比ヶ浜の乳首に吸い付くように行き、海老名先輩のマスコに指を挿入した。由比ヶ浜先輩と海老名先輩は葉山先輩に触れられると強制的に感じるように催眠をしておいたので、感じさせられて雪ノ下先輩のように潮を噴き出した。

「結衣! 俺は犯す!」

「は、隼人君。いやあ……いぎいひい!?!」

「結衣結衣!」

「痛い! 痛い! 抜いて! ああつ♡んあつ♡ああああ♡」

由比ヶ浜先輩は痛みが快樂なっている事に気がついておらず、葉山先輩の早漏おちんちんに感じさせられている。先輩のおちんちんの方がわたしは好きですね!

「射精る射精る!」

「ま、待って! だめえええ!! うひいひい♡」

「まだ射精る!」

「ひ、ひっき……え? ヒッキーって誰?」

由比ヶ浜先輩は葉山先輩に射精されると先輩の事を忘れようようにしておいたんですね。成功ですね! これで先輩はわたし独占出来ます!

「姫菜。待たせたな」

「は、隼人君。待って!」

「姫菜! 姫菜!」

「ふぎい!?! 痛い痛い! ああつ♡あんつ♡ら、らめえ♡」

海老名先輩も処女開通しましたね。それにしてもいい気味ですね! 先輩に酷い事をした人たちが苦しい顔を見ているのは!

葉山先輩はわたしが以前好きだったので、少し役得なポジションを

与えましたけど。

「姫名！射精るぞ！」

「ま、待つて隼人君！」

「射精る！」

「うひいひい♡そ、そんな……」

海老名先輩は葉山先輩に膣内射精されたのに顔を青ざめていた。イケメンの葉山先輩に膣内射精してもらえるなんて、嬉しくないんですかね？

わたしは絶対に嫌ですけどね！だって、イケメンでも中身がスカスカじゃあ長続きする気がしませんからね。

「雪乃ちゃん！結衣！姫名！」

「や、止めなさい！うひい♡」

「ま、待つて！ああ♡」

「だ、ダメえ！んひい♡」

葉山先輩は三人を順番に犯した後、雪ノ下先輩からまた犯し始めた。わたしはそれを見届けたら奉仕部をあとにした。

これで邪魔な人たちは終わりですね。後日談ですけど、葉山先輩たちは学校で不純性行為をした事で学校を退学になり、一年後には三人は子供を産んだとか。

全員の両親が気がついた時には墮胎する期間を過ぎていたとか。仕方なく産ませたけど、四人とも隙を見つけてはセックスをしてまた妊娠したとか。

これには葉山先輩の両親が激怒して、離島に送って千葉には二度と帰って来なかったとか。

「いろは！いろは！」

「あんっ♡んひい♡ああああ♡」

「いろは!!」

「ああああああ♡しえんぱいのあしゆすぎいい♡」

わたしはと言うと先輩と仲良くセックスして学校生活を過ごしています。学校の人間全員に催眠アプリを使っているのです、例え見られなくても問題にすらならない。

それにしても先輩は絶倫過ぎませんか!?数日でどんだけ性欲を溜め込んでいるんですか!?相手になるこっちの身が持ちませんよ。

「いろは!好きだ、愛している!」

「もう分かりましたから……」

「いろは!大好きだ!」

「少し素直にし過ぎましたね……」

先輩の気持ちをわたしに向くようにしておいてなんですけど、少し抑えておくべきでしたね。これ以上、催眠アプリで人格なんかをイジると壊れてしましそうですからね。

「でもいいか!」

「いろは!もう一回いいか?」

「仕方ないですね。先輩の性欲に付き合えるのはわたしくらいですよ?」

「ありがとう!!」

それから先輩はわたしをたくさん犯した。もう頭の中が先輩とのセックスの事しか考えれなくなるくらいにたくさんだ。

邪魔者はいなし、楽しいから考えるの止めた。早く大学を卒業して先輩と結婚しないと。おっと八幡さんと呼ばないとですね!

城廻めぐり

やはりゆるふわな義姉ができるのはまちがつている。

ども、比企谷八幡だ。唐突だが報告がある。両親が離婚した。

「ふざけんじやないわよ!!」

「だから謝っているだろ!?!」

このような大きな声を出して喧嘩している両親を見たのは初めてだ。これまで両親が喧嘩した事が無いと言うのがささやかな自慢だったのに。

まあ、そんな事はないんだが。それに両親がどんな事をしようと俺には関係が無かった。基本、俺は放置気味だったしそれほど両親に心が無かったのが原因だろう。

だからこの時、俺は中二で小町が小六のこの時にまさか両親が離婚するとは微塵も思ってもいなかった。

両親の喧嘩から数週間後、俺は母ちゃんとアパートで暮らしていた。両親が離婚して子供の話になった時、親父は真っ先に小町を選んだ。

その事に母ちゃんは二つ返事で了承した。まさか母ちゃんが俺を選ぶとは思わなかった。てつきり教育費だけ払って親父の所に置いてくるかと思っただからだ。

俺を引き取った理由を聞いてみたらあまり手間が掛からないからだそうだ。俺は来年高校受験だし小町は中学に入るので色々と面倒になるからだ。

そして俺が中三になって夏休みに入る前に母ちゃんがある人を会わせてきた。

「八幡。これから人に会ってもらおうから」

「えつと……何故?」

「あんたの新しい父親になるからよ」

「へえ……え!?!マジ?」

「マジよー!」

母ちゃんが再婚か。俺としてはまあ、幸せになって貰いたい。でも大丈夫だろうか？俺の腐った目を見て向こうが引かないだろうか？「とりあえず八幡。あんたはメガネでも掛けなさい。そうすれば誤魔化せるわ！」

「わ、分かった……」

俺は度の入っていないメガネを掛けた。鏡で見たが腐った目を隠せた！これは驚きだな。うん、中々のイケメンだな。

「あ、言い忘れていたんだけど。向こうにも子供が居るから」

「マジかよ……ちなみに男？女？」

「女の子であんたの一つ年上。だから受験勉強見てもらいなさい」

「ぜ、絶望的だな……」

この年になつて義姉弟になるとか。傲慢な姉だったらどうしよう？高校に入学してすぐになんとか一人暮らしをするしかない!!

そしてついに顔合わせの時が来た。顔合わせの場所は俺が今住んでいるアパートだ。入ってきた親子。

男性は母ちゃんより少し年上だろうか？落ち着いた感じの人で女性はどこかふわりとした感じだ。

「初めまして八幡君。私は城廻だ。こっちは娘のめぐりだ」

「よろしくね〜ハチ君」

「はあ……どもつす」

「もう…この子は照れちゃって！」

べ、別に照れてはいない!!この人なら大丈夫かな？聞けば城廻さんは早くに奥さんを亡くしてこれまで男手一つで娘を育ててきたらしい。

そしてそれから新しい家族四人での暮らしが始まった。

新しい義父と新しい義姉はとても優しくかった。前のクソ親父と違い何かと俺の事を気にかけてくれたし小遣いもそれなりにくれた。

義姉にしてもそうだ。小町のように俺の事をごみいちちゃんのように罵倒してこないし勉強も分かり易く教えてくれる。苦手教科が克服できたぜ！

だが、この時俺は後悔するべきだった。二人に近づき過ぎて家族の愛に飲み込まれていた。だから俺は自分でもするべきでは無かったと思う行動が一つある。

それは義姉の下着を盗んでオナニーのオカズにしてしまった事だ。シミのついた部分に鼻を押し付けて臭いを嗅いで興奮していた。

「はあ……はあ……めぐり義姉さん……いぐう」
びゅるるるるびゅるるるる……

射精した精子をティッシュに包んでゴミ箱に捨てる。オナニーする度に罪悪感で胸がいつぱいになる。でも止められない。

これは俺のストレス発散にもなっている。おかげで勉強に集中出来る。それにめぐり義姉さんはよく身体を密着させて教えてくる。

本人は無自覚だろうが、思春期の男子にとっては大問題だ！そんな時だった、両親からある話をされたのは。

「旅行に？」

「そう。籍入れて落ち着いた事だし、それに八幡は高校に合格したしね」

「うん。まあ……」

そう、俺は無事にめぐり義姉さんと同じ進学校の総武高校に合格した。だからだろう、両親が旅行に行きたいと言ったのは。

「最初の旅行は二人で行ってきなよ。夫婦水入らずで。めぐり義姉さんはどう思う？」

「私も賛成がなく私達はまた今度でいいから二人で来てよ」

俺達二人を信頼しているので親二人は新婚旅行ならぬ再婚旅行に行った。そして俺はついに見られてしまった。

「……………」

「…………えっと、ハチ君？」

両親が旅行に行った日の夜に俺はめぐり義姉さんがお風呂に入っている間に洗濯籠にあったパンツをその場で臭いを嗅いでオナニーをしてそれを本人に見られた。

不味い。この事を報告されたら!?俺は思わずめぐり義姉さんをお風呂に押し込んで腕を掴んで身動き出来ないようにした。

「は、ハチ君!?!お、落ちつこ?ね?」

「も、もう無理なんだ……んっ」

「んんっ!?!」

俺はめぐり義姉さんにキスした。まさかファーストキスの相手が義理の姉になるとはな。最初は抵抗していためぐり義姉さんは段々抵抗してこなくなった。

「あああ……」

いきなりキスされて気が動転しているんだな。もうここまで来たら後には引き返れない。やるんだ俺!やつてやるんだ!!

俺はズボンを降ろして勃起したチンコを一気にめぐり義姉さんのマンコに挿入した。

ずずずずず……

「痛っ!?!痛い痛い痛っ!!は、ハチ君、痛いからっ……抜いてっ!?!」

「む、無理!!」

ずずずずず……ぱんっ!!

「ひぎい!?!」

「のおおおお……」

ついに!?!ついに童貞卒業したぜ!?!これが女性の性器なのか!?!チンコを圧迫する肉壁が熱く下半身がどうにかなりそうだ!

「ひぐっ……ど、どうしてなの?ひい……どうしてこんなこと……すんっ」

「どうして?そんなの好きだからだよ」

「え……?」

俺は泣きながら聞いてくるめぐり義姉さんに言ってしまった。この状況に告白してきた俺に呆れているのか告白された事にあ然としているのかは分からないが俺は腰を動かした。

ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!

「ひい!?!う、動かないでっ……痛いっ……」

「痛いんだ……でもめぐり義姉さんのマンコは気持ち良さそうにきつく締め付けてくるけど?痛いのが好きなんじゃないの?」

「そ、そんなこと……」

「なら試してみよう！」

「だ、だめっ！」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「うひひひひひひひ♡♡」

「おおおおお……」

めぐり義姉さんは自分がMだと言われて否定したけど、この反応はどう見てもMだと思う。腰を動かすたびにマンコがギュウギュウ締め付けてくる。

これだけ快感を味わった事が無い。そろそろ射精しそうだ。

「めぐり義姉さん！そろそろ射精そうだ！」

「だ、だめっ！ぬいて！ぬいて！お願いっ!!」

「で、射精る!!」

「だめええええ!!」

びゅるるるるびゅるるるつ……びゅるるるびゅるるるつ

……

「あああああ……」

「す、すげえ……」

初めての膣内出し。こんな感覚なんだな。二つが混じり合って一つになるような不思議な気分だ。めぐり義姉さんは膣内に出されて放心状態になってしまった。

ずずずずずつ……こぼっ……こぼっ……

俺がめぐり義姉さんのマンコからチンコを抜くと精子と一緒に血が流れてきた。処女膜を破ると本当に血が出るんだな。

俺は流れている精子と血を見たらまた犯したくなかった。

ずずずずずつ……

「へ？ま、待って！またするの？もう満足でしょ!」

「まだ全然ですよ」

「い、いやああ!?だ、だれか——!」

あまりにもうるさくしているので俺は口をタオルで塞いだ。そし

てまた奥まで挿入した。それも一気に。

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「ひぎい!?!や、やめてっ……どうしてっ……私も好きだったの……」

「……好きっ!」

それは一体どういう事だ?好き?めぐり義姉さんが俺を?ないない。そんな事は断じて無い。勘違いは良くない。

それで中学の時に黒歴史を作ったじゃないか。

「そうだよっ!!初めて会った時にカツコイイって思って。でも私達は義姉弟だし……ずっと我慢していたのにつ!」

「そうだったんだ……」

それは知らなかったな。まさか俺達は両思いだったなんて。でも義姉弟だから我慢した。気持ちを抑えてきた。

でもそれならもう気持ちを我慢して抑える必要は無い。

「俺達、両思いだったんだ。嬉しいよめぐり義姉さん」

「は、ハチ君!もうこんな事やめてっ……でないと出ちゃう……」

「やめてっって言っている割にめぐり義姉さんのマンコはきつく締め付けてくるけど?この状況に興奮しているんでしょ?」

「ち、違うっ!興奮なんてっ……」

めぐり義姉さんは中々に強情だな。もつと気持ちよくなればこんな事も言わないだろう。俺はめぐり義姉さんの胸に乳首に吸い付いた。

ちゅぱっ……ちゅぱっ……

「ひい!?!だ、だめっ!そんなに吸ったらっ……」

ぴゅるっ……ぴゅるっ……

「んんっ!?!」

何だ?口の中に何か入ってきた。俺はめぐり義姉さんの胸から離れてそれを確認した。するとめぐり義姉さんの胸から白い液体が噴き出していた。

「めぐり義姉さん……これって母乳……妊娠?」

「ち、違うのっ……これは違うのっ……」

めぐり義姉さんは俺に教えてくれた。これは妊娠ではなく病気だそう。中学三年の時に出てきたらしい。母乳が出るなんて友達にも父親にも相談出来るわけもなくこれまで隠してきたらしい。

興奮したりすると溜まるらしい。その時は自分で搾って出すようだ。溜まると体調が悪くなるようだ。

なんて勿体無い。

「めぐり義姉さん。母乳なら俺が全部、吸ってあげるよ」

「え？は、ハチ君？何を言っているの？」

「俺達は両思いだったんだ。それにめぐり義姉さんは誰にも教えなかった秘密を俺に教えてくれた。俺達の間で遠慮は必要ないんだよ」

「ハチ君……うん、そうだね。お姉ちゃんを好きでいてくれる？」

「もちろん！大好きだ!!」

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「うひい♡そ、そんなにはげしくっ……したらっ♡♡」

「めぐり義姉さん！めぐり義姉さん！めぐり義姉さん！」

俺達は結ばれた。それなら俺は全力で腰を動かした。その度にめぐり義姉さんのマンコはきつく締め付けてきた。

それに俺が抱きつくときめぐり義姉さんも抱き返してきた。もう離さないように強く強く抱きついてきた。

「めぐり義姉さん！もう射精そうだ！このまま……」

「うん、きて!!お姉ちゃんを愛してっ♡」

「ああ、わかった！で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡」

「のおおおおお……」

俺はめぐり義姉さんのマンコに二度目の膣内出しをした。さつきより射精した気がする。それから俺達は風呂から出てベッドで朝まで愛し合った。

やはりゆるふわな義姉と愛し合うのはまちがっている。

うつす比企谷八幡じゃなくて城廻八幡だ。俺は昨日の夜、ついに義理の姉と一線を越えてしまった。風呂場で義姉をレイプしてした。

しかしそこで俺は義姉の気持ちを知った。まさか義姉が俺の事を好きだったとはな。そこからはレイプではなくなった。

風呂場から俺の部屋のベッドに移動してからはめぐり義姉さんからも求めてきて少し大変だった。義姉弟の縛りが邪魔で思いを伝えられなかったが、それが無くなって全力で俺に想いをぶつけてきた。

俺は昼前に目が覚めた。夜から日が昇るまで義姉と愛し合ったかな。部屋の中が精子や汗の臭いで臭くなってしまった。これは掃除をしないとイケないな。

そしてめぐり義姉さんは俺の横でスヤスヤと寝ていた。それにしても昨日からの行為は凄かったな。めぐり義姉さんって意外に胸が大きいんだな。

普段服を着ている時の印象ではそれほど大きいとは思わなかったのに。あれかな？着痩せするタイプなのか？

それにしてもめぐり義姉さんは母乳が出るとは驚きだった。恐らくホルモンバランスが原因だと思うけど、その辺俺は詳しくないからな。

でも母乳が出るのは様々なプレイの幅が広がるというものだ。早く溜まらないかな母乳。いっぱい吸ってやるつもりだ。

「んんっ……あ、おはようハチ君」

「おはようめぐり義姉さん」

「すうんすうん……お互い、身体から凄い臭いだね……」

「洗い流した方がいい。掃除もしないと……」

めぐり義姉さんが起きたので一先ずお風呂だな。でもお湯は冷めているのでシャワーだな。俺はめぐり義姉さんと一緒に風呂場に来てシャワーを浴びた。汗などが流れるのが分かる。

「んんっ……」

「んっ……めぐり義姉さん。もつと舌を絡めてみよう」

「うん。んんっ……」

俺はベツドの中で

めぐり義姉さんとキスをした。しかもディープの方だ。頭が溶けてしまいそうだ。

ちゅぱっ……くちや……ちゅぱっ……

お互いに唇を貪り合った。今まで我慢していた分、求めた。その結果、俺のチンコは今朝まで頑張っていて萎えていたのもうガチガチに勃起した。

「ハチ君のもうこんなに固く……」

「めぐり義姉さんとのキスが凄すぎたから……」

「嬉しいな。初めてだから下手だったらどうしようかなと思ったから」

「俺だって昨日のが初めてだよ。めぐり義姉さんは中学の時に彼氏とか居なかったの？」

俺は思わず聞いてしまった。これって失礼になるのかな？

「居なかったよ。お父さんと二人暮らしだから家事とかしなきゃいけなかったから」

「そっか……」

「そう言うハチ君はどうなの？」

「俺も年齢〓彼女いない歴だったよ」

「けど、今はめぐり義姉さんが居る。義姉であり俺の恋人だ。俺が抱きしめるとめぐり義姉さんも俺を抱きしめてくれる。」

その際に胸を押し当ててくるので興奮する。ちよつとアレを頼んでみるかな。

「めぐり義姉さん。パイズリしてくれない？」

「ハチ君も男の子なんだね。胸ばっかり……」

めぐり義姉さんはどこか機嫌が悪くなってしまった。胸にコンプレックスでも持っているのだろうか？

それは不味い事をしてしまったな。でも俺はパイズリをしてもら

いたんだ!!

「ちゅぱっ……ちゅぱっ……」

「あんっ……ハチ君、そんなに吸わないでよ」

「だって仕方ないだろ?めぐり義姉さんの母乳は甘くて美味しいんだから」

「もう……♡」

めぐり義姉さんの母乳は甘くMAXコーヒー並みに美味しい。そう言えば、最近飲んでいないな。でも別にいいか。俺にはめぐり義姉さんの母乳がある事だしな。

最高に気分がいいけど、そろそろ起きないと。両親が帰ってきてしまう。義父は泊り込みが多い仕事をしているし、母ちゃんは夜勤の仕事をしているので片付けをしておかないと。

俺とめぐり義姉さんとの関係がバレてしまう。

「めぐり義姉さん。そろそろ……」

「そうだね。起きようね」

「シャワーでも浴びよう」

「そうだね」

俺とめぐり義姉さんは一緒に風呂場に向かった。汗でべた付く身体をさっぱりしておきたかった。

シャワーを浴びている時にめぐり義姉さんの股から俺の精子が溢れて足を伝って落ちていた。なんだかエロい。

ヤバイ。あれだけ昨日から射精したのに勃起してしまった。俺は背中からめぐり義姉さんを抱きしめた。

「きやあ!?ど、どうしたの」

「ごめん。まためぐり義姉さんを犯したいんだ」

「また?あれだけだしたのに。仕方ないよね、ハチ君は男の子だもんね♡」

めぐり義姉さんは中腰になって俺のチンコ啜えた。そして前後に顔を動かした。これがフェラってやつか!口の温かさが気持ちいい。

それに舌が別の生き物みたいにチンコに纏わりついて腰が浮いてしまう。俺は我慢出来ずにめぐり義姉さんの顔を掴んで口の奥まで

チンコを捻じ込んで射精した。

びゅるるるるるびゅるるるるつ……びゅるるるびゅるるるつ……！

「んんっ……んぐっ……もうハチ君、いっぱい射精し過ぎだよ。飲みきれなかったよ」

「ご、ごめん……めぐり義姉さんの口があまりにも気持ち良かったから」

「うん、いいよ。それでハチ君。私ね、ハチ君の精子を飲んだから子宮が凄く熱くなつたから鎮めて欲しいの……」

めぐり義姉さんはそう言って壁に手をつけてお尻を俺に向けてきた。マンコとアナルが丸見えだ。マンコは愛液をポタポタと落としている。

俺の義姉はエロ過ぎだろ。これを意識していないでやっているなら淫乱娘だ！でもそれでも好きだ！！

俺はチンコをめぐり義姉さんのマンコにゆっくり挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ！！

「うひっ♡♡」

「おおおおお……」

めぐり義姉さんのマンコは俺のチンコを締め付けてくる。膣内がウネウネと蠢いている。昨日は興奮しっぱなしでじつくりと考えなかつたけど、マンコってこんなにも気持ちいいものだったんだな。当たり前前か。

俺は本能のままに腰を前後に振った。もつと気持ちよくなりたし、めぐり義姉さんを気持ちしたくて。

ずずずずずつ……ぱんっ！！ずずずずずつ……ぱんっ！！ずずずずずつ

……ぱんっ！！

「うひいひいひい♡♡は、ハチ君！も、もう少しゆっくりして……あそこが壊れちゃう！！」

「む、無理だー！気持ちなりたし、気持ちよくしたいんだ！！」

俺はめぐり義姉さんの胸をわし掴んで揉みしだいた。特に乳首を重点的に攻めた。人差し指で乳首の先端をゲームのコントローラー

のスティックを扱うように。

ぴゅっ……ぴゅっ……

「だ、だめ♡乳首せめちや♡ぼ、母乳でちやううう♡♡」

「貯まると胸が張るらしいからたくさん搾ってあげるよ！」

「い、いぐうううう♡♡♡」

ぴゅっ……ぴゅっ……

めぐり義姉さんは俺にチンコで突かれながら乳首をいじられて母乳を出しながら絶頂しまくった。風呂場が白い液体で汚れた。

めぐり義姉さんは腰をピクピクと痙攣させながら絶頂の余韻を味わっていた。

「めぐり義姉さん？」

「ああ……ああ……」

「これは不味いな」

めぐり義姉さんは一度に大量の刺激を与えた所為で気絶してしまった。このままでは湯冷めして風邪を引いてしまう。

俺はタオルで身体を拭いた後、パジャマをめぐり義姉さんに着させた。女性を着替えさせるのは初めてだったけど、なんとかなった。

「あれ……？私確か……」

「あ、起きた？」

「おはよう。ハチ君」

「身体は大丈夫？」

「うん。ありがとうね。もう大丈夫だよ」

「そっか……」

めぐり義姉さんが数十分後に目が覚めた。身体の方は大丈夫のようだ。流石にあんな攻めは今後は自重しないとな。

毎度気絶してはこっちの対応が大変だ。一先ず遅めの朝食もしくは早めの昼食を食べる事にするか。

「ハチ君。あくん」

「あ、あくん。うぐっ……」

「どう？美味しい？」

「う、うん。美味しい」

「そう。良かった」

ま、まさか俺が恋人がよくやる『あくんで食べさせる』が出来るなんて驚きだ！いきなりの事で味なんてまったくしなかった。

めぐり義姉さんがこちらを見てニコニコしているよ。俺にも似たような事を期待しているようだ。どうすればいいんだ!?

こうなったらやるしかない。俺は一口朝食を食べて咀嚼して、めぐり義姉さんの顔を掴んでキスしながら流し込んだ。

「んんっ……」

「んぐっ……はあ……ハチ君の味がする」

「え、えつと満足?」

「ううん。もつとちようだい」

「う、うん」

俺はめぐり義姉さんの要望に応えるように咀嚼を繰り返した。まるで親鳥が雛鳥に餌を与えているようだ。それを交互にやった。

料理にめぐり義姉さんの唾液が付いてなんとも言えない味になっていた。

「ハチ君」

「うん?何、めぐり義姉さん」

「ベッドいっ」

「……うん」

朝食を食べ終わったら俺はめぐり義姉さんに手を引かれてそのままめぐり義姉さんの部屋へと行った。そう言えば、めぐり義姉さんの部屋には初めて入る気がする。

清潔で整った机。女子にしては物が少ないようなイメージの部屋だな。

「んんっ……」

「うんっ!」

俺はめぐり義姉さんにベッドに押し倒されてそのままキスされた。唇が離れた時、めぐり義姉さんの顔は完全に雌の顔になっていた。

まるで発情した猿のようだ。それは俺もか。キスされただけでチンコがもう勃起している。どんだけ興奮しているんだ!?

「ハチ君。私、我慢出来ないの……」

「お、俺もだよ」

「嬉しいよ。それじゃ私からいくね……」

めぐり義姉さんが服を脱いだので俺も慌てて脱いだ。めぐり義姉さんのマンコはもう愛液をダラダラと垂らしていた。

俺と早く繋がりたい事がすぐに分かった。

「行くね……」

「う、うん」

「ずずずずつ……ぱんっ!!」

「ひひひひひ♡♡♡」

「のおおおお……!!」

挿入しただけでもう射精しそうだ。だけど、我慢だ！ここで射精なんてカッコつかない。それに俺だけ気持ちよくなってはめぐり義姉さんに悪い。

「は、ハチ君♡ごめんね、エッチなお姉ちゃんで♡♡」

「何言っているんだよ。エッチな義姉なんて最高じゃないか！」

「う、嬉しい♡♡」

そこから俺とめぐり義姉さんは一日中、SEXをしてその日を過ごした。めぐり義姉さんのマンコは突くたびにギュウギュウと締め付けてきた。

俺は最高の義姉さんが出来た。今度は妹ではなく姉でのシスコンになってしまった。今後の学校生活とか大丈夫だろうか？

やはりゆるふわな義姉と学校でするのはまちがっている。

うっす。城廻八幡だ。俺もついに高校生になった。しかもめぐり義姉さんと同じ総武高校だ。正直、ギリギリかと思っていたけどそんな事もなかった。

余裕をもって入学する事が出来た。これもめぐり義姉さんのおかげだ。これからの授業でもだいぶ楽が出来そう。

もしかしたら成績が学年で上位に入るのだって夢ではないかもしれない。でも油断する事なく学校生活を送っていくつもりだ。

それに眼鏡とめぐり義姉さんのおかげで俺に友達が出来た！中学の時は色々と黒歴史を作ってきたから友達なんて一人も居なかったのにな。

それと高校生になったからと言って俺とめぐり義姉さんとの関係が終わる事はなかった。むしろ前より進んでいる。

家では母ちゃんと義父が居るので春休みよりあまり出来ていなくて、場所を変える事にした。それが学校だ。

見つければ停学どころか退学ものだと言うのに俺たちはそれでも学校でする事にした。入学してから少しバタバタしていた所為で性欲が溜まっている。

もう我慢が出来ない。早くめぐり義姉さんのマンコに挿入したい。射精したい。そこで俺とめぐり義姉さんは授業の合間の休憩時間にこっそり会う事にした。

「あんっ……♡」

「めぐり義姉さん。声を抑えて……」

「ぐ、ごめんね。でもハチ君の手が気持ちよくて……♡」

俺たちは現在女子トイレに居る。男の俺も女子トイレに入っている事が知られたら変態呼びされるけど、これはめぐり義姉さんのためなんだ。

めぐり義姉さんはホルモンバランスの関係で母乳が出る体質だ。

だから定期的に出しておかないと胸が張るのだ。

そして張り続けると身体に重大な危機が訪れるそう。俺の母ちゃんとめぐり義姉さんの父が再婚する前に病院に行つて検査して分かったそう。

薬でホルモンバランスを整えているそうだけど、俺との性行為をした時は薬を飲み忘れていたそう。

「あんっ……♡んっ……♡♡」

「もう少しだから……」

「う、うん……」

俺はめぐり義姉さんの背後から胸を揉んで刺激を与えている。端から見たら変態義姉弟だろうな。まあ、見つかったらヤバいんだけどな。

そろそろ切り上げないと。休憩時間がなくなってしまう。

「お、終わったよ」

「あ、ありがとね。ハチ君。一人だと時間がかかちやんだ」

「うん。それじゃ昼休憩に」

「うん。それじゃ様子を見てくるね」

めぐり義姉さんはトイレから顔を出して誰も居ない事を確認してくれている。まだ俺の手にはめぐり義姉さんの胸の温かさが残っている。

指に付いた母乳はやはり甘かった。

俺の昼休憩はクラスの友達と一緒に食べる事が殆んどだ。だが、一週間の内、二日ほど違う日がある。それはめぐり義姉さんと一緒に食べる日だ。

場所は決まって生徒会室だ。めぐり義姉さんは現在副会長として生徒会に居る。そのおかげで生徒会室を自由に出来る。

他の生徒会員はここを使わないので俺とめぐり義姉さんの貸切だ。ここなら好きナだけSEXが出来る。

「ハチ君が料理が出来てよかったよ。お弁当が毎日楽しみになった

よ」

「そう？それは嬉しいよ、めぐり義姉さん」

「はい。あくん」

「あ、あくん」

ごく自然に『あくん食べ』をしてくるめぐり義姉さん。自分で作った弁当なのに味が分からなくなる。でも別にいいか。

めぐり義姉さんとの義姉弟になってから弁当は俺が準備している。前だったら購買で済ませていたけど、めぐり義姉さんの嬉しそうな顔を見れるのだったら朝起きも苦ではない。

「めぐり義姉さん。いつものお願い」

「うん。いいよ」

弁当を食べ終わったら恒例のアレをめぐり義姉さんをお願いする。俺はズボンのチャックを開けて、勃起したチンコを出した。

めぐり義姉さんはイスから立ち上がり、そのまま近づき中腰になって俺のチンコを啜えた。

「んんっ……れろっ……んんっ」

「おおおおお……い」

めぐり義姉さんのフェラは気持ちいい。舌をチンコに巻きつけるようにして、顔を上下する事でなんとも言えない刺激が俺を襲ってくる。

舌だけが別の生き物のように動き、頭の中が真っ白になってくる。

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるっ……

「んんんっ……!!」

俺はめぐり義姉さんの頭を押さえつけて喉奥までチンコを捻じ込んだ。そして射精した。この射精の瞬間が最高に気持ちいい。

ゆっくりとチンコをめぐり義姉さんの口から離すと精子が溢れそうになっていた。めぐり義姉さんはそれを丁寧に掬い口の中に全て入れた。

「んぐっ……ハチ君の精子、いっぱい飲んじやった♡」

「うわあ……」

めぐり義姉さんは口の中の精子を見せてから一気に飲み干した。自分でも引くくらしいの精子の量だったな。

「今度はハチ君がしてくれる?」

「うん。任せてくれ」

めぐり義姉さんはパンツを脱いで机の上に乗った。副会長としてどうかと思うけど、これの方が俺がやり易い。

俺はめぐり義姉さんのマンコに近づき舌で舐めた。

「れろっ……」

「うんっ♡も、もつと舐めて♡」

「ちゅっ……れろっ……」

「んんっ♡♡」

俺はマンコにクリトリスを丁寧に舐めまくった。その度に愛液が溢れてきた。もうめぐり義姉さんのマンコは大洪水になって机を濡らしていた。

この愛液の匂いを嗅いでいるとクラクラしてきて、何も考えられないいなんだよな。

「は、ハチ君っ!いい、いくうううう♡♡♡」

「おっと!」

めぐり義姉さんは絶頂して潮を噴いた。俺は顔にかからない様にマンコに顔を密着させた。そのまま潮を飲んだ。

「あ、あああ……♡♡」

めぐり義姉さんは机に背中から倒れた。腰が少しビクビクと震えている。マンコからは発情したような匂いが立ち込めてきた。

挿入したいけど、時間がない。俺もめぐり義姉さんも優等生として学校生活を送っている。授業への遅刻は印象を悪くしてしまう。

別に一回だけならいいけど、遅れた理由などを言わなくてはならない場合があるかもしれない。その時に義姉とヤッていましたなんて言えるわけが無い。

「めぐり義姉さん。起きて、授業に遅刻するよ」

「う、うん……」

俺とめぐり義姉さんはそれぞれの教室に戻っていった。

放課後、俺とめぐり義姉さんは生徒会室に再びやってきた。今日は生徒会は無いので貸切だ。

「は、ハチ君……♡」

「めぐり義姉さん。スカート上げてみて」

「うん……」

「うわあ……大洪水だね」

めぐり義姉さんのパンツはビチョビチョに濡れていた。昼からずっと我慢していたのだろう。俺はズボンを下ろした。

すでに勃起したチンコが出てきた。俺は鞆からゴムを取り出した。避妊はちゃんとしておかないとな。うっかり子供が出来てしまったら責任なんて取れる訳もない。

なのでちゃんと装着した。めぐり義姉さんは壁に手を付いてお尻をこつちに向けてフリフリと左右に振って誘っていた。

「行くよ」

「うん♡」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「うひい♡」

「めぐり義姉さんの膣内、すごっ……」

めぐり義姉さんのマンコはやはり凄い締め付けてきた。普段は真面目な生徒会副会長が義弟のチンコをマンコで啜えているとか想像も出来ないだろうな。

それにしてもここしばらくしていなかったの俺は我慢が出来なかった。腰を振りまくった。

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!」

「ひいひい♡♡は、ハチ君♡もつとゆっくりしてっ♡」

「ごめん。それは無理だ。ずっとこれがしたかったんだから！」

「い、いくううう——」

「誰か居るのか？」

「っ!？」

生徒会室の外から誰かの声がしてきた。今日は生徒会は無いはずだから先生ではないはずだ。

「ひ、平塚先生!」

「ん?その声は城廻か?」

平塚?確か現国の教師だった気がする。でもどうして現国の先生がここに居るんだ?生徒会の担当では無かったはずだ。

「ど、どうして……先生が?」

「ああ、見回りを頼まれたな。若手だから!」

「そ、そうですか……」

ずずずずず……ぱんっ!

「うひい♡♡」

「どうした?城廻」

「い、いえ何でもありませんっ♡」

俺は必死に誤魔化そうとしているめぐり義姉さんを他所に腰を動かした。めぐり義姉さんはバレないように必死なのでマンコの締め付けが結構キツイ。

ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!

「んんっ♡♡」

「城廻!?大丈夫か?体調が悪いのか?」

「い、いえ♡な、何でもありませんっ♡」

「そ、そうか?早く帰るんだぞ」

「は、はいっ♡すぐにいきますからっ♡♡」

足音が段々離れて行っている。平塚先生はどうやら行ったようだ。それにしてもさつきのは危なかったけど、めぐり義姉さんのマンコの締め付けは良かったな。

「もう!ハチ君、平塚先生が居たんだよ!」

「ご、ごめん……でもめぐり義姉さんの締め付けがいいから意地悪してしまったんだ」

「っ、次はないからね！」

「ああ、分かった。続きいい？」

「うん。早くイカせて！」

めぐり義姉さんもイキたいようだし、本気を出しますかな。俺はさらに腰に力を入れて前後に振った。

ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっずっ……ぱんっ!!

「うひひひひひ♡♡♡♡」

「のおおお……!!」

「も、もつと奥にっ♡」

「い、行くぞ!!」

ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっずっ……ぱんっ!!

「い、いくうううう♡♡♡♡」

「で、射精る……!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

めぐり義姉さんの絶頂と同時に俺は射精した。ゴムの中に精子が溜まるのが分かる。まだまだ射精してしまう。

俺がゆっくりめぐり義姉さんから離れた。その際にゴムだけがマンコに残ってしまった。俺はゴムをめぐり義姉さんのマンコから引っ張った。

「んんっ♡♡はあ……すごかったよ。ハチ君♡」

「うん。こっちこそ凄かったよ……」

めぐり義姉さんのマンコから出てきたゴムはかなり膨らんでいた。結構な量は射精したと思っていたけど、まさかここまでとは。

下手をしたら破けていたんじゃないか?と言うくらい入っていた。その後、俺とめぐり義姉さんは生徒会室を片付けて帰路に付いた。学校でするの癖になってしまった。

それはめぐり義姉さんも同じなようで家に着くまで顔が赤かった。次はどこでしょうか?

やはりゆるふわな義姉と寄り道するのはまちがっている。

うっす。城廻八幡だ。めぐり義姉さんとの学校での性行為は最高に気持ち良かった。先生にバレるかもと思った時は興奮した。

扉一枚挟んで居るのだ。もし平塚先生が行くのが遅かったらバレていただろう。また学校でやりたい。今度はもつとギリギリを試してみたい。

「ハチ君。いやらしい顔になっているよ？」

「めぐり義姉さんと次はどうしようかと考えていたんだ」

「え？……だ、駄目だからね！学校であんな事するのは今回だけ！いい？！」

「えええ……めぐり義姉さんだって興奮しただろ？」

「そ、それでも!!」

めぐり義姉さんは顔を赤くして否定しているけど、顔はまたしたいと思っているとバレバレだ。今度は廊下で見ようかな？

きつと最高に気持ちいいはずだ。色々と計画しないとな。

「あ、母ちゃんからだ」

「お父さんだ」

俺とめぐり義姉さんのスマホに両親から連絡が来た。俺の所には今日は会社に泊まり込みになりそうだから夜は外食で済ませてくれと言うものだった。

「めぐり義姉さん。義父さんは？」

「今日は同僚の人と泊まりで飲んでくるって」

「母ちゃんは会社に泊まり込みで夜は外食で済ませてくれって」

「ならこのまま何か食べて帰ろう」

俺とめぐり義姉さんはそのままファーストフード店に入って店の中で晩飯を済ませた。両親が再婚して二人で外で食べるのは初めてだ。

めぐり義姉さんには感謝している。勉強は見てくれるし、恋人には

なつてくれて、俺は今最高に幸せだ。

ふとここで妹の小町の事を思い出した。一年以上会っていない俺の実妹。今、あのクソ親父と仲良くしているだろう。

なんせゴミちゃんと一緒にではないからな。

今だからこそ思う。どうして俺はあんな妹を愛していたんだ？罵倒してきて、都合のいい時だけ兄扱いしてくる女を。

しかし俺は目覚めたんだ。めぐり義姉さんのおかげで。友達も出て、苦手科目も克服する事が出来た。

感謝しかない。最初無理やり襲ったのは今では少し反省している。おかげでめぐり義姉さんの気持ちを知れたから結果オーライって事で。

今夜は家に両親はいないし、明日は学校は休みだ。なら朝までベッドでお楽しみだな。今夜はどんな事をしていじめようかな？

「……あれは」

そこでふと俺は前から歩いている少女に見覚えがあった。あれは間違いない。俺の実妹の小町だ。一年以上振りに会う元妹はどこか元気がなかった。

今は元親父の下で暮らしているはずだ。それにあのクソ親父が小町を蔑ろにするはずがない。でもあの疲れようは可笑しい。

今の小町からは昔の元気な姿がまったく想像出来ない。

「こま……」

「……………」

声を掛けようとしたが、向こうがまったくこちらに気が付いていなかった。追いかけて様とは思わなかった。

こつちにはこつちの生活があるんだ。向こうの面倒ごとに今の家族を巻き込む訳にはいかなかった。

「どうしたの？さっきの子、知り合い？」

「いや、似てたけど違ったようだ」

「そう？それじゃ夕食、早く食べよ」

「うん。そうだね」

俺は小町の事を忘れようとした。連絡だつてこの一年無かったん

だ。気にするだけ無駄だ。早く忘れてめぐり義姉さんとのイチヤイ
チャしよう。

それからめぐり義姉さんと夕食を済ませて帰路に着いた。その途
中で公園を見つけた。

「ハチ君。少し休んでいかない?」

「いいけど、辛かった?」

「うん。学校でしたから少しね……」

「ご、ごめん……」

俺たちは公園のベンチに座った。学校で激しくし過ぎたかな?ま
あ、先生にバレるかバレないのギリギリだったからな。あのスリルは
最高だったな。

なんとかめぐり義姉さんを丸め込めてまた学校でしょう。

「ハチ君のエッチ」

「え!?なんでいきなり?」

「やらしい顔になっていたよ」

「めぐり義姉さんでエロい妄想していた」

「そ、そんな事は声にしなくていいから!」

顔を赤くして恥ずかしがるめぐり義姉さんは可愛いな。ムラムラ
してきた。俺はめぐり義姉さんの腕を掴んで逃げられないようにし
た。

「は、ハチ君?」

「ごめん。我慢出来ない」

「ちよつと待って!ここ外だよ!」

「うん。知っている」

俺はめぐり義姉さんのパンツ越しにクリトリスを刺激した。めぐ
り義姉さんは身を振り逃げようとしたけど、男の俺の腕力に勝てるは
ずもなく成すがままになった。

めぐり義姉さんのパンツはクリトリスを少し触っただけでもう大
洪水だった。俺はパンツを脱がして直接マンコに触った。

くちや……くちや……

マンコから厭らしい水音が聞こえてきた。それを聞いてかめぐり

義姉さんの顔は赤くなっていた。俺はさらにマンコを触っている指の動きを激しくした。

くちや……くちや……くちや……

「ま、待って♡は、ハチ君、ここじやダメ♡♡」

「でもめぐり義姉さんのマンコは俺のチンコを欲しがっているように見えるけど？愛液がどんどん溢れてくるよ？」

「そ、それは……♡♡」

まだめぐり義姉さんは抵抗しているな。俺はズボンのチャックを下ろして勃起したチンコを出した。めぐり義姉さんは俺のチンコを凝視し始めた。

めぐり義姉さんは俺のチンコの虜なんだから目を離せないからな。これから犯されるのを妄想しているんだろう。

俺は掴んでいためぐり義姉さんの腕をチンコに近づけさせて握らせた。

「ここでするのが嫌なら射精させてよ。ここままだと痛いからさ」

「わ、分かった。ここで射精するれば家まで我慢してくれるんだね？」

「もちろん。我慢するよ」

「や、約束だからね！」

めぐり義姉さんはベンチから立ち上がって俺の目の前で中腰になった。そしてチンコを両手で上下に擦り始めた。

めぐり義姉さんの暖かかく柔らかい両手で扱かれている。半立ちだったチンコがガチ立ちになってしまった。

「はむっ……♡」

「おおおお……」

めぐり義姉さんは俺のチンコの先を口に啣えてきた。早く終わらせようとしているようだ。先だけを舌で器用に舐め回している。

手の動きもあつて、もう限界に近づいていた。俺はめぐり義姉さんの頭を掴んで思いつきりチンコを喉の奥まで押し込んだ。

「んんんっ!？」

「で、射精る!!」

びゅるるるる……びゅるるる……

「んんっ♡♡んぐっ♡♡」

「はぁ……気持ち良かったよ」

射精した精子をめぐり義姉さんは溢さずに飲み込んだ。飲み込む瞬間、エロいと思ってしまう。いや俺の義姉はエロかったのを忘れていた。

一回射精してスッキリしたのでチンコを仕舞っているためめぐり義姉さんはどこか物足りないような顔をしていた。

「どうすればいいのか、分かるよね？」

「お、お願いハチ君。私の膣内に挿入して♡♡」

「うん。いいよ」

めぐり義姉さんはお尻を向けて、自分でマンコを広げて求めてきた。俺はチャックを再び下ろして、勃起したチンコにゴムを装着した。

そして挿入した。ゴム越しでもめぐり義姉さんのマンコは熱く火傷しそうだ。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「んんっ♡♡♡」

「もっど行くよ」

めぐり義姉さんは声を出さないように口元を抑えていた。ここは公園だし周りに聞こえると思っっているんだろう。

確かに近くには家やマンションがあるからな。それにそろそろ仕事が終わった大人が帰ってきてても可笑しくはない時間帯だ。

でも俺にはそんなの関係ない。腰の動きを強める事にした。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずず……ぱんっ!!

「んんっ♡は、ハチ君♡も、もう少しゆっくりにっ♡♡」

「そう。なら……」

ずずずずずっ……

「えっ!?!」

俺はチンコをめぐり義姉さんのマンコから抜ける抜けないギリギリ

りの位置で止めた。めぐり義姉さんはどうして止めたのか分からない顔をしていた。

それから2分は経過したけど、俺が一向に動かない事にめぐり義姉さんは可笑しい事に気が付いたようで自分から腰を動かそうとしたけど、俺がそれを止めた。

「は、ハチ君? どうして動いてくれないの?」

「めぐり義姉さんが望んじやないか?」

「こ、こんなの生殺しだよ! お願い動いて!」

「うくん……そうだな。また学校でさせてくれるんなら考えてもいいよ」

「そ、それは……」

めぐり義姉さんは言葉に詰まった。ここで許可すれば気持ちよくなれるけど、後日学校でしなければならぬからだ。

「い、一回だけだからね!」

「うん。一回だね」

悩んだ末、気持ちよくなる事を選んだ。ならもう遠慮はいらないな。俺は腰の動きを再開する事にした。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひひひい♡♡♡」

「もつと激しくするよ!」

「いいいいい♡♡♡」

ずずずずずつ……ぱんっ!! ずずずずずつ……ぱんっ!! ずずずず

ずつ……ぱんっ!!

「は、ハチ君っ♡わ、わたし……♡♡♡」

「俺も行くから!」

めぐり義姉さんも限界が近いようだ。ラストスパートと行くか。俺はさらに腰をめぐり義姉さんのお尻に叩きつけた。

その度にお尻が揺れてとつてもエロかった。そして射精の瞬間にマンコの奥に密着させた。

「で、射精る……!!」

「い、いぐうううう♡♡♡」

びゅるるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「あ、ああああ……」

「で、射精る……」

ゴムが膨らむのが分かる。めぐり義姉さんの子宮を圧迫しているようだ。俺はゆっくりとチンコを抜くとゴムだけが脱げてしまった。マンコに引っ掛かっているようだ。俺はゴムを引き抜いた。ゴムの中にはたくさん精子が入っていた。

「見てくれよ、めぐり義姉さん。今、これだけ射精したんだ」

「はあ……はあ……す、すごいねっ♡♡」

めぐり義姉さんはベンチに寄りかかる様に休んでいた。呼吸を整えていた。俺はチンコをめぐり義姉さんの顔の横まで近づけた。

するとめぐり義姉さんはチンコを口に咥えた。やはり分かっている。

「ハチ君のおチンチン、あれだけ射精したのにまだ元気だね。顎が疲れるよ」

「仕方ないだろ？めぐり義姉さんがエロいんだから」

「わ、私は別にエロくないから」

「いや、義弟のチンコを咥えている時点でエロいから」

「うう……」

めぐり義姉さんは目を逸らした。逸らすくらいなら認めればいいのに。素直じゃない義姉さんだ。

「帰ったら続きをしようよ。どっちも帰ってくるのは明日になるようだから」

「うん。その……ハチ君、支えてくれない？」

「どうして？」

「こ、腰が抜けて……」

「うん。いいよ」

俺は腰の抜けためぐり義姉さんを支えながら家に帰った。そして朝までベッドの上でゴムが無くなるまでたくさんした。

さて、学校ではどんな事をしてめぐり義姉さんを楽しませようか、

今からワクワクする。俺は興奮を抑え切れずにいた。

やはりゆるふわな義姉を焦らすのはまちがっている。

うつつ。城廻八幡だ。義理の姉、城廻めぐりと禁断の一線を越えてから様々な事をした。その中でも学校でのバレるかバレないかのギリギリのプレイは最高に燃えた。

めぐり義姉さんもかなり感じていたが、どうやら本人はその快樂が危険だと判断した。今後、学校でする機会は無くなったかと思われた。

しかし外でのプレイの中で俺は学校でする機会を手に入れた。このチャンスは有効に利用しないと。

家には両親が居る以上、家では大胆な事は出来ないからだ。それにも成績も上位をキープしておかないと後々、進学に響いてくる。

今日はめぐり義姉さんを絶頂ギリギリまで攻めて、今後も学校でするように誘導するつもりだ。覚悟、してくれよめぐり義姉さん。

「ちゅっ……れるっ……めぐり義姉さん。キス、上手くなつたね？」

「ちゅっ……そ、それはハチ君が毎朝求めてくるから……」

「別に拒絶してもいいって以前、言ったよね？」

「で、でもそう言うのと二度としてくれないって言うから」

「ごめんって、ほら舌出して」

「んっ……♡」

学校の教室から離れた女子トイレで俺とめぐり義姉さんはキスを交わしていた。ソフトもすればティープの方もする。

キスをする度にめぐり義姉さんのキスのテクニクがどんどん上達しているような気がする。舌を絡めてくる時なんて、発情した犬に見えてくる。

くちや……くちや……

「は、ハチ君♡キスの最中にマンコを触らないで♡頭、可笑しくなるっ♡」

「だからやっているじゃん。めぐり義姉さんの発情した顔、綺麗だよ」

「もうっ♡そんな事、言われると怒れないよ」

俺はめぐり義姉さんとキスをしながらマンコに指二本で掻き回した。するとどんだん愛液が溢れてくる。手がベトベトになる。

それにマンコが俺の指をギュウギュウに締め付けてくる。そろそろめぐり義姉さんの絶頂が近いのだろう。

「は、ハチ君っ♡い、いく——」

「あ、ごめん。めぐり義姉さん」

「え？ど、どうして止めるの!？」

「俺今日、日直だった。もう行かないと」

「で、でも私まだイッていないのに……」

めぐり義姉さんは途中で止めたのが効いている。発情した顔はさつきより赤い。それに足をモジモジして絶頂したくてしかない様子だ。

「だけど、ここではまだイカせない。」

「昼休憩に生徒会室で！それじゃ！」

「ハチ君!?!待って！」

俺はめぐり義姉さんの制止を振り切ってトイレから出た。もちろん、外に誰も居ないのを確認してだ。

出る瞬間に見た、めぐり義姉さんの顔は涙を浮かべて、イキたがっていた。昼休憩もギリギリで絶頂させずに放課後に条件を付けてイカせる予定だ。

「楽しみにしていてよ、めぐり義姉さん。」

昼休憩に俺は生徒会室でめぐり義姉さんと合流した。俺より先に生徒会室で待っていたためめぐり義姉さんの顔は赤く風邪でもあるかと言うくらい真っ赤になっていた。

内股に足を閉じてこちらを物欲しそうに見てきた。朝から約4時間近くずっと我慢していたんだろう。それが俺には分かる。

でもまだまだ、めぐり義姉さんには我慢してもらう。放課後にたっぷり絶頂させるために。

「ごめん。めぐり義姉さん」

「も、もう遅いよ……私、待っていたんだよ」

昼休憩と言ってもすでに30分以上が経過していた。ちなみに俺は昼飯を食べ終わっている。それはめぐり義姉さんも同じで食べ終わって待っていたようだ。

くちや……

「もうこんなになっているんだよ。ハチ君が朝、中途半端にしたから……」

「うわあ……大洪水だね」

めぐり義姉さんが俺の手をいきなり自分のマンコに触らせたと思ったらマンコは濡れていた。愛液がドバドバと大洪水になっていた。

顔は俺の手が触れた瞬間、さらに赤くなった。めぐり義姉さんの発情した顔は最高にそそのめるものがある。

「ハチ君、早くしよ?」

「その前に一回射精してよ。めぐり義姉さん」

「うん。分かった。一回射精したら私のマンコにズボズボ、挿入してよね」

めぐり義姉さんはどんどんエッチな言葉を覚えていくな。俺は知っている。めぐり義姉さんがネットでエロい動画を見ながらオナニーをしているのを。

ヘッドフォンで音漏れはしていないけど、オナニーの際にギシギシと軋む音がする。それはめぐり義姉さんは知らないので俺は黙っている。

知ったらもうオナニーをしないとと思うから。いいオカズになっているからな。セックスとオナニーは別腹なので。

「ハチ君のおチンチン、もう勃起しているねっ♡それに匂いもキツイね」

「朝からずっと我慢しているからね。特濃の精子を射精すからしっかりと飲んでね」

「うん。それじゃ行くね。はむっ」

じゅぽっ……じゅぽっ……

めぐり義姉さんが俺のチンコを咥えて顔を上下に激しく動かした。その際に舌をチンコに絡め付けてきた。

こんなテクニクにいつの間にか覚えたんだよな。俺が好きな舌の動きだ。これではすぐに射精してしまうのをめぐり義姉さんは分かっている。

「め、めぐり義姉さん！もう射精するよ！」

「うん。いっぱい射精してね。はむっ……れろっ」

「で、射精るー！」

「んんんっ!!？」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

俺はめぐり義姉さんの顔を押しさえつけて喉の奥にチンコを捻じ込んだ。そして射精してザーメンを喉に流し込んだ。

めぐり義姉さんは苦しそうに涙を浮かべていたけど、どこか嬉しそうな顔もしていた。俺は最後の一滴まで精子をめぐり義姉さんの口の中に射精した。

「めぐり義姉さん。見せて」

「ああああ……」

「凄いな。いいよ、飲んで」

俺はめぐり義姉さんの口の中の精子を見た。毎度、結構大量の精子を射精しているな。それを数回だからな。

俺の精力は人より強いのか？でもその分、楽しめるからいいか。しかしめぐり義姉さんは本当に美味しそうに精子を飲むな。

「ハチ君っ♡は、早くっ！でないと私、壊れちゃうよっ♡♡」

「そうだね。って言いたいけど、ごめん」

「また!?!どうして?」

「日直の仕事が多くて、放課後にイカせてあげるから」

「は、ハチ君……」

俺が生徒会室から出る時のめぐり義姉さんの声は堪らなくそそれる。犯したい。けど、我慢だ。放課後に嫌でもって言うくらいイカ

せるから。

俺は急ぎ足で生徒会室を後にした。

放課後、俺は急いで生徒会室に向かった。日直の仕事が思ったより時間がかかってしまった。めぐり義姉さんはもう来ているだろうな。それに今日は生徒会はないはずだ。俺が生徒会室に到着してみるとめぐり義姉さんが机に突っ伏していた。

「めぐり義姉さん!?!」

「はあ……はあ……はあ……はあ、ハチ君っ♡♡ひ、酷いよ。お姉ちゃんをここまです待たせるなんて……我慢出来ないから一人でしちゃったよっ♡……でもね、全然気持ちよくないの……だから早くハチ君のガチガチの勃起チンポ、ちようだい?」

「めぐり義姉さん。エロ過ぎだ。分かった、俺も朝からずっと我慢してきているから爆発しそうなんだ」

「す、凄い……」

めぐり義姉さんは俺のガチガチに勃起したチンコに目を奪われていた。それに朝から我慢していたから今まで以上にガチガチに勃起してしまった。

もういつ爆発しても可笑しくはない。でもその前にする事がある。

「めぐり義姉さん。これから学校でする気はない?」

「学校じゃ誰からバレちゃうかもしれないから……」

「ならここでしょうよ。めぐり義姉さんが生徒会長になれば、ここで好きなだけする事が出来るよ?」

「それは……」

「ここですたくさん犯してあげるよ?」

「わ、分かったから!ハチ君、早く私を犯して!!」

「分かったよ。めぐり義姉さん」

俺がチンコを左右に振って、煽るとめぐり義姉さんは折れた。ちなみにこの会話は録音している。またゴネたらこれを聞かせるつもりだ。

必要ないかもしれないけど。俺は机の上でマンコを広げて待っているめぐり義姉さんに近づいた。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡き、きたああ♡♡ハチ君の極太チンポっ♡♡」

「本当にどこでそんなエロい言葉を覚えてきたんだよ!」

「ハチ君が喜んでくれると思って……」

「最高の義姉さんだよ!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡♡♡♡♡」

「頑張つて、朝の分も含めてたくさんイカせてあげるから!」

俺は腰を激しく動かしてめぐり義姉さんのマンコにチンコをたくさん突いた。突く度にめぐり義姉さんのマンコがギュウギュウに締め付けてくる。

ヤバイ。もう射精してしまう。

びゅるるるびゅるるるつ……びゅるるるびゅるるるつ……

「い、いぐうううう♡♡♡あ、あついのっ♡たくさんっ♡♡」

「めぐり義姉さん。エロいよ……」

「もつとっ♡もつとちようだいっ♡んんっ」

「ああ、たくさんあるからまだまだ射精出来るよ。んっ」

絶頂して、膣内出したのにまだまだめぐり義姉さんは満足していないようだ。俺も満足していない。それにしても生するのはめぐり義姉さんをレイプした時以来だな。

いつもはゴムをしているからな。妊娠なんて洒落にもならないよ。

我慢したからキスがいつも以上にエロい気がする。それにめぐり義姉さんのマンコが俺のチンコから精子を絞り取ろうと蠢いている。

「めぐり義姉さん。もつと行くよ!」

「うんっ♡来てっ!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひいひいひい♡♡♡い、いぐうううう♡♡♡」

「まだまだー！」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺はさらに腰を激しく動かしてチンコをめぐり義姉さんの子宮の奥に押し付けた。そしてチンコの先が子宮の中に入った。

「は、ハチ君のおチンチンがっ♡わ、私の子宮につ♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「いぐうううう♡♡♡」

「のおおおお……!!」

めぐり義姉さんの子宮に直接、精子を射精してしまった。まだまだ射精が止まらない。朝から我慢して来た分を残らず子宮に注いでやる。

俺はめぐり義姉さんに抱きつき、離れないようにした。めぐり義姉さんも同じように俺を抱きしめて離さないようにした。

「は、ハチ君っ♡」

「めぐり義姉さん……」

そこから俺は最終下校時間までめぐり義姉さんを犯し続けた。最後の方は頭が溶けそうな感覚に陥ってしまった。

まさかめぐり義姉さんがここまでエロくなるなんて予想外だったけど、また学校でする約束を取り付けたぞ。

今度は生徒の前でしてみるのもいいかもしれない。

やはりゆるふわな義姉と保健室でやるのはまちがっている。

うつつ、城廻八幡だ。学校での性行為をめぐり義姉さんからもぎ取った俺は学校でどのような場所であるか調査していた。

以前、平塚先生に見つかりそうになった時の興奮を味わいたい。めぐり義姉さんも許可してくれたからどこかいい場所はないだろうか？

どこかの空き教室でするのもいいかもしれない。生徒会室でもいいけど、換気や他の生徒会メンバーが急に来る可能性もあるからな。

バレない事に越した事はないからな。俺が味わいたいのはバレるかバレないかのギリギリだ。

「んんっ♡は、ハチ君っ♡朝から激しいよっ♡♡」

「めぐり義姉さんのマンコ、少し舐めただけで大洪水だよ？」

「だ、だってハチ君の舌、気持ちいいんだもんっ♡」

「ならもつと頑張るよ。れろっ」

「あんっ♡♡」

今日はどうしてかめぐり義姉さんから誘ってきた。なので下見ついでに空き教室でめぐり義姉さんのマンコを舐めていた。

めぐり義姉さんは俺に気を遣ってマンコの毛を綺麗に剃ってくれている。おかげで毛を気にしないで舐め回せる。

それにしてもめぐり義姉さんのマンコの愛液はドバドバと溢れてくる。

「めぐり義姉さんから学校でこんな事をするなんて生徒会メンバーとはとても思えないね」

「そ、それはハチ君との約束で……」

「でも誘ってきたのはめぐり義姉さんだよね？」

「い。いじわるしないで……あんっ♡♡」

義姉をここまでエロくしたのは間違いない俺だろう。だけど、今回はめぐり義姉さんからお誘いだ。

学校の誰も使っていないトイレとは言え、パンツを脱いでスカートの中に顔を突っ込ませてくれている人物がエロくない訳ない。

俺も射精したいからそろそろめぐり義姉さんにはイッてもらおうかな。

「れるっ……ちゅぱっ……ずずずっ……」

「は、ハチ君っ♡激しいよっ♡♡」

俺はめぐり義姉さんのマンコを舐めてからクリトリスに吸い付き膣内から愛液を吸い出した。激しくしていく度にめぐり義姉さんのマンコは愛液を出し続けた。

「ただ、だめっ♡いっっちゃうっ♡♡」

「いいよ。イキなよ！ぢゆるるるっ……」

「ひいいい!!?」

「ひいいい!!?」

「びゅしやあああ……」

「い、いくうううう♡♡♡」

めぐり義姉さんはイッたと同時に潮を噴いた。俺はそれを零れないようにすべて飲み干した。少ししよっぱいけど、嫌いではない。

「は、ハチ君にっ♡♡飲まれて、恥ずかしいのにっ♡♡気持ちいいいい♡♡♡」

「めぐり義姉さんの潮、ご馳走様」

「ひ、酷いよ。ハチ君……」

めぐり義姉さんは腰が抜けたようでその場に崩れ落ちた。俺が支えているけど、上手く立てない。産まれたての小鹿のように足に力が入っていない。

「めぐり義姉さん。フェラがいいな。今日は」

「わ、分かったよ。行くよ、はむっ」

「おおおお……」

めぐり義姉さんの口マンコは凄く気持ちいい。温かくて舌がチンコに絡み付いて興奮させてくれる。こんなの誰もすぐ射精してしまふよ。

俺は頭を掴んでめぐり義姉さんの口の奥までチンコをねじ込んで

射精した。

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんっ!？」

「ああああ……気持ちいい……」

「けほっ……けほっ……ハチ君、苦しいから!」

「ごめん。あまりにもめぐり義姉さんの口が気持ち良かったら」

「そ、そんな事を言っても許さないから!」

めぐり義姉さんは怒っているようだけど、どこか嬉しそうにしていた。もっとしたいけど、これ以上は時間的に無理なので終わる事にした。

昼休憩にでもたくさん射精でもするかな。俺は自分の教室に向かった。

放課後、俺は生徒会室ではなく保健室に向かっていた。それは何故かと言うとめぐり義姉さんが倒れたからだ。

体育の時間に倒れたそうさ。一度、休憩時間に様子を見たけど大丈夫そうだった。俺はめぐり義姉さんの荷物を持って保健室に到着した。

「めぐり義姉さん。本当に大丈夫なのか？」

「うん。昨日、遅くまで勉強していたから寝不足なだけだよ」

「それならいいけど、これ荷物取ってきたから」

「ありがとうハチ君」

流石に服は着替えているようで制服になっていた。体操服姿をちよつと見てみたかった。出来れば、その状態で犯してみたかった。思わず勃起してしまった。ここでめぐり義姉さんとやるのもいいかもしれない。

「どうしたの？ハチ君」

「めぐり義姉さん。ここでやらせてよ」

「だ、ダメだよ！先生は職員会議でいないけど、他の生徒が来るかもしれないんだよ!」

「我慢出来ないんだ!」

「きゃ!?ハチ君、だめっ♡」

俺はめぐり義姉さんをベッドに押し倒した。めぐり義姉さんは観念したのか大人しくなった。仰向けからうつ伏せになってお尻をこちらに向けてきた。

俺はスカートを捲り上げて、パンツを下ろした。めぐり義姉さんのマンコは軽く濡れていた。めぐり義姉さんも興奮しているようだ。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい♡♡そ、そんないきなり奥なんてっ♡♡」

「めぐり義姉さんのマンコ、いつもよりいい締め付けだよ」

めぐり義姉さんのマンコはいつもより興奮してか締め付けが強くなっていった。めぐり義姉さんも変態だと思う。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「んんっ♡♡は、ハチ君っ♡♡は、激しいよっ♡♡」

「めぐり義姉さんのマンコの締め付けがいいからだよ!」

「そ、そんなっ♡♡」

俺は腰を動かした。めぐり義姉さんのマンコは締め付けを強めていく。こんなのではすぐに射精してしまいそうだ。

だけど、勿体ない。こんな興奮出来る事なんてないだろう。保健室での性行為とか燃えるものがある。まる同人誌のようだ。

「めぐりく大丈夫?」

「っ!?!」

「か、加奈子!?!」

保健室の扉が開いて、誰かが入ってきた。めぐり義姉さんの知り合いのようだけど、一応カーテンを閉めておいたので見られていないはずだ。

俺はめぐり義姉さんと一緒に横になり布団を被った。その時だった、カーテンが開いた。間一髪で間に合った。

「どう?少しは良くなった」

「う、うん。もう少ししたら帰るから」

「弟君が荷物取りに来ただけで、居ないの？」

「の、飲み物買って来てもらっているの！少し喉が乾いたから」

「そっか……」

「ずずずずずつ……ぱんっ！」

「うひい♡♡」

「ど、どうした!？」

「な、なんでもないよ！」

「そう……」

我慢出来ずに腰を動かしてしまった。腰を打ち付けた音は聞かれなかったようだ。めぐり義姉さんが布団の上から俺の肌を摘み取った。

怒っているようだ。でも仕方ないじゃん！こんな生殺し状態なんだぜ！腰を動かしたくなるものなんだから！

「ずずずずずつ……ぱんっ！ずずずずずつ……ぱんっ！」

腰を小さく動かした。めぐり義姉さんのお尻に当たった時の音を出る限り抑えないと。でも小さく動く事で逆にもどかしい。早く帰ってくれ!!

「んっ♡♡だ、だめっ♡♡」

「めぐり。顔が赤いけど、先生呼んでこようか？」

「だ、大丈夫だからいいよ！」

「無茶するのも程ほどにね！先に帰るね」

「うん。また……」

漸くめぐり義姉さんの知り合いは保健室から出て行った。めぐり義姉さんが布団を除けて、俺を睨んできた。

「もう！バレる所だったよ！だから学校では駄目って言ったのに！」

「でもバレていないじゃん」

「やっぱり学校でするのは禁止だから！」

「それは嫌だ！」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「ひひひひひ♡♡♡♡」

俺は腰を動かした。先ほど動かせなかつた分、激しくだ。もしかしたら保健室の外に音が漏れているかもしれないが、気にしないで腰を動かした。

「これからも学校でするから！」

「さ、さつきだつてバレる所だつたんだよ！あんっ♡♡」

「バレないようにするから！」

「ぞ、それでもダメだから！んんっ♡♡」

めぐり義姉さんは頑なだ。でもめぐり義姉さんの弱点を知っている俺に勝てるかな？俺はめぐり義姉さんのブラを外して胸を揉んだ。

それと同時にクリトリスを摘んだ。めぐり義姉さんは乳首とクリトリスを同時に攻められると簡単に絶頂する。

「ひいいい♡♡い、いくうううう♡♡♡♡」

「めぐり義姉さんともっと学校でしたいんだ。だからそんな事を二度と言わないようにここでたくさんイカせてあげるよ！」

「ま、待って！ハチ君！あんっ♡んんっ♡♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

絶頂しためぐり義姉さんのマンコの締め付けはより強くなった。俺のチンコを離さないようにしている。

本人は嫌々と言っておきながら本当は嬉しい癖に。SEXの時はもっと俺を求めてくれればいいのに。

でもこれからは俺を求めるようにしっかりと教育しないと駄目だな。だって、俺はもうめぐり義姉さん無しでは生きてはいけないのだから。

彼氏でも作った時は今までのめぐり義姉さんの行為を隠し撮りした写真を送りつけてやるつもりだ。

「めぐり義姉さん！んんっ」

「んんっ♡は、ハチ君、もっとお姉ちゃんをイカせて！」

「あ、ああ！もっと行くよ」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひいひい♡♡」

「めぐり義姉さん！もう射精するよ！」

「い、いくうううう♡♡」

「で、射精するー！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

めぐり義姉さんの絶頂と同時に射精した。めぐり義姉さんのマンコの奥にたっぷり精子を注いでやったぜ。

めぐり義姉さんのマンコが俺のチンコを刺激するように蠢いている。これじゃまたすぐに射精してしまう。

「めぐり義姉さん。エロいよ」

「そ、それはハチ君の所為だから……」

「それじゃもうしない？」

「うっ……だからいじわるしないで」

「ごめんごめん。それじゃまた学校でしょうね」

「……分かった」

めぐり義姉さんは俺のチンコの虜だからな。俺が押せば領くしかない。それにしても今日のベッドでの隠れてめぐり義姉さんを犯すのは最高に良かった。

めぐり義姉さんの知り合いが来た時はヤバかったけど、結果オーライだ。次は学校のどこでしょうかな？楽しみが増えたぜ。

やはりゆるふわな義姉が卒業するのはまちがっている。

うつつ城廻八幡だ。今日は卒業式だ。母親の再婚相手の子供で俺の義姉のめぐり義姉さんが総武高校を卒業する。

俺は三年が抜けた生徒会で生徒会長となった。昔の俺なら絶対にしなかったであろう。だけど、生徒会の仕事はやってみて面白かった。なのでそのまま生徒会長になった。

この1年は色々あった。具体的に言うとう夏休みが終わってからだ。まずは葉山グループと雪ノ下の謹慎処分だろう。

なんでも夏休みに小学生のキャンプの手伝いをした際に小学生のいじめ問題に首を突っ込んで状況を悪化させて、いじめられた小学生が自殺しかけたそうさ。

そしてその親が総武高校の鶴見先生の娘さんだった。鶴見先生は怒って学校で問題にした。その結果、葉山たちは一週間の謹慎になり、同行していたのに何もしなかった平塚先生は減給処分になった。

そして次が文化祭だ。実行委員長になった相模と言う女子がやらかした。サボりを公認してしまい、実行委員が機能しなくなり危うく文化祭が中止になりかけた。

生徒会が手の空いている生徒に応援を頼み文化祭を開催する事が出来たが、出来は一步間違えれば酷いものになっていただろう。

そしてサボっていた生徒を全て一週間の謹慎にした。謹慎が空けた者たちは相模をいじめるようになった。

相模がサボりを公認した所為だと。一週間もしない内に相模は不登校になった。

今度は修学旅行だ。2年にとっては大きなイベントだろう。ここで葉山グループが空中分解した。原因は戸部と言う男子が海老名と言う女子に告白したからだ。

修学旅行で告白なんてベタだろう。告白するには絶好なタイミングだろう。しかし戸部は振られた。その際に戸部は葉山に暴力を振

るった。

どうやら告白の事を相談していたのに何もしなかった葉山に戸部がキレたのだ。戸部は修学旅行後、謹慎処分になり葉山グループは崩壊した。この時のクラスの空気はもはや御通夜状態だった。

次が生徒会選挙だ。1年の女子がある女子を標的にして署名を集めて強制的に生徒会長にしようとしたのだ。

会長には俺も立候補していた。それと何故か雪ノ下も立候補していたけど、結果は俺が会長になった。その際に俺はいじめられていた女子を助けた。

署名に書かれていた名前の全員、学校側に報告して謹慎にした。そしていじめていた女子が今度はいじめられるようになった。

何もしない人間からしたらとんだ流れ弾に当たったのだからな。

そして最後にクリスマスイベントだ。平塚先生が勝手に他校とのイベントを決めていたのだ。知った時にはすでに決定しており断る事が出来なかった。

しかも相手の高校から来た生徒会は横文字ばかりを使ったがる連中で話し合いが一向に進まなかったので、二校に別れての対決方式にした。

結果、俺たちの方が好評で他校は酷評だった。それもそのはずだ、俺たちの企画の丸パクリなのだから。

そんな事があったけど、なんとか卒業式まで無事に過ごす事が出来た。

「このこともお別れなんだね」

「お疲れ様。めぐり義姉さん」

「ハチ君はこれからだね」

「うん」

俺はめぐり義姉さんと生徒会室で感傷に浸っていた。今日でめぐり義姉さんが学校に来る事はない。学校でのSEXは最高に興奮したのに出来なくなるなんて。

「ハチ君。最後にここでしようか？」

「めぐり義姉さんから誘ってくるなんて珍しいね？」

「その……私も学校でするの興奮したから……」

「めぐり義姉さん！んっ」

「んんっ♡ハチ君、早くっ♡♡」

俺はめぐり義姉さんを抱き寄せながらキスをした。めぐり義姉さんのキスは最高に興奮した。それに舌を絡めてきてエロくなつたな。

「ハチ君のおチンチン、すごく固いね」

「めぐり義姉さんがエロいからだよ」

「わ、私はそんなにエロくないんだから！」

「そうかな？義姉さんのマンコはグチョグチョに濡れているけど？」

くちや……

めぐり義姉さんのパンツをずらしてマンコに触ってみるとかなり濡れていた。これだけ濡れているという事はここに来る前にはもう濡れていた事だろう。

「んっ♡だ、だめっ♡♡は、ハチ君！い、いくうううう♡♡♡」

しやあああ……

めぐり義姉さんは絶頂の際に小便を漏らした。それだけ気持ち良かったんだな。それは嬉しい。絶頂で腰が抜けたのか立てられないので椅子に座らせた。

俺はめぐり義姉さんの上着とシャツを脱がせた。そしてめぐり義姉さんの大きく育った胸が露になった。乳首の先からは白い液体が出ていた。

「ちゅう……ちゅう……」

「あんっ♡ハチ君、そんなに強く吸わないでっ♡」

「めぐり義姉さんの母乳が美味しくて、つい」

「もうっ♡ハチ君は大きな赤ちゃんなんだからっ♡」

めぐり義姉さんは笑顔で俺の頭を撫でてくれた。俺はこれが好きだ。もうめぐり義姉さんの赤ん坊になってもいいかもしれない。

いや、赤ん坊だとSEX出来ないのでは？それは絶対に嫌だ！

「めぐり義姉さん……俺、もう限界なんだ。早く！」

「うん、私もだよ。来てハチ君っ♡」

「めぐり義姉さん!!」

ずずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡も、もうハチ君、乱暴はダメだよ?」

一気に挿入してめぐり義姉さんに怒られてしまった。確かに相手の気持ちを考えないなんて、最低な人間だ。

自分も相手も気持ちよくなるのが最高のSEXだろう。それを目指して頑張ろう!

「ごめん……めぐり義姉さん、動くよ?」

「うんっ♡すこし位なら乱暴にしてもいいからね?」

「うん!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「は、激しいいいい♡♡いくいくいくっ♡♡はちくんっ♡」

「めぐり義姉さん!めぐり義姉さん!」

俺は腰を激しく振った。その度にめぐり義姉さんのマンコはキツく締め付けてきた。めぐり義姉さんのマンコは暖かく狭く、少しでも気を抜けば頭が真っ白になってしまう。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「は、はちくんっ♡す、すこしゆっくりしてっ♡こんなのだとすぐにイツちゃう♡♡」

「そんなの無理だよ!めぐり義姉さんのマンコが気持ちいいのが悪いんだ!」

「そ、そんなのないよっ♡はちくんのおちんちんが奥をコツコツしているのが悪いんだよ♡♡」

めぐり義姉さんはマンコの奥の子宮口をチンコの先で叩かれるのが一番感じるからな。それが分かっているから俺は一番奥を叩いているんだ。

でも我慢の限界が近づいてきている。

「めぐり義姉さん!で、射精る!!」

びゅるるるるるびゅるるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「い、いくうううう♡♡♡は、はちくんのあついのがいつぱい……おなかにたまるっ♡♡」

「めぐり義姉さん……」

膣内出しは最高に気分がいい。めぐり義姉さんのマンコを俺色に染めているようで。なんとも言えない幸福感がある。

それはめぐり義姉さんも同じで幸せそうに顔を緩ませている。マンコも俺の射精に反応してキツく締め付けて、蠢いている。

「ハチ君……綺麗にしてあげるね。はむっ」

「おおおお……めぐり義姉さん！」

射精したばかりでかなり敏感になっている中、めぐり義姉さんのフェラとか耐えられる訳がない。射精したばかりなのにもう射精しそうだ。

「めぐり義姉さん！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんっ!?んんぐっ……もうハチ君、びっくりするじゃない」

「ご、ごめん……」

俺はめぐり義姉さんの頭を押し込んでチンコを喉まで届けて、そこで射精した。めぐり義姉さんは嫌がらずにすべて飲み干した。

怒られたけど、めぐり義姉さんは嫌でないのだろう。だって、精子を美味しそうに舐めていたのだから。

「今度は後ろから来てっ♡」

「うん……」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「おおおお……!!」

めぐり義姉さんは壁に両手を付いて尻をこちらに向けてきた。マンコもアナルも綺麗でもっと犯したい。俺のチンコは元気よく勃起している。

一気にマンコの奥まで挿入するとあまりの気持ちよさに一瞬、頭の中が真っ白になった。

「うひひひひひ♡♡♡お、奥までくるっ♡♡」

「めぐり義姉さん!めぐり義姉さん！」

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!

めぐり義姉さんは挿入だけで軽く絶頂したようだ。俺は必死に腰を動かした。もう学校でめぐり義姉さんとこんな事は出来ない。

なら最後は思い出になるくらい気持ちよくしようと思っっている。

「は、ハチ君!?だ、だめっ♡そんなにつ♡」

「めぐり義姉さん!」

「ひいいいい♡♡♡」

俺はめぐり義姉さんの乳首とクリトリスを同時に攻めた。それだけじゃない、首筋にもキスをした。これだけで攻められてめぐり義姉さんは絶頂しっぱなしだ。

マンコの締め付けが強いのがその証拠だ。もう少し我慢したかったけど限界だ。

「めぐり義姉さん!で、射精る!」

びゅるるるびゅるるるるるるびゅるるるるるるっ……

「いくいくいくっ♡♡い、いくうううう♡♡……はちくんがおなかにいっばいっ♡♡」

「めぐり義姉さん……」

これまで一番いい射精だったと思う。もう金玉に精子は残っていない。今日、めぐり義姉さんは総武高校を卒業するんだと思うと最後に言わない。

「めぐり義姉さん、聞いてほしい事があるんだ」

「私も……ハチ君に言いたい事があるの」

「俺の彼女になって!」

「私の彼氏になってくれない?」

俺とめぐり義姉さんはお互いに見て、可笑しくなった。考えている事は同じだという事だ。こんな嬉しい事はない。

「私でいいの?」

「俺こそ、いいの?」

「うん。ハチ君がいいの!」

「俺もめぐり義姉さんがいい」

俺たちはそつとキスをした。これまで何度もしてきたキスだけど、今日のキスは一生忘れないものだろう。

「ハチ君のエッチ……」

「え？……あつ」

めぐり義姉さんは俺のチンコを見てそう言った。さつきまで萎えていたのにもう元気になったよ。チヨロいな、俺。

その後、家に帰ってから両親が帰ってくるまで俺たちは愛し合った。最高の気分でその日を終えたのだった。

やはりゆるふわな義姉と恋人になるのはまちがっている。

うつつ城廻八幡だ。俺とめぐり義姉さんは卒業式の日の夜に両親に俺たちの関係を話した。もしかしたら両親の離婚に繋がるかもしれないと思ったのだけど違った。

むしろ喜んだ。年頃の男女が一つ屋根の下に暮らしているのだ。血が繋がっていない義理の姉弟だから何かあるのではないかと両親はにらんでいた様だ。

一先ず家族会議で俺が成人したら戸籍を外してからめぐり義姉さんと結婚すればいいのでは?となった。

なんだか緩いな!?!でもめぐり義姉さんとの仲を認めて貰えたのは良かった。これで家でもイチヤイチャ出来る!

春から俺は高三でめぐり義姉さんは大学生だ。大変だけど、頑張れる気がする。そして春休みに入って待っていたのは両親の旅行だ。

おかげでめぐり義姉さんと思う存分、SEXが出来るぞ。

「めぐり義姉さん……んっ」

「んんっ♡ハチ君……」

「めぐり義姉さんのキス、興奮する」

「私もだよ。ハチ君に触られると心臓が破裂しそう……」

両親が家に居ないので居間で堂々とキスが出来る。めぐり義姉さんとのキスは興奮しっぱなしだ。勃起がズボンにテントを作っている。

早くめぐり義姉さんを犯したくて我慢が出来ていない。俺はめぐり義姉さんの服とブラを脱がして、胸を露にした。

白く張りがある胸。乳首がピンと立っている。俺はそれに吸い付いた。

「ちゅっ……ちゅっ……」

「んんっ♡もうハチ君、そんなにがつつかないの」

「めぐり義姉さんの母乳、美味しいから」

「ふふっ……うん、たくさん飲んでね」

「ちゅううう……ちゅううう……」

俺はめぐり義姉さんの母乳を吸った。甘く美味しい母乳だ。少しめぐり義姉さんの汗が混じっているけど、全然飲める。

将来、この胸が子供に独占される前にたくさん甘えてやる。

「んっ♡あっ♡は、ハチ君、そろそろ私にもさせて」

「あ、うん。分かった」

「いつ見てもハチ君の凄いね」

俺はズボンを脱いで椅子に座った。めぐり義姉さんは勃起した俺のチンコを凝視した。早くめぐり義姉さんのマンコを犯したくて立ちっぱなしだ。

でもまずはめぐり義姉さんの胸を楽しむか。めぐり義姉さんは胸で俺のチンコを挟んだ。相変わらずの乳圧だ！

「れろっ……ちゅっ……じゅるるるるっ」

「おおおお……」

めぐり義姉さんのパイズリとフェラの二段攻撃は俺の脳天を直撃するほどだ。こんなの射精が我慢出来る訳ない。

「で、射精るー！」

びゅるるるるるるびゅるるるるっ……

「きやあ!?!……もうハチ君、いきなり過ぎだよ」

「ごめん……めぐり義姉さんのフェラとパイズリ、最高だから」

「嬉しいな……ならもっとサービスしないとねっ♡」

めぐり義姉さんは胸で俺のチンコを挟んできた。この暖かく弾力のあるもので挟まれるだけで気持ちがいい。

「ほらどう?気持ちいい?」

「うん!めぐり義姉さんの胸、最高!」

「その義姉さんての止めない?」

「どうして?」

「だ、だって……もう私たちこ、恋人なんだよ」

か、可愛い!?めぐり義姉さんの少し視線を逸らしたテレがここまで可愛いとは思わなかった。ゆるふわな感じがどこか大人びた感じ

だったのに。

それがどうしてこんなにも可愛いんだ!!

「めぐり!」

「もう!ハチ君、落ち着いて!」

「めぐりめぐり!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あっ♡んっ♡は、ハチ君、激しいよっ♡♡」

腰が勝手に動いてしまう。名前で呼びなんて本当に恋人になったものだ。いや、恋人か。これが夢だったらどうしようと思う。

例え夢だとしても終わらないで欲しい。ずっと続けばいいのに。

「めぐり!で、射精る!」

「いいよ。きてっ♡」

「ぐっ……」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「いくうううう♡♡は、ハチ君がお腹で膨らんでいる……」

めぐりの膣内に俺の精子が溜まっているのを感じる。子宮パンパンになっているだろう。子宮に入りきらなかった精子が逆流して、マスコとチンコの隙間から出てきていた。

それだけ精子を子宮に射精したんだな。でもまだ俺は満足していない。それはめぐりも同じよう物欲しそうにチンコを凝視していた。

「めぐり。続きをする前に汗を流そう」

「そ、そうだね……」

俺とめぐりは一度、風呂場へと向かった。実際、汗で相当臭くなっていた。両親が帰ってきて、部屋の匂いを嗅がれたら不味いからな。

風呂に行っている間は喚起だ。あとで消臭剤でもしておくか。

「あっ♡もうハチ君、お風呂に入るんじゃないの?」

「もちろん入るよ。でもその前に体を洗わないと」

「んっ♡そ、そうだけど……自分で洗えるから」

「遠慮しないでよ。義姉弟のスキンシップだよ」

俺は風呂場でめぐりの体を洗っている。素手で。タオルなどめぐりのナイスボディを洗うなど有り得ない！背後に回って手にボディソープを馴染ませて、揉むように胸を洗っている。

「あんっ♡本当にハチ君はエッチなんだから」

「でも嫌じゃないんでしょ？」

「そうだけど……んんっ♡そんなに乳首ばかりだと出ちゃうから」

「それが分かっているからやっているんだよ」

めぐりの乳首にかなり攻めたからそろそろ溜まっているだろう。俺は胸の泡を洗い流して、正面に回ってから乳首に吸い付いた。

「ちゅっ……ちゅっ……」

「んんっ♡あんっ♡は、ハチ君……だめっ♡♡い、いくうううう♡♡」

「凄い噴出している」

めぐりが絶頂して、乳首から母乳が噴出した。俺は両乳首を口に持っていつて同時に吸い付いた。めぐりの母乳の出は俺とSEXする度によくなっていた。

甘くほんのり暖かくいくら飲んでも飽きない。あまり吸い過ぎてめぐりの胸が萎むのではないかと思っただほどだ。

「もうハチ君、あんまり吸うとお腹壊すよ？」

「めぐりの母乳で腹は壊さないよ」

「そんなに飲むと赤ちゃんの分がなくなっちゃうよ……」

急にめぐりの顔が赤くなった。俺との赤ん坊の事を今から考えているなんて、興奮してくるじゃないか！

「めぐりー！」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「あんっ♡んっ♡は、ハチ君……激しいよっ♡♡」

俺はめぐりのマンコに挿入して腰を激しく前後した。このめぐりのマンコは俺だけのものだ！他の誰にも挿入どころか触らせもしない。大学に行っても帰ってきたら俺の精子でめぐりをマーキングし

てやる。

「め、めぐり！射精る！」

「き、きてっ♡♡ハチ君のあついのを私にちょうだいっ♡♡」

「ぐっ……!!」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるびゆるるるっ

……

「いくうううう♡♡♡は、はちくんのあついのがたくさんっ♡♡」

「めぐり……」

めぐりの一番奥に俺は精子を注ぎ込んだ。めぐりのマンコからは俺の精子が逆流してきた。子宮に入りきらなかったんだろう。

でもまだだ。もつとめぐりを感じたい。そしてめぐりに俺を感じて欲しい。

「ハチ君、大丈夫？疲れた？」

「大丈夫だよ。もつとめぐりに感じて欲しい」

「うん。でも無理は駄目だよ」

「うん。分かった……」

俺はそのままめぐりに挿入したまま風呂に入った。めぐり抱かかえられるようにした。俺の方が体力があると思っていたのにめぐりはまだ余裕があるように見える。

風呂に入っている間でも俺のチンコがめぐりのマンコで萎える事はなかった。それどころかさらに硬くなっていた。

「めぐり。もう一回、いいか？」

「うん。いいよ、でも無茶は駄目だからね！」

「分かった。壁に手をつけてお尻をこっちに向けてくれ」

「う、うん。これでいい？」

風呂から上がってめぐりには尻を向けてもらった。マンコもアナルもぼつちり見える。俺はめぐりの腰を掴んだ。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡」

「のおおお……」

マンコが一番奥へ一気に挿入した。さっきまで入れていたのに向

きが違くとマンコの感触がまた違って感じる。

もつと奥に。めぐりの子宮を完全に俺のものにしろ！

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡あっ♡」

「めぐりのマンコの締め付けが強くなった！」

「は、ハチ君のおチンチンが奥ばかり突くからっ♡♡」

「めぐり!!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は腰を動かした。後の事なんてどうでもいい。今はめぐりのマンコを征服する事しか頭がない。突いて突きまくって、めぐりをイカせるんだ！

「は、ハチ君、私飛んじやう！何か来るっ♡」

「お、俺も限界だ！だから一緒に！」

「うん、来てっ♡ハチ君っ♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡いくの止まらないっ♡♡またいくううう♡♡」

「しゃああ……」

俺の射精でめぐりは絶頂して、潮を噴いた。風呂場で良かった。もし寝室やりビングでやっていたら掃除が大変だっただろう。

めぐりは絶頂が止まらないようだけど、俺は射精が止まらない。頭の中が真っ白になった。金玉の中の精子が全てめぐりのマンコへと注がれた。

「ハチ君、大好きっ♡♡」

「俺もめぐりが大好きだ！」

「私たち相思相愛だねっ♡♡」

「そうだな……」

そこからはあまり覚えていない。風呂から上がって着替えて飯を

食べて寝た。そこから起きてまたSEXだ。両親が帰ってくるまで可能な限りやった。

そして大学をお互いに卒業して、俺は籍を独立してからめぐりと結婚した。義姉弟とは言え、結婚したのは世間的に色々あるとの事で別の県に移動して新生活を始めた。

そこで俺とめぐりは三人の子供に恵まれた。

「ハチ君、私凄く幸せだよ」

「それは俺もだよ。めぐり」

「今夜もたくさん愛してね。旦那様」

「足腰立てなくなるまで止めてやらないからな。奥様」

今夜も俺は妻のめぐりを愛する。もしかしたら新たな命を宿すかもしれない。子供たちのために頑張るぞ!!

相模南

やはりさがみんを拉致するのはまちがっている。

うつす、比企谷八幡だ。先日、無事？文化祭が終わった。屋上で俺が言った相模への罵倒で俺への悪評は右肩上がりで見られている。ボツチの俺がこの程度の事でへこたりはしない。

だけど、念のため奉仕部の雪ノ下と由比ヶ浜にはちゃんと謝っておいたので奉仕部の関係はこれからも継続していける。

「それで由比ヶ浜さん。相模さんはあれから……」

「うん。打ち上げの後から行方不明なんだ……」

今は奉仕部の部室で雪ノ下と由比ヶ浜が文化祭実行委員長でありながら雪ノ下にはほぼ全部の仕事を押し付けて最後には逃げ出したクソ女、相模南について話していた。

相模は文化祭以降、学校に来ていない。行方不明になっているのだ。原因は不明で家出など心配されているが、数日経っても見つかっていない。

文化祭の打ち上げから相模と連絡が着かないのだ。

しかし雪ノ下もあれだけの事をした相模を心配出来るな？俺だったら無理だ。まあ、俺はあいつに暴言を言ったから心配する筋合いはないよな。

由比ヶ浜は前にツルんでいたから心配そうな顔をしている。文化祭が終わった直後に大事件が起こったものだ。

犯人はきつと相模に恨みのある奴に違いない。文化祭準備の時にとんでもない事をしたからな。それで恨んでいる可能性大だ。

「それで比企がえ……比企谷君はどうかしら？」

「おい！今、ヒキガエルと言いきりそうになつたら!?」

「気のせいよ。それより相模さんの事件の事を早く話しなさい」

「まったく上から目線かよ……」

雪ノ下の性格は絶対に死んでも直らないな。由比ヶ浜も俺の事を見ているよ。さっさと話して帰るか。

「相模は計画的に攫われたんじゃないかと思う」

「どうしてそう思うのかしら？」

「警察が捜査しているのに目撃者一人出てきていないんだぞ。なら誰にも見つからないように下見とかしたに決まっている」

「なるほど……続けなさい」

「そこからずいぶん前から計画していたのは明白だ。相模の家とか防犯カメラの位置とか念入りに調べたと思うぞ」

雪ノ下はどこか納得している顔をしているが俺の顔を見た途端、睨んできた。俺が何をした!?!お前が答えろって言うから言ったまでだぞ!

由比ヶ浜は難しく考えているようだけど、あれは絶対に頭から煙を出すな。

「俺たちは警察じゃないんだ。さっさと帰ろうぜ」

「そうね……今日は少し早めに終わらしましょう」

「うん。二人ともまたね!」

俺と由比ヶ浜はすぐに帰り支度をして部屋を出た。雪ノ下は少ししてから鍵を閉めてから職員室に寄ってから帰るだろう。

今日の俺は家に帰るのではなくあるアパートに来ていた。ここは俺の父方の祖父が管理人をしていたアパートだ。

その祖父が夏に足を階段から落ちて骨を折ってしまった。なので期間限定の管理を俺がする事になった。

本来なら親父がするはずなのだけど、あのクソ親父は俺に全て丸投げしてきやがった。でも祖父は元々俺に頼むつもりだったようだ。

親父の事を信用していないようだ。

俺は自分の部屋に入ってPCを起動して、カメラの録画を確認した。問題はないようだ。画面には少女が全裸で分娩台に乗せられていた。

手足を拘束されて、目隠しに耳にはヘッドフォンに口はガムテープで塞がれている。俺は襖を開いて、そこに置いてあるダンボールを退

けた。

退けたそこには地下への扉が現れた。俺は階段を降りて、先ほどのカメラの部屋に入った。

俺は分娩台の少女——相模南のガムテープを外した。

「痛い！誰が知らないけど、こんな事してただじゃおないから！」

「ずいぶん、元気が余っているんだな？」

「その声、ヒキタニ？」

「……………」

俺はスタンガンを取って相模の横腹に付けて、電圧を最弱にして電源を入れた。

「ぎやあああああ!!？」

「相模、俺の苗字は『ヒキガヤ』って読むんだよ。高校生になって漢字も読めないのか？」

「はあ……………はあ……………し、死ね！」

「口が悪いな」

俺の父方の祖父は『調教師』だった。ただし動物ではなく人間の調教師だ。女性をAVのM女優にするのが爺ちゃんの仕事だった。と言っても最初から調教師だった訳ではない。

若い頃はちゃんとした仕事をしていた。そこで貯めた金を使って株を買ってボロ儲けしたのだ。そこから始めた様だった。

そして婆ちゃんが死んでからこのアパートを建てそこにAV女優たちを住まわせて調教していた。俺も少し調教に協力した。

そこで爺ちゃんから色々教わった。どうすれば女をド淫乱にするかとか。あの時の女性は泣きながら喜んでいたのを今でも覚えている。

爺ちゃんのようにには行かないが俺流のやり方で相模を処女ビッチにしようと思う。まずは生意気な態度を改めさせないと。

だからまずは電気攻めだ。これが結構効くんだよな。

「ぎやあああああ!!？」

「まったく俺にそんな態度はもう二度としないと誓わないと止めないぞ。」

「はあ……はあ……だ、誰が！」

「そうか。残念だ。それじゃもう一回行ってみようか」

「い、嫌!!」

俺は相模のクリトリスにスタンガンを近づけた。相模は必死に暴れて拘束を破壊しようとしたけど、この拘束具は結構頑丈に作られているのでJK一人の腕力では破壊は無理だ。

「スイツチ……オン！」

「ぐぎいいいい!!……い、いやあ……もう、かえじでえ……で、でないでえ」

ちよろろろろっ……

相模は失禁して、黄色い的小便を出した。顔は涙や鼻水でグチャグチャに歪んでいた。最高の表情じゃないか!もつともつとその表情を見たい。

もつとしてみたかったけど、これ以上すると早く相模が壊れそうなので今日は別の事でいじめるか。

俺は何か攻められる物を探したらいい物を見つけた。

「痛っ!?!外せ!」

「いや、乳首が寂しがっていたから」

「ふざけんな!」

俺は相模の乳首を洗濯バサミで挟んだ。それを指で弾けばいい感じに相模の胸が揺れる。由比ヶ浜よりは小さいが雪ノ下よりはある。

二人の中間くらいだろうか?巨乳でも貧乳でも無い。平均サイズと言った所だろう。クリトリスも寂しそうだな。ここにも一つ。

「痛っ!?!すぐに外せ!ヒキタニ!」

「まったく学習能力0か?」

「ひい!?!い、いやあ……!!」

俺は相模のクリトリスにスタンガンを近づけた。相模はさらに暴れて拘束を破壊しようとして必死になっていた。

相模のクリトリスにスタンガンを近づけて少し電圧を上げた。

「ぐぎいいいい!!」

「もう一度、俺の苗字を言ってみろ」

「ひぎいいいい!!」

「これはヤバ……」

相模が泡を噴いてしまった。やり過ぎてしまった。もつと感情をコントロールしないと。いつもは出来ているが、相模を前にすると文化祭の事を思い出して、つい強めにしてしまう。

これでは爺ちゃんに『調教師』として顔向け出来ない。それにしても相模は一回目のスタンガンで学習したかと思ったけど、全然だったな。

もつと痛みが少ないけど、効果的な責めをしないといけないな。

「おい！起きろー！」

「あああ……」

「おい！起きろと言っているんだ！」

「ああ……」

駄目だ。完全に伸びている。身体は痙攣を起こしてガタガタと揺れていた。一人での調教は初めてだからな。

今までは爺ちゃんの助手としてやっていたからな。加減がまだまだ掴めない。だけど、ある程度は分かってきた。

次はもつとさして、相模でも起こすかな。俺は分娩台の高さを少し下に降ろした。そして相模に跨る様に立って、ズボンのチャックを下ろしてチンコを出した。

しやあああああ……

「うぷう……」

「ああああ……これ、気持ちいいいい！」

俺は相模に思いつきり小便を引つ掛けてやった。女子に小便を引つ掛けるとか滅多に出来るものではないからな。

そうだ。相模に食事を用意しないと。餓死させる訳にはいかないからな。俺はレンジでチンの白米を用意した。

びゅるるるるびゅるるる……

そんな白米に俺の精子をたっぷり掛けてやった。白に白だと見栄えがあまり良くないな。今度はパンにでも掛けてみるかな。

「おい。相模、起きろー！」

「うん……くさっ!? な、なにこれ……」

「俺の小便」

「マジ死ね! ヒキタニ!!」

「はあ……まだ猿の方が賢く見えてくる。ほら飯だぞ」

「くさっ!? な、なんの!?!」

相模はさつきから文句ばかりだ。声が大きいので地下だと少し反響して耳が痛い。俺は精子が白米を相模の口に近づけた。

「そんなの食べられる訳ないじゃん!」

「食べなきゃ数日は食べられないぞ? もしかして今、断食ダイエットでもしているのか?」

「このっ……!!」

相模は俺の睨み付けてきたが、雪ノ下に比べるとライオンと猫くらい違う。相模はスプーンに乗っている精子と米を口に入れ始めた。

苦いであろう精子を必死に我慢して食べている光景は最高に興奮した。このまま相模を犯しても良かったかもしれない。

しかしまだ駄目だ。文化祭で溜まった怒りを相模にぶつけないと気が済まない。

「どうだ? 美味しいか?」

「ど、どこが!?! 苦くてドロドロして喉に絡み付いて食べにくし、この白の何なの?」

「まだ教えない。今は食べておいた方がいいぞ」
「くっ……にがっ……うえ……」

必死に我慢して相模が俺の精子を食べている。余程、腹が減っていたのだろう。ここで食べなければ、さらに数日食事抜きは不味いと思っただろう。

体力が無ければ、脱出もままならないからな。例え不味くとも食べて体力回復に努めた方が賢いからな。

「ここを出たら覚悟しておけ……ヒキ、ガヤ……」

「今度はちゃんと言えたな」

「このっ!!」

「ほらほら零れたら貴重な食事が無くなるぞ?」

俺がそう言うと相模は黙ってザーメンライスを食べ続けた。俺は思わず笑ってしまった。相模がもし白のが精子だと分かった時の顔を想像するだけで気分がスツキリする。

俺は部屋を綺麗に掃除して、地下室を後にした。これからもつと相模を調教していくつもりだ。明日は道具を色々使ってみるのがいいだろう。

「処女ビッチにしてやるよ、相模」

明日からしばらくは忙しくなるぞ！でも遣り甲斐はある！

やはりさがみんを放置するのはまちがっている。

相模南が総武高校から消えて、一週間が経過した。その間、警察の調査でも居場所を特定する事は出来なかった。

最初のうちは学校でも相模の話題は大いに盛り上がっていた。しかしそれも五日も過ぎれば少しずつ落ち着いてきた。

学校でも相模の話をしている人間はもう雪ノ下か由比ヶ浜くらいだ。雪ノ下は警察ごっこをして教師から注意されたけど、まだ諦めてはいなかった。

いくら調査しても無駄なのに。警察ですら何も掴めていないんだぞ。ただの学生が何を見つけられると言うのだ。

それとクラスのカーストに変化があった。相模の連れ二人が葉山グループに入った。しかも葉山が二人を引き入れた。

相模を失って悲しみに明け暮れている二人を見兼ねて葉山が声を掛けたのだ。新たな女子の加入など三浦が許さないと思ったが、そんな事もなかった。

恐らくここで二人の加入を否定すれば葉山に嫌われると思っているのだろう。葉山に好意を寄せている三浦だ。

葉山の決定には出来る限り賛同していないといつかグループから追い出されると思っっているのだろう。

それにしても相模の連れの二人はしてやったりだと思おう。まさか相模が消えて、葉山グループに入る事が出来たのだ。

葉山を狙わなくとも学校でも人気のイケメンと居れば、男子から寄ってくるからな。それが分かっているのか、三浦も二人に対して何も言わないのだろう。

それにしても女子って怖いよな。居なくなった人間すら利用して欲しいものを手に入れるのだからな。

さて、今日も奉仕部へ行ってみるか。

「それで由比ヶ浜さん。聞き込みはしてくれたかしら」

「うん。バッチリだよ」

「それじゃ聞かせてくれるかしら」

奉仕部では今日も雪ノ下は由比ヶ浜と相模を探そうとしていた。由比ヶ浜にクラスメイトに聞き込みをしてもらい、雪ノ下は推理をすると言うものだ。

実質雪ノ下は何もしていない。これからも何もしないだろう。それにしても平塚先生に警察ごっこはするなどと注意されたのにまだ懲りていないのか

「こんな感じだよ」

「……相模さんを恨んでいる人間はそうは多くないのね」

「うん。さがみん、今どうしているのかな」

「安心しなさい。由比ヶ浜さん。私が警察より先に見つけ出してみせるわ」

「うん。ゆきのん、がんばって」

いつもの奉仕部の光景だな。由比ヶ浜は雪ノ下にベツタリだし、俺は距離を置いて二人の会話を聞く。これと言って変化はない。

それにしても相模はいい子にしているだろうか。帰ったら可愛がってやらないとな。二人が話に夢中になっているのでステルスヒッキーを発動させて気付かれずに部室を後にした。

アパートの自室に帰った俺はPCを起動して、相模の様子を見返した。分娩台の上でちゃんといい子にしているようで安心した。

俺は地下へ降りた。そして扉を開けるとムワツと凄い匂いが立ち込めていた。これは全て相模の愛液が蒸発したものだ。

「相模？生きているか？」

「い、いぐううううう!!!も、もういぐだぐざいいい♡♡♡♡」

「生きているな」

「ま、ましゅ♡♡……いやあああ!!」

しゅあああ……

相模が絶頂して潮を噴いた。相模の両乳首とクリトリスにはピン

クローターを二つずつ貼り付けている。そして約12時間放置している。

朝の6時からずっとこうしている。朝から相当絶頂したんだろうな。床が相模の愛液で濡れていた。

もちろん脱水症状にならないように30分に一度、上から水が落ちてくる装置を設置している。

それと相模は今、目隠しとヘッドフォンをしている。人間は五感のどれかが使用出来ないと他がそれを補おうといつも以上に感覚が敏感になる。

そんな状態で半日、放置していたのだ。相模は想像を絶する快楽に苛まれているだろう。事実、部屋の床は相模の愛液でベドベドだったのだから。俺は相模に近づいてヘッドフォンと目隠しを外した。

「ひ、ひきがやざまあ……お、おねがいじまずう……どめでえ……」
「凄いな。まだ理性が残っているか」

大抵の女性はこれに耐えられず精神が崩壊する人が多いんだけど、相模は中々に耐えているな。

俺の苗字を間違わずに言えたのはえらいな。ご飯を準備しておくか。それにしても今の相模の顔は酷いものだ。

目からは涙が、鼻からは鼻水が、口からは涎が、身体全体からは汗が、マンコからは小便と愛液が溢れていた。

これほど酷い女の顔を見た事がない。最高に興奮させてくれる。びゅるるるるびゅるるるる……

俺は勃起したチンコをシコって精子を食パンの上に掛けた。いつも米だと相模が飽きるかもしれないからな。

俺が精子が乗った食パンを口に近づけると相模は黙って食べ始めた。少しでも食べて体力を回復しておきたんだろう。

「ごべんばざないい……ぼう、いでにがえじでい……」
「ホント、諦めていないんだな」
「いでに……がえじでえ……」

「帰る家なんてないのに。相模、お前の両親はもうお前の事を諦めて養子を取る事にしたらしい」

「ぞんだのお……うぞお……!!」

「これが嘘じゃないんだよな」

もちろん嘘だ。外界の情報が選らない以上、相模に俺の言葉の審議を知る術はない。だけど、これで相模の頭には両親が自分を捨てたと思い込んだはずだ。

とことん絶望の淵まで追い詰めてやる。文化祭での事、ここで思いつき晴らさせてもうぜ。だからまだまだ壊れないでくれよ、相模。

「それとお前の連れ、二人今は葉山グループに居るぜ」

「ぐだりがあ……」

「最初はお前の話題があっただけど、今じゃ全然お前の話なんてしないんだぜ。薄情だよな。お前の行方不明を利用して葉山に取り入ったんだぜ」

「ばばまぐんう……だずげでえ……!!」

最高だよ、相模。絶望的状况でも葉山の名前を聞いただけで希望があると諦めない。素晴らしい、精神だ！これを文化祭実行委員で発揮してくれたらどんだけ楽だったか。

もう遅いけどな。相模が元気になったから調教を再開するかな。

「それじゃ相模、俺は戻るな」

「まだっでえ！じどりにいじだいでえ!!」

「じっとしていろ」

俺は再び相模に目隠しとヘッドフォンをして上に戻った。相模は最後まで暴れていたけど、強行した。もう半日ほど放置しておくか。さて、どうなるかな。

それと暴れたのでローターの振動を最強にしておいた。俺が相模に使っているローターは四段階の強さに別けられる。

小、中、大、最強の四つだ。これまでは中や小だったんだけど、これで確実に壊れるだろう。明日に備えて早めに寝るかな。

相模を半日放置してさらに半日放置した。丸一日、ローターでの攻

めは相模にどんな変化をもたらしただろう。

楽しみではある。俺は地下に向かった。

「うわぁー！凄いい、匂いだな……」

部屋の中は様々な匂いで臭かった。分娩台を見てみると相模に貼り付けておいたローターが剥がれていた。

流石に汗などで剥がれたか。

「相模？死んだか……」

「あああ……♡♡い、いぐうううう♡♡♡♡」

ローターで攻めている訳でもないのに相模は絶頂したようだ。身体を上下にビクンビクンと痙攣させていた。

俺は目隠しとヘッドフォンを外した。相模は白目になっていた。舌をだらしなく出して、今まで見たきたどの女性よりも酷かった。

これほどの酷い顔があるのかと言いたいくらいだ。それだと言うのに俺の下半身は興奮していた。

「最高だよー相模。ここまで興奮したのはお前が始めてだ！」

「あああ♡♡じ、じぶう……」

「酷い顔だ……れろっ」

俺は相模の酷い顔を舐めた。涙、鼻水、汗、愛液と身体から出る液体が全部出ていた。水分は無限に補充出来るので脱水症状にはなっていないかった。

俺は相模を分娩台から下ろした。丸一日、放置していたからな。頭がぶつ飛んだ事だろう。思考力が低下していないだろうか？

「おいー相模」

「は、はいい……ひぎがやさまあ♡♡」

「ちゃんと返事をしろ。でないとまたローターで放置するぞ！」

「ず、ずびばぜん!!も、もうローターはいやですう!!」

ちゃんと返事が出来るじゃないか。それにしても余程、怖い思いしたのかローターの事を嫌っていた。

それに俺の事をちゃんと『様』をつけた事から俺への服従は完了したようだ。相模、これからだからな。

お前への調教はこれからだ。もつとお前を天国へ連れて行って

やるよ。

「相模」

「なんですかあ？」

「ここでオナニーしろ」

「はいい……んんっ♡♡」

相模は俺の指示通りにオナニーを始めた。人差し指と中指をマニコに軽く入れて膣内を解していた。

最高じゃないか！俺の指示を聞くようになれば調教は成功と言えるだろう。でも油断は出来ない。

あの相模だからな。とことん強めに調教しよう。

「最高だよ、相模」

「さいこうう？わたしがあ……」

「ああ、もつとお前を壊したい！」

「はいい……もつとおこわれますう」

壊れて目が死んでいるなんて最高どころじゃない。もつと壊してみたい。どこまで壊れるのか興味が出てきた。

それにしてもこれはなんだ？相模へ対する気持ちは？俺は相模が好きなのか？俺は相模が好きだから壊してみたいと思うのか？

文化祭で散々足を引っ張ってきたこいつを？いや、引っ張ったから壊して好きになったんだろう。俺も壊れているな。

「相模、もつと綺麗に壊れてくれよ」

「はいい……」

「それじゃ……台の上に戻れ」

「はいい」

相模は素直に分娩台に自分から乗った。俺は相模を再び拘束した。そして相模の太ももに電マをガムテープで固定した。

クリトリスにギリギリ触れない位置に。もちろん乳首にはローターを外れないように貼り付けた。今度は外れないだろう。

「それじゃ相模、明日また来るからそれまでいっぱい絶頂しろよ」

「はいい」

俺は地下室を後にした。明日、相模はどんな事になっているだろう

か？今以上に酷く、醜く、不細工になっているだろう。

だけど、それが俺には最高に綺麗に見える事だろう。相模、もつと俺を興奮させてくれよ。それが今のお前の存在価値なのだから。

やはりさがみんを配信するのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。相模南が文化祭以降、行方不明の件はもう学校ではブームが過ぎた。誰も相模南の話はしない。

葉山グループに入った相模の元取り巻きもだ。人間つてのは薄情だと思っていたけど本当に薄情だな。

相模の事を探しているのはもう雪ノ下だけになった。警察はJK一人をいつまでも捜査していられない。事件は一日に何十件も起きているのだから。

それにしても雪ノ下は諦めが悪い。奉仕部が終わると学校から相模の家までのルートでの聞き込みや元取り巻きたちから聞いた相模が今までに行った場所でもた聞き込み。

だが、成果はまったくくない。ちなみに由比ヶ浜はまったく手伝っていない。由比ヶ浜が一番薄情かもしれない。元々由比ヶ浜は相模のグループに居たが、三浦が葉山グループに誘ってすぐにそちらに鞍替えしたからな。

そんな由比ヶ浜は奉仕部部室でのん気にスマホをいじっていた。何がそんなに夢中にさせるのは分からない。

「ゆきのん。さがみんは見つかりそう?」

「……いえ、進展は何もないわ。彼女が行きそうな場所を重点的に聞き込みをしているのだけど……」

「そっか……どこ行ったんだろう、さがみん」

「まったく迷惑をよく掛けてくれるわ」

確かにな。ちなみに文化祭を途中、サボタージュしていた連中は今は謹慎中だ。理由は文化祭実行委員の出席日数だ。

誰かが学校側に出席の悪さを報告して、保護者から抗議の連絡が来て改めて調査して二日以上サボっていた生徒を一週間の謹慎にしたのだ。

ちなみに実行委員の監督役の先生が二人居ただけけど、どちらも校長から説教を受けて減給処分になった。二人の内、一人は平塚先生だ。

給料が減って合コンへ行けなくなったとボヤいていたな。

「そろそろ私は聞き込みに行くわ。由比ヶ浜さんは？」

「ゆきのんが帰るのなら帰ろうかな」

「そう。なら早く部屋を出なさい。空気谷君」

「おい！人の事を空気として扱うな！」

雪ノ下はそのまま何も言わずに行ってしまった。俺はコンビニに寄ってからアパートへと向かった。

「相模。どうだ俺のチンコは？」

「じゅるっ……ちゅぱっ……れろっ……は、はい。硬く太く熱くて美味しいですっ♡」

アパートの地下で俺は相模にフェラをさせていた。相模は美味しそうに俺のチンコをしゃぶっていた。チンカスまで自分の舌で綺麗に舐め取っていた。

前の面影はどこにもない相模になった。身体は毎日綺麗にしている。臭い女なんてご免だからな。

今の相模は髪が伸びて腰くらいあり、金髪にした。これなら外に出しても誰にも分からないだろう。

「相模。今日はお前に世界中の男たちのオカズになってもらう」

「オカズですか？八幡様に気持ちよくしてもらえるなら何でもいいです！」

「そうか。流石だな！」

「へえええ」

俺が頭を撫でると相模は嬉しそうに笑顔になった。自分を誘拐した相手に向ける笑顔ではない。本当にお前は俺を興奮させてくれるよ、相模！

「相模。口を大きく開けろ」

「あああ……」

びゅるるるびゅるるるっ……

俺は射精して、精子を相模の顔に思い切り掛けた。相模は手で顔に

ついた精子を全て口に運んで飲み込んだ。

「美味しいか？俺の精子は？」

「はい♡ドロドロで喉に絡み付いてきて、飲み込むのも大変でした♡」
「そうか。相模、尻をこっちに向けてから穴を広げろ」

「はい♡こうですか？」

相模は尻をこちらに向けてから尻穴をこちらに向けてきた。俺はその尻穴に大き目の注射器を差し込んだ。病院とかで使う先が細い針ではなく、少し丸い注射器だ。

中には浣腸剤が入っている。それを全て相模の尻穴に注いだ。これで準備完了だ。効果はすぐに出てきた。

「お、お腹が……大きいのが出そうです！」

「まだ我慢しろ」

「は、はい！うぎい！」

「ほら手を貸せ」

「す、すみません……」

俺は相模の手を取り、椅子に座らせた。そして手足を拘束した。これで暴れても大丈夫だろう。それとアイマスクを相模に装着した。

これでどこの誰だか分からないだろう。カメラを相模に向けて、俺は自分の首に変声機を取り付けた。俺の声で身元がバレる可能性があるかな。

俺はあるエロサイトに入った。会員制で今日の事はすでに告知済みだ。もう視聴者がたくさんいた。

『おっ！始まったぞ！』

『金髪の可愛い娘だ！顔が見たい！』

『お腹が大きくないか？妊娠か？』

『早く早く！』

コメントもたくさん来ているな。これは生放送なんだよな。少し緊張してきた。でも大丈夫だ。爺ちゃんと去年たくさんしてきたからな。

「みんな、お待たせ。これからこちらの金髪JKの脱糞ショーを始める」

『脱糞だ?! マジか!』

『金髪JKなのか?! 早く漏らせ!』

『あのお腹は全て糞なのか?』

『漏らせ! 漏らせ!』

みんな盛り上がっているな。ならいつまでも待たせるのは失礼だな。俺は相模のお腹に力を入れて少しづつ押した。

「おおおおお!?! で、でりゅうううう♡♡」

ぶりりりりりっ……ぶりりりりりっ……

『出たぞ! 予想よりデカイ!』

『JKがする糞の量ではないだろ!』

『これはすごい……』

『出た出た出た出た!!』

相模が糞を捻り出すと視聴者が興奮してきたな。彼らは大のスカトロ好きの人たちだ。女性の脱糞シーンが何より大好きな変態たちだ。

「みんな見てくれ。彼女の尻穴がパクパクして呼吸でもしているようだ」

『すごい! エロい!』

『JKの尻穴、最高だ!!』

『糞を出した直後の穴を舐めたい』

『きつと臭いぞ! いい糞だったぞ!』

俺はカメラを近づけて、相模の尻穴の状況を視聴者へと送った。開いたり閉じたりを繰り返して呼吸しているようだった。

あれだけ大きな糞を出せばそうなるよな。俺は糞を片付けてからバイブを相模の尻穴へと挿入した。

「うひひひひひ♡♡♡おひいり! ばかになりるっ♡♡」

「もう馬鹿になっているるだろ! あれだけデカイ糞を出したんだぞ!」

「ひひひひ♡♡」

ヴヴヴヴヴ……ヴヴヴヴヴ……

俺はバイブを出し入れしてさらに相模の尻穴を拡張した。視聴者の数もどんどん増えてくる。全国にこれだけスカトロファンがいる

からな。

きつと画面の向こうではオナニーをしているんだろう。良かったな相模。お前のファンがこれだけいるんだぞ？

「極太バイブを簡単に啜えて、お前の尻穴はこれから糞を漏らしまくるだろうな！」

「は、はひい♡そしゆをもらしゆますう♡♡」

「それを俺が掃除するんだぞ？分かっているのか」

「はひい♡すびばせん!!ひいいいい♡♡♡」

相模は尻穴で絶頂して極太バイブを押し出した。バイブが抜けた尻穴はきつきと同じように開いたり閉じたりを繰り返した。

「みんな、彼女は凄いぞ。バイブを押し返したぞ!!」

『アナルエロっ!』

『アナルがすぐエロくなっているぞ!』

『そのアナルを舐めたい!!』

『もっと脱糞ショーをしてくれ!』

次々とコメントが寄せられた。俺はカメラを持って相模の尻穴に近づいた。バイブを押し返した相模の尻穴はかなりエロかった。

マンコからは発情したメスの匂いをプンプンさせていた。我慢が出来ない。

「今日の生配信はここまで!次回もこのJkのアナルを開発していくから楽しみにしてくれ。では!」

俺はここで配信を終えた。視聴者も大満足だっただろう。俺は相模のアイマスクを取った。相模の目はイッていた。

今日はかなり尻穴をいじめたからな。涎を垂らして幸せそうな顔だな。俺はズボンを下ろして勃起したチンコを相模の尻穴に近づけた。

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「うひい!?!お、おひりめしゅれるっ♡♡」

「強い締め付けだ!」

相模の尻穴は俺が思っていた以上の締め付けだった。あれだけ広げたのに俺のチンコを挿入した途端、力強く締め付けてきた。

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!

「おおおおお♡♡おひりがばしやるにらるっ♡♡」

「もうお前は馬鹿だろうが!!」

「はひいひい♡♡わらしゅはばらでしゅ♡♡」

幸せそうだった顔はさらに酷い事になってしまった。これはモザイクを掛けていないと見ていられないほどだ。

「で、射精るー!」

びゅるるるるびゅるるるるつ……びゅるるるびゅるるるつ……

「い、いぐうううう♡♡♡」

椅子に拘束されているから思うように暴れられない相模は最高に見ていて楽しい。馬鹿な女とは前々から思っていたけど、さらに馬鹿に拍車がかかって来た。

処女でここまで淫乱になるとは思いもしなかった。もつと乱れた姿が見たい。

「出る……」

じよろろろろつ……

俺は相模の尻穴に挿入したまま小便を出した。性処理肉便器に成り下がった相模にはお似合いの役割だ。こいつも本望だろうさ。

「おひりっ♡やへるっ♡♡」

「酷い顔だな……相模、もつとアナルをいじめてやろうか?」

「はひい♡もつとおひりをいじへてくらしやい♡♡」

「うわあ……もつと酷い顔になったな」

相模の顔は涙に鼻水、涎と垂らしまくっていた。それに愛液もドバドバと溢れていた。頭が馬鹿になったと思っただら身体までも馬鹿になったようだ。

俺は相模の尻穴からチンコを抜いた。すると俺がさつき射精した精子と小便が混ざったものが逆流してきた。

尻穴を閉じられなくなっているから全部出すだろう。それにしてもあの傲慢な相模がここまで墮ちると笑える。

「相模。お前のアナルで汚くなった俺のチンコを綺麗にしろ」

「は、はひい♡はむっ……じゅぽっ……じゅるっ……」

相模の顔に俺がチンコを近づけると相模は綺麗に舌で舐めてきた。男のチンコを……それも自分の尻穴で汚れたものをよくここまで舐めれるものだ。

相模が壊れて結構満足しているけど、まだまだ尻穴をいじめてやる。そして最後は知らない男に売って、孕ませてやるか。

「で、射精るー！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんっ……うぐっ……」

もう金玉の精子は全部射精したと思ったけど、まだあったな。さて、次は何をしようかな？

俺は相模を地下に残して上に戻った。

やはりさがみんを出演させるのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺のクラスメイトで葉山グループに次ぐ相模グループが葉山グループに吸収されてからは相模の事なんて、誰も話そうとはしなくなった。

雪ノ下もだ。どうやら聞き込みをしている時に平塚先生に見つかりこつ酷く怒られたようだ。警察の真似事はするなど。

そこで漸く雪ノ下は相模に関しての調査を止めた。本人は不完全燃焼でイライラしていた。でもこれで一安心だろう。

雪ノ下が色々と嗅ぎ回っていたから相模を外に出し難かったからな。この間の配信を知り合いのAV監督に見せたら是非出演してくれないかと頼まれた。

今までは下手に相模を外へ連れ出せなかったが、それも心配なくなったからな。髪を長髪金髪にしてからな。

「やあ八幡君。久しぶりだね」

「どうも渡辺さん」

俺は目の前の中年のおじさんと握手をした。この人は渡辺さん。俺の爺さんの弟子だ。昔爺さんの下で助監督として働いていた。

今は監督として様々なジャンルのAVを世に出している。

「それでそちらが八幡君が調教した？」

「はい、そうです。挨拶をしろ」

「は、はい。アナルピッチの南です。ご主人様に肉便所にしてもらいました」

相模はそういういいながらコートの前を開けた。服はおろか下着も何も着てはいなかった。乳首とクリトリスには無線ローターがセロハンで付けられていた。そして尻穴にはアナルピースが入っている。

「凄いな！ここまで調教するの大変だっただろ？」

「それなりには……今日はこいつのオフアアしてくれてありがとうございませす」

「いいよ。最近はいいい娘がないものでね……困っていたんだよ」

「今日は思いっきり使って下さい。でも処女だけは残してください」

「もちろんだとも！師匠のお孫さんの肉便器だからね。大切に使用せてもらおうよ」

渡辺さんは相模をスタジオのセットへと移動させた。そこにはすでに全裸の男性が三人ほど待機していた。

渡辺さんの所のAV男優だ。今回はこの人たちか。正直、俺以外が相模を滅茶苦茶にするのを見るのは嫌だけど、AVデビューする訳にはいかないからな。

それに俺は素人だ。ここはプロに任せの方がいいだろう。

「さて、みんな。こちらが今回の相手の南ちゃんだ。今回はマンコへの挿入はなしでアナルだけね。口とかも遠慮なく使っていていいから」

「分かりました！」

「結構いい身体している」

「胸もそこそこだね。17歳ならしょうがないか」

皆さん、相模の身体をジロジロと品定めしているように見えているな。流石に目の前の少女が少し前にニュースになった相模南とは知らないようだ。

知っていたとしても警察に連絡はしないだろう。だって、これから相模に対して酷い事をするのだから。

これから相模がまったく知らない男たちに滅茶苦茶にされるのか。ヤバい、興奮して勃起した。

「それにしてもお嬢ちゃん、全裸コートにローターとかエロいね？」

「め、命令ですから……」

「命令でここまでする娘は始めてみたよ」

「命令を聞けば気持ちよくなれるから……」

「だから知りもしない男たちに抱かれるの？」

「は、はい♡」

男たちが相模の身体を触り始めた。初めは乳首やりクリトリスを摘んだりした。ちないみに相模は今、アイマスクをしている。

これは渡辺さんの拘りだ。目線モザイクは録った後にする処理なんだけど、渡辺さんはアイマスクでしている。

これならモザイク代わりになるし、女の感度も上がる。

「みなみちゃんのカリと可愛いね」

「胸は少し物足りないけど、感度がいいよ」

「スタイルもスレンダーで綺麗だよ」

「ひいひいひい♡♡♡」

相模はおっさんたちに身体をいよいよにいられて、絶頂したようだ。第三者として見てみると相模って凄くエロいんだな。

それもおっさんたちのテクがいいのか？ここは見させてもらって勉強しよう。

「それにしても処女なのにアナルをいじられて淫乱になったの？」

「それでアナルにアナルピーズを入れているの？」

「引っ張ってみるか」

「おおおおお♡♡♡」

相模はここに来る前に挿入したアナルピーズを引っ張られて軽く何度も絶頂した。感度が上がっているからか？

人間は五感の一つが使えないと他の四つがそれを補おうとするから脳への伝達情報が増えるんだよな。

「凄いやみなみちゃん。アナルピーズを引っ張ったけど、力を入れていないとすぐにアナルへ引き込まれるー」

「その度にマンコから発情したメスの匂いが立ち込めるよ！」

「君、AVに出演するために産まれて来たようなものだね！」

「お、おひりっ♡♡い、いぐうううう♡♡♡」

「しゃああああ……」

相模は失禁した。身体を痙攣させて、絶頂したよ。すると一人のおっさんが相模の小便を飲み始めた。うわあ……実際に飲み人なんているんだな。

「17歳の聖水は美味しいよ。みなみちゃん」

「若い娘から出る体液なんて全部、美味しいに決まっていますよ」

「そうですね！飲めば明日への活力になりますよ！」

「ああああ♡……」

おっさんたちは相模の小便を聖水とか言っているよ。俺は小便を飲むほどマニアックではない。脱力した相模を二人のおっさんが支

えて、残りのおっさんが寝そべった。

「それじゃみなみちゃんのアナルマンコをおじさんが広げてあげるからね！」

「それじゃ行くぞ」

「ゆっくりな……」

「ずずずずず……」

「お、おひりっ♡♡ひろがりゆうっ♡♡」

相模の尻穴がおっさんのチンコで抉じ開けられている。あのおっさんのチンコ、中々の大きさだな。俺はもう少し大きいけどな。

「みなみちゃんのアナルマンコ、すごく締め付けてくるね！おじさんのチンコが千切れそうだよ！」

「こっちのチンコを忘れずにね」

「こっちは手で扱いてよ！」

「んんっ♡♡れろっ……じゅぽっ」

相模は尻穴と口、手とおっさんたちのチンコを扱いていた。今までは俺一人だけだったからな。あんなプレイは出来なかったからな。

「みなみちゃん！そろそろおじさん射精るよ！」

「こっちも……！」

「こちらもです！」

「んんっ♡♡い、いぐうううう♡♡♡♡」

びゅるるるるるるるるるるる……

三人同時の射精に相模の絶頂。AV男優の人たちタイミング完璧だな。射精なんて複数で同時になって出来ないだろ。

尻穴に挿入していたおっさんがチンコを抜くとそこから精子が逆流してきた。おっさんだから量は俺より少ないくらいだろうか？

でも三人が足せばかなりの量になるな。相模が精子まみれになっている。

「みなみちゃん。凄かったよ、おじさん興奮してしまったよ」

「私ですよ。やはり若い娘とするのは背徳感がありますな」

「ですよ。まるで自分の娘を犯しているようでしたよ」

おっさんたちは余韻に浸っている相模を見て、色々と言っている

な。しかも既婚者で子持ちかよ!?!もしかしたら性欲発散と小遣い稼
ぎか?

「ほらほらみなみちゃん。寝ていないでフェラをしないと」

「今度は私がアナルへ挿入させてもらいますね」

「私は最後でいいですよ。今度は口を使わせてもらいますから」

「ま、待って♡い、イッたばかりで、敏感だから♡♡」

おっさんたちは相模のいい分なんてお構いなしに相模を立たせた。
相模は顔が絶頂のし過ぎでニヤけていた。

そして俺の方を見てきたので俺は笑って返した。相模は身震いし
てからおっさんのチンコを凝視した。マンコからは愛液がドバドバ
と溢れていた。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひいひいひい♡♡お、おひりひろがるっ♡♡」

「みなみちゃんのアナルがどんどん広がるね」

「これは出している糞よりも広がっているんじゃないか?」

「やつぱりみなみちゃんはAVに出るために産まれてきたんだよ」

おっさんたちは相模を玩んでいる。見ていて慣れていると思う。
生と映像で見比べて相模がどれだけエロいか確かめてみるか。

それにしても相模が絶頂して余韻に浸っているのを見る度にイラ
ついてくる。俺のオモチャである相模が他人にいいようにされるの
が嫌なのか?

それもあるが、相模が気持ちいい表情をしているのも気に入らな
い。相模の事を嫌っているけど、同時に気に入っていたのかと思う。

「みなみちゃん。ほらカメラに今の感想を言おうか」

「そうそう。アナルを開発されて、どんな事を思っただんだい?」

「エロいみなみちゃんはきつとすごい事を言うんだろうね」

「わ、わたしいは……おチンチンでいっぱいいきもちよくうなりましゅ
たあ♡♡おひりはひらひたままとじましえん♡♡」

相模はアへ顔でカメラへにピースをしていた。俺はその顔を見る
とムラムラしてきた。帰ったら相模の処女を奪って孕ませよう。

そしてポテ腹になっても犯し続けて最後はどこか変態の所にも

売ってやるか。

「みなみちゃん。最後の仕上げだよ」

「ほらおじさんたちが足を持ってあげるからね」

「アナルは私が広げてあげるよ」

「ああああ……」

二人のおっさんが相模の足を持ち上げてアナルを上に向けた。そして最後の一人がアナルを広げた。

おっさんたちがチンコを抜きだした。

「で、射精するよ！最後の一滴まで！」

「私もこれで最後だ！」

「いくよ！みなみちゃん！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「ひいひいひい♡♡おひりあつしゅい♡♡」

おっさんたちは広げた相模のアナルへ射精した。まさに肉便器と言ったところだな。ここまでくると相模が哀れに思えてくる。

拉致しておいてなんだけど。でもいいか、幸せそうな顔をしているんだから。

「いや〜流石は八幡君だよ。最近はこれほどの素材は中々いないからね」

「そうですか。喜んでもらえて良かったです」

「DVDになったら送るから楽しみにしておいてよ」

「はい。俺は帰ってあいつを犯したいんで」

俺は伸びている相模を起こしてコートを着させてからアパートへと帰った。そして数週間後、相模の出演したAVが発売された。

顔はある程度隠してあったけど、知り合いが見ればバレるかもしれない。さて、そろそろ相模の処女を奪うかな。

ここまで綺麗にとっておいたからな。妊娠してもたくさん遊んでやるからな、相模。

やはりさがみんを犯し続けるのはまちがっている。

比企谷八幡だ。相模南が行方不明になって三ヶ月が経過した。最初こそ騒がれていたけど、一ヶ月程度でそれも収まった。

人間はどこまで古いものに固執しないからな。新しい話題で出れば古い話題は消えるのは世の常だ。そもそも相模の存在感はそこまで大きくないのが要因の一つだろう。

葉山グループに入った相模の元取り巻きや雪ノ下も相模の話はしない。相模の元取り巻きはともかく相模の事を調査をしていた雪ノ下も話さなくなった。

まあ、警察の真似事で怒られたのが相当効いたのだろう。それと相模の出演したAVだけど結構な人気があるようだ。

監督の渡辺さんからまた出演の依頼があったけど、断った。その代わりにアパートの住人を出演させた。

「それにしてもすっかり変わったな……」

「はむっ……れろっ……じゅぱっ……じゅるるるっ♡♡何がですか？」

「いや何でもない。続きをしろ」

「はいっ♡じゅるるるるっ♡♡」

三ヶ月で相模は俺のチンコを笑顔でフェラ出来るまでになった。もう少し反抗的だったら面白かったのに。最初、キツく調教し過ぎたかな？

いいように性格が変化したから面白かったけど、そろそろ飽きてきたんだよな。今日までにエロ動画を結構な数、撮ったからな。

いい稼ぎなってくれた。最後に大切にとっておいた処女膜を破って孕ませてみるかな。同人誌で妊婦を犯すシーンとかあるから実際にやってみたいんだよな。

「で、射精るー!」

びゅるるるるるるびゅるるるるっ……

「あんっ♡……あはっ♡ザーメン、たくさんありがとうございますっ♡♡んんっ♡♡」

相模は俺が射精した精子を残さず口に運んだ。よく嫌な顔一つせずに精子を飲めるものだ。味覚までも変化したのか？

今の相模はまるで主人から指示を待つ犬だ。どこまでも忠実で可愛くある。

「相模、今日が排卵日だったか？」

「はい！そうです。覚えてくれていたんですか？」

「ああ。今日、処女を俺に奪わせろ」

「ほ、本当ですか!?!はい！奪ってください。私の全てはご主人様のものです！」

怖いな。人間って、調教でここまで変わるものなのか？でもいいか。どうせ、捨てるんだから。早く相模を滅茶苦茶にして遊びたい。

「相模、処女を見せろ」

「はい！どうぞ、ご覧ください！」

「綺麗なピンク色だな？」

「はい！毎日、綺麗にしていますので！マン毛もちゃんと剃っています！」

「そうかそうか……」

相模は俺に以前、言われたマン毛処理をちゃんとしていたようだ。相模のマンコは産まれたての赤ん坊のように綺麗になっていた。

相模は仰向けでマンコを広げて見せてきた。処女膜もちゃんとある。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うぎっ?!いい、痛い……」

「すごい締め付けた。動くぞ……ふん！」

「ひいひい!?!」

相模の処女膜を破った。血を流して涙目になっていた。調教しても痛みを我慢出来ないようだ。それにしても相模のマンコは俺のチンコをがっちり掴まえて放す気がないようだ。

「相模。どうだ？俺のチンコは」

「はいいいひいひい♡♡ご主人様の極太チンコでわ、私の処女膜を破っていただいてっ♡♡とっても嬉しいですううう♡♡」

「このまま精子を子宮の一番奥に射精しても問題ないよな？」

「はiiiiiiii♡♡わ、私の全てはご主人様のものですう♡♡」

ここまで調教するのは苦労した。最初にある程度、壊しておいたからだろうな。だけど、もつともつと壊れるまで遊んでやるよ、相模。

文化祭でお前のした事はこんなものでは許されないぞ。もつと壊して最後は捨ててやるよ。

「で、射精る!!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡お、おくにつ♡あしゅいつ♡ごしゅひんしゃまのこだね、たくしゃんっ♡は、はらむううう♡♡」

「まったくエロくなつたものだな。肉便器の分際で」

「はiiiiiiii♡♡わしゃひはにくへんきれしゅっ♡♡」

膣内射精してバカになったか？由比ヶ浜ほどバカではなかったけど、今では由比ヶ浜以上のバカになったようだ。

男のチンコをすんなり受け入れて孕むような女に成り下がってしまった。哀れだな相模。お前が真面目に実行委員をしていればこんな事にはならなかったのに。

「相模。お前はこうしてこうなったのか理解しているか？」

「はiiiiiiii♡♡わたひがごしゅひんしゃまをおほらへたらでふっ♡

♡」

「そうだ、ぞー！」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい♡♡おちんちんがっ♡おまんこのおくにつ♡」

相模は子宮の奥を突かれたが気持ちいいらしい。腰を浮かせて、涙に鼻水、涎を溢れさせていた。このアホ顔を見られたのは気分がいい。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひiiiiiiii♡♡いくっ♡いくっ♡またいくうううう♡♡」

「肉便所の癖にいい締め付けだぞ！」

「はiiiiiiii♡♡」

相模は軽い絶頂を何回もしているようだった。そろそろ一番奥に射精するかな。俺は相模を抱きしめた。

そして腰を強引に上下させた。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひiiiiiiii♡♡いくいくいく♡♡い、いぐうううう♡♡♡♡」

「いいぞ肉便器!孕め!お前は孕む以外価値がない女なんだからな!」

「はiiiiiiii♡♡♡」

「で、射精るー!」

びゆるるるるびゆるるるるつ……びゆるるるるびゆるるるるつ

……

「ああああ♡♡おくにごしゅじんしゃまのこだねがつ♡♡はらむうう♡♡♡」

相模の子宮の一番奥に射精してやったよ。相模はビクビクと痙攣しているようだった。これだけ射精したから孕んでいるだろう。

念には念を入れておかないと。俺は薬を取り出して相模の飲ませた。

「ごしゅひんしゃま……これなに?」

「これは排卵薬だ。これで確実に孕むぞ」

「はらみましゅっ♡♡♡」

「しつかりと孕めよ?」

「はiiiiiiii♡♡ひゃんとはらみましゅっ♡♡♡」

本当にバカな顔になってるな。これを見ているとゾクゾクしてくる。もつと壊したい。人間として完全に機能しない状態を見たい。

もう誰も気にしない人間だ。とことん壊してやるよ相模。

「ほら相模。チンコが汚くなった。どうするんだ?」

「は、はい……はむっ……れろっ……じゆるるるるつ……あはっ♡♡」

相模は俺がチンコを顔に近づけたら自分から口に咥えた。そして

舌を使ってチンコに付いている精子を綺麗に舐め取った。

俺は相模の顔を掴んでチンコを喉奥まで押し込んだ。

「で、出る……」

じよろろろろっ……

チンコを咥えた相模の口に俺の小便を出した。肉便器だからな、これは役割を果たしているから本望だろうさ。

今の相模の顔を昔の相模に見せてやりたい。きつと発狂する事、間違いないだろう。男のチンコを笑顔でフェラして精子を顔に掛けても何も言わずに口に持っていく。誰も想像も出来なかつた相模の姿だ。

「飲んでいいぞ」

「うぐっ……飲みました！」

「いいぞ。立って尻をこっちに向ける」

「はいっ♡」

相模は壁に手を付いて尻をこっちに向けた。俺は相模の手首を掴んでマンコへチンコを挿入した。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひひひい♡♡お、おくまでくるうううう♡♡」

相模のマンコはさつきより強く締め付けてくる。相模はまた絶頂したようだ。挿入しただけで。どんだけ敏感マンコなんだ？

これはもつといじめないと駄目だな。俺は腰を動かした。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「いくいくいくっ♡♡い、いぐうううう♡♡」

「また射精るぞー!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「ひひひひひひ♡♡……しえいし、いっぱいっ♡♡にんしゅんしゅるっ♡♡」

「この淫乱肉便器が!どんだけ搾り取るつもりだ?」

相模のマンコは俺のチンコから精子を根こそぎ搾り取ろうと蠢い

ている。さつきまで処女だったのに。もう自分から孕もうと精子を強請るとは思わなかったな。

この調子ならすぐに孕むだろう。産まれてくる子供は可愛そうだな。母親がこんな淫乱な肉便器だなんてな。

「いいか相模。子供が出来てもお前が育てるんだぞ」

「はいいいいい……わらしがそらへましゅっ♡♡」

「ならいい。俺は由比ヶ浜と付き合うから」

先日俺は由比ヶ浜に告白された。あいつの胸は中々の大きさだからな。パイズリとか楽しめそうだ。あいつも相模のように調教して二度と罵倒が出来ないようにするか。

相模の処女を奪ってから数カ月後、相模のお腹は大きく膨らんでいた。俺の子供を妊娠したのだ。安定期までフェラだけだったが、今日から解禁だ。

「相模。この数ヶ月、長かったぞ」

「はいっ♡私もご主人様に犯してもらえなくて寂しかったです!」

「お腹、ずいぶん大きくなったな」

「はい。ご主人様の子供です」

「大きくなったらお前同様に淫乱の肉便器にしてやるかな」

「はい!お腹の子もきつと喜びますっ♡」

相模は大きくなったお腹を触りながら笑顔でそう答えた。相模ももうすぐ母親になる。俺は認知するつもりはない。

俺の彼女は由比ヶ浜だからだ。あいつの調教も少しずつ進んでいる。雪ノ下に勘ぐられるのが一番問題だからな。

もう少しで本格的な調教を始められる。大学に入学すれば合う時間が取れないからな。じつくりとするつもりだ。

「さて、相模。今日からまた犯してやるぞ」

「はいーご主人様の精子を産まれる前のこの子に恵んでください!」

「ああ、いいぞ」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「き、きたあああ♡♡♡ごしゅじんしゃまのぐくぶとおちんちん♡」

相模はチンコを挿入しただけで絶頂したよ。相変わらずの淫乱ぶりだな。産まれてくる子供もこんな淫乱だと可哀想に思える。

だけど、母親が過去に犯した罪が原因だ。精々、母親の間違った選択を恨んでくれよ。

「さあ、相模……これからずっと犯してやるよ」

「はいっ♡ご主人様っ♡♡」

今日も俺は相模を犯し続けた。

雪ノ下雪乃

やはりゆきのんを犯すのはまちがっている。

俺、比企谷八幡は今、女子を一人押し倒している。自分でも怒りを抑えられなかった。人に馬鹿にされてここまでするなんて自分でも驚きだ。

そもそも俺がこうして女子を押し倒した原因は平塚静と言う独身教師の所為だ。いくら現国の作文が気に入らなかつただけで生徒を勝手に部活に入部させていいのだろうか？

しかも年齢の事を指摘すると腹を殴ってきた。生徒に暴力とか今なら一発でクビにする事が出来るだろう。

殴った瞬間、動画に撮っておけば良かった。まあ、今は俺が女子を押し倒している状況をなんとかしないと。

これを誰かに見られたら少年院送りだ。いや、俺が押し倒して女子が喋ったらそれで終わりだ。

それにしてもこの女子は力がまったく無いんだな。どこまで非力なんだ？にしては眼光が鋭い。口を抑えている手を緩めると叫ばれる。

それだけは絶対に阻止しないと。俺は改めて押し倒している女子、雪ノ下雪乃を見た。成績優秀で美人で男子からは何度も告白された事があるとか。

でもその全てを毒舌で断ったら2年になってから告白する勇者は現れる事は無かつた。告白した者で精神的に病んだ者が出たらしい。どんだけ毒舌なんだ!?

「んんんっ!!」

「悪いが喋らないでくれー!」

「んんんっ!!」

雪ノ下が俺を睨み付けて何かを言っているようだけど、口を塞いでいるので何を言っているのかまったく分からない。

暴れているようだけど、これならまだ小学生の方が強いんじゃない

か？それよりもこの状況を何とかしないと。

もし平塚先生がまた戻ってきたら確実にアウトだ。それまでに何か案を考えないと。雪ノ下の事を黙らせるナイスなアイデアは無いか！

いつその事、ここで犯して写真に撮って脅すのは？いやいやどうな同人誌な展開だ！そんなのはフィクションの中だけだ！

ここまででしたんだ。いつその事、とことんやってみるか。

「んんっ♡」

「え？」

「……………」

俺が雪ノ下のマンコを下着越しで触ると雪ノ下が可愛い悲鳴を出した。いやいや、あの雪ノ下が。成績優秀の雪ノ下が触られたくらいで可愛い声を出すわけないよな。

「んんっ♡♡んんっ♡」

「…………雪ノ下。お前、もしかして感じているのか？」

「……………」

雪ノ下は顔を赤くして視線を逸らした。間違いない。雪ノ下はこの状況で感じているんだ。男子に腹に乗られて、口を押さえながらマンコを触られて感じているんだ。

なんだか、俺まで興奮してきた。もし直接接触したらどんな反応が見られるか興味がる。俺は雪ノ下のパンツを剥ぎ取った。

「あ、あなた！自分が何をしているのか分かっていないの!？」

「あれだけ馬鹿にされて、黙っていると思っっているのか？喧嘩は相手を見て、選べ雪ノ下」

「や、止めなさい!!」

「遅いんだよ!!」

くちや……

「あっ♡」

「やっぱり感じているんじゃないか！」

「う、嘘よ！」

雪ノ下のマンコは大洪水状態になっていた。押さえつけられて、マ

ンコを触らただけでこんだけ濡れるんだ。

きつとそう言った願望があるんだろうな。俺も覚悟を決めるか。ここまで来たんだ。例え、少年院に行く事になっても別に構わない。

俺はズボンのチャックを下ろして、勃起したチンコを出した。

「ひい!?や、止めなさい!さっきの事なら謝るから!!」

「それで、はいわかりました。とても言うと思ったか?口は災いの元と言うだろう?自分が言った事はちゃんと責任を取れよ」

「い、いやああああ!!」

「ちよ!?黙れ!!」

「んんっ!?んんっ!!」

雪ノ下が大きな声を出すものだから手で咄嗟に押さえた。だけど、このままだと挿入出来ないな。雪ノ下は暴れているけど、力が弱いのか全然拘束を解けないでいた。

むしろ暴れて体力が尽きたのか、大人しくなった。どれだけ体力がないんだ!?でも俺にとっては好都合だった。この隙に挿入してしまおう。

「ずずずずずつ……」

「い、痛い!?それを早く抜きなさい!!」

「黙っている。んっ……」

「んんっ!!」

あまりにも口が五月蠅かったのでキスをして黙らせた。まさかファーストキスが雪ノ下でしかもレイプしている最中だとは思ってもしかなかった。

ここまで来たんだ。最後までしてやるさ。俺はチンコをマンコの奥へと進めた。

「ずずずずずつ……ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「かはっ!!」

「お、奥まで来た……」

「は、はひい♡♡」

「雪ノ下、お前……喜んでるんだ?」

雪ノ下の顔はレイプされているのに喜んでいた。これで喜ぶとか

余程の変態だな。でも俺も遠慮する必要はないようだな。

「そ、そんな訳あるわけないわ!」

「でもマンコの締め付けが強くなったぞ?」

「そ、それは!あなたが汚いものを入れているからよ!」

雪ノ下はそっぽを向いて、否定している。だけど、その間もマンコは締め付けを強めていた。もっと雪ノ下のマンコを楽しんでいたいけど、そろそろ限界だ。

「で、射精る……!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ

……

「え?う、嘘!?まさか!膣内に射精したの!?!」

「おおお……雪ノ下のマンコ、最高に気持ちいいぞ」

「き、気持ち悪い!早く抜きなさい!で、でないと赤ちゃんか!!」

雪ノ下は必死になって俺を退かそうとしているけど、力が貧弱だから男の俺を押しつけられないでいる。どんだけ弱いんだよ?

俺は一旦、雪ノ下からチンコを抜いた。雪ノ下は鞆へと這いずつていた。どうやら腰が抜けたようだ。

必死に鞆に手を伸ばそうとしていた。スマホで警察にでも連絡するのだろう。俺は雪ノ下の腰を捕まえた。

「は、離しなさい!この犯罪者!」

「まだまだ満足していないんだ……」

「ま、待ちなさい!!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひい♡♡お、奥に来ているっ♡」

「ぴったり奥まで挿入した」

バックからの方が奥まで挿入する事が出来た。俺のチンコの先が子宮口に触った。バックから犯している所為か、さつきよりも雪ノ下のマンコの締め付けが強くなった気がする。

「雪ノ下。そんなに締め付けるとまた射精るぞ!」

「また射精するなんて、駄目よ!早く抜きなさい!!」

「それじゃ抜くぞ……」

ずずずずずつ……ぱんんつ!!

「うひい♡♡う、嘘つき!!」

抜くとは言ったけど、完全にはとは言っていない。だから途中まで抜いて、また挿入したまでだ。どこぞの詐欺師みたいないい訳だな。

でも我慢出来ないんだから仕方ないだろ！性格がキツイ雪ノ下のマンコがここまでいいとは思ひもなかった。腰が言う事を聞かないんだ！

ずずずずずつ……ぱんんつ!!ずずずずずつ……ぱんんつ!!ずずずずずつ……ぱんんつ!!

「あんっ♡んんっ♡あっ♡♡や、やめなさい！」

「そんなエロい声で言われても説得力ないぞ？」

「こ、これはあなたが腰を動かしているからっ♡♡」

「もう止まらないんだ！」

俺は雪ノ下の背中にぴったりと胸を貼り付けた。右手でクリトリスと左手で乳首をそれぞれ親指と人差し指でコリコリと潰すように触った。

その度にマンコは嬉しそうにキュウキュウと締め付けてくる。さらに左耳を舐めた。それは丁寧な汚れを取るように。

「んんっ♡♡や、やめな……さいつ♡♡あっ♡♡」

「こんな気持ちいい事、止められる訳ないだろ！」

「だ、だめなのっ♡♡と、とんじやうっ♡♡」

「雪ノ下！俺も限界だ!!で、射精る！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「うひいいいいい♡♡♡あ、あついつ♡♡」

「で、射精る……これ、凄い……」

雪ノ下への射精はもの凄く気持ちよかった。童貞もまさかこんな形で卒業出来るとは思わなかった。これで思い残す事はないだろう。

「雪ノ下？」

「あっ♡んんっ♡♡」

雪ノ下は完全に延びていた。顔は涎と涙と鼻水でグチャグチャになって、服は肌蹴て、マンコからは俺が先ほどから射精した精子が溢れていた。

完全なレイプ現場が完成していた。そこで俺は冷静になった。賢者タイムと言うやつだ。

平塚先生が来なかったのが、幸運で誰が来ても可笑しくない場所で俺はなんて事をしてしまったんだ!?

俺は急いで雪ノ下を綺麗にした。服を整えて、学校を後にした。明日、俺は捕まるんだろうな。

そんな事を考えながら家に帰った。

正直、気が重い。昨日は一睡も出来なかった。いつ警察が来るのかビクビクと震えていた。だけど、朝になってもパトカーの一台も家には来なかった。

学校を休みたかったけど、小町に強引に起こされて行く羽目になった。学校に着いても俺は周りを警戒していた。

どうして雪ノ下は誰にも言わなかったんだ?

「比企谷。そっちは部室ではないぞ」

「ひ、平塚先生!?!」

「どうした? そんなに驚いて……」

「い、いえ……なんでもありません」

「そうか? なら部室へ行け」

平塚先生の態度を見て、さらに訳が分からなかった。平塚先生は奉仕部の顧問なのに雪ノ下は平塚先生にすら言っていないのか?

俺は重い足取りで奉仕部の部室に向かった。きつと誰もいないだろうと思って。しかし俺の予想とは反対に雪ノ下が昨日と同じように窓側で本を読んでいた。

「……そんな所で立っていないで入ってきたらどうかしら?」

「いや、お前……どうして誰にも言っていないんだよ」

「別にその事を誰に言おうと私の勝手だけと思うのだけど?」

「いやいや……俺はお前をレイプしたんだぞ!?俺を警察に言えば、俺はもう二度と会う事はなかったんだぞ!!」

雪ノ下は昨日と同じように澄ました顔をしていた。昨日、あれだけ犯したのに。けろっとしている。

そもそもレイプした相手を目の前にどうしてそこまで冷静にいられるんだ!?

「私にも悪い部分があったから……」

「だからって、誰にも言わないのは可笑しいだろ」

「そうね。誰にも言わなかったのは理由があるは……」

「なんだよ。その理由って……?」

雪ノ下が椅子から立ち上がってこちらに近づいてきた。何か凄みを感じる。ヤバイ、今すぐにもここから逃げ出したい。

そんな事を思っていると雪ノ下は俺の目の前まで来ていた。

「比企谷君。あなた、私のセフレになりなさい」

「……………はあ!?!」

やはりゆきのんのセフレになるのはまちがっている。

うつす、比企谷八幡だ。俺は今、昨日レイプした相手である雪ノ下雪乃からとんでもない事を言われた。

きつとこれは幻聴に違いない。あの成績優秀で容姿端麗の雪ノ下がそんな事を言う訳がない。うん、きつと間違いだ。

「聞いているのかしら?」

「す、済まない。もう一度言ってくれるか?」

「だから私のセフレになりなさいと言っているのよ」

「可笑しいだろ!?!」

思わず叫んでしまった。やはり聞き間違いではなかった。雪ノ下の口から『セフレ』なんて単語を聞くなんて。待てよ、もしかしたら雪ノ下は意味を分かっているのかもしれない。それに賭けるしかない!

「雪ノ下……お前、意味を分かっているのか?」

「もちろんよ。セックスフレンドの略称でしょ?」

「だったら可笑しいだろ。レイプした相手をセフレにするとかアホか!?!」

「あなた、さつきから叫んでばかりね。紅茶があるけど、飲むかしら?」

雪ノ下は淡々と紅茶の準備をしていた。どうかしている。何をどうしたらそんなに冷静でいられるんだ?

俺は落ち着くために紅茶を飲む事にした。

「美味しいな……」

「そう……なら良かったわ」

「それで聞かせてくれないか?どうしてセフレの話になるのか?」

「そうね。昨日、私はあなたに犯されたわ……その時、恐怖より快楽が勝っていた。最初は誰かに言おうとしたわ。でもあなたとの行為を思い出すと股が熱くなるのを感じるの」

雪ノ下は子宮辺りを撫でながらうつとり顔で俺にそう言ってきた。これはヤバい奴だとすぐに分かる。

「もしあなたを警察に言ったら二度とあの快楽を得られないんじゃないかないかと思つて……あの快楽を味わえるなら私はあなたにレイプされた事を誰にも言わない事にしたのよ」

「うん、雪ノ下がヤバい奴だと言う事が分かった。ちなみに断る事は？」

「あなたに最初から拒否権がある訳ないでしょ？断ったらあなたを監禁しても私はあの快楽を手に入れるわ」

「怖いわ!!……分かったよ、俺としても黙ってくれるなら何でもする」
「そう。ならいいわ。まずは……んっ」

「んんっ!？」

いきなり雪ノ下からキスされた。紅茶の味がした唇だった。ヤバい、キスしたら興奮してきた。俺のムスコはもう勃起してきた。

雪ノ下もそれが分かっているのか、俺のムスコを撫でてくる。

「比企谷君はわかり易いわ」

「単純で悪かったな!」

「そんな事は言っていないわ。お互いにメリットがある事でしょ?」

「そうだけど……またここでするのか?」

「ええ。もちろんよ」

雪ノ下の唇が再び俺の唇に近づいてきた。その時だった。部室の扉が開いた。俺と雪ノ下は一瞬で距離を取った。危なかった、入ってきたのは平塚先生か?

「あの……こつて、奉仕部であつていますか?」

「ええ、ここは奉仕部よ」

「平塚先生にここに行くように言われたんですけど……え?ヒツキー!？」

平塚先生かと思つたら全然知らない女子生徒だった。胸が大きいな。でもバカっぽい見た目だな。多分だけど、ビッチだな。

「それで用件は何かしら?」

「えつと……く、クツキーを作りたいの!」

何を言うかと思っただらクツキーって、ネットを見れば簡単に作り方くらい出てくるだろうに。何を言っているんだ？こいつは。

俺と雪ノ下は調理室の片づけを終えて、部屋に戻ってきた。それにしてもムカつく。あのビッチ!!

「自分だけ片づけをしないで帰るとか……あのビッチ!」

「そうね。せめて自分が使った物は片付けて欲しかったわ。それとあまり人を見た目で判断するものではないわ」

「まあ、そうだけど……」

「それより続きをするわよ。んっ」

そう言っただけで雪ノ下は俺の顔を手で固定してキスをしてきた。こいつには羞恥心がないのか!?

「由比ヶ浜さんに邪魔されて、もう我慢出来ないの……ほら」

「お、おい……雪ノ下。どうして下着を……」

「昼間、ずっと濡れて気持ち悪くなったから脱いだの……」

雪ノ下ははパンツを履いていなかった。そして俺の手をマンコに触れさせた。そこはもう大洪水になっていた。

愛液がネットリと糸になっていた。昼間、濡れていて脱いだって事は昼から放課後までずっとノーパンだったのか!?

「雪ノ下って意外に変態だったんだな……」

「そうだったのも全て、あなたの所為よ」

「お、おう……」

なんだかヤバイ女を今更ながらレイプしてしまったと思う。これ、人生詰んだな。

「比企谷君、ズボンを脱いでチンコを見せなさい」

「女子がチンコとか言うな!」

「今更な気がするのだけど?」

「それでもだ!」

俺はズボンを抜いで雪ノ下にチンコを見せた。なんだかんだ言っただけで俺、雪ノ下に従順になった気がする。

雪ノ下は俺のムスコを興味津々に触りまくった。そんなに乱暴にしないで!

「昨日はあれだけ硬く熱かったのに、今はグニヤグニヤで熱くもないわ」

「それは勃起していないから……」

「ならすぐに勃起させなさい」

「無茶を言うな。まあ、胸を見せてくれたら勃起するかもな」

「そう……ならこれでいいかしら?」

雪ノ下の行動力は俺の想像のはるか上を行っていた。マジで胸を見せてきたよ。それにしてもなんだか物足りない感じがするのは黙っていた方がいいな。

「もし私の胸を見て、貧乳だと思ったら沈めるわよ」

「どこに!? それにそんな事は思っていないから!」

雪ノ下は心が読めるエスパーか!? 余計な事は考えないようにしよう。でも女性の生の胸を改めて見るな。

雪ノ下の肌は白いし、形も悪くないんじゃないか? これから成長する事を考えれば将来有望かもしれない。

「その……乳首、舐めさせてくれないか?」

「本当にあなたはどうしようもない変態ね」

「お前にだけは言われたくない」

「はい。どうぞ」

雪ノ下は椅子に座りブラを取って、俺を手招きしてきた。俺はそれに吸い込まれるように動いた。そして雪ノ下の乳首を吸った。

それはまるで赤ん坊のように母乳を求めるように。

「ちゅぱっ……ちゅっ……」

「んんっ♡そんなに乳首を吸っても母乳は出てこないわよ? 大きな赤ん坊ね」

雪ノ下は俺の頭を撫でながら上から目線でそう言ってきた。なんだか、ムカつくから少し強めに乳首を噛んでやった。

「いたっ……」

「赤ん坊扱いするな」

「あら、ごめんさない。あまりにも乳首に吸い付くものだから」

「雪ノ下。机の上に座ってくれ」

「ええ、これでいいかしら？」

雪ノ下を俺は机の上に座らせた。そしてスカートの中に顔を突っ込んだ。雪ノ下のスカートの中はかなり蒸れていた。

俺は雪ノ下のマンコの膣内に舌を捻じ込んだ。

「れろっ……」

「あんっ♡舌が奥までっ♡♡ひい♡♡」

「れろっ……ちゅっ……」

「そ、そこダメっ♡♡」

雪ノ下は俺の舌舐め攻めに相当堪えているようだ。俺の頭を必死にマンコから剥がそうとしているけど、俺はそれ以上の力で吸い付き舐めまくった。

マンコからは愛液がドバドバと溢れてきている。舐めても舐めても綺麗にならないほどだ。

「雪ノ下……どんどん溢れてくるぞ」

「そ、それはあなたが舐めるから！」

「雪ノ下の愛液、美味しいぞ」

「そ、そんな訳ないでしょ！」

そんな訳あるんだけどな。美味しいのは本当の事だ。雪ノ下の愛液を飲んだから俺のチンコは爆発寸前だ。早く雪ノ下のマンコを犯したくて痛いくらい勃起している。

「ゆ、雪ノ下……もう限界なんだ。いいか？」

「ふふっ……いいわよ。さあ、来なさい」

「お、おう……」

俺は鞄からコンドームを取り出した。前は生でしてしまったからな。同じ過ちは犯さない。雪ノ下は犯すけど。

「雪ノ下。一応、聞けど……昨日って危険だった？」

「安心しないさい。危険なのは来週からよ」

「そ、そうか……」

あ、危なかった！もし来週、犯していたら確実に檻の中だっただろ

う。社会的に抹殺されてだ。

「それじゃ挿入するぞ?」

「ええ、いつでもいいわよ」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「うひい♡い、いきなり奥までっ♡♡」

「雪ノ下のマンコ、すげえ熱い!」

雪ノ下のマンコはゴム越しでももの凄く熱かった。いきなり奥まで挿入してしまった。チンコの先が子宮口に当たるのを感じる。

開いたり閉じたりして、まるで呼吸しているようだった。

「ひ、比企谷君っ♡♡」

「雪ノ下、お前エロいぞ?」

「そ、それはあなた……あんっ♡♡膣内で急につ♡大きくしないでちようだいっ♡♡」

「それは雪ノ下のマンコが気持ちいいから仕方ないだろ!」

俺がそう言うともマンコはさらに締め付けてきた。どうして!?褒めたからだろうか?俺は雪ノ下を引っ張って、俺の上に移動させた。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は椅子に座り、腰を動かした。その度に雪ノ下の長い黒髪は大いに乱れた。俺の顔にも何回か当たった。

その瞬間に雪ノ下の使っているシャンプーの残り香が鼻を刺激してくる。

「あんっ♡そ、そんなに激しいのはっ♡だ、だめっ♡♡」

「やっぱり雪ノ下、エロい!」

「んんっ!!」

「んっ!」

雪ノ下からのキスはとつても熱かった。熱が口から身体に流れ込んでくるようだった。そろそろ我慢も限界だ、射精する!!

「ゆ、雪ノ下!射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「ひいひいひい♡♡♡お、おくあついつ♡♡♡」

ゴム越しに雪ノ下の子宮が俺の精子で満たされるのを感じる。ゆっくりとチンコを抜くとゴムだけが残ってしまった。

どこかに引つかかったのか？ゴムを雪ノ下のマンコから引っこ抜くとたつぷりと精子が入ったゴムが出てきた。

「昨日、あれだけ射精したのにまだこれだけの量があるなんて、あなた大丈夫？」

「た、多分……こ、これはあれだ！雪ノ下のマンコがあまりにも気持ち良すぎたためだ！」

「ちよ、ちよつと！そんな事をいきなり言わないで！は、恥ずかしいじゃない……」

雪ノ下の照れた顔は可愛かった。その後、俺と雪ノ下は部屋を綺麗にしてから帰る事にした。その際に雪ノ下は俺が射精した後のゴムを袋に丁寧に入れて持ち帰った。

またしても弱みを握られた気がする。俺、雪ノ下のセフレとしてやっていけるだろうか？

やはりゆきのんと昼に一緒に居るのはまちがっている。

俺、比企谷八幡が二年に進級して可笑しな部活に入部させられて、雪ノ下を感情に任せてレイプしてまっつて一週間が経過した。

雪ノ下をレイプした事に関してはもの凄く反省している。本来なら警察に突き出されて可笑しくはなかったのが、雪ノ下が言わないでくれた。

しかし条件として俺は雪ノ下のセフレ——セックスフレンドになっってしまった。可笑しいどころの話ではない。

だけど、助かったのは本当だ。この一週間は色々あった。

まずエセビッチこと由比ヶ浜の襲来だ。数日経つが来る気配がないので料理は成功したか諦めたのかの二択だな。

俺はすっかり雪ノ下の紅茶のファンになってしまった。部活の時はいつも淹れてくれた物を飲んでいる。

それからお互いの本を交換して読んでいる。雪ノ下はすっかりラノベの嵌まって二日で速読してしまうほどだ。

それから俺は昼休憩は奉仕部で過ごす様になった。雪ノ下の噂は色々を又聞きしている。容姿端麗で成績優秀の完璧で誰か親しく過ごしている姿を見た事がない。

だが、そんなのはただの噂だった。話してみて、雪ノ下もボツチだった事が分かった。聞く所によると小学校の時に同級生からいじめを受けて、人を信じられなくなったらしい。重い話と思って深くは聞かなかった。

「うっす。雪ノ下」

「いらっしやい。比企谷君」

「ほらこないだの続巻」

「待っていたわ。前のは返すわね」

俺はラノベを雪ノ下に渡して、弁当を広げた。教室や人気の無い場所ですぐ食べるよりここで食べる方がいい。

雪ノ下は俺に紅茶を差し出してきた。それにしてもよく学校に茶葉を持ってこれたな。一度、銘柄が気になってネットで調べたら結構な高額な物だった。

それを俺はガバガバと飲んでいたんだよな。今でもガバガバと飲んでるんだけどな！

「比企谷君。一つ提案があるのだけど」

「提案？なんだよ、改まって……」

「二人っきりの時は……名前で呼び合わないかしら？その……セフレになったのに距離があるのはどうかと思うから」

「あ、ああ。そうだな。いいと思うぞ、うん」

「は、八幡君」

「ゆ、雪乃」

これ、恥ずかしい!!女子に名前を呼ばれるもの呼ぶのもこんなにも恥ずかしい事だったのか!?鏡を見なくても分かるくらい顔が真っ赤になっているな。

それは雪ノ下も同じで耳まで赤くして俺と視線を合わせないよう
に下を向いていた。

「雪乃……」

「何かしら？ひ、八幡君。んんっ!？」

「んっ」

俺は思わず雪乃にキスをしてしまっていた。あんな可愛い仕草をされてはムラムラしてしまう!雪乃はさつきよりも顔を赤くしていた。

「す、済まん!可愛かったからつい……」

「か、可愛い……!!と、当然でしょ!私とか、か、可愛いのだから!!」

「無理すんなよ」

「無理なんてしてないわ……」

ますます可愛い!!ヤバイ、ここでまた犯したい!!俺は雪ノ下に抱きついた。胸が物足りないけど、言ったら警察に突き出されそうだから止めておこう。

「……今、何か余計な事を考えていないかしら？」

「そ、そんな訳無いぞ！うん!!」

「……まあ、今は許してあげるわ」

「お、おう……」

なんだか知らないけど、許してもらえた。しかし雪乃には俺の考えが筒抜けなのか!?もしかしてエスパー!?

「それより当たっているわよ」

「そ、それは雪乃があまりにも可愛くて興奮してしまったんだ!」

「そ、そんな事を言っただけでも何も出ないわよ」

そう言いながら雪乃は服を脱ぎだした。やはり胸が物足りない。逆に由比ヶ浜は全ての栄養が胸に行っているんじゃないかと思う。

「あなたも早く脱いだら?昼休憩はもう半分もないのよ」

「ぬ、脱ぐの?」

「当たり前でしょ?制服に匂いが付いたら大変でしょ」

「確かに……」

イカ臭い匂いを服からさせていたら一発でバレるな。それにしても誰も来ないとは言え、学校で全裸になるのは抵抗があるな。

「あんっ♡」

「痛かったか?」

「違うわ……少し乱暴の方が」

「わ、分かった」

もしかして雪乃ってMなのか?普段はSぽいんだけど。隠れMって奴か!?普段Sぽいのは願望の裏返しなのか?

俺は雪乃のマンコに触ってみた。もう大洪水になっていた。どれだけ興奮しているんだ?

「雪乃。これは興奮し過ぎでは?」

「し、仕方ないじゃない!あなたの手の触り方が凄いから……」

「ならこれはどうだ?」

「んんっ♡あんっ♡♡そ、そんな一度にっ♡♡」

俺は雪乃のマンコと同時に乳首を少し強めに摘まんだ。雪乃は可愛い声を出すんだな。空いた乳首に俺は吸い付いた。

「本当に乳首が好きなのね?大きな赤ちやんっ♡」

「う、うるさい！」

「いいのよ。もつと乳首を攻めて」

「こ、この……!!」

余裕の雪乃はどこかムカつく。だけど、もつと攻めて主導権が誰にあるのか分からせてやるか。俺は雪乃の背中に回った。

「今度は後ろから？」

「覚悟しろ。これから凄い事になるぞ」

「んんっ!?ま、待って！」

「嫌だね」

俺は右手で雪乃のマンコを攻めて、左手で乳首を攻めて、首筋に吸い付いた。まるでマーキングするように。くつきり跡が残るまでキスしてやる。

「だ、駄目なの！首筋はっ!!」

「それはいい事を聞いた」

「あんっ♡♡んんっ♡♡だ、だめっ♡♡ひいひいひい♡♡♡♡」

俺の攻めに雪乃は潮を噴いた。足はガクガクになっていた。まるで産まれたての小鹿のようだ。倒れそうになったから抱えた。

昼休憩も時間がなくなってきたな。そろそろ俺のムスコが限界だ。

俺は財布からコンドームを取り出した。

念のため持ってきていて良かった。

「雪乃。窓に手を付いてくれ」

「は、八幡君。ここからだと外から見えてしまうわ」

「誰からに見られると思うと興奮するだろ？」

「変態」

そう俺を変態呼ばわりしている雪乃のマンコは手を窓に付いてからドバドバと愛液を溢れさせていた。どっちが変態だ！

「ずずずずっ……ぱんっ!!」

「うひい♡♡お、おくまでっ♡♡」

「し、締まるー！」

一気に雪乃のマンコの奥まで挿入してやった。雪乃のマンコは狭くて俺のチンコをギュウギュウと締め付けてくる。

腰が勝手に動いてしまう。それだけ雪乃のマンコが最高だという事だ。

「ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「あんっ♡んんっ♡そ、そんなに激しくなんてっ♡♡」

「嫌がっている割に嬉しそうだけど?」

「し、仕方ないじゃない!気持ちいいんだから……」

「雪乃。それ、逆に興奮するわ」

「うひひひひひ♡♡♡」

雪乃のデレ、最高です!ツンデレってこんなにも良いものだったのか!?でも最近デレしかないんだよな。

ツンは最初の一日くらいだった。雪乃、ツンをどこに置いてきたんだ!?!しかし初日の暴言はツンと言うより毒だったな。

だから俺がレイプしてしまったんだけど。それでもデレだけの雪乃も最高に良い!!

「雪乃。もつと動くぞ!」

「す、少し休ませて……」

「そんな事をしていたら昼休憩が終わるぞ」

「で、でも……」

「すぐ終わらせる」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「あんっ♡ひひひひ♡♡♡」

早くしなければ本当に昼休憩が終わってしまう。俺はペースを上げた。腰を素早く前後に動かして、雪乃を絶頂へと導いた。

他にも乳首やクリトリスを摘まんで刺激を送った。雪乃は摘まれるとマンコが嬉しがってギュウギュウと締め付ける。

なんとなくだけど、雪乃のツボが分かった気がする。突きながら他にも刺激すると嬉しがるのだ。

「ちゅっ……」

「ひい!?み、耳はだめっ♡」

「れろっ……」

「ひいひいひい♡♡♡」

やはり雪乃は他の場所も攻められると締めりがよくなる。こんなにもギチギチに締め付けられたら射精してしまう！

「ゆ、雪乃！もう射精るー！」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるびゆるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡」

俺の射精と同時に雪乃は絶頂に達したようだ。それにしても雪乃のマンコへの射精は最高に気持ちがいい。もちろんコンドームは装着しているので妊娠の心配はない。

雪乃のマンコから俺のチンコを抜くとコンドームだけがマンコに残ってしまった。雪乃は体力の限界か、床に倒れこんだ。雪乃は絶頂の余韻を楽しんでいた。

「雪乃。コンドームを抜くからこっち向いてくれ」

「ま、待って……このままでいいわ」

「いいのかよ……」

「あなたの精子の温かさを感じていたい」

「お、おう。そうか」

雪乃は自分のお腹、ちようど子宮の辺りを優しく撫でていた。もしかして妊娠したんじゃないだろうか!?

いや、一週間程度で妊娠がわかる訳がない。もし妊娠していたら社会的に抹殺される。妹の小町からも軽蔑の眼差しを向けられるかもしれない!?

「安心しないさい。妊娠はしていないわ。あなたにレイプされた日は安全日だったわ」

「そ、そうか。お腹を撫でているもんで……」

「ちゃんと妊娠するのは大学を卒業してからよ」

「うん。そうか」

焦った!!妙な勘ぐりをさせるなよな!心臓に悪いぜ。椅子に座っている雪乃が四つん這いで近づいてきた。

「ちゃんと綺麗にしないとイケないわ。はむっ」

「おおお!!?」

「ちゅっ……れろっ……ちゅっぱ……」

「フェラなんてどこで覚えたんだよ?」

「私は勉強熱心なのよ。本で予習してきたのよ」

雪乃はエロでも勉強熱心だったんだな!それにしても上手過ぎだろ。舌が別の生き物みたいに動いているのが最高に気持ちいい。

不味い。また射精してしまいそうだ。俺は雪乃の頭を掴んで喉奥まで押し込んだ。

「んんっ!」

「また射精る!!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……

「んんんっ♡♡……うぐっ……八幡君、射精し過ぎよ」

「悪い。雪乃のフェラが気持ち良過ぎて」

「そ、そんな事を言ってもまたしてあげるか」

照れているのかな?またしてくれるとか嬉しいんだけど!もつと雪乃を犯していけど、もう昼休憩が終わってしまう。

俺と雪乃はすぐに服を着直して教室に向かった。放課後にもまたしてもらおうかな。勃起しそうだけど、我慢だ。

放課後になればまた雪乃と出来るんだから!そして放課後に予想外な人物が奉仕部にやってきた。

「やっはろー!依頼持って来たよ!」

やはりゆきのんと放課後まで居るのはまちがっている。

うつつ、比企谷八幡だ。俺は今、テニスコートで球出しをしている。どうして球出しなんてやっているかと言うと数日までに由比ヶ浜が連れて来た依頼人から依頼だ。

依頼人は俺のクラスメイトの戸塚彩加と言う男子。見た目は完全に女子なんだよな。そもそも判別が難しい。

だって、戸塚っていつもジャージなんだから。制服姿を一度も見た事がない。もしかして戸塚っていじめに遭っているんじゃないだろうか？

いじめの一環で制服を隠されているとか？でもそんな風には見えなかったんだよな。じゃなんで制服を着ないんだ？

「どうしたの？比企谷君」

「い、いやなんでもないぞ。戸塚」

「そう？それで撮れている？」

「ああ、バッチリだ」

俺は撮影した戸塚のフォームを戸塚と一緒に確認した。戸塚の依頼はテニス部の強化だ。最近、成績のよくないテニス部は練習に参加している生徒の数が減っているので戸塚が強くなる事で他の生徒のやる気を出そうとしているのだ。

ここ数日で戸塚のフォームは素人目で見ても良くなってきている。最初は雪乃は死ぬまで練習をさせようとしていたが、俺が阻止した。死ぬまでやっていたら絶対に身体を壊すに決まっている。だからネットで調べた練習方法をやっている。

「比企谷君。やっぱり昼休憩にも練習をやった方がいいんじゃないかな？」

「止めておけ。昼休憩の練習はリア充どもに邪魔されるぞ」
「そうかな？」

「そうだ。リア充どもは昼休憩は暇しているからな。だから身体を動

かしたいんだ。それでテニスコートやラケットを勝手に使われたら戸塚が怒られるぞ」

「それは嫌だな……」

俺のクラスと言うと葉山グループだろうか？あのサッカー部のエースのイケメン。あれだけ顔や性格がいいのに今まで誰とも付き合った事がないらしい。

いつも一緒に居る三浦や海老名さんのどちらとも付き合っていないようだ。でも三浦は明らかに葉山を狙っている。

もしかして告白を待っているとか？自分から告白はしないんだな。別にどうでもいいけど。

「雪の……下。大丈夫か？」

「はあ……はあ……こ、これが……大丈夫に……見えるのかしら!？」

「いや、全然」

雪乃は体力が少ないのか序盤で体力が尽きて今にも倒れそうになっている。どんだけ体力がないんだ？バテるには早いだろ。

「それで比企谷君。雪ノ下さんだけ……」

「もう少し休ませてから俺たちは帰るから気にせずに帰ってくれ」

「うん。ありがとうね。シャワー室は使っていいから。先生の許可は取ってあるから」

「ああ、また明日」

「うん！明日もよろしくね！」

戸塚や他の部員は全員、シャワーを浴びて帰った。俺も雪乃を運んでシャワーでも浴びるかな。総武高校は進学校だけど、部活にも力を入れている。

そのおかげか運動部用にシャワー室が完備されている。先生の許可を取れば生徒は自由に使える。

俺は雪乃をシャワー室まで運んだ。服を脱ぎ、シャワーを浴びた。雪乃と一緒に。

「屈辱だわ。まさかあなたに洗われるなんて……」

「だったら自分で立って洗ったらどうだ？」

「まだ立てないのよ。特別に洗わせてあげるわ」

「だったら隅々まで綺麗にしてやるよ」

「あんっ♡ど、どこに触って……んっ♡」

俺は雪乃のマンコを重点的に綺麗に手洗いた。もしこの場面を誰かに見られたら一発で終わってしまうのに、俺はそれを望んでいた。

それは雪乃も同じでそれを想像して興奮している。その証拠にマンコからは愛液が溢れている。

くちや……くちや……

「厭らしい水音が出ているぞ？興奮しているのバレバレだぞ」

「し、仕方ないじゃない！生理現象よ！」

「雪乃。そろそろいいか？限界なんだ」

「ふふっ……いいわよ。来なさい八幡君
ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「あんっ♡♡いきなり奥までっ♡♡」

「相変わらずの締め付けだ！」

「あなただって固く太いわっ♡♡」

雪乃のマンコの締め付けときたら犯した時から変わらず強く強く締め付けてくる。こんなのすぐに射精してしまう。

「今日も疲れたな」

「隼人君はさすがっしょ!!」

今にも射精しそうな時にシャワー室に誰かが入ってきた。声からして同じクラスのリア充の葉山と戸部か？

「あれ？誰か居るのか？」

「他のみんなは先に帰ったべ〜」

「俺だ。比企谷だ」

「ヒキタニ君か。あれ、君は運動系の部活だったかな？」

「テニス部の手伝いをしていたな。テニス部の顧問にはちゃんと許可を取っている」

「そうか。ならいいんだ」

シャワー室は一つ一つ壁で仕切られてカーテンで中に誰が居るのか分からないようになっていいるから俺が雪乃と一緒に居る事は分か

らないはずだ。

それにしても葉山と戸部が入ってくるなんて予想外だ。今は二人が出て行くの待つしかない。

しかし雪乃はどうしたんだ？葉山の名前を聞いた辺りから急に不機嫌になったが。

ずずずずず……ぱんっ!!

「あんっ♡ちよ、ちよっと八幡君、彼らにバレるわ」

「大丈夫だ。シャワーの音でそんなに聞こえていないから。それにあんまり大声出すとバレるぞ」

「んんっ♡♡」

雪乃は口を手で押さえて、必死に声を出さないようにしていた。俺は腰を動かして雪乃に声を出させるようにした。

二人にバレたらどんな事になるのか想像も出来ない。そんな不安が興奮させてくれる。きつと雪乃もバレるかもしれない、この状況を楽しんでるに違いない。

何故ならマンコが強い締め付けをしているからだ。

「ヒキタニ君に聞きたいんだけど、最近雪ノ下さんと仲がいいとか……」

「雪乃……下とは同じ部活だからな！」

「そうか……そう言えば、さつきから妙な音がするんだけど何をしているんだい？」

「テニスで少し筋肉痛……なんだ！だから身体を解しているんだ。迷惑……だったら済まん」

「ああ、別に気にしないさ」

葉山が俺に質問している間も俺は雪乃に腰を動かしていた。でもそろそろ射精の限界だ。でもここで射精したら雪乃が声を出しそうだ。

「済まん。雪乃……」

「ま、待ちなさい……」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「んんんっ♡♡♡」

我慢足りずに射精してしまった。雪乃は両手で声を押さえた。流石だよ雪乃。ここまでよく声を押さえた。

雪乃の子宮に俺の精子が溜まっていくのが分かる。入りきらなかった分が隙間から溢れてきた。

「葉山。どうして雪乃……下の事を聞いてきたんだ？」

「俺は雪ノ下さんとは親同士が仲がよく小さい頃から付き合いがあるんだけど、小学生の時にちよつとあつてね。気まずくて……」

「……葉山つて雪乃……下の事が好きなのか？」

「戸部。さっさと出よう。あまり優美子たちを待たせるのも悪い」

「ちよつと隼人君、待つてよ〜！」

葉山は話を強引に切り上げて、戸部と一緒に出て行ってしまった。何か聞いたら不味い事だったか？

「あ、あなたね……よくもやってくれたわね」

「いや〜……興奮しただろ？」

「次はないわよ」

「ラジャー！」

葉山が出て行って雪乃からキツく睨まれてしまった。反省していただきますよ。人にバレそうな事は出来そうにないな。

だつたら別の事で楽しむのアリかもな。

「そう言えば、雪乃と葉山つて面識あつたんだな」

「……ええ、父の会社の顧問弁護士が彼のお父様なのよ」

「へえ……じゃあ小学生の時の事を聞いても？」

「……小学生の時に彼は私を助けてくれなかったのよ」

雪乃が教えてくれた。小学生の時の雪乃は本ばかり読んでいたそうだ。そんな雪乃を葉山がみんなの輪の中に入れていたそうだ。

だけど、そんなのを面白くないと思う女子たちがいた。そんな彼女たちに雪乃はいじめにあつてた。雪乃は葉山に助けを求めたけど、助けてくれなかった。

その後すぐに雪乃は海外に留学したそうだ。

「葉山。何がしたかったの？」

「さあ……それ以来、私は彼を避けているのよ。同じ過ちを犯さないために」

「なるほど……」

「さつきから動いていないわ。セフレなのだから私の事を気持ちよくしてもらえないと困るわ」

「おう。任せておけ」

「ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!」

「あんっ♡んんっ♡そ、そんな奥ばかりっ♡♡」

「奥を突かれるのが好きだろ?」

「んっ♡そ、そうだけど……あんっ♡」

俺は雪乃の気持ちよくなる場所を知っている。もう何度も身体を重ねたのだ。弱点の一つや二つくらい把握している。

雪乃は特に子宮口を突かれるのが一番、好きだ!突くたびにマンコをキツく締め付けてくる。

「ひいひい♡♡りやめっ♡♡」

「呂律が回っていないぞ」

「いくううううう♡♡」

「雪乃……!!」

「ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!」

「ひいひい♡♡♡♡」

俺は腰を激しく動かした。もうそろそろ射精してしまいそうだ。雪乃も絶頂に達しそうだな。

俺はラストスパートを掛けた。雪乃の体勢を変えて抱き合えるようにした。

「ゆ、雪乃!」

「はちまんくんっ♡♡♡♡」

「びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……」

「い、いくううううう♡♡♡♡」

「おおおお……!!」

雪乃のマンコに俺の精子が全て搾りられそうだ。頭が真っ白になってしまった。どのくらいの時間、俺は雪乃としていたんだ？

流石に湯冷めしてしまうかもしれない。そろそろ出た方がいいかもしれない。

「雪乃。そろそろ帰ろうぜ」

「そうね……テニスの後にしたものだからもう動けないわ」

「ある程度は手伝ってやるよ」

「当たり前でしょ。こうなったのはあなたの所為なのだから」

確かにその通りだ。動く体力が残っていない雪乃をシャワー室に連れ込んで犯した訳だしな。もうちよつとやりたかったけど、最終下校時間が迫っている。

そんな時間まで残っていたら何をしていたのか聞かれるかもしれない。ここは大人しく帰る事にするか。

俺は雪乃の着替えを手伝ってそのまま家に帰って、雪乃の妄想で抜いた。

やはりゆきのんが家に来るのはまちがっている。

うっす、比企谷八幡だ。突然だが、雪乃が比企谷家にやってきた。どうしてこうなったかと言うと先週にデパートであった『わんにゃんパーク』に妹の小町と行った時だ。

デパートで雪乃と遭遇した。どうも彼女も犬猫と触れ合いにきたようだった。迷子になっていたが。

そして小町に紹介して、仲良くなってしまった。その流れで比企谷家の猫、カマクラに会いに来る事になった。

そんな中にデパートで雪乃の姉に出会った。大学生で美人だったけど、仮面でもつけているような顔をしていた。

それを雪乃に言うと言われ上がった。何故？それで雪乃が俺を彼氏として紹介して、自分はもう処女ではなく経験した事を言うと言われショックだったのか、ブツブツと何かを言いながらどこかへと消えて行った。

その際の雪乃の顔はどこか勝者の顔になっていた。姉より先に経験した事がそんなに嬉しいのだろうか？レイプだけだ。

「こんにちは。八幡君」

「いらっしやい。雪乃」

そして今日、雪乃が比企谷の家にやってきた。いつもは制服だから私服の雪乃も悪くない。制服のスカートは短いけど、私服はロングスカートで足全体を隠していた。

見えないのも想像が膨らんで大変よろしい。

「小町さんは？」

「あいつなら居ないぞ。友達と出かけた」

「ボッチの兄と違って、ちゃんと友達が居るのね」

「いきなりデイすらないで！」

小町は俺と違って友人関係が広い。友達100人居ても可笑しくない。兄は友達なんて5人も居ないのにな。

友達は居ないけど、セフレならいるんだけどな。

「これお菓子の詰め合わせなのだけど、ご両親は？」

「親はどっちも休日出勤だから居ないぞ」

「そうなの……挨拶くらいしたかったのだけど」

「別にいいだろう」

「そうね。それであなたの家の猫はどこに？」

「ほら、そこに居るだろう」

カマクラを早速で見つけた雪乃はそっと撫でた。俺が撫でるとすぐはどこかに行くのにどうして雪乃はじっとして撫でられるんだ!?

「大人しい猫ね」

「俺には撫でさせないくせに……」

「猫に相手にしてもらえないなんて、ボッチの鏡ね」

「全然嬉しくね!!」

俺は雪乃がカマクラを撫でている間にお菓子と飲み物を準備した。雪乃がうっとり顔でカマクラを撫でている。

学校では見られない表情だな。これはこれで新鮮だな。

「それで八幡君。由比ヶ浜さんは最近どうしているのかしら？」

「由比ヶ浜？毎日、リア充グループと一緒に五月蠅い。それにしてもどうして由比ヶ浜の事を聞くんだ？」

「あれ以来部屋に来ないから依頼が成功したのか気になっただけよ」

「そうか……」

確かにあの日以来、由比ヶ浜が部屋に来た事はない。リア充グループと居る時は特に変わった様子は見られなかった。

「八幡君……んっ♡」

「んんっ……雪乃。キス、上手くなったな」

「毎日、誰かさんがたくさんしてくるから上達するわ」

雪乃とのキスって最高に興奮するんだよな。舌を少し絡ませたり唾液を送り込んできたりと勃起が収まらない。

「すっかり固くして、そんなに待ちきれなかったのかしら？」

「……実は朝から結構期待していた」

「なら最初はフェラチオでいっぱい射精させてあげるわ。はむっ」

「おおおお!?」

雪乃にズボンを下ろされたと思っいたらいきなりのフェラと来たか

！口の中に入ったチンコが舌に巻きつけられて、上下されてチンコに刺激してくる。

こんなテク、いつの間に!?

「私だって、あなたに気持ちよくなってももらうために。勉強をしているのよ。ちゅっ♡」

「エロい勉強しているのかよ……」

「ええ、だから覚悟しなさい。れろっ……」

す、凄い！雪乃のフェラがここまで凄いなんて知らなかった。舌の動きが絶妙にいい。どうやって舌を動かしているんだ!?

こんな刺激されたらもう我慢出来ない。俺は雪乃の頭を抑えて、チンコを喉まで押し込んだ。

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ

……

「んんんっ!？」

「おおおお……ま、まだ射精……!!」

「げほっ……げほっ……いきなり射精し過ぎよ!」

「わ、悪い。我慢出来なかった」

流石に怒られてしまった。セフレとは言え、相手の事もちゃんと考えなくては駄目だ。自分だけ気持ちよくなるのではなく相手も気持ちよくしないと。

「雪乃。今度は俺にやらさせてくれ」

「ええ、いいわ。ちゃんと気持ちよくしなさいよ」

「ああ」

俺と雪乃は位置を入れ替えた。雪乃がソファアームに座り、俺が床に座った。雪乃はすでにスカートとパンツを脱いでいた。

最近、雪乃のマン毛が生えてきたんだよな。最初はツルツルだったのに今では少しフサフサしている。

くちや……くちや……

「あんっ♡んんっ♡そ、そこっ♡」

「この辺りか?」

「んっ♡だ、だめっ♡」

雪乃のマンコは厭らしい水音をたてていた。それに指を押し潰そうとキツく締め付けてくる。それでも俺は指を前後に動かしたり、膣内を指で擦ったりして刺激を与えている。

雪乃は腰を浮かせていた。もうすぐ絶頂に達するだろう。さらに刺激を与えるか。俺は雪乃のクリトリスに吸い付いた。

「ちゅっ……れろっ……」

「あんっ♡んんっ♡そ、そんなに一度にっ♡♡」

「れろっ……」

「ひいい♡♡♡」

雪乃は絶頂したようだ。腰が抜けているようだ。もう我慢出来ない。俺はゴムをチンコに装着した。雪乃を滅茶苦茶にしたい。

「雪乃……いいか？」

「え、ええ。早く来てっ♡」

「ああ……」

「ずずずずっ……ぱんっ!!」

「んんっ♡♡」

雪乃は挿入しただけでまた絶頂したようだ。顔が緩んで涎を垂らしている。雪乃は絶頂すると顔が緩むんだよな。

「ずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「んんんっ♡♡だ、だめっ♡♡は、はげしいっ♡」

「雪乃!んんっ……」

「んんっ♡♡」

俺は雪乃にキスしながら必死に腰を動かした。てか、腰が勝手に動く。雪乃は腕を首に足を腰に回してしっかりとホールドしてくる。

これでは離れられない。それでも腰を動かした。限界が近い。

「雪乃!そろそろ……」

「ええ、来てっ!」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いくうううう♡♡♡お、お腹が熱いつ♡♡」
「し、搾られる!!」

ゴム越しに雪乃のマンコが俺のチンコから精子を搾ろうと蠢いている。こんな俺慢出来る訳ない。また射精してしまう!

「ゆ、雪乃! また射精する!」

びゅるるるびゅるるるっ……

「ひひひひひ♡♡♡ひしゅうにいっばい……」

我慢出来ずに射精してしまった。雪乃は呂律が回っていない。俺はゆつくりと雪乃のマンコからチンコを抜いたが、ゴムだけがマンコに残ってしまった。

ゴムをマンコから引っこ抜くとたつぷりと精子が詰まっていた。二回分とは思えないくらい量の量だった。

「どれだけ射精すれば気が済むのかしら? 雑誌では1、2度射精すれば萎えると書いてあったのに。八幡君のはまだ勃起しているわね」
「人より性欲は強い方だと思うんだけど、比べる相手がいないもので……」

「あなたとのセックスする度に体力が付いてくるわ」

俺とのセックスはスポーツなのだろうか? でも別にいいか。気持ちいいのだから。それにしても漸く勃起が収まった。

「雪乃。そろそろ昼飯にしないか?」

「そうね。お腹が空いてきたわ。ここは私が作るわ」

「本当か? だったらやって欲しい事があるんだけど……」

「いいわよ。何をすればいいのかしら?」

「ああ。実は——」

雪乃にやって欲しい事を俺が言うと怪訝そうな顔をしていたが、やってくれた。それにしてもまさか押める日が来るなんて、人生分かったものではないな。

「こんな格好をさせるなんて、本当に変態ね」

「でも着てくれたじゃん」

「そうね。存分に眺めているといいわ」

雪乃は調理を開始した。俺はそれを後ろから眺めていた。雪乃の

裸エプロンを！裸エプロンを！大事だからな！

それにしてもどうして裸エプロンってエロいんだろうか？前が隠れて局部は見えないのに。今から後ろから犯してみようかな。

「雪乃……」

「ちよつと……調理が出来ないわ」

「いいか？」

「お昼が遅くなるわよ？」

「別にいいだろ」

雪乃は俺にお尻を突き出した。俺は雪乃の腰を掴んで挿入した。

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「あんんっ♡♡こんな格好させてっ♡♡奥までっ♡♡」

「これ、ヤバ!?!」

裸エプロンだからなのか知らないけど、雪乃のマンコの締まりが強い。今更ながら生なんだよな。このまま射精したら妊娠するのだろうか？

それはそれで興奮する！俺は腰を動かした。

「ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずず

ずつ……ぱんっ!!」

「あんっ♡んんっ♡は、はげしいっ♡♡」

「雪乃！が、我慢出来ない!!」

「いいわ！好きなので射精しなさい！」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「いくうううう♡♡おしゅにっしゅいっ♡♡」

やってしまった。生で膣内に射精してしまった。でも後悔はない。妊娠したなら責任は取るつもりだし、社会的に殺されても別にいい。それだけ満足してしまった。雪乃をもっと犯したい。たくさん犯したい。

「雪乃……」

「八幡君。射精し過ぎよ……体に何かあったらどうするの？」

「悪い。だけど、止まらないんだ」

「仕方ないわね」

それから俺は雪乃と一緒に昼飯を作って、食べてからまたセックスをした。そして午後3時くらいにシャワーを浴びてから部屋を喚起と掃除をした。

両親や小町が帰ってきてても臭いで何があつたのかバレルのを防ぐためだ。こんなにするんだつたら自分の部屋ですれば良かったと思う。

今度からは部屋でした方がいいだろう。それから晩飯は何故か赤飯になっていた。小町が母親にチクツたらしい。

「お義姉ちゃんになるのはもう確定かな？」

小町は何を言っているんだ？俺と雪乃の関係は所詮、セフレでしかないのだから。

やはりゆきのんがエロくなるのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。今、雪乃がもの凄く機嫌が悪い。自分、不機嫌ですよ!?!と言わんばかりの表情をしている。

その理由は奉仕部に訪ねて来た男の所為だ。俺のクラスのリア充グループのリーダー葉山隼人だ。雪乃とは親の関係で幼馴染の間柄だけど、小学校の時のいじめで完全に信頼を失っている。

そんなに相手によく会いに来ようと思ったものだ。俺だったら絶対にそんな事はしない。絶対に会わないようにした。こいつの目的はなんだ？

「……黙っていないでさっさと用件を言いなさい。私たちはあなたに付き合っているほど暇ではないのよ?」

沈黙を破ったのは雪乃からだ。葉山は部室に入って椅子に座ってから何も言わずにいた。部室の空気が重く帰りたいと思うほどだった。

「ああ、実はこの事で来たんだ」

「これは……」

「チエーンメールだな」

葉山がスマホから送られてきたメールを俺と雪乃に見せた。内容は葉山グループの三人の男子についての悪口だ。

『戸部はカラーギャングの仲間とゲーセンで西校狩り』

『大和は三股している最低の屑野郎』

『大岡はラフプレーで相手のエース潰し』

あれ?これ可笑しくないか?俺はもの凄く違和感を感じていた。しかしこれが何だと言うんだ?

「分かったわ。つまりあなたの犯人探しに手伝えばいいのね?」

「ああ……ち、違う!俺は……犯人を捜そうと思わない。この事態を丸く収めたいんだ」

「甘いわね。それでは根本的な解決はしないわ」

「で、でも平塚先生がここなら上手く解決してくれるって」

平塚先生め!面倒ごとを俺たちに押し付けたな!?!これはどう見て

も教師が解決する問題だろうか!!

「私たちは問題を解決しないわ。解決する手助けをするだけよ。嫌なら他を当たりなさい」

「……ああ」

葉山は部屋を出て行った。いつもは自信に満ち溢れているのに今の葉山はかなりシヨボくれていた。笑える。

「まったくあの男は……」

「仕方ないんじゃないか？みんなの葉山隼人なんだから」

「だから駄目なのよ。成長していない」

雪乃はかなり過去の事を恨んでいるんだろうな。自分の人生を悪い方に変えた男なら恨んでも仕方ないよな。

「俺、犯人分かったぜ」

「一体、誰が？」

「犯人は大和だ。理由は——」

俺は雪乃に犯人とその理由を説明した。雪乃は納得した顔をしていた。さて、後はこれを葉山に言うかどうかだな。

「葉山に言うか？」

「別にいいわ。依頼された訳でもないから」

「確かに。後はあいつが勝手にやるだろう」

さて、葉山はどう動くのだろうか？犯人を捜すのか、犯人に止めるように言うのか、それともこのまま黙っているのか。

「それより八幡君。これを見て欲しいの……」

「ゆ、雪乃！お前、それ紐パン……」

雪乃がいきなりスカートを捲り上げた。一瞬、下着を着ていないかと思っただけ、違った。紐のパンツを履いていた。

大事な局部を隠しきれていない。下着として機能していない。ただエロいだけの下着だ。まさか雪乃が着ているなんて驚きだ。

「も、もしかして今日、ずっと履いているのか？」

「ええ、そうよ♡朝からずっと興奮しているわ。誰かに気付かれるのかドキドキしながら過ごしていたわ」

「凄い事になっているぞ……」

「そうなの。ティッシュで拭いてもどんどん溢れてくるの」

朝からとかよく誰かにバレなかったな。学校の制服のスカートはそれほど長い訳ではないのに。雪乃はどんどんエロくなっているな。くちや……

「んっ♡もつと奥までっ♡」

「大洪水だな……エロ過ぎだ」

雪乃のマンコは軽く触っただけでグチャグチャに濡れていた。これは確かにティッシュで拭いても溢れてくるのも分かる。

俺のチンコはもう爆発寸前だ。早く雪乃のマンコを犯したくて仕方ない。

「雪乃……」

「八幡君。私も我慢出来ないの……」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「んんっ♡♡お、奥まで来たあ♡♡」

「凄くキツイ……!!」

紐パンのおかげかそのまま挿入出来るので雪乃は制服を着たまま椅子に座っている俺に跨ってきた。いつもはスカートやパンツは脱ぐのだけど、今日は履いたままだ。

「あんっ♡んんっ♡ふ、太い!奥までくるっ♡♡」

「雪乃。飛ばし過ぎだ!」

「私をこんなにしたのよ。責任を取ってもらおうから。んんっ」

「んっ!?!」

雪乃っていきなりキスしてくるんだよな。その上、舌を俺の口の中に侵入してくる。そして暴れる。舌で歯を一つ一つ舐めてくる。

その際にガツチリと頭をホルドしてくるので逃げられない。別に逃げる必要はないのだけど。

「これだけ一度に刺激されると我慢出来ない。」

「ゆ、雪乃!」

「いいわよ。全部、受け止めてあげる」

「で、射精る!!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ

……

「い、いくうううう♡♡熱いの♡♡お腹いっぱい♡♡」

雪乃のマンコへ向けて思いつき射精してしまった。雪乃の子宮に俺の精子が溜まっていくのが分かる。

一度射精したのに雪乃のマンコは満足していないのか、さらに搾り取ろうと蠢いていた。

「雪乃。ちよつと落ち着け」

「何を言っているの？下校時間まで時間があるじゃない。それにここですておかないと明日までお預けなのよ？そんなの辛いじゃない……」

「雪乃……」

か、可愛い！そんな照れた顔で言ってくれるじゃないか！まだ俺のチンコは元気だぞ！雪乃がエロい？おねだりしてきた？

いいじゃないか！もつと雪乃をエロくしてみたくなった。オナニーの動画でも撮ってもらおうかな。

「雪乃。帰るまでたつぷりと犯してやるよ。途中で止めてと言っても遅いからな」

「ええ、もちろんよ。私を満足させて、八幡君。んんっ」

「んっ」

ディープキスで互いに唾液を交換した。これって、最高に興奮するんだよな。頭が真っ白になって何も考えられなくなってしまふ。

「雪乃。ちよつと体勢変えたい」

「分かったわ。これでいいかしら？」

「ああ、最高だ！」

雪乃は窓枠に手を置いて、お尻をこっちに向けてきた。紐パンはお尻の穴も隠していなかった。ヒクついてエロい。

俺は雪乃の腰を掴んで勢いよく挿入した。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡だ、だめっ♡奥、コツコツしないでっ♡♡」

「これが好きだろ？それに……ふう」

「はひい!?み、耳もだめっ♡」

「ならもつと……れろっ」

「んんんっ!!」

雪乃は耳を攻められるとマンコの締めまりが強くなる。特に耳が弱点のようだ。息を拭きかけたりするのはリアクションがいい。

俺は腰を前後に激しく動かした。その際に雪乃の手首を掴んだ。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひいひい♡♡そ、そんなに、激しくしたらっ♡♡だめっ♡♡♡」

「雪乃、締めすぎだ!」

「気持ち、いいいい♡♡♡」

「また射精る!」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるびゆるるるっ……

「ひいひいひい♡♡お、おくに熱いのがっ♡♡♡」

我慢出来ずにまた雪乃の子宮の奥に射精してしまった。さつき子宮に溜まるまで射精したのに。こんなにも射精してしまうなんて。

雪乃のマンコからチンコを抜くと精子が逆流してきた。

「これなら妊娠しても可笑しくはないわね」

「冗談じゃないぞ。高校生で妊娠とか……」

「そうね。そうなたらあなたは社会的に消されるわ」

「そういうのあるの?」

「さあ?どうかしら」

怖いんだけど!?でも雪ノ下建設くらい大企業だとそれくらいやつても可笑しくはないか。今さら雪乃に手を出した事を後悔しそうだ。

過去に戻って自分を殴ってでも止めたい。

「安心しなさい。妊娠は絶対にしないわ。今は」

「今はって……」

「私は欲しいものはどんな犠牲を払っても手に入れるタイプなの」

「ちよつと怖いんだけど……」

「まだ時間があるわ。どうしたいの?」

雪乃はお机の上に乗ってマンコを広げて挑発してきた。体力、時間を考えれば後、一回が限界だろう。

そうだ。まだ雪乃の身体で犯していない穴があったな。最後にそこでも犯すか。

「最後に一回、行くぞ」

「ふふっ……ちよつとそこは!!」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「ふぎい!?お、おひりっ!!」

「キツい!」

雪乃のお尻の穴はマンコよりかなり締め付けが強かった。それもそうだよな、弱かったら糞が漏れ出るのだから。

「お尻に挿入なんて、本当に変態っ♡♡」

「まだ雪乃の穴で挿入した事がなかったからな。これでコンプリートだ!」

「調子に乗らない事ね!このまま締め切ってみようかしら?」

「こわっ!」

雪乃だつたらやりかねない!ここは主導権を握っていないと不味い。兎に角、腰を動かして雪乃を絶頂させよう。

「ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!」

「うぎいいい♡♡」

「マンコもいいけど、アナルってのもいいな!」

「おしりがめくれるっ♡♡」

「雪乃!雪乃!」

アナルの締め付けが気持ち良すぎて射精しそうだ。だけど、もう少し我慢だ。まだ雪乃が絶頂していない。射精するなら雪乃の絶頂と同時がいい。

「雪乃!射精るぞ!」

「ひいいいいい♡♡」

「で、射精る!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

…

「い、いくうううう♡♡♡おひり、あしゅい……」

まさかここまで雪乃がエロくなるなんて思いもしなかった。最初のイメージからは想像も出来なかった。

これからも雪乃をエロくしていくか。葉山が俺と雪乃の関係を知ったらどうなるんだろうか？

あいつはまだ雪乃の事を諦めていない節があるからな。発狂するかもしれない。その後、俺と雪乃はトイレに行つて、アナルに射精した精子を出した。

流石に入れて続けるのは無理だからな。もっと雪乃とエロい事をしたい。大人の玩具とか用意したい。

「今度は八幡君のお尻を広げてみたいわ」

「勘弁してくれ……」

俺は女性にお尻を開発させる趣味は持ち合わせていない!!

やはりゆきのんのマンションに行くのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は今スーツを着て、ドレス姿の雪乃を雪乃が住んでいるマンションのベッドの上で押し倒している。

どうして、こうなったかと言うと妹の小町が持ってきた相談事だ。小町の友達の川崎大志の姉である川崎沙希が最近、朝帰りが増えてきた。

直接姉に聞いても「何でもない」とか帰ってこない。そこで姉が通っている学校に兄弟が居る人に相談したそうだ。

そこで俺と雪乃は川崎沙希の行動を観察する事にした。朝は一時間目に余裕で遅刻してきた。俺は最近、そんな事はない。

雪乃とのセックスや戸塚のテニス部の手伝いなので体力がいると思いい、朝と夜に走り込みをしている。

それで川崎を観察して、夜にバイトをしている事が分かった。ただ場所が問題だった。BARだった。高校生がバイトをしている場所ではない。

川崎は年齢を偽ってバイトをしている事だ。確かに川崎って少し実年齢より年上に見えるんだよな。

そこでどうして川崎がバイトをしているのかを推察した。そしてある結論に行き着いた。川崎も大学を目指していると。

確かに総武は進学校だ。殆どの人間が卒業後は進学の道を選ぶ。川崎家は兄弟が多いから川崎は最初は諦めていたのかもしれない。

しかし最近になって進学しようと思ったのだろう。そこで大学の授業料を確保するためにバイトを始めたのだろう。

しかしそれで学校での授業態度が悪かったら本末転倒だ。そこで川崎にはバイトではなく「スカラシップ」を教えた。

ようは奨学金だ。塾とや学校としても宣伝するにも広告塔が必要だ。今年は何人〇〇大学に合格しましたとか。

それが広がれば学校としても一々宣伝する必要もないからな。誰

だっつていい学校へ入学したいからな。

そこで川崎の朝帰りの件は終了した。夜も遅いと言う事で雪乃が住んでいるマンションに泊まっていくように言ってきたので好意に甘える事にした。

そして着いたマンションに俺は驚いた。この辺では高級が付くマンションだったのだ。こんない所に住んでいるのか?!

しかも一人暮らしだど!? 凄いな雪ノ下建設のご令嬢は! そして部屋を案内してもらっていると雪乃が倒れそうだったので支えようとしたのだけど、思わずベッドに押し倒してしまったのだ。

BARの空気に少し酔ったのか雪乃の顔は赤かった。ドレス姿が相まってもの凄くエロかった。

「雪乃……いいか?」

「ええ、いいわよ。来て、八幡君」

「雪乃。んんっ」

「んんっ……八幡君。私たち相性がいいわね」

確かにそうだ。これまで何度も雪乃を抱いているけど、飽きるとは思えなかった。それどころかもっと犯したいと思ってしまう。

俺のチンコは爆発寸前だ。早く雪乃の子宮の一番奥に射精したい。

「ゆ、雪乃。もういいか?」

「焦りは禁物よ。まずは私が八幡君を気持ちよくしてあげるわ」

「お、おう」

俺と雪乃は位置を入れ替えた。俺が下で雪乃が上になっている。

雪乃が俺のズボンとパンツを脱がして勃起したチンコを露にした。

「相変わらず、凶暴ね」

「悪かったな……」

「褒めているのよ。毎回、これが私の膣内を滅茶苦茶にしているのね……ちゅっ♡はむっ」

雪乃は俺のチンコにキスしてから口に咥えた。頭を上下させる最中に舌をチンコに絡めてきて、射精を促している。

口の動きもそうだけど、舌の動きが最高で我慢出来ないんだよな。

「雪乃!」

「んんっ!？」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……

「けほっ……まったく凄い精子の量ね」

「やべえ……」

腰が抜けるとはまさにこの事だ。だけど、まだ俺のチンコは萎えてはいない。雪乃のマンコへの挿入を今か今かとガチガチにして待っている。

雪乃は俺のチンコの上に腰を持ってきた。そしてゆっくりと腰を降ろした。

ずずずずっ……ぱんっ!!

「んんっ♡お、奥まで来るなんてっ♡♡」

「雪乃のマンコ、狭くてギュウギュウ締め付けてくる!」

「これならどうかしら?」

「おおお!!?」

雪乃が腰を左右に動かしてきた。その度にマンコが蠢いている。さつき射精したばかりなのにまた射精してしまう。

俺は雪乃を抱き寄せて、雪乃のマンコの一番奥にチンコが密着するようにした。

「で、射精る!!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「んんっ♡♡あ、あついつ♡♡だ、だしすぎよっ♡♡」

「雪乃のマンコが最高過ぎて……我慢出来なかった」

「本当にだらしがないわね……子宮があなたの精子でいっぱいになったわ」

雪乃は自分の腹の子宮がある場所を優しく撫でていた。なんだか雪乃の子宮を俺の精子でもっといっぱいにしたいと思う。いやしいー!

「雪乃。もっとお前を犯させてくれ!もっと精子を子宮に注ぎ込んでやる!」

「だったら移動しましよ。汗でベトベトになってしまったわ」

「そうだな……」

俺と雪乃はスーツとドレスを脱いでバスルームに移動する事にした。雪乃が住んでいる高級マンションのバスルームは無駄に広かった。

流石は高級が付くだけの事はあるな。俺と雪乃はまずシャワーで軽く汗を流した。

「八幡君。いいわよ」

「お、おう。行くぞ」

雪乃はバスルームの壁に手を付いて尻をこっちに向けてきた。左右に振って挑発してきているようだ。それに先ほど射精した俺の精子が逆流してきていた。

エロい雪乃を見ただけで、俺のチンコは元気を取り戻した。俺は雪乃の腰を掴んで挿入した。

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「あんっ♡んんっ♡す、少しは加減しなさいっ♡♡」

「そんなの無理だろ!雪乃のマンコを知ってしまったら!」

「んんっ♡そ、そんなに……だめっ♡♡」

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!」

腰が止まらなかった。腰を動かす度に雪乃のマンコが締め付けてくるのもっと犯したくなる。俺は雪乃の背中にぴったりとくっつきうじなに吸い付いた。

「ちゅううう……」

「んっ♡う、うじなにつ♡」

さらにクリトリスと乳首を摘まんのだ。同時に三箇所を攻められたら雪乃はどんな反応をするだろうか?

「ひいひいひいひい♡♡♡い、いくうううう♡♡♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるる……びゅるるるびゅるるる……

雪乃の絶頂と同時に俺は射精してしまった。雪乃のマンコに俺の

精子が溜まって行くのが分かる。雪乃のマンコは俺のチンコから精子を搾り取ろうと蠢いている。

それから俺たちは繋がったまま風呂に入った。動けないもどかしさがなんとも言えない気持ちよさがあった。

「雪乃。いい加減、動きたいんだけど……」

「お風呂くらいはじっとしていなさい。続きはベッドの上だよ」

「ああ、分かった……」

「いい子ね」

なんだか余裕の雪乃は少しイラっとしてしまった。ベッドに移動したら絶対に泣かす！止めてと言っても止めるつもりはない。

風呂から出る際には一度、雪乃のマンコからチンコを抜いてお互いに拭きあった。そしてベッドへ移動した。

「それでこれはどういう事かしら？」

「覚悟しろ雪乃。泣かせてやるから」

俺はスーツを着ていた時のネクタイで雪乃の腕を拘束した。これで下手に動けないはずだ。まずはマンコをさらに解す。

くちや……くちや……ねちや……

「んっ♡あんっ♡ま、まっつっ♡♡」

「まだまだ!」

「ひい♡♡らめっ♡♡いくっ♡いくっ♡……え？」

「どうした?雪乃」

「あ、あなた……!!」

俺は雪乃が絶頂する寸前で指をマンコから抜いた。雪乃は絶頂できずに俺の事を睨んでいた。マンコは発情した雌の匂いを漂わせていた。

それに腰が少し浮いていた。俺は少し経って雪乃が落ち着いたらまた指をマンコへ入れて、解した。

「い、いくっ♡♡こんどこそ、いくっ♡♡い……どうして!」

「何がだ?」

俺はワザとらしく雪乃に聞いた。余程、屈辱的なのか雪乃は顔を赤くするだけだった。自分から言えないのか?俺を睨むだけだった。

「早く私をイカせて！さっきから寸前で止めて！早く！」

「ああ、待たせたな。行くぞ」

「ずずずずずず……ぱんっ!!」

「うひい♡♡も、もっとはげしくっ♡♡おくまでっ♡♡」

雪乃は何かが切れたようで俺に抱きついてきた。腕を首に回し、足を腰に絡ませて俺を離さないようにホールドしてきた。

「ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!」

「あんっ♡♡ひい♡♡もっとおくまでっ♡♡」

かなり激しく腰を動かしているのだけど、雪乃のはもっと激しいのが好きなようだ。俺は少しペースを上げた。

「雪乃！射精るぞー！」

「おくにちようだいっ♡♡いちばんおくにつ♡♡」

「で、射精る!!」

「びゅるるるるびゅるるるる……びゅるるるるびゅるるるる」

……

「い、いくうううう♡♡♡♡」

雪乃のお望み通りに子宮の一番奥に射精してやった。雪乃のマンコは俺の精子を根こそぎ搾り取ろうと蠢いていた。

「こんな動きをされてはすぐに射精してしまう！」

「びゅるるるびゅるるる……」

「ひいひい♡♡あ、あしゅいのがいっぱいっ♡♡」

「雪乃。んんっ」

「んんっ……」

俺は雪乃の口に自分の唾液を送り込んだ。雪乃のホールドが解除されたのでゆっくりとチンコをマンコから抜くと精子が大量に逆流してきた。

「どれだけ射精したんだ、俺は!?これはもっと出てくるな。俺は動けないくなった雪乃の顔にチンコを近づけた。」

「雪乃。綺麗にしてくれ」

「はむっ……れろっ……ちゅっぱっ」

雪乃はお掃除フエラをしてきた。顔だけをなんとか動かしてチンコに付いた精子を綺麗に舐め取っている。

「雪乃……またいいか？」

「ええ、たくさん八幡君を感じさせてっ♡」

そこからの事はあまり覚えていない。朝まで十発近く射精したと思う。ベッドは俺と雪乃の精子と愛液でかなり臭くなった。

軽く掃除をしてから風呂でもう一回戦してから学校へ向かった。ただしその日は筋肉痛になったのは言うまでもない。

これからもっとセーブしてからの方がいいかもしれない。

やはりゆきのんと夏休みを過ごすのはまちがっている。

うつす比企谷八幡だ。夏休み到来！そう夏休みだ。一ヶ月以上、学校に行かなくていい期間だ。そして一日中、雪乃とイチヤイチャしても大丈夫な期間だ。

それに煩わしい連中とも顔をあわせなくていい。最近、由比ヶ浜の視線がウザい。休憩時間ずっと俺の方を見てくるのだ。

そして俺と視線が合うと逸らす。葉山たちはその事を何度か由比ヶ浜に聞いたが、『なんでもない』としか返していなかった。

それにしてもどうして由比ヶ浜は俺に視線を送ってくるんだ？特に何かした覚えがないのだけど、可笑いよな。実害はない。今は夏休みを大いに楽しもう。

夏休み初日から俺は雪乃のマンションにお邪魔している。目的はセックスと勉強だ。夏休みに出された課題を二人で終わらせた。

そもそもクラスが違うので出される課題が違うのだけだな。夏休みは毎年、一人ボツチで終わらせていたんだけど、今年は雪乃と一緒に。だ。

雪乃は俺とセックスしてから成績をグングンと上げていった。今までも成績は上位だったのだけど、ついに学年で主席になったそうだ。

これまでストレス発散を殆んどしてこなかった雪乃だったけど、俺とセックスする事で日々のストレスから開放されて、勉強が捗っているらしい。

凄過ぎだろ。俺としてもセックスさせてくれているので文句はない。それにしても最近の雪乃は俺とのセフレ関係を彼氏彼女の関係にしようとしているんだよな。

別にそれに関してはいい。雪乃とは表向き部活仲間になっているけど、彼氏になればある程度イチヤイチャしても怪しまれないだろう。

それにしてもさつきから下半身、それも股の辺りが気持ちいいんだよな。

「まさか……雪乃!？」

毛布を退かしてみるとそこには勃起した俺のチンコにフェラしている雪乃がいた。昨日、あれだけ射精したのにもう回復している。

「あら？起きたの」

「そんな事をしていれば嫌でも起きるだろう」

「朝からこんなに硬くして、昨日どれだけしたのか忘れたの？」

結構な量を口に、マンコに、アナルに射精した。だけど、五回以上は数えていない。

「れろっ……ちゅっ……はむっ」

「おおおお!!射精る!」

びゅるるるるるっ……

「んんっ♡……朝からいっぱい射精するわね」

雪乃は射精した精子を飲み干した。エロいよ雪乃さん!そんなの見せられた勃起が収まらない!!

「まずは朝食にしましょ」

「ああ。そうだな」

朝食は雪乃で昼食は俺で夕食はデリバリーにしている。夜は可能な限りセックスするためだ。それにしても雪乃の裸エプロンは最高にエロい。

前だけ隠して後ろが丸見えなんて、エロ過ぎだ。それにしても裸エプロンってロマンだよな。早く雪乃のマンコにたつぷりと射精したい。

「雪乃。頼む……」

「仕方ないわね。まだ朝食を食べていないのよ」

「ああ!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡」

俺は雪乃が突き出してきたマンコに奥まで一気に挿入した。俺のチンコを強く締め付けてくる雪乃のマンコは最高だ。腰を激しく前

後に振った。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡あ、朝から激しいっ♡♡」

「雪乃!で、射精る!!」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるるびゆるるるっ……

「ひいひいひい♡♡♡」

俺の射精と同時に雪乃は絶頂した。朝から俺もよく射精出来ると思うけど、雪乃のマンコが俺の精子を搾り取ろうと蠢いているんだよな。

「雪乃……んっ」

「んんっ♡朝からたくさん射精したわね」

「雪乃のマンコが最高だから!」

「そうよ。私は体は至高なのだから!」

この自信はどこから来るのだろうか?前まで貧乳の事を気にしていたけど、今の雪乃の胸は成長して、美乳となっている。

大きさも程よく揉む楽しみがある。これは近い内に俺のチンコを挟んでパイズリが出来るかもしれない。

そこから朝食を食べて風呂場に移動した。昨日とさっきのセックスで汗や臭いが気になる。

「髪を洗うの上手になったわね。八幡君」

「それは毎日、やっていけば嫌でも上達する」

「ふふっ……そうね」

夏休みになってから俺は毎日雪乃の身体を洗っている。雪乃の身体は本当に最高だ。白い肌、細いけどしっかりと腕と脚に成長している胸。

すっかり俺は雪乃にベツタリだな。他に誰かと付き合うとか考えられないな。そもそも雪乃が俺を逃がすとは思えない。

「雪乃……続きをしよう。まだ収まらないんだ」

「いいわ。私も火照って仕方ないから」

「いくぞ……」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「あんっ♡この体勢、凄くいいっ♡♡」

俺は雪乃の片足を持ち上げて抱き合いながら挿入した。この体勢だと俺のチンコが雪乃のマンコの奥の子宮の入り口に少し入る。

「雪乃!締め過ぎ!」

「あんっ♡あ、あなたのいりぐちまでっ♡♡くるからっ♡んんっ♡」

「ゆ、雪乃!で、射精する!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「い、いくうううう♡♡お、おなかのおくがあついつ♡♡」

雪乃のマンコにたっぷりと射精した。ゆつくりとチンコを抜くとマンコから精子が逆流してきた。

くちや……くちゅっ……

「んんっ♡い、イッたばかりだから敏感なのっ♡」

俺は雪乃のマンコに指を入れて精子をかき出した。雪乃のマンコは俺の指を押し潰そうとギュウギュウに締め付けてきた。

「こんなに精子を射精して……」

「ああ、自分でも驚いている」

「まだし足りないようね。続きはベッドでしましょう」

「ああ……」

まだまだ興奮が収まらない。俺と雪乃は寝室へと移動した。俺はベッドへ雪乃を押し倒した。何故か今日は興奮が止まらない。もしかして!?

「雪乃。俺の朝食に何かしただろ!」

「ええ、少し強力な精力剤を混ぜたわ」

「それでか!」

謎が解けた。道理で俺のチンコが朝食後から勃起し続けている訳だ!雪乃に後悔させてやろう。精力剤なんて盛りやがって、泣いたって止めないぞ!

「今度は私がリードするから」

「うわあ!？」

「八幡君はそこで寝ていればいいわ」

「お、おう……」

俺が雪乃にベッドに押し倒されてしまった。雪乃の腕力、ここ数ヶ月でだいぶ強くなったな。これも戸塚のテニス強化に協力したからだな。

「それじゃいくわよ」

「あ、ああ。早くしてくれ!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡あはっ♡おくまできたっ♡♡」

「おおおおお……雪乃、これヤバイ!？」

雪乃のマンコが凄く強く締め付けてくる。それに雪乃が上下に動く度に胸が揺れる。大きく育ったな、雪乃の胸。

由比ヶ浜と比べたらまだ小さいと思ってしまうけど、三浦辺りとはいい勝負が出来るんじゃないだろうか？

「男性の乳首って不思議よね」

「何が？」

「授乳する訳でもないのにあるなんて」

「そ、そうだな。雪乃?」

雪乃が俺の乳首にロックオンしている!？指で摘まんだり撫でたりなど、興味深そうに触るのは止めてくれ!!

そんなに触ると腰が浮かんてしまう!

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずず

ずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡は、八幡君っ♡はげしいわっ♡♡」

「雪乃が乳首を刺激するからだ!」

「それはいい事を聞いたわ。はむっ」

「はふっ!?!乳首に吸い付かないでくれ!」

雪乃が俺の乳首を攻めに攻めている!？そんな事をしたらさらに腰が動いてしまう!!

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡だ、男性でも乳首は弱いのかしら? んんっ♡」

「ちよ、雪乃!」

「れろっ……」

「おふっ!」

雪乃が俺の乳首を攻める度に腰が浮かせてしまう。Sっ気の雪乃もたまにはいいな。これは癖になってしまおう!

でもそろそろ我慢が出来なくなる。俺は雪乃の腰を両手でガツチリと掴んだ。

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ

……

「ひいいい♡♡せいしっ♡あふいつ♡♡」

「雪乃、乳首攻め過ぎ……」

「八幡君だって、私の乳首によく吸い付くじゃない。これはお返しよ」

「……それは本当にすまんと思っっている」

「そのおかげで胸が大きくなるなら別に文句はないわ」

果たして乳首を攻めれば胸は大きくなるのかは分からないけど、雪乃がいいならいいか。それにしても攻めている時の雪乃の表情が良かった。

獲物を狙う猛禽類のような鋭い眼差しだった。ゾクゾクしてしまった。

「雪乃。今度は俺の番だ」

「きやあ!?!ちよっつと八幡君!」

「いくぞー!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい♡お、おくまでっ♡♡」

攻守交替だ。俺は雪乃をうつ伏せでベッドに押し付けてからマンコの奥まで一気に挿入した。雪乃は挿入しただけで軽く絶頂したようだ。

この格好って獣が交尾しているように見えなくもない。雪乃の手首を押さえてから腰を動かした。

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡だ、だめっ♡とぶ!とんじやうっ♡♡」

「飛べ!飛んでしまえ!!」

「ひいひいひい♡♡♡」

「雪乃!!」

俺は性欲を全部、雪乃へぶつけていた。もっと激しく強く雪乃を犯したい。一日中、離れる事無くずっと雪乃のマンコに俺のチンコを入れていたかった。

「は、八幡君っ♡ご、ごめんさいっ♡も、もうっ♡♡」

「雪乃!で、射精る!!」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるびゆるるるっ

……

「い、いくうううう♡♡♡い、いふう……」

俺の射精と同時に雪乃は絶頂した。雪乃のマンコの奥に俺の精子がいつぱい注がれて溜まっているのが分かる。

俺がチンコを抜くと雪乃のマンコから精子が逆流してきた。雪乃はまだ絶頂の余韻で伸びていた。時よりビクツと身体が反応していた。

「本当に八幡君は獣だわ」

「すみません……」

「あなたの性欲に付き合わされるこっちの身にもなってもらいたいわ」

「反省しております」

「ならいいわ。それより来週の準備は出来ているんでしょうね?」

「来週になにがあるんだ?」

「平塚先生から聞いていないの?」

「平塚先生から?俺は何も聞いていないが何かあるのか?」

「奉仕部の合宿よ」

やはりゆきのんと川辺で遊ぶのまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺と雪乃は今、もの凄く機嫌が悪い。理由は二人の人間の所為だ。一人は奉仕部の顧問で今回の千葉村での小学生のキャンプのボランティアとして駆り出した平塚先生だ。

気に入らないのが直前まで俺に何も言わなかった事ではない。妹の小町を巻き込んだ事だ。何も知らない小町をいいように使うとか絶対に許せない。

そしてもう一人がリア充グループのリーダー葉山だ。俺たち奉仕部だけでは人数不足との事で募集を掛けたのだ。

そして集まったのが葉山グループだ。雪乃の機嫌が悪いのは葉山の所為だ。俺も苗字を「ヒキタニ」と呼ばれてイラツとした。

「平塚先生。どうして葉山君たちがここに居るのですか？聞いていませんが」

「内申点をやると言ったら集まったのだ！」

「だったら私たちの内申点も加算してくれるのですよね？」

「そ、それはもちろんだ！はははっ……」

雪乃に睨まれて流石の平塚先生も形無しだ。それにしても葉山グループかよ。お前らは大人しく都内のカラオケかボーリングでも行っている！

せめて戸塚がいれば良かったのだけど、ちようど部活の合宿とカブツた。テニス部、大会でも結構いい成績を残せたらしいからさらに強くなるために合宿に行くそうだ。

「雪ノ下さん、ヒキタニ君。しばらくよろしく頼むよ」

「生憎とあなたと仲良くするつもりはないわ。行くわよ八幡君」

「はいよ……」

雪乃は葉山とは仲良くするつもりはないようだ、俺もだけど。去る際の葉山の表情は齒軋りしているようで笑えた。

あいつは俺が雪乃と仲良くしているのが許せないようだ。俺と雪乃はちやっぴり恋人握りをしている。てか、葉山に見せつけている雪乃が。

「んんっ♡」

「んっ……どうした雪乃？」

荷物を置いたら誰も周りに居ない事を確認した雪乃がディープキスしてきた。舌を俺の口に侵入させて、歯茎を舐め回した。

「葉山君を見て、気分が悪くなったらから八幡君からエネルギーを貰っているのよ」

「貰っているの俺な気がするけど……」

今のキスで俺のチンコが勃起してしまった。雪乃がズボンとパンツを下ろして勃起したチンコが露になった。

「相変わらずね。はむっ……じゅるるるじゅるる……」

「おおおお……」

雪乃のフェラは上達したな。腰が自然と動いてしまう。それにここは人が出入りするのでバレても可笑しくは無い。

それがか室内でするセックスより興奮してしまう。我慢出来ない。

びゅるるるるびゅるるる……

「んくっ……やはり八幡君の精子はかなり粘っこいわね」

「すまん。大丈夫か？」

「ええ、少し喉に詰まらせただけよ」

俺は雪乃の頭を抑えて、喉奥までチンコを突っ込んで射精した。それを雪乃は飲み干した。このまま雪乃のマンコに挿入したいけど、時間が無い。俺たちは集合場所に向かった。

キャンプの説明があつて、代表の挨拶が終わってスタンプラリーが始まった。チエックポイントを回ってクイズを解く。

それを終えてから昼飯になって、午後は完全なる自由時間だ。俺と

雪乃は午前中暑い山の中を歩いていたので、川に行く事にした。

雪乃の水着姿はちよつと期待している。どんなのか楽しみだ。

「ビキニじゃない……」

「あまり泳がないから必要ないと思つて」

雪乃の水着は競泳水着だった。ビキニとかを想像していたのにもこれはいいかもしれない。

露出は少ないので他の連中に見られずに済む。それにしても少し

胸がキツそうだ。

「胸、キツくないか？」

「ええ、キツくなつたわ。去年は十分、余裕があつただけだ」

「そ、そうか……」

それはつまり胸が成長したと言う事ではないだろうか!? 少なくとも去年よりバストアップしていると言う事か!!

「雪乃。ちよつと……」

「ええ……」

俺と雪乃は下流の方へ向かった。小町は小学生と楽しく遊んでい
るし、葉山たちは上流の方へ行っているので問題ないだろう。

「れろっ……じゅるるるじゅるるっ……」

「んっ♡だ、だめっ♡んんんっ♡♡♡」

人気がない場所に移動した俺と雪乃。俺は膝を付いて雪乃の膝裏
を手で支えて、雪乃のマンコに吸い付いた。

必死に声を抑えようとしている雪乃はエロい。顔を赤くして涙目
になってこつちを見てくる。

「れろっ……ちゅっ……じゅるるるじゅるるっ……」

「んんんっ♡舌がっ♡かきまわっているっ♡♡ひいいい♡♡」

水着越しだったのを直接、俺の舌でマンコを舐め始めた。すると雪
乃は腰をビクビクとさせていた。今、軽く絶頂しているのだろう。

声を出したいけど、ここには他の人間が居る。卑猥な声といえ、聞
けば誰か分かる。なので必死に我慢している。

「ま、待ってー!出るー!」

ちよろろろろろっ……

「おっと……」

「と、とまらないっ♡ひ、人前でするなんてっ♡♡」

雪乃は絶頂のあまり小便を漏らした。俺は間一髪で避ける事が出
来た。それにしても小便をした雪乃はどこか嬉しそうだった。

だけど、すぐに俺を睨んできた。結構強めの視線で。ちよつとやり
過ぎた。

「よくもやってくれたわね」

「す、すまん……」

「謝罪する気持ちがあるならちゃんと気持ちよくしなさい」

「は、はい！」

雪乃の要望に応えるように俺は腰を動かそうとした時だった。誰かが近づいてくる音がした。俺は雪乃を抱えて、木の影へと移動した。

「は、八幡君……」

「静かに……バレていないはずだ」

「それならもう少し小さく出来ないのかしら？」

「しよ、しようがないだろ!？」

誰かにバレるかもしれない状況なんだぞ！興奮するだろ？それに雪乃だって、誰かが近づいて来た時のマンコの締め付けはかなり強くなるのを俺は知っているんだぞ。

近づいて来たのは小学生の女の子だった。黒髪でどことなく雪乃に近いものを感じた。

「やあ、どうしたの？」

「……………」

葉山の奴も現れたよ。それにしても初対面の小学生に話しかけるとか勇気があるな。ポッチの俺だったら例え相手が中学生以上でも無理だな。

「雪乃……」

「バレたら許さないから」

「ああ……」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「んんっ♡」

雪乃の口を手で抑えたけど、声が漏れてしまった。だけど、葉山たちとは距離が少しあるからこの程度では聞こえないだろう。

早くどこかに行って欲しいけど、俺が我慢出来なかったからな。

「ああっ♡んんっ♡ふ、ふたりがいるのにな♡♡」

「雪乃……んんんっ」

「んんんっ♡♡」

雪乃の唇を俺の唇で塞いでいるけど、声が少し漏れるな。でもそれが逆にいい。こつちに気付くか気付かないかのギリギリが好きだ！

そして腰がそれとは反対に激しく動いてしまう。

ずずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!

「あっ♡あああああ♡♡き、きこえてしまっわっ♡♡も、もうすこししずかになっ♡♡」

「それは無理だろ！雪乃のマンコが気持ち良すぎて！」

「だ、だめえええ♡♡い、いくうううう♡♡♡♡」

「雪乃！で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ……

「あ、あしゅいっ♡♡おなかにいっぱいたまるっ♡♡」

雪乃のマンコへ思いつき射精してしまった。その際に雪乃は声を出して絶頂してしまった。これは流石にバレたんじやないだろうか？

そつと木の影から葉山たちが居た場所を見てみるとそこには誰もいなかった。良かった。誰にも聞かれなかったな。

俺は雪乃と繋がったまま川へと入った。汗などを洗い流すためだ。

「これは環境汚染よね……魚が妊娠したら大変ね」

「人間の精子で魚が妊娠するか！」

「それもそうね」

「この……」

川に入って雪乃のマンコから俺の精子が逆流して川が少し白く濁った。人間の精子で魚が妊娠するはずないだろうに。

それにしてもさつき葉山が話しかけていた小学生が少し気になる。その時だった、雪乃に頬を抓られた。

「いてっ!?何すんだ？」

「今、私以外の女の事を考えていたでしょ……」

「すいません」

「よろしい」

雪乃さん、あなたはエスパーですか？それにしてもセックスから川に入るのはいいな。身体が適度に冷やされて、気持ちがいい。

「八幡君……まだし足りないでしょ？」

「やっぱり分かる？」

「ええ、あなたのチンコはまだ硬いままよ」

あれだけ射精したのにまだ俺は満足していなかった。折角、ここまで来たんだ。普段出来ない事をやってみたい。

雪乃はそんな俺の意思を読み取ってか水着を少しズラしてお尻を俺に向けてきた。俺は雪乃の腰を掴んだ。

「ずずずずつ……ぱんっ!!」

「あんっ♡お、おくにあたるっ♡♡ああああ♡♡♡♡」

「雪乃!?声を抑えろ」

雪乃のマンコの一番奥まで一気に俺のチンコを挿入した。子宮口にコツコツと当たるのが分かる。もつと奥まで挿入して、気持ちよくなりたい。

「雪乃!」

「ち、乳首っ♡♡」

「はむっ」

「ひい♡み、みみはだめっ♡♡」

雪乃の乳首と耳を同時に攻めた。耳が弱いんだよな、雪乃は。甘噛みだけではなく舌で耳を舐める。するとマンコの締め付けが強くなる。

「うひい♡りやめっ♡♡」

「雪乃!凄いい締め付けだ!」

「ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!」

「うひいひいひいひい♡♡♡♡い、いくっ♡いくっ♡いくっ♡♡♡」

腰の動きを早めた。もう少しで射精しそうだ。俺はラストスパートをかけた。そして雪乃を抱きしめた。

「びゅるるるるびゅるるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……」

「い、いくうううう♡♡♡」

「おおおお……まだ射精る……」

びゅるるるびゅるるるっ……

「お、おなひやか……あしゅいっ♡♡♡」

雪乃のマンコの一番奥に大量の精子を射精してやった。もし避妊していなかったら妊娠しても可笑しくはないだろう。

それから俺たちは身体を川で綺麗にした後、小町たちと合流してから夕食にした。夕食は定番のカレーだった。

その食事の場で葉山たちが一人の小学生の話をし始めた。

やはりゆきのんと夜の散歩をするのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は雪乃と夜の森を散歩している。どうして俺たち二人で散歩しているかと言うと夕食の時に話題になった小学生の事だ。

ハブられているその小学生が可愛そうだな、いじめをなんとかしたいだの葉山グループのメンバーは意見をいい、葉山は俺と雪乃にも意見を求めてきた。

俺は「小学生の問題に首を突っ込むな」といい、雪乃は「あなたでは無理よ。過去から何も学ばなかったの?」と言い放った。

それに三浦がキレた。なので俺たちは無事に話し合いから脱出する事が出来た。あんな話し合いなんて不毛もい所だ。

それで寝るまで時間があるので俺は雪乃と一緒に夜の森を散歩していた。月明かりだけでも十分、明るかったので助かった。

それにしても夜の森は静かでない。昼間は小学生が大いに騒いでいたからな。しかし葉山たちは大丈夫だろうか?

余計な事をしていじめがエスカレートしかないか心配だ。そもそも小学生のいじめ問題に高校生が関わるべきではないんだ。

「雪乃は葉山たちがどんな解決方法を取ると思う?」

「そうね……加害者と被害者を集めて話し合いじゃないかしら?」

「それ、いじめがエスカレートするだろ」

「そうね。でもあの男ならやるわ……私の時がそうだったから」

「なるほど……」

これは本格的にヤバい気がしてきた。何かする前に俺たちは無関係にしておかないと俺たちまで罰を受けそうさ。

「それに彼女は鶴見先生のお子さんよ」

「鶴見先生?どこの先生?」

「あなた、何を言っているの?私たちの学校よ。家庭科の」

「そう言えば、鶴見だったな……」

まさか自分が通っている学校の先生の子供が居るなんて、思いもしなかった。その時だった、雪乃に腕を引っ張られた。

「んんっ♡」

「んっ……」

腕を首の後ろに回してきて、雪乃はキスしてきた。月明かりの所為か雪乃がいつも以上に綺麗に見えてしまう。

雪乃とのキスって日に日に凄くなっているんだよな。それに胸を押し付けてくるので胸の成長を確認出来るので、興奮してしまう。

「キスだけでここまで硬く出来るなんて……どうしようもない変態ね」

「それは雪乃だからだろ。他だったらこうはなからかった」

「そ、そんな事を言っても嬉しくない事もないわ!」

お、雪乃のツンデレだ。顔を赤くしてデレて、早く犯したくなるじゃないか!すると雪乃は服を脱ぎだした。

そしてちようど月明かりが雪乃を照らした。それはなんとも言えない美しさがあつた。雪乃って女神の生まれ変わりか?と思つてしまった!

「雪乃!んんっ!!」

「んんっ♡お、落ち着いて。私もあなたと同じ気持ちだから……」

「お、おう」

思わず強引にキスをしてしまった。雪乃のマンコは興奮でもう濡れて大洪水になっていた。少し触れただけでねっとりとした糸が手に付いた。

外で全裸になる機会なんてそうそうあるものではない。だからなのか凄く興奮している。それは雪乃も同じよう顔で今まで見た事ないくらい赤くしている。

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「ああっ♡んんっ♡い、いきなりおくまでっ♡♡」

「す、凄い締め付け!」

雪乃の片足を持ち上げて、斜めにマンコへ挿入した。一気に奥まで届いた。子宮口に俺のチンコの先が当たっているのが分かる。

雪乃のマンコは熱く狭く気持ちよくて我慢なんて出来ない。

びゅるるるるびゅるるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「ひいいい♡お、おなかのおくがあつひっ♡♡」

「ま、まだ射精るー!」

びゅるるるるるっ……

「い、いくうううう♡♡♡」

二度の射精で雪乃は盛大に絶頂した。絶頂した雪乃のマンコは俺のチンコから精子を全部搾り取ろうと蠢いていた。

頭の中が真っ白になって雪乃以外の事しか考えられない。

「だ、射精し過ぎなのよ……お腹が裂けると思ったわ」

「そ、それはすまん。気持ちよくて……」

「別に責めている訳ではないわ。あなたも気持ちいいなら……」

「お、おう……」

雪乃は俺に抱きつき、キスをした。ディープではなくソフトの方だ。軽くしただけなのにまたしても俺のチンコはガチガチに勃起した。

まだまだ雪乃を犯したくて仕方ない。その時だった。何か動く音がしたと思つてそちらを見てみるとなんと由比ヶ浜がいた。

「……………」

「……………」

完全に目が合ってしまった。向こうは俺が雪乃と抱き合っているのを見て、固まっている。

「結衣、そつちには居たかい?」

「い、いないよ!」

「そうか。二人ともどこに行ったんだ?」

葉山の声だ。どうやら寝ていた俺と雪乃を探しているのだろう。それにしても由比ヶ浜はどうして何も言わなかったんだ?

俺と確実に目があつたのにな?でもいいかしばらくここには誰も来ないだろう。

「雪乃……もつといいか?」

「仕方ないわね。あまり時間を掛けないでね」

「ああ……」

さっきの葉山と由比ヶ浜の声は聞こえていなかったようだ。たぶん、絶頂の余韻でそれどころではなかったのだろう。

雪乃が俺から離れて木に手をつけてお尻を俺に突き出した。マンコからは俺が先ほど射精した精子が逆流してきていた。

俺はお尻にチンコを近づけた。

「ちよつとーそこはちが——！」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「ふぎっ!?お、おひりひろがりゅっ♡♡」

「マンコより強い締め付け!」

雪乃のマンコではなくアナルへと挿入した。マンコよりアナルの方が締め付けが強い。俺のチンコを引き千切ろうとしているようだ。

俺は雪乃の背中にぴったりとくっ付き、右手でマンコをいじり、左手で乳首を摘んだ。

「うひい♡だ、だめっ♡あしやまおかしくなるっ♡♡」

「雪乃!雪乃!」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱっ!!ずずずずずつ

……ぱんっ!!」

「ひいひい♡♡おひり、やひえけるっ♡♡」

雪乃は一度にたくさん場所を攻められてこれまで味わった事ない快楽に溺れそうになっていた。

何度も雪乃を絶頂させた俺だから分かる。もう少してイクだろう。そうしたらどんな声を出すだろうか?

きつと周りに響く大きな声で絶頂するだろう。それを想像しただけで興奮してくる。

「ゆ、雪乃……声、抑えろ」

「こ、こんなのむりっ♡♡」

「ま、また射精る!」

「びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……」

「ひいひいひい♡♡♡おひりやへるっ♡♡」

雪乃のアナルへ射精した。俺がチンコを抜くと大きく開いたアナルから精子が逆流してきた。しばらくはアナルは広がったままだろ
う。

ちよろろろっ……

「おしゅっっ、まら……」

雪乃はまたしても小便を漏らした。そしてそのまま倒れそうだったので俺が支えた。雪乃は絶頂の余韻でまだ意識がはつきりとして
いなかった。

どうしたものか。葉山や由比ヶ浜が探しているからあまり遅くな
ると大事になるかもしれない。

「雪乃……起きろ」

「ご、ごめんさい。腰が抜けてしまったわ……」

「もう少しだけいいか？」

「本当にあなたの性欲は底なしなのかしら？」

雪乃はどこか呆れていると同時に期待しているようだった。腕を
俺の首に回して準備万端だ。俺は雪乃を抱えたまま挿入した。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡んっ♡奥にきているっ♡♡」

「雪乃!雪乃!」

「ひい♡こ、これすごいっ♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずず
ずっ……ぱんっ!!

「ああああ♡♡はちまんくんっ♡♡い、いくっ♡」

雪乃も限界のようだな。俺も限界だ。俺は雪乃をしっかりと抱き
しめて離れないようにした。最後は一番奥に思いつきり射精してや
るつもりだ。

「雪乃!で、射精る!」

びゅるるるるるびゅるるるるるっ……びゅるるるるるびゅるるるるっ
……

「い、いくうううう♡♡……まだしえてるっ♡♡」

びゅるるるびゅるるるっ……

先ほどあれだけ射精したのにまだまだ射精が止まらない。雪乃を孕ませようとたくさんの精子が雪乃の子宮に行こうとしている。

それに雪乃のマンコも俺から精子を全て搾り取ろうと蠢いている。外でするセックスがここまで気持ちいいなんて、知らなかったよ。

だけど、人に見られるリスクがあるからもうしないほうがいいだろう。しかし由比ヶ浜はどうして見なかったフリなんてしたんだ？

どうでもいいか。今は目の前の性欲を楽しむだけだ！

「雪乃。お前、エロ過ぎだ……」

「あなたは性欲怪物ね。避妊薬を飲んでいなかったら確実に孕まされていたわ」

「そろそろ戻るか」

「そうね……」

俺と雪乃は近くの川で身体を軽く洗った。流石に臭いまま戻ったら何を聞かれるか分からないからな。

「八幡君。あなた、花火大会は予定は空いている？」

「花火大会？」

そういえばもうすぐ始まるな。人混みが嫌で毎年、家から花火は見ていたな。もしかして雪乃は行くのか？

俺並に人混みが嫌いだと思っていたのに！

「有料シートに行けば人混みには遭わないわ」

「え？いいのか？」

「ええ、父にあなたを紹介するつもりだから絶対に来なさい」

マジか?!父親に紹介とか緊張で胃に穴が開きそうだ。もし『娘はやらん!』とか言われたらどうしよう!?

でもちよつと言われたみたいと思うんだよな。

「分かった。予定は空けておく」

「ならいいわ。帰ったら勉強をするわよ」

「え!?夏休みの課題は終わっただろ!」

「あなたには私と同等の学力を付けてもらおうのよ」

「ど、どうして!」

「同じ大学に行きたいからよ」

デレた。雪乃のデレが出ましたよ！これは絶対に行かなくては！他の男に雪乃を取られないためにもな！

キャンプ場に戻った俺と雪乃に待っていたのは平塚先生の説教だった。夜遅くに若い男女が姿を消したからな。かなり怒られた。

森に行った理由は寝付けなくて歩いていたら同じ理由の雪乃と出会ったので少し遠くまで散歩していたと言っておいた。

葉山は終始、俺を睨んでいた。由比ヶ浜は何か言いたげだったが、無視した。それと葉山たちは小学生の問題には介入しない方向で決着したとか。

どうでもいいけどな！花火大会が楽しみだ！

やはりゆきのんが酔うのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は今、久々の実家で浴衣姿の雪乃に押し倒されている。雪乃の顔は赤く獲物を狙う猫科の動物のようだ。

奉仕部の合宿と言う名の小学生の千葉村でのキャンプでのボラunteィアが終わって花火大会に雪乃と二人で出かけた。

花火大会を有料席で楽しんでから父に彼氏と紹介された。最初はどこか疑っていたけど、キスをしたらすんなり信じた。いいのか、それ!?

どうも父として娘が彼氏の一人も紹介しないので心配していたようだ。確かに雪乃と付き合うとか学校の人間でどれほど考えているだろうか？

告白した所ですぐに振られるのが見えている相手に態々告白はないだろう。

それと葉山たちはキャンプでイジメにあっていた子に対して何もしなかった。葉山グループはリーダーの葉山が動かない限り他の連中が動く事はない。

だから俺と雪乃がその女の子にアドバイスを言った。イジメてくる連中との会話を録音したりなどして教師もしくは親に渡す方法だ。

これなら小学生でも出来るだろう。その女の子はどこか覚悟を決めたようだった。まずは親に相談するとか言っていたな。

それにしても葉山たちは何の役にも立たなかったな。雪乃の言うとおりだ。周りの評価を気にして何も出来ない。

とりあえず葉山の話の置いておいて、どうして雪乃が顔を赤くして俺を押し倒しているかと言うと花火大会が終わって俺の家で休憩する事になった。

そこで雪乃がテーブルの上の水を飲んでもいいかと言うので俺はいいと返事をしてしまった。

だが、雪乃が飲んだのは水ではなく日本酒だったのだ!!軽く一口だったと思うんだけど、かなり酔いが回っている。

そして俺の部屋に連れて行き、寝かせようとしたら腕を掴まれてそ

のまま押し倒された。

「ふふっ……もう逃げられないわよ八幡君♡」

「雪乃さん？酔っているから落ち着こうな！」

「その強がりがいっつまで続くかしら？」

「雪乃さん!?!人の話を聞いていますか!?!」

駄目だ。会話が噛み合わない。一体どうしたと言うんだ!?!てかどうすればいいんだ!?!どう止めればいいんだ!!

「ちよつと雪乃さん!くすぐったいから!」

「大人しくしていなさい。すぐ終わるから!」

「ちよっ……きやあああ!!!」

思わず悲鳴を出してしまった。だって仕方ないだろ!雪乃に着ている服を強引に脱がされているんだから!

あと舌なめずりをしないで!癡猛なトラにしか見えない!

「本当に落ち着け!雪乃」

「だけど、あなたのここは興奮しているようだけど?」

「あふっ!?!」

雪乃が俺のチンコを強く握ってきた!パンツから出たチンコは硬く勃起していた。雪乃は俺のチンコを強く握ったり、先端を優しく撫でたりなど刺激してくる。

「で、射精する!」

びゅるるるるるるびゅるるるるるるっ……

「いっぱい射精したわね。でもまだ元気いっぱいね」

雪乃は射精した俺のチンコをニコニコしながら見て言った。そして精子を飲んで舌なめずりした。あ、今夜は俺が雪乃に食われる。

「うぐっ!?!」

「あなただけ気持ちよくなってズルいわ。私も気持ちよくなさい」

「れるっ……じゅるるるるるるっ……れるっ」

「あっ♡んっ♡いいわっ♡♡もつと激しくっ♡♡」

雪乃はマンコを俺の顔に押し付けてきた。俺は必死に雪乃のマンコを舐めた。時には舌を膣内に入れてほじくり回した。

その度に雪乃のマンコからは愛液が溢れていた。

「れろっ……じゆるるるっ……」

「い、いくううううう♡♡♡」

「ちゅううう……」

「美味しいかしら？私のオシッコは」

ちよろろろっ……

「んぐっ……あ、ああ」

俺は雪乃の小便を飲まされた。他人の尿を飲むとは思ひもしくなつた。雪乃が酔うとここまで豹変するとは思わなかつた。

社会人になつても絶対に雪乃には酒は飲ませないようにしないと！酒に酔つて毎度、こんな事をされては身が持たない。

「八幡君はじつとしていないさい。私があなを気持ちよくしてあげるわ」

「雪乃……」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「んんっ♡あはっ♡全部、入ったわっ♡♡」

「おおおお……!?!」

雪乃のマンコがいつも以上に締め付けてきた。主導権が雪乃が握っているからか蠢きが言葉にもならないくらい凄い。

俺はただ黙つてチンコに跨つて腰を動かしている雪乃を見た。

「この極悪チンコは全然萎える事がないわね？」

「雪乃、飛ばし過ぎじゃ……」

「何を言っているの？いつもあなたはこれくらいしていたじゃない」

「ちよつと休憩しないか？」

「駄目よ。んんっ」

「んんっ!?!」

俺は雪乃にキスされて黙らされた。雪乃は休む事無く腰を動かした。その度に成長した胸が揺れる。由比ヶ浜ほどじゃないが、いい大ききさになった。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡んっ♡いいっ♡」

「ゆ、雪乃！もう限界だ！」

「もうなの？仕方ないわね。……いいわ、いっぱい射精しなさい」

「うっ……!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「あはっ♡いっぱい射精したわね。危険日でなくとも妊娠しても可笑しくはない精子の量ね？」

雪乃は妖艶な笑みで俺の事を撫でてきた。ここまで主導権を握られるのは初めてかもしれない。Sつ気のある雪乃はこれはこれではない。

でも駄目だ。俺は攻められるより攻める方が好きなんだ！俺は雪乃の腕を掴んでなんとか押さえつけた。

「雪乃。いい加減にしろよ！」

「あら？さっきまで私にいいようにされていたのに強気ね？」

「そ、それはそうだ！いつまでも好きにはさせない！」

「その割には声が震えているわよ」

正直怖い。酒で酔った雪乃がここまで強いなんて、知らなかった。でも酔いを醒ませば、俺が主導権を握れるはずだ。

チンコがマンコから抜けた今がチャンスだ。主導権を取り返す。

「ごめんなさい……」

「雪乃？」

「あなたの反応が面白くて、いじわるをしてみましたわ」

「雪乃……のわあ!?!」

一瞬の隙を突かれてまたしても俺がベッドに押し倒される体勢になってしまった。雪乃のさっきのは嘘だったのか？

「ふふっ……油断したわね。今夜は私の好きにさせてもらおうわ」

「いや、マジで待ってくれ！あひい!?!」

「れろっ……ちゅっ……乳首は男性でも弱いのね」

雪乃は俺の乳首を舐めてきた。駄目だ、頭の中が真っ白になってしまふ。雪乃は俺の乳首を舐めると同時にチンコを強弱をつけて握ってくる。

このままではまたしても射精してしまう。このまま主導権を奪えずにいるのは不味い。この快感が病み付きになってしまう。

「ゆ、雪乃！もう射精るー！」

「れろっ……いいわ。はむっ」

「のおおお!!？」

今度は雪乃は俺のチンコを咥えた。口の温かさと舌の動きが頭を真っ白にする。もう射精以外の事なんて、考えられない。

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんっ♡本当に八幡君は絶倫ね……顎が外れそうだわ」

「もう好きにしてくれ……」

雪乃は射精した俺の精子を飲み干した。酒に酔った雪乃には勝てる気がしない。しかしいつまでも雪乃が何かをしてこなかった。

表情を見てみるとどこか不満げな顔をしていた。あれ？どうしたんだ。

「もう少し抵抗して欲しいのだけど？」

「いや勝てる気がしないので……」

「それじゃつまらないじゃない」

「えええ……」

雪乃は抵抗を楽しんでいるようだ。無抵抗な相手は興味がないらしい。そんな事を言われてもどうしろと？

「抵抗しないなら今夜はしないわ……」

「ちよっ……雪乃!？」

「帰るわ」

雪乃は浴衣を着直して玄関へと歩いていった。射精はしたけど、まだ満足していないんだぞ!?俺は玄関に向かう雪乃の腕を掴んで壁に貼り付けにした。

「帰りたいのだけど……」

「俺はまだ満足していない!」

「だから?そんなの私には関係ないわ」

「この!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい♡」

俺は強引に雪乃のマンコへ挿入した。中々強い締め付けだ。それに雪乃の顔が緩んだ。さっきまで不満顔だったのに？どうしたんだ。

「や、やれば出来るじゃないっ♡♡」

「雪乃、お前……」

「ちゃんと出来るでしょ？」

「当たり前だ！」

雪乃はわざと挑発してきたのか。俺は腰必死に動かした。雪乃を気持ちよくするために。

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「あっ♡んんっ♡そ、そこっ♡♡」

「雪乃!雪乃!」

「そんなに必死になってまた射精したいのかしら？」

「ああ!雪乃の一番奥に射精したい!」

「いいわ。んんっ」

「んんっ」

雪乃とのキスはふわふわした気持ちになる。舌と舌を絡ませて唾液を交換してお互いにマーキングしているようで興奮する。

一日、雪乃の事を考えない日はない。朝起きて雪乃の寝顔を見られてたら最高だし、逆に寝顔を見られてもいい。

そして寝る前にも雪乃の事を考えてオナニーをしている。

「ゆ、雪乃!」

「いいわ。八幡君、んんっ」

「んんっ!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

キスしながら射精した。雪乃の子宮の一番奥に俺の精子が溜まっているのがわかる。そしてチンコをマンコから抜くと精子が逆流してくる。

雪乃のは笑いながらマンコを広げて、精子の逆流を俺に見せ付けて

くる。俺は釘付けになった。これだけの精子を俺は雪乃の子宮へと射精したのか。

「雪乃。続きがしたいんだ」

「まだ元気がいいなんて、とんだ絶倫ね。八幡君は」

「駄目か？」

「いいわ。あなたを受け止められるのは私くらいだから」

「雪乃！」

俺は雪乃を連れて自分の部屋へと移動した。そこからはあまり覚えていない。たぶん、朝まで雪乃を犯し続けたと思う。

そして朝、酔いの醒めた雪乃が赤面顔で布団に包まっている姿は笑えた。

「八幡君、海に行くわよ」

「……え？海!？」

「私の水着、見せてあげるわ」

ついに雪乃の水着が見られるのか!?楽しみだ!!しかし海に行く必要があるのだろうか?別にいいか水着が見られるなら!

やはりゆきのんとビーチに行くのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は元セフレで現恋人の雪ノ下雪乃とプライベートビーチに向かっていた。日本人でプライベートビーチを持つている家があるなんて知らなかった。

流石は雪ノ下建設だ！それに雪乃の水着が楽しみだ。小学生のキャンプの時は競泳水着だったからな。今回は期待している！

そして雪ノ下家のプライベートビーチに到着した。俺は早速着替えて砂浜で準備を始めていた。

「お待たせ八幡君」

「雪乃……」

そこにはビキニ水着に着替えた雪乃が立っていた。最近、胸が大きくなり少し谷間が出来たと喜んでいたな。俺は雪乃の水着姿に目が離せなかった。

「あまりジロジロ見ないで欲しいのだけど……恥ずかしいから」

「お、おう。すまん、見惚れていた」

「ならいいわ。それで準備は？」

「バッチリだ！」

俺は砂浜にテントを張っていた。椅子にテーブル、飲み物も準備は完了している。そして俺と雪乃は椅子に座って読書を始めた。

「ちよつと！二人とも何読書を始めているの!？」

「姉さん。うるさいわ」

「少し静かにしてもらえませんか？」

俺と雪乃の読書を邪魔してきのは雪乃の姉の雪ノ下陽乃さんだ。何故かこの人も俺たちに便乗してきた。この人も雪乃と同じビキニだけど、雪乃の方が見惚れてしまう。

この人の水着には特に感想はないな。俺と雪乃は読書を再開した。

「だから！海まで来たのに読書を始めるの!？」

「姉さん。バカなの？泳いだら疲れるじゃない」

「そうですね。したら夜、雪乃とやれないじゃないですか」

「何？二人も私の方がバカみたいじゃない！そもそも海に着てまで読

書とかありえないでしょ!」

この人はさつきから何を言っているんだ?俺は雪乃と顔を合わせ
て、首を傾げた。そもそも海に来て、水着に着替えたからと言って泳
ぐなんて一言も言っていない。

「姉さん。私たちは移動で疲れたし、屋外で読書をしたいのよ」

「そうですよ。そよ風を感じながら静かに読書をしたんですよ」

「もういいよ!お姉さん一人で泳いでくるから!!」

雪ノ下さんは一人で海に突っ込んで行った。テンションが高い人
だな。俺と雪乃は静かに読書を開始した。

「八幡君。飲み物はどうかしら?」

「そうだな。少し喉が渴いたかな」

「そう。なら……んっ」

「雪乃?んんっ……うぐっ」

いきなり雪乃はオレンジジュースを飲んだと思ったたら口移しして
きた。オレンジと雪乃の唾液が混じった味がした。ヤバい、もう変態
と言われても否定出来ない!?

「今度はあなたの番よ」

「お、おう……んっ」

「んんっ♡……うぐっ……美味しかったわ」

それはジュースか俺の唾液か?どっちなんだ!?!すると雪乃が俺の
股の上に乗ってきた。

「邪魔者はいなくなった事だし、始めましょうか」

「すぐ近くに雪乃の姉が居るんだけど?」

「スリルがあつていいでしょ?」

「そうだな。んっ」

「んんっ♡」

俺は雪乃を抱き寄せてキスをした。外でのキスも中々いい。誰か
に見られているかもしれない状況はドキドキする。

今、雪乃が上なので雪乃の唾液が俺の中に入ってくる。雪乃の味に
興奮して勃起してしまう。パンツにテントを張っている。

「キスだけで興奮するなんて変態ね」

「その変態にキスしてマンコを大洪水にしている雪乃が言えた義理じゃないだろ」

「そうね。だから早く私に挿入してっ♡」

「ああ、行くぞ」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡」

ビキニを少しズラして雪乃のマンコへと挿入した。雪乃のマンコの締めりはいい具合だ。ギュウギュウに締め付けてくる。

「もつと激しく動いてもいいのよ?」

「言ったな?」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「んんっ♡あっ♡うひい♡す、すごいっ♡♡」

「雪乃!!」

俺は雪乃の言うとおりに腰を激しく動かした。その度に成長した雪乃の胸が揺れる。数ヶ月前は貧乳だったのによくここまで育ったものだ。

巨乳とまでは言わないが、それでも中々のサイズだろう。卒業辺りになればもつと成長しているだろう。楽しみである。

「雪乃、もつと声を抑えろよ。聞こえてしますぞ」

「べっにつ♡いいわっ♡♡彼氏一人作った事のない姉に見せ付けて自慢するつもりだからっ♡♡」

「そんな事を考えていたのか!？」

「あんっ♡きつと私たちの状態を見たら発狂するわねっ♡♡」

きつとそれは誰が見ても発狂すると思うぞ。特に葉山が見たら俺を殺そうとするのではないだろうか?

「雪乃!」

「八幡君っ♡もつと!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡んっ♡いいっ♡♡」

「雪乃！」

俺は必死になって腰を動かした。近くに雪乃の姉がいるかもしれないのに。でも止められなかった。いや止めたくなかった。

誰に見られようが関係ない。もし見られていたとしても逆に見せ付けてやりたい。

「雪乃！射精るぞ！」

「きてっ♡んんっ♡」

「んんっ!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「いくうううう♡♡♡」

キスをして射精した。これなら声が漏れる事はないだろう。射精しながらのキスは頭が痺れる。下半身と上半身で違う快感があるからだ。

それに唇やチンコ以外で雪乃を感じるのも理由の一つだろう。指先に感じる雪乃の体温と滑らかな肌。

すでに雪乃の事で頭がいっぱいなのもっと雪乃の事を考えてしまおう。

「たくさん射精したわね。熱いのがお腹の中にたくさんあるのが分かるわ」

「すまん。射精し過ぎた……」

「誤る必要はないわ。気持ち良かったから」

「そうか。それは良かった」

雪乃は俺の上から退いた。その際に雪乃のマンコからは俺が射精した精子が逆流してきた。いつも見ているけど、結構な量を射精しているな。

俺、病気じゃないかと疑いたくなる。

「綺麗にするわね。はむっ」

「おおおお……」

「れろっ……じゅるるるっ♡」

「雪乃、ヤバい！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんっ!？」

俺は雪乃のフェラに我慢出来ずに雪乃の頭を抑えて喉奥へ思いつきり射精した。雪乃のフェラのテクは日に日に上達してきている。

舌の動きなんて、凄すぎる。チンコに巻きついて射精を促してくるのだ。こんなフェラ、我慢出来る人間はいない。俺が断言する!!

「……んぐっ……ご馳走様」

「美味しいのか？」

「苦味があつて癖になるわね」

「そうか……そろそろ昼にしないか？」

「そうね」

ちようど雪ノ下さんが泳ぎ疲れたのか海から戻ってきたので俺たちは昼食にする事にした。昼食はBQQだ!しかも食材を串に刺して焼くタイプのBQQだ。

これなら料理の手間が省けるから楽だからな。俺と雪乃は砂浜を昼食後、散歩していた。ちなみに雪ノ下さんは泳ぎ疲れて昼寝をしている。

ぐっすり寝ているので当分は起きないだろう。それにしても流石はプライベートビーチだ。俺たち以外、誰も居ない。

「それにしても引き籠もりの俺が彼女と海に来るなんて今でも信じられないな」

「確かにポッチの八幡君にしては進歩したわね」

「ポッチなのは雪乃のもだろうか!？」

「そ、そんな事はないわ……」

雪乃さん、目が泳いでいますよ?俺は雪乃を岩陰に連れ込んだ。そこでキスをした。ねっとり引つ付くようなキスだ。

「んんっ……」

「んっ……昼前にあれだけ射精したのにまだ足りないの?」

「ああ、雪乃の水着をもっと焼き付けておきたいんだ」

「いいわ、夜もするのだからちゃんと残しておくのよ?」

「もちろんだ」

それにしても雪乃もエロくなったな。夜もする気にいるよ。それは夜もやりたいと思う。一回射精して終わろう。

俺は雪乃の片足を持ち上げた。そして挿入した。

ずずずずずず……ぱんっ!!

「あんっ♡奥までできているっ♡♡」

「雪乃のマンコは凄いい締め付けだな!」

「あなたのチンココそどうして毎度、ここまで太いのかしら?んんっ♡」

雪乃のマンコは凄いい締め付けをしてくる。これではすぐにでも射精してしまう!まだ夜まで時間があるから出来れば時間をかけて楽しみたい。

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「あっ♡んんっ♡八幡君っ♡私、げんかいつ♡♡」

「雪乃!俺もそろそろ行くぞ!」

「きてっ♡♡私の膣内にたくさん射精して!!」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ……

「い、いぐうううう♡♡♡……おなか、あっいつ♡♡はちまんくん
で、いっぱいっ♡♡」

雪乃のマンコの一番奥に射精した。それと同時に雪乃は絶頂したようだ。その際に腰が抜けてしまったようで立てるようになるまで俺が支えた。

それにしても雪乃のマンコは気持ち良かった。夏休みはもう少しで終わってしまう。それまでたっぷりと楽しむぞ。

夏休みが終われば文化祭だ。二人でなんとか回れないだろうか?後で聞いてみるか。

「まったくあれだけ射精した後だと言うのにこれだけの精子を作れるわね?」

「俺は人より精子を作る機能が強いんだと思う……」

「そのおかげで気持ちよくなれるからいいわ。それと明日は泳ぎましょ」

「そうだな。折角、海に来たからな」

目の前の海を見て、泳がないのは勿体ない。少しくらいは泳がないと来た意味がない。それにしても雪乃のビキニは似合っている。

「ふふっ……帰る前に口でしてあげるわ」

「おう。すまん……」

「いいのよ。はむっ」

「おおおお……」

流石に勃起したままで雪ノ下さんの前に戻るのは不味いな。雪乃は迷いなくチンコに吸い付いた。手馴れたものだ。

「んじゅるるるるっ♡……れろっ」

「雪乃！」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……

俺は雪乃の口の中に射精した。雪乃は零さずに全て飲み干した。もつと犯したいけど、夜や明日の分にとって置こう。

俺と雪乃はテントへと戻った。その際に雪ノ下さんに仲間外れにした事を言われたけど、数分後には頭の片隅を追いやった。

やはりゆきのんと一緒に泳ぐのまちがっている。

うつつ比企谷八幡です。俺は今、雪ノ下家のプライベートビーチに来ている。雪乃と二人つきりかと思いきやそうではない。

雪乃の姉、雪ノ下陽乃さんと一緒だ。この人、友達がいらないのだろうか？今は夏休みで雪ノ下さんはどう見てもリア充だ。

夏とリア充と言えば、他の大勢の人とキャンプや旅行に行ったりしないのだろうか？もつと言えば彼氏と熱い夜を過ごすとか？

「姉さんは友人や知人は居ても彼氏はいないのよ」

「そうなのか？モテそうなのに」

「姉さんはモテるわ。でも告白しようとする人がいないのよ」

「どうして？」

「美人で文武両道の人には近寄りがたいものよ。私のように」

「今、自分の事を褒めたよな？」

俺は今、雪乃と泳ぐ準備をしていた。ようは準備体操だな。二人一組になってやるのをしている。傍らでは雪ノ下さんがこちらをもの凄く不満顔で見えてきた。

「それに付き合ったら姉さんの本性を知る事になるわ。常人だと三日と耐えられないと思うわ」

「確かに。どことなく距離を感じるからな」

「二人……私の事、どんな人間と思っているの!？」

雪ノ下さんは俺たちが言っている事が不満のようだ。俺たちは雪ノ下さんの事を気にせずに準備運動を続けた。

「それじゃ八幡君、お願いね」

「上手く出来るだろうか？初めてなんだよ……」

「大丈夫よ、頼んだわよ」

「お、おう」

雪乃はうつ伏せになってビキニを取った。俺は日焼けクリームを手に取り、少し体温で温めから雪乃の背中に触れた。

「あつ♡……」

「雪乃、変な声を出すな。集中出来ない……」

「仕方ないじゃない。んんっ♡八幡君に触れられると……あんっ♡
き、気持ちいいのだから。あはっ♡」

「もう少しボリユーム下げてくれ……」

「善処するわ。あんっ♡」

そこから全身塗り終わるまで雪乃の卑猥な声は止まる事はなかった。普段から聞いているのだけど、いつもとは状況が違うので興奮してしまおう。

「比企谷く〜ん〜……お姉さんにもお願い♪」

「俺、雪乃以外にはしないと決めているので」

「ちよつとくらいいいじゃない♪今なら私の胸、触ってもいいよ?」

「そういうビッチ発言は処女としてどうかと思いますよ?」

「っ!!?」

雪ノ下さんは握り拳をこちらに向けて、顔を真っ赤にした。顔を赤くするくらいなら言わなければいいのに。

「無駄よ姉さん。八幡君は姉さんの巨乳を持つてしても落とせないわ」

「そ、そんな……男の子はみんな、これが好きでしょ!?!」

「全てと言いませんけど、雪乃のほど魅力は感じません」

「そんな……!!?」

雪ノ下さんはガクリとうな垂れてた。男にとって巨乳はそれだけで目が行ってしまうだろう。しかし成長した胸より成長途中の胸の方が俺は好きだ。

これからどれくらい大きくなるのを想像するのは面白いと俺は思う。そして雪ノ下さんは涙を流しながら走って行ってしまった。

「八幡君……んんっ♡」

「んんっ……雪乃。もうするのか?」

「それはごつちのセリフよ。勃起している、これは何かしら?」

「そ、それは……」

雪乃は海パンで大きくなっていて俺のチンコを撫で回している。

そして海パンを下ろすと硬く勃起した俺のチンコが露になった。

「泳ぐ前にすつきりさせてあげるわ。はむっ」

「のおおおおお……!!」

「んじゆるるるっ……れろっ……んじゆるるるっ……」

「雪乃!雪乃!射精る!!」

びゆるるるるるびゆるるるるっ……

俺は雪乃のフェラに合わせて腰を動かして、雪乃の口に射精した。雪乃のフェラのテクは日に日に上達しているので射精の瞬間、頭が真っ白になる。

雪乃は俺の精子を零さずに全て飲み干した。

「んぐっ……ご馳走様」

「お、おう。そろそろ泳ぐか?」

「そうね……」

雪乃は大きな浮き輪を準備していた。どこぞの大型のプールにありそうな大きな浮き輪だ。雪乃はそっぽを向いていた。

「……体力はあっても泳げないのよ」

「な、なるほど……」

海に浮き輪を浮かべて入った、二人で。流石に大きな浮き輪とは言え、二人で使うと狭い。体を密着させなければならぬ。

成長した雪乃の胸が俺の胸を押し当てられる。うん、成長したな。

「雪乃。もしかして……」

「これなら姉さんには見えないわ」

「それじゃ行くぞ?」

「ええ、きて。んっ♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

雪乃とキスしながらマンコにチンコを挿入した。足が届く場所で行っているが、海の中なのでどこかフワフワしている。

雪乃をしつかりと支えていないと上手く動く事が出来ない。

「あんっ♡八幡君……もつと奥まできてっ♡♡」

「雪乃!!」

「んんっ♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずずっ……ぱんっ!!

俺は雪乃の腰をしつかりと掴んで必死に腰を動かした。雪乃は両腕を俺の首に回してきた。おかげで少し動きやすい。

俺と雪乃が繋がっているけど、周りからは浮き輪でイチャイチャしているカツプルにしか見えないだろう。

雪乃の唇が海水でしょっぱくなっているけど、それでもキスは止められない。

「んっ……ちゅっ……」

「んんっ……れろっ……」

唾液の交換をして、舌と舌を絡めてまた唾液の交換を繰り返す。そうすると頭の中が目の前の雪乃でいっぱいになる。

それは雪乃も同じようにならざるを得ない。俺とのキスをしている。

「雪乃！」

「八幡君っ♡」

「で、射精るー！」

「きてえええ!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「い、いくうううう♡♡お、おなか……あつひっ♡」

水中での雪乃のマンコへの射精は凄く気持ちいい。熱い精子が海水で冷やされて、何度でも雪乃のマンコへ射精が出来そうだ。

それにしても雪乃は大きな声で絶頂したな。誰にも聞こえていないよな？俺たちの周りには誰も居ないはずだ。

雪ノ下さんも俺たちとは別の場所で泳いでいるようだし、問題ないだろう。

「雪乃。まだ大丈夫か？」

「え、ええ。体力はあなたのSEXで付いてきたから」

「そうか。ならさつきより激しく行くぞ」

「ま、待っ——」

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「ひんひん♡♡」

俺は雪乃の言葉を待つより先に激しく動いた。もつともつと雪乃を犯したい。理性は残っている。だけど、本能が目の前を犯せと囁いているようだ。

顔を赤くして、発情している雪乃を俺以外の男が入る隙間を作るな、と言っているようだった。

「雪乃！んっ」

「んんっ♡は、八幡君っ♡すこしゆっくりしてっ♡♡」

「エロい雪乃を前にそんな事、無理だ!!」

「ずずずずっ……ぱんっ!!」

「うひい♡」

俺はさらに腰を激しく動かした。もつと雪乃の感じている顔を見たかった。だらしなく緩んだ顔で涙に鼻水、涎を垂れ流している顔が見たい。

家族にすら見せた事のない顔を見たい。雪乃をもつと俺の色で染めてみたい。

「雪乃！んんっ」

「んんっ♡ひゃひまんしゅんっ♡♡」

「ずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!」

呂律の回っていない雪乃にキスして腰を激しく動かした。俺たちの周りに波が出来ていた。俺は雪乃の尻を揉みし抱いた。

「雪乃！もう限界だ!」

「ひへっ♡わらひにしようはいつ♡♡」

「雪乃!で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるるっ

……

「いぐうううう♡♡♡あ、あしゅひのがおらひやに……いひやいつ♡♡」

俺の射精と同時に雪乃は絶頂した。雪乃のマンコは俺のチンコから精子を全て搾り取ろうと蠢いている。まるで別の生き物のようだ。

雪乃の意識は飛んでいた。家族やクラスメイトですら見た事のない

い無様な顔をしている。俺はゆっくりとチンコをマンコから抜いた。
「んっ……栓をしていないから膣内からあなたの精子が溢れているわ」

「その……すまん。やり過ぎた」

「いいわ。気持ち良かったから……八幡君はどうかしら？」

「俺も気持ち良かった。頭の中が真っ白になった」

「そうならいいわ。それと運んでくれないかしら？腰が抜けて……」

「お、おう」

俺は雪乃を抱えて海から出た。その際に雪乃のマンコからは俺の精子が逆流してきた。まったくどれだけ射精したんだ、俺は？

しかしこれだけマンコへ生射精をして大丈夫だろうか？雪乃は避妊薬を飲んでいるから大丈夫と言っていたけど。

それだって絶対ではないからな。

「本当に八幡君の性欲は怪物ね……」

「え？どうして……」

「下を見たら分かるわ」

「下？あ……」

俺は下半身を見て、雪乃が言っていた事が分かった。俺のチンコが勃起しているのだ。あれだけ射精だったのに、まだ元気なのだ。

雪乃が呆れるのも頷ける。俺だって、ここまで元気だとは思わなかった。

「仕方ないわね……一回だけなら体力が残っているわ」

「いいのか？」

「姉さんがいつ帰ってくるか分からないから早めにね」

「ああ!!」

ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡いきなり激しい♡♡」

俺は必死に腰を動かした。時間がないので早く終わらせなくてはならないからだ。

「雪乃!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「ひいひいひい♡♡……本当に精子を作るのは得意ね」

今回の射精は早かった。それだけ雪乃のマンコが凄かった。もつと雪乃を犯したかったけど、時間がないので終わりにした。

それから雪ノ下さんと合流してシャワーを浴びて帰り支度を整えた。

「夏休みも終わりだな……」

「そうね。次は文化祭ね……」

去年は熱が出たとかで休んだ。今年は雪乃がいるから少しは楽しいかもしれない。

「姉さんの超えてみせるわ」

「頑張り過ぎで倒れるなよ？」

「自己管理くらい出来るわ」

俺たちは海を見て、車に乗って千葉へと帰った。来年も来られたら最高なんだけどな。帰りの車で俺と雪乃は爆睡したのは言うまでもない。

やはりゆきのんと花火を見るのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は今、雪乃のタワマンに来ている。今日は近くで花火大会があるので周りでは花火を見ようと移動する人たちでごった返していた。

正直、どうして態々外で花火を見ようとしているのか俺には分からない。大勢の人たちに揉みくちやにされながらたった数分の花火を見ようとは俺は思えない。

だから雪乃のタワマンなら障害物無しで花火を見られる。

「お待ちせ八幡君」

「お、おう……」

「どうしたの？」

「いや……浴衣、似合っているな」

「ふふっ……ありがとう」

雪乃は淡い青色の浴衣を着ている。しかも髪はアップしているのが普段とのギャップがもの凄くいい！ヤバイ、興奮してきた。

殿様がやった帯回しって遊びをしてみたくなった。雪乃にしたら怒られそうだな。

「それにしてもよかったの？」

「何が？」

「花火をここで見る事よ」

「何か問題でもあったか？」

「そうではないわ。川原の有料席で見る事だって出来たのよ？」

そう言えば、雪乃は社長令嬢だった。金持ちの発言ってどこかズレてるように感じるの俺だけだろうか？

「雪乃は態々人混みの中を進みたいと思うか？」

「思わないわ」

「態々屋台でたこ焼きや飲み物を買おうとするか？」

「スーパ―で買えば十分よ」

「だろ？」

「そうね……ここで見た方がいいわ」

雪乃が俺の言った事が漸く分かったようだ。俺と雪乃はインドア派だ。外より室内でゆっくりしたいのだ。なら外で花火を見るより室内の方がいい。

それにこの部屋は冷房が効いているし、雪乃とすぐにやれるかな。外だと中々出来ないからな。

「たこ焼き、焼き鳥、焼きそば、アイスにコーラやサイダーの飲み物の準備は問題なし！」

「部屋の温度は24℃でいいわね」

「さて、始まるぞ」

「そうね。それにしても誰かと花火を見るのは久しぶりね」

「そうなのか？」

「ええ、だから楽しみにしていたの」

そこから俺と雪乃は窓から花火を大いに楽しんだ。俺の家からも見られるけど、隙間からだから花火全体を見る事は出来ないんだよね。

そして花火大会は終わってしまった。それと同時に雪乃の俺にキスしてきた。

「んんっ」

「んっ……たこ焼きの味がする」

「あなたは焼き鳥ね」

「雪乃。したいのか？」

「ええ、だけどそれはあなたも同じでしょ？」

そう言っつて雪乃は勃起してズボンにテントを張っている俺のチンコを優しく撫で始めた。雪乃の撫では緩急をつけてするので刺激が凄い事になっている。

もうズボン越しに射精してしまいそうだ！だけど雪乃がさせてくれない。

「ゆ、雪乃。早く……」

「ええ、早くしたいわ。でもその前に……はむっ」

「はふっ!？」

「ぢゅるるるぢゅるるるっ……れろっ」

俺がズボンを下ろして勃起したチンコを露にすると雪乃はチンコを啜えてた。そしてフェラを始めた。舌を巧みに使い、俺のチンコに強い刺激を与えてくる。

俺のチンコは雪乃の口の温かさと舌の動きで射精寸前だ。俺はソファアに座っているのに腰が浮かんでしまう。

「ゆ、雪乃！で、射精る！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「んんっ!?……んぐっ……んぐっ……八幡君の精子は本当に凄い匂いで量ね」

「雪乃のフェラが凄いからだろ……」

俺は射精した後、ソファアにぐったりと座り込んだ。最高に気持ちよかった射精だった。それだと言うのに俺のチンコはまだ固いままだ。

一度萎えろと思うけど、まだ満足していない自分がいるのも事実だ。

「私も八幡君に気持ちよくしてもらいたいわ」

「ああ、任せろ。ぢゅるるるるぢゅるるるるっ！」

「あんっ♡んんっ♡ひゃああああ♡♡」

今度は雪乃がソファアに座り股を大きく開いた。俺はその股の間に顔を埋めた。そして雪乃のマンコを舐めた。

それも愛液を吸うようにクリトリスも一緒に刺激した。雪乃は俺の刺激に思わず可愛い声を上げた。俺は舌を雪乃のマンコへと侵入させた。

そして舌で周りを広げるように舐め回した。

「らめえ♡しひゃ♡い、いくうううう♡♡♡」

「おっと……んぐっ……んぐっ……雪乃の潮、ご馳走様」

「わ、わらひのしひよを……へんらいっ♡♡」

俺は雪乃の潮を飲み干した。しよっぱいけど雪乃だと思うと不思議と飲めるんだよな。本当に不思議だよな。

俺と雪乃はまた位置を入れ替えた。俺がソファアに座り雪乃が俺

の上で股を広げてゆつくりと腰を下ろした。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡しゃひまんくんっ♡のおおひい♡」

「雪乃のマンコはキツキツだぞー!」

「あっ♡うひい♡ら、らめえ♡」

「動くぞー!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あっ♡んっ♡あんっ♡」

雪乃のマンコは俺のチンコで突く度にキツく締め付けてきた。雪乃のマンコの締め付けは本当に凄い。頭の中がもう雪乃の事ではいになつてしまふ。

俺は雪乃の尻を掴んでチンコをマンコの奥底まで挿入するようになった。するとマンコの締め付けが強くなってきた。

「はひい♡お、おひゃ♡らめえええ♡♡」

「ゆ、雪乃!射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「い、いぐううううう♡♡♡……しゃひまんくんっ♡のあしゅい♡あんっ♡」

俺の精子が雪乃の子宮に溜まっている。俺のたくさん精子が雪乃の子宮を満たしている。あまりの気持ちいい射精だったので意識が飛びかけた。

雪乃がゆつくりと俺から離れると股から大量の精子が逆流してきた。もの凄い量だと自分で引いてしまふほどだ。

「雪乃……」

「八幡君……もつときてっ♡」

「いくぞー!」

「ひゃああああ♡♡」

雪乃が壁に手を付いて尻をこっちに向けて左右に挑発するように振ってきた。俺は我慢出来ずに後ろから雪乃のマンコへと挿入した。

雪乃が挿入しただけで軽く絶頂した。俺は雪乃の両手首を掴んで思いつき突いてやった。

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずずずず……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡あひゃ♡」

「雪乃!雪乃!雪乃!」

「んっ♡あっ♡はふう♡」

「雪乃!」

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「ああああああ♡♡」

俺は必死に腰を激しく動かした。もう雪乃以外の事なんてどうでもいらいに。俺は兎に角、雪乃を気持ちよくする事しか考えていなかった。

「雪乃!で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「ひゃああああああ♡♡♡」

「おおおお……射精る射精る」

先ほど射精したばかりなのにまだ雪乃の子宮に精子を俺は注ぎたがっている。もっと雪乃の感じさせて俺以外の男では満足出来ない体にしてやりたかった。

俺は雪乃のマンコからチンコを抜いた。俺が射精した精子がまたしも逆流してきた。精子を逆流させている雪乃はとってもエロかった。

乱れた浴衣に発情した顔、牝の独特のフェロモンなどまだまだ疲れてはいらない。

「雪乃。まだいけるか?」

「はあ……はあ……まだしたいの?仕方ないわね」

「悪いな……」

「そう思うなら私の事を気持ちよくしなさい」

「ああ、任せろ」

俺は雪乃の抱えてベランダへと向かった。花火大会が終わって静かなになった外は思ったより静かだった。

「ま、まさか八幡君。あなた……」

「ここならスリルがあるだろ？」

「ここまで来ると本当に変態ね」

「いくぞ……」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「ま、まちな——ひゃあああああ♡♡♡」

俺はベランダで雪乃を抱えるようにしてチンコをマンコへ挿入した。マンコの締め付けは外に影響して強く締め付けてきた。

俺は雪乃の言葉を待たずに犯した。雪乃は挿入した際に絶頂したようだけど、周りには聞こえていないようだ。

「雪乃。いくぞ!」

「ま、まひいなしゃい♡」

「ずずずずずつ……」

「しよこ、おひりっ♡はふう♡」

俺は雪乃の尻穴に指を侵入させた。締めりが強いから指一本しか入る事が出来ないけど、それでも十分だ。

指が尻穴に入るとマンコの締めりが強くなった。気の強い女は尻穴が弱いと聞くけど、雪乃はどうなおだろうか？

そもそも気の強い女は尻穴が弱いと聞くのだろうか？もしかして尻穴に何か入れられるのは屈辱的なのだろうか？

「は、はひましゅんっ♡ゆ、ゆびぬいへえ♡」

「だけど、雪乃の尻穴は俺の指を離してくれないんだけど？」

「ゆび、だひいれしゅないでっ♡♡」

俺が雪乃の尻穴で遊んでいるとマンコの締めりがどんどん強くなっていく。そろそろ終わらせるとするか。

俺は雪乃の尻穴に挿入している指を激しく前後させた。

「ひぎいいいい♡♡お、おひりこはれるう♡」

「雪乃!射精るぞ!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡」

「と、止まらない……」

雪乃の子宮への射精が止まらない。尻穴の指への締め付けが緩んだ。恐らく絶頂した際に気絶したようだ。

俺は尻穴から指を抜いた。流石に洗わないと臭いな。夏とは言え、半裸では風邪を引いてしまうな。汗を大量に出した事だし、風呂でも入るかな。

俺は雪乃を抱えたまま風呂場へと向かった。雪乃とする前に準備しておいて正解だった。

「まったくあんな屈辱は初めだったわ」

「その……済みません！」

「今度はあなたの尻を開発してみようかしら？」

「それはだけは絶対にしないで！」

風呂に入りながら雪乃がとんでもない事を言っているよ！ちなみに俺たちは繋がったまま風呂に入っている。

チンコをマンコから抜くタイミングを逃してしまったからだ。もう雪乃の尻穴には触れないぞ！俺の尻穴を守るためにも絶対にだ。

尻穴を開発されて変な性癖が目覚めてしまったら嫌だぞ！俺と雪乃はお互いに体を洗ってベッドに向かいそのまま眠りについた。

「やはりあなたのお尻を開発したいのだけど？」

「絶対にもう触りませんから！」

やはりゆきのんと打ち上げをするのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。みんな、文化しているか？総武高校の文化祭があった。てか、もう終わった。話すのは面倒なので割愛させてもらう。

その文化祭で俺はなんと文化祭実行委員の副委員長になっていた。これも委員を決める際に寝ていた俺を平塚先生が勝手に実行委員にしたのだ。

でもそれはある意味、良かった。何故なら雪乃も実行委員になっていたからだ。そこで雪乃は委員長になり、俺は副委員長になって文化祭の準備に取り掛かった。

雪乃のスケジュール管理は凄かった。おかげで余裕を持って文化祭を開催する事が出来た。途中、雪ノ下陽乃さんの妨害があったがなんとか文化祭を終える事が出来た。

そして文化祭は何の事故も事件もなく、終わる事が出来た。片付けも終わり、後は帰って打ち上げをするだけだ。

今までなら速攻で家に帰って寝るだけだったけど、今回は俺も打ち上げに誘われたのだけど、先客があった。

それは雪乃だ。俺たちは文化祭が終わったら二人で打ち上げをする事を計画していたのだ。それに俺を打ち上げに誘ってきたのは葉山だ。

どうせ、あいつの事だ。俺と雪乃の関係を探るために誘ったのに違いない。気になるなら直接聞けばいいと思うけど、それが出来きないから俺から間接的に聞き出そうとしたのだろう。

それと雪乃もクラスメイトから打つ上げに参加して欲しいと誘われたそう。俺が出会った当初と比べたらかなり丸くなったと思う。

あの頃は尖った氷柱のような女だったからな。だけど、今ではクラスに話す相手がいるほどに成長した。俺は未だにボツチだけだな！

その友人の誘いを断って俺と打ち上げをしたいなんて、嬉し過ぎる

！今夜もたくさん犯してやるか！

「八幡君。これくらいあれば足りるかしら？」

「いいんじゃないか。多くて困る事はないだろ」

「そうね……今夜をずいぶんと楽しみにしていたのよ」

「それは俺もだ……文化祭の時はずっと我慢していたんだぞ」

俺と雪乃は買い物に来ていた。文化祭の振り替え休日部屋の中で一日中、過ごすからだ。文化祭の準備期間の時に雪乃と話し合っ
て、セックスを禁止にした。

セックスをして文化祭の準備に支障が出ては元子もないからだ。ただ、今夜ついに解禁になる！だから二日以上、部屋に引き籠もつて雪乃とセックスしまくる！

そのための食料調達だ。ああ、早く雪乃を犯したい！涙や涎で顔がグチャグチャになるまで！

雪乃も待ちきれないようでチラチラと俺の下半身を見てきていた。

「八幡君っ♡んんっ♡♡」

「んんっ……雪乃、ちよつとここ玄関」

「だから何？んっ♡」

雪乃のマンションに到着して玄関に入って扉を閉めたら雪乃から熱烈のキスをされた。久しぶりの雪乃の唾液はどんな飲み物より美味かった。

それに鼻腔を抜ける雪乃のいいシャンプーが俺を興奮させる。チンコはもう勃起して少し痛いくらいだ。

俺たちはキスを十分、堪能した後寝室に移動した。すぐさま服を脱いで全裸になった。雪乃の裸はもの凄く綺麗で目を奪われる。

「雪乃のマンコ、愛液で大洪水になっているな」

「八幡君のチンコだって、噴火寸前よ」

「れるっ……ちゆるるるっ」

「はむっ……ちゆるるるっ」

俺はベッドに寝転び雪乃のマンコを舐め、雪乃は勃起した俺のチンコを舐めた。シックスナインで十分、濡らしておかないと久しぶりだから痛いかもしれない。

雪乃のクリトリスは大きくなり、愛液は早く犯してと言わんばかりに溢れていた。それにしても雪乃の舌は最高に気持ちいい。

「雪乃。もう射精しそうだ」

「そう。でも最初の一回目は私の膣内によ」

「ああ、分かっている」

「いくわよ。んんっ♡」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

俺は寝転んだまま、雪乃が俺のチンコを跨り挿入した。相変わらず雪乃のマンコの締めりはギュウギュウでちよつとでも気を抜くとすぐに射精してしまいそうだ。

「ゆ、雪乃!」

「八幡君っ♡」

「で、射精る!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ……

「ひゃあああああ♡♡♡は、八幡君の熱いのたくさん……」

久しぶりの雪乃の膣内出しは本当に最高だ。今も雪乃のマンコが俺のチンコから精子を根こそぎ奪い取ろうと蠢いている。

雪乃は犯す度にどんどんエロくなっている。そして俺はどんどん雪乃にメロメロになっっている。雪乃以外の女性と付き合うなんて考えられない。

「雪乃、大丈夫か?」

「も、もちろんよ。腰なんて抜けていないのだから……」

「抜けたのか……」

雪乃は絶頂した瞬間、俺の胸に倒れ込んできた。雪乃の成長した胸が押し付けられて最高です!俺は空かさず雪乃の乳首に吸い付いた。

「ちゅうううう」

「うひい!?そ、そんなに乳首に吸い付くなんて……あんっ♡」

「雪乃の乳首が美味しいのが悪い」

「乳首が美味しいなんて、本当に赤ん坊ね。んんっ♡」

「ちゅうううう」

俺は雪乃の乳首を堪能した。将来、ここから母乳が出ると考えると興奮してくる。早く高校と大学を卒業して雪乃と結婚して、子供を孕ませて母乳を飲んでみたい。

「ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!」

「あんっ♡んっ♡ひい♡♡」

「雪乃!」

「は、激しいっ♡」

俺は休んでいる雪乃の腰を掴んで腰を激しく上下させた。絶頂した雪乃のマンコは敏感になっているのか俺のチンコをギュウギュウに締め付けてくる。

そろそろ俺の限界に近い。俺は雪乃を押さえつけてチンコをマンコの一番奥まで押し込んだ。

「雪乃!射精る!」

「き、きてっ♡」

「で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「ひゃあああああ!!」

俺の精子が大量に雪乃の子宮目掛けて射精された。ここ数日間、溜め込んでいた精子が開放されて喜んでいるようで暴れている。

そして雪乃のマンコに収まりきらない精子がマンコとチンコの間から溢れてきた。それでも射精が止まる事はなかった。

「雪乃!止まらない!!」

「じゃ、射精しながら……突かないでっ♡」

「ずずずずずず……ぱんっ!!びゅるるるるるっ……」

「雪乃!」

「はひい♡♡い、いぐうううう♡♡♡」

一頻り射精したのか俺のチンコは漸く落ち着いた。雪乃は絶頂し続けたのか、ぐったりしている。俺は雪乃から離れた。

するとマンコからは俺が射精した大量の精子が逆流してきた。雪

乃は軽く痙攣している。どうやらまだ絶頂の余韻に浸っているようだ。

「は、八幡君。喉が渴いたわ……」

「オレンジでいいか？」

「ええ、口移しで飲ませなさい」

「はいはい。仰せのままに……んっ」

「んんっ」

俺はオレンジジュースを口に含んだら雪乃に口移しをした。そこから俺たちは小休憩を挟む事にした。買ってきた惣菜やお菓子を食べた。

その際も口移しをして、今までイチャイチャ出来なかった分を取り戻すようにお互いを求め合った。マツ缶を飲まなくても甘い事つてあるんだな。

「雪乃。尻をこっちに向けてくれるか？」

「ごうかしら？」

「ああ、そのまま……」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「うひい♡お、奥まできたっ♡」

小休憩をして体力が回復したので俺は雪乃を後ろから犯した。両手首を掴んで乱暴に挿入した。チンコの先が子宮まで到着した。バックからの方が奥まで届くな。

「ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!」

「ああっ♡んんっ♡あんっ♡」

「雪乃!」

「ら、らめえ♡ああっ♡」

「おおお!!」

雪乃のマンコは俺のチンコをギュウギュウに締め付けてくる。俺はさらに激しく腰を前後させた。もっと雪乃を感じさせたかったからだ。

「ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡んっ♡あひゃ♡」

「雪乃! 凄い締め付けだ!」

「んんっ♡ああっ♡」

「雪乃!」

「あああああ♡♡」

雪乃のマンコは凄い力で締め付けてきた。もっこのマンコを犯したい。俺の精子で満たしたい。そんな気分になってきた。

もつと誰も知らない雪乃の厭らしい顔を見たい。だから俺は腰を激しく前後させた。もう俺の理性を制御出来ないでいた。

ずずずずずっ……ぱんっ!! ずずずずずっ……ぱんっ!! ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ああっ♡は、はひいまんひんっ♡♡や、やしゅまへてっ♡♡」

「それは無理だ! 雪乃をもつと感じたい!」

「ら、らめえええ♡♡あらま、ましゅひいろお♡♡」

「雪乃!」

雪乃はついに呂律が回らなくなってきた。俺はラストスパ―トをかけた。雪乃をベッドと俺でサンドした。

雪乃を逃げられないように。元々逃げないのは分かっているけど、何となくそうしたかった。

「雪乃! 射精るぞ! しっかりと受け止めろ!」

「は、はひいらんくんっ♡♡」

「雪乃! ぐっ」

びゅるるるるびゅるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡」

俺の精子が雪乃の子宮に溜まってきている。そして入りきらなかった精子が逆流してきた。俺は雪乃から離れて、雪乃をうつ伏せから仰向けにした。

そこには顔を真っ赤にして、涙に鼻水と涎でグチャグチャにした雪乃がいた。俺は雪乃の顔にチンコを近づけた。

「はむっ……ぢゅるるるるっ……」

「雪乃！射精る！」

びゅるるるるるっ……

「んぐっ……」

「雪乃！もつとだ！」

雪乃は俺のチンコを加えてフェラをして、俺の精子を飲み干した。マンコも口も雪乃は最高だ。そして昼まで雪乃と一緒に爆睡して起きて体を洗いながら雪乃を犯した。それから飯を食べて腹を満たしてからまた部屋に引き籠もって抱いた。

最高の一日になったのは言うまでもない。そして雪乃のフェラで目覚めるのだった。

「このケダモノ……」

「すみません！」

次の日、軽蔑の眼差しを俺に向けてくる雪乃がもの凄く怖かったのは言うまでもない。お詫びにマッサージをして許してもらった。

やはりゆきのんと貸切するのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は今、学校の修学旅行で京都に来ている。奈良とか京都は修学旅行の定番だと思う。そして今は最終日のホテルに来ている。

俺は雪乃と一緒にホテルの通路を歩いてある場所に向かっていた。他の生徒に見られないように細心の注意を払ってだ。

「葉山たちは今頃、修羅場かな？」

「そうね。そうならいい気味ね」

「海老名さんには悪いけど……」

「断ったのは正しい判断よ。他人の恋愛事情に関与するべきではないわ」

「そうだよな。俺たち経験少ないから……」

俺と雪乃は修学旅行前に依頼してきた葉山と海老名さんの話をしていた。正確には戸部が依頼人なんだけどな。あいつの依頼って言うのが海老名さんに告白するので断れないように手助けしてくれと言うものだった。断られる事が怖いんだったら最初から告白なんてするな!!

戸部の後に海老名さんもやってきて今度は戸部の告白を断っても今の関係が壊れないように手を貸して欲しいという依頼だった。

告白されて壊れるくらいならさっさと告白しても無駄な事を言えばいいのに。

そして修学旅行中に葉山も依頼してきた。グループを壊す事無く今の関係が続けられるようにして欲しいと依頼だった。もちろん全て断った。

「あの男は決断すら満足に出来ないヘタレな男なのよ」

「酷くない言いよう。その通りだよな。仲間との関係が壊れるくらいな最初から作るなよ」

「今頃、四苦八苦している事よ」

「それはそうと……雪乃、この貸切風呂をどうやって借りたんだ？」

俺と雪乃は今、泊まっているホテルにある貸切風呂に来ている。こ

こは未成年では借りる事が出来なかつたはずだ。もし借りられたとして絶対にホテル側が学校に言うに決まっている。それなのにどうやって借りたんだ？

「姉さんにここを借りてもらい鍵を後で渡して貰ったのよ」

「それ大丈夫か？ホテルにバレたら大事になるぞ……」

「大丈夫よ……姉さんが何とかしてくれるわ」

「あの人任せかよ……」

確かにあの人なら何とかしてくれろような気がする。妹の雪乃のためだったら。いかいにもシスコンって感じだったからな。

それにしてもこの貸切風呂の眺めはいいな。京都の街が一望出来る上、雪乃と二人つきりだ。

「それにしても雪乃。どこか疲れていないか？」

「クラスの人たちにあなたとの関係を色々聞かれたから……」

「そうか。それは大変だったな」

俺と雪乃が付き合っていると文化祭以降、噂になっていた。確かに文化祭の時に一緒に周っていたし、お互いの家にも行き来していたからな。

もしかしたら誰かに見られていたかもしれない。

「八幡君。んっ♡」

「んんっ……雪乃」

「ずっと我慢していたのよ」

「俺だって……」

クラスが違うから一緒に行動は出来ないからな。俺は雪乃成分を一定時間摂取しないと禁断症状が出てしまうのだ。それは雪乃も同じなようだ。

「だから早く私のマンコの挿入して滅茶苦茶にしてっ♡」

「雪乃！」

雪乃は壁に手を付いて尻をこっちに向けて左右に振ってきた。マンコからは愛液が垂れていた。そんな事をする後悔する事になるぞ？

俺は雪乃の腰を掴んでチンコをマンコに一気に挿入した。相変わ

らず雪乃のマンコの締め付けは強かった。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あぁっ♡」

「雪乃、動くぞ?」

「ええ、早くしてっ♡」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡はひい♡」

俺は自分の腰を雪乃の尻に激しく打ちつけた。その度に雪乃はエロい声を我慢する事無く出していた。本当にエロい。

俺が激しく動く度に雪乃の体が色々と揺れる。髪、胸、尻など見ていて飽きない。それにマンコの締め付けが強くなる。

「雪乃!で、射精するぞ!」

「ぎ、きてえええ♡♡」

「射精る……うっ!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「ひゃああああ♡♡は、八幡君の熱いのたくしゅんっ♡」

俺の数日分の精子が雪乃の子宮へと射精された。射精が止まらない。修学旅行の二日前から抜いていないからな。

そこから最終日まで雪乃と一緒にいられなかったから金玉にたっぷり精子が溜まっていたようだ。

「いくらなんでも溜めすぎじゃないかしら?」

「その……すまん。雪乃じゃないと抜けなくて……」

「嬉しいけど、男性は定期的に射精しないと体に悪いのだから」

「ああ、気をつける」

「だから早く溜まっている分、全部を私に射精しなさい」

俺のチンコはまだ雪乃のマンコの中で硬いままだ。もつと雪乃を犯したいんだろう。元気な事は結構だけど、雪乃の体力が心配なんだよな。

最初に会った時より体力は付いてきたと思うけど、まだ少ない。俺

は一度、雪乃から離れた。

「雪乃。体勢を変えたいんだけど……」

「もちろんいいわよ。これでいいかしら？」

「ああ。体、柔らかいな」

「誰かさんと激しく運動しているおかげね」

そうだったのか!? セックスすると柔軟にもなるの!? でも今は雪乃を犯す事だけを考えろ!! 雪乃は後ろ向きから前向きに体勢を変えてくれた。

そして片足をバレーのように高く持ち上げて片足立ちになった。股からは先ほど俺が射精した精子が垂れていた。

「いくぞ……」

「ええ、来て」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「はひい♡は、八幡君のチンコが私の奥まで来ているううう♡♡」

俺のチンコの先が雪乃マンコの奥の子宮の入り口まで到達していた。雪乃はそこを突かれるのが好きなんだよな。

「ずずずずず……ぱんっ!! ずずずずず……ぱんっ!! ずずずずず……ぱんっ!!」

「ああっ♡んんっ♡あんっ♡」

「雪乃! 雪乃! 雪乃!」

「は、八幡君っ♡んっ」

「んんっ」

俺は雪乃とキスしながら腰を激しく動かした。雪乃のマンコはチンコで突く度にギュウギュウと締め付けてくる。

それにしても雪乃の体はスベスベで気持ちがいいよな。触っただけで興奮してくるよ。本当は一日中、雪乃とくっ付いていたいけど。

「雪乃! また射精る!」

「ええ、いいわ! 私に全部、頂戴!」

「で、射精る!」

びゅるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いくうううう♡♡♡ああああ♡♡♡」

また俺の精子が雪乃の子宮へと射精された。またしても射精が止まらない。早く高校と大学を卒業して雪乃と結婚して孕ませたい。

その時も今日みたく数日、精子を溜めてからするのがいいだろう。確実に孕ませてやるつもりだ。早く学生を卒業したいぜ。

「んっ♡八幡君、本当に溜め過ぎよ……」

「それは本当にごめんさなさい」

「私の子宮があなたの精子でパンパンになっているのよ？おかげで妊婦みたいにお腹が膨れてしまったわ」

「それだけ俺が精子を射精したのか……」

雪乃のお腹は確かに少しだけ膨れていた。お腹が少し膨れるほど精子を射精したのか。俺が雪乃のマンコからチンコを抜くと精子が逆流してきた。

すると膨れていたお腹はヘッコンで来たので俺は子宮が在りそうなお腹を手で押して精子を押し出した。

「おお♡おお♡ぎゃ、逆流で……い、いくうううう♡♡♡」

「しゃあああ……」

雪乃が精子を逆流すると絶頂すると同時に小便を漏らした。それだけ気持ち良かったのだろう。雪乃のアへ顔を見られたのはいいね！

普段は凜々しい雪乃が涙、鼻水で顔をグチャグチャにするのは最高に興奮する！

「雪乃。綺麗にしてくれ」

「はむっ……ちゆるるるるっ」

「のおおおお!!」

雪乃の顔にチンコを近づけると啞えて顔を前後に動かしながら舌でチンコを綺麗に舐めてくれた。雪乃のフェラは腰が抜けてしまうほど気持ちがいい。

また射精してしまう！俺は雪乃の頭を掴んでチンコを喉奥へと押し込んだ。

「射精るー」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ……」

雪乃が俺の精子を零さずに全て飲んでくれた。俺のチンコは漸く萎えてくれたよ。あれだけ射精をしたんだ。萎えてくれないと困る。だけど、雪乃はまだ物足りないような顔を俺のチンコへと向けてきた。そんな顔されても元気にはならないぞ。

「八幡君。まだ出来るでしょ?」

「ちよつと休憩させて……倒れる」

「ほらこれが見えないの?」

「ゆ、雪乃……」

雪乃は足を広く開いてマンコを両手で広げて見せてきた。まだ俺の精子が残っているのかマンコからは精子が逆流して来ていた。

「雪乃!」

「ぎやあ!?!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ああっ♡」

あそこまで煽られては犯さない訳にはいかない。俺のチンコはすっかり元気を取り戻して、雪乃のマンコへと挿入した。

でもあまりここに長居すると教師にバレるかもしれない。早くしないとい!

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ああっ♡あんっ♡あっ♡」

「雪乃!もう射精る!」

「は、八幡君っ♡んんっ♡」

「んんっ!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

俺は雪乃とキスしながら射精した。金玉の中の精子が今ので全て雪乃の子宮の中へと射精された。もう俺の金玉の中身はすっからかんだ。

「はあ……はあ……修学旅行も悪くないわね」

「修学旅行、関係ないだろ……」

「八幡君には次するまでに少し溜めてもらった方が気持ちよくなれると分かったわ」

「えっ!?次するのに間を空けるのか?」

「ええ、そうよ」

雪乃はいい笑顔で恐ろしい事を言ってきたよ。俺としては毎日、雪乃を犯したいのに!それを数日空けるとか絶対に嫌なんだけど!?

「まずは一週間でどうかしら?」

「それは絶対に嫌だ!せめて2〜3日にしてくれ!」

「それくらいが妥当かしらね」

「よ、良かった……」

一週間とか冗談ではない。それだけでも避けられたのは良かったと言えるだろう。そして俺たちは誰にもバレないようにこっそりと部屋に戻った。

それから修学旅行は終わり、千葉へと帰ったのであった。早く雪乃を抱きたい。

やはりゆきのんとイヴを過ごすのはまちがっている。

うつつす比企谷八幡だ。今は12月24日、リア充どもが大量発生する時期だ。去年までだったらリア充どもに呪いを込めていたけど、今年から俺もリア充の仲間入りを果たした。

美人の彼女である雪ノ下雪乃と一緒にイヴを過ごす予定だ。まさかボツチの俺が彼女とイヴを過ごす事になるなんて想像もしていなかった。

今や雪乃のマンションに半同棲している俺は朝から部屋の掃除をしていた。今夜はここで過ごすからだ。雪乃は実家に呼び出されて行っているのでさっさと終わらせておきたい。

「ふう……こんなものか」

「ただいま」

「雪乃。おかえり」

部屋の掃除が終わると雪乃が帰ってきた。大きな袋を持って大変そうだな。何を買ってきたんだ？

俺は雪乃から袋を受け取った。中身は今夜のご馳走の食材だった。こんなに買い込んできて、数日は外出しないつもりか？

「雪乃。当分、引き籠もるつもりか？」

「ええ、そうよ？何、外に出たいの？」

「いや、雪乃と一緒に一ヶ月は引き籠もりたい」

「それもいいわね。でもそれは結婚してからね」

結婚したなら引き籠もる事出来るのか!?夢の専業主夫も叶うのか!絶対に雪乃と結婚しなくては!夢のために雪乃、結婚してくれ!

「八幡君。んっ♡」

「んんっ……雪乃、もっとなりたい」

「もちろん、いいわよ。んんっ♡」

俺は雪乃と深いキスをした。雪乃は腕を俺の首に回して、俺は雪乃の腰に腕を回してお互いに固定した。俺たちはお互いの唇と舌を貪る様にキスをした。

お互いに相当、依存しているのは目を見るより明らかだ。止めなけ

れば駄目だと思うけど、体が言う事を聞いてはくれない。

「雪乃。んんっ」

「んっ♡八幡君……あんっ♡」

「もう濡れているのか？」

「仕方ないでしょ……あなたとのキスは興奮するのだから」

俺は雪乃とキスしながら雪乃のマンコに触れたらパンツまでグツ
チヨリと濡れていた。どれだけ興奮していたんだ？

それは俺も言えた義理ではない。雪乃とキスしただけでチンコは
痛いくらいに勃起してしまっただけだから。

早く雪乃を犯したくて仕方ないんだ！俺は雪乃をお姫様抱っこで
寝室まで運んでベッドに押し倒した。

「あんっ♡まだ昼間なのに我慢出来ないのかしら？」

「我慢が出来ないのは雪乃もだろ？マンコから発情した牝の匂いがす
るぞっ…」

「ふふっ……発情するのはあなただけよ。八幡君っ♡」

「雪乃！もう我慢出来ない！」

「それは私もよ。でも服を脱いでからよ。シワになるわ」

俺は雪乃は服を脱ぎ捨てた。いつ見ても雪乃の裸体は惚れ惚れし
てしまうほど、美しい。白い肌に大きな胸、括れた腰、程よい尻を持っ
ているのだからな。

これほどの美人が他にいるだろうか？探せばたくさん居るだろう
だけど、俺にとって一番の美人は雪乃以外、ありえない。

「雪乃のマンコは愛液がドバドバと溢れているな」

「八幡君のチンコは私を犯したくてガチガチに勃起しているわよ」

「ちゅっ……ちゅるるるるるっ……れろっ」

「はむっ♡ちゅるるるるるるっ……れろっ」

俺と雪乃は69状態になって俺は雪乃のマンコを攻めて、雪乃は俺
のチンコを攻めた。雪乃のフェラは本当に気持ちがいい。

舌を使って尿道の入り口を適度に攻めて来るからな。一体、どこで
そんなテクを覚えたんだ？

「ゆ、雪乃！もう射精でしましそっだ！」

「は、八幡君！私もだめえ♡」

「で、射精する！」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……

「い、いくううう♡」

しやああああ……ぴゅっ……ぴゅっ……

俺は射精し、雪乃は潮を噴き出した。俺の顔には雪乃の潮がかかり、雪乃の顔には俺の精子が大量にかかっている。

雪乃の潮を舌で口の中へと運んだ。雪乃の体液はどれも最高に美味だと言える。さらに興奮してきた。

「雪乃！」

「きやあ!?もう乱暴なんだから」

「いくぞ……」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい♡い、いきなり奥にっ♡」

俺は雪乃をベッドにうつ伏せにしてから後ろからマンコの奥にチンコを挿入した。まるで獣の交尾のようだ。

俺は雪乃の腕を押さえつけて腰を乱暴に振った。雪乃のマンコは乱暴にチンコに突かれて喜んで潮を噴き続けた。

「雪乃！雪乃！」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ああっ♡んんっ♡あんっ♡そ、そんなに乱暴にっ♡」

「雪乃！」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひゃあああああ♡♡♡」

雪乃は俺のチンコの突きに耐えらずに絶頂したようだ。だけど、俺は腰の動きを止めなかった。何故ならまだ俺は射精していないからだ。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい♡は、八幡君……待って。イッたばかりで敏感になっているからっ♡」

「俺はまだ射精していないんだ。雪乃だけ気持ちよくなるのは駄目だろ?。」

「ま、待って!?」

「ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「あんっ♡んっ♡ひい♡」

俺は雪乃の尻に向かって腰を激しく前後に振った。雪乃はチンコで子宮の一番奥をノックされるとマンコの締め付けを強くする。

だから俺は雪乃を後ろから突くのが好きだ。この締め付けが最高にいいからな!

「雪乃!もう射精そうだ!」

「は、早く私の一番奥につ♡」

「で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるつ……びゅるるるびゅるるるつ……

「ああああああ♡♡お、奥に八幡君の熱いのがたくさん、射精ているっ♡」

雪乃のマンコの奥——子宮に俺の精子が大量に注いでいる。俺の射精と同時に雪乃のマンコが俺のチンコを強く締め付けてきた。

俺のチンコから精子を根こそぎ奪い取ろうと蠢いている。腰が碎けてしまいそうなくらい気持ちがいい。

「あなたの精子はたった一晩で作り過ぎじゃないかしら?」

「し、仕方ないだろ……作られてしまうんだから」

「毎日、しっかりと抜いておかないと金玉がパンクするわね」

「そうだな……てか、女子が金玉って言うなよ」

雪乃は手を俺の金玉に伸ばして揉んできた。ちよつと雪乃さん!そんなに揉まないで!折角、すつきりしたんだから!

「えい!」

「のわあ!ゆ、雪乃?」

「今度は私が動くわ」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「んあっ♡」

雪乃が繋がったまま俺をベッドに押し倒した。そしてそのまま腰を上によってから下へと落とす。その際に俺と正面向くように体勢を変えた。

繋がったまま体勢を変えるものだからチンコがマンコの回転に刺激されて硬くなってしまった。

それにしても雪乃の胸は大きく育ったものだ。最初こそ、貧乳だったのがもう手から溢れるくらいの大きさになったからな。

「本当にこの男の性欲は遠慮知らずよね」

「わ、悪かったな……」

「別に悪く言った訳ではないわ。むしろ私のストレス発散に一役買っているのだから褒めているのよ」

「褒められている気がしない。おら」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「あんっ♡」

俺は腰を上突き上げた。雪乃のマンコの締めりはよく最高だ。俺のチンコを締め付ける、このギュウギュウした感じが堪らない。

俺は雪乃の腰を掴んで上と腰を突き上げ続けた。

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!」

「あんっ♡あっ♡んんっ♡」

「雪乃!もう射精る!」

「いいわ!私の一番、奥に好きだけ射精しなさい!」

「うっ……で、射精る!」

「びゅるるるるびゅるるるる……びゅるるるびゅるるるるっ……」

……

「あああああ♡♡♡い、いくうううう♡♡♡」

俺の射精と雪乃の絶頂が同時に来た。そして雪乃は前のめりに倒れてきた。雪乃の胸が俺の胸に押し付けられるのはいいね。柔らかくてマシユマロみみたいだ。

「んっ♡これで明日まで大丈夫ね?性欲大王」

「人に変なあだ名を付けるな」

「あら性欲魔神の方が良かったかしら？」

「どちらによせ、性欲は付くのね」

雪乃は繋がったまま俺の胸の上でクスクスと笑い出した。何がそんなに面白いのか分からないけど。俺たちはそれから夕食の準備をして少し仮眠を取った。

「雪乃。これプレゼントだ」

「あら八幡君が私に？」

「悪いかよ……」

「いいえ、嬉しいわ。何かしら……指輪」

俺が雪乃へのプレゼントにしたのは指輪だ。と言ってもかなりの安物だけだな。それでも高校生には高額なんだけだな。

雪乃は俺からの指輪を左の薬指に嵌めると顔を真っ赤にしてニヤニヤしだした。

「雪乃。大丈夫か？」

「え、ええ！もちろんよ。私もプレゼントがあるの」

「お、おう。それでなんだ？」

「……出来たの」

「え？」

雪乃は自分のお腹——子宮の上を撫で始めた。俺はそれを見て顔から……いや全身から汗が止まらなかった。

すると雪乃がクスクス笑いだした。何がどうなっているんだ!?

「冗談よ」

「笑えない冗談は心臓に悪い」

「正月にハワイに旅行に行きましょう」

「は、ハワイ!？」

雪乃は飛行機のハワイ行きの手ケットを見せてきた。それと自分と俺のパスポートもだ。いつの間に用意したんだ？準備のよろしい事で。

「ハワイで思いっきりSEXしましょ」

「おい。ハワイでは泳げよ」

「泳ぎたいの？」

「いや、部屋に引き籠もりたい。雪乃と一緒に」

「それでしょ」

ハワイのホテルから海を見ながら雪乃とSEXするのもいいかもしれない。てか、飛行機に乗ってハワイにまで行ってSEXかよ。

どんだけ性欲まみれの生活しているんだ？俺たちは。でもいいな、最高じゃないか！正月にハワイとか、楽しみだ。

「行くまで日常会話程度の英語を覚えのよ」

「え、覚えなきや駄目か？」

「もちろんよ。ハワイで道に迷いたいの？」

「迷うのはどっちかと言うとお前な気がするけどな……」

雪乃は方向音痴だからな。デパートで以前、迷っていたほどだからな。心配になってきた。でも俺が24時間、ずっと一緒にいれば解決するか！

雪乃とのハワイが楽しみになってきた！早く来ないかな、正月！

やはりゆきのんと正月を過ごすのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は今、雪乃のマンションで年越しのカウン
トダウンのテレビ番組を見ていた。もちろん俺の隣には雪乃が座っ
ている。

半年以上前まで俺に彼女が出来て年越しを一緒に過ごすなんて思
いもしなかった。毒舌の貧乳だと思っていたのに。

「……何か言ったかしら？」

「いえ！何でもありません」

「そう……ならいいわ」

雪乃さん、あなたはエスパーですか!?これはおちおち下手な事は考
えない方がいいだろう。それにしても一々仕草が可愛いな！

俺の腕に自分の腕を軽く絡めて肩に顔を乗せてきている。そのお
かげで僅かに香る雪乃のシャンプーが俺の鼻腔を刺激してくる。

「八幡はシャンプーの匂いが好きなのかしら？それとも私の匂い？」

「それは雪乃の匂いに決まっているだろ」

「……ストレートにそう言われると恥ずかしいわね」

雪乃は顔を赤くしてそっぽと向いてしまった。またそんな可愛い
仕草をされると襲いたくなるだろ!?でもぐつと我慢した。

年越しをすと言ったからにはちゃんとしないと。雪乃のマン
ションで過ごすようになってから食事、睡眠、勉強以外はほぼセック
スしかしていないからな。

もう発情しまくりの猿と言われても文句は言えない。

「もうすぐね……」

「そうだな……あと10分か……」

テレビで今年があと10分で終わる事を大々的に言っている。今
年は色々あったな。独身教師に変な部活に入られて、その毒舌女を
レイプして、彼女になったな。

そして奉仕部として色々な依頼をこなして行った。最初は苦痛
だったけど、雪乃と居られて楽しかったな。

「明けましておめでとう八幡」

「明けましておめでとう雪乃」

「んっ♡」

「んんっ……」

新年の挨拶をした俺たちはキスを交わした。雪乃が俺の太ももの上に乗ってきて、お互いの舌を絡めた。このキスも慣れたものだ。

最初はキスするのですら恥ずかしがっていた俺たちが今ではデイープキスまでするようになったんだからな。

「雪乃。続きはベッドでするぞ」

「ええ、八幡」

「よつと……」

俺は雪乃をお姫様抱っこで寝室まで運んだ。そして雪乃の服を脱がした。ここ半年で成長した胸が露になった。

俺は雪乃の後ろに回り込んで胸を鷲掴みにした。最初は手にすっぽり収まるほどだったけど、今では零れそうになる。

「んんっ♡本当に八幡は私の胸が好きね？」

「当たり前だろ。それに男でこの胸に興奮しない奴はいない！」

「あなたを虜に出来るのなら大きい胸もいいわね。あんっ♡」

俺は雪乃の乳首の先をコントローラーのスティックのようにグリグリと回した。雪乃は体を振って感じていた。

「おふっ!？」

「あなたばかりズルいわ。えい！」

「ゆ、雪乃！」

「もう硬く勃起させて……」

雪乃は自分の尻を俺の勃起したチンコに押し付けてきた。左右に尻を動かしてズボン越しのチンコを刺激してくる。俺は我慢できずに雪乃をベッドに押し倒した。

「きやあ!?!は、八幡？」

「雪乃……もう我慢できない」

「ええ、私もよ」

俺はズボンを脱ぎ、爆発寸前の勃起したチンコを露にした。雪乃はそれを見た瞬間、生唾を飲み込んで、股を大きく開いて俺を誘ってき

た。

俺は勢いに任せて雪乃のマンコへチンコを挿入した。雪乃のマンコは相変わらず、狭く気持ち良かった。

「あああ♡」

「雪乃！雪乃！」

「あんっ♡んあっ♡ああんっ♡」

「雪乃！」

俺は雪乃の両手と指を絡めて逃げられないようにしてから腰を激しく動かした。別に雪乃は逃げたりしないのだけど、それでも逃げないように抑えておきたかった。

逃げないようにしているのは雪乃も同じだった。俺の腰に自分の足を回してしつかりとホールドしてきた。

「は、八幡っ♡あああ♡」

「雪乃！んんっ」

「んんっ♡」

「んっ……雪乃！」

俺は腰を動かしながらキスをした。頭の中がもうグチャグチャになっていた。目の前の牝を感じさせて俺の女としたかった。もう俺の女なんだけどな。

「雪乃！もう射精るぞ！」

「来てっ♡あなたの熱いものを頂戴っ♡」

「で、射精る！」

「い、いぐうううう♡」

「し、搾られる……」

「あ、あああ♡」

俺は雪乃のマンコの一番奥へと精子を射精した。その際に雪乃は絶頂したようで、マンコが俺のチンコから精子を根こそぎ搾り取ろうと蠢いている。

「八幡の精子が私の子宮でたくさん暴れているわ。避妊していなければ、孕んでいたわね」

「雪乃のマンコが気持ちいいのが悪いんだ。我慢出来ずに射精してし

まう」

「最初から我慢する気なんてないくせに」

「バレた？」

俺は最初から雪乃の子宮に射精するつもりでいた。他にどこに射精するんだ？ 射精するなら全部、子宮の中に決まっている！

「あれだけ射精したのにまだ硬いなんて性欲の塊ね」

「流石にいい過ぎじゃない？」

「そうかしら？ ならどうして八幡のここは硬いままのかしら？」

「雪乃をもっと犯したいから！」

「……本当にあなたは恥ずかしげもなくストレートに言えるわね」

雪乃のは俺から離れてそそり立つチンコを指先でいじりながら顔を赤く染めていた。そんな先だけをいじらないで！ 興奮してくる！

「雪乃。またいいか？」

「仕方ないわね……ええ、いいわ」

「流石は雪乃だ」

雪乃のはベッドの上で四つん這いになって、尻を左右に振って俺を誘ってきた。俺は雪乃の腰を掴んでチンコをマンコの奥へと一気に挿入した。

「うひい♡お、奥まで……きたああ♡」

「き、キツイ！でも……おらおら！」

「んあっ♡ああっ♡ああんっ♡」

「もっと感じろ！雪乃！」

「ああああ♡♡」

俺は腰を雪乃の尻に何度も叩きつけた。その度に雪乃はエロい感じた声を我慢する事無く出した。それを聞く度に俺は興奮して腰の動きを激しくした。

雪乃のマンコはチンコで突く度にギュウギュウと締め付けてきた。

この圧迫感が凄く気持ちいい！

「ゆ、雪乃！もう射精るぞー！」

「き、来てえええ♡」

「で、射精る！うっ……」

「ひゃあああああ♡あしゅいのらくしやんっ♡」

俺はまたしても雪乃の子宮目掛けて射精した。大量の精子が雪乃のマンコに注がれて満たしていく。俺は疲れてそのまま倒れて雪乃をベッドで挟んでしまった。

「……重いわ」

「すまん……でも休ませて」

「仕方ないわね……なら体勢を変えてちょうだい」

「ああ、これでいいか？」

俺は体を回転させて俺がベッドに仰向けになるようにした。ちなみに俺と雪乃はまだ繋がったままだ。だって雪乃が離してくれないから。

「んんっ♡ちゅっ……んんっ♡」

「んっ……ちゅっ……んんっ」

「八幡……」

「雪乃。エロい……」

雪乃とのキスは本当に情熱的になってしまった。キス一つだけでまた興奮してしまい、またチンコはガチガチに硬く勃起してしまっただ。

「少しは萎えたと思ったのだけど、キスだけで興奮するなんて……八幡は変態さんね」

「よく言うぜ。雪乃だってさっきより締め付けたがキツくなったぞ？」

「それは仕方ないわ。あなたのチンコなんだから……あっ♡」

雪乃は少し腰を浮かせてからゆっくり腰を降ろした。雪乃は俺とのセックスで体力が付いたようで以前の5倍はあるんじゃないかと思うほどだ。

最近では俺の方が体力が持たないほどだ。これはジムとかに通って体力作りをした方がいいかもしれない。

「あっ♡ひゃあ♡ああんっ♡」

「雪乃！それヤバイ！」

「あんっ♡んんっ♡ああんっ♡」

「また射精る！うっ……」

「い、いくうううう♡八幡、最高よ」

「雪乃もな……」

雪乃も疲れたのか俺の胸にそのまま倒れてきた。流石に打ち止めだな。俺はのチンコは雪乃のマンコから抜けると萎えていた。

良かった。もしまだ勃起していたら雪乃に搾り取られていたかもしれない。

「八幡。今年もよろしくね」

「ああ、こちらこそよろしく」

「明日、実家に新年の挨拶に行くから」

「おう。行ったら」

「あなたも行くのよ？」

「へ？マジ？」

「マジよ」

雪乃の実家に新年の挨拶とか危険な匂いしかしないんだけど!?彼女の家族に会わないといけないなんて、新年から面倒だな。

「どうしたの？」

「いや何でもない……」

「そう。なら少し休みましょう……流石に疲れたわ」

「そ、そうだな……」

雪乃はそのまま眠ってしまった。俺も寝たかったけど、精子でベタになった雪乃の体を綺麗にしてからにした。

雪乃の体を綺麗にしている時に思ったが、これほどの美少女が俺の彼女とか今でも信じられないよな。寝て覚めたら夢じゃないかかと思うほどだ。

「夢じゃないからないわ」

「うわあ!?!お、起きていたのか？」

「八幡が私の体を弄ぶものだから」

「体を拭いていただけだからな!」

「知っているわ……」

この時の雪乃の顔は悪戯が成功した子供のような無邪気な笑みを

していた。俺たちは抱き合うように眠りについた。

やはりゆきのんの誕生日に参加するのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡です。俺は今、雪ノ下家の新年会兼雪乃の誕生日会に参加している。それは事態は別にいいのだけど、問題は場所だ。温泉がある立派な旅館でやっている。しかも旅館を丸ごと貸切にしてだ。流石は雪ノ下建設だ。金持ちのやる事は理解出来ない。

「八幡。大丈夫かしら？」

「あ、ああ。ちよつと人に酔った……」

「そうね。私もだわ……」

本当は参加する予定ではなかったんだけど、雪乃の実家に到着した瞬間に車に強引に入れられて旅館まで連れて来られた。

それにしても雑誌とかで見た有名な会社の社長が参加しているパーティに参加してもいいのだろうか？

でも雪乃が喜んでくれたので良かった。毎年、詰まらない誕生日会になるらしい。

「親父さんはともかく、母親は怖すぎだろ!? 雪乃の母親は大魔王様なのか？」

「そうね……姉さんすら母には敵わないから」

「雪乃の姉ですら勝てないのか……」

「でもいつか勝つわ」

やる気に満ち溢れている雪乃はカッコ良かった。それにしても親父さんから色々聞かれた時は少し焦った。どこでどうやって知り合ったのとか、これまでどんな事をしてきたか、とか。

出合いは学校で娘さんをレイプしましたなんて言えるわけない！ まあ、少し濁して話したので多分、大丈夫だろう。

「八幡。そろそろ部屋に行きましょう」

「ああ、そうだな。疲れた……」

俺は雪乃と一緒に会場を出て割り当てられた部屋に向かった。雪ノ下建設の関係者が多く招待されており、雪乃の彼氏として俺は注目

を浴びてしまった。

その中に葉山の姿があった。雪ノ下建設の顧問弁護士の息子だから招待されたようだった。俺の事を恨めしそうに睨んできていた。

「本当にあの男は……」

「雪乃。大丈夫か？」

「平気よ。それより八幡。んんっ♡」

「んっ……部屋に着くなりキスなんて」

「嫌だったかしら？」

「いや、もつとしたい。んんっ」

「んっ♡」

俺と雪乃は割り当てられた部屋に着くなり熱いキスを交わした。お互いの舌を絡ませあつて、唾液の交換をした。感触が、音が、匂いが脳に届き本能を目覚めさせる。

「ふふっ……キス一つで八幡のここはもう硬くなったわね」

「雪乃だって股から牝の匂いがするけど？」

「仕方ないじゃない。キスはあなたとのセックスの合図なんだから」

「そうだな。早く雪乃を抱きたい」

俺と雪乃は服を脱ぎ、部屋の奥へと進んだ。そこにはすでに布団が二組敷かれていた。旅館の人がやってくれたようだ。

「ヒキタニ君、少しいいか？」

「葉山？」

部屋の扉を叩く音がしたと思ったら葉山の声が外から聞こえてきた。くそっ！これから雪乃といい所だったんだぞ！ほら雪乃なんて視線だけで殺せるんじゃないかと思えるほど不機嫌になってしまった。

「何か用か？」

「ゆきのし……雪乃ちゃんは？」

「雪乃ならもう寝たけど？」

「雪乃、か……呼び捨てなんだな」

こいつは何しに来たんだ？入って来れないように鍵を閉めておかないと。俺は早く雪乃を抱きたいんだよ！早く帰ってくれないかな。

ほら雪乃だつて抱いてほしくて俺に体を密着せさせてきよ。止めて雪乃さん！密着させて状態で動かないで！

「そ、それで何の用だよ？」

「いや、雪のちゃんが寝ているなら明日にするよ」

「そうか……」

葉山が明日と言つた途端、雪乃は機嫌が良くなつた。早くどこかへ行つてくれ！雪乃が勃起したチンコを股に挟んで前後に動くんだ。

素股がこれほど気持ちいいものだとは思ひもしなかつた。挿入してなんぼだと思つていたからな。このままでは射精しそうだ。

「ヒキタニ君。君はどうして雪乃ちゃんなんだ……」

「……何だ？雪乃の事が好きなのか？」

「ああ、そうだ」

止めろよ！葉山、お前は俺とだけ話しているようだけど雪乃も居るからな！ほら機嫌が悪くなつた。葉山が雪乃が好きだとは雪乃の昔話を聞いてなんとなく察しが付いていたのでそれほど驚かなかつた。

（雪乃。ちよつと待つて！）

（いやよ。今日は朝から誕生日会の事で忙しくてストレスが貯まつているのよ？）

（葉山が扉の前に居るんだぞ!?!）

（だから？私には関係ないわ）

俺は雪乃と小声で会話をした。葉山に聞かれないうちに。別に聞かれても良かった気がするけど。雪乃は葉山なんてお構いなしと言わんばかりに腰を激しく動かした。

（で、射精る！）

（飲んであげるわ。はむっ）

（うっ……射精る！）

（んんっ♡……んぐっ……んぐっ）

葉山の前で雪乃の素股からフェラで射精してしまった。扉の前とは言え、人前で射精してしまった。これはここで気持ちいい開放感があるな！

「ヒキタニ君。聞いているのか？」

「あ、ああ。もちろんだ！」

「君は雪乃ちゃんのごが好きなんだ」

「全部だ！笑った顔や怒った顔、怖がっている顔に恥ずかしがっている顔などたくさん表情を見せてくれる雪乃の全部が好きなんだよ」

自分で言っただけ、歯が浮きそうな台詞だ。雪乃を見てみると顔を真っ赤にして涙目になってこちらを睨んでいた。そして顔を俺の胸に押し付けてきた。

本人の前で言う事ではなかった気がする。雪乃のガチで恥ずかしがっている顔だ！レアだな。写真に撮っておきたいくらいだ。

「葉山？」

扉の前から人の気配が消えたので開けて確認してみると葉山の後ろ姿を確認する事が出来た。普段とは違い、覇気のない後ろ姿だ。

「えつと……雪乃？」

「本当にどうして八幡は恥ずかしい台詞が言えるのか、分からないわ」「自分でも歯が浮きそうだとは思っている」

「今度、録音するからもう一度言いなさい。いいわね？」

「はい……」

あの台詞を録音とか止めてほしいけど、雪乃がしたいなら最大限叶えてやりたい！俺、雪乃に甘くないか？俺は雪乃を抱えて今度こそベッドへと向かった。

「雪乃……」

「八幡……来てっ♡」

「ああ！」

「うひい♡」

俺は雪乃と数秒、見つめ合ってから雪乃のマンコに俺のガチガチに勃起したチンコを一気に挿入した。雪乃のマンコの締めりは強く気を抜くとすぐにでも射精してしまいそうだ。

「雪乃！雪乃！」

「あっ♡んんっ♡んああっ♡」

「雪乃！」

「八幡……ああっ♡んんっ♡うひい♡」

俺は雪乃をベッドに抑えるようにして腰を激しく動かした。雪乃のマンコはチンコで突く度に愛液を溢れさせていた。

部屋中に俺と雪乃の体液が充満していた。それが俺たちを更に興奮させた。腰の動きが止められない。そもそも止めるつもりはない。

「雪乃！もう射精そうだ！」

「き、来てっ♡八幡の熱いの全部、ちようだい！」

「で、射精る！」

「あああああ♡あ、熱いのたくしゅんっ♡」

俺は辛抱堪らずに雪乃のマンコが一番奥に射精した。雪乃のマンコは俺のチンコから精子を搾り取ろうと蠢いている。

俺のチンコはまだ射精していた。俺は射精しながら腰を動かした。自分の中の本能がもつと動けと囁いているようだった。

「雪乃！んっ」

「んんっ……八幡のまだ熱く硬いっ♡」

「ああ、まだ興奮しているんだ。でもちよつと休憩」

「なら今度は私が上になるわ」

雪乃は俺の体勢を変えて今度は自分が上になり、俺はベッドに横になった。そして雪乃は自分の腰を上から下にと動かし始めた。

「んんっ♡あはっ♡ああんっ♡」

「雪乃……激しいな」

「あら？もうギブアップかしら？」

「このー！」

雪乃は挑発的な表情で俺を煽ってきた。いいだろう、その挑発を後悔するといい！俺は腰を上突き上げた。

「あひゃあ♡」

「どうだ！」

「ま、まだまだよー！」

「うおお！」

雪乃も負けじと強くマンコを締め付けてきた。お互いに限界が近づいてきていた。そろそろ決めないと！

「ゆ、雪乃！射精る！」

「全部、ちようだい！」

「うっ！」

「ひゃあああああ♡八幡のあしゅいのたくしゃんっ♡」

俺の射精と同時に雪乃は絶頂した。雪乃のは力尽きて俺の胸に倒れ込んだ。もう動けない。それでも射精は精子の一滴まで雪乃のマスコの一番奥に射精していた。

雪乃のマスコが絶頂で敏感になっており、俺の精子を欲しているように蠢いている。

「雪乃？」

「すう……すう……」

「寝ている……風邪、引くぞ」

雪乃は気絶するように眠ってしまった。俺は雪乃から離れて体を軽く拭いてから雪乃に服を着させてから眠りに付いた。俺も雪乃と似たように体力を使い果たして気絶するように眠ってしまった。

翌日、葉山が話したそうにしていたけど、雪乃が睨みを利かせて話す事が出来なかった。別にあいつの話なんて聞くつもりはなかったんだけどな！

「さあ、八幡。受験まで1年もないわ。私と同じ大学に合格してもらうから」

「マジ？」

「マジよ。頑張ったら褒美を上げるわ」

「頑張ります！」

年が明けてから雪乃先生によるスパルタ勉強が度々開催されて俺の知力は少しずつ上がるのをこの時の俺は知る由もなかった。

やはりゆきのんをレイプしないのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡改め雪ノ下八幡です。高校から付き合っている雪乃と大学卒業と同時に入籍して、雪ノ下家に婿養子になりました。そして念願の専業主夫へとなる事が出来た！雪乃は父親の会社に入社して、バリバリに働いている。俺は雪乃が高校の時から住んでいるマンションで家事をして、雪乃の帰りを待つ毎日だ。

養ってもらおうのつて最高だ！食費に生活費などは全て雪乃持ちで、俺は一切金は出していない。そもそも稼いでいないので出せないんだけどな！

「八幡……抱っこ」

「はいはい……」

「ぎゅーとして」

「ほい。これでいいか？」

「ふふっ……」

現在、ゆきのんは八幡成分の補充中です。仕事の疲れやストレスが溜まりに溜まるところして甘えてくる。普段からも甘えてくるんだけどね。

普段からストレス解消はさせているんだけど、疲れが溜まるところして甘えてくる。これはこれで俺だけにしかに見せない一面なので、結構嬉しい。

前に陽乃さんに自慢したら涙を流しながら悔しがっていた。どんだけ悔しかったんだよ!?

「ほら雪乃。んっ……」

「んっ……美味しい！」

「まだたくさんあるぞ」

「んっ……」

俺はご飯を一度、口の中に入れて租借してから雪乃の口に運んだ。まるで鳥にでもなった気分だ。これで仕事の疲れが取れるなら俺は喜んでやってやろう。

「お風呂」

「仰せに……お姫様」

俺は雪乃の服を脱がしてお風呂に抱えて運んだ。髪と体を洗って一緒に湯船に浸かる。いつ見ても雪乃の透き通るような白い肌は綺麗だと思う。

それと本人に言うとなやなやしながら甘えてくるので最近控えている。だって、相手にすると疲れるんだもん！

「んんっ♡」

「体のマッサージをしないとな」

「えっち……」

「嫌だったか？」

「いじわるしないで気持ちよくしてっ♡」

俺は雪乃の体をマッサージしつつ、胸を揉んだ。知り合った時より大きく成長した雪乃の胸は今ではパイズリ出来るほどに成長した。

この胸に何度、パイズリで射精させられた事か！最高に気持ちよかったです！

「ちゅっ……」

「んっ♡」

「ちゅうううう」

「うひい♡」

俺は雪乃をマッサージしながら雪乃の首筋にキスマークをつけた。まるでマーキングをするように雪乃を俺だけの女だと周りに分からせるように。

雪乃は俺にキスマークをつけられて恥ずかしいのか、白い肌と耳が少し赤みがかって来た。

「は、八幡。早く……」

「いくぞ……」

「き、きたああああ♡」

「し、締まる」

雪乃が立ち上がって尻をこちらに向けて、マンコを手で広げ見せて来た。俺はそこに勃起して爆発寸前のチンコを挿入した。

雪乃のマンコは相変わらずの締め付けで俺のチンコを圧迫してき

た。この圧迫が最高に気持ちいい！

「あんっ♡んひい♡ああっ♡」

「キツイ……どうだ？」

「んあっ♡んんっ♡んひゃあ♡」

「聞くまでもないか……」

俺は腰を前後に激しく動かした。雪乃はそれに合わせて感じて声を出していた。このエロい声を聞く度に興奮してくる。

この美人が俺のチンコで感じて声を出していると思うと優越感に浸れる。でも限界は近かった。

「ゆ、雪乃！で、射精る！」

「んあっ♡な、膣内に射精してっ♡」

「射精る！」

「んあああああ♡いぐううう♡」

俺は雪乃を抱きしめてマンコの一番奥に射精した。それと同時に雪乃は絶頂して潮を噴き出した。俺の精子が雪乃の子宮に大量に注いだ。

大量に射精したから雪乃の子宮に入りきらなかった精子が逆流して垂れていた。本当にどれだけ射精しているんだよ！

「はちまんのはしゅいせーし……いっぱいっ♡んひい♡」

「大丈夫か？」

「らいひようぶう……」

「……うん。大丈夫だな」

雪乃は完全に呂律が回っていなかったけど、気にしない事にした。だって、幸せそうに笑っているからだ。本当に幸せそうな顔をするんだよな。

雪乃は自分のお腹……子宮の辺りを優しく撫でていた。もしかしたら今回で妊娠しているかもしれない。俺としてはもう少し二人だけの時間を味わっていたいんだけどな。

「あれだけ射精したのにあなたのはまだ硬いままね？」

「それはこんな美人を相手にしているからな」

「ふふっ……なら続きはベッドの上でしましょ」

「お、おう……」

俺は雪乃に腕を引つ張られて湯船から出た。髪を乾かし体を拭いてからベッドに移動した。バスローブ姿の雪乃はエロさが滲み出ていた。

もうグラビアアイドルとしてデビューしても売れるんじゃないかと思うくらい美人だと思うんだよな。

「雪乃……」

「八幡……」

「んっ……」

「んんっ……」

俺は雪乃に覆い被さる様にしてから軽くキスした。もうそれだけで俺のチンコは勃起してしまった。先ほどまで萎えていたのに。

俺はどれだけ嫁の雪乃の事が好きなんだよ!?!それはもう世界中の誰よりも好きだよ!今では小町は2番目に降格してしまったからな!

「今度は私が八幡を気持ちよくしてあげるわ。はむっ」

「のおおお……!」

「ぢゅるるるるっ」

「ゆ、雪乃。それ、ヤバイ!」

俺がベッドに座ると雪乃は俺の勃起したチンコを咥えてフェラを始めた。雪乃の口は温かくて舌がチンコに絡み付いてくる。

長い付き合いなので雪乃は俺の弱点を知り尽くしている。どこをどう攻めれば、俺が気持ちよくなるかを分かっている。

「ゆ、雪乃!で、射精る!」

「ぢゅるるるるっ……ぢゅるるるるっ」

「うっ……!」

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

俺は我慢出来ずに雪乃の口の中に射精した。雪乃は射精された精子を零す事無く全て、飲み干した。丁寧に口の中まで見せてきた。

精子を飲み干した雪乃の顔は物欲しそうに俺の事を見てきた。そしてベッドに仰向けになると自分でマンコを広げた。

「雪乃……いくぞ」

「ええ、きてっ♡」

「おおおお……!」

「うひい♡」

俺のチンコが雪乃のマンコに挿入された。雪乃のマンコは俺のチンコをギュウギュウに締め付けてくる。少しでも気を抜くと射精してしまいそうだ。

だけど、ここで射精しては早漏になってしまう。これまで散々、犯してきたマンコだと言うのにいつまでも俺を気持ちよくしてくれる。

「雪乃!雪乃!」

「んあっ♡ああっ♡んああああ♡」

「雪乃!」

「うひいひいひい♡ああああ♡」

俺は必死に腰を激しく動かした。俺は雪乃の手首を押さえつけて、雪乃は足を腰に絡めつけてきた。もう頭は雪乃の犯す事しか考えられなくなっていた。

理性なんてものは雪乃の前では無意味でしかなかった。本能だけが俺を突き動かしていた。

「ゆ、雪乃!」

「は、八幡!」

「で、射精るぞ!」

「来てっ♡」

「うっ……!」

「ひゃああああああ♡いぐいぐいぐっ♡」

俺は射精をした。雪乃の子宮の一番奥に大量の精子を注いでやった。俺の射精はまだ終わってはいなかった。数秒は続いて、漸く射精は終わった。

俺のチンコを雪乃のマンコから抜くと精子が逆流してきていた。風呂場でもたくさん射精したはずなのに、まだこれだけの量を射精したのか、俺は!?

「うひい♡んっ♡あひゃ♡」

「雪乃……」

「ひいひいひい♡」

「おおおお……い！」

雪乃がまだ余韻に浸っている時に俺は問答無用に雪乃のマンコにまだ勃起しているチンコを挿入した。まだ絶頂が続いている時にまた絶頂させられた雪乃は盛大に潮を噴き出した。それでも俺は止まらずに腰を動かした。

「雪乃！雪乃！」

「んひい♡んんっ♡ああんっ♡」

「おおおお……いし、締まる！」

「のほおおおお……い！」

「雪乃！射精る！」

「ああああああ♡い、いぐううう♡」

俺はまた雪乃の子宮の一番奥に射精した。今度の射精で金玉の精子を全て出し尽くすように射精した。雪乃は絶頂した後、気絶してしまった。

流石に激しくし過ぎたかもしれない。俺は挿入したまま雪乃を抱きしめて、眠る事にした。朝になれば、萎えているだろう。

「八幡は本当にケダモノね……」

「いや、雪乃がエロいのが悪いだろ!？」

「あら？私の所為なのかしら？」

「そうだろ！」

朝になって雪乃とちよつとした口喧嘩になってしまったけど、こんなのは日常茶飯事みたいなものだ。一時間もしない内に仲直りしている。

「産まれて来る子供があなたみたな変態でない事を祈るしないわね」

「お前だって十分、変態だよ……子供!？」

「妊娠しているのよ」

「マジ？」

「マジよ」

雪乃は母子手帳を俺に見せてきた。どうもここしばらく体調が悪

かったので病院で検査した所、妊娠していた事が分かったそうだと。まさか妊娠するんじゃないかと思っただけに妊娠していたなんて驚きだ。

「しっかりしてね。パパ」

「お、おう。ママ」

よし、子供の手本になれるようにしっかりと専業主夫をやらないな！

やはり私がレイプされているのはまちがっている。

私、雪ノ下雪乃は何をやらせても完璧な美少女だ。今年の春から現国担当の教師である平塚先生に奉仕部なる部活の部長にさせられた。

平塚先生はどうも姉である雪ノ下陽乃と面識があるようで、色々と面倒を起こされたようで私も問題を起こすんじゃないかと警戒されていた。いい迷惑だ。

それに私があまり人と関わり合いを持たないのを危惧して作った部活だそうだ。最初は一人で読書する程度で部活が終わる日々が続いた。

そして二人目、三人目の部員が入ってきた。比企谷八幡と由比ヶ浜結衣の二人だ。この二人は去年の入学式の日起こった事故に関係している。

最初は平塚先生が事故の事を分かった上で入部させたのだと思っただが違った。そして四人目の部員が入ってきた。

「ああく雪乃ちゃんのマンコ、最高だわ〜」

「っ!？」

「そんなに覗まないでよ。うっかりスマホで撮ったレイプされている場面をクラスメイト全員に送ってもいいのかな?」

「最低ね……」

「人の事を罵倒する人間の方が最低だろ?」

この四人目の部員が入ってきて初めて二人つきりなつた時に私はレイプされた。この日は由比ヶ浜さんも比企谷君も用事で来られずにこの男と二人つきりになってしまった。

入部した時から私と由比ヶ浜さんに向ける厭らしい視線が嫌だったのでここで一度、注意をしないと悪い、注意したら腕を抑えられて口にハンカチを入れられて、そのままレイプされた。

「ほらアフターピルを飲んでおけよ」

「こんな事をしておいて、許されないわよ!」

私の股からは男が射精した精子が逆流してきていた。私は男が渡してきた避妊薬を飲んだ。私の膈内で三回も射精された。

しかもレイプされた瞬間の写真まで撮れてしまった。なんとかして削除させないと。

「次も頼んだよ。雪乃ちゃん」

「誰がするもんですか!」

「いいのかな?この写真を結衣ちゃんに見せても?」

「気安く由比ヶ浜さんの名前を言わないで!」

男は私がレイプされている写真を見せてニヤニヤしながら言ってきた。絶対に由比ヶ浜さんだけにはバレたくない。

彼女は私にとって大切な友達なのだから。ベタベタとしてくるのは少し嫌だけど、彼女は私が嫌な顔をしても優しく接してくれた。

「なら俺の命令に従え。それとも結衣ちゃんに代わってもらうか?」

「そんなのは絶対に駄目よ!彼女には手を出さないで!」

「それでいい。なら明日な!」

「くっ……」

私は男が射精した精子を拭き取りながら下唇を噛み締めて怒りを飲み込んだ。あの男が持つ私をレイプした瞬間の写真をどうにかして、警察に突き出してやる!

「待っていなさい……」

私は部室を後にしてマンションに戻って隅々まで体を洗った。あの男はレイプ中に私の体を舐め回してきた。私のファーストキスマで奪われるなんて信じられなかった。

次の日、私は部室で由比ヶ浜さんを待った。比企谷君は別にいいかしら。特にあの男は二度とここには来て欲しくなかった。

「よお、雪乃ちゃん」

「……………」

「無視は酷いな。あんなにも愛した仲なのに」

「誰が!」

「それと結衣ちゃんは友達ともう帰ったし、比企谷は先生に呼ばれて今日は来られないだろう」

「なら帰ってちょうだい」

この男と二人つきりなんてなりたくない。だけど、男は私に近づい

て胸を触ってきた。私はすぐに払いのけたけど、男はニヤニヤしていた。

「結衣ちゃんと比べて物足りないな」

「いきなり触れるなんて、最低ね！」

「罵倒しかしない人間の方も最低だろ。服を脱げ、写真をバラまくぞ」
「くっ……」

私は男の指示に従って服を脱いだ。人前で裸になるなんて思いもしなかった。だけど、今はこの男の指示に従わないと。絶対にチャンスは来るわ。

「マンコの具合はどうかかな？」

「うひい♡さ、触らないで！」

「感じた声を出して癖に。それにもうトロトロじゃないか？」

「せ、生理現象よ！触れないで！」

男は指を私の膣内へと入れてきた。私は指を抜こうとしたけど、力が入らずに男に膣内を好きなように蹂躪されてしまった。

男のゴツゴツした指が私の膣内を出たり入ったりする度に股から何か液体が溢れてきていた。段々と腰と足に力が入らなくなった。

「あまりの気持ちよさに腰が抜けたか？」

「そ、そんな事……抜きなさい！」

「これならどうだ？」

「あひゃ♡んんっ♡ああああ♡」

男は私の膣内を蹂躪すると同時にクリトリスを触れてきた。外と内からの刺激に私はついに立てなくなり、床にお尻をつけてしまった。

床には私から出た液体で水溜りが出ていた。もしかしてこれが愛液ってものなのかしら？これだけの量が私から出たのね。

「気持ちよかったようだな？雪乃ちゃん」

「そ、そんな事はないわ！気持ち悪いだけよ！」

「なら次は俺の事を気持ちよくしてもらおうかな？」

「ひい!？」

男はズボンを下ろした瞬間に肉棒が露になった。男の肉棒は勃起

しており、血管などが浮き出ていた。昨日、あれが私の膣内に挿入されて、処女を奪ったものなのね。

昨日はあまりよく見れなかったのか、今はじっくりと見てしまう。目が離せないのは気のせいよ。

「ほら啜えてから顔を前後に動かすんだ。舌もちゃんと使うんだよ」

「ぐっ……はむっ……じゅるるるるっ……じゅるるるるるっ」

「おおおお！マンコもそうだったけど、口マンコも最高だよ。雪乃ちゃん」

「じゅるるるるるっ……褒めても嬉しくないわ」

「ほら続けて」

「はむっ……じゅるるるるるるっ」

私は男の勃起した肉棒を口に啜えてから顔を前後に動かした。男の命令通りに舌を使った。これがフェラというものなのね。

まさかこんな最低男のを啜える事になるなんて！絶対に後悔させてやらないと。ここで肉棒を噛み千切ってもいいけど、写真を先に削除しないと。

「ヤバっ……で、射精る！」

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

「いやゝ射精した射精した」

「げほっ……げほっ……信じられない。飲ませるなんて！」

男は射精のタイミングで私の顔を押しさえつけて、精子を飲ませてきた。苦くドロドロした精子を飲むなんて、早く口の中を濯がないと！

部屋から出ようとしたが、男に腕を掴まれてから窓に押しさえつけられた。

「ほいー！」

「うひい♡ぬ、抜きなさい！」

「エロい声出しておいて、それはないんじゃないか？」

「だ、誰がエロい声なんて！」

「ならこれでどうだ？」

「ああっ♡んあっ♡あああ♡」

男が私のお尻に向けて腰を突き出して来る。その度に私は快楽に

負けて声が出てしまった。口を押さえようとしたけど、男に腕を掴まれているので押さえられない。

「ほらほら。もつとエロい声を聞かせてよ。雪乃ちゃんが俺のチンコで感じている声を」

「うひい♡ぜ、絶対に感じていないわ!ああつ♡」

「俺たちは相性抜群だから一突きで雪乃ちゃんが感じてしまうんだよな」

「あんつ♡んひい♡ああんつ♡」

私は声を我慢する事が出来ずに感じた声を出し続けた。必死に我慢しているのに体が男の肉棒に反応してしまう。

男の肉棒の先が私の子宮の入り口を叩く度に頭が真っ白になってしまふ。男の事しか考えられなくなった。

私は必死に否定したけど、否定すればするほど、男の肉棒が私の考えを上書きしてくる。頭が可笑しくなりそうになる。

「ほら子宮にたくさん射精してやるよ!」

「ぬ、抜いて!他の事ならなんでもするから!」

「ほら俺のチンコが膨らんでいるのが分かるだろ?」

「い、いやああああ!!」

「で、射精る!」

「また膣内に……」

昨日に引き続いて男は私の子宮に精子を射精した。私の子宮が最低男の精子で満たされている。その射精に反応して体が敏感になってしまふ。

こんな時に尿意が来てしまった。早くトイレに行かないと漏れてしまふ。私は男から離れようとしたけど、男は私の事を離さそうとしなかった。

「いい加減、離してくれないかしら?」

「どうしたんだ?もしかしてトイレか?」

「だったら何?早く離してちょうだい」

「ここですれば移動する必要はないだろ」

「きやあ!?!こ、こんな格好でするなんて、無理よ!」

男は私の膝裏に手を回して体を持ち上げた。そして窓を開けて近づいた。こんな格好で出来る訳はなく尿意を必死に我慢した。でも我慢の限界が近づいていた。

「うっ……」

「おおお！結構溜め込んでいたんだ？」

「だ、黙りなさい！」

「そんな大声を出して外に人が居たら見られるじゃないか？」

私は両腕が自由になったので急いで口を塞いだ。窓の下に誰も居ない事を願った。もし私の掛かっていたら申し訳ない気持ちになってしまう。

私が出し切ったのを見届けた男は私を床に降ろした。私はこの隙に廊下に向かって走った。早く先生にこの男の悪行を言わなくては！

この際、写真なんてどうでもいい。早くこの男を断罪しなければ、気が済まない。

「あれ？ゆきのん」

「ゆ、由比ヶ浜さん……聞いて、これは違うの」

「ゆきのんも私と同じだね」

「同じ？それって……」

扉を開けようとしたら由比ヶ浜さんが現れた。今日は友達と帰ったと聞いていたのに。今はそんな事を言っている場合ではない。

こんな格好だけど、早く由比ヶ浜さんと先生に知らせないと思ったのだけど、いきなり由比ヶ浜さんが服を脱いで全裸になった。

「なっ!？」

「えへへへっ……ご主人様にいっぱい書いてもらったんだっ♡」

由比ヶ浜さんの体には『ビッチ』『ご主人様専用マンコ』『膣内射精自由』などとマジックで書かれていた。もう由比ヶ浜さんは男の毒牙に掛かっていた。

由比ヶ浜さんはゆっくりと部屋の扉を閉めて私に近づいてきた。それからの事はあまり記憶にない。

「結衣。二人で雪乃ちゃんをお前のように素直にするのを手伝ってく

れ」

「はいつ♡ご主人様！」

「い、いやああああ！」

覚えているのは男と由比ヶ浜さんに気絶するまで絶頂させられたと事だけだ。この日、私は友達と抵抗心のどちらも失った。

やはり私がレイプされているのはまちがっている。
続

私雪ノ下雪乃が奉仕部の四人目の部員の男にレイプされて数日が経過した。写真で脅されて守ろうとした由比ヶ浜さんはすでに男の毒牙で従順になっていた。

男と由比ヶ浜さんの二人に滅茶苦茶にされて、私は抵抗心を碎かれた。そして金曜日の夜に男は由比ヶ浜さんと一緒に私が住んでいるマンションにやってきた。

「ここが雪乃ちゃんの家か……いい所に住んでいるじゃん」

「ご主人様。早くおちんちん、くださいっ♡」

「分かった。でもその前に雪乃ちゃんを素直にしないと」

「はいっ♡」

男は由比ヶ浜さんの胸を揉みながら私の家に入った。本来なら由比ヶ浜さんだけを入れるはずだったのに私をレイプした男までも家に入れてしまった。

「家に入れたのだから早く外してくれないかしら？」

「そんなに焦るなよ。それで今日は何回イッた？」

「……13回よ」

「結構イッたな……いいぜ、外してやるからスカートを捲り上げろ」

「……………」

私はスカートを捲り上げた。今日は朝から男に貞操帯を付けられていた。しかもローターと呼ばれる玩具を付けられた状態で、学校に居る間に何度も振動で絶頂してしまった。

男は私と同じクラスなので授業中に電源を入れて休憩中だけ電源を切っていた。おかげで授業中は常に我慢していた。

休憩中にクラスの女子が何度も顔が赤い事で声を掛けてきた。必死に誤魔化したけど、どこまで通じていたかは分からない。

「貞操帯が愛液でベタベタだな。ほらよ」

「んんっ♡」

「ローター攻めは気持ち良かったようだな」

「誰が！」

「早く服を脱げ」

「くっ……」

私は男に言われるまま服を脱いだ。男はニヤニヤと厭らしい視線を送ってきた。体に纏わり付くような視線が入部した時から嫌いだった。

「ほらお待ちどうのチンコだぞ」

「っ!？」

「見ただけでマンコからエロい匂いが出てきたぞ」

「あ、あなたの勘違いよー!」

「なら確かめてみるか……じゅるるるるっ」

「うひひひひひ♡」

男は私を立たせま股に顔を埋めて舌で膣内を舐めてきた。膣内を舌が蹂躪してくる。何度も味わった快楽が思考を鈍らせる。

舌の刺激に体から力が抜けてしまい、立てなくなる。でも由比ヶ浜さんが背中を支えて、私を立たせたままにする。

「じゅるるるるっ……じゅるるるるるっ」

「ひゃあああああ♡」

「じゅるるるるっ……たくさん愛液が出たな」

「はあ♡……はあ♡……はあ♡」

「雪乃ちゃんの準備が終わったようだから挿入するか」

「はあ♡……はあ♡……うぎいいいい♡」

男の勃起した肉棒が私の膣内の奥まで一気に挿入された。私はそれだけで絶頂してしまい、潮を噴き出してしまった。

男が腰を動かす度に子宮の入り口を何度も肉棒で叩いてくる。肉棒の先が子宮の入り口に触れる度に頭が真っ白になってしまう。

精神は大丈夫だけど、体が限界に近づいている。先に体の限界になってしまうと精神が落ちてしまうのは時間の問題だろう。

「中々素直にならない雪乃ちゃんのために準備はいいか?結衣」

「はいっ♡ご主人様!」

「ゆ、由比ヶ浜さん。そ、それは……」

「えへへへっ……ご主人様から貰ったんだ」

由比ヶ浜さんの股には男の肉棒のようなものが付けられていた。由比ヶ浜さんはそれに何を垂らしていた。一体、何をしようとしているの!?

「結衣には雪乃ちゃんの前で奪ってもらうためにバイブを装着してもらったんだ。初めてだからローションもたっぷり垂らしておかないとな」

「は、初めてならあなたが奪ったじゃない!」

「確かにマンコの初めては俺が奪った。でもアナルの前ではまだだろ?」

「じよ、冗談じゃないわ!すぐに止めなさい!そんな事をすれば、絶対に許さないわ!」

「ゆきのんのアナル……いくね」

「ま、待って由比ヶ浜さん!うぎい!」

由比ヶ浜さんの装着されたバイブが私のお尻の穴に入ってきた。本来、排出するためだけの穴に外から何か異物を入れられるなんて思いもしなかった。

お尻の穴を少しずつ広げながらバイブは入ってきた。そして由比ヶ浜さんの胸が私の背中にくっ付いた。

「全部、挿入しましたっ♡」

「よくやった。結衣」

「ぬ、抜いて!お尻が裂けるわ!」

「大丈夫大丈夫。これからだから」

「な、何が!?うぎいいいい!」

いきなりお尻の穴に挿入されたバイブが振動してきた。すると男の肉棒がゆつくりと膣内から下がっていた。抜くのかと思っただけど、一気に奥まで再び挿入された。

「うひい♡んあっ♡ひゃあああ♡」

「前と後ろを同時に攻められると凄いだろ?」

「ゆきのんのお尻の穴、すごいよ!」

「ら、らめえてえええ♡」

男と由比ヶ浜さんが交互に腰を動かして私の体を内側から壊しに
来ている。前も後ろも肉棒で突かれる度に思考が纏まらない。

「あんっ♡いひい♡のおおおお♡」

「ゆきのん、声すごいよ」

「雪乃ちゃんも結衣と同じで素直になってきているな」

「んああっ♡ひぎい♡ああああ♡」

「ゆきのん！早く素直になろうよ」

「ほらほら！これでどうだ？」

「うぎいいいい♡」

男の肉棒と由比ヶ浜さんの肉棒が激しく動くものだから段々と頭
が麻痺してきた。何が正しいとか、由比ヶ浜さんの目を覚まさせると
かどうでもよくなってきた。

「雪乃ちゃん。そろそろ射精するから」

「ゆきのん。いいな〜……」

「ああっ♡ああんっ♡ふぎいいいい♡」

「射精る！」

「ゆきのん！」

「ああああああ♡……あ、あしゅい♡」

男の精子が私の子宮に大量に注がれている。私の子宮が小さいの
か、男の精子の量が異常なのかは分からないけど、子宮が膨らませれ
ているのが分かる。

男の射精では絶頂してしまった。脱力が緩んだのか、小便を漏らし
てしまった。前の私なら漏らした事で恥ずかしがっていたのに、今で
はどうでも良くなった。

「雪乃ちゃん。気持ちよかったようだな」

「ゆきのんのまだ出ている」

「……………」

「あれ？雪乃ちゃん？」

「ゆきのん？」

私はそのまま気絶するように寝てしまった。頭の中では様々な感

情が流れ込んでどう処理したらいいのか、分からないでいた。

そして瞼を閉じる前に見えたのは男が由比ヶ浜さんを後ろから犯している場面だった。

「……私は」

「ひゃああああああ♡」

「射精る射精る」

「由比ヶ浜さん……」

目を覚ましてみると男の射精で絶頂している由比ヶ浜さんが居た。その顔は嬉しそうな顔をしていた。私と同じで男にレイプされたはずの由比ヶ浜さんがそんな顔をするなんて。

男が由比ヶ浜さんから離れると膣内に入りきららない精子が逆流していた。どれだけ射精したら逆流なんてするのだろうか？

「あ、雪乃ちゃん。起きた？」

「……ええ」

「それでどうする？」

「あなたの勝手にすればいいわ……」

「詰まらないな……飽きたわ」

「……ええ？」

「はい。これで雪乃ちゃんは自由です」

男はスマホを私に見せて私のレイプした瞬間のデータを全て、私の目の前で削除した。男は服を着て、帰る準備をしていた。

「な、何？」

「まだ理解出来ないの？写真がないなら雪乃ちゃんを脅せないでしょ」

「まだデータを隠し持っているかもしれないわ！」

「スマホのデータだから。じゃあ、結衣の事は頼んだ」

男は本当に帰ろうとした。今までふざけた態度だったのに今はまるで遊んでいた玩具に飽きた子供のような態度をしていた。

これで私は自由になれる？もうこの男に犯される事はない？それならどうして私は嬉しいはずなのに寂しいと思っているの？

「何だよ？」

「……………」

「帰りたいたいんだけど？」

「……………してください」

「はい？なんて？」

「私を犯してください！」

男の服を掴んで私は自分で何を言っているのかと思う。だけど、今彼を帰したら後悔するんじゃないかと思う。私は気が付いた。

男に犯されている時の私は嬉しがっていた事に。私だけを見てくれる彼に惹かれていた。

「なら頼み方ってのがあるだろ？」

「わ、私のおそこを犯してください……………」

「違うだろ？私の変態マンコを壊れるまで犯してください、だろ？」

「わ、私の変態マンコを壊れるまで犯してください！」

「いいぜ。壊してやるよ……………ほらよ」

「うひあああああ♡」

男の肉棒が私の膣内の奥まで挿入された。それだけで私は絶頂してしまった。頭が彼の事でいっぱいになった。なんだ、簡単だったんだ。

彼を受け入れさえすれば、こんなにも簡単に得られるものだったんだ。今、私は幸福感を感じていた。

「ほら！変態マンコはここでいいんだろ？」

「はひいいいい♡もつと奥まで挿入してくださいいいいい♡」

「変態に堕ちた雪乃に射精すぞ！」

「はひいいいい♡いくううう♡」

彼に名前を呼び捨てにされただけで私の膣内は反応してしまった。彼の肉棒が膨らんでいるのが分かる。もうすぐ私の子宮に大量の精子を射精するのだろう。

それを私は待ち望んでいる。早く彼の精子で満たされたい。素直になれない私を粉々に壊して欲しい。

「で、射精る！うっ……………」

「ひゃああああああ♡あ、あしゅい♡」

「まだ射精るぞ！」

「あつ♡またいぐううう♡」

「ふうく……射精した射精した」

「あひゃ♡んっ♡んひい♡」

彼の精子が私の子宮を満たしてくれる。素直になれない私を粉々に壊してくれた。もう彼なしでは私は生きて行けない。なんとしても彼を繋ぎ止めないと。

「だ、旦那様。どうか私のマンコを使い続けてくださいっ♡」

「あはははっ！ここまで言えるように素直になれたな！」

「はいっ♡私は旦那様なしでは生きて行けません！」

「ならこれからたくさん犯して壊してやるよ！」

「はいっ♡末永くお願いします。ひゃあああああ♡」

そこからは旦那様は私と由比ヶ浜さんを交互に朝まで犯し続けた。こんな事なら早く素直になれば良かったと思った。でも今からでも間に合う。

旦那様を繋ぎとめて置くためにも素直でいつ付けなくてはならない。

「ほら雪乃の番だぞ」

「はいっ♡うひいひい♡」

やはり私がレイプされているのはまちがっている。
終

私、雪ノ下雪乃の人生はある男……いや旦那様のおかげで劇的に変わった。あの日、奉仕部の部室でレイプされた。嫌がる私を旦那様は何度も犯して射精してきた。

最初は不快でしかなかったが、段々と受け入れていき……今では素直になれたと思う。私は親友と言ってもいい由比ヶ浜さんと共に今日も旦那様に犯されていた。

「うひひひひひ♡」

「雪乃は後ろから好きだよな」

「はいいいい♡旦那様のチンコが子宮を叩くのが好きだからああああ♡」

「ほら……これがいいんだろ?」

「ひゃあああああ♡」

昼休憩に奉仕部の部室で私は旦那様に後ろから犯してもらっている。旦那様とは半同棲している。金曜の夜から月曜の朝まで一緒に過ごしている。

家に居る間、ずっと食事と睡眠以外は殆んど、犯してもらっている。そして学校でも休憩時間に犯してもらっている。

「ゆきのん……」

「んあっ♡ああっ♡ああんっ♡」

「ご主人様……ゆきのん……」

「ああ♡んああっ♡ああああ♡」

旦那様の後ろでは由比ヶ浜さんがオナニーをしながら私たちの行為を見ている。誰かに見られながらすると興奮してしまう。

もう私はとんでもない変態になってしまったのだと自覚してしまう。でもそんなのは関係ない。どれだけ私が変態でも旦那様に愛されるならどうでもいい。

「雪乃！射精る！どこがいい?」

「な、膣内にくださいっ♡」

「ほら受け取れ！」

「いぐううう♡ああああ♡」

旦那様の肉棒が膨らみ、精子が私の子宮に大量に射精された。旦那様の射精量は異常で私の子宮があまりの精子の量に膨らむのが嫌でも分かる。

子宮に入りきらなかった旦那様の精子が膣内から逆流して出てきている。

「ご主人様のせーし……じゅるるるっ」

「うひい♡ゆ、由比ヶ浜さん！だ、だめえ♡」

「じゅるるるっ……じゅるるるっ」

「ひいひい♡」

由比ヶ浜さんが私の膣内から零れた旦那様の精子を吸いだししている。由比ヶ浜さんの舌が私の膣内で精子を掬い取ろうと動くので私は絶頂してしまった。

旦那様の射精で絶頂して敏感になっていたので、簡単に絶頂してしまった。私は足腰に力が入らずにそのまま床にお尻を付けてしまった。

「ほら次は結衣の番だぞ」

「はいっ♡ひゃああああ♡」

「しっかりとマンコを閉めろよ！」

「はいいい♡もつとまんこ、いじめてええ♡」

旦那様は今度は由比ヶ浜さんを犯していた。二人は部屋に余っていた机をベッドのようにして由比ヶ浜さんが旦那様の上で腰を振っていた。

由比ヶ浜さんが腰を振る度に胸が揺れて、それに嫉妬してしまった。私も大きくならないと旦那様に捨てられてしまうのではないかと考えしまふ。

「結衣にも射精るぞ」

「い、いきまふううう♡」

「射精るー！」

「いぐいぐいぐっ♡あああああ♡」

由比ヶ浜さんも旦那様に絶頂して精子を子宮に注がれていた。私は旦那様の股に目をやった。そこには二回も射精してなお、勃起している肉棒があった。

「はむっ……じゅるるるるっ」

「おおお……雪乃のフェラは最高だな」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「射精るー」

「んんっ!?……んぐっ……んぐっ」

私は旦那様の肉棒にお掃除フェラをした。最初の頃は唾えるのすら嫌だったのに今ではこんなにも進んでする事ができる。

射精された精子を口の中で転がすように味わって喉に流し込んだ。苦くてドロドロしており、最初は飲めたものではなかったけど、今ではのんなりと飲めるようになった。

「さて、続きは帰ってからな」

「はいっ♡旦那様、ローターを付けてくれますか?」

「仕方ないな……ほらこれでいいだろう」

「んっ♡あ、ありがとうございますっ♡」

私は旦那様にローターを付けてもらい、午後の授業に出た。旦那様とは同じクラスなのでローターで私をたくさんイジメてくれる。

教師やクラスメイトの前で何度も絶頂して、頭が真っ白になった。必死に声を我慢して顔を赤くしているとクラスの女子たちが何度も話しかけてくれた。

これも旦那様が素直にしてくれたおかげかしら? そうなら悪くないわね。そして私は放課後に奉仕部の部室で由比ヶ浜さんと比企谷君と合流して下校した。

「旦那様ーんんっ♡」

「んっ……入ってすぐにしたとか、以前の雪乃はどこにいったんだ?」

「全部、旦那様がしたんでしょ……」

私はマンションに帰ってすぐに旦那様にキスをした。金曜の夜か

ら土曜の朝までは私が旦那様を独占する事出来る。いつもは由比ヶ浜さんが一緒だから独り占めは出来ない。

「午後の授業からもう止まらなくて……」

「大洪水だな？」

「早く旦那様の肉棒でイジメてくださいっ♡」

「なら俺が綺麗に洗ってやるよ」

私たちはバスルームに移動した。服を脱いで旦那様を椅子に座らせて腕を横に伸ばしさせて、両足で挟んで腰を前後に移動させた。

「んっ♡ああ♡んあっ♡」

「流石は雪乃だな。色々勉強しているようだな？」

「は、はいっ♡旦那様が喜んでくれるように頑張りましたっ！」

私は旦那様に喜ぶような事をネットで色々と探した。その中には過激なエッチな内容も含まれていた。でもこれで喜んでくれるなら私のプライドなんてその辺に捨ててもいい。

「んっ♡ああ♡んひい♡」

「イツたな」

「は、はいっ♡もう我慢出来ません。早く私のマンコをイジメてくださいっ♡」

「壁に手を付いて尻をこっちに向けろ」

「はいっ♡……うひいひい♡」

私が壁に手を付くと旦那様は勃起して太く硬い肉棒を私の膣内の奥へと挿入してくれた。肉棒の先が私の子宮の入り口を叩く度に頭が真っ白になる。

「おら！どうだ、待ちに待った。チンコだぞ！」

「はいいいひい♡」

「そんなに気持ちいいのか？俺のチンコは」

「はいっ♡子宮の入り口が叩かれると頭が真っ白になりますううう♡」

私が素直に旦那様に今の気持ちを伝えると私の両手首を掴んで先ほどよりも激しく肉棒を膣内に挿入してきた。

それに先ほどよりも少しだけ太くなった気がする。恐らく射精寸

前なのだろう。早く、私の子宮に旦那様の精子を大量に注いで欲しい。

「雪乃！射精るぞ！どこがいい？」

「な、膈内にくださいっ♡」

「で、射精るー！」

「うひひひひ♡ああああ♡♡」

旦那様の精子が今、私の子宮に注がれている。子宮を強引に広げられて、私は絶頂してしまった。頭が真っ白になり、視界がチカチカと光っている。

私が絶頂しても旦那様の射精はまだ続いていた。子宮に入りきらない精子が膈内と肉棒の隙間から溢れてきた。

「射精た射精た」

「いつぱい……いぐううう♡」

「気持ちよ過ぎて漏らしたな」

「うひひ♡」

私はあまりの快楽にオシッコを漏らしてしまった。ここがバスルームで良かった。すぐに洗い流せる。そしてオシッコだけではなく潮までも漏らしていた。

色々な感情が頭に流れ込んで来て、快樂だけが残った。私は絶頂で足腰に力が入らなくなってしまった。

「続きはベッドでするぞ」

「はいっ♡……あんっ♡」

「繋がったまま行くか」

「は、恥ずかしい……」

「今更だろ」

旦那様は私の膝裏に手を伸ばして抱えて肉棒が私の膈内に挿入したまま、寝室のベッドに移動した。移動する度に肉棒が子宮の入り口を何度も叩くものだからまた絶頂してしまった。

「あひひ♡んあっ♡ああんっ♡」

「たくさんイッたようだけど、俺はまだなんだぞ」

「は、はいいい♡ろうぞ……」

私は回らない呂律で旦那様を誘った。自分で膣内を広げて受け入れる準備をした。以前ならこんな事をするなんて想像もしなかった。どうして私は素直にならなかつたんだろうか？素直になれば、たくさん旦那様から愛してくれると言うのに。

「おおお……まったく雪乃のマンコの締めりはいいぞ」

「は、はいいいい♡」

「ほらーほらーもつと気持ちよくなれー！」

「あんっ♡うひい♡んんっ♡」

旦那様の肉棒が私の膣内の気持ちいいポイントを的確に攻めて来る。この快楽からは抗えない。頭が何も考えられない。

旦那様は私の頭をベッドに押さえつけながら腰を激しく動かしてきた。強引に犯されるのは私にとつてもつとも気持ちいい体勢だ。

まるであの日、奉仕部の部室で犯されている事を思い出せるからだ。

「雪乃！雪乃！」

「あひゃ♡んあっ♡ああああ♡」

「どうだ!?気持ちいいか？」

「はいいいい♡気持ちよ過ぎてバカになるううう♡」

「ならもつとバカにしてやるよ！」

「うひい♡ああ♡んああああ♡」

旦那様の腰の動きが先ほどよりも激しくなってきた。それに肉棒が膨らんでいる。そろそろ射精するのだろう。早く私の子宮を旦那様の精子で埋め尽くして！

「で、射精るー！」

「ひゃああああああ♡いくいくいくっ♡」

「まだ射精るー！」

「いぐのとまらないいいいい♡」

旦那様の精子が私の子宮に溜まる度に絶頂が連続やってくる。止められない快楽が一気に体に流れ込んでくる。まるで電気にも打たれたような気分になった。

「んひい♡ああ♡ひゃあ♡」

「雪乃！雪乃！」

旦那様が私の名前を言いながら腰を動かしてくる。名前を呼ばれる度に子宮が反応してしまう。旦那様の子供を孕みたがっている。

学生のうちに子供を作るなんて前は考えもしなかったけど、今は早く旦那様の子供を孕みたいと思ってしまう。

「雪乃！これがラストだ！射精る！」

「ああああああ♡ら、らめえ♡いぐいぐいぐっ♡」

「ああ……射精した射精した」

「またいぐううう♡」

すっかり旦那様の射精で絶頂する癖がついてしまった。でも気持ちいいからどうでもいい。子宮が精子に喜んでる。

早く孕みたいけど、旦那様は学生を卒業してから孕ませてやると言っていたので今は我慢する事にした。

「ホント……憎たらしいわね」

私をあれだけ犯したので疲れたのか、旦那様は先に寝てしまった。私は旦那様の腕を枕にして寝る事にした。明日、由比ヶ浜さんが来るまで独り占めを楽しんだ。

やはり私がレイプされたのはまちがいでなかったわね。

やはり私が百合に進むのはまちがっている。

私、雪ノ下雪乃は男性恐怖症もしくは人間不信だと言ってもいい。その原因は小学生の時の苛めだ。子供の幼い嫉妬や妬みが私を人を信じられないものへと変えた。

だけど、当時の私は幼馴染の葉山隼人くんが助けしてくれるものだと思っていた。いつも私のことを気に掛けてくれる数少ない人だ。

しかし現実とは違った。彼は私を助ける所か私を苛めていた人間側に付いた。それが私に大きなショックを与えた。だから私は親に頼み、海外へ留学させてもらった。

そして高校入学のために帰国した。そこで葉山くんと再会した。家族の誰かが私が受けた学校を言ったんだろう。でなければ、再会なんてありえなかった。

でもクラスが違ったのか、以前のことを覚えているのか葉山くんから話しかけてくることはなかった。それだけが救いだっただかもしれない。

もし彼から話し掛けてくれば、昔のことを含めて罵倒してやるつもりだったからだ。それから1年の時間が過ぎた。

2年に上がってから私は現国の担任である平塚先生から奉仕部なる部活をするように言われた。放課後、特にすることのない私にとつて苦にはならないので二つ返事で受けた。

それからしばらくして二人の人間が入部した。一人は平塚先生に強制入部させられた比企谷八幡くん。もう一人は依頼人だった由比ヶ浜結衣さん。

一人だった部活はいつの間にか三人になっていた。比企谷くんは私との一定の距離を空けてくれるので、接し易かった。

でも由比ヶ浜さんはよく抱き付いてきて、距離感が掴めなかった。そんな由比ヶ浜に私は好意を抱くようになった。

「ゆきのんーこれ見て見てー!」

「わ、分かったから由比ヶ浜さん。少し離れて」

「可愛いよね!」

「そ、そうね……」

由比ヶ浜さんが私に抱き付いてきた。僅かに香るシャンプーの匂いが私の鼻腔を抜ける。私が愛用しているものとは違う匂いが私を変な気持ちにする。

それから由比ヶ浜さんと少し比企谷くんと話して学校をあとにする。私は一人暮らしのマンションに戻ってCPの電源を入れた。

「さて、今日も撮れているかしら？」

私は鞆からカメラを取り出して、CPにデータを移した。そしてすぐに現像して、アルバムに入れた。

今日も由比ヶ浜さんの表情がよく撮れている。これは俗に言う隠し撮りだけど、友人ならこれくらい大丈夫でしょう。

「由比ヶ浜さん……んっ♡」

私は股に手をやってオナニーを始めた。オカズは由比ヶ浜さんだ。彼女の様々な表情は私をイケない感情に掻き立てる。

「由比ヶ浜さん。んっ♡ああ♡んひい♡」

由比ヶ浜さんの顔を見て、私はオナニーを激しくした。股だけではなく、上着を脱いで立った乳首を摘まんて更にイケない気持ちがあどんどん膨らんできた。

「ゆ、由比ヶ浜さん！んひいひいひい♡♡」

そして私は絶頂を迎えた。私は潮まで噴いてしまった。潮が写真の由比ヶ浜さんの顔に掛かってしまった。でももしこれが本人だと思おうと興奮してしまう。

私は引き出しの中の物を取り出した。少し前に買ったものだ。ピンク色の卵に少し似た見た目をしているものだ。

「ひゃああああああ♡んああああああ♡」

私は取り出したものを乳首に密着させて電源を入れた。すると物は振動して、私の乳首を刺激してきた。これがピンクローターって物なのね。

ネットで買うと親にバレると思い、アダルトの物を扱っている店に直接買いに行った。

「ひゃあんっ♡い、いくうううう♡♡」

私は今度はローターを乳首ではなく股に……膣内に挿入した。振動が私の膣内から全身に快楽を与えてきた。私はまた絶頂して、潮を噴いた。

こんなにも気持ちいいものを買った自分に罪悪感を持っていたけど、絶頂する度にそれが段々と薄くなってきた。

「はあ……はあ……はあ……」

連続で絶頂して体力の限界で私はゆっくりと息を整えた。大人の玩具で気持ちよくなるのがこんなにも凄いことなんて思いもしなかった。

それに由比ヶ浜さんのことを考えながらしたことが更に気持ちよくしてくれたかもしれない。頭が真っ白になりかけた。

「由比ヶ浜さん……あなたにこれを使ったらどうなるのかしら？」

由比ヶ浜さんの大きな胸にローターをくっ付けたら？膣内に挿入したら？あなたはどんな表情を見せてくれるのかしら？

私のように潮を噴くのかしら？あまりの快楽に誰にも見せられない酷い表情をするのかしら？

「見てみたいわね……きつと由比ヶ浜さんは許してくれるわよね？私たちは友達なんだから」

あの由比ヶ浜さんのことだから私がどんな酷いことをしても笑顔で許してくれるに違いない。だって、由比ヶ浜さんも私のことが好きなんだから。

絶対にそうに違いないわ。毎回、私に抱きついてくるのは私が好きでことよね!?好きでもない相手に抱きつかないわ。

「由比ヶ浜さん……ああああ♡んんっ♡ひゃああああ♡」

私はローターを使って再びオナニーを始めた。どうにかして、由比ヶ浜さんをここに招待してから私に体を許させるくらいに関係にならないと。

由比ヶ浜さんを守るのは私しかないわ。男子の厭らしい視線からあの守らないといけないわ。

「んっ♡ひゃああ♡ああ♡」

由比ヶ浜さんを想うと自然と指がクリトリスや乳首を摘まんでし

まう。もしこの摘まんでいる手が由比ヶ浜さんだったら？

私の体を伸びる手が由比ヶ浜さんだったらどうなってしまうのだろうか？

『ゆきのん。綺麗だよ』

『由比ヶ浜さん。ダメよ』

『でもゆきのんのこは濡れているよ？』

『ひゃあああああ♡♡』

私は思わず妄想してしまった。そして自分の手についている愛液を見て、驚いた。先ほどよりも股から出ている愛液が多かったのだ。

妄想一つでここまで濡れるなんて、思いもしなかった。私はこの妄想を現実のものにしたいと想う。でなければ、私は可笑しくなってしまうそうだからだ。

「きつと現実になったら…：…凄く気持ちいいんでしょうね」

私は引き出しの奥に入れておいた大人の玩具を取り出した。これは怖くて使えなかったものだ。これを使えば私の処女はなくなるからだ。

でも由比ヶ浜さんと恋人になって、体を重ねる関係になった時に私がリード出来るようにしておきたい。そのためにも処女では示しがない。つかない。

「んっ…：…んぎい?!い、痛い…：…」

私は大人の玩具であるバイブを膣内に挿入した。そして処女膜は破れた。処女膜が破れた時の痛みがこれほどだとは思わなかった。

想像したより痛くて悲鳴を上げてしまった。由比ヶ浜さんの処女を破る際には優しくしないといけないわね。

「ローションに痛み止めが必要ね…：…んんっ♡」

私はバイブを出し入れして膣内を刺激した。まだバイブの電源は入れていない。流石にそこは怖くてまだ出来ない。でも出し入れくらいなら大丈夫だ。

そして私はバイブの動きを少しずつ早くしていった。ゆっくりだと我慢出来なくなってきた。

「んっ♡ああ♡んひいひい♡♡」

私はバイブで絶頂を迎えて、体が反ってしまうほど伸ばした。バイブは膣内から滑って抜けてしまった。私の体は絶頂の余韻で軽く痙攣していた。

視界がチカチカと光っているし、脱力感で上手く動かなくなっていた。それに後から由比ヶ浜さんで絶頂してしまったことに罪悪感が出てきた。

「私は何をしていたんだろう……由比ヶ浜さん、んっ♡」

だけど、また由比ヶ浜さんでオナニーを始めてしまった。オナニーを始めると不思議と由比ヶ浜さんに感じていた罪悪感が薄くなっていた。

「ああっ♡んあっ♡んひい♡」

由比ヶ浜さんでオナニーをして罪悪感が薄くなってきたけど、余計に由比ヶ浜さんのことを考えてしまう。あの胸や膣内を私の自由に出来たらどれだけ凄いいことになるだろうか？

「由比ヶ浜さんっ♡由比ヶ浜さんっ♡……由比ヶ浜さんっ♡♡」

私はどんどん変な方向に向かっているんじゃないかと思う。でも辞めることは出来ない。この快楽を知ってしまったのだから。

これも私をこんな気持ちにした由比ヶ浜さんが悪いのよ。これは責任を取ってくれないといえないわね。

「ふふっ……由比ヶ浜さん、楽しみねっ♡」

私の愛液でグチョグチョに濡れた由比ヶ浜さんの写真を見ながら私は笑った。近いうちに私の妄想を現実に出れるからだ。

由比ヶ浜さんのことだから何かしら理由を付ければ、簡単に私の家に泊まってくれそうね。その時に由比ヶ浜さんを私のものにするわ。

「由比ヶ浜さん。あなたのことは私が絶対を守るわ。んっ♡」

私は寝る前にもう一度、由比ヶ浜さんの写真を見ながらオナニーを始めた。私はすぐに絶頂に至り、気絶するように寝てしまった。

汗をかいたまま寝てしまって、翌日には体調を崩してしまったのは言うまでもない。

やはり私が百合に進むのはまちがっている。 2

私、雪ノ下雪乃は必死に鼻血を我慢している。私は今、浴室で背中を流されているからだ。しかも相手が相手だ。

「どう、ゆきのん？気持ちいい？」

「え、ええ。とつても気持ちいいわ」

「やった〜！」

私の背中を流しているのが由比ヶ浜さんだと言うことだ。浴室なのでお互いに裸なのだけど、由比ヶ浜さんの胸は思っていた以上に大きかった。

着痩せというものかしら？だとしたらちよつと嫉妬してしまうわね。私は服を着ても胸は小さくなることはなく、元より小さいから。

「ゆ、ゆきのん？どうしたの、怖い顔して？」

「な、何でもないわ！続けてくれるかしら？」

「うん！」

由比ヶ浜さんが私の背中を一生懸命に洗ってくれると思うと興奮してしまう。すぐ側に由比ヶ浜さんの裸体があると思うと湯船に漬かることなく上せてしまうわ。

早く由比ヶ浜さんの体を好き勝手にしたい！あの大きな胸を鷲掴み、滅茶苦茶に揉んでみたい。

「ゆきのんって、肌が白いよね〜」

「そ、そうかしら？由比ヶ浜さんも白いと思うわよ」

「そ、そうかな？ゆきのんに褒められると嬉しい！」

「っ!?!……由比ヶ浜さんのバカ」

「え？ゆきのん、何か言った？」

「何でもないわ！」

由比ヶ浜さんが不意打ちに笑うものだからさらに興奮してしまった。今の笑顔を写真に収められないのが悔しいわ！

でも脱衣所には隠しカメラを数台設置しているから由比ヶ浜さんの裸体を余すことなく写真に収められるわ。

これでオナニーにオカズが増えるわ。駄目にしても大丈夫なよう

に複数枚は現像しておかないと。

「んんっ……ゆ、ゆきのん?」

「あ、ごめんなさい!」

私は由比ヶ浜さんの背中を流していたはずなのにいつの間にか、私の手は由比ヶ浜さんの胸を掴んでいた。

すぐに離れたけど、由比ヶ浜さんに不快感を与えてしまった。しまった、これでは私の完璧な計画が!?

「そ、その……ひ、比企谷くんがいつも見ているから気になって……」

「え?ひ、ヒッキーが!?えへへっ……」

咄嗟に比企谷くんの名前を出したけど、由比ヶ浜さんは彼の名前を聞くと照れながらも嬉しそうに笑っていた。その笑顔を見るとイライラしてしまう。

別に比企谷くんに嫉妬している訳ではないけど、由比ヶ浜さんに笑顔にさせるのが許せなかった。

「由比ヶ浜さん。あなたさえ良ければ、もう少し揉ませてくれないかしら?」

「え?……ゆきのんならいいよ!」

「ありがとう!」

「あっ……んんっ」

由比ヶ浜さんの許可を得て、私は彼女の胸を堂々と揉んだ。見た目通りで柔らかく指が胸に沈むが、押し返してくる弾力がある。

これは比企谷くんが凝視する理由もなんとなくだけど、分かる気がするわ。私はさらに由比ヶ浜さんの胸を揉んだ。

「んっ……あっ……んんっ」

「由比ヶ浜さん。変な声を出さないでくるかしら?」

「だ、だって!ゆきのんの触り方が……えっちで」

「なっ!?そ、そんな訳ないでしょ!」

流星に露骨過ぎたかしら?私は由比ヶ浜さんの胸から名残惜しそうに離れた。もう少し揉んでいたかったけど、これ以上は変に思われしてしまう。

「お返しだよ!えい!」

「あんっ……ゆ、由比ヶ浜さん!?!」

「ゆきのんの肌、スベスベだね!」

「んっ……だ、だめよっ……あんっ」

由比ヶ浜さんが先ほどの仕返しと私の肌に触れてきた。それにも背中に胸をぴつたりとくっ付けた状態で。

それが無意識だろうと思うけど、私に対しての当て付けなのかもしれない。でもこれはこれでいいわね。

「ほらほら、ゆきのん」

「あんっ……そ、そこはだめよっ」

「ゆきのん……えっちだね」

「なら私もお返しよ!」

「きやあ!?!ゆ、ゆきのん!くすぐりたい!」

私は由比ヶ浜さんと浴槽の中でお互いの肌を触り続けた。ここはもう天国かもしれない。由比ヶ浜さんに触れて、触れられて、私は大満足だ。

「ゆ、ゆきのん!は、鼻血が!」

「え?……少し上せたわね」

「あ、上がろう!」

「そうね……」

由比ヶ浜さんは私の鼻血をお湯に上せたと思っていたけど、本当は由比ヶ浜さんに対して興奮して鼻血を出してしまったのは黙っていた方がいいわね。

それから私たちは浴室から出て、夕食を一緒に作り食べた。料理を作っている最中に由比ヶ浜さんが勝手にアレンジをしようとしたので、必死に阻止した。

「それでね、優美子がね」

「そうなのね……ふふっ」

「可笑しいよね!」

夕食を食べた後は由比ヶ浜さんと色々とお喋りをした。殆んど、由比ヶ浜さんが一方的に話していたけど、それでも私は楽しかった。

さて、そろそろいい時間だから寝ないと、明日は休みでも。その前

に由比ヶ浜さんに水を飲んで貰った。

「すう……すう……すう」

「由比ヶ浜さん？……よし、寝ているわね」

先ほど渡した水には睡眠薬が混ぜてある。小学生の時にイジメのストレスで不眠症になった時に貰ったものだ。最低でも6時間はぐっすりと眠れる。

私は由比ヶ浜さんのパジャマを脱がせて全裸にした。色々と触つたのに由比ヶ浜さんは眠ったままだ。

「由比ヶ浜さんの乳首……はむっ」

「あっ♡んんっ♡ああ♡」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「ひ、ヒツキー……らめえ♡」

由比ヶ浜さんは夢の中で比企谷くんがしているものだと思っているのね。それにしても由比ヶ浜さんの乳首を吸うことが出来るなんて、最高ね。

将来、この乳首から母乳を飲ませてくれないかしら？でもそのためには妊娠してもらわないといけないわね。そこは後で考えましょう。

「由比ヶ浜さん……下の毛の処理が全然ね」

「ひつきー……えっち」

由比ヶ浜さんのパンツを脱がせると陰毛がジャングルのようになっている。女性として下の毛の処理はしっかりとしないとダメなの。

由比ヶ浜さんがしないなら私がしないとダメね。私は鋏を取り出して、由比ヶ浜さんを紐で寝返りをしないように固定した。

「らめだよお……ひつきー」

「ダメなのはあなたよ、由比ヶ浜さん」

「んんっ……ああ」

「ふふっ……これが由比ヶ浜さんの陰毛……ちゃんと保存しておかないと」

私は由比ヶ浜さんの陰毛を丁寧にケースの中に入れた。由比ヶ浜さんの一部を手に入れたわ。これで常に由比ヶ浜さんを感じられる。

本当は全部、綺麗に切りたかったけど……鈍感の由比ヶ浜さんでも一晩で陰毛が消えれば、可笑しいと私を疑うかもしれない。

「それにしてもこれが由比ヶ浜さんの性器なのね……れろっ」

「あんっ……」

「れろっ……じゅるるるるっ」

「んんっ……んあっ……んひいひい」

思わず私は由比ヶ浜さんの性器を舐めてしまった。我慢出来ずに舐め回してしまった。いくら睡眠薬で眠っているとはいえ、起きてしまうかもしれない。

「だけど、私は理性を制御出来ずにそれから由比ヶ浜さんの性器を舐め回した。」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「んひいひい！ひやああああ！」

「じゅるるるるっ」

「あああああ！」

由比ヶ浜さんは私の攻めについて絶頂を迎えたらしい。体を反らしていた。ここまでして由比ヶ浜さんはまだ目覚めなかった。

流石は強力な睡眠薬ね。ならもつとしても大丈夫よね？ここまでしたんだから今更よ！

「由比ヶ浜さん……あんっ♡」

「んあっ……ひ、ひっきー」

「んんっ♡ 由比ヶ浜さん！」

「ああああ♡」

私は自分の性器と由比ヶ浜さんの性器をぴったりとくっ付けた。具合が悪かったかしら？お互いの性器がくっ付くだけでこんなにも気持ちいいなんて！

それにクリトリスも擦れて刺激が全身を突き抜けるようで気持ちいいわ！腰が勝手に動いてしまう。

「由比ヶ浜さん……ひやああああ♡♡」

「んひいひい♡♡」

「由比ヶ浜さんっ♡……今夜はここまでね」

「ひ、ひっきー……」

由比ヶ浜さんは夢の中で比企谷くんとしているのを見ていた。でもいつの日か、私だけを見続ける日がやってくるわ。それまでは楽しみにしておいてね。

私は由比ヶ浜さんの拘束を解いて、ベッドを綺麗にしてから眠った。次の日の朝に由比ヶ浜さんが謝ってきた。

「ごめん、ゆきのん！ベッドを汚して！」

「いいのよ、これくらい。洗いに出せば済むことよ」

「ほ、本当にごめん……」

「気にしていないわ」

ベッドに出来た染みを見て、由比ヶ浜さんは自分が漏らしたものだと思っただろう。実際は小便ではなく潮なのだけど、そこはわざわざ指摘しなくてもいいわね。

でもある意味、良かったわ。ベッドを汚したことを申し訳なさそうにしている由比ヶ浜さんに借りを作ることが出来たわ。

「由比ヶ浜さん。朝食にしましょ」

「うん！ゆきのんの料理、楽しみ！」

「由比ヶ浜さんの好みにしてみたから期待していて」

「やったー！」

私と由比ヶ浜さんは朝食を食べながらこれから何をするかを話し合った。こんなにも楽しい朝食は初めてだ。由比ヶ浜さん、絶対にあなたを手に入れたいわ。

やはり私が百合に進むのはまちがっている。 3

私、雪ノ下雪乃は知人は違うわね。友人？いえ、親友の由比ヶ浜結衣さんに紅茶を差し出した。今日は修学旅行の次に日で、休日だ。

由比ヶ浜さんは目元を赤く染めていた。一晚中、泣いていたんだろ。その原因は修学旅行で海老名さんに告白した比企谷くんの所為だ。

どうして戸部くんが告白する直前に告白するのかしら？頭がおかしいと思っていたけど、今回の件でさらに馬鹿も追加しないといけないわね。

「由比ヶ浜さん。紅茶を飲んで落ち着いて」

「う、うん……ヒツキーはどうして姫菜に告白したんだろう？」

「それは分からないわ。でもあの男が最低の屑だと言うことだけは分かったわ」

「ゆきのん……ヒツキーは姫菜のことが好きだったのかな？」

「それは……」

今、考えても可笑しなことがある。あまり接点のない人間に比企谷くんが告白しようとするだろうか？それに戸部くんが海老名さんに告白するのは事前に知っていたことだし、ボツチを自称する彼が学校で人気者の葉山くんの取り巻きの一人に告白するだろうか？

でも今は私に関係ないわ。彼のおかげで弱った由比ヶ浜さんを慰めることが出来るのだから。涙目になった由比ヶ浜さんはなんて、可愛いのかしら！

部屋中に仕掛けた隠しカメラでバツチリと撮っている。しばらくはこれをオカズにオナニーが捗るわ！

「由比ヶ浜さん……」

「きやあ!?ゆ、ゆきのん？」

私は思わず由比ヶ浜をソファーに押し倒してしまった。早まってしまうたかもしれない！もっと段階を踏んでからでないか。

でも由比ヶ浜さんは嫌がる素振りを見せない。もしかしたらこのまま押せばいける!!

「由比ヶ浜さん……私は貴女のが好きなの」

「わ、私だってゆきのんのことは……」

「私は友達ではなく恋人になりたいの」

「ゆきのん……で、でも！女の子同士だし……」

「今時、同性愛なんて普通よ」

由比ヶ浜さんは顔を真っ赤にして視線を逸らしていた。由比ヶ浜さんも満更でもないみたいね。私は由比ヶ浜さんの顔を正面に向けて、彼女の唇に私の唇をくっ付けた。

「んっ……」

「んんっ!？」

「んっ……由比ヶ浜さん、貴女が好きなの」

「ゆきのん……」

「否定してもいいわ。その時は貴女には会わないわ」

「そ、そんな!？」

由比ヶ浜さんは何より友情を優先してくれる。私が会わないと言えば、彼女は私との友情を優先してくれる。そうなれば、もう私のもになったも当然ね。

「由比ヶ浜さん。私たちはあの男に裏切られた者同士よ。だから誰よりも貴女の気持ちは分かるわ」

「ゆきのん……あんっ♡」

「ありがとう、由比ヶ浜さん」

私の手が由比ヶ浜さんの股へと伸びた。本来なら手を退けるけど、彼女は私の手を受け入れた。そして私は指を由比ヶ浜さんの膣内へと進んだ。

由比ヶ浜さんの膣内は熱く私の指をギュウギュウに締め付けてきた。由比ヶ浜さんは空いている私の手を握ってきた。初めてのことで不安なのだろう。

それにしても由比ヶ浜さんの手は綺麗ね。標本にしてずっと飾って置きたいくらいだわ。

「ゆ、ゆきのん！んんっ♡ああああ♡」

「安心して、由比ヶ浜さん。私の指で存分に感じていいのよ」

「んひっ♡んああ♡ああ♡」

「由比ヶ浜さんの膾内がどんどん濡れてきたわ。それに由比ヶ浜さんの感じている声はとっても素敵よ」

由比ヶ浜さんの膾内は私が指でどんどん攻めると愛液で濡れてきた。もうそれは表現すると大洪水と言える。

由比ヶ浜さんの愛液でソファアがずぶ濡れになってしまった。由比ヶ浜さんは感じ易いのかも知れない。

「ゆ、ゆきのん！何か、来るよー！」

「大丈夫よ、恐れずに感じていいわ」

「んひひひひひひ♡♡んああああああ♡♡」

「派手に絶頂したわね」

由比ヶ浜さんを私は絶頂させることが出来た。それにしても失敗してしまった。由比ヶ浜さんの潮を飲むチャンスだったのに。

由比ヶ浜さんは初めての絶頂に困惑しているようで、軽く痙攣しているようだった。それにしても由比ヶ浜さんの絶頂した際の顔はとっても素敵だわ。

「ゆ、ゆきのん……」

「由比ヶ浜さん……いえ、結衣さん」

「ゆきのんー！」

私が彼女の名前を言うと結衣さんとはとっても喜んでくれた。これまで苗字で呼んでいたからかもしれない。これからは名前で呼んでもいいわよね。

私は次のステップに進むためにある物を取り出した。それを見た結衣さんは固まってしまった。

「ゆ、ゆきのん。それって……」

「双頭デイルドと言う物よ。これで結衣さんの処女を破るのよ」

「っ!?だ、大丈夫なの?」

「安心して、私で試しから」

初めてデイルドを見た結衣さんは処女喪失を想像してか、顔が少し青くなっていた。確かに処女膜が破れる痛みは想像を絶するものがある。

でも他の男に奪われる前に私が奪わないと駄目よ。結衣さんの全
ては私のものなのよ！誰であろうと渡さないわ。私は双頭デイルド
を装着した。

「結衣さん。いいわね？」

「う、うん。で、でも優しくしてね……」

「もちろんよ」

「……んぎい!?いい、痛い!」

処女の結衣さんのためにデイルドにはローションで濡らしていた
のだけど、処女膜が破れた痛みで顔を歪めていた。

私はゆつくりとデイルドを結衣さんの膣内の奥へと進めた。その
際に結衣さんの指と私の指を絡めて、少しでも気が紛れるようにし
た。

「大丈夫、結衣さん？」

「い、痛いけど……我慢するよ」

「なら動くわね」

「う、うん。……んひい♡」

まずは軽く一突きした。デイルドの先が結衣さんの子宮の入り口
に到着した。すると結衣さんは軽く絶頂したようだった。

私はゆつくりと腰を引いては勢いよく突き出した。結衣さんは少
しは慣れてきたのか、デイルドと自分の股を凝視し始めた。

「少し激しくするわね」

「え?ま、まっ——んひいひい♡」

「ほらほら」

「んあっ♡んひい♡あああ♡」

結衣さんは私のデイルドで感じてくれているようで、どんどん卑猥
な声を出してきた。感じてくれている結衣さんの顔はとっても可愛
かった。

「結衣さん!んっ」

「んんっ!?ああっ♡」

私は我慢出来ずに結衣さんにキスをした。結衣さんとのキスは
とっても興奮した。これから好きなだけ出来ると思うと興奮が収ま

らない。

「結衣さん！結衣さん！」

「あんっ♡ゆ、ゆきのん……らめえ♡んひいいいい♡」

「もつと聞かせて！結衣さんの卑猥で感じている声を！」

「ら、らめえ♡あんっ♡ああ♡んんっ♡」

私は結衣さんの感じている声を聞く度に腰の動きが激しくなった。私のもつとデイルドの動きをよくするためにローションを追加で結衣さんの股に垂らした。

ただし、ただのローションではない。媚薬入りの女性の感度を高めてくれるものだ。

「んひいいいい♡♡ゆ、ゆきのんっ♡」

「結衣さん！もつとよ！」

「あっ♡んひい♡ひやああああ♡♡」

「結衣さん……んっ」

「んんっ♡ゆきのん……」

私は結衣さんと見つめ合いながらキスをした。それもデイルドの方で、とつても興奮した。結衣さんの舌と私の舌を絡み合わせるだけでこちらも興奮してしまうなんて、驚いた。

「ゆきのん……」

「結衣さん。まだ終わっていないわよ」

「え？そ、それって……」

私は結衣さんの体勢を仰向けからうつ伏せに変えた。後ろから見る結衣さんも中々いいわね。お尻の穴はヒクヒクして、デイルドで犯したいほどだった。

私は結衣さんの腰を掴んで、デイルドを後ろから挿入した。結衣さんのお尻の穴がしっかりと見えていいわね。

「ああああ♡んひい♡ひやあ♡」

「結衣さん！もつと感じていいのよ！」

「ら、らめえ♡ゆきのんっ♡何かくるっ♡」

「もつと聞かせて！貴女の卑猥な声を！」

「んひいいいい♡♡ああああああ♡」

私は腰を激しく結衣さんのお尻に叩きつけた。結衣さんのお尻は私の腰が動かす度にプリンのように揺れた。お尻の穴がヒクヒクして綺麗だわ。私はお尻の穴に指を挿入した。

「うひい!? ゆ、ゆきのん!」

「ごめんなさい。あまりにも可愛くて」

「んひい♡」

「結衣さんはお尻の穴でも感じられるのね」

「ああ♡ひゃあ♡んひい♡」

私の指が結衣さんのお尻の穴の蹂躪していると思うと腰が激しくなってしまう。そろそろ体力の限界だから終わらせないと。

私はラストスパートで腰を先ほどよりも激しく結衣さんのお尻に叩きつけるように振った。

「んんっ♡ひゃああああ♡♡♡」

「結衣さん。とっても気持ち良かったわ」

「……………」

結衣さんは絶頂した際に気絶したのか、反応はなかった。私は気絶している結衣さんを写真に収めた。絶頂した際に結衣さんはアへ顔になっていた。

まったく結衣さんはどこまでも私を興奮させてくれるわね。でも私も限界だったようで、結衣さんの胸の上で気絶するように眠ってしまった。

結衣さんの胸は最高にいい枕になるわね。次はもっと激しいプレイをしたいわね。

やはり私が百合に進むのはまちがっている。 4

私、雪ノ下雪乃は学生生活で一番幸せを感じている。それは友人から始まって今では私の恋人になった由比ヶ浜結衣さんが居るからだ。彼女のおかげで私の灰色の学生生活は今ではバラ色に染まった。これも全て結衣さんのおかげと言っても過言でもない。

「ゆきのん！お待たせ」

「いらっしやい結衣さん」

「えへへっ！」

昼休憩に奉仕部の部室に私たちは集まった。修学旅行以降、こうして私たちは昼食を部室で食べている。ここなら誰の邪魔も入らないからだ。

「んっ♡」

「んんっ♡」

「結衣さん。キスが上手になったわね」

「毎日、ゆきのんとしているからだよ！」

「そうね。ふふっ」

私たちは部室でキスをしている。ここなら誰にも見られずにする事が出来るからだ。結衣さんはすっかり、私とのキスが嵌まってしまつてようで、餌が我慢できない子猫のように私の唇に縋り付く。

一通りキスをしてから昼食を食べる。ただし、普通に食べるのではない。私は一度、口の中で咀嚼したお弁当を結衣さんの口に移し変えた。

「……どうかしら？結衣さん、おいしい？」

「うん！ゆきのんの唾液と一緒にだからとっても美味しいよ！次は私だね！んっ」

「んぐっ……結衣さんのお弁当も美味しいわ」

「やったー！」

私たちはお互いに咀嚼したお弁当を食べあっている。結衣さんの中に私が一度、咀嚼したお弁当が、私の中には結衣さんが咀嚼したお弁当が入っていると思うとゾクゾクしてしまう。

「さて、結衣さん。スカートを捲り上げなさい」

「うんっ♡」

「あら？もうグチヨグチヨに濡れているのね？」

「だって、ゆきのんがずっと入れているように言うから」

今、結衣さんのマンコには私が購入したバイブが挿入されている。専用のパンツでバイブは固定されており、抜けないようになってる。

その専用のパンツがもうグチヨグチヨに濡れていた。少し愛液がパンツから漏れている。私はパンツを脱がした。

「凄いわね。結衣さんの発情した牝の匂いで私のバイブが臭くなったわ」

「ゆ、ゆきのん。いじわるしないで、早くしてっ♡」

「仕方ないわね……」

「早く早くっ♡」

私は結衣さんのマンコからバイブを抜いて、結衣さんの発情した匂いを嗅いだ。もうこんなにも発情しているなんて、どんだけ厭らしいのかしら？

結衣さんは机の上に体を預けるようにして、お尻をこちらに向けてきた。私に犯して欲しくて仕方ない様子だった。

私は鞄から双頭ティルドを取り出して、股に装着した。たつぷりとローションを塗り、結衣さんの腰を掴んでからティルドを結衣さんのマンコに挿入した。

「んひっ♡ゆきのんおちんちん、きたあああ♡」

「挿入しただけ潮を噴くなんて、堪え性がないわね」

「あんっ♡んひい♡ひゃんっ♡」

「結衣さん。一突きする度に愛液がドバドバ出ているわよ」

「んひいひい♡♡んああああ♡♡」

結衣さんは声を我慢することなく卑猥な声を響かせた。足はガクガクして、失禁までしていた。すっかり、私のチンコで感じる変態になっちゃったわ。

これを受け入れられる人は私以外にはいないでしょう。例えば企

谷くんだとしても無理ね。こんな結衣さんを見たらきつと幻滅するに違いない。

「ほら結衣さん。ちゃんと綺麗にしてね」

「う、うんっ♡はむっ……じゅるるるっ」

私はデイルドを結衣さんのマンコから抜いて、顔の近くまで移動した。結衣さんは先ほどまでマンコに挿入されていた、デイルドをフェラした。

必死になってデイルドを綺麗にしている結衣さんはとっても健気で虐めたくなる。私は再び結衣さんのお尻に回った。

「ゆきのん?」

「まだ昼休憩は残っているわ」

「ゆき——んひいいいい♡」

私は結衣さんのマンコの奥にデイルドを一気に挿入した。結衣さんは絶頂して、潮を噴いた。私は腰を激しく腰を前後させた、もう腰が止まらない。

ふと、私の視界に結衣さんのプリプリのお尻が入ってきた。私は思わず、手を上げてからそれを振り下ろした。

「んひい!?!ゆ、ゆきのん!?!」

「ごめんなさい。あまりにも虐め欲しそうなお尻だったから」

「い、いきなり叩かないですよ!」

「そうね。じゃあ、叩くわね」

「んひい♡あひい♡ひゃあ♡」

何度も私が結衣さんのお尻を叩くものだからお尻はすっかり赤く染まった。まるでお猿のお尻のようだった。お尻がピクピクと震えていた。

結衣さんの足は震えて、まるで小鹿のようで可愛いわね。もっと結衣さんの可愛い姿を見たいわね。

「結衣さん。もっと感じなさい」

「え?ゆ、ゆきのん?——んひいいいい♡」

「ほらもっとよ!」

「んんっ♡あんっ♡ひゃああああ♡♡」

私は鞄から電マを取り出して、結衣さんのクリトリスに密着させてから電源を入れた。しかも振動は一番強い「強」にした。

結衣さんは連続で絶頂して、体が敏感になっていく。そんな中、間髪入れずにクリトリスへの刺激で、もう考えられないくらいの快楽が体を支配しているはずね。

「結衣さん！イキなさい！」

「ひゃああああああ♡♡ああああああ♡♡」

「結衣さん……とつても素敵よ！」

「あ♡……あ♡……あ♡」

結衣さんはアへ顔を晒して、絶頂の余韻を味わっていた。私はそんな彼女を写真に収めた。なんて、不細工で無様なアへ顔なんでしょう！

この顔を見られるのが私だけだと思えば、背徳感で私も絶頂してしまう。もっと結衣さんの感じている姿を見たい！

「結衣さん。自分だけで満足するなんて、ズルいわ」

「う、うん……れろっ……じゅるるるるっ」

「んんっ♡いいわ、結衣さん。もっとお願い」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

私がデイルドを外してから結衣さんの顔に私の股を近づけると舌で私の膣内を刺激してきた。結衣さんの舌が私を気持ちよくするために必死になっている。

必死になって、私を気持ちよくしてくれている結衣さんを考えると絶頂してしまう。私は結衣さんの顔を掴んで固定した。

「で、出るー！」

「んんっ!?……んぐっ……んぐっ」

「ああ……結衣さん、零さずに飲み干すのよ」

「んぐっ……の、飲んだよ」

「偉いわ結衣さん」

「えへへへっ……」

結衣さんは私の小便を飲み干したのに笑顔が絶やさなかった。私のお腹を受け入れてくれて、ありがとう。

私のことを理解してくれるのは貴女だけだわ。そして貴女を理解することが出来るのは私だけよ！

「ゆきのん……」

「どうしたの？結衣さん」

「も、もう一回……していい？」

「ええ、もちろんよ」

時間を確認してみたけど、まだ時間には余裕がある。あと一回くらいなら十分な時間がある。私は再び、デイルドを装着した。

結衣さんは机の上の乗って、仰向けで股を開いて私を受け入れる準備をしていた。あれだけ犯したのにまだしたいなんて、結衣さんとはとんでもない淫乱な女ね。

「いくわよ、結衣さん」

「んひひひいい♡♡」

「挿入だけで絶頂したのかしら？」

「ら、らって……気持ちいいんだもん♡」

「ならもつと気持ちよくしてあげるわ！」

「あんっ♡ひゃあ♡んああああ♡♡」

私たちは昼休憩のギリギリまで性を貪った。そして昼休憩が終わる前に私はある物を結衣さんに渡した。結衣さんは目を丸くして、私と物を交互に見た。

「ゆ、ゆきのん……」

「今から放課後までこれを付けて、過ごすのよ」

「こ、これを……」

「結衣さんなら私のお願いを聞いてくれるでしょ？」

「も、もちろんだよ！ゆきのんのお願いだもん！」

「ありがとう結衣さん」

結衣さんは最初渋っていたけど、私のお願いだというとすんなりと受け入れてくれた。結衣さんは私のお願いに弱いよね。

私の無茶なお願いを健気に叶えようとしている結衣さんはなんて、可愛いのかしら！出来ることなら今の結衣さんをずっと家に飾っておきたいわ。

「ゆ、ゆきのん……出来たよっ♡」

「ありがとう結衣さん。それじゃ放課後にね」

「う、うん……」

私たちは昼休憩が終わる前にそれぞれの教室に戻った。今から放課後まで結衣さんがどうなるか、楽しみでしようがないわね。

放課後になったらすぐに奉仕部の部室に来るでしょうね。私は少し時間を置いて、行こうかしら。

「ふふっ……放課後が楽しみね。結衣さん……」

私は放課後のことを考えながら教室に戻った。これほど早く放課後にならないかと考えたことはない。これも結衣さんの所為ね。

どうして貴女は私の感情をこれほどまでに狂わしてくれるのかしら？ おかげで下着が愛液でグチョグチョになってしまったわ。

念のために換えの下着を持ってきていて正解だったわ。教室に戻る前にトイレで下着を着替えて放課後を私は待った。

やはり私が百合に進むのはまちがっている。 5

私、雪ノ下雪乃は授業を終えて、奉仕部の部室に行く前に図書室で少し時間を潰していた。念のため、奉仕部の部室の鍵は開けておいたので、結衣さんと比企谷くんは勝手に入るでしょうね。

でも結衣さんは私が部室にいないことにショックを受けるかもしれないわね。そしてしばらくして私が行けば、絶望した顔から満面の笑みを浮かべてくれるでしょうね。ああ、それを想像しただけで下着が愛液で濡れてしまうわ。

「そろそろね……」

図書室で30分ほど時間を潰して、私は部室へ向かった。途中で比企谷くんが平塚先生に引き摺られてどこか行っていた。おかげでこれからは結衣さんとの二人だけの時間になるわ。

「結衣さん」

「ゆきのん!?!ど、どうして部室にいなかったの!?!」

「ごめんなさい。少し先生の手伝いをしていたの」

「来ないかと思ったよ!」

結衣さんは部室に入ると涙目になって、私に抱きついてきた。こんなにも貴女は私のことを思っているなんて、私は幸せ者だわ!

私は結衣さんの髪を撫でながら慰めた。手間のかかる子ほど可愛いとは言ったものね。私は結衣さんを引き剥がして、椅子に座った。

「結衣さん。見せて」

「う、うん……」

結衣さんはスカートを捲り上げて昼休憩に私が渡した物をしっかりと見せてきた。私が渡した物はバイブとローターだ。

結衣さんは昼休憩から今までそれを膣内とお尻の穴に装着した状態で授業を受けていた。振動は「弱」にしているので、物足りない刺激に悶々としたことでしょうね。

その証拠に下着は愛液で濡れており、少し発情した牝の匂いがした。比企谷くんや平塚先生にはバレなかったかしら?

「ゆ、ゆきのん。早くしたいよお……」

「堪え性がないわね。結衣さんは」

「だって、お昼からずつとなんだよ!」

「そうね。ならバイブとローターを手を使わずに抜いたらしてあげるわ」

「わ、わかった……んっ♡……」

結衣さんは膣内とお尻の穴に力を入れて必死にバイブとローターを抜こうとしていた。カんだ結衣さんは不細工そのものだった。

でもカんだ顔も私にとっては素敵な顔に見えてしまう。また貴女の一面を知ってしまった。それだけで興奮してしまう!

「あっ♡ゆきのん……抜けたよ」

「ええ、ちゃんとしてくれた結衣さんは私がしっかりと犯してあげるわ」

「うん!早く早くっ♡」

結衣さんはお尻をこっちに向けて、左右に振って私のことを誘っている。私は双頭デイルドを装着して、結衣さんの腰を掴んでデイルドを膣内に挿入した。

「うひいひい♡きたきたきたっ♡」

「デイルドから結衣さんの膣内の締め付けが伝わってくるわ!」

「んひい♡ああああ♡んあっ♡」

結衣さんの膣内の締め付けがデイルドから伝わってくるようだわ。今までバイブとローターで刺激された体が私のデイルドで絶頂させられたと考えると最高に興奮してしまうわ。

だから私は先ほどまで膣内に挿入されていたバイブをお尻の穴に挿入した。

「のおおおおっ!?!お、おひいりいひい♡」

「お尻の穴でも感じるなんて、結衣さんは本当に変態ね」

「ら、らめえええ♡おひいりいがこわれるううう♡」

「大丈夫よ。例えお尻の穴がガバガバになって、私が閉められるようにしてあげるわ」

「うひいひいひい♡♡」

本当に結衣さんは変態ね。膣内とお尻の穴の両方で感じて、ここま

で乱れるなんて。でも安心して、どんな変態でも私は結衣さんを愛しているのだから。

私は更に興奮して腰を激しく前後した。私のデイルドが結衣さんの膣内を一突きする度に愛液がドバドバと溢れてきた。

「結衣さん！結衣さん！」

「んひい♡ああああ♡んひああああ♡」

「素敵よ、結衣さん！」

「ひゃああああ♡♡んああああ♡♡」

結衣さんは絶頂して、そのまま机に体を預けるように倒れた。その際にデイルドとバイブが抜けた。結衣さんの足は産まれた小鹿のように震えていた。

膣内からは発情した牝の匂いを出して、お尻の穴は呼吸しているようにパクパクしていた。

「あ……」

「勿体無い……んぐっ」

「うひい♡」

「んぐっ……んぐっ……結衣さん、ご馳走様」

結衣さんは気が抜けたのか、小便を出してしまった。結衣さんの小便を飲みたかったので私は結衣さんの股に顔を近づけて飲んだ。

結衣さんの絶頂した後の小便是どこか甘く美味しかった。先ほどまで結衣さんの体の中にあつた液体が私の体内に入っていると思うと興奮してしまう。

「さて、結衣さん。続きは私のマンションでしましょうか？」

「う、うん……もつとゆきのんに犯してほしいっ♡」

「分かっているわ。ならマンションに着くまで落とさないでね」

「え？」

私たちは軽く部室を掃除して、学校を後にした。それから結衣さんは学校からマンションに着くまでずっと私の腕にしがみ付いていた。

結衣さんの顔は赤く内股になっていた。ここまで2回ほど通行人が心配して結衣さんに声をかけて来た。

「結衣さん。到着したわよ」

「や、やつと着いた……あつ♡」

「着いた途端に抜けるなんて、駄目じゃない」

「ご、ごめんなさい……」

結衣さんは部屋に入るなり、股からバイブがずり落ちた。部屋からここまでずつとバイブを装着しただけだ。しかもノーパンでだ。

だからバイブが落ちないように内股になっていた。もし歩いている時にバイブが落ちていたら通行人の視線が一斉に結衣さんに向いただろう。

「ゆきのん……ご、怖かったよ……」

「ええ、よく頑張ったわね。ご褒美よ……んっ」

「んんっ♡ゆきのんのキス、好きっ♡」

「ならもつとしてあげるわ。んっ」

「んんっ♡」

私は頑張った結衣さんにキスのご褒美をあげた。それもソフトではなくティープの方をだ。舌と舌を絡めて、唾液をたっぷりと与えた。

それだけで結衣さんは腰がガクガクして、今にも腰が抜けそうになった。今にも床にお尻が着きそうなのを我慢している結衣さんにとってはとても可愛かった。

「ほら浴室に行きましょう」

「うんっ♡」

結衣さんは私の腕にしっかりと掴まり浴室に向かった。浴室に着すると結衣さんは壁に手を付いて、お尻をこちらを向けてきた。

私は双頭ティールドを装着して、ローションを垂らして準備した。それを結衣さんはご飯をお預けされている犬のように見ている。

「ゆきのん、早くう♡」

「結衣さんは躰がなっていないわね!」

「うひい♡」

「もつと感じて卑猥な声を出さない!」

「あんっ♡んひい♡ああ♡」

私がティールドを膣内に挿入しただけで結衣さんは絶頂していた。

自分だけ感じて絶頂するなんて、羨がなっていないわ。

私は結衣さんの両手首を掴んで腰を前後に激しく振った。すると結衣さんは卑猥な声を我慢することなく出した。

「なんて、品がない声なの!?!聞いているこっちが恥ずかしいわ!」

「ひゃああああ♡んひひひ♡のおおお♡」

「年頃の女性としての意識が低いんじゃないの!?!」

「ら、らめええ♡いぐいぐいぐ♡」

結衣さんは私の言葉責めでさらに感じているようだった。まあ、そうなるように私がこれまで調教してきたのだけど。

それにしても腰を前後する度に結衣さんの胸が揺れていいわね。私もあれくらいは欲しいわね。

「ゆ、ゆきのん♡ち、乳首はらめええ♡」

「もつと感じなさい!」

「うひひひ♡♡のおおお♡♡」

私が結衣さんの手首から乳首に掴むのを変えると結衣さんは潮を噴き出して、絶頂した。浴室の床が結衣さんの愛液で濡れていた。

今度は体勢を変えて、向かい合うようにした。私は結衣さんの乳首に吸い付いた。

「ちゅううう!」

「ゆきのん、乳首はらめええ♡」

「ちゅううう!」

「んひひひ♡♡」

結衣さんは私に乳首を吸われて絶頂したようだ。本当に結衣さんは乳首が弱いわね。ならもつと責めないと!

「ちゅっ……ちゅううう!」

「んひひ♡ひゃああああ♡♡」

「結衣さん!んっ」

「んんっ♡ゆきのん♡」

「私もいくわ!ひゃああああ♡♡」

「うん、いくううう♡♡」

私と結衣さんは同時に絶頂した。これまでの中で一番の絶頂だっ

たわ。でも結衣さんは絶頂して気絶してしまった。

仕方ないので私は結衣さんを寢室に運んだ。体力のない、私にはキツイものだったけど、結衣さんの裸体を見たら疲れが吹き飛んだ。

「ふふっ……結衣さん。もつと私と一緒に堕ちましょう」

「んんっ……ゆきのん、大好きい」

「ええ、私も大好きよ。愛しているわ、結衣さん」

私はそのまま結衣さんが起きるまで隣で眠りについた。そして結衣さんが起きてからまた彼女を私の双頭、ディルドで犯した。

私たちは惹かれ合う運命だったのね。貴女と出会うきっかけをくれた比企谷くんには感謝してもいいわ。

「結衣さん……貴女は私だけのものよっ♡どこまでも一緒に行きましよう。例え、地獄でも一緒ならそこは天国だわ」

由比ヶ浜結衣

やはりガハマが病室に来るのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。春と言えば入学だ。この春から俺は千葉の進学校の一つ総武高校に入学が決まった。どうしてここかと言うと俺の中学の連中は俺以外に誰もここを受験しなかったからだ。

中学3年間で俺は色々な黒歴史を作ってきた。だから高校は俺の事を知らない所にする必要があった。

そして受験勉強を乗り越え、4月に入学するはずだったのだけど、今の俺は病院のベッドの上で寝ている。

入学式の日、俺は興奮して朝早くに学校へ向かっていた。遠足の小学生か！とツツコミを入れたい。そして殴りたい。

朝早くに家を出なければ骨折しなかったかもしれないのだから。俺の骨折は朝早くに犬を散歩していた女の子の手から離れて道路に出たためだ。俺は咄嗟に犬を助けてしまった。その結果、高級車に轢かれた。

それにしても数箇所の骨折だけで済むとか俺は運がいいな。でも入学式に出られなかった。学校へ行けるようになるまで一ヶ月以上経過してしまう。

そうなつてはクラスではグループが出来て、俺の入る隙間はないだろう。そんなネガティブな事を考えていると俺の病室に家族以外の客人がやってきた。

総武高校の制服を着た女の子だ。地味目で胸が大きい。見た感じ、同級生だろうか？だとしたら一年で中々の巨乳だろ!?

しかしこの顔、どこかで見た事があるんだよな。中学のクラスメイ卜って事はないだろう。総武高校を受験していないんだから。

あ、思い出した。俺が犬を助けた時に近くに居た女の子だ。

「ど、どちら様ですか?」

「わ、私！由比ヶ浜結衣って言います！うちのサブレを助けてくれてありがとうございます!!」

「お、おう……」

サブレ？鳩サブレの事か？でも鳩なんて助けた覚えはないなんてないし、もしかしてあの犬の名前か!?

もつといい名前があっただろうに。どうしてお菓子の名前から取ったんだ？

「あのーこれ、つまらない物ですけど!!」

「あ、はい。どうもです……」

女の子から包みを受け取った。たぶんお菓子だろうな。女の子、由比ヶ浜さんはお菓子を渡したのにまだ病室に居る。

どうしたんだろうか？さつきから顔を下に向けている。俺にどうしろと？女の子と会話なんていつぶりだよ？

思い出せない。もしかしたら数年は会話していないのか？

「えっと……由比ヶ浜さんはまだ居るんですか？」

「あ、あのー私に出来る事があったら何でも言ってみて下さい!」

「いや、何でもって……」

「うちのサブレを助けてくれたんです!で、でないと申し訳なくて……」

ちよつと面倒な女の子だな!早く帰ってくれないかな。ラノベの続きを読みたいのに。ここは卑猥な事を言っても出て行ってもらおう。

「こ、これからオナニーをするんだ」

「おなにー?」

「だからこれだよ!!」

「きやあ!?!な、何しているんですか!?!」

俺はズボンを下ろして、勃起したチンコを露にした。由比ヶ浜さんは手で目を覆っているけど、隙間からちやつかりと見ていた。興味はあるようだ。

「あのーわ、私は何をすればいいですか？」

「本気で言っているのか?」

「も、もちろんです!何でもしますと言いましたから!」

「そ、それじゃ俺のを握って扱いてくれ」

「は、はいー…、こうですか？」

由比ヶ浜さんはぎこちなく俺のチンコを握ってきた。女子の柔らかく温かい手が俺のチンコを握っている！それにしても初対面の男のチンコを握るとかビッチなのか？

でもさつさと病室を出てもらおうか。

「次は口に唾えてくれ」

「く、口に!？」

「何でもするんじゃないか？」

「そ、そうですけど……」

「出来ないなら出てっけてくれ」

「出来ます!!はむっ」

由比ヶ浜さんはムキになって勢いでチンコを唾えた。口の温かさと唾液のネットリ感がチンコに伝わってくる。

「唾えたまま上下するんだ。あ、歯を立てないでくれ。男のチンコはデリケートなんだ」

「んぢゆるるるるっ……んんっ……」

「のおおおお……!!」

初めてのフェラに頭に電気が走る！オナニーよりも格段に気持ちいいじゃないか！ヤバイ、来る。来てしまう。

俺は由比ヶ浜さんの頭を抑えて、チンコを喉奥まで押し込んだ。

「で、射精るー」

びゆるるるるるびゆるるるるっ……

「んんっ!?!……んんぐっ……飲んじやった!？」

由比ヶ浜さんは思わず精子を飲み込んだようだ。まあ、俺が抑えていたから飲むしかなかったんだけどな！

「どうしよう!?!妊娠しちゃう!!」

「……いや、精子の飲んだくらいで妊娠はしないだろ」

「そうなの!？」

「妊娠は精子を受精卵にくっ付けしないとしないんだぞ？保険体育で何を習ったんだよ」

由比ヶ浜さんは常識ってものがないのだろうか？女子なら妊娠の

過程くらい知っていると買ったのだけど、もしかして由比ヶ浜さんってバカなのか!?

もしかしてこのまま童貞を卒業出来るのではないか!? 由比ヶ浜さんはどこかバカっぽいし、押しに弱いのではないか?

「由比ヶ浜さん。お願いがあるんだけど……」

「お願い? 私に出来る事だったら!」

「セックスさせてくれ」

「へえ!?!」

「セックスさせてくれ」

「な、な、何言っているの!?!」

由比ヶ浜さんは顔を赤くして大声を出した。ボリュームが大きいな、胸と一緒に。それにしてもここまで顔を赤くするか?

でも強気で押せば落とせるはずだ。歯が浮きそうだけど、言ってみるか。

「俺、由比ヶ浜さんに一目惚れしたんだ!」

「えええええ!?!」

「だから由比ヶ浜さんで童貞卒業させて欲しいんだ!」

「で、でも……そう言うのは結婚してからじゃ……」

どこまでもピュアなんだ? 結婚してからとか古いんじゃないか?

もう一押しだ。揺らいでいる。これで落とす!

「それにこれを使えば妊娠はしない」

「これは?」

「避妊具。ゴムってやつだ」

由比ヶ浜さんは俺からゴムを受け取るとマジマジと観察していた。このゴムは小町が見舞いに来た時に親父が置いて行ったものだ。

「妊娠はしないんだよね?」

「ああ。だからお願いだ!」

「妊娠しないならいいかな……」

「本当か!?!」

由比ヶ浜さんはちよろい!まさか事故って童貞卒業出来るなんて。次もゴム有りならさせてくれるかもしれないな。

俺は由比ヶ浜さんからゴムを受け取り、開けて勃起したチンコに装着した。初めてだから失敗するかと思ったけど、上手く行った。

「そ、それじゃ……行くね?」

「あ、ああ……」

「んっ……」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひぎい!?!、痛い……」

由比ヶ浜さんは俺の股の上に立つとゆっくりと腰を下ろした。そのまま自分のマンコに俺のチンコを挿入した。

これがマンコなのか!?!チンコを圧迫する感じがなんとも言えない気持ち良さがある。由比ヶ浜さんは処女膜が破れていたのか、俺に抱き付いてきた。

それにしても由比ヶ浜さんって胸が大きいな。これで高校生とか思えないぞ。しかしそろそろ動いて欲しい。

このままでは生殺しだ。滅多に人が来ないとは言え、早く終わらせたい。

「ゆ、由比ヶ浜さん。そろそろ動いて欲しいんだけど……」

「う、動く?」

「腰を上下するだ。チンコが抜けない程度に」

「う、うん。痛いけど、がんばる。んんっ♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

由比ヶ浜さんは必死になって腰を上下し始めた。その度に大きな胸が揺れる。それにしても由比ヶ浜さんは素直に俺の言う事を聞いてくれるな。

それに簡単に男のチンコに跨るとか、もしかしてビッチなのか?この体を見れば一目瞭然だな。

「あんっ♡んんっ♡い、痛いのがなくなってきたっ♡♡」

「流石はビッチ……」

「だ、誰がビッチだし!?!私は処女……ああ!!何言わせる!?!」

「いや、もう処女ではないだろ」

「そ、そうだった!!」

ビッチと言うよりバカだな。だけど、おかげで童貞を卒業する事が出来た。俺は由比ヶ浜さんと手を絡めた。

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あつ♡んっ♡ひ、比企谷君、ダメっ♡♡」

「由比ヶ浜さん。もう射精る!」

「へ?な、何!?!」

「で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「ひいいいい♡♡♡お、お腹が熱いつ♡♡」

俺の射精で由比ヶ浜さんは絶頂したようだった。そして俺の胸に倒れ込んできた。ゴム越しでも由比ヶ浜さんのマンコの熱が伝わってくる。

いつかゴム無しでマンコへの射精を試してみたい。もつと由比ヶ浜さんを俺の従順にしないと。でないと誰かに言いそうだからな。

写真や動画で脅してやるものいいかもしれない。

「すごいね。そんなにたっぷり射精るんだね」

「ああ、由比ヶ浜さんのおかげだよ。ありがとう」

「そ、そう?えへえええ」

マンコからチンコを抜いて、ゴムを取ると由比ヶ浜さんは使用済みのゴムに興味津々のようだった。

しかしチンコが汚れたな。

「由比ヶ浜さん。お掃除フェラしてくれ」

「お掃除フェラ?」

「精子で汚れたチンコを綺麗にするんだ」

「う、うん。やってみる。はむっ」

すっかり俺の言う事を聞くようになったくれたよ。でもこんなものではない。退院したらもつと激しいプレイで弄んでやる。

「んぢゅるるるるっ……んんっ♡はあ♡比企谷君は嬉しい?」

「ああ、最高だよ。由比ヶ浜さん」

「そっか……えへえええ」

バカだけど、いいオナホールを手に入れた。この手の性格の人間は何か依存させれば何でも言う事を聞くとテレビでやっていたな。典型的なダメ女の特徴だ。

折角、手に入れたんだ。他の誰かには絶対にやらない。この女は俺だけのものだ。

「由比ヶ浜さん！で、射精る！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんんっ!?げほっ……げほっ……ひ、酷いよ」

「ごめん。由比ヶ浜さんがあまりにも可愛くてつい……」

「か、可愛い。えへえええ」

本当にバカみたいに笑う。その笑顔も全部、俺のものだ！退院が楽しみだ。

やはりガハマがビッチじゃないのはまちがっている。

うっす比企谷八幡だ。犬を救って全治一ヶ月の大怪我をしてしまい、高校生活を大幅に遅れてしまった間抜けだ。

だけど、童貞を卒業する事が出来た。相手は犬の飼い主の由比ヶ浜結衣と言う地味系巨乳少女だ。美が付けばよかったのだけど、それだと他の誰かに取られてしまう可能性があっただろう。

出来ればこのまま地味のまままでいて欲しい。あの胸は俺だけのものだからな。そしてついに俺の退院の日が決定した。

ゴールデンウィーク明けが退院の日だ。そこから高校に通える。授業に関しては由比ヶ浜のおかげである程度、ついて行ける。

ただ由比ヶ浜の字が汚いのがどうにかして欲しい。

「それじゃもうすぐ退院なんだね？」

「ああ、ノートとかありがとね」

「い、いいよ。私に出来るのはこれくらいだから！」

「お、おう。そうか……」

今日も由比ヶ浜が見舞いに来てくれた。ちなみに両親は妹の小町と旅行に行っている。息子が大変な目に遭ったのに酷いものだ。

両親は小町至上主義だから俺の事なんて、どうでもいい。まあ、おかげで病室で由比ヶ浜の犯す事が出来ただけだな。

もし頻繁に来ていたら由比ヶ浜との行為を見られていただろう。

「由比ヶ浜。頼む」

「う、うん。今日も誰も来ないんだよね？」

「ああ、診察もさつき終えたばかりだから。家族は誰も来ない」

「わ、分かった。はむっ」

「おおおおー！」

由比ヶ浜が露になった勃起したチンコを啜えた。由比ヶ浜のフェラはまだぎこちないけど、それがまたいい。

必死に顔を動かして、俺のチンコを刺激してくる。

「んぢゆるるるるっ……れろっ♡……ぢゆるるるるっ……んんっ♡」

「上手いぞ、由比ヶ浜」

「そ、そう? えへえええ……」

「もう射精しそうだから飲んでくれるよな?」

「う、うん。がんばる。んんっ♡」

由比ヶ浜はまだザーメンを飲む事に抵抗がある。もっと従順にしたいけど、下手に強制すると親に知らせる可能性がある。

折角、手に入れた性処理便利女なんだ。絶対に手放すものか。

「由比ヶ浜! で、射精する!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「んんっ!?! ……んぐっ……げほっ……げほっ……」

「由比ヶ浜。見せてくれ」

「ああああ……」

由比ヶ浜は抵抗しているけど、ちゃんとザーメンを飲んでくれるんだよな。俺は由比ヶ浜の頭を撫でてやった。

これはある意味、犬の躰のようなものだ。ちゃんと出来たら褒める。そうすると次もやってくれる。由比ヶ浜は嬉しそうに笑う。

「ありがとな由比ヶ浜。最高だよ」

「う、うん。ザーメンは苦くて嫌だけど、がんばって飲むね!」

「ああ。流石は俺の彼女だ、大好きだ」

「私も大好きっ♡」

本当にバカだな。こんな言葉で簡単に俺の事を好きになるなんて。もっと調教して、俺への依存度を上げていく。

そうすれば、俺から離れなくなる。早く生射精したい。けど、妊娠はまだ不味い。子供には苦労して欲しくないからな。

最低でも大学を卒業するまで妊娠はしないようにしないと。

「比企谷君?」

「何でもない。由比ヶ浜、もう限界なんだ。早くしてくれ」

「うん。私、上手になったんだよ」

由比ヶ浜はゴムを一つ取り出して、俺のチンコに装着した。最初のうちは何度も破いたものだ。だけど、ここしばらくは破らなくなった。

最初、俺は由比ヶ浜の事をビッチだと思っていた。でも初めての時、股から血を流していた。この胸で処女とは驚いた。

でもラツキーと言える。誰かのお古なんて使いたくはなかったから。

「そ、それじゃ行くね」

「ああ、頼む」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「んんっ♡……ひ、比企谷君の大きいっ♡♡」

由比ヶ浜がベッドで寝そべっている俺の股の上に腰を下ろした。俺からしたいのだけど、まだ事故の怪我が完治してはないので激しい運動は出来ない。

でも俺はこの体勢が好きなんだよな。由比ヶ浜が腰を振るたびに胸が揺れて、眼福なんだよな。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あつ♡んんっ♡あんっ♡ひ、比企谷君!激しいよっ♡♡」

「由比ヶ浜がビッチなのがいけないんだろ?」

「私は処女……あああ!!何言わせるの!?!」

「もう処女ではないだろ」

由比ヶ浜は「あ、そうだった」という顔をしていた。本当にバカだ。これで俺と同じ総武高校なんだよな。

あそこは進学校だったはずだ。なのにこんなバカが入学出来るなんて、裏口入学って奴か?体を使って校長を誘惑したとか?

でもそれだと処女なのは可笑しいよな?つまり実力で入学したと?絶対にありえないだろ!?!

「ゆ、由比ヶ浜!で、射精る!」

びゆるるるるびゆるるるるつ……びゆるるるるびゆるるるるつ……

「ひいひいひい♡♡♡お、お腹……熱いっ♡♡♡」

俺の射精と同時に由比ヶ浜は絶頂したようだ。疲れて俺の胸に倒れこんできて胸を押し付けてくる。おかげでチンコはまだまだ元気

だ。

もし胸を押し付けるのが態とじゃないと由比ヶ浜は天然物のビツチなのかもしれない。

「はむっ……んぢゆるるるっ♡」

「おおおお……由比ヶ浜、いいぞ」

「れろっ……ぢゆるるるっ♡」

由比ヶ浜は俺の腰から離れるとチンコからゴムを取ってからチンコを綺麗に舐め始めた。手馴れているのにビツチじゃないのは可笑しいだろ？

「由比ヶ浜！飲め！」

びゆるるるるびゆるるるるっ……

「んんっ!?……んぐっ……ひ、比企谷君びつくりしたよ！」

「悪い悪い。由比ヶ浜の口マンコが気持ちよくてな」

「そ、そっか……えへえええ」

俺の精子を飲ませたのに由比ヶ浜は笑顔だった。ここで笑顔とか怖いんだけど!?だけど、ここでこんなにも都合がいい女を手放すなんて出来ない。

「由比ヶ浜。今度は俺が動きたいから尻をこっちに向けてくれ」

「う、うん。こ、これでいい？」

「ああ、流石は由比ヶ浜だ。分かっているじゃないか」

由比ヶ浜はベッドの上で四つん這いになって尻をこちらに向けてきた。マンコにアナルもバツチリと丸見えだ。尻のシワも数えられる。

「ひい!?ひ、比企谷君？」

「由比ヶ浜の尻があまりにも綺麗だな」

「そ、そう?嬉しいな」

俺が尻を撫でると由比ヶ浜は最初ビツクリしていたが、誉めると尻を左右に振ってもっと撫でてアピールをしてきた。まるで犬だな。

俺はゆっくりと由比ヶ浜のマンコの奥へとチンコを挿入した。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひゃ♡」

「後ろからだとまた違った感じだ！」

「お、おくまできてるっ♡♡」

「動くぞー！」

ずずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひいひいひい♡♡」

後ろから由比ヶ浜のマンコを突くとチンコの先が子宮口まで届く。俺はもっと激しく腰を動かした。もっと感じている由比ヶ浜を見たくなった。

「ひ、比企谷君。す、少し休まない？」

「それ無理」

ずずずずずずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡ま、待って！疲れたから少し休ませて！」

「だから無理」

ずずずずずずっ……ぱんっ!!

「んんっ♡」

俺は由比ヶ浜の言葉を見殺して、腰を動かし続けた。子宮の奥までチンコで突くと由比ヶ浜のマンコは強く締め付けてくる。

マンコがチンコを圧迫する感じが最高だ。もっと俺のチンコを締め付けろ！もっとお前の感じている声を聞かせろ。

「ゆ、由比ヶ浜！射精るぞー！」

「あんっ♡んんっ♡イクイクイクっ♡♡」

「で、射精るー！」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「ひいひいひい♡♡♡」

俺の射精と同時に由比ヶ浜は絶頂した。由比ヶ浜の子宮にゴム越しに精子が溜まっているのを感じる。そして由比ヶ浜のマンコは俺の精子を欲しがって蠢いている。

マンコがギュウギュウと締め付けてくるのは最高に気持ちがいい。俺はゆっくりとチンコをマンコから抜いた。

しかしゴムだけが由比ヶ浜のマンコに残ってしまった。俺はゴムを由比ヶ浜から引つ張った。ゴムに溜まった精子の量が凄かった。

「ほら由比ヶ浜。俺の精子だ、たっぷり飲みな」

「あぐっ……んんっ♡」

俺は由比ヶ浜を仰向けにして、口にゴムに溜まった精子を流し込んだ。由比ヶ浜はそれを飲み干した。すっかり精子を飲む事を躊躇わなくなった。

俺は由比ヶ浜の口にチンコを近づけた。すると由比ヶ浜は何も言わずにチンコにちやぶり付いた。

「んっ……んぢゆるるるるっ……ひ、比企谷君。き、綺麗になったよ」

「ああ、由比ヶ浜のお掃除フェラは最高だ」

「そ、そう？えへええ……」

由比ヶ浜のバカっぽい笑顔は見ていて愉快になる。もっともっと調教して、どんな変態プレイも喜んでする痴女にしてやる。

「ひ、比企谷君？」

「あ、ああ。済まん、由比ヶ浜。お前を見ていたらまたしたくなかった」

「う、うん。わ、私がんばるから！」

「……俺は由比ヶ浜のような健気な彼女を持って幸せだ」

「し、幸せだなんて……嬉しい」

俺は再び、ゴムをチンコに装着して由比ヶ浜のマンコへ挿入した。時間には余裕があるからな。今日はゴムが無くなるまで犯してやる。

「ずずずずっ……ぱんっ!!」

「ひ、比企谷君！私もうっ♡♡」

「俺も限界だ！で、射精る！」

「びゆるるるるるびゆるるるるっ……」

「ああああああ♡♡♡」

この日、俺は由比ヶ浜を徹底的に犯し続けた。病室が精子臭くなくなってしまった。換気して何とかナースの人を誤魔化した。

もうすぐ退院の日だ。学校でも由比ヶ浜を犯してやるつもりだ。学校でするとかバレるかバレないかで興奮しそうだ。

「この下着、由比ヶ浜にプレゼントしよう」

ネットで大人のオモチャを見ていた俺は紐下着を発見した。これを由比ヶ浜に着させて学校に行かせよう。

これなら好きな時に犯す事が出来るだろう。学校に行ったら人気のない場所をいくつかリサーチしておかないと。

授業中に教室を抜け出して、由比ヶ浜を犯すのも面白いかもしれない。学校が楽しみだ。

やはりガハマと学校でするのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。四月に車に轢かれて、一ヶ月の病院生活から漸く高校生活をする事が出来ただけ、一ヶ月の空白はまずかった。

クラスではすでにグループが出来ており、俺が入れる隙間なんてどこにもなかった。所詮、俺はボツチだ。こんな事は慣れてる。

あれ？可笑しいな、目から涙が出てくるぞ？とりあえず今は学校の人気のない場所を探すかな。定番としては校舎裏だけど、ここは上級生が何人かいたから無理だな。

次は職員トイレだ。ここなら静かで問題ないけど、いつ先生が来るか分からないな。流石にバレて退学つてのはご免だ。

「あ、比企谷君」

「お、由比ヶ浜」

学校を散策していると由比ヶ浜と出会った。やはり地味子だと思んだよな。胸が大きいけど。これでギャルぽいならボツチなんだけどな。

しかしボツチとビツチってどことなく発音が似ているよな。今は別にいいか、それよりも由比ヶ浜を見ていると勃起してきた。

「由比ヶ浜。今、少しいいか？」

「い、今？うん、少しなら……」

「ならこっちだ」

「ひ、比企谷君？」

俺は教室から少し離れたトイレに由比ヶ浜を連れ込んだ。今は昼休憩だけど、後数分で午後の授業が始まってしまう。

その前に処理しなくてはクラスで変態認定を受けてしまう。高校では黒歴史を作らずに無事に卒業してやるんだ！

「由比ヶ浜。時間がないから口でしてくれ」

「う、うん……分かった。はむっ」

「おおおお……!!」

「んんっ♡……んぢゆるるるるっ……」

由比ヶ浜のフェラは上手くなった。口の前後の動きと舌の絡め方が絶妙なんだよな。どんどんいい感じにビッチになつてきたじゃないか。

いつか目隠しをして、他の誰かに犯させるのもいいかもしれない。てか、俺に男友達がいないと無理なプレイじゃないか！

「んっ♡ぢゆるるるるるっ……れろっ……ぢゆるるるるっ」

「ゆ、由比ヶ浜。で、射精る」

びゆるるるるるびゆるるるるるっ……

「んんっ!?……げほっ……げほっ……」

「済まん由比ヶ浜。気持ちよくてな」

俺は射精の瞬間、由比ヶ浜の頭を掴んでチンコを喉奥まで押し込んだ。流石に由比ヶ浜はびっくりして咽てしまった。

「比企谷君が気持ちいいなら私は全然いいよ。私に出来る事なら何でもするから」

「そうか。放課後は何か予定とかあるか?」

「ないけど?」

「だったら学校で最後までしたいんだ」

「で、でも学校だし……バレたら不味いよね?」

流石の由比ヶ浜も学校にバレたら不味い事くらい理解しているようだ。でも俺はしたいんだよ。

「大丈夫だ。人が来ない場所を見つけたから」

「だ、大丈夫なの?」

「ああ、問題ない」

「本当に人は来ないんだよね?」

「ああ、もちろんだ」

「それなら……」

よし!これで由比ヶ浜を犯せる。授業が終わって、家に帰るまで我慢出来る自信がないんだよな。早く由比ヶ浜を犯したい。

巨乳に吸い付いて、チンコをマンコの奥底まで突っ込みたい。俺は由比ヶ浜と別れて、教室に戻って放課後を待った。早く来い、放課後!

「ひ、比企谷君。ここ職員トイレだよ。大丈夫なの!？」

「もちろんだ。ここは職員トイレだけど、教室とは逆方向にあるから教師はまったく使わないんだ。その証拠に汚れとかないだろ？」

「それは誰かが綺麗に掃除しているんじゃない？」

「職員トイレを掃除する係りはいないんだぞ」

「そうなの!？」

俺が見つけた楽園だ。トイレじゃなければ、最高だったのだけど仕方ない。それにトイレだから精子の処理が簡単だ。トイレに流せばいいだけだからな。

もしも持ち物検査をされて問題ないだろう。

「由比ヶ浜。早くしてくれ、我慢出来ないんだ」

「う、うん……」

「んぢゆるるるるるっ!」

「うひい!?ひ、比企谷君、激しいよっ♡♡」

俺は洋式便器に腰掛けた由比ヶ浜のマンコに飛びついた。そしてマンコを舐め回した。由比ヶ浜のマンコから愛液がドバドバと溢れてきた。

舐めても舐めて溢れてきた。由比ヶ浜は腰が少し浮かんでいた。もしかしたら絶頂する寸前かもしれない。

「れろっ」

「ひいひいひい♡♡♡♡」

「おっと……」

由比ヶ浜は絶頂して、潮を噴いた。その潮は個室のトイレの扉まで飛んでいった。由比ヶ浜はビクビクと少し痙攣していた。

「……あああ♡♡♡♡」

「由比ヶ浜?大丈夫か……」

「ひ、比企谷君、激しいよっ♡♡頭、チカチカしているよっ♡♡」

「由比ヶ浜!」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「うひいひいひい♡♡♡♡」

俺は由比ヶ浜の絶頂した姿に我慢出来ずにチンコにゴムをすぐに

装着して、すぐにマンコに挿入した。由比ヶ浜は軽く絶頂したようだ。

由比ヶ浜が抱きついてきて、胸を押し付けてくる。本当に由比ヶ浜の胸は大きいな。これで一年なんだよな。中三でもうこれほど大きいってどれだけ栄養が胸に行っているんだ？

「由比ヶ浜。動くぞ」

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡んんっ♡」

「で、射精るー!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「うひひひひひひ♡♡♡♡♡♡」

俺の射精で由比ヶ浜は絶頂した。ゴム越して精子が由比ヶ浜の子宮に溜まっている。由比ヶ浜のマンコは俺のチンコを抜いて精子を根こそぎ奪おうとしている。

「ただ欲しいんだよ。もうビッチだろ、これは。俺はゆっくりとチンコをマンコから抜いた。ゴムだけがマンコに残ってしまった。」

「あ、あしゅい♡♡♡」

「おい!由比ヶ浜?」

「あ♡……」

由比ヶ浜は絶頂の余韻でまともに返答が出来ない。そろそろ外に出ようと扉に手を掛けた時に誰かが入ってきた気配を感じた。

そしてそのまま隣の個室に入った。静かに様子を伺っているとタバコの匂いが漂ってきた。もしかして個室を喫煙室代わりにしているのか!?

「……由比ヶ浜。おい」

「ひ、比企谷君。もっと気持ちよくなりたいっ♡♡」

「由比ヶ浜……」

由比ヶ浜は自分でマンコを開いて、俺を誘ってきた。これでもうビッチ確定だな。俺は新しいゴムをチンコに装着した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「んんっ♡」

「おっと……」

俺は由比ヶ浜のマンコの奥へと一気に挿入したけど、由比ヶ浜が声を出そうとしたので、手で塞いだ。危うく隣に聞こえる所だった。

もしかしたらもう聞こえているかもしれない。動かずに様子を見ているけど、こちらに気がついていようすはない。

ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!

「んんっ♡んんっ♡」

「由比ヶ浜。少し待て……」

由比ヶ浜が自分から腰を動き出した。隣の様子を伺いたいのにも、このままだとバレるぞ!俺は由比ヶ浜を抱き寄せて、動かないように拘束した。

これでは生殺しだけど、バレるよりマシだ。隣の壁からノック音と女の声があった。

「大丈夫か?先ほど変な音がするが?」

「んんっ♡」

「おい!聞いているのか!」

「んんっ♡……」

このままだと不味い。乗り込んでくる勢いだ。不純性交遊を見られる訳にはいかない。でもバレたらバレたらで面白そうだ。

「平塚先生、居ますか?」

「あ、はい!」

「早く来てください。会議が始まりますよ」

「今、行きます」

隣の個室の扉が開いて、誰かが出て行った。他の先生が呼びに来て助かったな。それにしても個室のトイレを喫煙室と間違えていないか?

「由比ヶ浜?」

「あっ♡んんっ♡……ひ、比企谷君。ひ、酷いよ……」

「すまん。先生が居たもんで」

ここはあまり使わないと思っていたのだけど、これからは気をつけないとな。次は時間帯をもっと観察しておかないと。

それと平塚先生つてのにも気を付けておるか。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡ひ、比企谷君!」

「由比ヶ浜。さっさと終わらせるぞ」

「ま、待って!私、今敏感に——ひいひいひい♡♡♡」

俺は腰を前後に激しく動かした。由比ヶ浜が敏感になっっているようだけど、そんなのは俺には関係ない。むしろ敏感なら都合だ。

由比ヶ浜をもっと厭らしい女にして生射精するのを許してくれるくらいにビッチにするからな。性にもつとのめり込まないと。

「ひい、ひきがやくんっ♡♡ま、まっつ♡♡おかしくなるっ♡♡」

「由比ヶ浜!由比ヶ浜!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺はこれまで以上に腰を激しく動かした。由比ヶ浜は敏感の状態ですさらに刺激を与えられて声が我慢出来ないようで、声が漏れていた。

もし誰かが近くに居たらバレてしまうだろう。でもそんなのは今はどうでもいい。俺は目の前の女のビッチにするんだ。

「由比ヶ浜!で、射精る!」

びゅるるるるるびゅるるるるるつ……びゅるるるるびゅるるるつ……

「ひいひいひい♡♡あ、あついのがながれくりゆるうう……」

由比ヶ浜の膣内にゴム越しで溜まっている。学校でするといふ背徳感で今まで以上に興奮してしまったのか、結構な量の精子を射精したと思う。

「由比ヶ浜。大丈夫か?」

「あああ……」

「お〜い〜?」

由比ヶ浜は完全に延びていた。俺は由比ヶ浜のマンコからチンコを抜いた。そしてゴムの中の精子を由比ヶ浜のお腹に垂らした。

そして写真を撮った。完全にレイプ現場の写真が出来上がった。もし由比ヶ浜が俺の事を拒絶したり、誰かに言うようならこれをネットの流出するだけだ。

「それじゃ由比ヶ浜。俺は先に帰るからお前もすぐに帰れよ」

「ひい、ひきがやくんっ……しゅひい……もっど……」

「いい感じだ。また明日な由比ヶ浜」

俺は由比ヶ浜をトイレに残して学校を後にした。明日も由比ヶ浜を犯すとするか。あいつもビッチとして目覚め始めたようだ。

これは生射精も近いかもしれない。写真は必要ないかもしれないけど、保険として残しておくか。

入学式の日には事故に遭って高校デビュー出来なかったのは痛いけど、ビッチのいい性処理オナホを手に入れたのは良かった。

これなら高校生活も苦ではない。もっどビッチにしてやるかな、由比ヶ浜。

やはりガハマの家に行くのはまちがっている。

うっす比企谷八幡だ。俺は由比ヶ浜の家の前に居る。今日は休日
で本来なら家でゴロゴロしたかったのだけど、昨日学校で由比ヶ浜か
ら誘われた。

そしてこうしてあいつの家に来た。由比ヶ浜の家は一般の二階建
ての一軒家で特に変わっている所は見えない。

「い、いらつしやい比企谷君」

「お、おう。お邪魔します」

由比ヶ浜が玄関を開けて俺を家の中へと入れてくれた。正直、緊張
している。だって女子の家だよ？産まれてから女子の家に行くなん
て始めてだ。

特に何も持って来なかったけど、不味かったかな？いや別にいい
か。由比ヶ浜は俺にとつて所詮、性処理オナホだ。

俺の好きな時に犯して、精子を吐き出すための存在だ。俺は絶対に
忘れない。由比ヶ浜がすっかりと犬のリードを握っていれば俺は車
に轢かれる事はなかったんだから。

「結衣、その子が比企谷君？」

「うん、そうだよ。ママ」

「それじゃママは買い物に行ってくるから」
「分かった」

俺と入れ替わるように美人が外へと出て行った。あれが由比ヶ浜
ママか。由比ヶ浜が巨乳なのはママの遺伝で間違いないな。

あの胸は反則だろ。どんな男でもあれに挟まれたら一コロだ。由
比ヶ浜も成長したらあれくらは大きくなるだろう。

今でも十分だけど、大きくなると分かると今後が楽しみだ。

「ここが私の部屋だよ」

「可愛いじゃないか」

「そ、そうかな？」

「ああ、もつと汚いイメージがあったからビッチだけに」

「び、ビッチじゃないよ！」

こいつは何を言っているんだ？病室や学校で散々しておいて、ビッチじゃないとか笑えるな。でも俺がイメージしているビッチとは少し離れているんだよな。

だからもつと由比ヶ浜を淫乱にしなければならぬ。

「由比ヶ浜。んっ」

「んんっ♡……ひ、比企谷君っ♡♡」

「キスしただけでもうグチャグチャじゃないか？」

「ひ、比企谷君に触られると嬉しいから。あんっ♡」

俺は由比ヶ浜とキスしてマンコへと手を伸ばした。パンツ越しでも十分濡れているのが分かるほどだった。これだよこれ。

キス一つで発情する女こそビッチだろう。ちよつと前まで処女だったのに男とキスしただけでこんなにも発情するとかもうビッチで文句はないだろう。

「由比ヶ浜。まずはパイズリをしろ」

「う、うん。ぢゅるるるるっ」

「おおおお……」

俺はズボンを脱いでベッドに腰掛けた。由比ヶ浜は勃起した俺のチンコを胸で挟んできた。そして手を使って胸を動かしてチンコを扱ってきた。

この弾力に温かさは最高だ。由比ヶ浜はチンコの先を口に啜えて舌で舐め始めた。

「由比ヶ浜！射精る！」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「んんっ!?!……んぐっ……けほっ……けほっ」

気持ち良すぎて思わず射精してしまった。由比ヶ浜は俺の精子を零さずに全て飲み干した。よく飲むよな。やはりビッチだったか！

「だ、大丈夫か？由比ヶ浜」

「う、うん。びっくりしたけど、全部飲んだよ」

「お、おう」

一応心配したけど、ちゃんとビッチになっただけで安心した。男の子飲んで笑顔を作るとか由比ヶ浜ってどこかズレている気がする。

「由比ヶ浜。交代だ、今度はお前がベッドに座れ」

「う、うん」

「股を大きく開け」

「わ、分かった。これでいい？」

「ああ。れろっ」

「うひい♡んんっ♡あんっ♡」

俺は由比ヶ浜のマンコを舐め回した。由比ヶ浜のマンコからは愛液がドバドバと溢れてきていた。少しだけ舐めただけなのにこの量とはやはりビッチだ！

「ぢゅるるるるっ」

「あひい♡ひい♡あんっ♡」

「ちゅっ……ぢゅるるるるっ」

「ひいひいひい♡♡♡」

俺の攻めに由比ヶ浜はベッドに背中から倒れて腰を浮かせてきた。さらに愛液がドバドバと大洪水状態になっている。

俺は舌を由比ヶ浜の膣内へと侵入させた。そしてマンコをかき回した。

「あんっ♡んんっ♡ひゃああああ♡♡♡」

「由比ヶ浜。お前、やはりビッチだわ」

「わ、わらひいはびっじらないひい……」

「そろそろいくぞ」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「のおおおおお♡♡」

俺はベッドに由比ヶ浜を押し倒して、マンコへ俺のチンコを奥まで挿入した。由比ヶ浜のマンコはギュウギュウに締め付けてきた。

「しゃああああ……」

「そひゃんなひいひい♡♡♡」

由比ヶ浜は俺のチンコを挿入されただけで絶頂して小便を漏らした。本人は止めようとしているけど、体が言う事を聞かないのだろ

う。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あっ♡んんっ♡あんっ♡♡」

「由比ヶ浜!締め付けすぎだ!」

「ひ、比企谷君のおチンポっ♡気持ち、ひいいいい♡♡」

由比ヶ浜はやはりビッチだな。高校生でここまで淫乱な女は居ないだろう。早くこの女を孕ませてみたい。だけど、高校生では世間体とかもあるからな。

それに経済力だってそうだ。学がない者は就職は難しい。せめて大学は卒業してからだな。このビッチの由比ヶ浜がボテ腹になったらどうなるのだろうか?

「由比ヶ浜!で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるるっ……びゅるるるびゅるるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡」

由比ヶ浜の膣内の一番奥に俺の精子が溜まっている。俺が由比ヶ浜から離れると精子が由比ヶ浜のマンコから逆流して、ベッドを汚した。

「由比ヶ浜。綺麗にしろ」

「んんっ……ぢゅるるるっ……ちゅっ……れろっ」

「うっ!?!射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるるるっ……

「んんっ!?!……げほっ……げほっ」

由比ヶ浜の口マンコが気持ちよくてまた射精してしまった。由比ヶ浜は俺の精子を零さずに飲み干した。調教してきた成果だな。

「由比ヶ浜。壁に手をつけて尻をこっちに向けろ」

「う、うん……ま、まだするの?」

「俺はまだ満足していないんだぞ。お前だけ満足するなんて卑怯じゃないか?」

「そ、そうだね!比企谷君、どうぞ」

由比ヶ浜は壁に手をつけて俺に尻を向けた。由比ヶ浜の尻は中々の大きさに叩き甲斐がありそうだ。俺は再び由比ヶ浜のマンコへと挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡」

「なんだ？挿入しただけでイッたのか？」

「そ、そんひゃこひよとっ♡♡」

「イッているじゃん。動くぞ！」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡ひゃあ♡」

由比ヶ浜は感じまくり卑猥な声を出し続けた。マンコも俺のチンコをギュウギュウと締め付けてくる。この圧迫感がともて心地いい。もっと由比ヶ浜を俺色に染めて、ド変態にしてやる。俺が触っただけで発情するようなビッチにしてやる。

「由比ヶ浜！で、射精るぞー！」

「ま、まへってー！」

「射精るー！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡」

また由比ヶ浜の膣内へと射精してやった。由比ヶ浜は絶頂した際に体を仰け反らせた。そしてマンコは俺のチンコから精子を奪うように蠢いている。

ホントに少し前まで処女だったのに自分から精子を求めらるるよう体がなるなんて、素質があると思えない。

「ふうく……射精した射精した」

「あっ♡ひい♡あっ♡」

由比ヶ浜はまだ絶頂の余韻に浸っている。今回の射精はかなりの量が出したからな。由比ヶ浜のマンコの奥は俺の精子でタップタプだろう。

俺は由比ヶ浜を抱きかかえてベッドへと移動した。由比ヶ浜は脱力しており、運ぶのは苦勞した。

「おい由比ヶ浜」

「ひ、比企谷君っ♡♡もつとちようらひっ♡♡」

「由比ヶ浜…もう完全にビッチじゃないか！自分からマンコを開くとか！」

由比ヶ浜は自分からマンコを広げて見せてきた。俺の精子が溢れてきて、エロく見える。元々由比ヶ浜はエロいか。

あの爆乳の母親から産まれたんだ。エロくない訳ないよな。

「由比ヶ浜。もつと広げないと挿入出来ないぞ」

「こ、こっうっ？」

「いくぞ」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひひひひひひ♡♡♡おひゅまへっ♡♡」

「すごっ!?!」

由比ヶ浜のマンコの締め付けが先ほどよりも強くなっている。チンコが潰されるのではないかと思うほどだ。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡あっ♡」

「由比ヶ浜。締め付け過ぎ！」

「ひいひゃひんっ♡♡」

俺は必死になって腰を激しく動かした。由比ヶ浜は呂律が回っていなかった。だけど、俺はそんな事なんて気にしないで腰を動かした。

「由比ヶ浜。んっ」

「んんっ♡ひ、比企谷君っ♡♡」

「これで最後だ！しっかりと受け止める！」

「う、うんっ♡あらひいとんらうっ♡」

「で、射精る！」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「いぐううううう♡♡♡」

最後の射精の瞬間、由比ヶ浜は俺の腰い自分の足を回してホールドしてきた。そして精子を由比ヶ浜のマンコの一番奥にたっぷり射精してやった。

由比ヶ浜の膣内が俺の精子を全て飲み干そうと蠢いている。俺の腰が砕けそうだ。それだけヤバイほど気持ち良かった。

「あっ♡んっ♡」

「由比ヶ浜?」

「あひい♡」

由比ヶ浜は完全に意識を飛ばしていた。ヤバイ薬でもしたようだった。見た事ないけど！俺が由比ヶ浜から離れるとマンコからは俺の精子が逆流してきた。

子宮に入りきらなかったんだろう。どんどん溢れてくる。さて、由比ヶ浜をたくさん犯せたのでそろそろ帰るかな。由比ヶ浜ママがいつ帰ってくるか分からないからな。

「ひ、比企谷君」

「由比ヶ浜。後の片付けは任せたぞ」

「う、うん。それで夏祭り一緒に行かない?」

「夏祭りか。由比ヶ浜は浴衣を着るか?」

「う、うん。着るよ」

「なら行こう」

「よかった……」

夏祭りの時に浴衣で野外で由比ヶ浜でも犯すかな。きつと面白そうだぞ。早く夏祭り来ないかな。たっぷりと犯してやるかな、由比ヶ浜。

やはりガハマと祭りに行くのはまちがっている。

うっす比企谷八幡だ。俺は今、夏祭りに由比ヶ浜と一緒に来ている。人混みが苦手で本当なら家でテレビでも見て、ゆっくりしたいのだけど由比ヶ浜に誘われてこうして夏祭りに来ている。

「ひ、比企谷君……ど、どうかな？」

「に、似合っているぞ」

「よ、良かった……」

由比ヶ浜は浴衣を着ている。正直、女子の服装を褒めるとかした事なかったで妹の小町に聞いておいて良かったと思う。

それにしても周りの男共が由比ヶ浜を見る視線が気に食わない。浴衣を着ているので体のラインが嫌でも強調されてしまう。

特に胸が大きいので男の視線を集めてしまう。本人はそこまで気にしていないようだけど、俺は大いに気に食わない。

この女は俺のものなんだぞ！お前らがジロジロと見ていい訳ないだろ！

「どうしたの？比企谷君」

「いや、何でもない。早く行くぞ、時間帯的に人が増え始めるから屋台とか行くなら急いだ方がいいぞ」

「そ、そうだね！色々見て回ろう」

「お、おい！」

俺は由比ヶ浜に手を引かれて夏祭り会場へと足を踏み入れた。花火大会もやるので多くの人が見に来ていた。屋台も色々と並んでいた。

「比企谷君。あっちから行ってみよ！」

「ま、待ってくれ！」

「早く早く！」

「おい！」

テンションが上がった由比ヶ浜を俺は追いかけた。制服でも私服でもない浴衣はいつもより由比ヶ浜を輝かせているのではないかと

思う。

浴衣姿の由比ヶ浜は今日しかない。なら帰りにどこかで犯すしかない。野外プレイを由比ヶ浜に仕込むのもいいかもしれない。

誰かに見られる興奮を教え込むのはどうだろうか？他人に抱かせるのは嫌だけど、見せるのは許容出来るんだよな。

「由比ヶ浜……」

「ん？何？」

「食べ過ぎじゃないか？」

「そ、そんな事ないよ！」

由比ヶ浜が寄った屋台は全て食べ物系ばかりだ。リンゴ飴にチョコバナナ、たこ焼き、焼きそば、カキ氷、焼き鳥と由比ヶ浜の体のどこに消えているんだ？

俺は由比ヶ浜の胸に視線をやった。そうか、由比ヶ浜の胸が大きいのは栄養が全て胸に行っているのか。それは納得出来る。

「ほ、ほら比企谷君も！」

「もぐっ……」

「美味しい？」

「あ、ああ」

「あ、間接キス……」

由比ヶ浜は俺に焼きそばを強引に食べさせて割り箸を見て、顔を赤くした。今さら間接キスで赤くなっているんだ？

普段からキス以上の恥ずかしい事をしているのに。バカなのか？

「由比ヶ浜。ちよつと」

「ひ、比企谷君?!」

「んっ」

「んんっ!?!……ちゅっ♡」

俺は由比ヶ浜を人気のない場所に連れ込んでキスした。最初は驚いていた由比ヶ浜だったが、段々と表情は蕩けて発情した女の顔になった。

「由比ヶ浜。口でしろ」

「う、うん……」

由比ヶ浜は俺のズボンのチャックを下ろして、勃起したチンコが露になった。由比ヶ浜は俺のチンコを凝視している。そして口を開いてチンコを啜えた。

「はむっ……ちゆるるるるっ……んんっ……ちゆるるるるっ」

「いいぞ、由比ヶ浜。もつと激しくするんだ」

「うん……ちゅっ……ちゆるるるるっ……ちゆるるるるっ」

「おおおお……で、射精るー！」

びゆるるるるるびゆるるるるるっ……びゆるるるるびゆるるるるっ

……

「んんっ!？」

由比ヶ浜の口マンコが気持ちよくて頭を掴んで固定して、口の奥に射精してやった。由比ヶ浜の口マンコは温かく興奮してしまった。

それに舌をチンコに絡ませてきて、興奮が収まらない。ちゃんと俺が気持ちいいテクを覚えたようだな。

「げほっ……げほっ……」

「由比ヶ浜。口を開けろ」

「う、うん……あああ」

由比ヶ浜の口の中には俺の精子はなかった。ちゃんと全て飲み干したようだ。精子なんてよく飲めるよな。飲ませておいてなんだけど。

「由比ヶ浜。これで口を綺麗にしろ」

「あ、ありがとう……」

俺は由比ヶ浜にウエットティッシュを渡した。由比ヶ浜はそれで口の周りを綺麗にした。流石に口の周りが精子で汚れていては集中して犯せないからな。

俺は周りを確認して人気のない建物と建物の間へと移動した。ここなら多少声が出てても大丈夫だろう。

「由比ヶ浜。浴衣を少しズラせ」

「う、うん。これでいい?」

「いくぞ」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい♡お、おくまできたああ♡♡」

俺は由比ヶ浜に浴衣をズラさせて正面から由比ヶ浜のマンコへ俺のチンコを挿入したけど、思いのほか奥まで挿入してしまい、由比ヶ浜は軽く絶頂して声を出してしまった。

急いで抑えて回りを見たが雑音が大きいのか俺たちには気づいてはいない。

「由比ヶ浜！声が大きい」

「ご、ごめ——あんっ♡」

「締め付けが……」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

由比ヶ浜のマンコの締め付けが強くなった。俺は由比ヶ浜の尻を掴んで腰を激しく動かした。この圧迫感の前では我慢が出来ない。

「あっ♡んんっ♡あんっ♡」

「由比ヶ浜。だから声が大きい」

「あひゃ♡ご、ごめんっ♡でもっ♡比企谷君のおチンチンが奥までっ♡♡」

「このビッチが！」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡んっ♡うひい♡」

由比ヶ浜は声を我慢する事を止めていた。声が漏れてしまうけど、ちょうど花火が始まって声を掻き消してくれている。

なら早めに終わらせた方がいいだろう。俺はチンコを由比ヶ浜のマンコの一番奥へと押し込んで動きを止めた。

「で、射精るー」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「い、いぐうううう♡♡……あしゅいのがらくしゅんっ♡♡」

「止まらない……!!」

射精の快樂が頭から足に電撃でもしたような感覚に陥った。腰の感覚がなくなったかと思つてしまった。由比ヶ浜は完全に延びていた。

俺はゆっくりと由比ヶ浜から離れた。マンコから俺の精子が逆流していた。本当に大量に射精したものだ。

「おい由比ヶ浜?」

「な、なひ?」

「壁に手を付け」

「こ、こふ?」

「ああ」

「ずずずずずつ……ぱんつ!!」

「うひひひひひひ♡♡♡」

俺は由比ヶ浜に壁に手を付かせて後ろからチンコをマンコに挿入した。先ほど犯したばかりだけど、キツく締め付けてくる。

俺は右手をクリトリスで左手で乳首をそれぞれ摘まんのだ。そしてグリグリとすり潰そうにした。

「あんっ♡んんっ♡ひゃああああ♡♡♡」

「いいぞ、由比ヶ浜!」

「ら、らめえ♡ばらになありゆるっ♡」

由比ヶ浜は呂律が回っていなかた。もう声なんて我慢する事すら忘れて大声を出している。花火の爆音で掻き消されているので大丈夫だろう。

「由比ヶ浜!で、射精るぞ!」

「ひ、ひきがやくんっ♡♡♡」

「射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「ひゃああああああ♡♡♡♡♡」

やはり膣内出しは最高だ。由比ヶ浜を俺の女にしているようで興奮が止まらない。俺はゆっくりと由比ヶ浜から離れた。

由比ヶ浜はその場にへたり込んだ。足腰に来たのだろう。俺は由

比ヶ浜の顔にチンコを近づけた。

「はむっ……ぢゆるるるっ……れろっ……」

「いいぞ由比ヶ浜。もつと舌を絡ませろ」

「ぢゆるるるっ……ぢゆるるるっ……れろっ」

「いいぞ、射精るー」

びゆるるるるびゆるるるるっ……

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

俺は由比ヶ浜の顔を掴んで喉奥へとチンコを押し込んで射精してやった。由比ヶ浜はしつかりと零さずに精子を飲み干した。

「ひ、比企谷君……気持ちよかった?」

「ああ、由比ヶ浜。最高だったよ」

「よかった……」

由比ヶ浜は笑顔で俺に聞いてきた。気持ちよかったに決まってるだろ。俺の命令に忠実な牝奴隷なんだぞ?」

誰が手放すものか。俺がボツチになった原因を作ったお前の事は絶対に許さない。これからもずっと俺の奴隷として調教してやる。

「由比ヶ浜。最後に一回するぞ」

「ま、まだするの?」

「なんだ、嫌なのか?」

「ち、違うけど……腰が抜けちゃって……」

「仕方ないな……」

俺は由比ヶ浜の膝裏に手を回して持ち上げた。まるで踊る方のバレエのような格好になった。そしてチンコをマンコへと挿入した。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひい♡お、おくまでっ♡♡」

「すごっ!?!」

俺のチンコが由比ヶ浜のマンコの奥の子宮まで到達してしまった。チンコの先が少しだけ入ってしまった。この体勢だどこまで入るのか!?

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡あひゃ♡♡」

「由比ヶ浜！で、射精るぞ！」

「んっ♡あっ♡」

「射精る！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡」

由比ヶ浜のマンコの一番奥へと精子を大量に射精してやった。由比ヶ浜には避妊薬を飲ませておいたんだよな。この歳で妊娠でもしたら大変だからな。

妊娠するのは大学を卒業するまでではこっちが困るからな。それにしても今夜はもう打ち止めだな。

金玉の中の精子がスツカラカンになってしまった。

「由比ヶ浜？」

「あっ♡あっ♡」

「仕方ない……」

由比ヶ浜は射精の際に絶頂して意識が飛んでいた。俺は由比ヶ浜の浴衣を綺麗に直してから由比ヶ浜を家まで送り届けた。

その際、ご両親がいなかったので風呂場で指でたくさん絶頂させてやった。最終的には由比ヶ浜は産まれたての小鹿のように足腰震えていた。

「由比ヶ浜。もっとたくさんしような？」

「う、うん。わたし、比企谷君のためにがんばるねっ♡」

「ああ、俺を気持ちよく出来るのは由比ヶ浜だけだ」

「うん！」

由比ヶ浜は俺の精子まみれの顔で嬉しそうにしていた。ここまでするバカだと操りやすく助かるよ。学校でボツチになる原因を作ったお前を俺は絶対に許さない。

だからもつとピツチになってくれよ。そして俺にもつと好意を寄せてくれ、最後には捨ててやるから！

やはりガハマと海に行くのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡です。俺は今、海に来ている。俺はどちらからと言うとインドア派で家でゴロゴロして一日を過ごしたいのだけど、今回はそうもいかない。

「ヒツキー！早く泳ごうよ！」

「分かったから引つ張るな！てか、ヒツキーってなんだよ？」

「ヒツキーのあだ名だよ。呼びやすいでしょ？」

「引きこもりみたいじゃないか」

海に来ているのは俺一人だけではない。由比ヶ浜も一緒だったりする。それにしてもネーミングセンスがないだろ、由比ヶ浜。

「お兄ちゃん！早く早く！」

「小町は元気だな……」

「まさかお兄ちゃんにあんな可愛い彼女がいるとか小町、知らなかったよ！」

由比ヶ浜だけでもうるさいのに俺の妹の小町まで来ているので面倒だ。これも夏だと言うのに休みの無い両親の所為だ。

盆休み以外はすべて仕事の両親に小町を海に連れて行けと命令された俺はどうせなら由比ヶ浜も一緒に誘った。

俺からの海への誘いに由比ヶ浜はテンションがかなり高かった。

「大丈夫？ヒツキー君」

「……あの〜舞衣さんまであだ名で呼ばないでください」

「いいじゃない。私たちの仲じゃない？」

海に行くにあたって保護者として由比ヶ浜の母親の由比ヶ浜舞さんに同行してもらっている。それにしてもこの人、初めてな気がしないんだよな。

どこかで犯して、妊娠させて寝取った気がするんだよな。気の所為か！人妻と関係を持った事なんてある訳ないしな！

それにしても周りの男たちの視線が由比ヶ浜と舞さんに釘付けだ。

それはそうだよな、由比ヶ浜はそれなりの巨乳だし、舞さんも若い上に巨乳だ。

男たちの視線を集めるのも領ける。

「ヒツキー！早く泳ごうよ！」

「早くしてよお兄ちゃん！」

「ちよつと待て！」

俺は由比ヶ浜と小町に引つ張られて海へと引きずり込まれた。俺としては浮き輪でプカプカと海を漂っている方がいいのにな。

このテンションモンスター二匹がいるとそれも叶わないか。

「お兄ちゃん……」

「何だよ、小町」

「結衣さんの胸、すごく柔かったよ」

「お前な……」

小町は指をワシヤワシヤと気持ちの悪い動きをして由比ヶ浜の胸について熱弁してきた。由比ヶ浜の胸が柔らかいのはもう知っている。これまで何度、俺が由比ヶ浜を犯してきたと思っているんだ？マン

コへの挿入の前に絶対にパイズリしているからな。

あの乳圧は絶対にしなければ興奮しないからな。

「こ、小町ちゃん！何言っているの!？」

「お兄ちゃんに結衣さんの胸についての説明を」

「そんなのヒツキーにしなくていいから！」

由比ヶ浜は顔を真っ赤にして自分の胸を隠しながら小町に言った。今更胸を隠したところで遅いのに。

俺は由比ヶ浜に手を引かれて海へと入っていた。

「まったく小町は……由比ヶ浜の胸の柔らかさなんて知っているのにな？」

「あんっ♡ひ、ヒツキー……んんっ♡」

「人に勝手に変なあだ名を付けて」

「はひい♡だ、だって……いい加減、苗字呼びなのが嫌で……あっ♡」

まったく由比ヶ浜の生意気な奴だ。俺は由比ヶ浜と海に入って由比ヶ浜のマンコに指を侵入させて、かき回した。

由比ヶ浜は俺に必死に抱きつき俺にマンコを弄られているのを隠

そうとした。周りから見れば、彼氏彼女が仲良くくっ付いているだけに見えるな。

「由比ヶ浜。一回するぞ」

「だ、ダメだよ。ここじやママや他の人に見えちゃうよ!？」

「いいからするぞ。お前は俺の彼女だろ? だったら俺のお願いを聞いてくれよ」

「う、うん」

俺は背中を砂浜に向けた。これなら砂浜からは由比ヶ浜は俺の体で死角になるはずだ。見えたとしても手や肩くらいだろう。

俺は海パンの股の部分のボタンを外して勃起したチンコを出した。そして由比ヶ浜がゆっくりとマンコを近づけてきた。

「ずずずずずつ……」

「あんっ♡んんっ♡ひ、ヒッキー……だ、誰にも見られていないよね？」

「あんっ♡」

「ああ、動くぞ」

「ま、待って——んんっ♡」

「ずずずずずつ……ぱんっ!! ずずずずずつ……ぱんっ!! ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「あんっ♡んんっ♡んんっ♡」

俺は由比ヶ浜の制止を聞かずに腰を動かした。ギリギリ足が届く場所だけからな。海の浮力で由比ヶ浜は常に浮こうとしているけど、俺が腰を押さえ込んでチンコをマンコの奥へと押し込んだ。

誰にも気づかれる前に射精しないと。俺はさらに腰を激しく動かした。

「ずずずずずつ……ぱんっ!! ずずずずずつ……ぱんっ!! ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「あつ♡んんっ♡ひ、ひつきーだめえ!」

「由比ヶ浜! 射精するぞ!」

「こ、声が出ちゃう!」

「由比ヶ浜! んんっ」

「んんっ!!」

俺は由比ヶ浜の口をキスで塞いだ。これで声はでないだろう。念のため顔を手で離れないように押さえつけた。

もうチンコの限界だ！俺は海の中で由比ヶ浜の膣内へと射精した。びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんんっ♡♡♡」

「んっ……由比ヶ浜。まだ射精る……うっ」

びゅるるるびゅるるるっ……

「ひ、ひっきーのあしゅいのがらくしゅんっ♡♡……」

由比ヶ浜のマンコが俺の精子を欲しがって蠢いているよ。でもそろそろ一度戻った方がいいだろう。俺は由比ヶ浜から離れた。

すると由比ヶ浜のマンコに射精した精子が逆流してきた。流石に海と混ざると不味いかな？たぶん、大丈夫だろう。

俺は由比ヶ浜を連れて砂浜に戻った。

「結衣さん。顔、赤いですけど大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だよ！少しヒツキーと遊んで興奮しただけだから！」

「そうですか……」

小町が俺に疑惑の視線を送ってきたよ。由比ヶ浜も余計な事を言うんじゃない！興奮とかアホか!?アホだったな。

その後、俺たちは昼食を食べてから由比ヶ浜と食後の散歩をしている。小町は舞衣さんの側で昼寝をしている。食った後ですぐ寝ると太るぞ？

「由比ヶ浜。んっ」

「んんっ♡ひ、ヒツキー……」

「昼前に射精した精子がまだ残っているな」

「んっ……だ、ダメだよ。ヒツキー……ここじゃ誰か来ちゃう」

俺と由比ヶ浜は人気のない岩場に来ている。砂浜から少し離れたここは誰一人もいない。俺は由比ヶ浜にキスをしながらマンコをいじっている。

由比ヶ浜のマンコから俺が昼前に射精した精子が逆流し始めた。太ももをつたって垂れるとかエロいだろう!?

「由比ヶ浜の水着を見て、興奮が収まらないんだ。彼女ならちゃんと俺の性処理してくれ。苦しんだ……」

「ヒッキー……うん！私に任せて！ヒッキーの性処理は彼女の私がするねー！」

「ああ、よろしく頼むぞ」

「はむっ……ぢゅるるるぢゅるるるっ……れろっ……ぢゅるるるぢゅるるるっ……」

「のおおお!!」

由比ヶ浜は俺のチンコを口に咥えてフェラを始めた。最初の頃は比べられないほど上達した。最初はただ頭を前後して全然気持ちよくなかったけど、今は舌をチンコに絡めながら頭を前後させるので、刺激がハンパない！

本当に俺好みのビッチになってきたよ。誰もいないと言え外でこれだけ出来るんだ。もつと人気のある場所で犯してみたいな。

「由比ヶ浜！射精るー！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ……」

俺は由比ヶ浜の頭を押さえ込んでチンコが喉仏まで届くまで押し込んだ。由比ヶ浜は苦しそうにしていたが、しっかりと俺の精子を飲み干した。

最後はちゃんと口を開けて見せてきた。うんうん、ちゃんと教えた事をやっている事には満足している。

「ひ、ヒッキー……早く私のマンコを極太チンコでたくさん犯してくださいっ♡」

「由比ヶ浜。お前、最高だよ！いくぞ!!」

ずずずずず……ぱんっ!!

「はひい!?!お、おくにっ♡」

由比ヶ浜は尻をこちらに向けておねだりしてきたので俺は由比ヶ浜の腰を掴み、一気にマンコの奥までチンコを押し込んでやった。

由比ヶ浜は奥まで突かれた事で軽く絶頂したようだ。潮を噴いた

からな。

「由比ヶ浜！で、射精るぞー！」

「ひっきー♡」

「射精るー！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡……ひ、ひっきーのあしゅいのたくしゅん……」

由比ヶ浜への射精が止まらない。由比ヶ浜の子宮に俺の精子がたくさん貯まっているのを感じる。もし避妊薬を飲んでいなかったら絶対に妊娠していただろう。

それだけ思わせる精子の量だ。俺がゆっくりと由比ヶ浜から離れると股から俺の精子が由比ヶ浜の太ももを伝って下に落ちていた。

「ひ、ひっきー……だ、射精し過ぎだよ」

「由比ヶ浜は俺の彼女だろ？だったら彼氏の性処理をするのは当たり前だろ？」

「う、うん。そうだね……」

「ほら由比ヶ浜。帰る前に綺麗にしてくれ」

「うん。はむっ……ぢゅるるるぢゅるるるっ……」

「おおお!!」

俺は由比ヶ浜の顔にチンコを近づけた。由比ヶ浜は躊躇する事無くチンコを啜えた。そして前後に移動してチンコについた精子を綺麗に舐めとった。

由比ヶ浜は舌をチンコに絡めてフェラがだいぶ、上手になってきた。俺は由比ヶ浜の頭を掴まえて喉奥まで突っ込んだ。

「で、射精るー！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんんっ!?!……げほっ……げほっ……ヒツキー酷いよー！」

「悪い。由比ヶ浜のフェラがあまりにも気持ち良くてな」

「そ、そっか……嬉しい」

そこから俺は満足して小町と舞衣さんが待っている砂浜に戻り、帰

り支度をして俺たちの住む街へと帰った。小町や由比ヶ浜の水着が見られたのは良かった。

あと舞衣さんの水着もな。次は由比ヶ浜にはソーププレイでもしてもらうかな。あの胸で体を洗われるのを想像しただけで興奮してしまう。

「ヒツキー。来年も来ようね！」

「お前……来年、受験生だって事分かっているのか？」

「も、もちろんだよ！その前に一回、行こうよ！」

「気が向いたらな」

「絶対だよ！」

まったくあれだけ犯したのにどこにこれだけ騒げる元気があるんだ？バカの体力を舐めていた。俺はそのまま舞衣さんの運転する車に揺られながら眠りについた。

やはりガハマと山に行くのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は今、山に来ている。別に俺がアウトドアが好きとかではなく由比ヶ浜の父親がキャンプに行くので俺と妹の小町が誘われたのだ。

一応、俺は由比ヶ浜の彼氏と母親公認なので付いて来ても問題は無かった。正直、山に行くなんて面倒だったのだけど、由比ヶ浜を犯そうと同行させてもらう事にした。

そして山に到着した。思ったより涼しい場所だったのでこれならたくさん由比ヶ浜を犯せるな。それにここは穴場なのか由比ヶ浜一家以外誰も居なかった。

「比企谷君。そっちを持ってくれるかな？」

「はい。これでいいですか？」

「いい感じだよ。男一人だと大変なんだよ。でも妻や娘に手伝ってもらう訳にはいかないからね」

「そうですね。誘ってくれて嬉しいのでこれくらいは手伝いますよ」

「そうか。それはありがたい。なら次はこっちだ」

「はい」

俺は由比ヶ浜父の指示の下、テントやBBQの準備をしていた。ちなみに小町や由比ヶ浜、舞衣さんはBBQの肉や野菜の準備をしていた。

それにしても舞衣さんを見ていると以前、犯したような気分になるんだよな。いや、人妻に手を出した事なんてないぞ。

それに俺は由比ヶ浜で童貞を卒業したんだぞ。他に相手をしてもらった女性はいない。不思議だよな。

まあ、それは置いて置いて。早く由比ヶ浜と二人つきりになれる時間を作りたい。早く由比ヶ浜をたくさん犯したい。

「ヒツキー、小町ちゃん。向こうに川があるから行ってみようよ」

「はい！結衣さん。お兄ちゃん、行くよ」

「お、おい！」

俺は由比ヶ浜と小町に引つ張られて川へと向かった。深さはだい

たい俺の腰の辺りまであるので、そこまで注意する必要はないだろう。

「それじゃお兄ちゃん。小町は向こうにいるから結衣さんとイチャイチャしていいよー!」

「おい!小町!!」

小町は俺と由比ヶ浜を置いてどこかへ行ってしまった。それほど遠くに行かないだろうから大丈夫だろう。

俺は由比ヶ浜の腕を引っ張り、茂みに入り込んだ。ここなら大丈夫だろう。

「由比ヶ浜!んっ」

「んんっ!?!……んっ♡」

「ほら舌をもっと絡ませろ」

「う、うん!ちゅっ♡ぢゅるるるるるっ」

由比ヶ浜は自分の舌と俺の舌を必死に絡ませた。由比ヶ浜は俺の首に腕を回して俺に密着してきた。巨乳が俺に押し付けられて最高に興奮する。

この胸は生涯、俺だけの物だ。俺以外には触らせもしないからな。その辺はちゃんと調教しておかないと。

「はむっ……ぢゅるるるるるっ」

「おおお……いいぞ、射精すぞ」

「んぐっ……ぢゅるるるるるっ」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ……」

由比ヶ浜は俺の精子を零さずに全て飲み干した。ちゃんと調教したかがあった。男の精子を飲み干すとかビッチでなければしないだろう。

「由比ヶ浜。ここで小便をしろ」

「わ、分かった。お、音……聞かないで」

「早くしろ」

「うん……んっ」

しやああああ……

由比ヶ浜はズボンを下ろしてパンツをズラして立ったまま小便を漏らした。顔は赤く染めていたが、表情は嬉しそうに笑っていた。

ここまで来ると由比ヶ浜は天性のビッチだったのかもしれない。男に命令されて小便を漏らすとか正常な人間ではしないだろう。

「由比ヶ浜。その木に手を付けろ」

「こ、ここでするの!? ママやパパ、小町ちゃんに見られちゃうよ」

「我慢出来ないんだ。俺の彼女なら彼氏の性処理を手伝ってくれ。由比ヶ浜にしか頼めないんだ」

「わ、私にしか……うん！ 任せてビツキー！」

はい、バカ確定！ 彼女になったからと言って性処理を手伝う女はそうそういないぞ。本当にビッチでバカだな。将来、絶対に詐欺に遭いそうだな。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡」

「おい由比ヶ浜。声が大きいぞ」

「ご、ごめん。んっ♡で、でもビツキーの大きいからっ♡」

まったく由比ヶ浜のアホめ。俺は周りを確認してみたけど、誰も見てはいないな。小町は兎も角、由比ヶ浜の両親に見られてたら不味かった。

時間もあまり無い事だし、さっさと射精して終わらせるか。

ずずずずずつ……ぱんっ!! ずずずずずつ……ぱんっ!! ずずずず

ずつ……ぱんっ!!

「ああっ♡んんっ♡うひい♡」

「だから声を抑えろ！」

「ら、らめえ♡ひつきーのがおひいらめえ♡♡」

由比ヶ浜は子宮の入り口辺りをチンコで突く度にマンコがキュンキュンと締め付けてくる。外で開放的にでもなったか？

これならすぐに射精出来そうだな！ 俺はさらに腰に力を入れて突いた。

ずずずずずつ……ぱんっ!! ずずずずずつ……ぱんっ!! ずずずず

ずつ……ぱんっ!!

「ひ、ひつきー！らめえ！い、いくうう♡♡」

「由比ヶ浜！で、射精る！ぐっ」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるびゆるるるっ……

「ああああああ♡♡♡……ひ、ひつきーのあしゅいのいっぱいだしやられたあ……」

俺が由比ヶ浜から離れるとマンコから俺が射精した精子が逆流してきていた。太ももを辿って下に落ちているのを見ると興奮する。

もっと犯していたかったけど、昼飯の時間になったので一度、キャンプに戻る事にした。小町と合流して昼飯を食べた。

そして昼過ぎに川までやってきた。小町はすぐにどこかへと行ってしまった。迷子にならなければいいか。

ちなみに由比ヶ浜夫妻はキャンプでイチャイチャするそうだ。

「由比ヶ浜。ズボンを下ろして尻をこっちに向けろ」

「う、うん」

くちや……

「んっ……ひ、ヒツキー。ゆ、指……だ、だめえ！」

俺は由比ヶ浜のマンコを指でほじくり返していた。キャンプに着いてすぐ射精した精子を外に出していた。ほじれば大量に出てきた。午前中、どれだけ射精したんだ俺は!?!念入りにほじっておかないと。

「ひ、ひつきー……あんっ♡」

「おい、ちゃんと立っている」

「れ、れもお……こひいにちからが……」

「まったくしようがないな……」

俺は由比ヶ浜を後ろから抱きしめた。胸の下に腕を回して空いている手で由比ヶ浜のマンコを前からほじった。

由比ヶ浜の足はガクガクと震えていた。もう絶頂しそうなのか？ならもつと刺激を強くしてやるか。俺は指の出し入れを激しくした。

「ひ、ひつきー!?!ひいひいひい♡♡」

しやあああ……

「ら、らめえ……止まってええ♡」

由比ヶ浜は盛大に潮を噴出した。もう小便かと思うくらい勢いだった。そして地面にへたり込んだ。俺は由比ヶ浜のズボンとパンツを脱がした。

そして正面に回りこんで両足を持って大きく広げた。マンコからは牝の発情した匂いがムンムンになっていた。

ずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡ひっきー♡♡」

「のおおお……」

由比ヶ浜のマンコにチンコを挿入した瞬間に由比ヶ浜は軽く絶頂した。その証拠に由比ヶ浜は小便を漏らしたからだ。

ちよろろろつ……

「まらあおひいこおらたあ……」

「小便を引っ掛けるなよ」

「ろめんらしやい……あんっ♡」

まったく俺の奴隷の分際で主人に汚い小便をかけるなんて、躰をし直さないといけないな。俺は由比ヶ浜の尻を持ち上げた。

ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ああっ♡んっ♡あんっ♡」

「汚い小便をかけたんだ。しっかりと俺に奉仕しろ!」

「は、はひい♡」

「お前の所為でボツチになったんだからな!」

「はひいひいひい♡♡」

まあ、由比ヶ浜の所為ってのは言いすぎだと思うけどな。入学式に間に合ってもボツチになっていた可能性があるからな。

「由比ヶ浜!で、射精るぞ!」

「ひっきーのあしゅいのちようらい!」

「射精る!ぐっ……」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……
「い、いぐうううう♡♡♡……ひっきーのあしゅいのらくしゅん……」

由比ヶ浜のマンコは俺のチンコから精子を残さずに子宮の中に送っている。野外で男に股を開くとかビッチだな。

「ちゅっ……ちゅうううう」

「あっ♡んんっ♡ヒッキー、私まだ母乳、出ないよ？」

「いずれ出させてやる」

俺は由比ヶ浜の年相応ではない胸に吸い付いた。あの巨乳の娘なのだ、将来どれだけ大きくなるのか楽しみだ。

一年でこのサイズなんだ。来年にはもう一回り大きくなっている事だろう。男共の視線が気に食わないけど、仕方ない。

お前らがオナニーのオカズにした女は俺が奴隷にしているんだよ！どうだ、羨ましいだろ!?

ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡ひ、ヒッキーのまた膣内で大きくなったよ」

「帰る前にもう一回するぞ」

「う、うん!ああっ♡」

「由比ヶ浜!」

俺は由比ヶ浜のマンコにチンコを打ち付けた。由比ヶ浜のマンコは俺のチンコを刺激しようとして蠢いているので最高に気持ちいい!

もつと犯したい。もつと壊したい。だけど、由比ヶ浜の両親に見つかると思えを絶たれるかもしれない。

そうなると思えは誰で性処理すればいいんだ!?

ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっ……ぱんっ!!ずっずっずっずっ……ぱんっ!!

「ひ、ひっきー!い、いくー!」

「ああ、俺も限界だ。射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……
……

「ああああああ♡♡……はあ……はあ」

最高に気持ちいい射精だった。流石は俺の性処理奴隷だ。これからもたくさん使ってやるかな。俺をボツチにした代償は高いぞ。

それから俺と由比ヶ浜は川で体を綺麗にしてからテントに戻った。由比ヶ浜はフラフラだったけど、意外にバレなかった。

さて、次はどこで犯してやろうかな？また学校でもいいし、帰り道の人気の無い場所でも構わないな。

もしくは誰かに見せるとか？それはリスクが高いけど、候補に入れておくのもいいかもしれない。

やはりガハマとナイトプールに行くのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。祭り、海、山と由比ヶ浜と色々な場所に行った。そして行く先々で由比ヶ浜を犯した。気分は最高だった。

外での行為は開放的になってついつい興奮してしまった。由比ヶ浜ピッチ化は完了したと言えるだろう。俺に言われた通りに小便を漏らす辺り、変態を通り越している。

でもこれくらいしなければ気がすまなかった。

折角、中学時代の知り合いのいない総武に入学して新たなスクール生活を夢見ていたのに、車に轢かれて入院する羽目になったのだから。

それして今夜もまた由比ヶ浜家に招待されて俺はある場所に来ていた。

「ヒツキー君。どうしたの？」

「い、いえ。こんな所、始めて来たので。緊張して……」

「始めは誰だっけそうよ。楽しんでね」

「あ、はい」

俺は舞衣さんの水着姿に見惚れていた。ここはあるビルの屋上にあるプールだ。しかも今は夜、つまりはナイトプールだ。

こんな場所に来るなんて、人生初だぞ!? どうすればいいんだ!? 由比ヶ浜の奴は着替えに時間がかかり過ぎだろ!?

それにしても舞衣さんの水着姿は相変わらず綺麗だったな。あれで子持ちの人妻とかありえないだろ!?

それにしても俺はどうして舞衣さんを見て、どこかで犯したような気分になるんだ? 初対面で人妻にそんな事する訳ないのに。

「ヒツキー! お待たせ!」

「遅いぞ由比ヶ浜。何をしていた?」

「ご、ごめんなさい。か、髪と整えていたら時間がかかって……」

「それよりこっちに来い」

「あ、ヒツキー……んんっ♡」
「んっ」

俺は由比ヶ浜を引き寄せて誰も見ていないの確認してからキスをした。今、無性に由比ヶ浜を犯したいと思っている。

だけど、ここでは誰かに見られてしまう。だからキスで我慢した。今にも俺のムスコが爆発寸前だ！

「んんっ……あんっ♡」

「由比ヶ浜。声を出すな」

「む、無理だよ。声を我慢なんて……んんっ♡」

俺は由比ヶ浜のマンコに指を侵入させて掻き回した。由比ヶ浜は両手で口を塞いで必死に声を出さないようにしていた。

だけど、俺はそれを阻止するように指を由比ヶ浜のマンコに入れたり出したりを高速でやってやった。

「んんっ!? ひ、ひつきー……だ、だめえ」

「何が駄目なんだ？」

「い、いひゃう……ゆ、指ぬいて……んっ」

「ほらいケ」

「ああああ——んんっ!?!」

「んんっ」

俺は由比ヶ浜の絶頂と同時にキスで口を塞いだ。少し漏れたけど、誰もこちらを気にしている様子はない。

由比ヶ浜は潮を噴いて、愛液をマンコからダラダラと漏らしていた。由比ヶ浜は腰が抜けたのか俺に寄り掛かってなんとか立っていた。

「ひ、ひつきーのいじわるう」

「でも気持ち良かったらろ？」

「う、うん……」

誰かが見ているかもしれないのに絶頂して、それが気持ちいいなんて思えるなんてビッチ以外の何者でもないな。

俺は由比ヶ浜をプールの死角に連れて来た。ここなら誰も気付かないだろう。俺は海パンを下に少しヅラして、勃起したチンコを露出

させた。

「はむっ……じゅるるるるるっ……じゅるるるるるっ」

「おおおお……いいぞ、由比ヶ浜」

「じゅるるるるっ……れろっ……れろっ」

由比ヶ浜はチンコを近づけただけでフェラしてきた。顔を前後させて、俺のチンコを綺麗に舐めてきた。顔を前後させる際に舌をチンコに巻きつけて刺激してきた。

俺は由比ヶ浜の頭を両手で持って、俺のタイミングで顔を前後させた。

「由比ヶ浜の口マンコ、最高に気持ちいいぞ」

「じゅるるるるるっ……じゅるるるるるるるっ……じゅるるるるるるっ」

「由比ヶ浜！で、射精るぞ！ぐっ」

びゅるるるるるびゅるるるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「んぐっ……んぐっ……んぐっ」

由比ヶ浜は俺の精子を一滴も零さずに飲み干した。飲み干した事を俺に見せるために口を大きく開けて見せてきた。

いくら人目に付かない場所とはいえ、男の精液を飲み干すとかヤバいくらいビツチになってしまったと今更思ってしまった。

「由比ヶ浜。水着をズラせ」

「で、でもここじゃ……」

「早くしろ。静かに済ませるから」

「う、うん……」

もうここで由比ヶ浜を犯す！幸いに今夜はナイトプールの人数は少ないと思う。舞衣さんも旦那さんとイチヤイチャしているのだからこっちに来る事はないだろう。

俺は由比ヶ浜に壁に手を付かせてからマンコへとチンコを挿入した。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ああっ♡」

「由比ヶ浜！」

ずずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずずず

「あんっ♡んっ♡はひい♡♡」

俺は一心不乱に腰を激しく振った。由比ヶ浜は我慢出来ずに声を出してしまったが、今更気にしない。爆発寸前だったのでもう射精してしまいそうだ。

「由比ヶ浜!もう射精るぞ」

「ああっ♡ひつきー、まって!い、いまはっ♡」

「で、射精るー!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「ひゃああああああ♡♡♡……ひ、ひつきーのあしゅいのらくしやん……」

由比ヶ浜のマンコへの射精が止まらない。いくらでも射精出来てしまう。それに由比ヶ浜のマンコが俺のチンコから精子を根こそぎ奪おうと蠢いている。

まったくビツチヶ浜はどれだけ精子が好きなんだ?俺の金玉の精子を全て奪おうとしている。

「由比ヶ浜。綺麗にしてくれ」

「うん……はむっ……ぢゅるるるるるっ」

「うっ……いいぞ。もっと舌を絡めてくれ」

「わかった。れろっ……れろっ……ぢゅるるるるるるっ」

由比ヶ浜はチンコを咥えて顔を前後しながら舌を俺のチンコに絡めてきた。舌だけが別の生物のように感じてしまう。

しかし最初と比べたらフェラが大分、上達したな。流石はビツチだけはあるな。

「由比ヶ浜。で、射精るー!」

「んんっ!?!」

「うっ……」

びゅるるるるるるびゅるるるるるるっ……

「んぐっ……んぐっ……んぐっ」

あまりにも由比ヶ浜の口マンコが気持ちよくて射精してしまった。そして由比ヶ浜は俺の射精した精子を残さずに飲み干した。

口から少し零れた精子も掬い取って口に運んで飲み干した。最高だよ、由比ヶ浜！どれだけ俺を興奮させてくれるんだ!?

病院で簡単に男に股を許す辺り貞操観念がないと思っただけで、まったくくないビッチだよ、お前は。

「結衣、ヒッキー君。ここに居たのね」

「ママ。どうしたの?」

「ママ、少し友達と話してくるけど、二人はどうする?」

「それなら俺たちは先に上がっています」

「そう。先に待っていて、すぐに行くから」

危なかった。舞衣さんがいきなり来た時は焦ったけど、バレずにすんだ。それにしも舞衣さんってエロいな。あの胸でチンコを挟まれてみたい。

それは由比ヶ浜でも出来るか、まずは更衣室に行くか。シャワーでも浴びて帰り支度をおかないと。

「おい由比ヶ浜。いくぞ」

「うん」

俺は更衣室へと向かった。でもその前にもう一度、由比ヶ浜を犯しておかないと勿体ないよな。折角のナイトプールだもんな。

俺は更衣室に向かう道で死角になる場所を見つけた。この手の死角になる場所を見つけるのはポッチにはお手の物だ。

「由比ヶ浜。壁に手をつけ」

「う、うん。ここでするの?バレない?」

「大丈夫だろ。お前が声を抑えていれば」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「ああっ♡」

由比ヶ浜はチンコをマンコに挿入しただけで軽く絶頂した。どれだけ敏感のマンコなんだよな。毎日使っているだけはあるか。

それに毎日使ってマンコをガバガバになれば子供が産みやすいだろう。

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡んっ♡うひい♡」

「由比ヶ浜。声を抑えろ!」

「で、でひいないよっ♡ひっきーのおちんちん、きもちいい♡♡」

由比ヶ浜は声を抑えようとしなかった。俺は由比ヶ浜の口を手で押さえた。流石にこれ以上、声が漏れては誰かに気が付かれてしまう。

いくらナイトプールで羽目を外しているとは言え、声を聞けば気がつくだろう。その前にさっさと由比ヶ浜をイカせないと。

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!

「ああっ♡んんっ♡あんっ♡」

「由比ヶ浜!そろそろ射精るぞ」

「あんっ♡んっ♡あっ♡」

「で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「い、いくううううう♡♡♡ひ、ひっきーのあしゅいのがたくしやん……」

由比ヶ浜のマンコに俺の精子が流れ込んでいる。まったくこのマンコは俺の精子が欲しがり過ぎだろ。マンコが俺の精子を欲しがって蠢いているよ。

俺も最後の一滴まで全て由比ヶ浜のマンコの一番奥へと注ぎ込むつもりでチンコをマンコに深く押し込んだ。

俺のチンコの先が子宮の中に入ってしまった。深く差し込み過ぎてしまった。

「ひ、ひっきー……いきゅううう♡」

「由比ヶ浜。更衣室に行くぞ」

「う、うん……」

俺は脱力して動けなくなった由比ヶ浜を何とか更衣室まで運んだ。

誰にも見られずにここまで運ぶのは苦勞した。

「掻き出しておかないと」

「あんっ♡ひ、ヒツキー……だ、だめえ」

「大人しくしているろ」

俺は由比ヶ浜の股に手を伸ばしてマンコの中にある俺の精子を掻き出した。流石に膣内に入れたまま帰る訳にはいかない。

シャワー室で綺麗に洗い流しておかないと舞衣さんにバレてしまう。俺は必死に由比ヶ浜のマンコに指を激しく出し入れした。

「あっ♡んっ♡ら、らめえ♡」

「しっかりと奥まで掻き出さないと」

「ひ、ひっきーの指、深くにっ♡」

「ちゃんと出せよ」

「ひいひいひい♡♡♡」

しやあああ……

由比ヶ浜は絶頂して潮を盛大に噴出した。それから俺と由比ヶ浜は着替えて舞衣さんと合流して俺は自宅に帰った。ナイトプールなんてパリピがするものだと思っていたけど、意外に悪くはなかった。

でも人が居る所で由比ヶ浜を犯すのは控えた方がいいだろう。あのビッチは俺だけの女だからな。

さて、次はどこで犯してやろうか？

やはりガハマをまた学校でするのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。夏休みが終わり二学期が始まった。だからと言って俺の生活が変わる事はない。家と学校を行ったり来たりするだけの日々だ。

まあ、変わった事を上げれば性奴隷の由比ヶ浜がクラスのカートス上位連中と一緒に居る事が多くなった事だろうか？

あのいかにもグループリーダーをしている相模？だったか。あいつと一緒に居る事が増えた。別に由比ヶ浜が誰とどのような付き合いをしようが俺には関係ない。

俺は好きな時に由比ヶ浜を犯すだけだ。それがあいつの有一の謝罪の方法なんだから。さて、今日も由比ヶ浜を犯すかな。

「あ、ヒツキー」

「来たか……」

「ごめんね。最近、さがみんと食べてるから」

「そんな事はどうでもいいから」

「うん。待ってね」

俺は校舎裏に由比ヶ浜を昼休憩が終わる少し前に呼び出した。いつもここで由比ヶ浜にパイズリさせている。

由比ヶ浜は一年の中で一番の巨乳をしているからな。パイズリをするためだけの胸だよな、これは。

由比ヶ浜は膝を付いて制服の前を開いて胸を露出させた。相変わらずの巨乳だな、ここは母親譲りだよな。

「んっ……どうヒツキー。気持ちいい？」

「ああ。いい具合だな、涎を垂らせ」

「ああああ……んっ……どう気持ちいい？」

「いいぞ。涎で滑りが良くなった」

由比ヶ浜は自分の巨乳を左右で支えながら俺のチンコを扱っていた。この乳圧が堪らないんだよな。クラスの男子たちは妄想でいつも抜いているんだろうな。

でも俺は実際に胸で抜いているんだよな。残念だったな、由比ヶ浜

をいつも凝視している男子たち！この胸は俺のだ！

「由比ヶ浜。チンコの先を舐めろ」

「うん。ちゅっ……ちゅるるるるっ」

「おおお……由比ヶ浜、射精すから飲め！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

俺は射精する瞬間に由比ヶ浜の頭を押さえつけてチンコを口に咥えさせた。そして精子を由比ヶ浜の口の中に大量に射精してやった。

由比ヶ浜の口マンコはいつも気持ちいいんだよな。温かくてヌレヌレしているんだよな。それに舌の扱いが下手なのが更に興奮させてくれるんだよな。

「由比ヶ浜。口の中を見せろ」

「ああああ♡」

「飲んで良し」

「んぐっ……ヒツキーのせーし、粘々していて喉に張り付くよ」

由比ヶ浜は俺の精子を嫌がらずに飲むようになった。本当に嫌がらずに飲むようになるとは思いもしなかった。

でもビッチの由比ヶ浜だから飲めるのは当然だろうな。マンコを使いたいけど、そうすると昼休憩が終わってしまう。

そうすると相模たちが疑うかもしれない。俺と由比ヶ浜の関係は秘密にしないと。

「由比ヶ浜。俺のチンコを太ももで挟め」

「うん。これでいい？」

「ああ。太ももの感触がいい具合だ」

由比ヶ浜は背中を俺に向けて太ももで俺のチンコを挟んだ。この太ももの柔らかさと温かさが堪らない。俺は腰を前後に動かした。

「あんっ♡ひ、ヒツキー」

「早く終わらせるからそのままでもいい」

「うん。ああっ♡んんっ♡」

俺のチンコが由比ヶ浜のクリトリスにパンツ越しで擦れて由比ヶ浜は感じているエロい声を出した。周りに生徒がいらないからいいけ

ど、誰かに聞かれたどうするんだ!?

でもいいオカズにはなるだろうな。俺は腰の動きを激しくした。もうそろそろ俺の射精の限界だ。

「で、射精る」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……

「ひゃああああああ♡♡♡」

由比ヶ浜は俺の射精と同時に絶頂してパンツを濡らした。こうしてパンツを濡らすから由比ヶ浜は何枚もパンツを学校に持ってきている。

「由比ヶ浜。綺麗にしろ」

「うん。ヒッキー……はむっ……ぢゅるるるるっ」

俺は射精したチンコを由比ヶ浜へ向けた。すると由比ヶ浜は膝を付いてフェラを始めた。ちゃんと舌を使ってチンコを綺麗に舐めていた。

このフェラしている由比ヶ浜の顔を見下ろすのが最近の楽しみだ。チンコを口いっぱい頬張っている女の顔なんて最高じゃないか!

「で、射精るぞ!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

「いいぞ、由比ヶ浜」

由比ヶ浜は俺の精子を綺麗に飲み干した。よく思うけど、精子を飲めるよな。逆になれば気持ちが分かるのだろうか?

「由比ヶ浜。もういいぞ、早く相模たちの下へ行け」

「うん。それじゃあ放課後にね」

「ああ」

由比ヶ浜は乱れた服装を戻して教室へと戻って行った。俺は先ほど射精した精子の処理を始めた。このまま残したままだと学校側にバレて由比ヶ浜とここでする事が出来なくなるからな。

俺は一通り処理した後、教室へ戻った。放課後に由比ヶ浜と会ったちゃんと相手をして貰わないと爆発しそうだ。

「早く滅茶苦茶にしたいな……」

ボツチになった原因の由比ヶ浜にはしっかりと俺の性処理奴隷として生きて貰わないとな。俺は興奮を抑えながら由比ヶ浜を滅茶苦茶にする事を考えながら歩いた。

そして放課後になった俺は空き教室で由比ヶ浜が来るのを待った。総武高校は千葉の進学校なのはいいけど、学校を大きく作り過ぎたのか使われていない教室が多い。

「ホント、鍵を落とすか馬鹿な教師も居たもんだ」

どうして俺がこの空き教室の鍵を持っているかと言うと拾ったからだ。誰かが落とした教室の鍵を。本来なら教師に渡すのがいいんだけど、ありがたく使わせて貰う事にした。

鍵が無くなったのに今だに騒ぎにならないのは教室を忘れているからだろう。騒ぎなってから返せばいいだろう。

「ヒツキー。お待たせ」

「少し遅いぞ。由比ヶ浜」

「ご、ごめん。さがみんなたちと話していたら時間、過ぎちゃって」

「まあ、いい。スカートを捲り上げろ」

「うん」

しっかりと調教が効いているのか由比ヶ浜は素直にスカートを捲り上げた。俺は由比ヶ浜のパンツを見た。するとそこには濡れたパンツがあった。

「パンツ、変えていないのか？」

「ここに来る前に濡れちゃって……」

「期待しているとか由比ヶ浜は変態だな？」

「へ、変態じゃないよ！ただ……」

「ただ、何だよ？」

「ヒツキーのおちんちんが気持ちいいの知っているから……」

俺のチンコを妄想していたらパンツが濡れたと。本当に変態になってきたじゃないか。ビツチの変態とか救い様がないな。

ビツチも変態も似たようなものか。なら期待通りに俺のチンコが24時間、離れないようにしっかりと犯してやるか。

「由比ヶ浜。服を脱げ」

「う、うん……」

由比ヶ浜はストリップショーを始めた。服をスカートを次々と脱いで行き、最終的には全裸靴下になった。

ホント、どうして16歳でそこまで胸が大きくなるんだろうか？でもおかげでパイズリが楽しめるからいいか。

「手を頭の後ろにして、足は広げろ」

「は、恥ずかしい……」

「股から愛液が垂れているぞ。期待しているのがバレバレだぞ」

「い、言わなくていいから……は、早くヒツキーの挿入して！」

俺は自分のズボンを下ろして勃起したチンコを露にした。由比ヶ浜は俺のチンコを見て、唾を飲み込んだ。股からさらに愛液が垂れてきた。

俺は由比ヶ浜をグラウンドが見える窓へと押し付けた。そして一気に挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ああっ♡ひ、ヒツキーの奥までっ♡」

「あまり声が大きいと外の連中に聞こえるぞ？」

「へ?……だ、ダメえええ!!」

俺は窓を開けた。これで由比ヶ浜の声が外の連中によく聞こえるだろう。窓を開けた途端、由比ヶ浜のマンコの締めまりが強くなってきた。

どうやら俺の性奴隷のは分かっているけど、他の人間には見られたくはないようだ。羞恥心があるようで何よりだ。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ああっ♡うひい♡んんっ♡」

「どうした?由比ヶ浜。みんなにお前のエロい声を聞かせてやれよ」

「あんっ♡だ、だめえ……ひつきー以外はだめえ」

「由比ヶ浜……」

このビッチは俺を余程、興奮させたらしい。そんな事を言われたらチンコが大きくなるじゃないか。

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!

「んっ♡ああっ♡んあっ♡」

「このビッチが!マンコを突く度にギュウギュウと締め付けてくるぞ?誰にでも股を開く変態が!」

「ひゃあ♡ち、違う。わ、私はヒツキー以外に、あんっ♡開かない。ひい♡」

俺はチンコで由比ヶ浜のマンコを突くと同時に耳元で言葉攻めにしてやった。その度に由比ヶ浜のマンコは俺のチンコをギュウギュウと締め付けてくる。

「由比ヶ浜!で、射精るぞ!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「あああああ♡♡♡ひつきーのあしゅいのたくしゅん♡♡」

「流石はビッチだな。どれだけ俺の精子が欲しいんだ?」

由比ヶ浜のマンコは俺のチンコから精子を根こそぎ奪うように蠢いている。まったくビッチのマンコは凄いな。

由比ヶ浜は絶頂して足腰に力が入らないようで俺が支えていた。

そうだ、面白い事を思いついたぞ。

俺は窓を開けて由比ヶ浜の膝裏に手を回して持ち上げた。外からは由比ヶ浜が丸見えになっていた。

「ヒツキー!?!だ、ダメえ!みんなに見えちゃう!」

「見られると思うとマンコの締め付けが強くなっているぞ?見れたい願望でもあるのか?」

「ら、らめえ!」

「締め付けが!?!で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「ひゃあああああ♡♡♡♡♡」

締め付けが強くなって気持ちよくてすぐにまた射精してしまった。まったく由比ヶ浜の締め付けは気持ちがいいぜ。

それから俺は由比ヶ浜を先に帰してから空き教室を綺麗にして帰った。学校で誰にもバレずにやれる部屋を手に入れた事だし、これからはここで由比ヶ浜を犯すか。

それに由比ヶ浜の性癖も少し分かった事だしな。誰かに見られるギリギリでやるのもいいかもしれない。

俺はまた勃起したチンコで由比ヶ浜を犯す妄想をしながら眠りに付いた。

やはりガハマをオモチヤにするのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。先日、学校のある部屋の鍵を手に入れた。使われていない部屋で由比ヶ浜を犯すには持って来い部屋だったのでちょうど良かったぜ。

そこでさっそく由比ヶ浜を犯した。誰にも邪魔されない部屋ってのは最高だ。そして放課後に俺はその部屋を掃除していた。

使われていないだけあって、埃などが大量って言うほど無かったけど汚かった。そこで昼休憩と放課後を使って数日で綺麗にした。

そして由比ヶ浜を犯した後でもすぐに綺麗に出来るように消臭剤に洗剤などを完備した。それとオモチヤも数点持ち込んだ。これがバレれば俺の高校生活は終わるので慎重にここに運んだ。

「ヒツキー。お待たせ」

「来たか由比ヶ浜」

放課後に由比ヶ浜が例の部屋にやってきた。由比ヶ浜は最近、リア充グループと一緒に居るようになって、髪の色を変えた。総武高校では髪の色は結構、自由なんだよな。

まあ、勉強さえ出来ていれば文句はないと言った具合だろう。俺も髪の色、変えてみようかな？

「どうしたのヒツキー？」

「いや、何でもない。早く脱げよ」

「う、うん」

由比ヶ浜はどんどん服を脱いで裸になった。どうして靴下は脱がないんだろうか？でも別にいいか。それにしても由比ヶ浜の胸って一年にしては大きいよな。

俺は由比ヶ浜の胸を鷲掴みにした。

「んっ♡ヒツキー痛いよ」

「痛いのが好きなんだろう？」

「爪が胸に刺さるから」

「なら乳首を摘まむか」

「あんっ♡」

俺は由比ヶ浜の乳首を摘まんだ。胸も大きいけど、乳首もそれなりに大きいんだよな。この胸は母親譲りで大きいんだな。

俺はズボンを脱いで勃起したチンコを露にして、椅子に座った。

「はむっ……ぢゆるるるるるっ……ぢゆるるるるっ」

「いいぞ由比ヶ浜。しつかり舌を使えよ」

由比ヶ浜はしつかりと俺のチンコに奉仕した。口に啞えて舌を使ってチンコを刺激してきた。最初は全然気持ちよくなっただけど、最近では俺のチンコのどこを刺激すればいいのかが分かったのか、フェラが上手くなった。

「由比ヶ浜。で、射精るー!」

びゆるるるるるびゆるるるるるっ……

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

あまりにも気持ちよくなってすぐに射精してしまった。由比ヶ浜は口を開けて俺が射精した精子を見せてきた。由比ヶ浜は一滴も零さずに口に溜め込んだな。

俺は由比ヶ浜の頭を数回軽く叩いた。それが合図で由比ヶ浜は精子を飲み干して、また口の中を見せてきた。

「いいぞ由比ヶ浜」

「気持ちよかった? ヒツキー」

「ああ。でなければ射精なんて出来る訳無いだろ?」

「ホント!?! 嬉しい!」

ホント、このビッチは何が嬉しいんだ? お前の所為で俺はボッチ学校生活を送る事になったんだぞ!?! 卒業するまで使い続けて最後はぼろ雑巾のように捨ててやる。

それまでしつかりと楽しませてもらうだけだ! 今回は少し趣向を凝らしたから楽しめよ、由比ヶ浜。

「由比ヶ浜。その上に乗ってくれ」

「この上?」

「ああ、そうだ。乗ったら腕を頭の後ろに回して足は折り畳んでくれ」

「こ、これでいい?」

「ああ、そのまま……」

「ちよつとヒツキー!？」

俺は机を数個並べてテーブルを作つて由比ヶ浜をその上に乗るよ
うに指示してから腕や足にも指示してからビニール紐で腕と足を固
定した。

由比ヶ浜は最初こそ暴れて抵抗したけど、俺の方が暴れる前に由
比ヶ浜を固定した。そして鞆から髭剃りクリームと剃刀を取り出し
た。

「ひい!?ひ、ヒツキー!何しているの!？」

「由比ヶ浜の下の毛が増えたからな。少し綺麗にしようと思つてな」

「そ、そんなの自分でするから!止めてよ!」

「そんなに暴れると大事な所が切れるぞ」

「ひい!?ら、らめえ♡」

俺はクリームを馴染ませてから剃刀で由比ヶ浜のマン毛を剃り始
めた。最初は鋏で短くしてから剃刀を使って由比ヶ浜のマンコを見
やすくした。

そして全ての毛を切り終わった。由比ヶ浜のマンコは今までに無
いくらい見えやすくなった。クリトリスも綺麗に見えるようになった。
た。

「ひ、酷いよ……ひぐつ……ひぐつ」

「綺麗になったじゃないか。不満か？」

「そ、そうじゃないけど……」

由比ヶ浜は泣いて行けど、俺には関係ない。この性奴隷は俺が車に
轢かれた事に対して謝罪しなければならない立場だ。

俺の温情でこれだけにしているんだ。むしろ感謝して欲しいくら
いだ。これだからビツチはウザいな。

「えつと……どこにやったかな?」

「ヒツキー?」

「あつたあつた。じつとしている由比ヶ浜」

俺は鞆からピンクローターとセロハンテープを取り出した。そし
てローターをテープを使って由比ヶ浜の乳首に貼り付けた。

「ヒツキー。これ、振動しているよ?」

「ローターだからな。それとこれも」

「ビツキー!?!真っ暗なんだけど!?!」

俺は由比ヶ浜の目を布で覆った。これで見えないだろう。人間は感覚の一つを封じられると他の感覚が補おうと敏感になるからな。

「ちよつとジュース買って来る」

「ま、待ってー!ビツキー!」

俺は由比ヶ浜に聞こえるように扉を開けてゆっくりと閉めた。由比ヶ浜の反応が楽しみだ。あれ?このデジャブを感じるな。

どこかで別の人間相手にした事があるような。いやいやそんな事はないだろう。

「あっ♡んっ♡ああっ♡」

由比ヶ浜は乳首に貼り付けられたローターの振動で感じまくりで小さな絶頂を味わい続けていた。体も跳ねてまるで陸に上げられた魚のようだった。

「ひ、ひっきーはやくもどって、きてっ♡うひい♡」

「…………ふう」

「はひい!?!ああああ♡だ、だめえ!止まって!」

「しゃあああああ…………」

俺が由比ヶ浜の耳に息を吹きかけたら由比ヶ浜は小便を漏らした。しまった!どうせなら動画に撮っておくべきだった。

そうすれば次回に脅しように使えたのに!惜しい事をした。いやまだ間に合うか。俺はスマホで由比ヶ浜を動画に撮った。

「ビツキー!居るんでしょ!さつき、息を吹きかけたから!ああっ♡」

「ああ居るけど?」

「早く目隠し取って!」

「どうして?」

「これ凄く感じておかしくなる!」

由比ヶ浜は快樂が敏感に感じるから自分が変わる事を恐れているのだろう。しかし俺がそんな事、知ったことか!

それにビツチがさらにビツチになるだけなのに恐れる必要があるだろうか?

「感じるのはいい事じゃないか。由比ヶ浜のマンコはもうグチョグ
チヨになっっているぞ?」

「あんっ♡い、いやっ♡」

「言葉では嫌がっているけどな……体は正直で発情しているじゃない
か」

「うひいい♡」

俺は由比ヶ浜のマンコに指を入れて搔き回した。マンコは先ほど
より濡れて床に小さな水溜りを作っていた。

どれだけ愛液を垂らせれば気が済むんだ?俺は由比ヶ浜のマンコに
顔を近づけた。

「ぢゅるるるるっ!」

「うひいいいい♡ひっきー、吸っちゃだめっ♡ああっ♡」

「ぢゅるるるるるっ!」

「ああああ♡♡い、いぐううう♡♡♡」

由比ヶ浜のマンコに吸い付くと簡単に絶頂したよ。まったく情け
ないマンコだな?由比ヶ浜。腰を浮かせて絶頂を由比ヶ浜は味わっ
ていた。

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「ああああ♡ひっきーの大きいのが奥まできたっ♡」

「由比ヶ浜のマンコの締め付けはいい強さだぞ!」

「ひっきーのなかでおおきくなったっ♡」

俺はすっかり発情した牝の匂いを出しまくっている由比ヶ浜のマ
ンコに爆発寸前の俺のチンコを一気に奥まで挿入してやった。

由比ヶ浜のマンコはそれだけで絶頂したようでチンコを締め付け
るマンコが痙攣しているようだった。

由比ヶ浜が絶頂した際のマンコの蠢きが俺は好きだ。

「由比ヶ浜!もつとマンコを締めろ!」

「うひい♡ら、らめえ♡あんっ♡」

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず
ず……ぱんっ!!」

「ちやんとしろ!このビッチが!!」

「わ、わらしはびっちじゃらいっ♡」

俺は由比ヶ浜を罵りながら腰を激しく前後に振った。由比ヶ浜は否定していたが、マンコは肯定しているように強く締め付けてきた。

俺は強く強く腰を由比ヶ浜に打ち付けた。その度に由比ヶ浜のマンコは強く締め付けてきた。

「由比ヶ浜！射精るぞ！」

「ひっきー♡いっっちゃうっ♡」

「で、射精る！うっ……」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「いぐうううう♡♡♡ひっきーのあしゅいのたくしゃん……あんっ♡」

由比ヶ浜のマンコの一番奥の子宮に俺の精子を大量に注いでやった。この膣内出しが最高に気持ちがいい。由比ヶ浜を征服している気分になる。

一応、由比ヶ浜には避妊薬を飲ませている。この年で父親になるなんてご免だ。それに不純性交友が知られた社会的に殺される、親父に。

「ひっきー……」

「おい由比ヶ浜。何、呆けているんだ？」

「へ?」

「まだ時間があるだろう?もう一回戦だ」

「ま、待って!今、すごく敏感で！」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「うひいひい♡」

「そんなの俺には関係ない！」

「そ、そんな……」

由比ヶ浜はもうしたくないようだったけど、マンコは違った。挿入した俺のチンコを強く締め付けた。もっとイジメて欲しい証拠だ。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひいひいひい♡♡」

「いいぞ由比ヶ浜。もつとマンコを締めろ！」

お前は俺のオモチャになっていればいいんだ！俺は最終下校時間の少し前まで由比ヶ浜を犯し続けた。由比ヶ浜はすっかり俺の精子の匂いに染まっていた。

ビッチには精子がよく似合う。俺は由比ヶ浜を綺麗にした。流石に精子の匂いを撒き散らしながら帰らせる訳にはいかない。

「ほら由比ヶ浜。帰るぞ」

「ひ、ひっきー……わたしのこと、すき？」

「……もちろんだ。でなければこんな事はしない」

「えへへへ……そっか。ひっきーも……」

こいつは何を言っているんだ？俺の高校生活の出鼻を挫いたお前なんて好きな訳ないだろ？完璧なビッチにして捨ててやるよ！

俺はその時の由比ヶ浜の表情を想像しながら次はどう犯してやるうか考えていた。

やはりガハマをまたまた学校でするのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は今、寝坊して学校に向かっている所だ。まったくどうして小町は俺を起こしてくれないんだ!?

妹なら兄を優しく起こしてくれるものだろ！それがあれば俺は遅刻せずに済んだのに。でもいいか、最初の授業は現国だったはずだ。

朝から平塚先生の顔を見るのは気が滅入るからな。さて、今から教室に入っても中途半端になってしまうし、目立ってしまう。それなら授業は2時間目からでもいいか。

「……由比ヶ浜でも犯すか」

暇になってしまったので由比ヶ浜を犯す事にした。俺は由比ヶ浜にメールで屋上に呼び出した。先生には体調不良とか言っていればいだろう。メールを送って数分後、由比ヶ浜はやってきた。

「はあ……はあ……はあ……ヒツキー、おはよう」

「遅いぞ」

「ご、ごめん……」

「それよりパンツを脱げ」

「え？どこで？」

「ああ、早くしろ」

「う、うん……」

由比ヶ浜はゆっくりとパンツを脱ぎ始めた。まったくお前は俺の性奴隷だつて言うのに何をとりとろしているんだ!?

でもここで強く当たるとこいつは俺の下から去ってしまうかもしれない。こんな都合のいい奴隷を離してなるものか。

「あっ♡んんっ♡だ、だめっ♡」

「何だ？もうすっかり濡れているじゃないか？」

「そ、それは……」

俺は由比ヶ浜のスカートの中に手を入れてマンコを触ってみた。するとマンコはすでに濡れていた。それも糸を引くほど愛液を出し

ていた。

俺に呼び出されてどんだけ期待しているんだ？このビッチは！でもそっちの方がいいだろう。

「ほらさっさとこっちに尻を向けろ」

「う、うん……うひい♡」

「いい締め付けだ」

俺は由比ヶ浜を屋上のフェンスに押さえ付けて、ズボンのチャックと下ろし勃起したチンコを由比ヶ浜のもうすでに濡れているマンコに挿入した。由比ヶ浜のマンコの締め付けはよくいい具合に圧迫する。

「授業を抜け出してチンコを啜えこんでいるなんて、ビッチの鏡だな？」

「そ、そんな……ああっ♡ひやあ♡んんっ♡」

「しっかりと締め付けろ！途中で抜けたら許さないからな」

「う、うん……んあっ♡あっ♡ああんっ♡」

由比ヶ浜は必死にマンコの締め付けを強くした。まったくお前ほど都合のいい女はいないだろう。事故の原因がお前の犬にあるからと言って簡単に男に犯されるとかビッチじゃないか。

「ひ、ヒッキー！待って！」

「なんだ？いい所だったんだぞ！」

「と、トレイに行かせて……」

「大か？小か？」

「……小」

「なら」

「え？」

由比ヶ浜は小便をしたいようだけど、トイレになんて行かせない。まだまだ反抗的な態度があるからな。もっと精神的に追い詰めてやるよ。

俺は由比ヶ浜の膝裏に手を回して由比ヶ浜を持ち上げた。由比ヶ浜と俺のが繋がっている場所が丸見えだ。

「ひ、ヒッキー!?!」

「ほらここしろよ。小便」

「出来ないよ！降ろして、トイレに行かせて！」

「駄目だ、ここでしろ。ほら早くしないと誰かに見れるぞ？」

「ううう……」

ほら反抗的だ。ビッチ奴隷ならご主人様の命令には素直に聞くべきだろうか！俺は由比ヶ浜を持ち上げたまま腰を突き上げた。

「おらー！」

「あひや♡ら、らめえ♡おひいつこ、でりゆるううう♡」

「さっさと出せよ。手伝ってやるよ！」

「そ、そこ押さないで！ぐりぐりらめえてえええ♡」

俺は由比ヶ浜の右足を降ろして、空いた右手で由比ヶ浜のお腹の下辺りを押して圧迫した。膀胱を刺激されて小便がしたくてしようがないだろう。

それでも由比ヶ浜は必死に耐えた。もし下を誰かが通っていたら自分の小便が引つ掛かるかもしれないからだ。

その引つ掛かるのが教師だったら屋上にやってくる可能性があるからだ。

「おらおらー！」

「ら、らめえ♡」

「これならどうだ？……ふう〜」

「あひやあ!?!……あ、あああああ！」

俺は由比ヶ浜の耳に息を吹き掛けた。いきなり耳に息を吹き掛けられた由比ヶ浜は力が抜けえて、ついに小便を屋上から撒き散らしてしまった。

「と、止まってええええ！」

「すげえ……出ているな」

「ら、らめえええ♡」

由比ヶ浜は小便を出してしまった事で意識が飛び掛けていた。マシンの締めまりが強くなった。そして小便を全部、出し切った由比ヶ浜は意識がまだ戻っていなかった。

俺は由比ヶ浜を一旦降ろして服のボタンとブラを外して同学年で

は他にはいないと思われる巨乳を露にした。

「呆けている場合か！」

「うぎい!？」

「しつかりとマンコを締め付けろ！」

「ああっ♡んあっ♡ふぎい♡」

俺は腰を激しく由比ヶ浜の尻に叩き付けながら乳首を思いつきり引っ張ってやった。痛みで由比ヶ浜の意識は復活してマンコを強く締め付けてきた。

やはり由比ヶ浜は痛みを与えれば与えるほど感じるドMのビッチだったんだ。ならもつといじめてやらないとな。

「しつかりとマンコを締めろよ！」

「うひい♡んあっ♡ひゃあ♡」

「おら！おら！」

「ひいひいひい♡」

由比ヶ浜は乳首を引っ張られながらチンコでマンコを奥の方まで突かれているのに感じていた。本来なら痛がつて嫌がるはずなのに。でも由比ヶ浜は感じ続けていた。調教したのは俺だけど、ここまで来るうちよつと引くな。

「おら！由比ヶ浜、気持ちいいか？」

「はいいい♡ぎもぢいですううう♡」

「これはどうだ!？」

「ふぎい♡」

俺は由比ヶ浜の尻に平手打ちをお見舞いしてやった。由比ヶ浜の尻には俺の手形が赤くくつきりと残っていた。

「ほら！ほら！」

「ひぎい♡うぎい♡」

俺は連続で尻に平手打ちをお見舞いしてやった。平手打ちの振動がマンコに届く締め付けが強くなった。それに潮も噴き続けた。

由比ヶ浜の下には愛液で出来た水溜りが出来てしまっていた。きつと昼休憩にここに来た人間は驚くだろうな。

「由比ヶ浜！射精るぞ！」

「あっ♡んんっ♡ああんっ♡」

「で、射精るー!」

「あ、あああああ♡」

俺は由比ヶ浜のマンコの一番奥に射精して精子を注いでやった。由比ヶ浜は絶頂したようで、マンコが俺のチンコを締め付けてきた。俺から精子を搾り取ろうと蠢いている。これでビッチじゃないとありえないだろ?俺がゆっくりと由比ヶ浜から離れるとマンコからは精子が逆流して足を伝って屋上に落ちていた。あとで綺麗にしておかないと。

「ほら由比ヶ浜。ちゃんと綺麗にしろ」

「はひい……はむっ……じゆるるるっ」

「おおおお……また射精る!」

「んんっ?!?……んぐっ……んぐっ」

由比ヶ浜のフェラが気持ちよくてすぐにまた射精してしまった。最初の頃より格段にフェラが上達し、精子を零さずに飲む事が出来るようになったんだな由比ヶ浜。

でも気持ちよくてまた勃起してしまった。そろそろ終わらせないと次の授業が始まってしまう。

それに由比ヶ浜が保健室に行っていないと由比ヶ浜を心配しているクラスメイトへの説明が面倒になるだろう。

そもそも由比ヶ浜に誤魔化す事が出来るかどうか怪しい。こいつの成績でよく総武に入学できたな?

「由比ヶ浜。最後だ、股を開け」

「は、はいっ♡」

「いくぞ……」

「うひい♡」

今度は後ろからではなく由比ヶ浜と向き合うようにマンコにチンコを挿入した。由比ヶ浜は挿入しただけで絶頂してしまったようだ。先ほどから潮を噴き続けている。

「ちゅっ……ちゅううう……ちゅっ」

「ひ、ヒツキー!ち、乳首……らめえ♡」

「ちゅうううう」

「ひゃあああああ♡」

俺は由比ヶ浜の乳首に吸い付きながら腰を激しく動かした。それだけでまた由比ヶ浜は絶頂した。どれだけ絶頂すれば気が済むんだ？

由比ヶ浜の顔は連続の絶頂で目の焦点が合っておらず、腰にも力が入っていないように足がガクガク震えていた。

「由比ヶ浜！しっかりとマンコを締めろよ」

「は、はひい♡」

「ちゅっ……ちゅううう」

「あっ♡んんっ♡ああんっ♡」

由比ヶ浜は腰や足に力が入っていないのにマンコだけは力強く締め付けてきた。そんなに締め付けられると限界だ。

「由比ヶ浜！射精るぞ！」

「ああっ♡あんっ♡んんっ♡」

「で、射精る！」

「あ、あああああ♡あしゅいのらくしやんっ♡」

最後の射精に由比ヶ浜は気を失った。面倒だけど、俺は屋上を綺麗にした後で保健室に由比ヶ浜を運んだ。幸いに保健室に先生がいなかった。

もし居たら俺が由比ヶ浜を運んだ事がクラスメイトにバレていただろう。本当に世話が掛かる奴隷だ。

もつともつと由比ヶ浜結衣をビッチにしてやる。もう俺以外には満足出来ない体にするのもいいかもしれない。

「次はもつと人がいる所でするのもいいかもしれない……」

次はバレるかバレないかのギリギリを攻めてみるものいいかもしれない。バレた時の由比ヶ浜の反応が楽しみだ。

俺は由比ヶ浜を保健室に運んだ後、しつれと次の授業から出たけど先生に説教されてしまった。当然だな。

やはりガハマとデートをするのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は今日、人生で初めてのことに挑戦する。これまでこんなことが出来るとは思ってみなかつたからだ。今も心臓が破裂しそうなくらい早く動いている。それにしても遅いな。早く来いよ！

駅前で集合にしておいたけど、そうする必要はなかつた気がする。

「ヒツキー！ご、ごめん。遅くなつて……」

「由比ヶ浜。遅いぞ」

「ご、ごめん……服選んでいたら時間になつていたらか……」

「ならさつさと行くぞ」

「う、うん！」

俺は今から由比ヶ浜とデートする。女子とお出掛けなんて！妹の小町以外とは初めてだ！ヤバい、やっていけるか不安だ！

由比ヶ浜からのデートのお誘いだから断つても良かったけど。暇だったので誘いには乗った。ただし俺から条件を由比ヶ浜に言っておいた。

「由比ヶ浜。ちよつと」

「ヒツキー？」

「スカートを捲り上げろ」

「ご、ここで!？」

「早くしろ」

「う、うん……」

俺は由比ヶ浜を人気がない場所に連れ込んでスカートを上げさせた。由比ヶ浜はゆつくりとスカートを捲り上げた。

そして由比ヶ浜のスカートの中が露になった。由比ヶ浜はパンツを履いていなかった。これが俺がデートの条件だ。

デート中はパンツを履かない。最初はデートを断るつもりだったけど、由比ヶ浜が頷いたのでこうしてデートをする羽目になった。

「んっ♡ひ、ヒツキー……」

「濡れているな。流石はビツチだな？パンツを履いていないことに興

奮しているのか？」

「ひ、ヒツキーが履いてくるなって……」

「言われたから普通するか？」

俺は捲くり上げられたスカートの中に手を伸ばして由比ヶ浜のマンコを触れた。由比ヶ浜のマンコはすでに濡れており、かなり興奮していた。

糸が引くほど濡れているとか、ビッチの鏡だな。俺は由比ヶ浜のクリトリスを摘み、マンコに指を挿入して出入りを繰り返した。

「ひ、ヒツキー。ら、らめえ♡」

「どうした？気持ちいいのか？」

「う、うん。で、出ちやうから……んんっ♡」

「ならここで出せ！」

「ひいひいひい♡」

由比ヶ浜は立ったまま絶頂して潮を噴いた。足はガクガクして産まれたての小鹿のように震えていた。由比ヶ浜の足元には愛液で出来た水溜りが出来ていた。

「最高に興奮させてくれるな。ビッチが！」

「へ？うひゃあ♡」

「のおおお!!」

俺は由比ヶ浜の片足を持ち上げてからマンコに勃起したチンコを挿入した。由比ヶ浜のマンコは挿入ただけで俺のチンコをギュウギュウに締め付けてきた。

由比ヶ浜は挿入されただけで絶頂してしまった。潮を噴きまくっている。

「ああっ♡うひい♡ああんっ♡」

「由比ヶ浜。少し静かにしろ！」

「ら、らてえ♡んああっ♡」

「この……んんっ」

「んんっ♡」

俺は由比ヶ浜の唇をキスで塞いだ。それでも俺は腰の動きを続けた。もっと激しく動かした。由比ヶ浜のマンコは突かれる度に潮を

噴出して腰の動きが止められない。

「由比ヶ浜！で、射精るぞ！」

「んんっ♡あひゃあ♡あんっ♡」

「射精る！うっ……」

「ああああああ♡」

俺の射精と同時に由比ヶ浜は絶頂した。由比ヶ浜のマンコは俺のチンコをギュウギュウに締め付けてきた。流石はビッチだ、どんだけ精子が欲しいんだ？

「ビッチが精子を零したら駄目だろ」

「え？なに……」

「ほらこれでも啜えている！」

「あひゃあ♡」

俺は由比ヶ浜の空いたマンコにバイブを挿入した。そして紐でバイブが落ちないように固定した。しかもこのバイブはリモコンで振動をいつでもONにすることが出来て、振動の強弱も自由にすることが出来る。

「ほら由比ヶ浜。デートをするぞ」

「ま、待って……腰が抜けて」

「ならフェラでもしろ」

「う、うん……はむっ……じゅるるるっ」

由比ヶ浜が腰が抜けてしまい、動けないのでお掃除フェラをやらせた。由比ヶ浜のフェラは気持ちがいいんだよな。俺の指導がいいのか、チンコの先から玉まで綺麗に舐め取ろうとする。

「じゅるるるっ……れろっれろっ」

「気持ちいいぞ。もっと喉奥まで啜えろ」

「ちゅっ……れろっ……じゅるるるっ」

「で、射精る！」

「んんっ!?!んぐっ……んぐっ」

俺は射精する時に由比ヶ浜の頭を掴んで思いっきり奥までチンコを啜えさせた。由比ヶ浜は驚いていたけど、俺の精子を零さずに飲み干した。

そこから俺は由比ヶ浜と少し歩いた。まだ腰が抜けてしまっている由比ヶ浜は俺の腕に必死に掴まり、移動している。

「ひ、ヒッキー……少しゆっくり歩いて」

「どうして俺がお前に合わせないといけないんだ？」

「だ、だってヒッキーがあそこでするから……」

「ビッチが何を言っているんだ？」

「び、ビッチじゃないし！」

どう見てもビッチだろう？人影がない場所で簡単に股を濡らして開いて犯されたんだぞ？ビッチの鏡じゃないか！

今だって嫌がっている素振りはしているもののバイブを外そうとはしない。完全にビッチじゃないか。

「声大きいぞ。誰かに聞かれてもいいのか？」

「うううう……」

「ほらさっさと歩け」

「わ、分かった……んっ♡」

俺はバイブの振動を『強』にした。すると由比ヶ浜は足を止めて涙目になりながら俺の方を見てきた。顔を左右に振って、歩けない事を訴えてきた。

俺は由比ヶ浜を再び人気のない場所に移動させた。内股でゆっくり歩くものだからスカートを捲りバイブの挿入された股を見せても良かったかもしれない。

「んんっ♡ひ、ヒッキー……」

「スカートを捲れ」

「う、うん……」

「大洪水じゃないか……これでビッチではないと？」

「んあっ♡ち、違う……」

俺は由比ヶ浜の股からバイブを抜いた。バイブは由比ヶ浜の愛液で酷く濡れていた。発情した牝の匂いが俺の鼻腔を刺激してくる。おかげで勃起してしまった。

由比ヶ浜はバイブが抜けて気が抜けたのか、そのままコンクリに座り込んでしまった。

「はあ♡……はあ♡……はあ♡」

座り込んだ由比ヶ浜の顔は真っ赤で目の焦点も定まっていなかった。余程、人前で絶頂したのが気持ち良かったんだろう。

「ひゃあ♡んんっ♡」

俺は由比ヶ浜の服を脱がしてブラを外して乳首を摘んだ。由比ヶ浜は気持ちよさそうに感じていた。人気がない場所とはいえ、服を脱いで乳首を摘まれて感じるとかビッチだろ、どう見ても。

「由比ヶ浜。ほら俺のチンコを気持ちよくしろ」

「う、うん……はむっ……じゅるるるっ」

「おおおお……！」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ……れろっ」

由比ヶ浜は自分の巨乳で俺のチンコを挟んで、チンコの先を口に咥えた。顔を上下にさせて、俺のチンコを最高に刺激してくる。

「で、射精るー！」

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

俺は射精の瞬間に由比ヶ浜の顔を掴んで思いっきりチンコを喉の奥まで押し込んだ。由比ヶ浜も最初こそ苦しんでいたけど、俺の射精した精子を零さずに全て飲み干した。飲み干した事を見せるために口を大きく開いて見せてきた。

「由比ヶ浜。尻をこっちに向けるんだ」

「うん……うひい♡」

「よく締まるー！」

「ああんっ♡」

由比ヶ浜は壁に手を付いて尻を俺の方に向けてきた。俺はそのまま勃起したチンコを由比ヶ浜のマンコに挿入した。由比ヶ浜のマンコはよく締め付けてきた。

少しでも気を抜けば射精してしまいそうだ。俺は腰を前後に動かして、由比ヶ浜のマンコを刺激した。

「ああっ♡んあっ♡んんっ♡」

「おらおら！気持ちいいんだろ!?!正直に言ってみろ！」

「う、うんっ♡ひつきーのおちんちんがこっんこっんって奥に当たるのっ♡」

「これでも自分はビッチじゃないと言えるのか!？」

「あたしはビッチじゃない!うひい♡」

俺は腰を激しく由比ヶ浜の尻に叩きつけた。これだけやってまだ自分がビッチじゃないと認めないとは筋金入りだな。

でも体は正直で俺のチンコで突く度にマンコからは愛液がドバドバと溢れてきた。

「で、射精るぞー!」

「あんっ♡あっ♡ひいひい♡」

「射精る!」

「ああああああ♡い、いぐううう♡」

俺の精子が由比ヶ浜の子宮に溜まっている。俺の射精すると由比ヶ浜は絶頂して、マンコは俺のチンコから精子を欲しがって蠢いている。

この瞬間だけは頭が真っ白になってしまふな。由比ヶ浜はまたしても腰が抜けたようで足に力が入っていないようだった。

「由比ヶ浜。行くぞ」

「は、はいいい♡」

俺は由比ヶ浜を少し綺麗にして精子の匂いが付かないように掃除した。そしてまた由比ヶ浜のマンコにバイブを挿入してデートへと向かった。

デパートで普通に服を買ったり、ラブコメ映画を見たりと多分、普通のデートが出来たと思う。そもそもデートなんてしたことないからな!

でも中々楽しめたと思う。最後に由比ヶ浜にハンカチをプレゼントしたらもの凄く喜んだ。何がそんなに嬉しかったんだ？

やはりガハマをビッチにするのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。高校入学の日に犬を助けて、高校生活が一ヶ月以上も遅れてボツチになってしまった俺だけど、犬の飼い主の由比ヶ浜結衣に無茶な頼みをした所、すんありと聞いてくれて、俺は病院で童貞卒業する事が出来た。

それからは由比ヶ浜をビッチにする事にした。会う度にセックスをして、見た目だけではない本物のビッチにしてやった。

それにしても由比ヶ浜は誰にも俺にされた事を言わなかったんだ？あれだけ酷い事をされれば、親や友達にでも話しても可笑しくはない。

だけど、由比ヶ浜はこれまで誰にも俺にされた事を喋っていない。

「比企谷君。先ほどからこちらをチラチラと厭らしい視線を送らないでくれないかしら？寒気が止まらないわ」

「……いや別にお前は見ていないし」

「なら由比ヶ浜さんを頭の中で犯すのは止めなさい」

「そんな事していないからな!？」

そもそも実際に犯しているわけだし。俺は2年に進級した際に現国の平塚先生に目をつけられて、奉仕部なる部と成立しているか疑わしい部活に強制入部された。

そこには2年では有名な毒舌令嬢の雪ノ下雪乃がいた。入部してからこいつから毒舌以外の言葉を聞いた事がない。

正直、耐えられなくなり適当な理由で由比ヶ浜を入部させた。俺と雪ノ下の中に居てもらい、俺への毒舌を回避しようとしたのだが……

「ひ、ヒッキー！最低だよー！」

「ええ、まったくくだわ。恥を知りなさい」

「……………」

雪ノ下に同調して俺を罵倒してくる始末だ。だからストレスが倍に膨れ上がった。俺はただ静かな高校生活を送りたかっただけなのに、毎日ストレスと戦わないといけないんだ!？」

「…………雪ノ下になにを同調しているんだ？」

「んひい♡んああ♡んんっ♡」

「聞いているのか!？」

「ふぎい!？は、はひい♡」

俺は由比ヶ浜をトイレに連れ込んで後ろから犯していた。尻を叩かれて喜んでいゝなんて、心までビッチになつたようだな。

本当に由比ヶ浜を見ていると壊れるまでイジメたくなる。でも由比ヶ浜に彼氏でも出来れば、きつぱりと関係を清算しようと思つていゝる。

「まったく奴隷の分際で主人に対して態度がなつていないな！」

「んひい♡だ、だつてヒツキーが学校では関係を隠すつて……んああああ♡」

「そうだつたな……でも!だからつて雪ノ下に同調するのは違うだろ!？」

「あんっ♡ご、ごめんさなさい……ああああ♡」

由比ヶ浜が長々と言い訳している時も俺は腰の動きを止めなかつた。俺の腰が由比ヶ浜の尻に当たる度にマンコがよく締め付けてくる。

それに胸を露出させているので、プルプルと震えて興奮させてくれる。

「で、射精るー！」

「い、いぐううう♡ひ、ひっキーのあしゅいのどくどく、ながれてくるしゆるうう♡」

「いいぞ由比ヶ浜……まだ射精るー！」

「んひいひい♡ああああ♡♡」

本当に毎回、由比ヶ浜の子宮への射精は気持ちがいいな。ストレスが精子と一緒に由比ヶ浜の子宮に流れ込んでいゝようだ。

「うぎい!？ひ、ヒツキー!？」

「お、さつきより締め付けてくる」

「お、おひりい……らめえ♡」

「そう言つて締め付けていゝじゃないか」

俺は由比ヶ浜の尻の穴に避妊用のゴムを指に装着して挿入した。

すると由比ヶ浜のマンコが先ほどよりも締め付けてきた。

アナルをイジメるとマンコの締め付けが強くなるんだよな。これでビッチじゃないとか嘘だろ？

「んんっ♡ああっ♡うぎいいい♡」

「もっと強く締め付けろ！」

「はひいいい♡♡」

「で、射精るー！」

「あああああ♡ひ、ヒッキーのあついのどぴゅどぴゅ、でているううう……！」

由比ヶ浜があまりにも締め付けるものだから射精が我慢出来ずに子宮の奥に射精してしまった。由比ヶ浜のマンコからチンコを抜くと二回分の精子が逆流してきていた。

由比ヶ浜は足腰に力が入らないのか、そのまま床に座り込んだ。俺は由比ヶ浜の顔にチンコを近づけた。

「はむっ……ちゅるるるるっ」

「おおおお……！いいぞ、由比ヶ浜」

「ちゅるるるるっ……ちゅるるるるっ」

「また射精るー！うっ……！」

「んんっ!?……んぐっ……んぐっ」

由比ヶ浜のフェラがヤバ過ぎてまた射精してしまった。由比ヶ浜は俺の精子を零す事無く全て、飲み干した。そして飲んだ証拠に口を大きく開けて見せてきた。

俺はそこに小便を出した。ちょうど、出したかったんだよな。由比ヶ浜は動かずに小便を口の中に貯めた。

「よし、飲め」

「んぐっ……」

「いいぞ由比ヶ浜」

「う、うんっ♡」

ビッチなら小便くらい飲んで当然だよな？それにしても由比ヶ浜の物欲しそうな表情はゾクゾクさせられる。もっとイジメたいと思う。

俺は由比ヶ浜の足首を掴んで、マンコを上に向けさせてからチンコを下に突き刺すように挿入した。

「うひひひひひ」

「おおおお………！締まるー！」

「のおおおお♡し、子宮、つぶれるうううう♡」

「その割には喜んでいるじゃないか！」

「うひひひひひ」

俺はチンコで由比ヶ浜の子宮を潰そうようにチンコをマンコの奥まで挿入した。チンコの先が子宮の中までに入ってしまったけど、別にいいか。

由比ヶ浜は気持ち良さそうだし、これくらいがビツチにとっては気持ちいいんだろう！俺はさらに腰を激しく打ち付けた。

「んひひ♡ほお♡んぎひひひひ♡」

「で、射精るー！」

「んひひひひひ♡ああああああ♡」

「搾られる………！」

由比ヶ浜のマンコは俺のチンコから精子の一滴まで搾り尽くそうとしている。由比ヶ浜から離れるとマンコからは俺が射精した大量の精子が逆流してきていた。

結構な量を射精したので、逆流してくる量も大量だ。今日はここまですでだ。最高に気持ち良かった。

それから俺は雪ノ下と付き合う事になった。一年の奉仕部の活動で俺に対して雪ノ下は信頼度が高まっていたようだ。

「またね比企谷くん」

「ああ、雪ノ下。また」

だからつとって俺たちの関係はそれほど変わっていない。罵倒されなくなつたので、ストレスは軽減したけどな。

奉仕部での活動を終えて部室を後にした俺はそのままトイレに向かった。ここは穴場で人は滅多に近づかない。

「んんっ♡んひひ♡のおおおお♡」

「おっ………由比ヶ浜、ちゃんとしているな」

「う、うんっ♡ヒツキーが来るまで、オナニーしていたよっ♡」
「いい感じに蒸れているな……」

トイレでは由比ヶ浜が半裸でオナニーをしていた。俺がそうするように命令していた。雪ノ下と付き合っているけど、俺は由比ヶ浜との関係を清算してはいなかった。

由比ヶ浜が俺から離れたくないと言ってきたから俺が飽きるまで犯す事にした。それは雪ノ下がセックスをさせてくれないからだ。

するのはいいけど、受験生の身分で不純性行為は許容出来ないようだ。だから卒業までお預けになった。なら由比ヶ浜を犯すしかないだろ!?

「いくぞ……!」

「うひい♡ヒツキーの奥まできたああ♡」

「流石はビッチだな。いい締め付けだ!」

「のおおお♡子宮の入り口、ノックされているううう♡」

俺はオナニーで絶頂寸前の由比ヶ浜のマンコに爆発寸前のチンコを挿入した。雪ノ下とはキス止まりなんだよ! 高校男子の性欲を舐めるなよ!

理性の怪物でも限界はあるんだぞ! 早く俺ので雪ノ下を女にしたいけど、今は由比ヶ浜で我慢だな。

「んあっ♡おほっ♡んひいひい♡」

「しっかりとマンコを締め付けろ!」

「はひいひい♡」

「いぞ由比ヶ浜」

俺はもつと激しく腰を由比ヶ浜の尻に叩き付けた。由比ヶ浜はしっかりとマンコを締め付けてきた。そろそろ限界が近いな。

「で、射精すぞ! 由比ヶ浜!」

「んひいひい♡のおおお♡」

「射精る! うっ……!」

「ああああああ♡いぐいぐいぐっ♡」

俺は由比ヶ浜の子宮の奥に大量の精子を射精してやった。由比ヶ浜のマンコは絶頂して、ギュウギュウに締め付けてきた。

そして俺のチンコから精子を吸い取るように蠢いていた。流石はビッチだ、どんだけ精子が欲しいんだよ。

「で、でりゆるううう……」

由比ヶ浜は気が緩んだのか、小便を出して床を汚した。足腰に力が入らないのか、俺が由比ヶ浜を支えた。そして俺は一度、腰を由比ヶ浜の尻から離してから一気に近づけた。

「うひい!? おおおお♡」

「また射精る!」

「んああああ♡ああああ♡」

最後の射精を終えて由比ヶ浜にチンコをお掃除フェラさせてから俺と由比ヶ浜は学校を出た。それから俺と雪ノ下、由比ヶ浜の関係は俺が雪ノ下と大学を卒業して結婚しても変わらなかった。

由比ヶ浜は俺の愛人として俺が飽きるまで犯し続けた。夫婦では出来ない変態プレイをたくさんしてきた。

由比ヶ浜結衣はどこに出しても恥ずかしくないビッチへとなった。これからもよろしく頼むぜ、由比ヶ浜。

やはりガハマの夜デートはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は今、夜の公園で由比ヶ浜を待っていた。今夜は由比ヶ浜と夜デートだからだ。と言っても普通の恋人がするようなデートではない。

食事をしたり、二人で歩いたり、プレゼントをしたりなどのイベントはない！これはデートと言う名の調教だ。最近、由比ヶ浜が慣れ慣れしい。

あいつの中で俺を事故に遭わせた事なんてもう消えているような態度で接してくる。変なあだ名まで付けてくる始末だ。

「ヒツキー！お待たせ！」

「遅いぞ。何していた？」

「ご、ごめん。服を選んでいたら遅くなって……」

「そうか。なら今からこれに着替えろ」

「これに？わ、分かった……」

俺は由比ヶ浜に紙袋を渡した。中には由比ヶ浜に着せるための服を用意しておいた。由比ヶ浜は公園のトイレに向かおうとしたので止めた。

「何、トイレで着替えようとしているんだ？」

「え？だってここじや着替えられないよ」

「ここで着替えるんだ」

「無理無理！誰かに見られちゃうよ！」

「この時間は誰も近くにはいない。早くしろ」

「う、うん……」

由比ヶ浜は自分が折角、選んだ服を脱いで俺から渡された服を着始めた。由比ヶ浜は入っている服を見て、驚いて俺と服を交互に見ていたけど、俺が睨むと渋々と服を着た。

「ひ、ヒツキー……ここ、これ」

「よく似合っているじゃないか。ビッチ」

由比ヶ浜が着ている服は全身タイツだ。ただし局部と胸だけ切り抜いてある上、ワンサイズ小さい全身タイツだ。ミッチリとタイツが

由比ヶ浜の体を締め付けているようで笑える。

「由比ヶ浜。お前、最近俺の事を彼氏と勘違いしていないか？」

「え？ち、違うの？」

「違うだろ！お前の犬の所為で俺が車に轢かれて学校生活を送れたんだぞー！」

「うっ……そ、それは……」

「それに対してお前は俺に謝罪しないといけないんだよ！」

「う、うん……うひい!？」

俺は由比ヶ浜に近づいて露出した胸を思いつきり掴んだ。乳首を立てて興奮しているようだった。まったくビッチだな。

素直にこんな服を着て、俺の言う事を聞くなんて、アホだな。

「誠意を見せるためにも俺の言う事を聞かないといけないよな？」

「う、うん……」

「そこは、『はい』だろ!？」

「は、はいーひぐっ……」

少し大きな声を出しただけで由比ヶ浜は涙目になっていた。俺は由比ヶ浜の涙を拭った。由比ヶ浜は俺の次に何をするのかビビッていた。

「悪い悪い。いじわるし過ぎたな。これも由比ヶ浜のためなんだぞ」

「わ、わたしのため？」

「そうだ。事故の原因の一端はお前だからちゃんと謝らないとな？」

「は、はい……じ、事故に遭わせてしまって、ごめんなさい」

由比ヶ浜は土下座で謝ってきた。その姿に俺はゾクゾクしたものを感じた。普段は馴れ馴れしい奴が俺の言う事を聞いて頭を下げる姿は最高に興奮する。

「由比ヶ浜。手を頭の後ろにして、股を大きく開け」

「は、はい。こ、これでいいですか？」

「ああ、いいぞ」

「うひい♡ああ♡んあっ♡」

俺は股を大きく開いた由比ヶ浜のマンコに指を挿入した。由比ヶ

浜のマンコはすでに大洪水になっており、滑りが良かった。これならもうチンコを挿入しても問題ないだろう。

「いくぞ。由比ヶ浜」

「ま、待って！うひひいい♡」

「キツいな……おらー！」

「ああ♡あんっ♡んひひいい♡」

俺が腰を由比ヶ浜に突き立てる度に股からは大量の愛液が溢れてきていた。由比ヶ浜の足元には雨でも降った訳でもないのに水溜りが出来ていた。

俺は由比ヶ浜のマンコに挿入した指を出したり入れたりを高速で行った。

「ああ♡んああ♡ひひいい♡」

「ほらほらもっと激しくなるぞ」

「ま、待って！ひゃああああ♡」

由比ヶ浜は盛大に絶頂して潮を噴き出さした。そして腰が抜けたのか、地面に尻餅を付いてしまった。体は軽く痙攣しており、絶頂の余韻を味わっているようだった。

流石はビッチだ！穴空き全身タイツを着て絶頂して潮を噴いて倒れこむとはな！

「由比ヶ浜。休んでいないで俺のチンコを舐めろ」

「は、はひい♡はむっ……じゅるるるっ」

「お、いいぞ。もっとだ」

「じゅるるるっ……じゅるるるるっ」

由比ヶ浜は起き上がって勃起した俺のチンコを啜えてフェラを始めた。歯をチンコに当たらないようにして、舌をチンコに絡めるようにして顔を前後に動かす。

これまでの調教は無駄ではなかったようだ。今夜で完璧に由比ヶ浜を俺の性奴隷に仕上げてやるぞ！

「由比ヶ浜！で、射精るー！」

「んんっ!?……んぐっ……んぐっ」

「全部、飲め！零すなよー！」

「んぐっ……んぐっ……の、飲んだよ」

由比ヶ浜は口を大きく開けて俺の射精した精子を飲み干した事を確認させた。ホント、毎回よく精子なんて飲めるよな。流石はビッチだ。

「さっさと尻をこっちに向ける」

「う、うん……うひい♡」

「おおおお……凄い締め付けだ!」

「ああ♡んひい♡ああんっ♡」

俺は由比ヶ浜にベンチの背もたれに手を付かせて、尻をこっち向けさせて後ろからマンコにチンコを一気に奥まで挿入した。

流石はビッチのマンコだけあってチンコを締め付けてくる圧迫感が強い。どんだけチンコに飢えているんだ?

俺が腰を突き出す度に由比ヶ浜のマンコは愛液をドバドバと溢れさせていた。

「由比ヶ浜。声が大きいぞ。誰かに聞かれるぞ?」

「ら、らめえ♡ひ、ひつきーのおちんちんが子宮をこっこっ……突くからああ♡」

「なら突かなければいいのか?」

「だ、だめえ!もつとガンガン突いてっ♡」

「いいぞ!おらおら!」

「んひい♡あんっ♡ああああ♡」

由比ヶ浜は声を我慢するどころか更に声が大きくなってきた。流石に近くに住んでいる人か近くを通る人が気が付くんじゃないか?

それでも俺は腰の動きを止めなかった。それどこか更に激しく動かした。そろそろ限界だな。

「由比ヶ浜!射精るぞ!」

「あんっ♡ああっ♡んああああ♡」

「で、射精る!うっ……!!」

「い、いぐううう♡ひゃああああ♡」

俺は由比ヶ浜の子宮の奥目掛けて精子を大量に注いでやった。由比ヶ浜の子宮は俺の精子で満たされている。俺が由比ヶ浜のマンコ

からチンコを抜くと精子が逆流してきた。

由比ヶ浜は腰が抜けたようでそのまま地面に座り込んでしまった。俺は汚れたチンコを由比ヶ浜の顔に近づけた。

「はむっ……じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「おおお……いいぞ、由比ヶ浜」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「射精るー！」

「んんっ!?……んぐっ……んぐっ」

由比ヶ浜は俺のチンコを咥えてフェラを始めた。そしてまたしても由比ヶ浜の口に射精した。由比ヶ浜は零さずに飲み干した。

二回も射精したのに俺のチンコはまだ元気いっぱいだった。由比ヶ浜の今の姿を見たらまた犯したくて元気になってしまった。

「由比ヶ浜。今度はお前が俺の上で動いてみる」

「う、うん……あひやああああ♡」

「ほら、動きが止まっているぞ?」

「う、うん……ああっ♡あんっ♡ひやあ♡」

俺はベンチに座り、由比ヶ浜は俺と正面を向いてからそり立つ俺のチンコの上から腰を下に落とす。必死になって腰を上下に動かして、俺のチンコを刺激してきた。

由比ヶ浜が腰を上下に動かす度に胸も上下に揺れてエロい。さて、そろそろ終わりにするか。

「んあっ♡うひい♡んああああ♡」

「由比ヶ浜!これで最後だ!しっかり受け止めろ!」

「は、はいいいいい♡」

「で、射精るー！」

「い、いぐううう♡ああああああ♡」

由比ヶ浜は俺が射精する瞬間に抱き付いてきた。これくらいなら許してやるか。そして俺は由比ヶ浜の子宮に二度目の射精をして、精子を注いでやった。

もし避妊薬を飲ませていなかったら由比ヶ浜は妊娠していただろう。

「うひい♡ひゃい♡んひい♡」

「由比ヶ浜？」

「……………」

由比ヶ浜はアへ顔で気絶した。絶頂の余韻が凄かったのだろう。俺は由比ヶ浜の顔に目掛けて小便を引っ掛けてやった。

一度、これやってみたかったんだよな。誰かの顔に小便を引っ掛ける。写真を何枚か撮っておくか。それにしても酷い顔だ。美人が台無しだ。

「おい由比ヶ浜？駄目だな……………」

「……………」

気絶して起きる気配がない。このまま放置して警察や付近の人に見つかると面倒だからな。仕方ない、運ぶか。

俺は汚い由比ヶ浜を綺麗にしてから由比ヶ浜を家まで送り届けた。流石は巨乳のビッチだ。胸が背中当たって主張が激しかった。

何を食べればこんだけ育つんだ？さっさと送り届けるか。俺は由比ヶ浜を送り届けた後、撮った写真を見返して興奮した。次は何をしようかな？

やはり私がビッチにされるのはまちがっている。

私、由比ヶ浜結衣は昨日、中学校を卒業した。来月から高校生活が始まる。始まるのが楽しみで早く学校に行きたい。高校では彼氏が出来るかな？

優しい人だといいな。犬とか好きだといいな。そんな事を考えているとチャイムが鳴った。誰か来たのかな？

「は〜い……あ、叔父さん！」

「やあ、結衣ちゃん。久しぶりだね」

「うん！久しぶり！」

玄関に立っていたのはパパのお兄さんで私にとっては叔父に当たる人だった。パソコン関係の仕事をしてあまり出歩かないのか、少しお腹が出ている。

昔からよく贈り物をくれるけど、視線が少し気持ち悪い。悪い人ではないのだけど、好きにはなれない。

「パパもママも居ないよ？」

「今日は結衣ちゃんの卒業祝いに来たんだよ」

「本当!？」

「うん。これ、前に食べたいって言っていた高級チョコだよ」

「やったー！」

私は叔父さんからチョコを受け取って家の中に叔父さんを入れた。今日はパパもママも居ない。パパは仕事だけど、ママは学生の時の友達と食事に行っている。

だから朝から暇していたので、叔父さんに話し相手になってもらおうかな。

「来月から結衣ちゃんも高校生か」

「うん、そうだよ。早く制服を着たいんだ」

「どこの高校なんだい？」

「総武だよ」

「進学校じゃないか。凄いね」

叔父さんの視線は嫌だけど、色々と話を聞いてくれるので楽しい。

チョコを食べながら叔父さんと話していると体が熱くなってきた。

それに股が濡れてきた。パンツを代えた方がいいよね。立とうとしたけど、体に力が入らなかった。

「ちゃんと効いたようで安心したよ」

「お、叔父さん？きやあ!？」

「やっぱり結衣ちゃんのおっぱいは柔らかいね」

「や、止めて！触らないで！」

叔父さんが私の背後に回って脇に腕を通して胸を触ってきた。抵抗しているけど、体に力が入らないので手を振りほどけない。

「あんっ♡んんっ♡ひい♡」

「結衣ちゃんが食べたチョコには僕が海外から取り寄せた媚薬が入っているんだ」

「び、媚薬？」

「女の人を気持ちよくしてくれるお薬だよ」

「んひい♡んあっ♡ああああ♡」

叔父さんに胸を触られているだけなのに変な声を抑えられない。それにどんどん股が濡れてきた。頭の中で変な気持ちがいっぱいになってきた。

「お、叔父さん！や、止めて！んひい♡」

「でも結衣ちゃんの体はもつとして欲しいようだけど？」

「そ、そんなこと……ない！」

「なら……」

「うひい!？」

叔父さんがいきなりパンツの中に手を入れてきた。股に触れて指を私の顔の前に持ってきた。そこには糸引く何かがあった。

「結衣ちゃんの体は感じて、こんなにも愛液で股を濡らしているじゃないか」

「いやあ！」

「叔父さんがもつと気持ちよくしてあげるよ」

「うひい♡」

叔父さんの指が私の膣内に入ってきた。ゴツゴツとした指が膣内

をほじくり返している。気持ち悪いはずなのに、体がどんどん熱くなってきた。

知らない気持ちが次々と溢れて、私の体を変えられているような気持ちになってきた。

「ひゃああああああ♡……はあ……はあ……はあ」

「イツたね」

「い、いくう……はあ……はあ」

「絶頂つてやつだよ。気持ちいいと女の人はこうなるんだよ」

そ、そんな!?あれが気持ちいいなんて信じられない。は、早くパパやママに知らせないと!私は力が入らない体を無理して動かそうとした。

「結衣ちゃん。自分からお尻を向けてくれるなんて、叔父さん嬉しいよ」

「さ、触らない!」

「結衣ちゃんの股の匂い……すん……すん」

「か、返して!」

叔父さんのパンツを無理やりに脱がされた。叔父さんは自分の顔にパンツを押し付けて、匂いを嗅いでいた。今のうちにスマホで連絡を!

「結衣ちゃんの処女、叔父さんが奪ってあげるね」

「え?う、嘘……」

「き、キツイ……流石は処女マンコだ」

「痛い痛い痛い!叔父さん、抜いて抜いて!」

叔父さんに処女を破かれた。股が裂けてしまう!早く離れないと!痛みで涙が出てきたけど、早く叔父さんから離れないと!

でも叔父さんが私の腰を掴んで離れなれない。叔父さんが腰をゆつくりと動かしてきた。

「結衣ちゃんは初めてだからゆつくりとするね」

「叔父さん!早くそれ、抜いて!」

「それじゃなくて、おちんちんかチンコだよ。そうだね。結衣ちゃんが——つて言えたら抜いてあげるよ」

「そ、そんな……」

叔父さんは私に卑猥な事を言わせようとしている。そんな事は言いたくないけど、言わないといつまでも抜いてくれない。

「ゆ、結衣の処女マンコから叔父さんの……極太おちんちんを抜いてください……」

「いいよ……なんてね!」

「うぎい!?ど、どうして!?!」

「だって、結衣ちゃんのマンコ、気持ちいいからもっとしたいんだね」

叔父さんはそう言つて腰を先ほどより強く激しく打ち付けてきた。膣内を抉るようにおちんちんを奥まで挿入してきた。

どうして私がこんな目に逢わないといけないの?何か悪い事をしたの?こんな悪夢が早く終わるように願うしかない。

「ほらほら結衣ちゃん。声を出してもいいんだよ」

「ああ♡んあっ♡ああんっ♡」

「いい声が出てきたね」

「んんっ♡ああっ♡んひいい♡」

叔父さんのおちんちんが私の膣内を出たり入ったりする度に声が出てしまう。必死に我慢しているけど、どうしてこんな卑猥な声が出ちゃうの!?

「叔父さん。そろそろ射精そうだよ」

「え?な、何!?!」

「で、射精する!」

「ひゃああああああ♡あ、熱いいい……」

叔父さんから何か熱いものが大量に流れ込んでくる。それが頭を真っ白になってしまった。これって何なの?

「お、叔父さん。これは……?」

「これって……ザーメン、精子だよ」

「え?それって赤ちゃんの……」

「そうだよ」

「い、嫌あ!抜いて!赤ちゃん出来ちゃう!」

私は必死に暴れて叔父さんから離れようとしたけど、媚薬で体に力

が入らないし、叔父さんにガツチリと抑えられて動けない。

でも早く離れて叔父さんの精子を外に出さないと赤ちゃんが出来ちゃう。高校にだつてまだ行っていないのに。

叔父さんの子供なんて産みたくない！私は何とか力を出して暴れた。

「そんなに暴れないの。これ何か分かる？」

「お薬？」

「そうだよ。アフターピル、避妊薬つてものでね。これを飲むと赤ちゃんが出来ないんだよ」

「そ、それちようだい！」

私は必死にお薬に手を伸ばした。早く飲まないと赤ちゃんが出来ちゃう！だけど、叔父さんは避妊薬を渡してはくれなかった。

でも叔父さんから離れてくれた。早く膈内に射精された精子を出さない。すると叔父さんが床に仰向けになった。

「ピルは結衣ちゃんが叔父さんを気持ちよくしてくれたら渡してあげるよ」

「そ、そんな……」

「ほらほら早くしないと妊娠しちゃうよ？」

「ううう……」

私は仰向けになつている叔父さんに跨り、腰を叔父さんのおちんちんにゆっくりと降ろした。叔父さんのおちんちはさつきと同じで太く硬かった。

「うひい!？」

「お薬が欲しくないの？結衣ちゃん」

「のおおおおお♡ふ、深いっ♡」

「叔父さんのチンコの先が結衣ちゃんの子宮の入り口にキスしたよ！」

叔父さんの言うとおりで叔父さんのおちんちんが私の子宮の入り口に当たった。そうしたら体に電気でも流されたような感覚があった。

「ああんっ♡うひい♡んあっ♡」

「いいよ結衣ちゃん。もつと叔父さんにえつちな声を聞かせてよ」

「ひゃあ♡んひい♡ああつ♡」

「ほらほら!もつとえつちな声を出していいんだよ!」

「あんっ♡んんっ♡ああああ♡」

叔父さんのおちんちんが私の子宮の入り口に何度も当たる度に声が我慢出来なくなってきた。こんな声、近所の人に聞かれたら大変なのに!-

でも自分から腰を振って、おちんちんを感じる度に変な気持ちगतくさん溢れてきた。

「結衣ちゃんも自分から腰を振って、セックスが好きになってきたかな?」

「こ、こんなの好きになれ……ない!」

「結衣ちゃんは強情だな。これなら……:…:どうかな!」

「ふぎい♡んああああ♡ひゃああああああ♡」

叔父さんが下から激しく突いて来た。何度かおちんちんの先が子宮の中に入ってきた。気持ちよくなるとなりたくないのに気持ちよくなってしまう。

「結衣ちゃん。また射精るよ!」

「ま、待って!もういやあ!」

「で、射精る!」

「ああああああ♡いやあ……」

また叔父さんの精子が私の子宮に注がれた。前より量が多い。早くお薬を貰わないと赤ちゃんが出来ちゃう!

「はい。結衣ちゃん……んんっ」

「んんっ!?!……んぐっ」

叔父さんに口移しでお薬を飲まされた。初めてだけではなくファーストキスまで奪われるなんて、最悪だ!早くパパやママに言いつけてやる!-

「パパとママが帰ってくるのは明日の昼過ぎだからそれまで楽しめるね!」

「え……」

ど、どうしてパパとママが帰ってくる時間を知っているの!?!それにそれまで楽しめるってどう意味なの!?!

それから私は叔父さんに部屋まで運ばれて朝までたくさん犯された。気がついた時にはパパとママが帰ってくる時間になっていた。

「そ、そんな……」

スマホにメールが来ていたので開けてみると叔父さんから写真が添付されていた。それは私が叔父さんに犯されている写真だった。

『パパとママにバラすとネットに写真を流すよ?』

もしこの写真がネットに流れたら簡単に住所とか晒されて周りから白い目で見られるかもしれない。

この日、私はベッドで布団を頭から被って疲れるまで泣き続けた。

「いらつしやい。結衣ちゃん」

「……お、叔父さん。写真、消してください」

私は一週間後に叔父さんが住んでいるマンションに行って、写真を消すように頼んだ。そこでまた犯されるのであった。

それから叔父さんの調教が始まった。もう私は叔父さんからは逃げられない。

やはり私がビッチにされるのはまちがっている。 続

私、由比ヶ浜結衣は2年に進級して出来た友達のゆきのんが住んでいるマンションで金曜日に毎週勉強会をしている。

ゆきのんは教えるのが丁寧で分かり易いけど、答えが間違っているとかよつと怖い。でもゆきのんのおかげで勉強が出来るようになった。

今度のテストで高い点数を取ってヒッキーを驚かせてやるんだ！私の事を勉強出来ないビッチって思っているからだ！

「ゆきのんー！」

「ちよ、ちよつと由比ヶ浜さん……」

「ここーここ、教えて！」

「わ、分かったから抱きつかないで」

ゆきのんやヒッキーという時間が一番楽しい。もちろん優美子や姫菜とも楽しいけど、一番はゆきのんやヒッキーという時間だ。

勉強会が終わったらゆきのんの手料理を食べて一緒にお風呂に入って寝るまでたくさんお喋りをするのが金曜日の夜の楽しみになっている。

「また月曜日にね。由比ヶ浜さん」

「うん！またね！ゆきのん！」

そして土曜日の昼過ぎまで勉強会をしてゆきのんの部屋を出る。そして隣の部屋に鍵を使って入る。そして奥の部屋に入る。

「いらつしやい。結衣ちゃん」

「お、叔父さん……」

部屋には私の初めてを色々奪っていった叔父さんがパソコンの前で作業をしていた。ここは叔父さんが借りているマンションの部屋だ。

まさかゆきのんと同じマンションでお隣だったなんて、信じられなかった。でも叔父さんの苗字はパパと違うのでゆきのんには私の叔父さんが住んでいる事は知られていない。

「それじゃあ、スカートを捲って」

「……………」

「スケスケパンツが似合っているね」

叔父さんがここに来る時に履くように指定してきたパンツだ。スケスケで絶対に他の人になんて見せられない。

「叔父さんに犯して欲しくて堪らないようだね」

「そ、そんな事ない！」

「これでもかい？」

「うひい!？」

叔父さんがいきなりパンツの中に手を入れてマンコに触れてきた。そして叔父さんが指を顔の前に持ってきた。指には愛液がべったりと付いていた。

「ほら結衣ちゃんのマンコはこんなにも発情しているじゃないか」

「ち、違う！叔父さんがいきなり触るから！」

「触る前から濡れていないとパンツにそんな染みはないと思うけど？」

自分では見えないけど、パンツが濡れているのは感じていた。叔父さんの部屋に来ると独特の匂いで股が濡れてしまう。

叔父さんに犯されるようになって一年以上が経った。それまでにたくさん犯された。体を縛られたり、目隠しされたり、大人のおもちやを体にくっ付けた状態で何時間も放置された事もあった。

「それじゃあ、結衣ちゃん」

「……………はむっ……………じゅるるるるっ……………じゅるるるるっ」

「おおおお！やっぱり結衣ちゃんのパイズリは最高だね」

「じゅるるるるっ……………じゅるるるるっ」

叔父さんが椅子に座っている状態でズボンのチャックを下ろして勃起したおちんちんを出した。それを私は口に咥えて顔を上下に動かした。

それだけではなくブラを外して胸で叔父さんのおちんちんを挟んで顔を動かした。叔父さんは私のパイズリフェラが好きで最初にやらせて来る。

「じゅるるるるっ……………」

「結衣ちゃん！で、射精るよ！」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「射精る!!」

「んんっ!?……んぐっ……んぐっ」

叔父さんのおちんちんから勢いよく精子が射精された。私はそれを口で全部、受け止めた。そして喉の奥へと流し込んだ。

叔父さんが精子を飲まないと言ってきたから飲むしかなかった。粘々で苦い精子が喉に絡み付くので私は嫌いだ。

「ちゃんと叔父さんの精子を飲み込んで偉いね結衣ちゃん。ほら次は？」

「お、叔父さんのおちんちんでわ、私のビッチマンコを舐けてください……」

「いいよ！ほい！」

「うひい♡」

私は叔父さんにお尻を向けてマンコを広げてみせた。恥ずかしいセリフを言わせてから挿入してきた。後ろからおちんちんを挿入されると子宮の入り口におちんちんの先が当たる。

それをされると私は簡単に絶頂してしまう。今だって一突きで軽く絶頂してしまった。絶頂した所為でお漏らしをしてフローリングの床に水溜りを作ってしまった。

「ほらほら！どんどんいくよ！」

「んあっ♡ああ♡うひい♡」

「結衣ちゃんのビッチマンコが気持ちいいと締め付けてくるよ！」

「ああっ♡んああああ♡ひゃあ♡」

叔父さんは私の両手首を掴んで腰をお尻に激しく叩きつけてきた。腕を掴まれているので口が塞げずにえっちな声がどんどん出てしまう。

叔父さんがおちんちんを何度も子宮の入り口に叩きつける度に愛液がドパドバと溢れてきた。

「そろそろ射精するよ！結衣ちゃんはどこに欲しい？」

「し、子宮にっ♡わ、私のビッチマンコの奥にくださいっ♡」

「いいよ！で、射精る！」

「ひゃあああああ♡あ、あしゅい♡」

叔父さんのおちんちんから精子が私の子宮に注がれている。子宮が広がるほどの量が一度に注がれて、私はまた絶頂した。熱くドロドロの精子が私の子宮に注がれている。

「ほら結衣ちゃん。んっ」

「んんっ♡んぐっ……」

叔父さんが避妊薬を口移しで渡してきた。叔父さんとは何度もキスしてきた。私の口の中に入れてきて歯茎を舐めてくる時もあったし、唾液をたくさん飲まされた時もあった。

「結衣ちゃん。そろそろ激しくするよ！ほい！」

「ああんっ♡ひいいい♡のおおお♡」

「ほら結衣ちゃんの弱点をいじめてあげるよ！」

「ああっ♡んひゃああああ♡ああああああ♡」

叔父さんのおちんちんが私のマンコが一番感じる場所ばかりを当ててきた。私はこれをされると嫌でも感じさせられる。これまで我慢してきたけど、こればかりは我慢が出来ない。

「いや〜一週間ぶりだから最高だね」

「あああ♡」

「結衣ちゃんもそう思うだろ？」

「……………」

叔父さんのおちんちんが私のマンコから離れると射精した精子がマンコから溢れてきた。叔父さんは毎週、呼び出して私で性処理をしている。

嫌だけど、恥ずかしい写真で脅されて仕方なく言う事を聞いている。でないとパパやママに迷惑を掛けちゃう。

「ほら結衣ちゃん」

「はむっ……じゅるるるるっ……じゅるるるるるっ」

「おおおお！結衣ちゃんの口マンコ、いいよー！」

「じゅるるるるるっ……じゅるるるるるるっ」

叔父さんがおちんちんを顔に近づけてきたので、私はフェラを始め

た。前に雑誌で読んだけど、男の人は一回射精すれば落ち着くと書いてあったけど、叔父さんは3回くらい射精しないと落ち着かない。

「結衣ちゃん！で、射精する！」

「んんっ!?…………んぐっ…………んぐっ」

「ちゃんと精子を飲んで、偉いね」

「……………」

叔父さんは優しく私の頭を撫でてくる。散々私の事を犯しておいて、こんな時だけ優しいの？私を襲った怖い叔父さん、私の事を褒めてくれる叔父さん。

どっちが本当の叔父さんなの？私はバカだから分からなくなる。考えるだけ無駄なのかもしれない。ただ受け入れればいいのかもしれない。

「少し休憩しようか」

「お、叔父さん！」

「うん？どうしたんだい？」

「ま、まだ出来るから……………いいよ？」

「結衣ちゃん！君って娘は！」

「ぎゃあ!？」

叔父さんが私の体勢を仰向けからうつ伏せにした。そして後ろからマンコにおちんちんを挿入した。それも一気に子宮の入り口まで。

「うひゃああああああ♡」

「しっかりとビッチなつて、叔父さん嬉しいよ！今日はとことんやろうね！」

「ああんっ♡んあつ♡あああ♡」

「自分でビッチになったと認識するんだよ！」

私は認めちゃった。自分がビッチになった事を。でも認めた瞬間に心の中のモヤモヤがすつと消えたような気がした。

中学3年から成長した胸を男子がチラチラ見えてきて、厭らしい視線が嫌いだっただ。女子からは男子を誘惑しているとか言われた事もあった。

「結衣ちゃん！ビッチなりたて、一発めだよ！」

「ああっ♡うひい♡んああああ♡」

「で、射精るー!」

「ひゃああああああ♡お、叔父さんのあしゅいのがたくしゃんっ♡」
叔父さんのおちんちんが大きくなって精子を私の子宮に射精した。
子宮が広がるほど量の精子が注がれている。

前まではそれが嫌いだったけど、今では気持ちいいと感じちゃう。
もっと感じて叔父さんを喜ばして嫌な事なんて忘れればいいんだよ。

「叔父さんっ♡もっ♡とちようだいっ♡」

「結衣ちゃん…もうビッチじゃないか!叔父さんは嬉しいよ!」

「んああああ♡ひゃあ♡のおおお♡」

「えっちで可愛いよ!結衣ちゃん!」

叔父さんが嬉しそうに頭を撫でてくれる。それと同時に腰を激しく私に打ち付けてきた。上から下に突き刺すようにおちんちんを動かしてくる。

まるでおちんちんで子宮を潰すようにしくくれる。少しおちんちんの先が子宮の中に入ってきた。

「結衣ちゃん!で、射精るよ!どこがいい!」

「し、子宮の中がいいいい♡」

「で、射精るー!」

「いくいくいくっ♡ああああああ♡」

叔父さんの精子が私の子宮にまた注がれている。どうして叔父さんの精子の量はこうも多いのだろうか?子宮が射精された精子で膨らまされている。

「結衣ちゃんもイツたようで叔父さん、嬉しいよ」

「ああ♡」

「気持ちよくて漏らしちゃったね」

「とまらないいい♡」

高校生になってお漏らしをしてしまった。でもこれも気持ちよくてどうでもいいよね?それから少し休憩してまた私は叔父さんに犯してもらった。

「もう結衣ちゃんは叔父さんの専用ビッチだね」

「うんっ♡叔父さん専用のビッチになるから叔父さんも私以外の女の子を相手にしないでね」

「分かっているよ。ほら続きはベッドでしようね」

「うんっ♡」

私は叔父さん専用のビッチと認めた。だけど、気分は最高に気持ちよかった。次はどんな事で叔父さんは私を気持ちよくしてくれるかな？

もつとエッチな娘になって叔父さんを喜ばせないと！

やはり私がビッチにされるのはまちがっている。終

私、由比ヶ浜結衣は。パパの兄である叔父さん専用ビッチになる事にした。少し前までなら嫌でしようがなかったけど、今は違う。

叔父さんのおちんちんを受け入れてビッチと認めるだけで気分がいい。心のモヤモヤが晴れた。

それから叔父さんの私のビッチへの調教は激しくなった。スケスケパンツを履いての登校やバイブやローターを付けた状態での授業など気が狂いそうになった。

だってゆきのんやヒッキーや他の人にバレたらどうしようかと考えただけで絶頂してしまう。

「由比ヶ浜。俺、雪ノ下と付き合う事になった」

「由比ヶ浜さん。私、比企谷君と付き合う事になったの」

「……………」

ある日、ヒッキーとゆきのんからそんな事を言われた。だけど、別にどうでも良かった。叔父さん専用のビッチになる以前だったら家に帰って大泣きしていたかもしれない。

でも今の私には叔父さんが居る。叔父さんはいつも私を見てくれる。ヒッキーとゆきのんは時々、私を見ていない。

それが寂しくて悲しくなった。総武を卒業したらバラバラになっちゃおう。いつまでも仲良くは出来ない。

「ゆきのん、ヒッキー！おめでどう！」

私はそれくらいしか言えなかった。二人は相思相愛のカップルだと私は思う。二人が付き合うと言ってきた時、悲しいと思ったけどそれほどでもなかった。

そうだよ。私には叔父さんが居るんだから！私の恋人は叔父さんだから悲しくなかったんだ！

「叔父さん！」

「結衣ちゃん。いらっしやい」

「えへへ……………」

私は叔父さんの会ってすぐに抱きついた。叔父さんは抱き返して

くれた。暖かく安心する心地よさがあった。叔父さんの股間はすでに大きく張っていた。

「叔父さん……見てっ♡」

「洪水になってるね？」

「うんっ♡早く叔父さんのおちんちんで慰めてっ♡」

私はスカートを捲り上げて叔父さんにスカートの中を見せた。叔父さんの所に行くと考えただけでここまで濡れた。

それに叔父さんに抱きついた時に匂いを嗅いだのも濡れた原因の1つだと思う。早く叔父さんに犯されたい。

叔父さんの股間はさらに膨らんでいた。やった！私で叔父さんは興奮してくれたんだ！

「ひゃああああああ♡」

「今日は一段と感じているね？」

「うんっ♡だからもっと激しくしてっ♡」

「いいよ！結衣ちゃん！」

私はベッドでうつ伏せになって叔父さんは後ろから私を犯してくれた。おちんちんの先が私の子宮の入り口を何度もノックしてくれる。気持ちいい！

叔父さんのおちんちんがマンコに挿入されただけで愛液が溢れて止まらない。

「あんっ♡んんっ♡ああっ♡」

「結衣ちゃんのマンコ、すぐく締め付けてくるよ！」

「んあっ♡ああ♡ひゃああああ♡」

「で、射精る！うっ……」

「ああああああ♡いくいくいくっ♡お、叔父さんのせーしがたくしゃんれたあ♡」

叔父さんの精子が私の子宮にたくさん射精された。たくさん射精されたから子宮が膨らんじやった。叔父さんってば、興奮し過ぎだよ。

「叔父さんの溢れちゃったっ♡」

「結衣ちゃん。今日はホントにえっちだね」

「うんっ♡今日はパパとママ、遅いからたくさん出来るよ」

「そうか。たくさんいじめてあげるね」

叔父さんはそう言っただンボール箱を持ってきた。中にはバイブやローター、ローションなどが大量に入っていた。

今からあれらでいじめられると考えると興奮してきた。私はうつ伏せから仰向けになってマンコとアナルを出来る限り、広げて見せた。

「わ、私のマンコとアナルを叔父さんにいじめて欲しいですっ♡」

「ホント、姪っ子がこんなにもビッチになって、叔父さんは嬉しいよ！」

「ひゃああああああ♡きたきたきたああ♡」

「すごい締め付けだよ！結衣ちゃん！」

叔父さんは私の乳首にローターを貼り付けて、お尻の穴にアナルピースを挿入してからおちんちんをマンコに挿入してくれた。

一度にたくさん刺激で私は挿入されただけで絶頂してしまった。潮を叔父さんに掛けてしまったけど、叔父さんは気にする様子はないかった。

「結衣ちゃん！結衣ちゃん！」

「んひひひひひ♡んあっ♡あああ♡」

「結衣ちゃん！射精するよ！」

「あんっ♡ふあ♡ひゃああああ♡」

叔父さんは激しく腰を動かしてきた。おちんちんの先が子宮の入り口を何度も叩いてくる。その度に頭が真っ白になってしまう。

ゆきのんとピツキーが付き合う事になったのも忘れるくらい気持ち快楽が叔父さんが私にくれる。

「で、射精するー！」

「んひひひひひ♡んああああああ♡」

「し、搾られる……」

「んひひ♡ああ♡ひゃあ♡」

また叔父さんの精子が私の子宮に注がれる。子宮に入りきらない精子がマンコから溢れる。嫌な事が全部、気持ちいい事で塗り潰され

るような気分になる。

「叔父さん、大好きっ♡」

「結衣ちゃん……叔父さんもだよ」

「もっとしよ?」

「もちろんだよ。今日は気絶するまでするよ」

叔父さんは宣言通りに私が気絶するまで犯し続けた。最後の方の記憶が覚えていなかった。でも部屋が叔父さんの精子と私の愛液で臭くなっていた。

それから高校と大学を無事に卒業した私は叔父さんの部屋に住んでいた。これまでは通っていたけど、ちゃんと住んでいる。

「今日はずいに解禁日だね。楽しみかい?」

「うんっ♡この半年、ずっとしかったよ。叔父さんっ♡」

私は叔父さんと一緒にお風呂に入っていた。大きくなったお腹を抱えながら。私は妊娠した、叔父さんの子供を。

もちろんこの事はパパやママには言っていない。パパとママには大学卒業した時に羽目を外した時に誰かとして妊娠したと言っている。

最初、パパとママは反対したけど、叔父さんが説得してくれて産み事を許してくれた。

「叔父さん。早く妊娠したビッチマンコにおちんちんを挿入してよ」

「まったくママになってもビッチだね。結衣ちゃんは」

「叔父さんがしたんだよ?なら最後まで責任取ってよ」

「分かっているよ。いくよ?」

「き、きたあああ♡」

叔父さんのおちんちんが久しぶりに私の妊娠マンコに挿入された。たった一回、挿入されただけで絶頂してしまった。

それだけ叔父さんのおちんちんが久しぶりだった。この太さ、硬さ、長さは気持ちいい!

「こんにちはる赤ちゃん。パパチンコでご挨拶だよ」

「もう!叔父さん、変態」

「叔父さんの精子で妊娠する結衣ちゃんは叔父さん以上の変態だよと

思うけど?」

「そうだよ。だって、私はビッチなんだから!」

叔父さん専用のビッチ。それが今の私だ!ヒッキーに散々言われた。その通りになったけど、別にいい。

だって大好きな叔父さんのビッチになれたのだから。

「そろそろ激しくするよ。ほら!」

「うひい♡んひい♡ああんっ♡」

「ほらほら!どんどんいくよ!」

「あんっ♡んあっ♡うひいい♡」

叔父さんのおちんちんが子宮を何度も叩いてくる。その度に乳首から母乳が出てきてしまう。

「結衣ちゃん。もう母乳が出るんだね?」

「うんっ♡お乳の中にいっぱいあるのっ♡」

「なら叔父さんが少し吸ってあげるよ。ちゅうううう」

「うひいい♡ら、らめえ…あかちゃんのがなくなるうう♡」

叔父さんが私の乳首に吸い付いて母乳を飲んでる。赤ちゃんのための母乳なのに叔父さんが吸っちゃダメなのに!

でも叔父さんが私の母乳を吸っていると思うと気持ちよくて体が熱くなる。叔父さんは吸っている方とは逆の方を指で摘んで母乳を出させた。

「りよ、両方!らめええ♡」

「ほらほら!気持ちいいだろ?」

「うんっ♡い、いぐうううう♡ああああ♡」

あまりの快楽に私は絶頂してしまった。母乳は出るし、潮も盛大に噴き出した。絶頂でマンコが叔父さんのおちんちんをギュウギュウに締め付けている。

「し、締まる。射精る!」

「うひいい♡叔父さん精子で赤ちゃんもビッチにしてえええ♡」

「叔父さん精子で母娘でビッチになりなさい!」

「ひゃああああ♡あ、あかちゃんにおじさんせーしがあ♡」

赤ちゃんの部屋の子宮に叔父さん精子が大量に注がれてしまった。産まれる前に叔父さんの精子でビッチにされるなんて、贅沢な娘に育ってしまう。

でもそれも仕方ないよね。母親の私がこんなにもビッチなんだから。

「叔父さん……セーしでいくうううう♡」

「おおお……締まる締まる」

「叔父さん。射精し過ぎだよ……」

「結衣ちゃんが嬉しい事を言うものだから興奮してね」

叔父さんのおちんちんは射精したのにまだ固いままだ。どれだけ赤ちゃんに精子を掛けて変態にする気だろう？早く産まれて大きくなるんだよ。

叔父さんであり、パパが変態に調教してくれるからねっ♡その時、赤ちゃんが私のお腹を蹴った。早くパパに会いたいんだね。

それから赤ちゃんは無事に産まれてすすくと育った。中学を卒業する頃には私そっくりに育った。

「パパおちんちん、気持ちいい♡」

「叔父さんのおちんちんは気持ちいいでしょ？」

「うんっ♡ママが好きになるのも分かるっ♡」

私は今、叔父さんに娘と一緒に犯してもらっている。叔父さんのおちんちんで娘はビッチになってしまった。私の時より簡単にビッチになるなんて。

私のビッチは赤ちゃんと娘に遺伝していて安心した。叔父さんは歳をとったけど、まだまだおちんちんは元気いっぱいだった。

「母娘でとんだビッチだね！」

「叔父さんの所為だからねっ♡」

「パパの所為なんだからねっ♡」

私は娘と一緒になって叔父さんに犯されていた。たった一回犯されただけで娘はビッチになってしまった。流星は私の娘だと思う。

これからも私は娘と一緒に叔父さんのビッチとして生きていくんだろう。でもそれはビッチの私にとって最高に幸せな事だろう。

「叔父さん。私をビッチにしてっ♡」

三浦優美子

やはりあーしさんを慰めるのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。今日は総武高校の卒業式だ。今日で俺は高校生ではなくなる。そして四月から大学生生活が待っている。

本当に大変な高校生活だったよ。特に二年生の時が一番大変だった。奉仕部に強制入部させられて、戸塚、川崎の依頼をこなして職場見学に由比ヶ浜とのすれ違い。

夏休みは小学生のキャンプのボランティア、鶴見のいじめなど厄介事があった。そして夏休み明けの文化祭だ。相模の所為で俺が汚名を被る事になった。

そして修学旅行での戸部の海老名さんへの告白、葉山と海老名さんの告白阻止依頼でまたしても汚名を被り、雪ノ下と由比ヶ浜と喧嘩になった。

それからの一色の生徒会長への推薦いじめや他校とのクリスマスイベントなど落ち着かない日々を過ごした。

だけど、三年は何もなく平穩そのものだった。

今日が卒業式だろうと俺には殆んど関係がなかった。誰かと卒業の感動を分かち合う相手なんていない。帰っても両親や小町はいない。三人で旅行に行っているからだ。

俺は雪ノ下、由比ヶ浜とは別の大学を選んだ、由比ヶ浜は三人で同じ大学を目指そうとか言っていたけど、学力が三人とも違うのだ。

なら自ずと進路は別れるのは目に見えていた。それでもたまに会おうと言っていたな。俺はどっちでもいいのだけどな。

それは今はおいて置こう。俺は今、大変な事態になっているのだ。「ヒキオ。シャワーありがと……」

「お、おう。着替えは俺のですまん。それくらいしかなくて、でも新品だから!」

「ホント、助かる……」

「あ、ああ……」

今、俺の家に三浦優美子が来ている。卒業式の日の午後から雨が降って、濡れていたのでシャワーを貸した。

三浦は目元を赤くしていた。そこから何があったのかは想像出来る。卒業式での定番の告白を三浦はしたのだろう、葉山に。

そして振られた。今の三浦を見たら誰だっただけで簡単に想像が出来る。それにしても苦手な三浦にシャワーを貸すなんて俺もどうかしている。

「ほらココアで良かったか？」

「うん……温かい……ひぐう」

「お、おい！大丈夫かよ!？」

「だ、大丈夫だし！ひぐう」

とても大丈夫ではないのは見れば分かる。しかしどうしてものか。由比ヶ浜にでも連絡するか？でも今頃雪ノ下と泣いていると思うしな。

「ヒキオ……」

「え？お、おい！」

三浦がいきなり服を脱ぎだした。服と言っても俺のダボダボのTシャツを脱いだだけなだけだ。それにしても三浦っていい身体をしているな。

「服着ろ！服！」

「黙れだし、んっ……」

「んんっ!？」

いきなり三浦に唇を重ねられた。これってキスだよな？三浦の体温が俺に流れてきているのを感じる。それに三浦が俺に覆い被さるようにしているので胸が俺の胸に当たっている。

服越しても胸の柔らかさが感じるな。それに乳首が立っている。

三浦は興奮しているのか!？」

「……ヒキオ。立っている……」

「せ、生理現象だ！しょうがないだろ！」

「あーしに興奮しているの？」

「この状況で興奮しない男はいないだろ！」

「で、でも隼人は……ひぐつ」

「お、おい……」

三浦がまた泣いてしまった。葉山相手にも押し倒したのか!? それで振られたのか? 葉山は馬鹿だろう。付き合いが長い三浦を振るとか。

そう言えば修学旅行の時に好きな奴が居るとか言っていたな。イニシャルしか言わなかったけど。

「隼人……」

「……………いい加減にしろよ、三浦」

「え? きゃあ! ひ、ヒキオ?」

「俺は葉山じゃないんだよ」

さつきから葉山葉山つて癩に障るな。そんなに泣くくらいなら振られないようにガツチリと掴んでいろよ!

俺は三浦を押しつけて押し倒した。そして三浦のパンツに触れた。俺のトランクスだけだな。俺の手はベツトリと濡れていた。糸が引くほどだ。

「三浦。興奮しているのか?」

「せ、生理現象だし!」

「興奮しているんだな」

「お、犯すなら早く犯せだし!」

三浦は自分から足を開いて股を見せてきた。初めて女性の性器を見た。三浦は金髪だけど、下の毛は黒だった。当たり前か。

外国人ならまだしも三浦は日本人なのだからな。黒なのは当たり前だよな。

「ずずずずずつ……」

「うぎい!?! い、痛い……」

「のおおおお!!」

俺は三浦のマンコへチンコを挿入した。三浦の股からは血が流れていた。俺が三浦の処女膜を破ったのか!?

それにしても女性器がこれほど締め付けてくるとは思わなかった。俺だった健全な男子高校生だ、オナニーくらいする。

その際にオナホを使ったんだけど、全然感触が違う！

「三浦！お前のマンコ凄すぎ！」

「ひ、ヒキオ！ちよつと落ち着けだし！」

「ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「あつ♡んんっ♡うひい♡」

俺が腰を三浦に打ちつける度に三浦は可愛い声を出した。それにマンコも強く締め付けてくる。もうそろそろ限界だ。

このまま膣内への射精は不味いだろう。俺は三浦から離れようとした。

「お、おい！三浦」

「離れんなし！」

「ちよつ!!?不味いしろ！」

「んっ♡」

「んんっ!?!」

びゅるるるるびゅるるるるつ……びゅるるるるびゅるるるつ

……

三浦が俺の腰に足を回してきて離れる事が出来ずに三浦のマンコへ俺は射精してしまった。さらに三浦はキスしてきて、俺の思考は停止した。

下半身の快感に思考の全てを持っていかれた。俺の目の前に三浦の顔がある。下半身が繋がっているのが分かるけど、他の事がまったく頭に入ってこない。

「あ、あしゅい……」

「お、おい！お前、なんて事を……」

「あーしは気にしないし……」

「いや違うだろ!?!」

「こんなの犬に噛まれたもんだし」

「俺は犬かよ……」

……ここまでしておいて、三浦にとって俺は犬だったか。正直、雪ノ下や由比ヶ浜に罵倒されるよりショックだわ。

俺は三浦の足の拘束が緩んだので今度こそ離れた。三浦のマンコから俺の精子が溢れていた。どんだけ射精したんだよ、俺は!?

「ヒキオ……もつとしたいならしてもいいよ」

「いや、これ以上は……」

「でもヒキオのは元気だし」

「え?……あ、これはその……」

三浦の指摘されて俺は下半身を見た。そこにはまだまだ元気な勃起している俺のチンコがあった。射精したんだから少しは萎えろよ!

三浦の裸体を見たり、キスをしたりなどして性欲が爆発したようだ。落ち着け、俺の本能!雪ノ下さんに言われたじゃないか、理性の化け物と!

「ほらヒキオ」

「み、三浦……」

三浦は自分でマンコを広げて見せてきた。エロい、それ以外の言葉が見つからない。俺は三浦に覆いかぶさるようにチンコを挿入した。ずずずずつ……ぱんつ!!

「あひゃ♡ひ、ヒキオのガチガチじゃん♡」

「三浦がエロいのが悪い!」

「ヒキオ、もつと。んんっ♡」

「んんっ」

俺は三浦のマンコへ挿入しながらキスをした。頭から腰にかけて電気が流れているような感覚に襲われた。それでも腰を止められなかった。

「あんっ♡んっ♡ひ、ヒキオ。必死だし」

「こんなの止められる訳ないだろう!」

「ヒキオっ♡♡」

「三浦!もう射精るぞ!」

「あーしの膣内にちようだい!」

「三浦!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「うひひひひひひひ♡♡♡……ひ、ひきおのあしゆいのがたくしやん……んっ♡」

またしても三浦の膣内へ射精してしまった。どんどん引き返せなくなってきた。どうしたらいいんだ!?

これはもう責任取って結婚するしかないのか!?

「ヒキオ。まだ離れんなし」

「おい！いい加減、抜かないと……」

「もう少しこのままがいい……」

「三浦……」

いつも元気はどこにやら。三浦は本当に元気がない。正直、女の子の慰め方なんて小町以外にやった事がないからどうすればいいのかわからない。

だから俺は黙って三浦を抱きしめた。それと同時に俺のチンコが元気になった。

「ヒキオの大きくなったし」

「しよ、しょうがないだろ！生理現象だ！」

「あーしにどんだけ欲情しているんだし」

「ど、童貞だから仕方ないだろ！」

「へえ〜童貞なんだ」

三浦はもの凄い悪い笑顔で俺の事を見て、ニヤニヤしてきた。ウザい!?! どうして俺はこんな女なんかを慰めようとしたんだ!?!

タイムマシンで今すぐ過去の自分を殴りに行きたい!!

「いいよ」

「へ?何が?」

「だからもつとしたいならしてもいいよって言ってんだし!」

「え?いいのか!?!」

「チンコ、ガチガチにしておいて何言ってるんだし」

「それは……」

正直な所、もつと三浦を犯したいと思う。もつと滅茶苦茶にして葉山なんて思い出さなくらい俺を刻みたい。

やはりあーしさんを慰め続けるのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。総武高校を卒業した日に俺は童貞を卒業した。相手はリア充グループで有名な葉山グループの女王ポジシヨンの三浦優美子だ。

彼女は卒業式が終わった雨の中、ただ立っていたのでシャワーを貸した。幸い、家族は俺抜きで家族旅行に行っている。家には俺と猫のカマクラだけだ。

昨日の事は何かの間違いなんだ！あまり関わり合いのなくもない女子を家に入れた上に処女を奪うとかきつと夢に違いない。

そんな事を考えながら俺は朝食の準備をしていた。

「お、おはよう。ヒキオ……」

「お、おしやひよう……」

「なんて言っただし？」

「にや、何でもない」

三浦が二階から降りてきて挨拶してきたので返したけど恥ずかしさのあまり噛んでしまった!?だって、女子が俺に挨拶するとか貴重だったから！

それに三浦の格好も噛んだ原因だ！俺のYシャツを一枚だけなんだよ!?!どこの同棲している彼女の格好をしているんだ、三浦は!?

男用だからダボダボのいい事に下にはスカートすら履いていない。

「ふ、服勝手に借りてごめん……」

「あ、いやそれは別にいいけど……下にも何か履けよ」

「だってスカート、どこにあるか分からないし……」

「な、なるほど……」

そう言えば、昨日洗濯したままだった。すっかり忘れていた。俺は三浦に新品のジャージを渡した。一先ず着てもらわないと目のやり場に困る。

「ヒキオ。あーしが泣いていた事、誰にも言うなし」

「分かっている。葉山に振られたからなんて誰にも言わないから」

「どうしてあーしが隼人に振られた事、知っているんだし!？」

「え？それ以外で泣く理由が思いつかなくて……」

三浦は顔を手で隠して蹲ってしまった。どうやら泣いていた理由を俺が知らないと思っただろう。昨日、葉山の名前を出されて落ち込んでいたら嫌でも分かる。

三浦が立ち上がったと思っただら泣き顔で詰め寄ってきた。そして胸倉を掴まれた。

「あーしが隼人に振られた事、誰かに喋ったら承知しないからー！」

「わ、分かった。そもそもボツチの俺の話有谁かが聞く訳ないだろ？」

「ならいい……」

「ひ、一先ず食べようぜ。朝食、作ったから」

俺はテーブルに三浦の分の朝食を並べた。もちろんカマクラにも餌を与えたのに俺にまったく懐く気すらない。

「ヒキオ。料理出来たんだ」

「まあ、それなり……」

「んっ……美味しいじゃん」

「あ、ありがとう」

三浦にお礼を言われてしまった。ちよつと嬉しい。それにしてもさっきまでのやり取りが嘘のように静かだ。

「ヒキオ。あーしをもう一度——ぐさめろし……」

「はあ!?よく聞こえなかったんだけど?」

「もう一度、あーしを慰めろって言っているの!!」

「い、いやお前何言ってるんだよ?」

朝食を済ませて皿を洗っていると三浦が何をトチ狂ったか、迫ってきた。すでに服を脱いで準備万端だな。いや、そういう事を言っているのではない。

「んっ♡」

「んんっ!?!」

三浦からキスしてきた。服越しに三浦の胸の熱が俺に伝わってくる。三浦は俺の手を掴むと自分の股へと誘導した。パンツもすでに脱いでいるのね。

「んんっ♡……」

「三浦、お前……」

「ヒキオに触られただけでもうあーしは興奮しているんだし、ヒキオだって大きくなっているし」

「そ、それは……」

三浦は勃起した俺のチンコをズボン越しに撫で回してきた。触り方が強くしたり弱くしたりなど緩急をつけてきて興奮してしまう。

「あーしは誰構わず抱かせないし」

「お、おう……」

「ヒキオ……んっ♡」

「んんっ」

三浦の舌から唾液が俺の体内へと流れ込んでくる。それにしても三浦って睫毛、長いな。ヤバい、どんどん頭が麻痺してきた。

「三浦！」

「きゃあ!? ヒキオ、がつつき過ぎ！」

「いくぞ」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ちよっ——うひい♡」

俺は三浦の制止を聞かずに三浦のマンコの奥へと一気に挿入した。昨日、俺が処女膜を破いたマンコだ！昨日もそうだったけど、三浦のマンコは俺のチンコをギュウギュウに締め付けてくる。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡ひ、ヒキオ！少しゆっくり、あっ♡」

俺は必死に腰を激しく動かした。昨日は昨日で必死だったのであまり覚えていない。だけど、三浦を犯した事だけは覚えている。

俺は三浦の手首を掴んで逃げられないように押さえ付けた。もう俺のチンコは爆発寸前だ。俺はチンコを三浦のマンコの一番奥へと押し込んだ。

「三浦！で、射精る！」

「ヒキオ！」

「ぐっ……」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「ひひひひひひ♡♡♡ひ、ひきお……だしすぎだしっ♡♡」

俺は三浦のマンコが一番奥へ射精してしまった。それと同時に三浦は絶頂したようで呂律が回っていなかった。

「三浦、大丈夫か？」

「し、心配するくらいなら聞かないし」

「す、すまん……」

三浦に怒られてしまった。確かに膣内出しまでしておいて、心配するのは可笑しいよな。俺の理性はどこに行った!?戻って来い!

それにしても三浦のマンコ、俺のチンコをまだギュウギュウに締め付けてくるな。

「ヒキオ、まだしたいんだ」

「それは……出来ればだけど」

「いいよ。もつとあーしを気持ちよくするし」

「え?い、いいのか!？」

「ここまでしておいて何、言っているんだし!」

三浦の許可を貰ったので遠慮する必要はもうどこにもないな。俺は三浦から一度離れて、三浦を仰向けからうつ伏せにした。

三浦のマンコもアナルもぼつちり見える。マンコからは愛液がダラダラと垂れているし、アナルはヒクヒクしている。

「三浦!」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「うひい♡ひ、ヒキオのが奥まで来ているっ♡♡」

うつ伏せなら仰向けより奥へチンコを挿入出来る。俺のチンコの先に三浦のマンコの奥、子宮まで届いている。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずずっ……ぱんっ!!

「あっ♡んんっ♡うひい♡ひ、ひきお……はへひしい♡♡」

「三浦!お前、エロ過ぎだ!ギャルと思っていたけど、相当経験あるんじゃないか!？」

「あーしはひきおがはひめてえだしっ♡♡」

「それは昨日、知った!!」

昨日、三浦の股から血が出ていたので処女だと知った。でもギャルっぽいから誰も知らない所で男性経験があるんじゃないかと勝手に想像していた。

だけど、三浦のは処女だった。それを俺が奪った、三浦の初めての男になってしまった。その事は俺を最高に興奮させた。

「三浦!三浦!」

「ヒキオ!激しいっ♡♡」

ずずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!

腰が止まらない。もつと三浦を感じさせたい。もう二度と葉山なんて口から出ないくらい俺を感じさせたい。目の前のメスを俺のものにしたい欲求に駆られている。

獣のように性を俺は貪っていた。そしてそれは今にも爆発しそうだった。

「三浦!射精るぞ!いいな!」

「ぎ、きてっ♡ヒキオっ♡♡」

「で、射精る!」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるびゆるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡……ひ、ひきおのあしゅいのがっ♡♡」

三浦の膣内で俺は盛大に射精した。それと同時に三浦は絶頂した。分かる、精子が三浦の子宮に大量に溜まっている。もしかしたら妊娠したかもしれないと思ったけど、それはそれで興奮してきた。

今まで深い関係ではなかった三浦を孕ませたと思うと体の奥底からゾクゾクしてきた。三浦だって俺に犯されて満更でもないようだ。

「三浦。もう一回いいか?」

「どっただけしたいんだし!……あーしに興奮してくれて嬉しいから後一回くらいなら……」

「三浦!」

「きゃあ!?ひ、ヒキオ!ちよっ!」

俺は三浦を再び仰向けにした。三浦は驚いていたけど、もう俺は止まらない。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひいひい♡♡ひきお、おおひいひい♡♡」

「三浦!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は無我夢中になって腰を激しく動かした。俺のチンコを三浦のマンコに出し入れする度に三浦の膣内はギュウギュウ締め付けてくる。

その所為なのか三浦が段々可愛く見えてきた。これまでずっと苦手だったけど、好きになったかもしれない。

俺、ただだけチョロいんだよ!でもそんなの関係ない。今、俺は三浦を犯し尽くす!

「三浦!」

「ひきおっ♡♡あっ♡んんっ♡あんっ♡」

「三浦!三浦!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は三浦のエロい声でさらに興奮してきた。これまでの三浦からは想像も出来ないエロい声なんだぞ!興奮が止まらない!

「んんっ」

「んっ♡ひきおっ♡もつとちようだいっ♡♡」

「三浦!んんっ!!」

三浦とキスをするると三浦の方から求めてきた。俺は三浦と舌を絡めた。キスをする度に頭が麻痺してきた。他の事が考えられなくなった。

「三浦!で、射精るぞ!」

「ヒキオ!あーしの膣内に!」

「三浦!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡」

三浦のマンコへの射精が止まらなくなってしまった。三浦のマンコへの射精ならいくらでも出来そうだ。俺が三浦から離れるとマンコから精子が逆流してきた。

「どんだけ射精したんだよ、俺！精子を逆流させている三浦はとんでもなくエロく見えた。」

「三浦！」

「ちよつとヒキオ!?!」

「お前がエロ過ぎなのが悪い」

「ちよつと！」

俺はまたしも三浦を犯した。三浦も完全に俺に体を委ねていた。俺は夜、寝るまで飯を食べたりトイレをする以外、ずっと三浦を犯し続けた。

夜には部屋は俺の精子と三浦の愛液、お互いの汗でもの凄く臭くなっていった。そして風呂に入って部屋を片付けてから俺たちは眠りについた。

やはりあーしさんとデパートに行くのはまちがっている。

うつす比企谷八幡だ。総武高校を卒業し童貞も卒業した俺は今、三浦とデパートに来ている。葉山に振られたのを引きずっているのかと思っただけど、そうでもないようだ。

それにしても俺と三浦の関係ってなんなんだろう？恋人はでないし、セフレ？三浦は葉山に振られて自暴自棄になって俺に処女を破らせたようなものだ。

俺は三浦と今後、どう接したらいいんだろうか？これまで通りって訳はいかないよな。どうしたらいいんだ!?

「ヒキオ。何しているんだし?」

「あ、いや。ちよつと葛藤を……」

「意味分かんないし……それよりどっちがあーしに似合うと思う?」

「えつと……」

三浦が見せてきたのは黒と白のワンピースだ。白はイメージじゃないんだよな。黒の方が三浦に合っていそうだな。

「く、黒かな?」

「ふくん……なら黒買う」

「え?いいのか、俺が選んだのに……」

「だってヒキオがあーしに似合う方を選んでくれたんだし」

三浦はレジに向かわず試着室へと向かった。その際に何故か俺まで試着室に入れられた。三浦は俺に構わず着替えだした。

「お前!俺がいるのに着替えるな!」

「今更だし……あーしの体、散々見たくせに」

「そ、そうだけど……」

三浦は下着姿で腕を組んで仁王立ちしていた。何故かカツコイイ!?!数日前まで葉山に振られた三浦はもうどこにもいなかった。

「それでどうだし、似合う?」

「お、おう。凄く似合っている」

「ん。ならいいし」

三浦は満足したようだ。着替えてレジに向かうかと思っただけなら俺に近づいてきた。腕を俺の首に回してきた。

「んっ♡」

「んんっ!?!」

いきなり三浦にキスされた。体を思いつきり密着させてきた。ヤバイ、頭の中が真っ白になる。それに三浦のキスはただのキスではない。

大人の……ディープキスってやつで舌を絡めてきた。お互いに唾液を交換したり、舌を引つ張ったりなど、濃厚なキスをした。

「ぶはあ……ヒキオとのキス、凄すぎだし」

「お前、ここでなんて事をしているんだ!」

「どうせ、人なんてそんなにいないし」

「た、確かに平日の昼間だし……」

高校を卒業した俺たちは平日の昼間、こうしてデパートへ行く事なんて問題なく出来る。平日だけあって、人気はあまりない。

俺は三浦を引き剥がそうとするが、三浦の力が強く引き剥がせない。女子に負けるとか男として情けない。

「ヒキオのあーしとキスしただけでもう硬くなっているし」

「そ、それは生理現象だ!」

「ならあーしのも生理現象だし」

「ちよっ!?!……三浦、お前」

三浦は俺の手を自分の股へと持って行った。三浦の股はパンツ越しに濡れていた。もうグチョグチョになっていた。お前だつてキス一つでどんだけ発情しているんだ!?!

「三浦。壁に手を付いてくれるか?」

「こう?」

「ああ、いくぞ」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「あんっ♡ヒキオの硬いのが奥まできているっ♡♡」

俺は三浦を後ろから犯した。平日の昼間だから人がいないとはい

え、デパートでこんな事を知られた大学入学が取り消しになるだろう。

「だけど、この背徳感が病みつきになってしまふ。俺は激しく腰を動かした。」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「あっ♡んんっ♡うひい♡」

「み、三浦。もっと声を抑えろ。バレるぞ」

「だ、だってヒキオが激しいからっ♡♡」

仕方ないじゃないか。こんなエロい女を目の前に興奮しない方が可笑しいだろ!?俺は腰が止められないでいた。ヤバい、そろそろ限界だ。

「三浦!で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「ひいひいひい♡♡♡」

三浦は絶頂で声を出してしまった。不味い、店員が来てしまう。でもチンコがマンコから抜けなかった。このまま抜いてしまうと精子が逆流して臭いで絶対にバレる。

「お客様、大丈夫ですか?」

やはり店員がやってきた。こちらを心配しているようだけど、この状態を見られた一発アウトだな。三浦に誤魔化して欲しかったけど、絶頂の余韻に浸っている。

「失礼しますね……何をしていますか!?!」

「ヤバ!?逃げるぞ」

「ちよつと待って!」

「待ちなさい!!」

店員が開けたのは隣の試着室だった。隣でも同じような事をしていたようだ。今の内にさっさと逃げた方がいいかもしれない。

でもまた三浦を犯し続けたい。ここではない場所に移動した方がいいな。

「三浦。早く着替えろ」

「ヒキオ。待って、腰が抜けて……」

「ほら手を貸すから」

「う、うん……」

俺は三浦を着替えさせて、試着室を抜け出した。同じような事をしていたカップルに助けられた。

しかし二度とこんな場所ではなしないぞ！俺は三浦が持ってきたワンピースを買って店を出た。そこから昼食を食べて、ゲーセンに立ち寄った。

「ヒキオ！あーしとレース勝負するし！」

「いいけど……」

「勝ったらあーしの彼氏になって、ヒキオが勝ったら彼女になってあげる」

「それは……今、なんて？」

「ほら行くよ」

「ちよつと!?!」

今、とんでもない事を言った気がするけど、一先ず三浦とのゲーム勝負だ。結果を言う俺の方が惨敗だった。忘れていた、三浦はリア充だ。

それならゲーセンにはそれなりに行っている可能性は十分にあったはずだ。なのにこんな勝負に乗るなんて！

「あーしの勝ち！」

「そ、それでさっきの事なんだけど……」

「ヒキオは今日からあーしの彼氏ね」

「い、いいのか？俺なんかで」

「あーしがヒキオが良いって思ったから」

なんだか急展開で頭がついていけないんだけど!?!すると三浦に腕を掴まれて引き寄せられた。

「んっ♡」

「んんっ!?!」

またしても三浦にキスされた！ヤバい、意識がどんどん溶けていく

ようだ。もう何も考えなくてもいいんじゃないか？

このまま流れに身を任せても大丈夫だろう。

「み、三浦……俺、我慢出来ないんだ」

「いいよ。ちよつと移動するよ」

「ああ」

俺と三浦は男子トイレに移動した。ここなら多分、大丈夫だろう。さっき買ったワンピースに着替えた。選んでおいてなんだけど、三浦に似合っている。

三浦は洋式便器の上でパンツを脱いでマンコを俺に見せ付けてきた。愛液がダラダラと太ももを伝って下に流れ落ちていた。

「三浦ー」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「うひい♡ヒキオの硬くて大きい♡♡♡」

俺は容赦なく三浦のマンコの奥までチンコを挿入してやった。三浦のマンコは俺のチンコをギュウギュウに締め付けてくる。

俺は三浦の指を自分の指と絡めた。恋人繋ぎってやつだ。そして腰を激しく動かした。

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!」

「あつ♡んんっ♡」

「三浦!お前、本当にエロぞ!」

「え、エロいと言うな!あんっ♡」

「簡単に股を開く奴がエロくない訳ないだろ!」

俺は由比ヶ浜の事をビッチだと思った。だけど、本当のビッチは三浦だった。ギャルビッチだったんだ、三浦は。

黒いワンピースがエロさをさらに増している。腰が止まらない。

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!」

「三浦!んんっ!」

「んんっ♡ひ、ヒキオ♡もつとちようだいっ♡♡」

「で、射精るぞ!三浦!」

びゅるるるるるびゅるるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「ひiiiiiiiiii♡♡♡……ひきおのあしゆいのがたくしゃん……」

三浦のマンコの一番奥に射精してやった。その際に三浦のマンコは俺のチンコをギチギチに締め付けてきて、振じ切られるのではないかと思ってしまった。

三浦のマンコからチンコが抜けない。今、抜くと萎えてしまうのではないかと考えてしまう。だけど、まだ俺の興奮は収まっていない。

「三浦。このまま続けていいか？」

「へ？ま、まだするつもりなの!？」

「頼む。全然、収まらないんだ!」

「わ、分かったし!あーしの事をちゃんと気持ちよくしてえ……」

「ああ、任せろ!」

そろそろ時間的に人が増える頃だろう。なら速攻で済ませる!俺は腰に気合を入れて動かした。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずずず……ぱんっ!!

「あんっ♡んっ♡ヒキオ、さつきより激しいっ♡♡」

「三浦!まだまだ!」

「あひい♡ふやああああああ♡♡」

「もつと気持ちよくなれ!三浦!」

俺は必死に腰を動かした。三浦はかなり感じてくれているようだ。その証拠にマンコが強く締め付けてくる。

もつと三浦を感じさせたい。今はそれだけしか考えられない。だから俺は必死に腰を動かした。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずず……ぱんっ!!

「三浦!俺、もう!」

「ヒキオ!あーしもイキたい!」

「で、射精る!!」

びゅるるるるるびゅるるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡」

三浦のマンコの奥に俺の精子が溜まっている。腰に力が入らないし、頭が真っ白で気持ちよくて気分は最高だ。

俺がゆっくりと三浦から離れるとマンコからは精子が逆流してきた。かなりの量を射精したんだな。そろそろ出た方がいいな。

「三浦。そろそろ出るぞ」

「ま、待って。腰が抜けたから……」

「手、貸すぞ」

「うん……」

俺は三浦の着替えを手伝ってデパートのトイレから出た。その際に周りに気をつけた。女子の三浦が男子トイレから出てきたとなれば、大変な事になるかな。

幸い、誰にも見られる事無くデパートを出た。三浦は腰が抜けて、上手く立てないので手を貸したのだけど、三浦は自分の腕を俺の腕に絡ませてきた。

これじゃまるで恋人じゃないか!?!いや、もう恋人同士になったんだな。

「大丈夫か?」

「だ、大丈夫だし!」

「そ、そうか……」

三浦はなんとか強きでいるようだけど、腰に力が入らない姿はどことなく可愛かった。さて、俺はそろそろ旅行でも行ってくるかな。

やはりあーしさんと旅行に行くのはまちがっている。
前編

うつす比企谷八幡だ。俺は今、愛する千葉を離れて長野県にある温泉街にやって来ている。その理由は年始に福引で当たったからだ。他にも理由がある。

それは雪ノ下と由比ヶ浜主催の奉仕部の卒業旅行を回避するためだ。大学受験が終わって久々に部室を訪れた時に二人が話しているのをたまたま聞いた。

それは奉仕部のメンバーと小町、雪ノ下さんを交えたメンバーでの旅行をしようと言う事だった。しかも俺に黙ってた。

俺に話せば逃げると思ったのだろう、正解！なので俺は気づかないフリをして奉仕部の旅行前日に旅行へ逃げた。

俺の旅行の方はそれほど大変ではなかった。福引の事は両親には話したけど、俺が当てた旅行券は二人一組のペアチケットだった。

最初は親父が小町の二人で楽しもうとしたけど、お袋がそれを阻止して俺一人で行く事にした。スマホの電源は切って鞆の一番下にした。

これで2年の時の千葉村のボランティアキャンプの二の舞えにはならないぞ！誰が女子だらけの旅行に行くものか！俺はのんびりしたいんだよ！

雪ノ下、由比ヶ浜、平塚先生、小町、雪ノ下さんが集まれば静かに過ごせる訳がない。逆にストレスが溜まりそうだ。両親は俺を放置しているので小町が俺の旅行の事に気がつくのは今頃だろう。

スマホには雪ノ下たちから着信があるだろうな。出来れば二度と起動したくない。帰って電源が切れて鞆の下にあったから気が付かなかったと言えるから別にいいか。

問題は別にあるんだよな。

「ヒキオー……この景色、マジで凄いいし！」

「そうだな……」

ペアチケットの旅行だ。ペアが必要でもなかったんだけど、隠しておいた俺の旅行は優美子にバレってしまった。それと名前呼びを強制された。

女子を名前で呼ぶなんて、妹以外では初めて緊張する！

いきなり人数が変更になったら旅館の方に迷惑になるからと断つたんだけど、元々二人用だったので問題ないと返事が帰ってきた。ゆっくり出来るだろうか？

「優美子は葉山たちとは良かったのか？」

「振られた相手と旅行なんて楽しめる訳ないし」

「それもそうか……」

誰だつて振った相手、振られた相手と旅行なんて行きたくはないだろう。今頃、葉山たちはどうしているだろうか？

いつものメンバーがいきなり居なくなつた事に疑問を持つだろうな。葉山がどんな言い訳をしているか少し気になる。

「それにしても変わったな」

「心機一転だし！」

「な、なるほど……」

「何？文句があるなら言えればいいし」

「いえ！ありません！」

優美子は長い金髪ロールをバツサリ切つて肩まで揃えていた。それに黒髪にしていた。これまでの印象がガラリと変わったと思う。

男前でカッコイイと思つてしまうじゃないか！姐さんと呼びたい。

「ヒキオ。風呂、入るよ」

「え？俺も一緒に!？」

「折角、部屋にあるんだし」

「いや、別々に入れば……」

「何か言つたし？」

「いえ……」

俺は優美子に手を引かれて部屋に露天風呂に向かった。部屋に露天風呂があるとか豪華だよな。福引でここがあると俺、運氣使い切ってしまったか!?

「んん〜気持ちいい……」

「そうだな……」

「なに、恥ずかしがっているんだし？散々あーしの裸体、見たくせに」
「いや、あれは、その……」

確かに散々して優美子の裸体は見てきたよ。でも風呂場で前も下も隠さない状態が見ていて恥ずかしいんだよ、こっちは！

それにしても優美子って本当にいい体しているよな。背は少し平均より高い方か？モデルとかしても可笑しくはないよな。

「んっ♡」

「んんっ!？」

「ぶあ……ヒキオ、ここでしょ？」

「ゆ、優美子……お前、エロい」

優美子にいきなりキスされてすっかり俺は興奮してしまった。それは優美子も同じようだった。密着からキスで下半身が元気一杯だよ。

「ホント、ヒキオの硬く熱いし」

「ちよつと、優しく触れてくれ」

「ヒキオは少し強めが好きな癖に」

「そ、そうだけど！」

優美子が俺のチンコを手で掴んで上下に扱っている。少し長い爪がチンコに触れて気持ちいい。ヤバイ、俺って攻められて興奮していないか!?

俺はどちらかと言うと攻めた方なんだよ！

「優美子、射精る」

「ちよつとヒキオ、ここに座るし」

「お、おい！」

「はむっ」

「射精る！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんっ♡」

俺はいきなり優美子に風呂の淵に座らされた。優美子は俺のチン

コを口に咥えた。そして俺の精子を口で全て受け止めた。

「んぐっ……ホント、ヒキオのザーメンはドロドロのネバネバで喉に張り付くし」

「優美子。お前、いきなり過ぎ……腰が抜けるわ」

「ヒキオのまだ硬いようだし、続きするよ」

「ちよっど!？」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「んんっ♡ひきおのかたいのきたっ♡♡」

優美子がいきなり挿入させてきた。さっきの射精で腰が抜けかけているのになんて奴だ。さらに胸を押し付けてくるとか、これで興奮しない男は腑抜けと言っていていいだろう！興奮と温泉で上せて鼻血が出そうだ。

「ヒキオ。動かないんだったらあーしが動くし」

「ちよっど休ませて!」

「だめ!」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!」

「のおおおお!!」

「んんっ♡」

優美子が腰を動かす度に温泉が湯船から溢れている。けど今の俺にはそんな事を気にしている余裕はどこにもない。

優美子のマンコは俺のチンコをギュウギュウに締め付けてくる。頭が爆発しそうだ。

「優美子!で、射精る!」

「いい!ひきおのぎーめん、たくさんちようだいっ♡♡」

「で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「ひひひひひひ♡♡♡ひきおのぎーめん、たくしやんっ♡♡」

優美子のマンコの一番奥に俺の精子がたくさん注いでいる。優美子のマンコは俺のチンコから精子を根こそぎ奪い取ろうと蠢いてい

る。

そんなに動かれると興奮が止まらない。腰が勝手に動いてしまう。ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「あんっ♡んっ♡はひい♡」

「優美子、少し緩めてくれ。またイキそうだ!」

「もつとヒキオのザーメン、あーしにちようだいっ♡♡」

優美子から俺を求めてくるなんてヤバ過ぎだろ!?今までのギャツプでさらに興奮してしまうじゃないか!俺は優美子の尻を掴んで腰を激しく動かした。

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「あっ♡んんっ♡ああっ♡」

「優美子!優美子!」

「ヒキオっ♡♡」

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「ああああああ♡♡」

優美子のマンコをもつと味わいたい。もつと優美子を感じさせた。俺の頭にあるのはそれだけだ。今、抱いている女をもつとエロくしたい。

腰が抜けようが砕けようが今日はずっと優美子を抱き続けるぞ!

「優美子!また射精るぞ」

「ヒキオ!あーしも限界っ♡」

「で、射精る!」

びゅるるるるるびゅるるるる……びゅるるるるびゅるるるる……

「いぐうううう♡♡♡はあ……はあ……ひきおのぎーめんがあーしのなかにっ♡」

抜かずに二回連続で優美子の膣内へと射精してしまった。優美子が俺から離れた。すると優美子の股からは俺の二回分の精子が逆流

してきた。

二回分だけあってかなりの量だな。自分で射精しておいてなんだけど、エグい量だな。ちよつとドン引きしてしまった。

「ヒキオ、射精し過ぎなんだし」

「そ、それは優美子のマンコが気持ち良過ぎて……」

「へえ、そんなにあーしの良かったんだ。ふうん」

「ちよつとその顔止めてくれ！」

優美子がニヤニヤ顔で俺の事を見てくる。優美子が恥ずかしいはずなのに俺の方が恥ずかしいとか可笑しいだろ!?

優美子は手を風呂の淵に付いて、尻をこっちに向けてきた。しかも左右に振って誘ってきている。それにニヤニヤ顔が気に入らない。

その顔、泣き面にしてやるよ！覚悟しろ、優美子！

ずずずずず……ぱんっ!!

「うひい♡ヒキオのちんこ、あーしの奥まで来ているっ♡♡」

「おおおお……さつきより締まっている！」

「ヒキオ。もつとあーしを気持ちよくしてっ♡」

「泣いても知らないぞ！」

ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!

「あんっ♡んんっ♡ひゃあ♡♡」

「まだまだ！」

「ひきおのちんこっ♡あーしのおひいにきてひいるっ♡♡」

俺は乱暴に何も考えずにただ腰を激しく振った。優美子のマンコは俺のチンコが動く度に強く締め付けてきた。それでも俺は腰を動かした。

俺は優美子の背中にぴったりくっ付き、優美子の胸を鷲掴みにした。その際に乳首を指で撫で回した。

「ひきおっ♡しょへらめっ♡いっっちゃうっ♡」

「早くイッてしまえー！」

「んんっ♡」

「優美子！射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いぐうううう♡♡♡はあ……はあ……ひきおのぎーめん、あしゅひい♡♡」

優美子のマンコが痙攣しているようだ。締め付けがハンパない。俺のチンコがもぎ取られるのではないか!? それくらい強く締め付けてきた。

「優美子、お前……本当にエロ過ぎだろ」

「ヒキオだつてちんこ、まだ固いままだし」

「仕方ないだろ！優美子のマンコが気持ちいいんだから！」

「あーしもヒキオのちんこが気持ちいいからだし！」

そこから俺と優美子は繋がったまま露天風呂を満喫してから宿の夕食を楽しんだ。これがあまりにも美味し過ぎて頬つぺたでも落ちるのではないかと言うくらいだった。

「この食事美味し過ぎだし!？」

「ああ、美味しい！御代わりしたいくらいだ」

食事を楽しんだ後、俺と優美子は疲れがドツと出たのか仲良く布団にダイブしてそのまま眠りに付いたのは言うまでもない。

明日は温泉街を楽しもう。お土産とかも買っておかないと小町が文句言つてきそうだな。眠いからさっさと眠ろう。

「ぐう……」

やはりあーしさんと旅行に行くのはまちがっている。
後編

うつつ比企谷八幡です。俺は長野の温泉街に彼女になった三浦優美子と来ている。そもそもここには奉仕部の卒業旅行に参加したくない理由作りで来たんだけど、思いのほか楽しんでる。

俺が旅行に行こうが両親は関心がないので小町には当日になってから言うので問題はないだろう。そもそも俺に卒業旅行の事を当日まで黙っている方が悪い。

それにしても優美子と一緒に旅行に行くとか想像もしていなかったな。クラスではカースト一位のグループの女王的ポジションの人物だよ。

殆んど関わり合いがない相手と来るものではないだろう。そんな優美子は俺のベッドに侵入して俺の腕を枕にしている。

寝巻きである浴衣が少し着崩れして胸が露出していますよ!?てか、デレんなよ!優美子!!今まで近づきたくない相手だったのに。

それが髪型を変えただけで印象がガラリと変わってしまったんだから人間って不思議だよな。それに葉山たちと居た時より丸くなった気だする。

「んっ……ヒキオ、おはよ」

「お、おう。おはよう」

「どうしたんだし?」

「いや、服が乱れているぞ」

「ぶっ……あーしの体を見て照れるとかヒキオ、面白いし」

やはり丸くなった気がするのとは間違いではない。葉山と居た時はどこかピリピリしていた気がする。それがここに来て柔らかくなっただんだ?

「……ヒキオの昨日、あれだけしたのにもう元気になっているし」

「え?……あ、これはその……」

俺は自分の下半身に目をやった。そこには勃起した俺のチンコが

あった。昨日、優美子と散々したのに朝になると回復するとかどんだけ元気なの!?

「あーしが気持ちしてやるし。はむっ」

「のおおおお!!」

「ぢゆるるるるっ……ちゅっ……ぢゆるるるるっ……」

優美子が俺のチンコを啜えて頭を上下してチンコを攻めてきた。それに舌をチンコに巻きつけてきて刺激が腰が抜けてしまいそうだ。

優美子のフェラがここまでヤバいものだとは思いもしなかった。すぐに限界になるなんて凄すぎだろ!?

「優美子!で、射精る!」

びゆるるるるびゆるるるるっ……

「んんっ!?!……んぐっ……ヒキオの一番のザーメン、濃いつ♡」

「優美子……俺、腰抜けた」

優美子は朝からよくやるよ。おかげで俺は腰が抜けてしまった。でもスツキリしたからいいか。もっとしたいけど、そろそろ朝食の間だ。

旅館の人に迷惑を掛けられないからさっさと済ませておかないと。念のため喚起しておいた方がいいだろう。臭いが籠っては不味いな。

「うくん……朝食も凄すぎだし!」

「確かにこれは凄いな」

「ヒキオ。今日はどうするん?」

「今日はお土産を買いつつ足湯とか回ってみようかな」

「なら行く前にあーしとするし」

「お、おう……」

朝食を食べた俺たちは風呂に入る事にした。昨日して軽く拭いてから布団に入ったからな。汗などはそれほど流れていないので体がベトベトする。

「んんん……朝から露天風呂とか最高だし」

「そうだな……優美子、重いんだけど」

「ヒキオは硬いままだし」

優美子は俺の太ももに乗って風呂に入っている。正直、浮力があるとはいえ重いんだよ！しかも優美子の奴、尻を少し動かして誘っている。

俺のチンコが元気になってしまっただろうが！さつき射精しただろうが！少し落ち着けよ！！

「ヒキオ……」

「ちよつと待て！」

ずずずずずつ……ぱんっ！！

「んんっ♡」

「お、お前な！」

優美子は体の向きを変えて俺と正面から向き合うようになった。そしてそのままマンコにチンコを挿入してきたよ！

優美子はチンコを挿入して急に動きを止めた。顔は俺の肩にぴったりくっ付いているので分からない。

「ゆ、優美子？」

「う、動くなし！」

「いや、生殺しなんだけど……」

「ひ、ヒキオの大きいからあーし……」

「もしかしてイッたのか？」

優美子は黙ってしまった。もしかしなくても凶星を突かれて恥ずかしいのだろうか？だけど、俺は動きたいので優美子の尻を掴んだ。

「ちよ!?!ヒキオ！」

「俺、我慢出来ないんだ！」

ずずずずずつ……ぱんっ！！ずずずずずつ……ぱんっ！！ずずずずずつ……ぱんっ！！

「あっ♡んんっ♡ああ♡」

「優美子!!」

「らめえ♡ひきおっ♡」

ずずずずずつ……ぱんっ！！ずずずずずつ……ぱんっ！！ずずずずずつ……ぱんっ！！

俺は腰を激しく動かした。優美子のマンコは俺が動く度にギュウ

ギユウに締め付けてきた。しかしあの三浦優美子がこんなにもエロい声を出すとか想像もしなかったな。

「優美子。んっ」

「んんっ……ひきお、もつときすひいてえ♡んんっ♡」

「んんっ……優美子」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ああ♡んっ♡あんっ♡」

優美子は腰を動かす度にエロい声を出した。こんな声を聞かされたらもう我慢出来ない。俺は優美子の尻を押えつけてチンコをマンコが一番奥へやった。

「で、射精るー!」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるびゆるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡……ひきおのぎーめん、たくしゅんっ♡」

優美子のマンコへ精子をたっぷり射精した。優美子のマンコは欲張りなのか精子を欲しがって蠢いてる。それに優美子は絶頂で疲れたようで俺にもたれかかって来た。

優美子の胸が押し付けられてきて最高に興奮する。優美子の胸は由比ヶ浜ほどじゃないけど、そこそこの大きさがあるんだよな。

「す、少し休憩したら外にある温泉やお土産を買いに行くか?」

「そ、そうだね。あーし、腰が抜けたし……」

「朝から激し過ぎた……」

俺と優美子は休憩を挟んでから外にある足湯やお土産など買った。俺は家族の分だけでいいだろう。雪ノ下や由比ヶ浜は俺からお土産を貰っても嬉しくないだろう。

優美子もは家族と海老名さんと由比ヶ浜の分を買うそうだ。もちろん葉山の分はない。振った相手のお土産を買う事はないだろう。

「ヒキオ。この温泉饅頭、美味し過ぎるし!」

「確かに美味しい」

「今度はあつちのソフトを食べるし！」

「まだ食べるのか!？」

「当たり前だし!次いつ来れるか分からないだし!」

「はいはい。分かりましたよ……」

俺たちは温泉街にある色々なものを食べ歩いた。終始優美子はご機嫌だったで良かった。また優美子とはどこかへ旅行するのもいいかもしれない。

まあ、殆んど宿でSEXしていただけなんだけどな!インドア派の俺が旅行をしたいとかヤバいな。

これも優美子と付き合う事にしたからか?

「ヒキオ!早く来るし!」

「分かりましたよ」

「隼人にヒキオとの旅行の写真、たくさん送ってやるし」

「おいおい……」

優美子は俺とのツーショット写真を葉山にメールで送りやがった!もしかしたら雪ノ下や由比ヶ浜に知られるかもしれない。

こうなつた以上、仕方ないと割り切るしかない。面倒な事にならないといいいんだけど。

それから食べ歩きとお土産を買った俺たちは宿に戻ってきた。明日には帰るからその準備を軽くしておいて部屋の風呂へと向かった。

「はあ……ヒキオとの旅行も終わるとか寂しいし」

「懸賞か何かで当てるかして行くしかないな」

「懸賞とか……ヒキオらしいし」

俺と優美子は風呂場で笑いながら話をしていた。まさか優美子と笑いながら話をする日が来るなんて思いもしなかった。

「ヒキオ……んっ」

「んんっ……優美子って実はビッチ?」

「はあ!?!あーしはヒキオ以外とは寝た事ないし!」

「わ、悪い!」

優美子がマジギレしてしまった。怒るとやはり怖いな。怒らせないようにしないと。俺は優美子の腰を下に降ろした。

ずずずずずずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡ヒキオのホント、硬く熱いしっ♡♡」

「優美子のマンコも締め付けが凄い!」

「ヒキオ。んっ」

「んんっ」

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!

俺は優美子とキスをしながら腰を動かした。まったく何度も抱いているのに優美子のマンコは凄く締め付けてくる。

こちらが腰が抜けてしまいそうだ!だけど、男のプライドがあるので絶対に負けられない。

「ひゃあ♡ひきおのおくにつ♡♡」

「優美子!」

「んんっ」

「んんっ!」

優美子のマンコの締め付けが強くなったと思ったら優美子は舌を俺の舌に絡ませてきた。そして唾液を俺に流し込んできた。

それから俺の唾液を強引に奪ってきた。頭の中がグチャグチャになつてきた。

「ゆ、優美子!俺もう!」

「きてえ♡ひきおっ♡」

「で、射精るー!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「い、いくうううう♡♡♡はひい……ひきおのぎーめん、らくしやんっ♡♡」

「優美子……」

体に電撃でも受けたような衝撃が襲ってきた。優美子のマンコへの射精が止まらない。いつまでも射精してられる。

いつその事、優美子を孕ませたいと思えてきた。でも駄目だ。経済力がまだない俺では優美子と子供を養って行けない。

どちらかと言うと俺が養ってもらいたいんだけどな！

「ヒキオ。んんっ」

「んっ……優美子、ちよっと休憩しないか？」

「あーしはまだしたいんだけど」

「少しだけ休憩させてくれ。そしたら再戦しよう！」

「わかったし」

流石に性欲があっても体力がなければこれ以上は続けられない。それから俺たちは休憩を挟んで再戦して、チエックアウトまでお互いに求め合った。

そして家に帰った時にスマホを起動してみると不在着信と未読のメールが大量に来ていた。殆んどが平塚先生と由比ヶ浜、小町からだった。

それから俺は連絡をくれた人たちに一通りの説明をしてからベツドヘダイブして眠りについた。早く優美子を犯したくて仕方なかった。

次はいつ会えるかを考えるようになっていた。どう考えても中毒になっっている気がする。

次の日、優美子からメールが着ておりそこにはデートのお誘いが書かれていた。俺は興奮でその日は眠れずに目を濁らせたのは言うまでもない。

やはりあーしさんと旅館に行くのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡です。総武を卒業した俺は優美子と同棲している。俺と優美子の大学が同じだったので優美子から同棲の話を持ち掛けられた。秒でOKした。

大学生活もだいたい慣れて優美子との関係も順調に進んでいる。それと優美子は髪を黒に染めてショートカットにしていた。

前の優美子と比べたら地味になっていた。気になって理由を聞いてみた。

「ヒキオ以外と付き合えないから地味の方が目立たないし」

それを聞いた時、思わず興奮してしまい優美子を朝まで犯してしまった。その後、こつ酷く説教されてしまった。だって可愛かったんだもん！

「ヒキオ！海、ちよー綺麗！」

「いい宿、予約出来てよかったよ」

「シーズン前だし」

「だな」

俺は優美子と海が見える宿に来ていた。ちなみに今はシーズン前なので海には人っ子一人いない。宿自体にもお客は少なかつた。おかげで簡単に予約出来ただけだ。

それにしても黒髪の優美子も中々いいな！失恋した女子は髪を切るとか優美子って意外と古風なのか？

「……ヒキオ、今失礼な事考えなかつた？」

「いえ！そんな事はありません！」

「ならいいし」

「お、おう……」

まったく同棲するようになって俺の考えが優美子に筒抜けになっている気がしてきた。おちおち変な事を考えられない。

「ヒキオ。んっ♡」

「んっ……優美子」

「ヒキオの手……んんっ♡」

「優美子のマンコ、もう濡れているな」

優美子とキスしている時に俺は優美子の股に手をやった。マンコはすでに濡れており、パンツに染みを作っていた。

俺は優美子のクリトリスを撫でるように触れた。すると優美子は腰に力が入らなくなったのか、俺に寄りかかってきた。

「ヒキオの早く……欲しい」

「なら汚れてもいいように露天風呂に行こう」

「は、早くっ♡」

「こっちだ」

優美子はもの欲しそうに牝の顔になった。流石に部屋を汚す訳にはいかないので部屋に備え付けられて露天風呂に移動した。

露天つき部屋なんて普通は高くて無理だけど、今はシーズン前なので格安で予約する事が出来た。ありがたい！

「ヒキオのもうガチガチ……ちゅっ♡」

「優美子の裸を見たからな」

「見慣れているくせに……はむっ」

「のおおおおお！」

優美子は露天風呂に入る前に俺のガチガチに勃起したチンコにキスしてから口に咥えた。優美子の舌が俺のチンコに絡みついて腰が抜けそうになる。

優美子は舌を絡めて刺激してくるけど、時々歯でも刺激してくる。ゴツゴツした感触が凄く気持ちいい。

「ゆ、優美子。で、射精る！」

「んんっ♡……んぐっ……んぐっ……ヒキオの凄すぎだし」

優美子は俺の精子を零す事無く全て飲み干してしまった。優美子の精子を飲んだ時の顔はすぐく牝の顔をしていた。あの顔を見て興奮しない男はいないだろう。

「優美子！」

「あんっ♡ヒキオ、ちょっと落ち着けし」

「俺の方が我慢出来ない！」

「うん……いいよっ♡」

優美子は壁に手を付いて尻をこっちに向けてきた。相変わらずいい尻しているよな優美子って。俺は優美子の腰を掴んで勃起したチンコを優美子のマンコの奥に目掛けて挿入した。

「うひい♡」

「おおおー！」

「あつ♡んんっ♡んあっ♡」

「優美子！優美子！」

俺は必死に腰を優美子の尻に向けて叩きつけた。優美子のマンコは俺のチンコで突かれる度にギュウギュウに締め付けてきた。

優美子は凄く感じてくれているようで声が我慢出来ないでいた。ここは一応屋外なので優美子の声は外にいる人間には聞こえるだろう。

「優美子、声！抑えろ」

「む、むりい♡ヒキオのチンコ、凄すぎっ♡」

「そんな事、言われると頑張るだろうが！」

「あんっ♡んっ♡ひゃああああ♡♡」

俺が激しく腰を動かすと優美子は軽く絶頂したようで潮を噴き出している。それに比例してマンコの締め付けが強くなった。

「優美子！」

「ヒキオっ♡ちくび、くり……らめえ♡」

「イけ！イけ！」

「ああああ♡♡」

俺は優美子の乳首とクリトリスを摘まみグリグリとすり潰すように攻めた。優美子はすぐに絶頂した。またしても潮を噴き出した。

「で、射精る……」

「ひ、ひきおのらくしゅんっ♡♡」

優美子は俺の射精でさらに絶頂してしまった。一度に快楽が押し寄せて意識が保てずに気を失ってしまった。だけど、マンコの締め付けは強くなった。

俺は優美子と繋がったまま露天風呂に入った。気を失った優美子をどう運んだらいいか分からなかったから。

「んっ……ヒキオのケダモノ」

「返す言葉ありません……」

「あーしが気絶するほどとか……声だつて周りに絶対、聞こえていたし」

「それは……その……」

「でも気持ちよかつたから許してあげる。んっ♡」
「んっ……」

優美子は気がついてから体勢を変えてからキスしてきた。舌が絡み合つて唾液が混ざり合つて頭を麻痺させてくる。

葉山もどうして優美子を振つたんだ？こんなにもいい女なのに？もしかして他に好きな奴がいるのか？まあ、どうでもいいけど。

「優美子！」

「あんっ♡ヒキオ、元氣過ぎだし……でもいいよ。んんっ♡」

「優美子！優美子！」

「ああっ♡んっ♡ああんっ♡」

優美子は俺の首に手を回してガツチリとホールドしてきた。優美子が腰を動かす度に露天風呂のお湯がジャブジャブと外に出て行く。

それだけ激しく腰を動かしている証拠だ。優美子のマンコは俺のチンコをギュウギュウと締め付けて気持ちいい。

「ゆ、優美子！で、射精る！」

「き、来てえええ♡ヒキオの熱いのドピュドピュ、ちようだい！」
「射精る！」

「い、いくうううう♡ひきおのあしゅい♡」

俺はついに射精した。優美子のマンコは俺の射精と同時に絶頂したようで先ほどよりも強く締め付けてきた。俺の射精はまだ止まらなかった。

優美子のマンコが俺のチンコから精子を搾り取ろうと蠢いている。頭が痺れて何も考えられない。

「ひきお……しゅきい♡」

「優美子！」

「うひい!?ひ、ひきお?」

「そんな事、言われたら余計に興奮するだろうが！」

優美子の絶頂した際のアへ顔での好き発言なんて興奮してしまう！俺は優美子の腰を掴んで持ち上げてから一気に降ろした。

優美子のマンコは絶頂を迎えたばかりで敏感になっており、一突きだけで俺のチンコをギュウギュウに締め付けてきた。

「ら、らめえ♡いったからっ♡」

「ならもう一回、いけ！」

「ああっ♡ひやあ♡ああんっ♡」

「優美子！」

俺は何度も優美子の腰を持ち上げては降ろした。先ほどよりも露天風呂のお湯がバチャバチャと溢れていた。優美子はより俺に抱きついてきた。

優美子の胸って最高に柔らかいよな。乳圧が最高です！だからさらに興奮してしまう！

「優美子！また射精るぞ！」

「ひきお！あんっ♡んんっ♡ひやああああ♡」

「で、射精る！」

「い、いくうううう♡……ひきおのあしゆすぎい♡」

俺は続けて優美子のマンコの一番奥に射精した。俺の精子が優美子の子宮に入りきらなかったのか、チンコとマンコの隙間から溢れてきていた。

優美子は連続での絶頂で体力を使い果たしたのか、ぐったりしていた。ちよつとやり過ぎてしまっただろうか？

「ヒキオ……やり過ぎだし」

「すいません……」

「気持ちよかった？」

「はい。それはもちろん！」

「ちゅっ♡……ならいい」

優美子は俺の頬にキスしてきた。高校二年の時からは想像も出来ない優美子だな。そもそも俺が優美子と付き合っただけでセックスまでする関係になるなんて想像出来るだろうか？優美子って結構尽くし

てくれるタイプだな。

「……ヒキオのまだあーしの膾内で硬い」

「いやーまだ発散出来ていないくて……」

「まだ夕食まで時間あるし……んんっ♡」

「んっ……優美子」

「ヒキオ……」

やはりあーしさんと旅行先でするのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡です。総武高校を卒業して大学生の今、俺は夏休みを満喫していた。課題の殆んどは終わらせているのであとはいくくりとするつもりだ。

高校の時の夏休みにはロクな思い出がないからな。2、3年と奉仕部でどこかに出かけては問題を解消したものだ。そのおかげで夏休みを満喫出来なかった。

毎年どこかに強制的に連れて行かれたので今回は携帯の電源を切っておいた。これなら連絡は出来ないだろう。

数日前に小町から連絡があったけど、無視しておいた。どうみても罨だったからな。

「ヒキオ！海、ちよー綺麗だし！」

「いい部屋だろ？」

「うん！」

俺は今、優美子と海が見える旅館にきている。当日に当然俺を連れて行く事が出来ない！何故なら俺は千葉には居ないから！

大学入学から少しずつバイトをして貯めて夏が終わる前に目標金額に到達して、こうして優美子を旅行に行けている。

優美子は大学入学前にはきっぱりと葉山との関係を終わらせていた。俺の目の前で葉山の連絡先を削除した。別にそこまでする必要はなかったんだけどな。

「ヒキオ……んっ♡」

「んんっ……優美子！んんっ」

「んっ♡ヒキオ、がつつき過ぎだし」

「わ、悪い」

「別に怒っているんじゃないし……もっとヒキオのちゅー、ちようだいい♡」

俺と優美子は部屋に入ってすぐにキスをした。優美子の唇は柔ら

かく、舌は俺の口の中に侵入して菌茎を舐め回してきた。

本当にエロ過ぎだろ！もう我慢出来ずにチンコが勃起してしまつた。早く優美子のマンコに挿入したい！

「ヒキオのチンコ……はむっ」

「うっ……優美子の口、温かくて気持ちいいぞ」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるるっ」

「おおお!!」

優美子は俺を椅子に座らせるとズボンを脱がして勃起したチンコを露にした。そしてすぐにフェラを始めた。優美子の口マンコは温かく気持ち良かった。

それに舌の動きだつて絶妙だ。舌をチンコに巻きつけたり、尿道の入り口を器用に攻めてきて、射精を促している。

「ゆ、優美子！で、射精る！」

「んんっ!?……んぐっ……んぐっ」

「ああああ……優美子、最高だ……」

「んぐっ……ヒキオ、射精し過ぎだし！」

「悪い……優美子の口マンコがあまりにも気持ち良くて……」

「そ、それならいいし……」

俺は射精の瞬間に優美子の頭を抑えて、精子を優美子の喉奥へと射精した。優美子は精子を零さずに全て飲み干した。

俺が素直な気持ちを言うとうと優美子は照れていた。照れる優美子は中々レアだぞ！写真に残しておきたい！

「っ、次はヒキオの番だし！あーしを気持ちよくしてよ」

「ああ。任せろ……じゅるるるるるっ」

「うひい♡そ、そこお！ひゃあああああ♡」

「じゅるるるるるっ……じゅるるるるるるっ」

今度は優美子を椅子に座らせてスカートにパンツを脱がして優美子のマンコを吸った。マンコからは次々と愛液が溢れてきていた。

吸ったり、舐めたりしても終わる気配がない。優美子は俺が舐める度に軽く絶頂していた。

「じゅるるるるるっ……」

「ああ♡んんっ♡んひいいいい♡」

「じゅるるるるっ……優美子」

「ひ、ひきおお……♡」

優美子は連続で絶頂した所為で顔は真っ赤になっており、腰が少し椅子から浮いていた。クリトリスは攻められて皮が剥けていた。

優美子は自分でマンコを広げて、早く俺のチンコを挿入して欲しがっていた。俺は優美子のマンコに勃起して爆発寸前のチンコを挿入した。

「うひいいいい♡き、きたああああ♡」

「のおおお……!!優美子、締め付けが強い!」

「んああ♡ああっ♡ああんっ♡」

「優美子!優美子!」

俺は必死に腰を激しく動かした。優美子のマンコはやはり気持ちよくすぐにでも射精してしまいそうになるが、ぐっつ我慢した。

ここで射精しては勿体ない。限界まで我慢して優美子の絶頂と同じの方が絶対がいい。そうすれば、最高に気持ちよくなれる!

「優美子!もう射精るぞ!」

「ヒキオ!んんっ♡」

「んっ……で、射精る!」

「ひやああああああ♡ひきおのあしゅい♡」

優美子とキスした瞬間に射精してしまった。優美子は絶頂してマンコが締め付けてきた。俺の精子が優美子の子宮に大量に注いでいる。

俺が優美子から離れるとマンコからは精子が逆流してきていた。絶頂した優美子の顔は本当にエロかった!

「優美子。大丈夫か?」

「う、うん……腰、抜けた」

「そ、そうか。出かけるのは無理だな」

「うん。だから運んで」

「了解……よつと」

腰が抜けた優美子をお姫様抱っこで部屋にある露天風呂に運んだ。

湯船に浸かった俺の太ももの上に優美子は乗ってきた。

優美子のお尻が俺のチンコを刺激してくる！止めて！そんなに刺激されるとまた挿入したくなるだろ！

「ヒキオのまた硬くなった……」

「魅力的なお尻がそこにあるからな」

「あーしのお尻だけ？」

「ゆ、優美子の全部が魅力的です」

「よろしい」

優美子は湯船から体を出すとお尻をこちらに向けてきた。視線を少し俺に向けて、その顔はもの欲しそうな顔をしていた。

俺は何も言わずにそのままバックで優美子のマンコにチンコを挿入した。

「うひい♡ひ、ヒキオのチンコがあーしのマンコをコツコツ叩くううう♡」

「優美子のマンコの締め付けが強い！」

「ああ♡んあ♡ひゃああああ♡」

「き、キツイー！」

バックで挿入した優美子のマンコは正面から挿入するより強く締め付けてきた。チンコの先がマンコの奥の子宮の入り口を何度も叩くとマンコの締め付けが強くなる。

もの凄い圧迫感が俺のチンコを刺激してくる。それにしても葉山も勿体ない事をしたな。優美子は最高に抱き心地がある女なのに。

「優美子！おらおらー！」

「ああ♡うひい♡んああ♡」

「これならどうだ？……はむっ」

「ひゃあ!?!み、耳らめえ♡」

俺はバックで突きながら優美子の耳に甘噛みした。すると優美子のマンコの締め付けが強くなった。優美子は耳がかなり敏感でここを攻められると締め付けが強くなる。

俺はそれだけじゃなく乳首にクリトリスをすり潰すように摘んだ。

「うひい!?!び、乳首にクリ……らめえ♡」

「でも体は喜んでるぞ?」

「ひゃああああああ♡ら、らめえ……頭、おかしくなるううう♡」

「ならもっとおかしくてやるよ!おら!」

「ああああああ♡」

俺はもつと腰の力を強く突き出した。耳に乳首、クリトリスをもつと攻めた。優美子はかなり大きな声で感じているようだった。

その声の大きさに比例してマンコの締めまりが強くなってきている。そろそろ俺の我慢の限界だった。

「優美子!もう射精るぞ!」

「き、来てえええ♡ヒキオのあしゆいのたくしやん、あーしのナカにっ♡」

「で、射精る!」

「い、いくうううう♡ああああああ♡」

俺の射精と同時に優美子は絶頂した。マンコの締め付けが強く膈内の蠢きが強くなった。マンコが俺のチンコから精子を根こそぎ奪い取ろうとしているようだ。

俺は射精しながら腰を動かしていた。頭の中が真っ白になり、ゆっくりと優美子から離れた。

「ヒキオ……射精し過ぎだし」

「わ、悪い。優美子のマンコがあまりにも気持ちよくて……」

「ど、同然だし!」

優美子の股からは俺が射精した精子が逆流していた。優美子はお尻を向けたまま、片手でマンコを開いて見せた。精子が逆流しているのがエロい!

「ヒキオ。あーし、まだ満足出来ていないんだけど」

「お、おう!任せろ!」

「うひい♡ああ♡ああんっ♡」

「まだまだ!」

その後、露天風呂で二回、部屋に戻って一回ほどした。旅行で来たはずなのに部屋からは一歩も出ずにセックスばかり部屋ですてしまった。

これじゃ旅行に来た意味がないんだけど、優美子はそれでも良かったようだ。まあ、俺もどちらかと言うと部屋に引き籠もっていたタイプだ。

「ヒキオ。今度はちゃんと旅行するし！」

「そうだな。折角、来たのに部屋に籠っては駄目だよな」

「そうだし！次はあーしが計画するから！」

「分かった。任せる」

一泊二日の旅行は部屋から出る事無くセックス三昧で終わってしまった。まったく計画した本人が旅行そっこのけとはどうかと思うぞ？

でも旅館と言う少し開放的な場所でするのも悪くないと思ってしまった。次は優美子が計画するから俺はバイトをして金を少しでも貯めておくかな。

「海もいいけど、次は山でキャンプ！」

「そうだな。道具とかレンタルするか」

「うん！」

俺と優美子は一泊した旅館を出て家に戻る事にした。ちなみに帰ってから携帯の電源を入れてみると100件近い着信があった。

由比ヶ浜と平塚先生が大半だったので、メールで無理とだけ返しておいた。

やはりあーしさんと旅行を計画するのはまちがっている。

うつす比企谷八幡です。先日、優美子との温泉旅行から無事に帰還した俺は小町と両親にお土産を渡してすぐにベッドへと直行した。疲れた、色々。

旅行先では温泉に入るか優美子とセックスしているかの二択だったからな。そもそもインドア派の俺がいくら温泉街に来たと言って積極的に温泉に入る訳がない。

まあそれなり温泉には入ったんだけどな。それにしても最高に良かった。それと帰ってから小町から説教を言われた。

雪ノ下たちとの卒業旅行にどうして行かなかったのか、と。俺は素直に知らないから文句を言わないでくれと言った。

それとスマホの電源を入れてみると平塚先生や雪ノ下、由比ヶ浜からの着信が大量にあったので、メールで温泉旅行に行った事を簡単に報告した。

帰ってきたメールには罵詈雑言の数々だったけどな。

だから俺は事前に旅行の事を教えなかった雪ノ下たちが悪いと言添えた。それと優美子からのアドバイスで俺が優美子と付き合う事も報告した。

すると雪ノ下と由比ヶ浜からメールが来なくなった。それと平塚先生からは羨ましいのメールが数十件ほどやってきた。

最初の方だけ見て、あとは読まずに削除した。それにしても雪ノ下と由比ヶ浜はどうしてメールを送らなくなったんだ？

でもどうでもいいか。総武高校を卒業して、大学はあいつらとは別なので会う事はないだろう。会ったとしても街でばったりがいい所だろう。

今は別の事を考えなくてはならない。今、俺の部屋には優美子が来ている。俺のPCの前で画面に食らいついている。

「ヒキオ。次、あーしは海が見える場所に行きたいんだけど」

「そうだな……」

「まだ時期じゃないけど、寒い海を見るのはそれはそれでいいと思うんだけど」

「そうだな……」

「ヒキオ。ちゃんとあーしの話を聞けし！」

「だったらベッドに寝転ぶな！」

優美子は今俺のベッドの上で足をパタパタと動かしている。しかもスカートを履いているのでパンツが見えてしまう！

この女には恥じらいつてものがないのか!? 由比ヶ浜じゃないんだからもっとスカートは長くしろよ。

「何度もあーしを抱いた男とは思えないし」

「それは悪かったな！だから足を動かすな！」

「あーしの下着に興奮した？」

「ホント、頼むから動かさないで……」

優美子は俺のPCで何をしているんだ？まさか、俺の秘蔵のAVを探しているんじゃないよな!? もしそれを削除されたら俺は普段、何をオカズにオナニーをすればいいんだ!? 頼むから消さないで！

「ヒキオ。ちよつとこっち見て」

「何だよ……おい、何しているんだ!？」

優美子はこちらに向かって股を開いていた。しかもスカートを捲り上げていた。本当に何がしたいの!？」

それに優美子のマンコが濡れている。もしかしなくて興奮しているのか？俺はゆつくりと優美子のマンコに顔を近づけた。

優美子のマンコからはパンツ越しでも分かるくらい発情した牝の匂いが立ち込めていた。その匂いを嗅いだ俺はチンコを勃起させていた。

「ぢゅるるるるるっ……」

「んっ♡あんっ♡んんっ♡」

「ぢゅるるるるるっ……ぢゅるるるるっ……れろっ」

「ああっ♡ひゃあ♡」

そして俺は気がついた時には優美子のマンコをパンツをズラして

舐めていた。優美子のマンコは俺が舐める度にどんどん愛液を溢れさせてパンツを濡らしていた。

愛液は舐めても舐めてもどんどん溢れてくる。そしてマンコを舐める度に優美子は感じているエロい声を出していた。

「ぢゅるるるるるっ……………」

「ひいひいひい♡♡♡ひひ、ひきお……………激しすぎだし……………」

「優美子。俺のも頼む」

「はいはい」

俺はズボンを脱いで勃起したちんこを露にした。今度は俺がベッドに座り、優美子が俺の股に顔を近づけた。そして俺のチンコを咥えた。

「はむっ……………ぢゅるるるるっ……………ぢゅるるるるっ……………」

「のおおお!!」

「ヒキオの大きすぎて顎が外れるし。ぺろっ」

「ゆ、優美子!」

「んんっ!」

俺は優美子の頭を掴んで強引にチンコを咥えさせて前後させた。

優美子の口は温かくてヌルヌルしていて気持ち良かった。

優美子は苦しそうに涙目になっていたけど、俺はそんな事なんて気にせずに優美子の顔を掴んで腰を激しく振った。

「優美子!で、射精する!」

びゅるるるるるるびゅるるるるるるっ……………びゅるるるるるるびゅるるるるるっ

……

「んぐっ……………けほお……………けほお……………ヒキオ、射精し過ぎだし!」

「悪い……………」

優美子の口の中に思いっきり射精してしまった。苦しそうだったけど、優美子は嫌がらずに全部飲み干した。もつと優美子を犯した。い。

俺は優美子をベッドにうつ伏せに押し倒した。優美子のマンコはもう待ち切れないと言わんばかりに蒸れていた。

ずずずずずっ……………ぱんっ!!

「はひい!?お、おくにっ♡」

「のおおおお!!」

俺はチンコを優美子のマンコの一番奥まで一気に挿入した。優美子のマンコは俺のチンコをギュウギュウに締め付けてきた。

やはりマンコは後ろから挿入するのが一番奥まで届くな。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひゃあ♡んんっ♡ら、らめえ♡ひ、ひきおっ♡♡」

「優美子!もつと激しくするぞ!」

「ま、まれって!ひいひい♡♡」

「待たん!」

俺は必死に腰を動かし続けた。優美子は相当、感じてくれているように学校で聞いた事もないエロい声を出している。

その声を聞くと学校の時を思い出してギャップでさらに興奮する

!

「優美子!もう射精るぞ!」

「らめえ♡ひいまらあ♡」

「ぐっ……で、射精る!」

びゆるるるるびゆるるるるっ……びゆるるるるびゆるるるっ

……

「ひゃあああ!!……ひ、ひきおのあしゆいのらくしゅん……」

優美子のマンコの一番奥に俺の精子を大量に注いでいる。そして子宮に入りきらなかった精子がマンコとチンコの隙間から逆流してきた。

俺は一度、優美子から離れると勢いよくマンコから精子が逆流してきた。

「ひ、ひきおっ♡らしゆいぎい♡♡」

「その……すまん」

「あーひいのらんこお……がはがはにい♡」

「本当にすまん!」

俺はとりあえず誤る事にした。まあ、誤って済めばいいけど!優美

子なら許してくれるだろう。そう思っていた。

だけど、実際は全然違っていた。今度は俺がベッドに押し倒される事になった。

「あのく優美子さん？これは……」

「今度はあーしがヒキオをひいひい言わせてやるし！」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「んんっ♡ヒキオのチンコ、射精したのに硬いつ♡」

「のおおお!!」

優美子が腰をゆつくりと下ろしてきた。優美子のマンコは俺のチンコをギュウギュウに締め付けてきた。この感覚は頭が真っ白になってしまう。

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「ああっ♡んんっ♡はひい♡」

「ゆ、優美子！ヤバい、もう射精しそうだ」

「ま、まだあ♡がまんしろしっ♡」

「そ、そんな!？」

優美子は腰を上下させて俺のチンコを刺激してくる。この状況で射精が出来ないなんて生殺しもいい所だ！

俺は優美子の腰に手を伸ばそうとしたが、優美子が俺の手首を掴んで押さえつけてきた。

「ヒキオはそこでじっとしてろしっ♡」

「頼む！自分で動かしたいんだ！」

「だーめえ♡んんっ」

「んんっ!？」

優美子は俺とキスしながらも腰を激しく上下させてきた。下半身と上半身で違う気持ち良さが襲ってきた。

優美子のマンコにチンコがいいようにされているし、口も優美子の舌が俺の口の中に入って来て歯茎をなぞっている。

「ぶあ……あーしの唾液はどうだったし？」

「あ、いや……その……」

「聞かなくても分かるし。美味しかったんでしょ？」

きつと俺は顔が真っ赤になっているんだろうな。優美子のニヤついた顔を見てもちつともイラつかない。

でもそろそろ射精の限界が近い。早く優美子のマンコの一番奥に射精したい！

「優美子！もういいだろ!? 射精させてくれ！」

「たくさん、あーしに射精しなっ♡」

「っ!? で、射精る！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「い、いくうううう♡♡はあ……はあ……」

優美子が俺の耳元で囁いた言葉で栓が外れて一気に射精してしまった。優美子は絶頂してしまい、そのまま俺に向かって倒れこんだ。

まだ全然、興奮が収まらない。それどころかもっと興奮してきた。

「ヒキオのあーしの膣内で大きくなり過ぎでしょ」

「そ、それは優美子があまりにも魅力的だから……」

「ヒキオでもそんな恥ずかしい事、言えるんだ」

「頼むから忘れてくれ。俺の黒歴史！」

「録音したから無理だし」

「いつの間にも!？」

優美子の手にはいつの間にかスマホが握られていた。さっきの恥ずかしい俺の黒歴史が録音されたとか最悪だ！すぐにでも消さない

と。

「頼む優美子！消してくれ!!」

「それならもつとあーしを気持ちよくしてくれたらいいよ」

「分かった！」

俺は優美子から離れずに今度は俺が上になるように優美子をベツドに押し倒した。俺の黒歴史を絶対に消さなければ！

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「あんっ♡んっ♡ああっ♡」

「優美子！」

「ひきおっ♡あーし……もうっ♡」

「たくさん射精してやるからな！で、射精る！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「ひゃああああ!!」

腰を激しく動かして最後に優美子のマンコの一番奥で射精してやった。金玉の中の精子を全て出し切れ！優美子を満足させるんだ！

俺は射精しながら腰を動かした。精子のおかげで滑りがスムーズに出来ている。

「い、いくうううう♡♡♡」

「ゆ、優美子……もう無理」

俺と優美子は気絶するように繋がった状態で眠りについた。なんとか黒歴史の削除に成功した。あまり優美子の前で恥ずかしい事は二度と言わないぞ。

そして次の旅行先は海の見える旅館に決定したのだった。

比企谷小町

やはり妹を犯すのはまちがっている。

うつす比企谷八幡だ。今、俺は不機嫌になっている。その理由と言うのが修学旅行での嘘告白だ。依頼の解消をするために俺は戸部の目の前で海老名さんに告白した。

結果はもちろん振られた。おかげで戸部が海老名さんに振られる事はなくなっただけ、雪ノ下と由比ヶ浜の二人に何故か責められた。依頼を俺に丸投げしておいて、どうして責められなければならぬんだ？ だったらお前らは何かしたのか？ 何もしていないだろうが！ しかも俺が止めておけと言ったのにも関わらず最終的には俺を巻き込んだくせに。そこはまあ、俺にも責任はあるだろう。

問題は帰ってからだ。小町が煩わしいのだ。

「ちよつと聞いているの!? ごみいちゃん!!」

「……………」

「結衣さんと雪乃さんから聞いたんだからね!」

「……………」

「ごみいちゃんの分際で無視すんな!」

修学旅行の次の日からこの有様だ。由比ヶ浜と雪ノ下が余計な事を小町に吹き込んだな。しかも自分たちに都合がいいように美化して話したな。

海老名さんからの依頼の事をまったく話していない。それだけ俺を悪者にしたいううだ。

雪ノ下、お前は俺の性格を変える依頼を平塚先生からされていなかったか？ 由比ヶ浜、お前は恋愛すらした事がないのに他人の恋愛事情に首を突っ込んで責任が取れるのか？

自分たちでは何も出来ないと分かると俺に丸投げして、否定だけするとかお前ら人間としてどうかしているぞ!

「ごみいちゃん! 聞いているの! 結衣さんと雪乃さんに謝ってよ! それまでお父さんとお母さんに言っつて、ご飯抜きにしてもらおうよ!」

「……………」

「何?」

「黙れ!」

「ひい!?お、お兄ちゃん?」

俺は我慢の限界を迎えて産まれて初めて小町に対して怒鳴ってしまった。そもそも誰かに怒りを向けるのが初めてか。

いつもは誰かの怒りを向けられる側だったからな。それにしても小町の怖がっている顔は何故かそそられる。

先ほどまでの態度が一変したな。俺に対して優位に立っていたはずなのに怒鳴って逆転するものなんだな。

「お、お兄ちゃん?」

「黙れ。誰が喋っていいと言った?」

「ご、ごめんさない……………」

「だから黙れと言っている」

「……………」

小町は先ほどと違い、下を視線を向けている。なんだか新たらしい自分を見つけたような感覚だ。もっと早くしていれば、こんな事にはならなかったんだろうな。

俺は小町に近づき、真つ正面に立った。小町は視線を上げて、俺の顔を伺っていた。それにしても俺はどうしてこんな生意気な妹に従っていたんだろうか?

従うべきは小町ではないのか? そうだ、これまでの力の関係が間違っていたんだ。

「小町。服を脱げ」

「え? い、嫌だよ」

「脱げと言っているんだ!!」

「ひい!?ぬ、脱ぐから怒らないで……………」

小町は恐る恐る服を脱いで下着姿になった。中三と由比ヶ浜を比べるのは流石に失礼だよな、小町に。

それにしても二、三歳違うだけであれほど胸が大きくなるとかあいつの成長はどうかしているな。俺は小町の胸に触れた。

小町は抵抗する事無く俺に胸を触れさせた。先ほどの怒鳴った事が余程怖かったのだろう。

「んっ……お、お兄ちゃん。こんな事、やめよ？」

「また喋ったな……」

「ご、ごめんなさい……」

「下着も脱げ」

「……………」

小町は黙って下着も脱いだ。胸の大きさは雪ノ下といい勝負か？下は毛が生え揃っていない様に見える。そもそも女性の性器を見るのが始めてだ！

「ちゅっ……んっ」

「んんっ!？」

俺は小町にキスをした。ファーストキスが妹とか周りに知られたらドン引きものだな。そもそも親にバレた時点で終わるな。

俺は小町にキスしながら股に手を伸ばして、マンコに指を侵入させた。小町のマンコは少しだけ濡れていた。

もしかして怒られて漏らした？指の匂いを嗅いでみて、確信した。

小町は漏らした。

「すんすん……少しアンモニアの匂いがする」

「に、匂いを嗅がないでえ……」

「初めて兄に怒られて漏らしたか？」

「そ、それは……」

俺は小町をテーブルの上に乗せて、足を大きく開いた。これで小町の成長途中のマンコがよく見える。

「お、お兄ちゃん！やめて！見ないで！」

「小町のマンコから厭らしい匂いがするな。すんすん……」

「匂いを嗅がないで！もうやめて！」

「ぢゅるるるるるっ」

「ひひひひひひ!!?」

俺は小町のマンコを舌で舐め回したり、吸ったりした。小町のマンコからは愛液と思われるものが大量に溢れて来た。

俺はそれを綺麗になるように舐め続けた。しかし愛液は止まる事無くどんどん溢れてきた。

「ぢゆるるるるるっ……ぢゆるるるるるっ……れろっ」

「ひいひいひい!!?お、お兄ちゃん!そこ、舐めないでっ!」

「ぢゆるるるるっ……ぢゆるるるるっ」

「ひゃああああ!!?」

「しゃああああ……」

「だ、だめえ!止まって!」

小町は潮を噴き出して小便を漏らした。小便は勢いよく出て床を濡らした。小町は顔を両手で覆い、顔を隠した。

きつと酷い顔になっているのだろう。しかし小町が漏らした瞬間、俺の中で何かが産声を上げた。

俺は小町が漏らした事に興奮を覚えてしまった。もつと小町の恥ずかしい瞬間を見たい、と。俺は記念に写真を何枚か撮った。

「と、撮らないで!すぐに消して!」

「はあ?また勝手に喋ったな」

「ひぐっ……ひぐっ……も、もう止めて……お母さんにもお父さんにも言わないから……」

小町はガチ泣きしてしまった。そんな顔を見せるなよ、もつと興奮するじゃないか!ヤバいな。もう我慢出来ない。

俺はズボンとパンツを脱いで下半身を露出して、小町をテーブルの上で押し倒した。

「ひい!!?」

「小町……」

「い、嫌!離して!」

小町はこれから起こる事を理解して必死になって暴れた。だけど、男で高校生の俺の腕力を中三の妹が暴れた所でどうこう出来る訳もない。

俺のチンコが小町のマンコに触れた。小町は初めての感触に顔を真っ青にして暴れた。

「いや!離してお兄ちゃん!もうバカになんかしないから!誰にも言

われないから！小町たち、兄妹なんだよ!？」

「だからなんだよ。千葉の兄妹なんだから愛し合って何が悪いんだ？」

「嫌だ！お兄ちゃんとなんて!」

「酷い言い草だな……もう遅いけどな」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「うぎい!?!、痛い……」

俺のチンコが小町のマンコに挿入されて、処女膜を貫通した。これで小町は大人の女性の仲間入りをした訳だ。小町の股からは赤い血がツツと流れいた。

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!」

「い、痛い……う、動かないで!」

「小町のマンコ、凄いい締め付けだな」

「い、嫌あ！お願い！抜いてえ!」

「小町!」

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!」

「ああっ♡うひい♡あんっ♡」

俺が腰を激しく打ち付けると小町は感じた声を出し始めた。それに膣内の締めまりがさつきよりキツくなってきた。

興奮が収まらない。妹を犯すところなんにも興奮するんだな！もつと小町を犯したい！今まで溜め込んだ気持ち爆発して止められない!」

「小町!で、射精るぞ!」

「い、いやああ!!赤ちゃんはだめえ!それだけはいやだあ!」

「で、射精る!」

「びゅるるるるびゅるるるる……びゅるるるびゅるるる……」

「あああああ!!……ひぐっ……ひぐっ……あかちゃん……いやあ……」

射精が止まらない。小町のマンコの一番奥の子宮に俺の精子を大量に注いでいる。小町は手で顔を隠している。

それにしてもショックだな。兄に精子を注いでもらえるんだぞ？妹ならそこは嬉しそうにするのが普通だろ？

俺は小町を風呂へ連れて行つた。流石に汚しすぎたからな。このままでは両親にバレてしまう。

「お、お兄ちゃん……何するの？」

「精子を掻き出してやるよ。動くな」

「う、うん……ああっ♡んんっ♡」

俺は小町のマンコに指を挿入して精子を掻き出した。小町は感じている声を必死に我慢しようとしているけど、それは逆効果だ。

その声を聞くと興奮して、チンコが勃起した。今は小町のマンコから精子を掻き出す事が優先だな。犯すのは後でも出来る。

「しゃああああ……」

「ひひひひひひ♡♡♡はあ……はあ……」

小町は潮を噴き出して絶頂した。小町は肩で息をして、意識は朦朧としていた。俺は小町の手を壁に付かせて、尻を俺の方に向けさせた。

小町は何をされているのか理解していなかった。今の内にまた犯しておかないと両親に喋りそうだからな。

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「うひい♡お、お兄ちゃん!？」

「小町のマンコ、最高の締めりだぞ」

「い、いやあ!もう止めて!」

「それ無理」

「ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!ずずずずず……ぱんっ!!」

「ああっ♡んんっ♡はひい♡」

小町はもう完全に感じた声を抑える事が出来ないでいた。そろそろ終わりにしておかないとな。両親が帰ってくる前にテーブルの上を綺麗にしておかないと。

社畜の二人は帰りは遅いからな。まだ時間はあるかもしれないけど、万が一早く帰って来る事もあるからな。

「小町！また射精るぞ！」

「もういやあああ!!」

「で、射精るぞ！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「ああああああ♡♡♡」

「しゃああああ……」

小町は俺の射精と同時に絶頂して今度は小便を漏らしていた。そして気絶するように眠ってしまった。処女相手に少しやり過ぎてしまっただろうか？

いや、これまでの小町が俺にやってきた事を考えれば、この程度なんて軽いものだろう。でも妊娠は怖いから避妊薬を手に入れておくか。

しかし小町のマンコがこれほど気持ちいいなんて、知らなかった。やはり千葉の兄妹は結ばれる運命って事だな！

「おっと、小町を部屋に連れて行かないと。あと部屋の掃除をしないと」

俺は両親が帰ってくるまでにすべての事を終わらせた。念のために小町の股から精子が流れている写真を数枚、撮っておいた。

これを見せれば両親や周りには言わないだろう。さて、俺も寝るか！

やはり妹をまた犯すのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡です。俺は昨日、とんでもない事をしてしまった。妹の小町を感情のまま犯してしまったのだ。そして今、賢者タイムに入っています。

昨日の俺はどうかしていたんだ。修学旅行での事で雪ノ下や由比ヶ浜に色々言われて、帰って小町にも色々言われて我慢していたものが爆発した。

そして気が付いた時には小町は俺のチンコで犯していた。処女である小町を俺は散々犯してしまったのだ。

涙を流して嫌がる小町を俺はチンコと精子で汚してしまったのだ。「ひい!?お、お兄ちゃん……お、おはよう」

「お、おう。おはよう……」

「こ、小町。もう行くね」

「あ、ああ……」

今朝だつて顔を合わせた途端、視線を逸らしてそそくさと家から出て行ってしまふ始末だ。どうしたらいいんだ!?

俺は帰ったら小町に謝る決意をした。どんな事しても小町に許しを貰うんだ!でなければ俺は生きていけない!

そして俺は学校へ行つて授業を受けて、放課後になると奉仕部の部屋には行かずにすぐに家に帰った。雪ノ下や由比ヶ浜は俺となんて一緒に居たくはないだろうしな。

「小町……」

「ひい!?な、何?」

「済まない!謝って済む事ではないのは十分に理解している」
「……………」

「でも謝らせてくれ」

「こ、小町も色々と言ったから……」

小町はどこか申し訳なさそうにしていた。色々言ったのを気にしていたんだな。でもまだ顔は俺の事を怖がっている!

何とかして俺への恐怖心を取り除かないと!俺は帰りに買ったコ

ンビニスイーツを取り出した。これ、結構高かったんだよな。

「これで許してくれ！」

「お、お兄ちゃん……わ、分かった」

「そ、そうか……」

何とか小町の許しを得る事が出来た。これで一安心だな。でも油断は出来ない！小町の表情は少し曇っている。まだ警戒している証拠だ。

それに小町との距離を感じる。無理もないか、あんな事があったんだから。

「そ、それでどうしてあんな事をしたの？」

「えっと……それは……その……」

「どうしたの？」

「分かった。全部、話す……」

俺は小町に全ての事を話した。戸部、海老名さん、葉山の依頼と雪ノ下と由比ヶ浜の二人から自分たちでやる事や俺がした事に対する暴言など包み隠さずに。

最後まで小町は聞くと顔色を悪くしていた。どうしたんだ!?

「こ、小町?大丈夫か!」

「ご、ごめんなさい……小町、全然知らなくて」

「雪ノ下と由比ヶ浜は都合のいい部分しか話していないんだろう」

「う、うん……」

まったくあの二人は！俺を悪者にしたんだ!?!だけど、小町は俺の味方になってくれたから二人の事は二度と信用しないだろう。

すると小町がいきなり服を脱ぎだした。一体、どうしたんだ!?

「こ、小町!?!」

「こ、これで小町を許して欲しいです……」

「いや、服を着ろ！」

「これしか小町は償えないと思うから……」

小町は胸と局部を手で隠している。顔には不安と恥ずかしさで今にも泣きそうになっている。だけど、逆にそれがそそられる!!

今すぐ小町を押し倒して犯したい！俺は小町に手を伸ばした。

「小町ーんっ」

「んんっ!?!……んっ……」

俺は小町を抱き寄せてキスした。小町は最初は驚いていたけど、段々と慣れてきたのか肩の力が抜けてきたと思う。

それにしても小町の唇が最高に素晴らしいのだけどー!なんだ、この柔らかい感触は!?!小町の熱が唇から伝わって来る。

「あんっ♡んんっ♡お、お兄ちゃん……そ、そこあまり触らないでっ♡」

「小町のマンコ、もうグチョグチョに濡れているじゃないか」

「ら、らめえー!ひいひい!!」

俺は小町のマンコへと指を挿入して掻き回した。ちよつとだけしか触っていないのに小町のマンコは大洪水になっていた。

どれだけ期待しているんだ?しかしこれは期待に答えないといかないよな。俺は小町のマンコへ挿入した指を激しく出し入れた。

指を出し入れする度に小町のマンコからは愛液がドバドバと溢れてきた。

「ひいひいひい♡♡♡……はあ……はあ……お、お兄ちゃんの指、しゅん♡」

「小町のマンコをもつと解さないとな」

「お、お兄ちゃん!?!」

「ぢゅるるるるるっ……」

「うひい♡」

俺は小町の片足を上げさせて、そのまま膝をついて小町のマンコを吸い付いた。溢れ出る愛液を一滴も零さないように飲んだ。

ヤバい、小町の愛液がとてつもなく美味しい!!これならいくらでも飲んでいられるー!

「ぢゅるるるるるるっ……」

「あんっ♡お、お兄ちゃんっ♡ら、らめえ♡はひい♡♡♡」

「ぢゅるるるるるるっ……ぢゅるるるるるるるっ」

「ひゃああああ♡♡♡はあ……はあ……」

小町は絶頂したようで床に座り込んだ。その際の小町の顔は頬を

赤くして、目をトロンっとして発情した牝の顔をしていた。

いや、発情した牝の顔って何だよ！見た事あるのか!?それよりも早く小町を犯さなくては！

「小町ー!」

「きやあ!?!お兄ちゃん!?!」

「もう行くぞー!」

「お兄ちゃん……うん、来てっ♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ああっ♡お兄ちゃんが……深いっ♡」

小町のマンコに俺のチンコを深く挿入した。小町の中学生マンコの締め付けは強く意識を強く持たないとすぐにでも射精してしまいそうだ。

「小町!もう射精るぞー!」

「お兄ちゃん!来てっ♡」

「で、射精るー!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「ひやああああ♡♡おにいちゃんのアシゅいのたくしやん……」

小町のマンコが一番奥に精子を大量に射精してやった。それにしても小町のマンコがここまで気持ちいいなんて驚きだ。

やはり千葉の兄妹は愛し合う運命だったんだ。その証拠に俺のチンコはまだ小町のマンコの中で硬いままだ。

「小町。まだ出来るか?」

「まだするの!?!こ、小町は体力的に難しいかな?」

「そこを頼むよ!」

「わ、分かったから!はひい♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!

俺は腰を激しく動かした。あと一回が小町の限界ならこの一回を大切にしなければならぬのだけど、そんなのは無理だ。

もつと小町を犯して、俺以外の男なんて目に入らないようにした

い。

「小町！んっ」

「んんっ!?お、お兄ちゃん……激しいよっ♡」

「小町が可愛いのが悪いんだぞー!」

「そ、そんなっ♡はひい♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

小町は俺がチンコで突く度に膣内をギュウギュウに締め付けてきやがる。小町は先ほどから体を震わせている。恐らくだけど、軽く絶頂し続けているのだろう。

「はひい♡んんっ♡お、おひいらん……」

「小町！小町!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ひゃああああ♡♡♡」

俺は小町のアへ顔を見て、興奮してしまった。だらしなく鼻水や涎、汗を流しながらも嬉しそうに顔を赤く染めている。

俺は小町の腕を押さえつけた。逃げられないのにごこまでする必要はないんだけど。でも本能がこうしろと言っている。

「小町!で、射精るぞー!」

「お兄ちゃん!小町、飛んじやう!」

「安心しろ!俺がしっかりと掴んでやる!」

「お兄ちゃん!んんっ」

「んっ……うっ!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「んんんっ♡♡♡……おひいらんのあしゅいのらくしやんっ♡♡♡」

俺はまたしても小町の子宮の一番奥に俺の精子を大量に注いでやった。もしかしたらこれで小町は妊娠したかもしれない。

それでも別にいい。親父に殴られてもそれでも構わない。だって、

小町を抱けたのだから。しかも今回は同意したからな。

「お兄ちゃん……お腹、熱いっ♡」

「小町……最高によかったぞ」

「ホント!?小町は嬉しいよ!」

「この間はごめん……」

「うん……小町もお兄ちゃんの話の聞かなかったし……」

今日はいいい日だ。小町と仲直りだかではなく、相思相愛になったんだからな!もつと小町を犯したいけど、体の小さな小町をこれ以上、酷使は出来ない。

俺は小町から離れた。俺が離れると小町の股から俺が射精した精子が大量に逆流してきた。どれだけ射精したんだ、俺は!?

「はむっ……ぢゆるるるるるっ」

「のおおお!!こ、小町!」

「お兄ちゃんのおチンチン、射精したのにまだ固いね」

小町は俺のチンコを啜えてフェラしてきた。小町の口は生温かく、ぎこちなくて最高だった。そんな事をされたらもつと犯したくなるだろうが!

「ぢゆるるるるるっ……ぢゆるるるるるっ……どう?気持ちいい、お兄ちゃん」

「ああ、もつとしてくれ。腰が抜けてしまいそうだ」

「うん!はむっ……ぢゆるるるるるっ」

「小町!」

びゆるるるるるっ……

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

俺は小町の頭を抑えて射精した。小町の口マンコに最後の一滴まで精子を注いでやった。小町は零さずに全て飲み干してしまった。

もう駄目だ!俺は再び小町をベッドに押し倒した。小町も続きを望んでいるようで何も言っていなかった。

「小町。覚悟しろ」

「うん……お兄ちゃんっ♡」

「小町!」

「お兄ちゃん……ひゃあああああ♡♡♡」

俺はそこから朝まで小町と体を重ねた。ベッドは振動でギンギンと軋み、部屋は汗や精子の匂いで臭くなっていたけど、今の俺たちはそんな事など気にしなかった。

そして朝日が昇る頃には小町は俺のベッドの上で精子まみれになっていた。流石の俺も疲れてそのまま小町の横で眠りについた。

明日はベッドと部屋を綺麗にしてから小町をまた犯すとするか。念のために避妊薬は用意しておくか。まだ間に合うよな？

俺は小町の寝顔に満足して意識を手放した。人生で最高の日だったな！

やはり妹とくっつくのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は今、人生で一番幸せを感じている。それは妹の小町と体と心を通わせた事だ！やはり千葉の兄妹は相思相愛になる運命だったのだ！

そして二度、小町と体を重ねて今はベッドと一緒に寝ている。昨日は小町を散々抱いたので疲れてしまった。

小町は俺以上に疲れた事だろう。今も気持ち良さそうに眠っている。小町の寝顔をこんなにも近くで見られるなんて、もう死んでも悔いはない！

「んんっ♡……お兄ちゃん」
「っ!？」

ヤバかった！小町の寝言に襲いかけてしまった。寝込みを襲うなんて事はしないぞ。雪ノ下さんが言っていたように俺は理性の化物なのだから！

それにしても小町の寝顔はいつまでも見ても飽きないな！次の瞬間、小町は寝返りをした。その所為で小町の下半身が露になった。俺は小町にかかっている布団を除けて、小町をうつ伏せにして挿入した。

「小町。すまん……」
「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「はひい!？お、お兄ちゃん！な、何しているの!？」
「動くぞ」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「ああっ♡あんっ♡んんっ♡」
「小町！小町！」

「お、おにいちゃん……ま、まって！ああああ♡♡」

小町は軽く絶頂したようだ。気持ち良さそうに卑猥な声を出した。これだけ大声を出せば両親が気が付くだろうけど、あの二人は今も絶賛社畜中で家にはいない。

「小町！で、射精るぞ！」

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!

「ああっ♡んっ♡うひい♡」

小町は俺のチンコで突かれているのが気持ち良過ぎてまともに反応出来ていなかった。まあ、別にいいか。俺はさらに腰を激しく前後させた。

「小町！射精る！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「ああああああ♡♡♡」

「おおおおおお……射精る射精る」

「お、お兄ちゃんの熱いのが小町のお腹にいつぱいっ♡♡」

俺はそのまま小町を潰すようにベッドに倒れこんでしまった。朝から最高に気持ちいい射精が出来たぜ。やはり妹との兄の相性は抜群と言う事だな！

「小町。汗、流そう」

「うん。もうお兄ちゃんの所為でベトベトだよ……」

「よっつと」

「お、お兄ちゃん!?!」

俺は小町と繋がったまま小町の太ももに手を伸ばして持ち上げた。小町も成長したな。中々重いぜ。俺は小町を抱えたまま風呂場へと向かった。

「んっ♡ああっ♡ひい♡」

階段を降りる度にチンコがマンコに深く刺さるので小町は軽く絶頂し続けた。そして風呂場に到着した時には小町は連続で絶頂したからアへ顔になっていた。

俺たちは少し温いシャワーを浴びた。これで小町は気が付くだろう。俺は小町の体勢を背中向きではなく正面を向かせた。

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!

「ああっ♡んっ♡ひい♡お、お兄ちゃん……あんっ♡これすごいっ♡」

「小町！小町！まさか妹がこれほどエロいとは思わなかったぞ！」

「こ、小町がこんなになったのは……お兄ちゃんの所為なんだからねっ♡せ、責任とつてもらうからっ♡」

「ああ、もちろんだ！小町がもっと俺の事を好きになれるようにしてやるからなー！」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ああ♡お、お兄ちゃん……こ、小町イク！」

「小町！俺も射精るー！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いくうううう♡♡♡」

俺は小町のマンコが一番奥の子宮にたくさん俺の精子を射精した。小町はイク瞬間に足を俺の腰に回して密着してきた。

俺の精子を一滴も零さない様にしているようだった。俺もそんな小町に応えるように金玉の中にある精子を全部射精する気持ちで射精した。

「小町……気持ちよかったぞ……」

「こ、小町も腰が抜けるほど気持ちよかったよっ♡」

「小町ー！」

「あんっ♡お兄ちゃんのおチンチン……射精したのにまだ硬いよ」

俺のチンコは小町のマンコの中でまだ固いままだ。それもそのはずだ、小町のマンコを俺のチンコで蹂躪しているんだぞ!?

興奮しない方が可笑しい！もっと小町を感じさせたい!!そうだ、今度は小町に動いて貰おうか。俺は床に寝転がった。

「俺は少し疲れたから小町が動いてくれ」

「う、うん。分かった……行くよ。ああっ♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

小町は俺の胸に手を置いて腰を上下させた。最初はぎこちなかつ

だが、数回繰り返すと慣れてきて動きが良くなった。

それにしても必死になって腰を動かしている小町は本当に愛らしいぜー！いくら眺めていても飽きない。

「お、お兄ちゃんっ♡こ、小町もう……」

「ならそろそろ終わるか。ほらー！」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「はひい♡お兄ちゃんのおチンチン……膨らんでいる」

「そろそろ小町の子宮にたくさん射精してやるからな！」

「うんっ♡小町のお兄ちゃんのザーメン、たくさんちょうだい！」

「で、射精るー！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「いくうううう♡♡♡あああああ♡♡♡お、おにいちゃんのぎゅめん、たくしゅんっ♡」

俺の射精で小町は絶頂した。精子が小町の子宮に溜まっているのが分かる。小町は脱力して俺の胸に倒れ込んできた。

小町はビクビクと体を震わせていた。どうやら絶頂の余韻を感じているようだ。今は何を言っても聞いていないだろう。

でもまだ俺は満足していないんだよな。仕方ない、小町には悪いけどこのままだとスッキリしないからな。

「小町。動くぞ」

「あああ……」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずず……ぱんっ!!

「ああっ♡うひい♡んんっ♡ら、らめえ……おにいちゃんっ♡」

俺は小町の尻を抱えて腰を動かした。小町は絶頂して敏感になっているようで、これまで以上に感じているようだ。

俺はさらに腰を強く動かした。もつと小町が乱れた表情が見たいために。でも俺の限界が近いようだ。

それに片付ける時間も必要だからな。さっさと終わらせよう、俺は腰を強く動かした。

ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!

「ひゃあ♡お兄ちゃん、強いよっ♡こ、小町……し、死んじやうっ♡」

「小町!小町!もつと感じてくれ!」

「こ、壊れちやうっ♡もつと優しくお願いっ♡」

「小町のマンコが気持ちいいのが悪いんだぞ!」

「ぞ、そんなっ♡」

小町は今まで見てきた中で一番エロい顔をしていた。こんな顔をされてはさらに興奮するじゃないか!俺はラストスパートを掛けた。ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずずつ……ぱんっ!!

「ああっ♡んんっ♡ひゃあ♡」

これまで以上に腰を激しく動かした。小町の膣内は俺のチンコを強く締め付けてきた。これほど強く締め付けられては我慢が出来ない。

「小町!で、射精る!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるるびゅるるるるっ……

「ああああああ♡♡♡お、お腹の中……お兄ちゃんのザーメンがたくしやん……んっ♡」

「小町。まだ射精る!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……

「ひゃああああああ♡♡♡こ、小町……こられりゆううっ♡♡♡」

小町の子宮に俺の精子が大量に注いでやったぜ!それにしても妹マンコ、最高だろ!?!兄妹だから相性はバッチリだぜ!

俺は小町から離れると小町のマンコからは大量の精子が逆流してきた。これは妊娠しても可笑しくないな。

「小町。今日は安全な日か?」

「え?う、うん。来週は危ないと思う……」

「そうか。ほら体を洗ってやるぞ」

しかし今週は安全なか。惜しい事をしたな、孕んでくれたら良かった

たのに。いや、それだと親父に殴られるか。

小町のこの生活をもっと楽しみたいんだ。今度はちゃんと避妊しないと不味いな。準備しておくか。

俺は小町のマンコに指を入れて膣内の精子を掻き出した。

「あんっ♡お兄ちゃん、そんな所触らないですよ！」

「ちゃんとここも洗わないとな」

「んっ♡お兄ちゃんの触り方、ヤラしいよ？」

「そんな事を言う妹は全身、綺麗にしてやろう」

「ちよつと!?!待って!ひゃあ♡んんっ♡ああっ♡」

俺は小町の弱点と思われる箇所を徹底的に攻め続けた。小町は気持ち良さそうに卑猥な事を出し続けた。

「ひいいいいい♡♡♡」

しやあああああ……ちよろおおお……

そして絶頂して潮を噴き出して、小便まで漏らした。その時の小町表情はとつてもエロかった。それに綺麗だったのを覚えている。

もちろん、小町の潮と小便は俺が飲み干した。妹の液体は兄のものど決まってる。小町の潮と小便はこれまで飲んできた飲み物の中でダントツの一位だ。

まさかMAXコーヒーより美味しいとは思わなかった。

「お、お兄ちゃんの……変態っ♡妹のおしっこを飲むとか、変態だよっ♡」

「小町だって、俺に飲まれて嬉しそうじゃないか」

「だって、大好きなお兄ちゃんに飲まれるなんて、小町嬉しいからっ♡」

「小町……」

「きやあ!?!お、お兄ちゃん!?!」

俺は小町を床に押し倒していた。ここまで言われて嬉しがらない兄はいない。これはまた犯していいよつと言う小町なりのサインだな。

ならいいだろう。また犯してやろう!両親が帰ってくるまで時間がある。ここは時間が許す限り、小町を犯そう。

「小町。いくぞ」

「お、お兄ちゃん……小町、イツたばかりだから敏感だから……優しくお願い」

「分かった。激しくだな」

「どうしてそうなるの!?! ああっ♡」

そこから俺は小町を両親が帰ってくるまで犯し続けた。そして両親が帰ってくる前に掃除などを終わらせて小町を部屋に運んだ。

両親が帰ってくるまで犯された小町は絶頂のし過ぎでアへ顔晒して完全の伸びていた。ああ、明日も小町を犯そう。

これからは小町をたくさん犯すぞ!

やはり妹と寄り道をするのはまちがっている。

うっす比企谷八幡だ。修学旅行での嘘告白でクラスどころか学年中から嫌われ者になった俺だけど、気にしていない。

机が落書きされている？使う上では問題し、汚した奴が悪いんだからな。上履きが隠されている？学校の来賓用のスリッパを借りればいいだけだ。そもそも他人の匂いが付いた物をよく触れるな、俺は絶対に無理だ。

授業のノートを見せてもらえない？いつもの事なので問題ない。クラスに友達がいらない？そもそも俺はボツチなので友達なんていない。

川崎？誰それ？殆んど会話もない女子だ。今更避けられても別にいい。戸塚？あんな男か女かも分からない奴なんてこっちから避けてやる。

もしかしたら将来、俺の尻を掘られたかもしれないからな！

そして葉山グループだ。海老名さんは俺に申し訳なさそうな表情を向けてくる。そんな表情向けてくるなら最初から俺に頼るな！

戸部は特にないな。振られる前に海老名さんの本心を聞いてホツとしただろうさ。さっさと告白して玉砕すればいいんだ、リア充め！それから葉山。あいつは俺と目を合わせようとしな。まあ、みんなの葉山君だからな。リーダーではなく流され奴ではないだろうか？

そして三浦はこっちに殺意の籠った視線を向けてくるけど、中学時代に散々向けられた視線だから痛くも痒くない。

最後に由比ヶ浜。こちらをチラチラと見てくるだけで、何も言っていない。俺はどうしてあんな似非ビッチのために自分を犠牲にしたんだろうか？

それと雪ノ下だけど、これも由比ヶ浜と同じで何も言っていない。それどこか俺が奉仕部にいない時に陰口を言う始末だ。

雪ノ下、それはお前を昔いじめていた連中と同じではないのか？完璧とか言っておきながら何も出来なかったではないか。

だから俺は奉仕部に行くのを止めた。すると平塚先生が殴って強引に奉仕部へと連れて行かれた。だけど、俺はすぐに帰った。

だって、俺が居ただけで空気が悪くなるからな。それなら俺が居なくなれば万事解決するじゃないか！

「お兄ちゃん！」

「小町。今、帰りか？」

「うん！お兄ちゃんは部活は？」

「あんな連中と一緒にいると余計に目が腐る」

「そうだね！お兄ちゃんに酷い事する人だとは思わなかったよ！小町ポイントマイナス1000点だね！」

早く帰ったおかげでこうして小町と一緒に帰れる。なんて幸せなんだろうか！雪ノ下たちと関わらないだけでこれほどストレスを感じないなんて！

それにしても制服姿の小町を見ると段々下半身が元気になってきた。

「小町。家に帰る前に公園でしないか？」

「え？こ、小町もお兄ちゃんとしたかったんだ」

「そうなのか？」

「うんっ♡学校のトイレでお兄ちゃんの事を考えながらオナニーしたんだよっ♡」

今の小町の表情はとても中学女子がしている表情をしていなかった。これは牝の顔ってやつだな。

俺は小町の手を引いて、公園の中に入った。最近ではメッキリ人気がなくなった悲しい公園だ。ここなら大丈夫だろう！

避妊のゴムもバッチリ準備したからな。でも念のためにトイレの個室でした方がいいだろう。

「小町。トイレでするぞ」

「うんっ♡」

俺と小町は公衆トイレの個室に入った。少し狭いが、気にはならない。俺が小町の股に手を伸ばしてパンツに触れると濡れていた。

「あっ♡」

「小町。もう濡れているぞ?」

「学校でお兄ちゃんの事を考えていたら濡れちゃって」

「そうか。ならパンツはいらないな」

俺は小町のパンツを脱がした。パンツはグツチョリと濡れて、牝の匂いが俺の鼻腔にまで届いた。どれだけ俺の事を考えていたんだ?

俺は小町の片足を上げさせて、膝について小町の股に顔を近づけた。

「小町の女の匂いがするぞ」

「お兄ちゃん! 恥ずかしいからあまり嗅がないで……」

「ちゅっ……ちゅるるるるるっ」

「あっ♡ひゃあああ♡」

俺は小町のマンコにキスをして舌を膣内へと侵入させた。舌をグリグリと動かして小町の膣内を解した。その間に小町のマンコからは愛液がドンドンあふれて来た。

それをどれだけ舐め取ってもキリがなかった。

「ちゅるるるるるっ……ちゅるるるるるるるっ」

「ああっ♡んっ♡ひゃあ♡んあっ♡」

「ちゅるるるるるるっ」

「ひゃあああああ♡♡♡れちやう……」

「しやああああ……」

「んぐっ……んぐっ」

マンコを舐めていると小町が絶頂して潮を噴いた。俺はそれを零さないように全て口で受け止めた。小町の潮は美味しいからな。

「お兄ちゃんに飲まれているううう♡♡」

「ちよろおおおお……」

「ぐくんっ……んぐっ」

今度は小便を出してきたよ。それだけ俺の舌の動きは気持ち良かったようだ。今度は小町が俺を気持ちよくしてもらうかな。

俺はズボンを下ろした。すると今にも爆発しそうなチンコが露になった。小町はチンコを凝視していた。これからどう奉仕するかと考えているのだろう。

「小町。フェラ、頼むぞ」

「うんっ♡任せて……はむっ……ぢゅるるるるっ」
「のおおお!!」

小町がいきなり喉奥まで俺のチンコを咥えてきた。小町の口の温かさが心地よくてすぐにも射精してしまいそうだ。

「小町ー!」

「んんっ!?!」

「小町の口マンコ、最高だぞ!」

「ぢゅるるるるるっ……」

俺は小町の頭を掴んで腰を前後に振った。小町の口の中は温かく興奮してくる。それに小町は舌を巧みに使い、俺のチンコを刺激してくる。

いつの間にかこんなテクを身につけたんだ!?!お兄ちゃん、心配するぞ!でもそろそろ限界だ!

「小町ーで、射精るー!」

びゅるるるるるるびゅるるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「んんっ……んぐっ……んぐっ……けほお……お兄ちゃん、喉に精子が絡みついて窒息するかと思ったよ!」

「済まん済まん。小町の口マンコが気持ちよくてな」

「もう……!!」

小町の口に射精して怒られてしまった。だけど、小町の口マンコが気持ちいい事を言うと機嫌が直った。それにしてもまだ俺のチンコの興奮は止まらないぜ!

「小町。尻をこっちに向けるんだ」

「こ、こっちっ!」

「ああ、いくぞ!」

ずずずずずず……ぱんっ!!

「あんっ♡」

俺は小町の後ろから一気にマンコの奥まで挿入した。小町のマンコは俺のチンコを強く締め付けてくる。この肉壁の圧迫感が堪らな

い!

俺は小町の腰を掴むと腰を前後に激しく動かした。

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「ああっ♡んんっ♡んあっ♡」

「小町!声を抑えろ。誰もいない公園でも誰に聞かれるか!」

「でもお兄ちゃんのおチンチンが大きくて、気持ちいいんだもんっ♡」

「小町!」

「あんっ♡」

小町が嬉しい事を言ってくれたおかげで俺のチンコはさらに元気になってしまった。これは小町に責任を取って貰わないと!

ずずずずずず……ぱんっ!!

「ああっ♡ひい!?お、お兄ちゃん!そこ、摘ままないで!」

「でも気持ちいいだろ?」

「ひゃあ♡」

俺は腰を動かしながら小町のクリトリスを摘まんだ。すると小町のマンコの肉壁の動きが変わった。気持ちがいい証拠だ。

俺は小町の服の中に手を入れて、ブラを外した。そして乳首も摘まんだ。凄い、小町のマンコの動きが早く強くなった。

「ひゃあああああ♡♡♡」

「こ、小町!で、射精るぞ!」

「お、お兄ちゃん!!」

「で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ

……

「あああああ♡♡♡いくううう♡♡♡」

俺の精子が小町の子宮の中へと大量に注がれた。子宮が俺の精子でいっぱいになっているのが俺にも分かる。パンパンになって今にも逆流してきそうだ。

俺がゆつくりと小町から離れると予想通り、マンコから精子が逆流

してきた。でもちようど良かった。

小町は便器の上にいるので精子はそのまま便器に落ちている。綺麗にする手間が省けて楽だ。

「おひいちゃん……きもひよかった？」

「ああ。小町のマンコが気持ちよくない事なんてあるか！」

「お兄ちゃんのチンチン、綺麗にするね。はむっ……ぢゅるるるるぢゅるるるるっ♡」

「のおおおお!!」

小町は俺のチンコを啜えてフェラを始めた。それにしても小町のフェラは気持ちがいい。口の温かさや舌の絶妙な動きが俺のチンコを刺激する。

そのおかげで俺のチンコはいつまでも固く元気なままだ。俺は小町の頭を持って前後に動かした。チンコの先が小町の喉の奥に当たっているのが分かる。

「ぢゅるるるるるっ……ぢゅるるるるるっ……」

「小町…で、射精るー」

びゅるるるるびゅるるるるるっ……

「んんっ……んぐっ……んぐっ……お兄ちゃんの精子、濃いくておいひい♡」

「小町。尻をこっち向けろ」

「うんーこれでいい？」

「ああ……」

俺は小町にフェラしてもらった後、手を壁に付けさせて尻を向けさせた。マンコからはまだ俺の精子が逆流している。

俺は小町のマンコへとチンコを挿入した。

ずずずずずずっ……ぱんっ!!

「のおおおお!!お、おひいまれえ♡」

「小町のマンコはやはり最高だ!いくらでも犯せる!」

「小町はお兄ちゃんのものだからいくらでも犯してえ♡」

ずずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずっ……ぱんっ!!

「ああっ♡あんっ♡ひゃあ♡」

俺は必死に腰を振った。小町の感じている声を聞くだけで元気100倍だ！興奮が止まらない！もつと小町を感じさせたい。

俺は何も考えずにただ腰を激しく動かす事だけを考えた。そろそろ終わらないと晩飯を作る時間がなくなる。

「小町！これで最後だ！しっかりと受け止めろ！」

「うんっ♡来てお兄ちゃんっ♡」

「で、射精る!!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡あああああ♡♡♡おにいちちゃんのせーしがごまちのしきゆうであばれてるううう♡♡」

俺の射精と同時に小町は絶頂した。最後に気持ちいい射精が出来たぜ。俺は最後に小町のマンコの俺の精子をかき出した。

あのままで小町が妊娠するかもしれないからな。綺麗にした所で俺と小町は家の帰路についた。

帰っても小町には俺の相手をしてもらおうかな。どうせ、両親はいないのだから。

やはり妹と料理を作るのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡です。俺は千葉で一番の幸せ者だと大声で言うる！それは最愛の妹の小町と相思相愛の仲になったからだ！

修学旅行の嘘告白を由比ヶ浜から聞かされた翌日から俺に対する態度が酷かったけど、俺が小町をレイプしたおかげで小町の目は覚めた。

もう二度と小町は由比ヶ浜や雪ノ下の言葉は信用しないだろう。俺には小町だけがいればいいんだ！将来は誰も知らない場所でひっそりと暮らすのもいいかもしれない。

「小町。今晚はハンバーグにするか？」

「うん！ハンバーグ大好き！」

「よし準備するか」

「そうだね！」

俺と小町は準備に取り掛かった。エプロンを付けてキッチンに戻ってみると小町がとんでもない格好をしていた。

「こ、小町!? な、なんだその格好は……」

「どう似合う?」

「似合うけど……それは……」

今の格好は裸エプロンだ。服どころか下着すら着ずにただエプロンだけを身に付けていた。中々にいい格好ではないか！

お兄ちゃんはその格好は好きだぞ！むしろ家では全裸で過ごして欲しいと思っている！

「これならお兄ちゃんは好きな時に小町を犯せるでしょ?」

「そうだな。これならやりたい放題だな！」

「あんっ♡もうお兄ちゃん、いきなり小町の胸に触らないでよ」

「いや〜小町の胸が成長したかなって……」

「そんなに急に大きくはならないよ」

俺は背後から小町の胸に触ったけど、成長した痕跡は見られなかった。女性は胸を刺激されると大きくなるのか誰かが言っていたような。

でも効果はなかったようだ。小町の胸は年相当の大きさしかなかった。俺のチンコが挟めるくらいは大きくなって欲しいのに。

そう考えると由比ヶ浜の胸は高2で可笑しい大きさだよな。流石はビッチだな。

「小町。俺のチンコを足で挟んでくるか？」

「こう？なんだか不思議だね。小町にチンチンが生えたみたい」

「動くぞ」

「あんっ♡」

俺は小町にチンコを挟んでもらい、腰を動かした。俺のチンコが前後するたびに小町は感じてマンコから愛液を垂らしていた。

そのおかげでチンコの滑りがよくなり、さらにチンコを前後に動かし易くなった。

「ああっ♡お兄ちゃん、これすごいよっ♡んんっ♡」

「俺も小町の太ももに挟まれて気持ちいいぞ！」

「あんっ♡お兄ちゃん、小町もうだめっ♡」

「俺もで、射精る！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「ひゃあああああ♡♡♡」

俺は射精する前にコップに構えた。精子はコップの中に満たされていった。このコップは二度と俺は使わないぞ！

そしてコップを小町の口に近づけた。

「んぐっ……んぐっ……んぐっ」

小町は俺の精子を飲みだした。それも零さずに一滴も残さずに飲み干した。その時の表情は発情した牝の顔をしていた。

おかげで俺のチンコは元気になった。これですぐにでも小町を犯せるけど、まだするつもりはない。

「お、お兄ちゃん……早く小町のマンコにその太いおちんちんを頂

戴っ♡」

「まだ駄目だ」

「そんな!?!……んんっ♡」

俺は腰を前後に動かして小町の太ももを堪能した。俺のチンコが

小町のマンコを擦る度に小町の股からは愛液があふれて来た。

俺のチンコは小町の愛液を浴びてさらに元気になった。俺も早く小町のマンコを犯したけど、小町には最高に気持ちよくなって貰いたいからな。

「ほら早く料理を終わらせないと今日はもう出来ないかもしれないぞ？」

「そんなの嫌！小町はお兄ちゃんのおちんちんに滅茶苦茶にして欲しいのに！」

「なら早くした方がいいぞ」

「うん！すぐに終わらせるから！あんっ♡」

小町は急いで料理を皿に盛り付けた。その間も俺のチンコを太ももからは離さなかつた。どれだけチンコが欲しいんだか。

でも俺も小町の太ももの感触を楽しんでいた。この柔らかさは堪らない！！

「お兄ちゃん！終わったよ！早く小町のマンコにお兄ちゃんの極太おちんちんを頂戴!!」

「ああ。いくぞ」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「うひい♡お、お兄ちゃんのおちんちん……きたああ♡♡」

俺は尻を左右に振って誘ってきた小町の腰を掴んでチンコを一気にマンコの奥まで挿入した。マンコは奥までチンコを挿入されてビックリしていたけど、チンコをギュウギュウに締め付けてきた。

「ほら小町。椅子に座るぞ」

「んっ♡お兄ちゃん、ゆっくり動いてよ。あんっ♡動く度におちんちんが擦れて……あんっ♡」

「悪い悪い。ほら動くぞ」

「はひい♡」

俺は小町の膝裏に手を回して抱えるように小町を運んだ。俺が動く度に振動が伝わるようで小町は小さく絶頂していた。

俺が一步步度にチンコがマンコに深く刺さるからな。そして漸く椅子に座る事が出来た。

「あっ♡んんっ♡ああっ♡ひゃあ♡」

「小町？大丈夫か……」

「おひいちゃんっ♡い、いふうのとまらにゃい♡」

小町は連続絶頂の所為で呂律が回っていない。体も軽く痙攣しているようだった。少しやり過ぎただろうか？

でも小町のマンコが俺のチンコを離さないのが悪い。つまり小町が悪いのであつて俺はまったく悪くない！

「小町。呆けていないで食べるぞ」

「む、むりい……食べられないよお……」

「しようがないな。ほら……あくん」

「あくん。んぐっ」

俺は動けない小町の代わりにご飯を口に運んだ。まるで餌付けしているようだ。こうして繋がったまま食事をするなんて想像もしていなかったな。

すると小町が体勢を変えて背中では正面を向いてきた。箸を持って料理を俺の口に運んできた。

「今度は小町が食べさせてあげる」

「あくん。んぐっ……」

「どう美味しい？」

「小町。口移しで食べさせてくれ」

「もうしようがないなく……はひい」

小町は少し料理を口に啜えて俺の口に運んできた。俺はそれを口に運んだと同時に小町にキスして舌と舌を絡めた。

料理と小町の唾液を同時に味わった。小町の唾液を味わったおかげで俺のチンコはさらに元気になった。

「あんっ♡お兄ちゃんのおちんちん、元気になったね？」

「小町の唾液で元気になったんだ。そろそろ動くぞ？」

「うん！たくさん小町のマンコをいじめてっ♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずずずっ……ぱんっ!!

「ああっ♡んっ♡んあっ♡」

俺は激しく腰を動かした。小町は我慢出来ずにエロい声を出し続けた。俺のチンコが小町のマンコを突く度に股から愛液をダラダラと溢れさせていた。

俺は小町の尻を掴んでマンコにチンコが深く刺さるように押し込んだ。

「ひゃああああああ♡♡♡」

「なんだ、小町。イッたのか？」

「う、うん。イッたよ……おにいちゃんのおちんちん、凶悪だよ♡」

「でも小町。俺はまだイケていないんだ」

「ま、待って！」

「待てない」

「ずずずずずつ……ぱんっ!!」

「あんっ♡」

小町が絶頂しても俺は動きを止める事はなかった。小町は絶頂して敏感になっていているだろうからもっと激しくすれば、どうなるのだろうか？

俺は試したくても俺は動きを止める事がなかった。だから椅子から立ち上がり、小町の太ももを持った。

これで小町は重力に逆らえず、下に降りてくるしかない。その度に俺のチンコが小町のマンコに深く刺さる事になる。

「お、お兄ちゃん。これ、だめえ！ああっ♡」

「小町！もう射精るぞ！」

「い、今はだめえ！」

「射精る！」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ

……

「い、いぐうううう♡♡♡♡♡」

俺の射精で小町はさらなる絶頂を味わう事になった。そしてグツツタリして俺の肩に顔を乗せてきた。どうやらやり過ぎたようだ。

「あああ♡♡」

「まだ射精る！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

まだまだ射精が止まらない。小町は絶頂して気を失いかけていて、絶頂の余韻を味わう余裕がなかった。なんとか意識を失わないように頑張っていた。

俺は小町と一旦、離れた。するとマンコからは大量の精子が逆流してきて、床を精子まみれにした。これは掃除が大変だぞ。

「小町。悪いな、兄ちゃんはまだしたいんだ」

「な、なに？」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「はひひひひひ♡♡お、お、おおお!!」

小町には手を壁に付いてもらい、後ろからマンコの奥に向けてチンコを一気に挿入した。すると小町のマンコは絶頂して小便を漏らした。

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!

「ああっ♡んんっ♡はふう♡」

「小町!小町!小町!」

俺は小町の腰を掴んで激しく動いた。この夢のような時間が終わってしまうのは惜しいが、いい加減終わらせないと両親が帰ってくる。

社畜な二人は夜遅くに帰ってくるとはいえ、早く帰ってくるかもしれない。

「小町!これが最後だ!しっかりと受け止めろ!」

「お、お兄ちゃん!!」

「で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「ひゃああああ♡♡♡あしゅいのたくしゅんっ♡」

「小町……」

俺の精子が小町の膣内の一番奥の子宮に大量に溜まっているのを感じる。すてに射精した分と合わせて、子宮がもうパンパンになって

いる。

もう入らないと分かっているでも無理にでも精子を送り続けた。俺の金玉の精子が空になるまで。

「小町？大丈夫か……」

「あああ♡」

小町は小さいが連続で絶頂していた。これでは掃除を手伝って貰うのは無理そうだな。俺は小町から離れて部屋の掃除を始めた。

そして最後に意識が飛んだ小町を風呂で綺麗にしてから服を着させて部屋に運んだ。そして部屋に運んだと同時に両親が帰ってきた。

部屋と小町は綺麗にしたのでバレる心配はないはずだ。俺もすぐさまベッドに入って眠る事にした。

「明日は小町と何をしようかな？」

俺は明日、小町とどのようなプレイをするか考えながら眠りに付いた。明日のためにしっかりと精子を作っておかないと。

近い内に小町と小旅行に行くのを考えてもいいかもしれない。ホテルでたくさん小町を犯してやろう。楽しみだ。

やはり妹と学校に行くのはまちがっている。

うっす比企谷八幡だ。今日から俺は三年になった。無事に進級出来て良かったぜ。去年一年は最悪な日々だったけど、小町と相思相愛の仲になれたのは最高だった。

そして小町は総武高校に無事に入学出来た。今日からは一緒に登校する事が出来るなんて今年一年は最高の年になるだろうな。

「はむっ……ぢゆるるるるるっ……」

それにしても今朝は下半身がどうも気持ちがいいな。まるで小町にフェラされているようだ。このまま夢精してもいいかもしれない。

あ、ヤバイ。射精してしまうー！

びゆるるるるびゆるるるるるっ……

「んぐっ……んぐっ……」

「ああ〜気持ちいい……って、小町!？」

「あ、お兄ちゃんおはよう」

下半身が気持ちいいと思ったら小町がフェラしていたのか！道理で気持ちいいと思ったよ。それにしても総武の制服姿の小町は中々可愛いな。

「小町。寝ている時にフェラしないでくれ」

「だってお兄ちゃんの寝顔、可愛かったらフェラしたくなっただも
ん」

「それなら仕方ないな。なら小町のマンコを俺の方に向けてくれ」

「うんー!」

小町は俺の上に乗ってきてマンコを俺の顔の前に持ってきた。小町の尻はいつ見ても最高にいい形をしているな。

すでにパンツは脱いでいる所がポイント高いぞ！俺はそのまま小町のマンコに吸い付いた。

「ぢゆるるるるるっ……」

「あんっ♡お兄ちゃんの舌、すごく気持ちいいよっ♡」

「小町のフェラにも負けなからな!」

「小町だっ!」

そこから俺と小町の朝の日課が始まった。朝はお互いにチンコとマンコを気持ちよくする。小町がこうして起こしてくれるから俺は遅刻をしないで済んでいる。

小町のフェラが今では目覚まし時計の代わりになっている。

「ひゃああああああ♡♡♡」

「しやああああ……」

「で、射精るー！」

びゅるるるるっ……

お互いに絶頂したら着替えて学校へ向かう。小町のフェラのおかげで朝からスッキリした気分です学校へ向かえる。

学校に着くまで横に並んで歩いて行く。自転車でも良かったのだが、出来るだけ長く小町と一緒に居たいからな。

そして俺は小町と別れて自分の教室に向かう。教室の中はお通夜のようになどよりしている。

「……………」

俺が教室に入ると葉山と由比ヶ浜が俺の事を睨んでくる。理由は簡単だ。俺が三浦と戸部に修学旅行の嘘告白の真実をバラしたからだ。

それに激怒した戸部は葉山と喧嘩し、三浦は葉山と由比ヶ浜を最低と罵り、めでたく葉山グループは解散となった。

それ以来、葉山と由比ヶ浜は俺を親の仇のように睨んでくる。そして修学旅行の事が学校中に広まり、葉山と由比ヶ浜は友達の恋愛を掻き乱した悪人とレッテルを貼られる事になった。

それから葉山と由比ヶ浜に近づこうという者は誰も居なくなった。それがなくても由比ヶ浜が俺の事を睨んでいるのは奉仕部がなくなっただけからだ。

俺が平塚先生にされた事を教育委員会に報告した所、平塚先生は教師を辞めさせられた。教師が生徒に暴力を振るっていたんだ。

そんな者が教師を続けられる訳がない。顧問が居なくなった部活は当然、解体された。他の教師に顧問を雪ノ下は頼むとしたけど、もれなく全員から断られたそうだ。

だから今後、あの教室を使う事は出来なくなった。まったくどうして早く行動しなかったんだらうか？

奉仕部がなくなれば俺をあそこへ送る悪魔はいなくなるのに。ついに俺は解放されたんだ！これからは放課後は全て小町のために使うと決めているからな。

「お兄ちゃん？どうしたの……ぼくつとして？」

「ああ、ちよつと考え事な」

「もう折角、小町が食べさせてあげているのに！」

「悪い悪い」

俺は今、生徒会室で小町を太ももの上に乗せて昼飯の弁当を食べさせて貰っている。どうして俺が生徒会室を使えるかと言うと、一年……今は二年になったんだ。一色いろはと言う生徒が関わってくる。彼女はクラスメイトからいじめを受けており、生徒会長に強制的にさせられようとしていた。

様々な経緯があり、俺がそれを解決し一色を生徒会長にした、その責任で取らされて副会長になった。

おかげで生徒会を自由に使えている。ここで週に一度、小町との食べ合わせをしている。人前だと恥ずかしいからな。

「お兄ちゃんの大きくなっているね？」

「小町の可愛いからに決まっているからな！」

「もうお兄ちゃんは！小町的にポイント高いよ！」

小町は俺の勃起したチンコに濡れたマンコを擦り付け様に腰を前後に動かした。わずかに濡れたパンツがズボン越しに勃起したチンコに当たる。

本当に一色のクラスメイト共に感謝だな。こんなヤリ部屋を提供してくれて！……ここなら誰にも気にしないで小町を犯せる！

「お兄ちゃん……小町、もう我慢出来ないよ……」

「そうだな。昼休みが終わる前にさっさとしないとな！ほら、尻をこっちに向けろ」

「うん！早く、お兄ちゃんの凶悪チンコで小町のマンコを蹂躪してっ
」

小町はパンツを脱いで壁に手を付いて、俺に尻を向けて左右に振って挑発してきた。小町のマンコは発情して愛液がドバドバと溢れていた。

俺は小町の腰を掴んで、勃起したチンコを小町のマンコの奥へと挿入した。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「うひい♡お、お兄ちゃんのおちんこ、きたああ♡♡」

「小町のマンコ、奥までグチョグチョだな!」

「お兄ちゃんのおちんこが大きいからっ♡」

「動くぞ!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずず

ずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡んっ♡うひい♡」

小町のマンコはチンコで突く度にギュウギュウと締め付けてきた。

毎日、小町を犯しているけど、全然締めまりが緩まる事はない!

むしろマンコが俺のチンコの形になってきて、フィット感がよく

なって射精が我慢出来ない!

「小町!もう射精るぞ!」

「きてっ♡お兄ちゃん!」

「で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ

……

「ああああああ♡♡お、お兄ちゃんの熱いの小町のお腹の奥にっ♡

はひい♡」

最高に気持ちいい射精だった。俺の射精と同時に小町は絶頂して、

マンコは強く締め付けてきた。この蠢いている感触が堪らなく興奮

する。

小町のマンコは俺の精子を欲しがり過ぎだと思っけど、小町のため

にたくさん作っておかないとな!

「小町、最高だったぞ」

「ホント?お兄ちゃんが気持ちよくしてくれたから小町も最高だった

よ」

「離れるぞ……」

「うん……あ、精子が」

俺が小町から離れるとマンコからは大量の精子が逆流してきていた。妊娠しても可笑しくなくらいの量はあるな。でもちゃんと避妊しているので問題は無い。

俺は椅子に座ると小町がすかさず、チンコを口に咥えた。

「はむっ……ぢゅるるるるるっ……れろっ……ちゅっ」

「いいぞ小町。フェラが上手になったな？」

「ホント!?嬉しいよお兄ちゃん。教室に戻る前に綺麗にしないとね。はむっ」

「おおお!!」

小町は頭を上下に動かして俺のチンコに付いた精子を綺麗に舐め取っていた。しかも舌をチンコに巻きつけるようにしているので上下させられるとチンコが気持ちよくなる。これではいつまでも勃起して教室に戻れないじゃないか。

「小町!で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……

「んんっ!?……んぐっ……んぐっ」

俺は小町の頭を押し込んでチンコを根元まで咥えさせてから射精した。小町の喉の奥への射精はマンコとは違った気持ちよさがあるので止められない。

小町が俺のチンコから離れると口の中に残った精子を全部、飲み干した。

「ホント、お兄ちゃんの精子はドロドロで喉に絡み付くね」

「小町のための精子だからな。続きは放課後にな」

「うん。それじゃあね!」

俺は昼休憩が終わる前に小町と別れて教室へと帰った。もちろん、お互いに消臭してからな。臭いを付いたまま教室に戻れないからな。

もし臭いを付けたまま戻れば、一発で不純性行為をしていたとバレてしまう。それも兄妹でしたとバレたら速攻で退学だ。

そして放課後、俺と小町は再び生徒会室へとやってきた。この日は生徒会の仕事は何もないので誰も来ない。

「お兄ちゃん。んっ」

「んんっ……誰も来ないと思うけど、いきなりキスか？」

「だって、早くお兄ちゃんとしたかったんだもん……ほら見て」

生徒会室に入ると小町からキスされた。まったく小町の唇は柔らかくて最高だぜ！ずっとキスしてもいいくらいだ。

小町はスカートを捲り上げて、もうグチョグチョに濡れたマンコを俺に見せてきた。小町はパンツを履いていなかった。恐らく濡れて履いていても意味がなかったんだろう。

「小町ー！」

「きやあ!?お、お兄ちゃん？」

「ずずずずず……ぱんっ!!」

「ああっ♡い、いきなりなんて酷いよ……」

「早くしたかったんだろ？」

俺は小町の膝裏に手を回して片足立ちにして勃起したチンコをグチョグチョに濡れた小町のマンコの奥に一気に挿入した。

小町は挿入された事で軽く絶頂したようで潮を噴き出した。愛液もドバドバと溢れていた。それだけ期待していたという事だろう。

「小町ー!小町ー！」

「お、お兄ちゃんー！」

「で、射精るからしっかりと受け止めろー！」

「きてっ♡お兄ちゃん!!」

「射精るー！」

びゅるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「い、いぐうううう♡♡お、お兄ちゃんの熱いのたくさん貰っちゃったっ♡」

射精が止まらない。小町のマンコは俺のチンコから精子を根こそぎ奪おうと蠢いている。このチンコを圧迫する感じが堪らない。

「小町。時間があるうちにするぞ」

「うん。お兄ちゃん……んっ」

「んんっ」

俺と小町はキスをしながら腰を動かした。小町のマンコはチンコで突く度に潮や愛液を噴き出していた。

そして小町が腰を抜かすまでした俺たちは生徒会室を片付けて帰った。小町が入学してくれたおかげで3年は最高の高校生活になりそうだ。

やはり妹と学校でするのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。三年に進級してそれなりに経ったけど、俺の日常はあいも変わらずだ。学校に来て、放課後になれば奉仕部に行つて依頼人が来る毎日だ。

だけど、今日は雪ノ下も由比ヶ浜の二人は用事で来ていない。だったら帰りたいけど、平塚先生によつて俺はこうして奉仕部の部室まで来る羽目になった。

「お兄ちゃん……ヒマ」

「しょうがないだろ。依頼人が来ないんだから」

「雪乃さんも結衣さんも用事なんて……」

「あの二人がいないのも珍しいけどな」

由比ヶ浜はリア充連中とどこかへ出かけているようだけど、雪ノ下も用事で来られないのは珍しい。それが被っているのだからさらに珍しい。

「お兄ちゃん……ここでしない？」

「おいおい。雪ノ下たちにバレたら何を言われるか」

「バレないようにすればいいじゃん！」

「でもな……」

平塚先生や依頼者がいつ来ても可笑しくない状態だし、ここでするのはリスクが大きい過ぎる。でもここでしてみたいと言うのは確かにある。

誰かにバレるのかバレないのかのギリギリを攻めてみたい。小町もそれは同じよう目で目を輝かせている。

「平塚先生が来るだろう……」

「それなら大丈夫だよ！」

「どうして？」

「だって今夜、合コンで気合入っていたから。もう学校にいないよ」

「マジか……ならいいか？」

平塚先生が来ないのなら依頼人も来ないだろう。誰も来ないですると決まると小町が俺に抱きついてキスしてきた。

「ちゅっ……んんっ♡お兄ちゃん、もつとだよ」

「んっ……小町！んんっ！」

「んんっ♡んんっ♡あっ♡」

俺は小町と熱いキスを交わした。お互いの舌を絡めて唾液の交換までして、興奮を最高潮まで持って行った。小町の匂いが俺の鼻腔を刺激してくる。

脳から快楽物質がドバドバと溢れているようだ。それは小町も同じで足が震えていた。立っているのもやつのようだ。

「あんっ♡お兄ちゃんの指、いいっ♡」

「キスだけで大洪水だな？」

「だっってお兄ちゃんとのキス、すごく興奮するんだもん」

「俺もだよ」

小町はキスをしただけでマンコをぐつちよりと濡らしていた。パンツ越しに触れただけでも分かるほどだった。俺はパンツを少しズラして指を小町のマンコへ挿入した。

小町のマンコは俺の指が入ると強く締め付けてきた。俺は指を入れたり出したりを繰り返した。

「あんっ♡んんっ♡んあっ♡」

「小町。いくら周りに人が居ないとは言え、あまり声を出すと流石にバレるぞっ」

「ああっ♡だ、だっ……気持ちいいんだもんっ♡」

小町の足元には愛液で出来た水溜りが出来ていた。俺は小町のパンツを脱がした。パンツからは発情した牝の匂いがあった。

「今度は小町がお兄ちゃんを気持ちよくしてあげるね」

「ああ。頼むぞ」

「うん！はむっ……じゅるるるっ」

「お、おとおお！」

俺はズボンのチャックを下ろして勃起したチンコを露にした。すると小町が膝を床に付いてフェラを始めた。小町のフェラは毎朝、味わっているから慣れたと思ったがそうでもないようだ。

「小町。いいぞ」

「れろっ……ちゅっ……じゅるるるっ」

「こ、小町ーで、射精る！」

「んんっ!?……んぐっ……んぐっ……お兄ちゃんのザーメン、ドロドロで喉に絡み付いてくる」

小町は射精した精子を零すことなく全て飲み干した。野に干したことをみせるために口を大きく開けて見せた。それを見ると半立ちだったチンコはガチガチに勃起した。

「お、お兄ちゃん……ちよつとトイレに行つて来るね」

「待て小町」

「え?な、何?」

「よつと」

「お、お兄ちゃん!?!」

俺は小町を抱えて机の上に座らせた。小町はトイレに行きたくて内股になってモジモジしている。俺は小町の股を強引に開いて顔を股に埋めて舐め始めた。

「れろっ……じゅるるるるっ」

「うひい!?!お、お兄ちゃん!待って!」

「じゅるるるるっ……れろっれろっ」

「だ、だめえええ!!」

「んぐっ……んぐっ」

小町は絶頂して潮を噴き出した。そして気が緩んだのか、小便まで出してしまった。俺は零さずに飲んだ。小町の小便だぞ!

小町のことを愛している兄ならこれくらい簡単に飲めるだろ!

「お、お兄ちゃんの変態……小町のおしっこを飲むなんて」

「小町だって俺の精子、飲んでいるだろ?」

「おしっことザーメンは全然、違うから!」

「同じようなものだろ。それに小町から出たものなら余裕で飲めるぜ」

「小町のお兄ちゃんは世界最強の変態さんだよ……」

この妹は何を言っているんだ?そもそも兄妹で性行為をしている時点で世界最強の変態兄妹だろうに。さて、そろそろ挿入するかな。

「小町。いくぞ」

「うん。早くっ♡」

「うっ……き、キツイ！」

「き、きたああ♡」

俺は小町を机の上に座らせたままチンコをマンコに挿入した。散々濡らしただけあつてすんなりと挿入することが出来た。

小町の膣内は強い締め付けで俺のチンコを刺激してきた。それにいつもより締め付けが強い気がする。もしかして先ほど絶頂して潮を噴き出したからか？

「小町！」

「ああ♡んあっ♡」

「小町！小町！」

「んんっ♡ひゃあ♡ああんっ♡」

腰を小町に打ち付ける度に小町のマンコは締め付けを強くしてきた。小町は俺の首に腕を回して密着してきた。俺はさらに激しく腰を打ち付けた。

「小町！で、射精るぞ！」

「お兄ちゃん！き、来てえ♡」

「射精る！うっ……」

「い、いぐううう♡お、おにいちちゃんのあしゅいのたくしやんっ♡」

俺の精子が小町の膣内の一番奥で暴れているのが分かる。このまま小町を孕ませてやりたいけど、そんなことをすれば両親から抹殺される。特に親父から。

「お兄ちゃん……ザーメン、射精し過ぎだよ」

「悪い悪い。小町のマンコがあまりにも気持ちよくな」

「小町もお兄ちゃんのおチンチンで気持ちよくなつたよ」

「そうか……」

俺は小町から離れた。するとやはり小町の膣内に射精した精子が溢れて足元に新たな水溜りを作っていた。ちゃんち掃除しないと明日にでも雪ノ下と由比ヶ浜に文句を言われそうだな。

「小町……」

「お、お兄ちゃん。そ、そこお尻」

「まだこつちではしていないと思つてな」

「そ、そこは……」

俺は小町の背後から抱き付き、お尻の穴を触った。小町と関係を深めていく中でお尻の始めては奪っていないことを思い出した。

小町はお尻ですることを躊躇しているけど、俺としては小町の全てを欲しいと思つているので、絶対にお尻でもしたい！

「小町……頼む！」

「わ、分かった。でも痛くしないでよ！」

「分かっている。善処するから……行くぞ」

「う、うん……ひぎい!?いい、痛い……」

小町は自分でお尻の穴を広げているけど、流石に狭く。勃起している俺のチンコでは狭過ぎた。それでも強引にチンコを全部、お尻の穴へと挿入した。

マンコとは締め付けが比べ物にならないくらい強かった。それもゆっくりとチンコをお尻の穴で前後に動かした。

「うぎい!?お、お兄ちゃん!もつとゆっくりして!」

「これでもゆっくりしているんだけどな……」

「それでも!あひゃあ♡」

「おつ……ちよつとは気持ちよくなつたか?」

小町が少し慣れてきた所で俺は少しだけチンコを強く動かした。締め付けが強いのでそれほど強く動かせないのが問題だな。

マンコだつたらもつと激しく動いても大丈夫だけど、お尻の穴だからな。

「うひい♡んんっ♡ああんっ♡」

「小町はお尻でも感じるんだな」

「そ、それは……あひゃあ♡」

「ほらほらどうした?」

俺はお尻の穴をチンコで突きながらマンコに指を伸ばして膣内を掻き回した。先ほど射精した精子が漏れ出していた。小町のお尻の穴はマンコをイジる度にギュウギュウと締め付けてきた。

「小町！こつちにも射精るからな！」

「あんっ♡うひゃ♡ああんっ♡」

「で、射精る！」

「ああああああ♡」

小町のお尻の穴にも射精してやったぜ！これでも小町の穴は全て俺のものになったな。それにしてもお尻の穴も中々に悪くなかったな。

小町は机の上でぐったりしていた。お尻の穴はきっちり閉まらずにパクパクと呼吸しているように開いたり閉じたりしていた。

お尻の穴からも精子が漏れ出していた。これは中々、エロい！まるで集団にレ○プされたようじゃないか！

「小町。もう一回頼む」

「へ？……ああっ♡」

「これ、すごっ」

「ひゃああああああ♡」

そして俺と小町は下校時間ギリギリまでしてしまった。小町は最終的に腰が抜けてあるけなくなってしまった。やり過ぎには注意しなければ、ならない。

「お兄ちゃんのケダモノ……」

「悪かったよ。アイス奢るから」

「一番高いやつね！」

「はいはい」

俺は小町をおんぶしながら家に帰った。背中当たる小町の胸が最高に良かった。次も小町の腰が抜けるまでするのもいいかもしれない！

やはり妹が奉仕してくるのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は今、睡眠を貪っていた。今日は日曜日でプリキユアがあるけど、まだ時間ではない。

なのにどうして俺が起きているかと言うと下半身から感じる生温かさが原因だ。この生温かさには覚えがある。

これまで何度も味わってきたものだ。

「れろっ……ぢゆるるるるるっ……れろっ」

「……小町、何をしている？」

「あ、お兄ちゃん。おはよう！」

「うん、おはよう。で、何をしているんだ？」

「朝立ちの処理だよ？駄目だった？」

「続けてくれ」

「うん♪はむっ……ぢゆるるるるっ」

やはりこの生温かさは小町の口の中だったか。朝から小町のフェラが味わえるなんて最高の一日になりそうだ。

違うな、今や毎日が最高の日々だ。最愛の妹と相思相愛の仲になったのだ。千葉の兄妹は結ばれる運命と言う事だろう。

「小町！で、射精る！」

「ぢゆるるるるるっ！」

「射精る！」

びゆるるるるるびゆるるるるるっ……

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

小町は俺の精子を一滴も零さないように全て口の中へと押し込んだ。今、俺の精子が小町の口から食道を通じて胃の中へと行っているんだろうな。

射精したのに俺のチンコはまだまだ固かった。どうやらまだ興奮しているようだ。

「お兄ちゃんの一発搾り、ご馳走様♪」

「小町の朝フェラ、良かったぞ」

「ホント!?!やった〜！」

「それで小町、続きをしてくるか？」

「うん。いいよ……それじゃいくよ……」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「うひい♡お、お兄ちゃんのお凶悪おチンチンが小町の膣内につ♡」

小町はパンツを脱いで俺の股の上に来て、チンコに腰を下ろした。チンコは小町のマンコへとすんなり挿入された。

これまで散々してきたので小町のマンコはすっかり俺のチンコの形へとなってしまう、広げずに済んでいる。

「小町のマンコの締め付けはいつも通りでいいな」

「うひい♡お兄ちゃんのおチンチンはすごいねっ♡あんっ♡」

「ほら小町が動いてくれよ」

「う、うん。いくね……ああっ♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

小町は俺の胸に両手を付いて必死に腰を上下に動かし始めた。小町の腰を動かす度に股からは愛液が溢れてきていた。

「ああっ♡んあっ♡はひい♡」

「いいぞ小町。また射精しそうだ!」

「お、お兄ちゃん!小町のおマンコにたくさん射精して!あんっ♡」

「小町、もっと激しく腰を動かすんだ!」

「うん!がんばる!あああああ♡♡♡」

小町は頑張って腰を動かしたけど、絶頂した。そのまま俺の胸に倒れこんできた。お尻をビクビクと震わせていた。

「あああ♡」

「まったく仕方ないな。おら!」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「うひい♡」

俺は小町が動かないので俺が動く事にした。腰を突き上げる際に小町の尻をしっかりと押さえつけて、チンコがマンコの奥までしっかりと届くようにした。

小町はいい声を出してくれるので動くのが楽しみで仕方ない。俺

は連続で腰を突き上げた。

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「あひい♡ああっ♡んんっ♡」

「小町!小町!」

「あああああ♡♡♡」

小町は俺のチンコの突きに耐えられずに絶頂した。先ほど絶頂させたから敏感になっていて時にさらに追い討ちのようにしたからな。

小町は涙に鼻水、涎を垂らしていた。ここまで無様な顔は見た事がない。

「ほら小町。体を洗うぞ」

「ああ……」

「ほら運ぶぞ」

「あんっ♡んんっ♡」

俺は小町を抱えて下に降りた。今日は日曜日だけど、両親は社畜なので日曜でも滅多には休みはない。将来、両親のような社畜にはなりたくない。

絶対に誰かと結婚して専業主夫になるんだ!一番の候補は雪ノ下だな、金持ちのお嬢様だからな。次が由比ヶ浜だな、ちよろいから俺のために仕事をしれくれそう。

次は一色かな、あざといのが嫌だけどそこは妥協した方がいいな。

「小町がお兄ちゃんを隅々まで洗ってあげるんだから!」

「おう。任せた」

「行くよ……んっ♡ど、どうお兄ちゃん?」

「ああ、気持ちいいぞ」

「んっ♡ひい♡」

小町は俺を椅子に座らせてから俺の腕を自分の股に挟んで洗い出した。まったく少し前まで中学生だったのに、いつの間にこんなテクを覚えたんだ?

小町は腰を動かす度に感じていた。クリトリスが俺の腕に擦れて感じるのだろう。シャンプーで腕の滑りがいいので余計に感じるの

だろう。

「小町。今度は反対を頼む」

「う、うん。行くよ……ああっ♡」

「どうした？俺を洗ってくれるんだろ？」

「うひい♡お兄ちゃん、腕を動かささないで。あんっ♡」

小町は必死になって腰を前後に動かして俺の腕を洗い出した。しかしクリトリスが俺の腕に当たるので上手く動く事が出来ずにいた。

小町はクリトリスだけでももう絶頂しそうになっていた。ここは一旦、別の所を洗わせた方が良さそうだな。

「小町。今度は背中を洗ってくれ」

「わ、分かった……んっ♡……どうして男の人ってこれが嬉しいんだろね？」

「気持ちいいからだろ？乳首が擦れて興奮する」

「もう……お兄ちゃんの変態。んっ♡」

小町は胸をしつかりと俺の背中にぴったりとくっ付けて上下に動き出した。その際に立った乳首が俺の背中で擦れた。

「あっ♡んんっ♡ああっ♡」

乳首が擦れる度に小町はエロい声を出した。それを耳元で聞かされる俺は興奮が止まらない。チンコは勃起して爆発寸前だ。

「小町！んっ」

「んんっ!?んっ……お兄ちゃん、小町……切ないよっ♡」

「小町……」

「早くきてっ♡」

俺は我慢出来ずに小町とキスをした。すると小町は自分でマンコを開いて俺のチンコを入れる準備をしていた。

小町のマンコからは愛液が溢れていた。小町も早くしたくて仕方ないようだった。

「行くぞ……」

「うん……」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「おおおおー」

「ひゃあああああ♡♡」

小町はチンコを挿入されただけで絶頂したようだった。小町のマンコの締めまりは絶頂して強くなっていた。マンコの蠢きがもの凄かった。

マンコがチンコを強く締め付けてきて刺激してくるので俺は射精が我慢出来ずにいた。

「小町！もう射精るぞ！」

「きてっ♡小町の子宮にお兄ちゃんの濃いぎーめん、ちようだいっ♡」
「で、射精るー！」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「ああああああ♡♡♡いくうううう♡♡♡お、おにいちちゃんのぎーめん……あしゅい♡」

びゅるるるびゅるるるるっ……

「まだ射精る……」

「うひい♡」

俺は射精が止められなくなっていた。小町の子宮にこれでもかという量を注いでいた。金玉の中の精子がなくなってしまった。

もう打ち止めのはずなのにまたチンコが硬く勃起していた。

「もうっ♡お兄ちゃんのおちんちんは硬いね」

「仕方ないだろ。小町のマンコに挿入しているんだから……興奮が収まらないんだから」

「だったら小町がたくさん射精させてあげるね♪」

ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!ずずずずずず……ぱんっ!!

「おおおおお!!」

「あんっ♡んあっ♡ああっ♡」

小町は俺を風呂場の床に押し倒して腰を激しく上下に振った。小町が腰を上下に激しく振る度に愛液がどんどん溢れてきていた。

俺の腰が小町の愛液塗れになってしまうほどだった。俺は動きたかったけど、小町がこうして頑張っているのだ。

「ここは小町に任せてみるかな。」

「ど、どう？お兄ちゃん、気持ちいい？」

「ああ、最高だ。もっと激しく頼む」

「わ、分かった。んんっ♡」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「ひゃああああああ♡♡♡」

小町はまたしても絶頂したようだった。腰を下ろす度に絶頂しているような気がする。小町は脱力して俺の胸に倒れてきた。

「小町、大丈夫か？」

「う、うん。だけど、少し休ませて。あんっ♡」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「いいけど、俺が勝手に動くから」

「ま、待って！うひい♡」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!」

俺は勝手に小町の腰を掴んで激しく上に突き上げた。俺のチンコの先が子宮の入り口をコツコツと叩いた。

それを見ると小町のマンコはギュウギュウに締め付けてきた。

「はひい♡お、お兄ちゃん！だ、だめえ♡」

「小町のマンコは俺のチンコを強く締め付けるな」

「うひい♡い、いくううう♡」

「小町ー!」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!」

俺は強く腰を突き上げた。そろそろラストスパートを決めるつもりだ。もう射精寸前だからだ。

「お兄ちゃん！んんっ!!」

「んっ……小町！で、射精るー!」

「びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……」

「い、いくうううう♡♡♡お、おにいちゃんのざーめん、たくしや

んっ♡」

「し、搾られる……」

俺の射精と同時に小町は絶頂した。そして小町のマンコは俺のチンコからザーメンを根こそぎ奪うように蠢いている。

小町は絶頂で脱力して俺の胸に倒れこんできた。そして俺はチンコをマンコから離れた。小町のマンコからは俺が射精したザーメンが大量に逆流してきた。

「あんっ♡お兄ちゃんの子種がたくさんだね」

「ああ。小町、最高だったぞ」

「小町も気持ち良かったよ」

「小町。んっ」

「んんっ……お兄ちゃん、大好き！」

まったく小町はそんな事を言われてはまた犯したくなるだろうか？でも小町の体力が続かないので今日はここまでだ。

だけど、明日からはまたたくさん犯してやるかな。もっと俺の事が好きになるように俺のザーメンで小町のマンコを俺色に染めてやる。

俺たちは体を綺麗にしてから日朝アニメを見るのであった。

やはり妹と繋がり続けるのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡だ。俺は今、妹の小町が朝食を作っているのを後ろから眺めていた。料理をしている小町の姿を見て、ニヤニヤしていた。

何故なら格好が素敵だからだ！朝から妹の裸エプロンを見られるなんて、最高じゃないか！両親は相変わらずの社畜をしてもう出社したので居ない。

おかげで小町の裸エプロンを眺められているので、感謝しかない。流石は小町の裸エプロンだ。チンコがもう爆発しそうだ。

「お待たせお兄ちゃん」

「おっ……美味しそうだ」

「お兄ちゃん……んっ」

「んっ……うん！美味しい！」

小町は朝食を少し口に啜えてから俺の口に渡してきた。小町の口移しで朝食を食べさせてもらっている。俺も逆に小町に口移しで食べさせている。

小町の唾液が絡みついた朝食は最高に美味しい！もうずっと小町に食べさせ、食べさせたい。

「お兄ちゃん。今日なんだけど……」

「どうした？小町」

「お母さんたち、今日も遅いから試したいことがあるんだよね」

「試したいこと？」

ここ最近、親父たちはいつにも増して忙しいのか、朝早く出社して夜遅くに帰宅する日々が続いている。今日も恐らく遅くなるだろう。

それで小町は何を試したいんだろうか？

「お母さんたちが帰ってくるまで繋がっているのはどうかな？」

「それいいね！」

「でしょー！」

親父たちが帰ってくるまで繋がっていられるなんて、最高じゃないか！朝食を片付けた後、俺たちは向かい合うように立った。

俺は小町の股に手を伸ばして触れた。小町の股はすでに濡れていた。愛液がドバドバと溢れていた。

「もうこんなにも濡れているなんてな……」

「お兄ちゃんだって、おちんちんバキバキじゃん！」

「小町……んっ」

「んんっ♡お、お兄ちゃん……は、早く」

「いくぞ……」

「うひい♡き、きたああ♡」

ソファーに座ると小町が俺の腰の上に背中を向けて腰をゆつくりと降ろしてきた。俺のチンコは小町のマンコの中に飲み込まれた。

小町のマンコは俺のチンコをギュウギュウに締め付けてきた。ここで俺は気がついた。このまま動かないのはツライのでは？

もしここで動いてはすぐに終わってしまう。それは勿体ないんじゃないか？絶対に動かないぞ！

「どうしたの？お兄ちゃん」

「小町……お前、分かって聞いているだろう？」

「さあねく……辛いなら小町が動いてあげるね。えいっ♡」

「のおおおお……」

小町は自分の腰を上下左右に動かして俺のチンコを刺激してきた。小町のマンコの締め付けは強く、これではすぐに射精してしまいそうだ。

頭の中が小町のマンコの事でいっぱいになってしまった。駄目だ、射精してしまう。

「で、射精するーうっ……」

「うひいひいひい♡いくうううう♡」

「すぞっ……」

「お兄ちゃんのあつい、せーしがたくさんっ♡」

出来るだけ我慢しようとしたのにすぐに射精してしまった。でも気持ちいいから別にいいか！だが、これで満足するなんて、思っていないだろうな？小町。

俺のチンコはまだガチガチに勃起しているんだぜ？俺は小町の腰

を掴んで、腰を下に強引に押し込んだ。

「んあっ♡」

「さつきはよくもやったな。小町」

「お、お兄ちゃんっ♡んああああ♡」

「おっ……よく締まる！」

小町の腰を強引に下に降ろした事でチンコの先が子宮の入り口に到着した。もしかしたらチンコが子宮の中に入るかもしれないな。

俺は小町が動かないように抱きついて身動き出来ないようにした。小町は俺が動かない事に不思議に感じているようだった。

「お、お兄ちゃん。動かないの？」

「どうしようなかく……このままどこまで我慢出来るか勝負しないか？」

「い、いいよ！小町が勝つから」

「なら勝負開始だな」

それから俺と小町の我慢勝負が始まった。挿入したままじっとしているのは結構、辛い。本当なら腰を激しく打ち付けたいけど、我慢している。

小町も動きたいのか、膣内がギュウギュウに締め付けてきた。それとモジモジし始めた。先に我慢が限界になるのは小町の方かもしれない。

「お、お兄ちゃん！もう無理だから動いてよ！」

「俺の勝ちだな」

「うん！お兄ちゃんの勝ちだから！」

「なら……ほら！」

「んひい♡ああっ♡ああああ♡」

小町は自分が我慢出来ずに俺に懇願してきたので動いてやった。正直、危なかった。俺も我慢の限界だったからだ。先に小町が折れてくれた助かった。

我慢していた分、しっかりと動いてやらないとな！俺は腰を上突き上げる様に何度も動いた。

「あんっ♡ふひい♡ひゃあ♡」

「こ、小町！射精るぞ！」

「お兄ちゃんのせーし、ちようだいっ♡」

「で、射精る！うっ……」

「ひゃあああああいぐううう♡」

ついに我慢の限界に到達して小町の膣内の奥に精子を射精した。それと同時に小町は絶頂したようで、マンコの締め付けが強くなつた。

それにチンコから精子を奪う勢いで蠢いている。頭の中が真っ白になつてしまう。

「お、お兄ちゃん……と、トイレ行きたい……」

「お、おう。わかった……よつと」

「うひい♡お兄ちゃん、ゆっくり歩いて……歩く度におちんちんが子宮に当たるっ♡」

「

「わ、悪い！」

「いぐいぐいぐっ♡」

俺が小町を抱えて歩く度にチンコが小町の子宮の入り口を叩いていた。その度に小町は絶頂してしまった。でも小町が絶頂する度にマンコが締め付けてきて気持ちいいんだよな。

それから小町はトイレに到着するまでに何度も軽く絶頂を繰り返す事になり、トイレに到着した時にはアへ顔を晒していた。

「小町。トイレに着いたぞ」

「あっ♡ああ♡んあ♡」

「ほら出していいぞ」

「で、でりゆるううう♡」

小町は俺に抱えられながら小便を出した。連続絶頂から小便は余程、気持ちいいのかマンコがまたしても強く締め付けられた。

「俺も射精る！」

「ひゃあああああ♡んひいいい♡」

「射精る射精る」

「おひいらんのせーしい……あしゅい♡」

小町の子宮に俺の精子が溜まっているのが分かる。小町は今度は小便ではなく潮を噴いた。しかも盛大に便所から外れてしまった。あとで掃除しないとな。

「小町!」

「ああ♡んあっ♡うぴい♡」

「小町!小町!」

「あんっ♡んひい♡ああんっ♡」

「小町!!」

「ああああ♡」

俺は腰を激しく力強く振った。チンコの先が子宮の入り口に当たる度に小町のマンコは強く締め付けてきた。もう頭の中が真っ白になってきた。

それでも俺は腰の動きを止める事はなかった。後の事なんて、もうどうにでもなれとさえ、思えてきた。

「また射精る!うっ……!」

「うひいひい♡ああああ♡」

「こ、小町?大丈夫か……」

「うひい♡んひい♡ああ♡」

小町は意識が飛びかけていた。それから昼食を取りつつ休憩を挟んだ。もちろんその間も俺のチンコは小町のマンコに挿入されたまままだ。

「小町。んんっ」

「んっ♡お兄ちゃん」

「小町!」

「んひい♡お、お兄ちゃんっ♡」

所々で休憩を挟みながら俺たちはずっと繋がったままで半日ほど過ぎた。そして風呂場でシャワーを浴びながら俺は腰を振っていた。

半日も射精して小町のお腹は少し膨らんでいた。子宮にはこれまで射精した精子がたんまりと蓄えられている。

小町のお腹が膨れるほど量を俺は射精したんだと思った。流石に

そろそろ親父たちが帰ってくるし、精子も次で打ち止めだ。

「小町！小町！」

「お兄ちゃん！小町、いくうううう♡」

「俺も射精るぞ！」

「き、きてえええ♡」

「で、射精るーうっ……！」

「うひひひひ♡ああああああ♡」

ついに最後の射精が終わった。もうこれで死んでもいいと思えた。ゆつくりとチンコをマンコから抜くとこれまで射精した精子が逆流してきた。

その量が尋常ではなかった。これだけの量を射精して、よく枯れなかつたな俺。

「ぎゃ、逆流ぎーめんで、いぐうううう♡」

「こ、小町!？」

「んひい♡あひゃ♡んっ♡」

「お〜い……大丈夫じゃないな」

小町は逆流してきた精子で最後の絶頂をしたようで、気絶するよう眠ってしまった。それから俺は小町を風呂場から出して体を拭いてから着替えさせて、ベッドに運んだ。

そして部屋の掃除が終わった時に親父たちが帰ってきた。タイム的にバツチリだった。もし遅かったらバレていたかもしれない。「気持ち良かったな……」

半日以上の間、小町と繋がりが続けたのは最高に気持ち良かった。もう頭の中が真っ白になって、腰が抜けるじゃないかと思った。

次、親父たちがいない時を見計らってしないとな。出来れば次は一日中、繋がっていたいな。

寝ても起きてても小町と繋がっていると考えただけで興奮して勃起した。あれだけ射精して萎えていたと思ったのにな。

平塚静

やはり教師に逆レイプされるのはまちがっている。

うつす比企谷八幡です。俺は今、現国の担当の平塚先生に生徒指導室に連行された。俺、何か悪い事をしただろうか？

何度、考えても俺が悪い事をした記憶がまったくくない。平塚先生はイライラしてか煙草を吸いだしたよ。おい、生徒の前だぞ!?

「比企谷。どうしてここに連れて来られたのは分かっているか？」

「いえ、俺は何も悪い事をしていないので」

「奉仕部へまったく行っていないようだな？」

「だって、入部していないので」

「君は入部しただろう！拒否権はないと言ったはずだ」

俺は先日、この平塚先生に連れられて奉仕部なる部活に強制的に入部させられた。何の部活は知らないけど、そこには2年で有名な雪ノ下雪乃が居た。

男子たちの間では令嬢とか言われているけど、実際に雪ノ下建設の社長の娘だからな。その手の令嬢は性格が悪いと相場が決まっているけど、雪ノ下はその想像の上を行っていた。

彼女は毒舌令嬢だったのだ。口を開けば毒しか吐かない。まるでポ●モンのヘドロをモチーフにしたような奴にそっくりだった。

「毒しか吐かない雪ノ下と一緒に居れば、三日で胃に穴が開きますよ」

「なら仲良くすればいいじゃないか」

「それが出来ないんですよ。あいつは友達が出来ないタイプなんですよ」

「それは君も同じだろ？同じタイプ同士ならきつと仲良く出来るはずだ。早く部室へ行きたまえ」

この教師は分かっているんだ。雪ノ下がどれほど強力な毒を吐くのかを。あんな毒舌相手にするくらいならリア充を相手にした方が100倍マシだ。

「兎に角、俺は行きませんから!」

「いいから行きたまえ！」

「束縛する人間はモテませんよ」

「何だ?!? シャイニングフィンガー!!」

「がはっ!?!」

この教師、生徒を殴りやがった!?!俺は腹を押さえて前のめりに倒れた。マジで死んでも可笑しくない威力だったぞ!?!

「教師が生徒を殴るとか教師失格だろ……」

「これは私の愛のムチだ！」

「そ、そうですか……でも計画通りですよ」

「何?……それは!?!」

俺はスマホの画面を見せた。そこには録音モードになっていた。平塚先生は俺からスマホを取り上げて録音を削除した。しかしもう遅い。

「残念ですけど、俺のスマホは自宅のPCと同期しているんです。だから録音はPCの方にもあるんですよ」

「な、何だ?!?」

「録音があれば、先生の教師人生も終わりですね……」

「そうか……これが狙いだったんだな!?!私を脅して同人誌のように犯すつもりなんだろう!?!」

「……はあ!?!」

「ここは二人だけしかない。私を犯すにはこれ以上の場所はないだろう。さあ、私を犯すがいい!!」

平塚先生は急に服を脱ぎ出した。俺は怖くなって生徒指導室を脱出した。もしあれ以上、あそこに居れば俺は黒歴史を作っていた事だろう。

あそこまで頭が飛んだ人だとは思いつまなかった。それにしても明日からどう学校に行こうか?平塚先生だけには絶対に会いたくないのに。

「比企谷。どこに行くつもりだ?」

「ひ、平塚先生……妹でこれであれなもので……」

「来い!」

「ひい!?!」

次の日、HRが終わるとすぐに教室を出たのに平塚先生に捕まってしまう。そしてまたしても生徒指導室へと連れて行かれた。

「んっ……」

「んんっ!?!」

部屋に到着と同時に鍵を閉められて俺は平塚先生に唇を奪われてしまった。いや、ファーストキスが先生とか嫌なんだけど!?

「ぶはあ!先生、タバコ臭いです!」

「そうか。禁煙しないと。んんっ」

「んんっ!?!」

平塚先生の口臭がタバコ臭だったので体を強引に離したのにまたしてもキスされてしまった。それと同時に平塚先生の手が俺の股へと伸びて、金玉を揉まれた。

「ちよつと!?!何しているんですか!?!」

「キス一つで勃起させるとは童貞だな?」

「ど、童貞ちやうわ!」

否定はしたけど、童貞なんだよな。これまでロクな女性と出会った事がなかったからな。そしていつの間にか平塚先生にズボンを脱がされて椅子に座らせていた。

「先生!?!」

「はむっ……ぢゆるるるるるっ」

「のおおおおお!!」

平塚先生は俺のチンコをいきなり銜えだした。そして顔を前後に動かし始めた。フェラがここまで気持ちいいなんて知らなかった。

そうじゃないだろ!フェラの相手は平塚先生だぞ!俺は平塚先生の顔をチンコから離そうとしたけど、顔がまったく動かなかった。

「せ、先生!もう射精ます!」

「ぢゆるるるるるるっ……」

「で、射精る!」

びゆるるるるるびゆるるるるっ……

「んんっ!?!……んぐっ……んぐっ」

平塚先生は俺の精子を飲んでしまった。これ、不味いよな。どうしようか!?!てか、平塚先生の顔つきが妖艶になってきた。

「比企谷の精子は粘り気があって喉に絡み付いてきたぞ。それに匂いも雄を嫌と言うほど感じさせる」

「先生。生徒とこれは不味いですよ!」

「なに、比企谷が黙っていれば問題ない」

「ちよつと!?!」

「比企谷は天井の模様でも見ていればすぐに終わる」

平塚先生がいきなり全裸になった。いつの間に全裸に!?!そして俺に迫ってきた。逃げたいけど、出口は平塚先生の後ろなので逃げられない。

何とか興奮を冷ませて勃起をしなければ逃げられるけど、女性の裸体始めて見た所為か興奮が収まらない!

「ではいくぞ……んっ♡」

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「のおおおお!!」

俺のチンコが平塚先生のマンコに食われた!?!俺のチンコが平塚先生のマンコにギュウギュウに締め付けられて喜んでいる。

理性では必死に平塚先生を放そうとしているのだけど、本能がエロを求めている。

「ほら動くぞ」

「ちよつと!?!」

ずずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずつ……ぱんっ!!ずずずずずつ……ぱんっ!!

「あんっ♡んっ♡ああっ♡比企谷のデカチンコ、中々いいぞっ♡」

「う、動かないでください!」

平塚先生が腰を激しく上下に動かす度にチンコをマンコが締め付けてきた。それに平塚先生が俺の顔に胸を押し付けて来る。

平塚先生の胸は予想通り大きかった。この胸の大ききでどうしてモテないんだ?やはり性格が問題なんだろうな。性格は自分が直せよ。

ずずずずずつ……ぱんっ!!

「んっ♡比企谷のデカチンコが私の子宮の入り口をコツコツと叩いているぞ!」

「先生、マジで止めてください!洒落になりませんよ!!」

「まったくうるさい口だな……んっ」

「んんっ!」

平塚先生は俺の言う事をまったく聞かずに腰を動かし続けた。生徒と先生がこんな関係になるのは不味いだろ!?

それをこの人は分かっているのか?そしてうるさいと口をまた塞がれてしまった。また煙草の臭い匂いがやってきた。

ヤバい。そろそろ射精しそうだ!これだけは絶対に阻止しないと!

「せ、先生!離れてください!」

「そろそろ射精するのだろうか?」

「だ、だったら早く!」

「このまま私の子宮に射精するといい!」

「それ駄目だろ!で、射精る!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるるっ……

「ああああああ♡♡♡ひ、比企谷の熱い精子がたつぷりと私の膣内に射精した……んっ♡」

やってしまった。平塚先生の膣内に俺は射精してしまった。これで妊娠でもしたら俺は社会的に死んだも同然だ。

「あんっ♡比企谷の精子が私の膣内で暴れているな……今日が危険日でないのが残念だ」

「た、助かった……」

もし危険日だったら終わっていた。でもこれで開放される。早く帰って妹の小町に抱きつきたい!早く平塚先生との忌々しい記憶を消さなければ!

「ちよつと!何、撮っているんですか!?!」

「私たちの記念に必要なだろ?」

「必要ありません！」

「そう言うな。比企谷にはこれからも相手をしてもらうんだから」

俺はそれを聞いて青ざめた。こんな事を明日以降もしなければならぬのか!?でも平塚先生との性行為の写真は平塚先生が握っている。

そして平塚先生は漸く離れてくれた。平塚先生の股からは俺が射精した精子が大量に逆流していた。それを一掬いして口に運んだ。

「んぐっ……比企谷の精子は本当に濃いな……これならすぐにでも孕みそうだな」

「ひい!？」

「そう警戒するな。綺麗にしてやろう。はむっ」

「うひい!？」

「ぢゆるるるるるっ……れろっ」

平塚先生は俺のチンコを咥えてフェラを始めた。顔を前後する時に舌をチンコに巻きつけるようにしているのか、刺激が強い。

童貞の俺には耐えられない刺激だ。不味い、また射精してしまう!

「せ、先生……また」

「れろっ……いいぞ、また飲んでやろう。はむっ」

「はひい!？で、射精る！」

びゆるるるるるびゆるるるるるっ……

「んぐっ……んぐっ……」

平塚先生は俺の精子を零さずに飲み干した。ヤバイ、腰が抜けて立ってない。早く帰らないとまた犯される!

俺はズボンを履いて扉に向かった。平塚先生は俺の精子に夢中で俺の事は気にしていなかった。

「比企谷。中々良かった……次も頼むぞ。私は部屋を綺麗にしておく」

「も、もう嫌です!」

「いいのか?君の家族にこの写真を見せてもいいのだぞ?」

「そ、それは……」

両親に見せたら家から追い出されそうだし、小町に見られたら一

生、軽蔑されそうだ。見られる訳にはいかない。

何とかして写真を消して俺と平塚先生の関係を解消しなければならぬ。俺は平塚先生に従う以外の選択肢がなかった。

「わ、分かりました。だから写真は……」

「分ければよろしい。次は来週にしようか」

「は、はい……」

「しっかり精子を作っておくんだぞ」

俺は平塚先生の顔を見ないで逃げるように学校を後にした。泣きたかったけど、必死に耐えた。絶対に写真を手に入れてやる！

それまで絶対に耐え抜いてやる。プロボツチを舐めるなよ、耐えるのくらい中学時代に散々経験済みだ！

次は俺のチンコで平塚先生をヒイヒイ言わせてやる！覚悟しろ、あの独身教師!!

やはり教師にいいようにさるのはまちがっている。

……うつつす比企谷八幡です。先週、俺は童貞を卒業しました。本当なら喜ぶ所だけど、相手が教師の平塚先生なので素直に喜べない。強引に童貞を卒業させられて泣きたいほどだった。しかも写真まで撮られて逃げ道を完全に塞がれた。

だから俺は誓った！平塚先生をヒイヒイ言わせて写真を手に入れてやると！そのためにもAVでテニツクを学ばなければ！

それと精力も付けなければならぬ。だから時間を見つけては体力強化に費やしている。それに滋養強壮なものを中心に食べている。おかげで金玉の中に今まで以上に精子を作る事が出来たと思う。早く平塚先生を泣かせてやる！

「ヒツキー……大丈夫？」

「ああ、問題ない」

「本当かしら？」

俺は放課後にすぐに奉仕部の部室へと足を運んだ。そこでは由比ヶ浜と雪ノ下に心配させた。二人に平塚先生に逆レイプされたと話した所で俺の妄想だと言われるだけだろう。

なら最初から何も言わなければいい。今にも性欲が爆発して由比ヶ浜と雪ノ下に襲い掛かってしまいそうだけど、そこは我慢している。

先週の俺ではないのだぞ。平塚先生も俺に時間を与えた事を後悔させてやる！

「比企谷はいるか？」

「はい！居ます！」

「ヒツキー？ど、どうしたの!?!」

「平塚先生はノックをしてください」

ついに平塚先生がやってきた。俺を見るなりニヤリと笑ってきた。舐めやがって！今日は絶対に泣かせてやるからな！

俺は平塚先生と一緒に奉仕部の部室から生徒指導室へと向かった。平塚先生はどこか余裕な感じがした。

だけど、俺はあれから必死に体力を付けて、精力も高めたんだ！俺のデカチンコをさらに強化したんだ。負ける訳にはいかない。

「さて……んっ♡」

「んんっ」

「んっ♡……今日は拒まないんだな？」

「どうせ拒めないでしょ？だったら受け入れますよ」

「そうか……いい心がけだな。キスだけで勃起するとはな」

俺は平塚先生とのキスでチンコを勃起させていた。それにしてもさっきのキスは全然、臭くなかった。まさか平塚先生は煙草を辞めたのか!?

でもそんなのは関係ない。今日は俺のチンコで平塚先生を屈服させて写真を手に入れてやる!!

俺はズボンを脱いで勃起したチンコを露にした。平塚先生も服を脱いで全裸になった。鍵が掛かっているとはいえ、よく全裸になれるな。

これはもし鍵が開けられても俺がレイプした事にするための布石だろう。絶対に泣かせる!!

「私の言いつけ通りに精子を溜めてきたな」

「今日は先生を泣かせます！」

「出来るものならやってみろ」

平塚先生はテーブルに腰掛けて股を開いて見せてきた。平塚先生のマンコは愛液だらだらで興奮しているように見えた。

俺はそこに勃起したチンコを挿入した。そして一気に奥まで押し込んだ。平塚先生のマンコの締め付けは強く俺のチンコを離さなかった。

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「んっ♡比企谷の大きいチンコが私のマンコの奥まで来ているぞっ♡」

「まだまだー！」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

「ああっ♡んんっ♡あんっ♡」

「うおおおお!!」

「いいぞ。比企谷のチンコが私のマンコを気持ちよくしている。もつと腰を激しく動かせ!」

「こ、このー!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

俺は必死に腰を動かしたけど、平塚先生を絶頂させる事は出来なかった。それだけ腰を激しくすればこの人は絶頂するんだ!?

俺はもつと激しく強く腰を振ったけど、平塚先生は絶頂する事はなかった。すると俺は平塚先生に押し倒された。

「激しくていいが、まだまだだな?」

「くっ……」

「ここからは私がリードしてやろう。んんっ♡」

「はふっ!」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

俺は平塚先生の腰の動きに思わずビクッリしてしまった。平塚先生の腰の動きは凄かった。マンコの蠢く動きが頭の思考を鈍らせた。

平塚先生のマンコは俺のチンコを強く締め付けたり緩めたりして刺激し続けた。それはこれまで味わった事のない快樂だった。

「どうした?比企谷。もう終わりか?」

「ま、まだまだ!」

「そうではなくては張り合いがない!ほらこれはどうだ?」

ずずずずずっ……ぱんっ!!

「のおおおおお!!?」

「ほら我慢している射精をしてもいいんだぞ?んんっ♡」

「く、くそお……で、射精る!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

「んんっ♡比企谷の熱いザーメンが私の子宮を満たしている……いい射精だったぞ」

「く、くそお……」

俺は我慢出来ずに射精してしまった。平塚先生は絶頂しているようだけど、どこか余裕がある。逆に俺には余裕なんてものはなかった。

だけど、それが良かったかもしれない。何故ならチンコが萎えたからだ。これで今日はもう出来ないだろう。

「なんだ？これで終わりか……」

「残念ながらそうです」

「安心しろ。そんな事もあるかと用意していたものが役に立つ。んっ」

「んんっ!？」

平塚先生が何かポケットから飲み物を取り出したと思っただけで自分の口に含んだ瞬間、俺にキスして液体を俺の中に流して込んだ。

俺は平塚先生を引き剥がしたけど、もう遅かったようで平塚先生は俺を見てニヤニヤしていた。その理由はすぐに分かった。

先ほどまで萎えていた俺のチンコが天井に向けて固く勃起していたのだ。

「な、何を飲ませたんですか!？」

「興奮剤だ。念のため用意しておいた良かったよ。少しくらい萎えたくらいで終わってはもったいないだろ？」

「この……」

「さて第二ラウンドだ。いくぞ比企谷」

「ずずずずずっ……ぱんっ!!」

「あんっ♡」

「ぐっ……」

平塚先生が飲ませたのは興奮剤だったのか。どうりで下半身が熱くなってきたという訳だ。こんな物まで用意しているなんて、俺は平塚先生を甘く見ていた。

平塚先生のマンコの締め付けが先ほどより強くなった気がする。こんなの俺の気力が持たない。また射精してしまう。

「どうした比企谷。腰が止まっているぞ?」

「せ、先生！もう無理です！」

「何を言っている。お前のチンコはまだまだ固いままだぞ？」

「ぬ、抜いてください！」

俺は平塚先生をどかさうとしたけど、押し倒されている状態ではどうする事も出来なかった。何とか引き剥がさないと。

「ちよつと黙っている。んっ」

「んんっ!？」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!

俺は平塚先生に唇を塞がれながら腰を上下に激しく動かしていた。平塚先生の舌が俺の口の中で大暴れしている。

俺の舌に絡めたり、歯を舐めてきて頭の中がグチャグチャに掻き回されているような気分になってしまった。

不味い。また射精してしまいそうだ。俺は暴れて平塚先生から離れようとしたけど、もの凄い力で抑えられて動けなかった。

「んんっ!!」

びゅるるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるるびゅるるるっ……

「んっ♡比企谷の熱いザーメンがまたたくさん私の子宮に注がれたな。どうした？比企谷。私の好きにはさせないのではないのか？」

「ひぐっ……ひぐっ……」

「まったく男だと言うのに泣くとな」

俺はマジ泣きしていた。男の尊厳とか色々なものが射精と同時になくなつた気がしたからだ。さつき射精したばかりなのにまだ俺のチンコは平塚先生の膣内で固かつた。

先ほどの興奮剤の効果がまだ続いているのだろう。終わってくれば良かったのに。

「もつと私の子宮を比企谷のザーメンで埋め尽くせ！」

「ま、待ってください！」

「待たん！んっ♡」

ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずずっ……ぱんっ!!ずずずずず

ずっ……ぱんっ!!

平塚先生の腰の動きは先ほどよりも激しくなってきた。俺は必死になって平塚先生を引き剥がそうとしたが、力の差があり過ぎてどうにも出来なかった。

このままではまた射精してしまう。俺が干乾びてしまう!

「比企谷。もうすぐ射精しそうなんだろう? んんっ♡」

「せ、先生! 離れてください!」

「もう諦めてお前の特濃ザーメンで私を孕ませろ!」

「ぜ、絶対に嫌だ!」

学生で父親とか嫌だし、何より相手が平塚先生ってのはもつと嫌だ! 何が悲しくて三十路前の教師を孕ませないといけないんだ!?

でも俺のチンコは俺の意思とは真逆に射精の準備に入っていた。これでもし平塚先生が孕んでしまったら不味い!

「ぐっ」

「ほお……我慢するか。これならどうだ? ちゅっ」

「うひい!」

「ちゅぱっ……れろっ……ちゅううう」

「せ、先生! だ、駄目!!」

平塚先生は俺の乳首にキスしたり舐めたりしてきた。さらに吸ってきた。男の乳首を吸うなんて、何を考えているんだ!?

でも乳首の刺激が脳を直撃して腰が勝手に動いてしまう。なんとか射精は踏ん張っているけど、限界が近い。

「せ、先生! 離れて!!」

「まったく比企谷。お前はしょうがない生徒だな。んっ」

「んんっ!」

びゅるるるるびゅるるるるっ……びゅるるるびゅるるるっ……

平塚先生にキスされて俺は射精してしまった。さらに平塚先生の舌が俺の口の中で暴れたり、唾液を飲ませてきた。

それが俺の脳を興奮させてきて、射精が全然止まらない。

「流石は比企谷だな。これだけのザーメンを射精するとは」

「……………」

「この匂い……匂いだけでも孕んでしまいそうだな」

「もう好きにしてください……」

平塚先生は逆流してきた精子を掬い上げて口に運んだ。俺はもう諦めた。この先生には勝てないと理解してしまった。

「はむっ……ちゆるるるるっ」

「はふっ!？」

「そうか。なら次もしっかりと溜めて来るんだぞ。楽しみにしているぞ」

平塚先生はそれだけ言って部屋から出て行った。俺はしばらく動く事が出来ずにいた。そしてズボンを履き直してから家に帰った。

そしてベッドの中で盛大に泣いた。俺はもうあの先生に逆らう事を諦めた。

やはり教師に従うのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡です。現国の教師にして奉仕部の顧問である平塚先生にヒイヒイ言わせるはずが勝てずに大人しく従う事にしました。

あの性欲モンスターにはどうやっても勝てない。従いたくはないけど、結局写真を取り返せていないので従うしかない。

「比企谷。どうした?」

「何でもありません……」

「そうか。なら続けるぞ。はむっ」

「うっ……」

俺は朝から平塚先生に呼ばれて授業が始まる前に生徒指導室に呼ばれてパイズリされている。昨夜、いきなり電話で朝早くに来るように言われた。

いつもなら寝坊している事だけど、平塚先生に呼ばれたなら嫌でも起きてしまう。しかしどうしていきなりパイズリ?

俺としては朝から性処理してくれてありがたいんだけど。

「んっ……流石は高校生だ。勢いが違うな」

「ま、満足しましたか?」

「もう一回、射精したらな」

「まだ射精させるんですか!?!」

このまま平塚先生に精子を搾り取られるのではないだろうか?俺、ミイラになってしまおうのではないだろうか?

「比企谷の精子は中々いい苦味だからな。から揚げがあれば最高だ」

「人の精子をビール代わりにしないでください!」

「ほれ。またフェラしてやるから射精しろ。はむっ」

「はふっ!?!」

まさか俺が呼び出されているのは先生のアルコール摂取の代わりだったとは驚きだ。マジで止めて欲しい。

でもフェラしてくるならいいか?よくよく考えたら平塚先生は性格に難ありだけど、体だけ見たら最高だと思う。

スタイルだつていいし、胸だつて結構大きいと思うほどだ。性格だけ目を瞑れば大丈夫じゃないだろうか？

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ……れろっ♡」

「せ、先生！また射精ます！」

「れろっ……じゅるるるるるっ♡」

「で、射精るー！」

「んぐっ……んぐっ……」

平塚先生のフェラがあまりにも気持ちよくて射精してしまった。平塚先生は俺の精子を零す事無く全て、飲み干した。

俺の精子をビール代わりにしたからには飲み干すだろうな。俺、本当にミイラにならないだろうか？

「朝はここまでいいぞ。早く授業に行きなさい」

「あ、はい……」

「次は昼休憩に来るんだぞ」

「分かりました」

俺は生徒指導室から出て教室に向かい、授業に出た。平塚先生に性処理してくれたのか、授業に集中出来た気がする。でも昼休憩にもしないと思うと少し気が重い。

「ちゃんと来たな」

「はい。それで……」

「そう焦るな。ほら……いいぞ」

昼休憩、生徒指導室に入るともう平塚先生が居た。そして俺が入るとズボンとパンツを脱いで机の上に腰掛けた。俺を誘うように足を広げてマンコを見せてきた。

マンコからは愛液が垂れており、そこから匂う発情した牝の匂いが部屋中に充満している。それに俺は抗えず、チンコは勃起していた。

爆発しそうなチンコを平塚先生のマンコへ挿入した。

「ああっ♡比企谷、いいぞ。動け」

「は、はいー！」

「あんっ♡んっ♡ああんっ♡」

「平塚先生！」

俺は平塚先生の感じている声を聞いて興奮していた。あの暴力しか振るって来ない独身教師が俺のチンコでマンコを突かれる度にエロい声を出してマンコを締め付けてくるのだ。これを興奮しないでどうする!?

「ひ、平塚先生!」

「あつ♡いいぞ、もつと激しくしろ。あんっ♡」

「わ、分かりました!」

「んあつ♡ああつ♡んあああつ♡」

俺は平塚先生に抱きつきながら腰を激しく動かした。平塚先生の胸は柔らかく最高の抱き心地だった。これでタバコの匂いがなければ、もつと良かったんだけど。

「あれ?先生、タバコの匂いがしませんね?」

「んっ♡比企谷にタバコの匂いが移ると問題になるだろ?」

「先生……もつと激しくします!」

「んんっ♡ひやあ♡ああ♡」

まさか平塚先生が俺のためにタバコを辞めるなんて思いもしなかった。確かに学生である俺からタバコの匂いがしたら問題だもんな。

それにもしかしたら俺と平塚先生の関係に気がつく人間がいるかもしれない。それを配慮してくれるなんて、平塚先生って最高の教師なのでは?

「せ、先生。俺もう……」

「いいぞ、全部私の膣内に出せ!」

「は、はい!で、射精る!」

「ひやあああああ♡ひ、比企谷の熱い精子が私の膣内で暴れているぞ」

俺は最後の一滴まで平塚先生のマンコに射精した。全部、平塚先生のマンコに射精したかった。平塚先生は射精した後の俺の頭を優しく撫でてくれた。

「良かったぞ、比企谷」

「は、はい……」

「まったく射精したのに君のはまだ萎えていないな？」

「す、済みません……」

「責めているのではない。続きは放課後にな」

「はい！」

俺は平塚先生から離れると先ほど射精した精子が逆流してきいた。どんだけ射精したんだよ。あれだけ射精したのにまだ俺のチンコは満足していなかった。

平塚先生は逆流してきた精子を手で受け止めてそのまま口に運んだ。俺の精子を飲んだ、平塚先生は幸せだった。

「ほら昼休憩が終わってしまおうぞ。教室に戻りたまえ」

「は、はい！」

俺は生徒指導室から教室に戻ったけど、午後の授業があまり頭に入って来なかった。早く平塚先生を抱きたい。勃起しそうなチンコを早く平塚先生のマンコに挿入して、気持ちいい射精がしたい。

それしか考えられなくなっていた。早く放課後になれ！

「ヒツキー」

「悪い由比ヶ浜。俺、平塚先生に呼ばれているんだ。今日は行けそうにない」

「そつか……ゆきのんには言っておくね」

「ああ、助かる」

俺は由比ヶ浜に適当な言い訳をして生徒指導室に向かった。頭の中はもう平塚先生を犯す事しか考えていない。俺は注意されない程度の速度で生徒指導室に到着した。

「早いな比企谷」

「せ、先生！」

「まったく他の教師や生徒に見られたらどうするんだ？」

「す、済みません」

俺は生徒指導室に入るとそこには平塚先生がすでに居たので抱きついた。平塚先生の胸は柔らかくて最高だ。早く犯したいとチンコが勃起している。

平塚先生はそれが分かっているのか、ズボンの上から優しくチンコ

を撫でてきた。

「比企谷だけ我慢していた訳ではないんだぞ？ほら……」

「せ、先生……」

平塚先生はズボンとパンツを下ろすとマンコがぐっちよりと濡れていた。生徒指導室が一気に牝の発情した匂いで充満した。

俺のチンコはこの匂いだけで射精してしまいそうになっていた。でも射精するなら平塚先生の膣内がいい！

「比企谷……」

「先生……」

「んあっ♡」

「は、入った！」

俺はズボンを下ろして平塚先生のマンコへチンコを一気に挿入した。平塚先生のマンコは俺のチンコを強い力で締め付けてきた。

「で、射精る！」

「んっ♡もう射精したのか？比企谷」

「き、気持ちよくて……」

「ほらまだ出来るだろう？私を気持ちよくしてくれ」

「はい！」

「ああっ♡んあああっ♡ああんっ♡」

平塚先生は早漏の俺を責めずに優しく撫でてくれた。俺は平塚先生の期待に応えるために腰を激しく動かした。もう頭の中は気持ちいい事だけいっぱいになっていた。

「先生！先生！」

「あんっ♡んんっ♡ひゃあ♡」

「先生！俺、もう……」

「いいぞ、私の膣内で思いっきり射精しろ！あんっ♡」

「で、射精る！」

「ああああああ♡」

俺は平塚先生のマンコの一番奥に精子を射精した。頭の奥が痺れて感覚が麻痺しているような気分だ。もつとこの時間が続けばいいと思えるほどだ。

俺の射精と同時に平塚先生は絶頂したようでマンコの締め付けが強くなつて蠢いている。貪欲に俺の精子を根こそぎ搾り取ろうとしているようだ。

「せ、先生……」

「気持ちよかつたぞ、比企谷」

「お、俺もですよ！」

「んっ♡まだ出来るな？」

「もちろんです！」

俺のチンコはまだ平塚先生のマンコの中でガチガチに固い。まだ俺の興奮は終わっていない。俺は力を搾り出して腰を動かした。

「あっ♡んっ♡ああんっ♡」

「先生！先生！」

「んんっ♡いいぞ、比企谷。あんっ♡」

「先生！んっ」

「んんっ♡」

俺は腰を動かしながら平塚先生とキスをした。平塚先生は俺の口の中に自分の舌を捻じ込んできた。そして舌で俺の歯をまるでブラシで擦るように舐めてきた。

「んっ……」

「んんっ♡ちゅっ……んんっ♡」

「せ、先生……」

「今日はここまでだな。続きは明日だ」

「は、はい……」

俺は平塚先生から離れた。すると先ほど射精した俺の精子が平塚先生の足を伝って床に落ちていた。平塚先生はそれを手で受け止めて口に運んだ。

俺の精子を美味しそうに飲み干した。そして俺に向ける視線はまるで血に飢えた獣のようだった。俺は明日もこの人に性的に食べられてしまうと考えるてしまうと興奮してしまう。

早く明日になって欲しい。平塚先生ともっと繋がっていたい！俺は興奮を抑えながら学校を後にした。

やはり教師の家に行くのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡です。俺は今、夕食の準備をしている。ただし比企谷家の夕食ではない。今頃、両親と小町は高級フレンチを三人で楽しんでる頃だろう。

俺はただ千円だけ渡されてラーメンでも食べて来いと家から追い出された。仕方ないので俺はその足で平塚先生の家に向かった。夕食の買い物をしてだ。

「いい匂いだな？比企谷」

「はい。シーフードカレーですよ」

「それは楽しみだ」

「もう少しなんで尻を触るのは止めてください！」

「いい尻をしているな比企谷」

平塚先生はどこぞのエロおやじのごとく、俺の尻を撫で回してきた。触り方が本当にエロおやじのように厭らしかった。でも嫌いじゃない。

今も平塚先生の熱い視線を尻に感じている。もしかして今夜あたり、尻の穴を開発されてしまうのか!?どうしよう……腸の中、綺麗にしておくべきだったかな!?

「今からでも……」

「今から……何だ?」

「平塚先生になら俺、尻の穴でもしてもいいかと思つて!」

「そうか……なら今夜するか?」

「本当ですか!?!」

「ああ。比企谷は変態プレイが好きらしいからな。私なりに勉強したからな」

な、なんて素晴らしい人なんだ!どうしてこんな素敵で素晴らしい人が今まで結婚どころか、恋人すら出来なかったんだ?不思議で仕方ない。

平塚先生が俺の顔を近づいて、キスしてきた。あれ?匂いがしないな。

「比企谷……んっ♡」

「んんっ……タバコ臭くない」

「最近は禁煙しているからな。比企谷のために」

「せ、先生……!」

「こんなにも俺の事を思ってくれるなんて、いつそ俺が結婚相手になればいいのでは?でも生徒と先生の関係では不味いだろう。」

「早く卒業して先生の夫になればいいんだ!ああ、早く卒業したいな。」

「まったく……キス一つでガチガチに勃起させおつて」

「だって、先生とのキスですから」

「そうか。なら比企谷を先に気持ちよくしてやろう。はむっ」

「はふっ!」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるるっ」

平塚先生がいきなり俺のズボンを下ろしたかと思ったたらチンコをパンツから出してフェラしてきた。平塚先生の舌は俺のチンコに絡みつき刺激してきた。

平塚先生の口の中は温かくすぐにでも射精してしまいそうだ。俺は必死に射精を我慢した。ここで果てては折角のフェラが勿体ない!

「せ、先生!もう射精そうです!」

「じゅるるるるるっ……じゅるるるるるるっ」

「で、射精る!」

「んんっ!?!……んんぐっ……んんぐっ」

平塚先生は俺が射精した精子を零さずに全て飲み干した。腰が抜けるんじゃないかと思うくらい気持ち良かった。流石に俺のチンコは元気がなくなつたのか、萎えてしまった。

「比企谷の精子は濃くてドロドロで喉に絡み付いてクセになるな」

「そ、そうですか?」

「ああ。元気がないな」

「気持ち良かったですから……」

「比企谷。尻をこっちに向けろ……じゅるるるるるるっ」

「うひい!?せ、先生!!はひい!」

俺が尻を向けると平塚先生は自分の舌を俺の尻穴に挿入してきた。そして舌を腸内で思いつきり動かして舐めてきた。

平塚先生の舌が俺の尻穴を蹂躪している。平塚先生が俺の排泄して汚いはずの尻穴を舐めていると思うと興奮してくる!

「ちゅっ……まったく尻穴を舐められて勃起するとは変態め」

「せ、先生にだけは言われたくありません」

「まったく教師に生意気だな?これでどうだ!」

「うひい!?ゆ、指!」

今度は舌ではなく指が尻穴に挿入してきた。しかも二本だ!指が出たり入ったりして頭の中が真っ白になってきた。射精する!!

「おっと……」

「せ、先生……どうして?」

「射精するならこっちにしろ」

平塚先生はズボンを脱いで股を大きく広げてマンコを見せてきた。そこから発情した女性の匂いが俺の鼻腔を刺激してくる。

早くあそこを犯したい。チンコから精子を早く射精したい!俺は導かれるように平塚先生に近づいた。そしてチンコをマンコに一気に奥まで挿入した。

「ああああ……!!」

「んっ♡比企谷、早く動け!好きなように動いてみる」

「は、はい!」

「あんっ♡ああ♡んあっ♡」

俺は必死に腰を動かした。俺のチンコで平塚先生のマンコを突く度に平塚先生が感じている声を聞く度に頭が真っ白になって腰が勝手に動いてしまう。

もう俺自身を止める事が出来ない。まるで自分が自分ではなくなるようだ。

「先生!先生!俺、また!」

「んあっ♡いいぞ、こい!ああんっ♡」

「先生!で、射精る!!」

「あああああ♡比企谷の熱いの注がれている……」

俺の精子が平塚先生の子宮を満たしている。もの凄く満足している。俺はゆつくりと平塚先生から離れた。俺のチンコは流石に疲れたのか、萎えていた。

「はむっ……じゅるるるるっ」

「おふっ!?せ、先生のフェラ、ヤバっ」

「じゅるるるるっ……じゅるるるるっ」

「ま、また射精るー!」

「んんっ!……んぐっ……んぐっ」

平塚先生はフェラで汚れた俺のチンコを綺麗にしてくれた。それに平塚先生のフェラが気持ちよくてまた勃起してしまった。

あれだけ射精したのにまだお前は元気になるのか!?どれだけ平塚先生を犯したいんだよ!!

「まったく比企谷……お前の性欲は底なしか?」

「そ、そんな事はないと思うんですけど……」

「ならこれを試してみるか」

「おおお!!」

平塚先生は自分の胸を寄せて、俺のチンコを挟んできた。普段から大きいとは思っていたけど、これほどの乳圧があるなんて思いもいなかった。

平塚先生って巨乳だよな。これでもモテないとか可笑しいだろ!

世の男どもー巨乳はここにあるぞー!

「せ、先生!また射精ます!」

「れろっ……れろっ……じゅるるるるっ」

「で、射精る!」

「はむっ……んぐっ……んぐっ」

あまりの乳圧が気持ちよくて射精してしまった。もう腰が抜けるんじゃないかと思うほど気持ちよかった。

「ちゅるるるるっ……ちゅるるるるるっ」

「せ、先生!それ、ヤバっ!」

平塚先生は尿道に残っている精子まで残らず吸い取っていた。も

う金玉の中にないと思えるほど射精した。

そして最後には平塚先生が全て吸い取った。もう勃起するだけの元気はない。しばらくは休憩しないと。

「比企谷。今度はお前が私を気持ちよくするんだ」

「は、はい！ちゆるるるるっ……」

「んっ♡いいぞ、もっと激しくしてみろ」

「ちゆるるるるっ……ちゆるるるるるっ」

「うひい♡あひゃ♡んああ♡」

俺は平塚先生が股を大きく開いたので、そこに顔を埋めた。そして平塚先生のマンコを一心不乱に舐め回した。愛液を吸い取ったり、クリトリスを甘噛みしたりなどをした。

平塚先生は気持ちいいのか、腰を浮かせていた。俺の舌で平塚先生が感じてくれていると思うと少し元気が出てきた。

「ちゆるるるるるっ……」

「い、いいぞー！うひい♡」

「はむっ……ちゆるるるるるるっ」

「ああああああ♡じよ、上手じゃないかつ♡比企谷」

俺はついに平塚先生を舌で絶頂させて潮を噴かせた。俺の顔は平塚先生の潮でべっちょりと濡れてしまったけど、それでも平塚先生を舌で絶頂させてやった事に嬉しかった。

「比企谷。最後に一回しようか。出来るだろ？」

「は、はい！ばっちり回復しました！」

「ほら来い」

「はい！」

「んあっ♡」

俺は回復したチンコを平塚先生のマンコへと挿入した。先ほどまで挿入していたはずなのにまったく感覚が違った。

もしかして絶頂した事で先ほどよりも敏感に感じ易くなったからか？今はそんな事をより腰を動かす事に集中だ！

「先生！」

「ああっ♡んああ♡あんっ♡」

「先生！もつと感じてください！」

「ひ、比企谷っ♡んああああ♡うひい♡」

俺は最後の力を振り絞って腰を動かした。もうあとの事なんて考えるな！ただ腰を激しく動かして、平塚先生を気持ちよくする事だけを考えればいい！

「せ、先生！もう俺……!!」

「ああ、遠慮しないで。私の膣内で射精しろ！」

「は、はい！射精る！」

「んああああ♡比企谷の熱い精子が暴れているっ♡」

俺は平塚先生の膣内で思いつき射精してやった。射精と腰の動きが止まらない。射精しながら腰を激しく動かしていた。もう頭の中が真っ白になってしまった。

俺はそのまま平塚先生の胸に倒れ込んだ。平塚先生の胸は最高に柔らかく温かった。しばらくして漸く射精が止まった。

「よかったぞ比企谷」

「は、はい……」

「休んでいいぞ」

「はい……」

俺はそのまま平塚先生に体を預けるように眠るのであった。そして起きたら平塚先生に家まで送ってもらった。次も平塚先生の家でたくさんしたいと思う。

俺が平塚先生と出来るのは学校か平塚先生の家しかないからな。次、する時のためにしっかりと性欲を貯めておかないと。

戸塚彩加

やはり戸塚が男装しているのはまちがっている。

うつす比企谷八幡だ。俺は今、とんでもないものを目撃してしまった。季節は梅雨で、今日は雪ノ下と由比ヶ浜が用事で奉仕部はなかったので早く帰ることができた。

自転車で学校を出た所で戸塚と遭遇した。戸塚も自主練を終えて、帰るところだったので、俺は自転車から降りて戸塚と並んで帰ることにした。

その時だった。さっきまで晴れていたのが、一変して雨が降ってきた。俺の家が近かったので戸塚を連れて家に入った。家には猫の力マクラしかおらず、小町も両親もいなかった。

風邪を引くと困るので戸塚にシャワーで温まるように言って、俺は着替えを用意した。ここは戸塚との親睦を深めるために俺のシャワーでも浴びようかと風呂場に入って、戸塚を見た。

「……………え？」

「は、八幡……………」

戸塚の体を見た俺はある違和感が気がいた。男にあるものがなくて、ないものがあるのだ。戸塚は咄嗟に自分の手と腕で胸と股を隠した。

戸塚にはチンコがなく胸が大きかった。戸塚は同年代の男と比べても肩幅が狭かった。男女で肩幅は違う。

戸塚の肩幅はまさに女のものだったけど、当人が男と断言していたので男と思っていたけど、女だったなんて！

「と、戸塚……………」

「は、八幡。恥ずかしいから……………服を着てくれない？」

「あ、悪いー！」

俺は急いで風呂場を後にした。頭の中には戸塚の裸体が何度も再生されていた。白いきめ細かな腕や足が頭から離れない。

「八幡……………」

「戸塚。そ、その……」

「お願い！黙っていて！」

戸塚は俺が用意した服に着替えてから事情を説明してくれた。戸塚の家では厄払い的な意味で成人するまで女性を男性として暮らさないといけないらしい。

でも俺にそんなことはどうでも良かった。戸塚が女子！戸塚が女子！なら毎日、俺のために味噌汁を作ってくれるんじゃないか！

「戸塚ー」

「きやあ?!は、八幡?んんっ?!」

「んっ……」

俺は戸塚を押し倒して、唇を奪った。戸塚の唇は予想以上に柔らかく、温かかった。もう俺の性欲を抑えられない。

だって、戸塚が女子だったんだぞ?!これはもう戸塚と結ばれる運命だって、ことだろ!?

「んっ」

「んんっ?!……だ、だめだよ八幡」

「戸塚。俺は我慢出来ないんだ」

「で、でもーひい!」

俺は戸塚の股に手を伸ばして、触れた。戸塚の股は濡れており、糸を引いていた。戸塚もなんだかんだ、興奮していたということなんだろう。

これはもう戸塚を犯すしかないだろ!?俺は戸塚の両手を押さえ付けて、膣内に指を挿入した。

「んんっ?!は、八幡……指、抜いて！」

「戸塚のマンコ、熱く締め付けてくる」

「んひい♡んんっ♡あっ♡」

戸塚が俺の指に感じてくれている。俺に反応して俺のチンコは爆発寸前状態になってしまった。早く戸塚のマンコにチンコを挿入したい!

いくらテニスをしているとはいえ、戸塚の体は女子なんだ。男の俺に腕力で勝てるはずもなく、なすがままだ。

「戸塚……もういいよな？」

「は、はちまん……らめえ」

「戸塚！」

「んぎい!?いい、痛い……」

俺のチンコが戸塚のマンコに挿入した。もう強姦になってしまったけど、そんなの関係ない。戸塚のマンコに挿入出来たのだ。もう悔いはない。

戸塚のマンコは俺のチンコをギュウギュウに締め付けてきた。頭の中がもう戸塚のマンコのことしか考えられない。

こんなにも気持ちがいいことがこの世にあつたなんて、信じられない。戸塚は涙目になって、俺のことを睨んでいたけど、全然怖くなかった。

「八幡！信じられないよ……」

「戸塚……動くぞ」

「え？だ、だめ——んひいいいい♡」

「おおおお！」

俺が戸塚のマンコを一突きするとマンコが反応して、さらにギュウギュウにキツく締め付けてきた。もう俺は自分の動きを制御出来ない！

「戸塚！戸塚！」

「んひい♡あんっ♡ああっ♡」

「戸塚のマンコ、気持ちいいぞ！」

「ら、らめえ♡うひい♡んあっ♡ひゃあああ♡♡」

戸塚は俺がチンコでマンコを突く度にエロい声を出してきた。それは俺を興奮させる麻薬に等しかった。そんな声を聞かされたらもう興奮しっ放しだ！

俺はさらに腰を激しく動かした。もうあとのことなんて、どうでもいい！今はこの気持ちがいいことをしなければ！

「戸塚！で、射精る！」

「で、でる？だ、だめ！あかちゃん、できちやう！」

「戸塚！俺の子を産んでくれ！射精る！」

「ひゃあああああ♡♡んひひひひひ♡♡」

俺はついに我慢出来ずに戸塚のマンコの奥に射精してしまった。オナニーでするより射精しているんじゃないかと思う。

それだけ俺が戸塚に興奮していたと言うことだろう。射精の瞬間、頭が真っ白になってしまった。過去にないくらいの最高の射精だった。

「ひぐっ……酷いよ八幡……」

「戸塚……もう一回、しよう」

「え？なんで!？」

「そんな可愛い顔されたら興奮が収まらない!」

「んひひ♡は、八幡の僕の膣内で固くなった……」

先ほど萎えていたはずのチンコは戸塚の涙顔を見た瞬間、復活した。戸塚はどれだけ俺を興奮させてくれるんだ？

これはもつと戸塚を犯すしかないだろう。そして俺を好きになって貰わないと駄目だな。そうと決まれば、もう一回戦だ！

「戸塚のマンコ、温かくて気持ちいいぞ!」

「らめえはちまん!んひひ♡」

「おおおお!」

「んひひひひ♡♡」

俺は戸塚を仰向けからうつ伏せにして後ろからマンコにチンコを挿入した。チンコは戸塚のマンコの子宮の入り口にノックした。

すると戸塚のマンコは俺のチンコを押し潰すように締め付けてきた。気持ちが良いすぎる!頭が可笑しくなる。

「戸塚!戸塚!す、好きだ!」

「ひゃあ♡んんっ♡あんっ♡」

「戸塚!!」

「んひひひひひ♡♡」

俺は腰の動きが止められない。もつと戸塚を犯したいと体が勝手に動いているようだった。戸塚が俺のチンコに感じている声を聞く度に興奮のボルテージがどんどん上がっている。

「戸塚!また射精る!」

「ああ♡んっ♡ら、らめえ♡」

「戸塚！孕め!!」

「ひゃああああああ♡♡いぐうううう♡♡」

「おおおお……!!で、射精る射精る」

俺は我慢できずに戸塚の子宮の奥に大量の精子を射精した。頭の中が真っ白になり、射精が止まらなかった。

戸塚は絶頂して、失禁してしまった。床が戸塚の小便で小さな池が出来ていた。後で拭いておかないと。

「戸塚？大丈夫か……」

「ひぐっ……ひぐっ……ひ、酷いよ八幡。僕の初めてを」

「戸塚……」

「へ？ど、どうしてまた大きくなっているの!？」

「そんなの戸塚が可愛いからだろ!」

戸塚の涙目を見た俺はまた興奮してしまった。笑顔が素敵な戸塚が涙目なんて、レア中のレアだろ!?!こんな顔を見たら興奮しない俺ではない。

俺は戸塚を抱えて風呂場に移動した。あそこならいくら汚しても大丈夫だろう。

「は、八幡。もう止めてよ」

「悪い戸塚。抑えられないんだ」

「んっ♡ゆ、指抜いてっ♡」

「戸塚だって興奮しているんだろ?」

俺は戸塚の股に手を伸ばして膣内に指を挿入した。少しイジると戸塚の膣内からは先ほど射精した俺の精子と戸塚の愛液が混ざったものが垂れてきた。

戸塚は足を震わさせていた。必死になって絶頂を我慢しているのだろう。そんなに我慢してるともつと苛めたくなるだろ?。

「戸塚。んっ」

「んんっ!?!だ、だめだよ!」

「戸塚。逃がさない……んんっ」

「んんっ♡」

俺は戸塚の頭を掴んで、キスをした。俺の舌を戸塚の口の中に侵入させて、口の中を舌で蹂躪した。戸塚の歯茎などを舐め回した。

そして戸塚の唾液を舌ですくい取って飲んだ。戸塚の唾液はこの世のどんな飲み物の中で極上だろうと断言出来る！

「戸塚。頼む、この熱を」

「は、八幡の熱くて、硬い……」

「そうだろう？」

俺は戸塚に勃起したチンコを触らせた。戸塚はやはり女子なのか、興味津々なようで、目が離せないようだった。

俺は戸塚の片足を上げて、股を大きく広げた。戸塚の恥ずかしいマスコがばっちり丸見えになっている。

「戸塚！」

「んあっ♡は、八幡のが奥まで……来たああ♡」

「戸塚！可愛いぞー！」

「そ、そんなこと、言わないでっ♡」

「戸塚！戸塚！」

俺は戸塚の可愛い姿を見て、興奮してしまった。この戸塚を見て、興奮しない人間はいないだろう！もっと戸塚を犯したい。

俺に犯されて、感じている戸塚をしっかりと目に焼き付けたい。これは絶対に永久保存決定だ！

「戸塚！で、射精るー！」

「のおおおおお♡♡いくいくいく♡♡」

「まだ射精る……」

「八幡のあしゅい、せーしで……いくううう♡♡」

戸塚は俺の射精で絶頂して、気絶してしまった。俺も少しハッスルし過ぎたかもしれない。疲れたので戸塚を俺の寝室に運んで二人でベッドで寝た。

起きた時には次の日になったおり、戸塚の姿はなかった。

やはり戸塚と関係が続くのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡です。昨日、戸塚の秘密を知った俺は戸塚を性欲のまま、犯してしまった。そして今、絶賛賢者モードになっている。どうして俺はあの時、戸塚を襲ってしまったんだ!? 今まで男と思っていた戸塚が女だと分かったからか!?

でも戸塚のマンコは最高に気持ち良かったな。時間を忘れてしまうほどだ。でも学校でどんな顔で会えばいいんだ!?

「あ、八幡。おはよう」

「お、おはよう……」

教室で戸塚は普段と変わらない態度で接してきた。もしかして昨日の出来事は俺の夢オチつてことなのか?

でもあの感触が夢とは思えない。じゃあ、どうして戸塚は変わらない態度で接してくれるんだ? 頭の中がグチャグチャになってきた。

「八幡。昼休憩、話せる?」

「え? あ、ああ。もちろん……」

「それじゃあ、昼休憩に」

「わ、分かった……」

昼休憩にどんな話をするんだ!? もしかして、昨日のことは現実で俺は警察に突き出されるとか? でもそれなら戸塚の態度が変わらないのは不自然だ。

もしかして、一度安心させておいてから俺を絶望させようという魂胆か!? 天使の戸塚がそんなことをするとは思えない! 俺はビクビクしながら地獄の昼休憩を迎えた。

昼休憩に戸塚に連れられて来たのはテニス部の部室だった。ここで俺に絶望を与えるのか!?

「八幡。僕との約束、覚えている?」

「えっと……戸塚の秘密を喋らないだろ?」

「約束を守ってくれて、ありがとう」

「と、当然だろ! 俺と戸塚の仲じゃないか」

「ふふっ……」

ヤバい。戸塚が不意に笑うものだから襲いたくなる。静まれ、俺のムスコよ！ここで襲ったら不味いしろ！

「戸塚！」

「は、八幡!? んんっ」

「んっ……」

「んっ♡」

戸塚は突然、キスしたのに受け入れてくれた。戸塚の唇って凄く柔らかいな。てか、戸塚としかキスしたことないんだけどな！

それにしても戸塚の唇が柔らかいこと以外、何も分からなくなってきた。ヤバい、勃起してしまった。

「八幡の大きくなつたね」

「と、戸塚の唇があまりにも凄くて……」

「嬉しいな……ねえ、これで僕のことを滅茶苦茶にしてくれない？」

「と、戸塚……」

戸塚はいきなりジャージのズボンとパンツを脱いで股を大きく開いて、マンコを見せ付けてきた。

戸塚のマンコからは愛液が垂れており、発情した牝の匂いが立ち込めていた。もう俺の頭の中にあるのは戸塚を犯したいだけになった。

「戸塚！」

「あんっ♡八幡……」

「いくぞー！」

「んひい♡は、八幡のが奥まできたああ♡」

俺は戸塚のマンコにチンコを奥まで挿入した。戸塚のマンコは俺のチンコをギュウギュウに締め付けてきた。

俺はそれだけで気持ちよくなってしまう。少しでも気を抜くと射精してしまいそうだ。だけど、それは勿体ない。俺は射精を我慢しながら腰を動かした。

「あんっ♡ああ♡んひいひいひい♡」

「戸塚！戸塚！」

「は、八幡っ♡」

「戸塚！好きだああああ!!」

「うんっ♡僕も好きだよっ♡」

俺は戸塚と相思相愛になった。もう我慢する必要なんてないな。俺は戸塚の子宮の奥に目掛けて、射精をした。過去一、気持ちいい射精だった。

「んひいいいい♡♡ひゃああああああ♡は、八幡の熱い精子が僕の子宮にたくさん、射精してくれたね」

「と、戸塚。まだ射精る……」

「のおおおおお♡♡し、子宮が広がるううう♡」

俺の射精で戸塚の子宮が広がっているらしい。戸塚はそれが気持ちいいのか、感じている声で応えてくれる。戸塚のそんなエロい声を聞かされたら、もっと興奮してしまう。

「戸塚！動くぞ！」

「んひい♡あんっ♡んんっ♡」

「戸塚のエロい声をもっと聞かせてくれ」

「んひゃああああ♡♡」

「戸塚！いいぞ、もつとだ！」

「ひゃああああ♡♡ああああ♡♡」

戸塚は俺のチンコが子宮の入り口を何度もノックする度にエロい声を出していた。もし誰かがここに入ってくれば、いい訳は出来ないな。

それでも腰をの動きを止められなかった。止めるという選択肢が俺に無かった。ただただ、戸塚を満足いくまで犯したかった。

「戸塚！射精るぞ！」

「んんっ♡あんっ♡」

「で、射精る！」

「のおおおおお♡♡い、いぐううう♡♡」

戸塚は俺の射精で派手に絶頂してしまった。潮まで噴いて、部屋に水溜りを作ってしまった。戸塚は連続での射精ですっかり絶頂の余韻に浸っていた。

戸塚のマンコからは時折、俺が射精した精子が逆流していた。戸塚は幸せそうな顔をしていた。

「あつ……」

戸塚は気が緩んだのか、潮だけではなく小便までも出して、水溜りを作ってしまった。それから俺は部室にあった雑巾で床を綺麗にしてから着替えた戸塚と教室に戻った。もっと戸塚を犯したかった。

でもその機会はすぐに訪れた。放課後に俺は奉仕部の部室に行つたが、いつも居る雪ノ下がどこにもいなかった。

「由比ヶ浜はリア充たちカラオケか……うん？あれは……」

俺は机の上に雪ノ下が書いたと思われるメモを見つけた。そこには『急用で鍵は任せたわ』と書かれていた。つまり、このまま帰つても問題ないな。

「八幡。今、いい？」

「戸塚？部活はどうしたんだ？」

「今日は部活はお休みなんだ。それで一緒に帰らない？」

「ああ。いいぞ……でもその前に……んっ」

「んんっ♡八幡、いきなり過ぎるよ。雪ノ下さんたちに見つかったら」「あいつらは今日は来ないぞ」

俺は戸塚とキスを交わした。俺の舌と戸塚の舌が絡み合つて、お互いに唾液の交換をした。戸塚の唾液が俺の中に入り、俺の唾液が戸塚の中に入ったと思うと興奮してしまう。

「戸塚。ここでしよう」

「でも平塚先生が来たりしない？」

「大丈夫だろう。今日は合コンに行くと言っていたし」

「そうなんだ……んっ♡」

俺は戸塚の股に手を伸ばして、マンコに触れた。戸塚のマンコは期待しているのか、すでに濡れていた。糸が引くほどに。

俺はズボンとパンツを脱いで椅子に座った。俺のチンコは戸塚とのキスで勃起していた。早く戸塚を犯したい！

「今回は戸塚が動いてくれないか？」

「僕が？うん、いいよ」

戸塚が俺の上に跨いできた。そしてゆっくりと腰をチンコの上から降ろしてきた。俺のチンコが戸塚のマンコの中に隠れた。

「んんっ♡八幡のおちんちん、凄く硬いね」

「戸塚とのキスだけでなつたんだぞ」

「あんっ♡嬉しいな……んひい♡」

「戸塚！」

「ひゃあ♡んひい♡」

戸塚が俺の上で必死に腰を動かしている。それだけではなく、マンコもチンコを離さないようにギュウギュウに締め付けてくる。

戸塚が俺のチンコに跨り、必死になって腰を動かして感じている表情は俺を興奮させてくれる。ここは俺も頑張らないと！

「あんっ♡ああっ♡んんっ♡」

「戸塚。凄くエロいぞ！」

「ら、らめえ♡はひいまんんっ♡みらいでえええ♡」

「戸塚！で、射精る！」

「あああああ♡♡んひいひいひい♡♡」

戸塚の子宮の一番奥に射精した。戸塚は俺の射精で絶頂したよう
で、脱力で俺に抱きついてきた。戸塚の申し訳ない程度の胸が俺に密着してくる。

俺の射精はまだ終わらない。昼休憩にあれだけ射精したのにまだ
射精出来るなんて、どんだけ精子を作っているんだよ！

「戸塚。大丈夫か？」

「は、八幡の精子……熱すぎだよ」

「わ、悪い……」

「僕、嬉しいんだ。こんなにも八幡に思ってもらえて」

「戸塚……あ」

「んんっ♡八幡のおちんちん……また硬くなったね」

それはそうなるだろう！戸塚のそんな嬉しそうな顔を見せられたら！俺は一度、戸塚から離れて、机の上に戸塚をうつ伏せ状態にしてから後ろからチンコを挿入した。

「んひいひいひい♡」

「戸塚。もう一回戦な」

「ま、まだするの？」

「嫌か？」

「……嫌じゃないよ。八幡の好きなだけ僕を犯して」

「戸塚！最高だ！」

「ひゃああああああ♡んああああああ♡」

俺は戸塚の許可を貰って必死に腰を振った。戸塚のマンコは俺がチンコで一突きする度にギュウギュウに締め付けてきた。

戸塚のマンコは連続で絶頂させられて敏感になってきているのか、痙攣しているように見えた。けど、俺は遠慮なしに腰を振った。

「のおおおおお♡ああああああ♡」

「戸塚！これで最後な！」

「んひひひひ♡」

「で、射精る！」

「ああああああ♡♡い、いくうううう♡♡」

俺は最後の一滴まで精子を戸塚の子宮の奥に射精した。戸塚は絶頂で幸せそうな顔で気絶して、小便を漏らしていた。

俺はそんな戸塚をスマホで写真に収めた後、部屋を綺麗にして戸塚と一緒に途中まで下校した。もうすぐ夏休みだから戸塚を家に招待して、一日中犯してやるんだ。

そう考えると毎年憂鬱だった夏休みが楽しみになってきた。

やはり戸塚と千葉村に行くのはまちがっている。

うつつ比企谷八幡です。夏休みに入って戸塚に会っていない。テニスの大会を頑張っている中、邪魔しては悪いと思ひ、連絡すらしていない。

戸塚の体温や声を感じたい衝動をぐっと我慢している。だけど、そろそろ限界が近いかもしれない。日に日に戸塚への想いが増している。

そんな日々を過ごしている俺は今、千葉村にやって……いや誘拐された。これも妹を抱きこんだ独身暴力女教師の所為だ！でもいいこともある。

「久しぶりだね。八幡」

「ああ、戸塚。愛している」

「もうーみんながいるんだよ」

「悪い悪い」

それは千葉村に戸塚がいることだ！夏の大会は早々に負けたらしい。それだけ相手が強かったのだろう。ありがとう、対戦相手！

もし戸塚が勝っていたらここに居なかったと言うことだろ!?それにしても夏服の戸塚は普段のジャージ姿より三割増しで襲いたい！

「……八幡。夜、時間ある？」

「あるけど……どうしたんだ？」

「僕、大会中……ずっと我慢していたんだよ」

「……戸塚。俺も我慢していたから同じだよ」

戸塚は上目使いで可愛くしたいアピールをしてきた。今すぐ襲いたい！犯したい！社会的に亡き者にされようと戸塚の秘密がバレようが犯したい！

けど、ここは我慢だ。夜になれば思い切り出来るのだから！それから俺は戸塚と一緒に千葉村でボランティアに従事した。葉山たちリア充どもは終始、うるさかったけどな！

「戸塚ーんっ」

「んんっ♡は、八幡……みんなが近くにいますよ」

「ここまで我慢したんだぞ？もういいだろう。んっ」
「んっ♡あっ♡んんっ♡」

俺は戸塚にキスしてから顔を舐め回した。戸塚はくすぐったいけど、抵抗することなく俺に舐め回された。

戸塚の汗の味は凄く美味しかった。ずっと舐めていたいほどだ！そう思っていると戸塚の手が俺の勃起したチンコに触れてきた。

「八幡のすごく大きくなった」

「戸塚と久しぶりに触れ合えたからな」

「八幡……早く僕を滅茶苦茶にしてっ♡」

「ああ、任せろ」

戸塚はズボンとパンツを脱いで片足を上げて、マンコを見せてきた。戸塚のマンコは愛液が垂れており、俺のチンコを受け入れる準備は出来ているようだった。

戸塚のマンコからは発情した匂いが立ち込めていた。これを嗅ぐと俺は射精したい気持ちになる。俺は戸塚のマンコにチンコを一気に挿入した。

「んひいいいい♡き、きたああ♡」

「おおおおお！戸塚のマンコが俺のチンコをギュウギュウに締め付けてくる」

「んんっ♡あんっ♡うひい♡」

「戸塚のマンコが喜んでるのが分かるぞ」

「ひゃああああああ♡」

俺は腰を振って、チンコを前後させてマンコを刺激した。戸塚のマンコは俺のチンコが一突きする度に軽く絶頂しているようで、締め付けが強くなる。

それだけではない。潮までも何度か噴出している。それだけ戸塚が感じているんだろう。ここは俺が頑張らないと！

「戸塚！久しぶりの射精だぞ！」

「うんっ♡来ていいよっ♡」

「で、射精る！うっ……！」

「ひゃああああああ♡♡いくいくいくっ♡」

「射精る射精る」

「のおおおおお♡♡」

久しぶりの戸塚の子宮への射精だ。今日まで溜め込んだ精子を全部、射精する勢いで精子を射精している。戸塚は声が我慢出来ず이었다。

もし誰かに聞かれていたら大変だったかもしれない。ここは千葉村のキャンプ地より少し離れた場所だから問題ないだろう。

今頃、雪ノ下や葉山たちは昼間にイジメに遭っていた小学生のことを話し合っていることだろう。俺や戸塚に小町、海老名さんと戸部は話し合いに参加していない。

もし下手に小学生の問題に首を突っ込んで何かあつて責任を取らされたら堪ったものではない。

「久々の戸塚の子宮への射精は気持ちがいいぜ」

「僕も八幡の精子を子宮で感じているよ」

「戸塚。もう一回、いいか？」

「うん。いいよっ♡」

一度、戸塚から離れて射精の余韻を感じているとまだ俺のチンコは勃起したままだった。久しぶりだからって、興奮し過ぎだろ。

でも戸塚は俺の頼みを聞いてくれた。お尻をこちらに向けて左右に振つて、俺のことを誘っている。そんな誘われ方されたら歯止めが利かなくなるぞ！

「戸塚ー！」

「あんっ♡八幡、みんなが近くにいるから」

「だったら戸塚が声を我慢するしかないだろ」

「んんっ♡ああっ♡うひい♡」

俺は戸塚の後ろから激しく腰をお尻に打ち付けた。後ろからだ子宮の入り口に俺のチンコの先が接触して、戸塚のマンコを刺激してチンコをマンコがギュウギュウに締め付けてくる。

頭から快樂物質がドバドバと出ているんじゃないかと思うくらい気分がいい。外で開放的になっているかもしれない。

「んんっ♡は、八幡……もつとゆっくり——うひい♡」

「それは無理だろ。戸塚！」

「ひゃんっ♡んあっ♡んひい♡」

「戸塚！ちゃんと我慢しないと！」

俺のチンコが気持ちいいのか、戸塚は声を我慢できていなかった。そもそも俺が我慢させていないんだけどな！

俺は腰をさらに激しく動かした。その際に戸塚の背中に密着して、乳首とクリトリスをそれぞれすり潰すように摘んだ。

「んひいひい♡ら、らめえ♡あひい♡」

「戸塚。そろそろ射精るぞ」

「んっ♡あっ♡ひい♡」

「戸塚！で、射精る！」

「ああああああ♡♡んひいひいひい♡♡」

「射精る射精る……」

俺は戸塚の子宮目掛けて射精した。大量の精子が戸塚の子宮を満たしている。その際に頭に電撃でも食らったかのような感覚に陥った。

俺の射精は止まらずに仕舞いには戸塚のマンコから精子が溢れてきていた。もつと戸塚の子宮に射精したい。

「戸塚。大丈夫か？」

「はひいらん……ろふう……らめえ♡」

「……これはちよつと不味いか？」

戸塚は完全に意識が飛んでいるようだった。体は脱力で俺が支えているので大丈夫だけど。このまま戻るまで意識が戻るといいんだけど。